

新保田中村前遺跡Ⅳ

一級河川染谷川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第4分冊

第6・7次の調査

《本文・遺物観察表編》

1994

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第176集

しんぼ たなかむらまえ
新保田中村前遺跡Ⅳ

一級河川染谷川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第4分冊

第6・7次の調査
〈本文・遺物観察表編〉

1994

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 弥生時代の遺物が多量に出土した2号河川跡（南より）



2 2号河川跡出土の黒漆彩文土器

序

高崎市新保田中町の地域を流れる一級河川染谷川の河川改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は昭和59年度より当事業団によって進められています。既に調査成果も「新保田中村前遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の3冊の調査報告書を刊行いたしました。

平成4年度になって、河川改修工事対象の最後の地区の工事がなされることとなり、同年10月から翌平成5年6月にかけて発掘調査を行いました。今回の調査でも、以前の調査で確認されていた埋没河川が調査され、そこより大量の木製品、動物遺体、骨角器、土器等が発見されました。特に骨角器は弥生時代の内陸部の発見としては希なものとなり、その中にはオオカミのキバ、弓弾状有栓骨角製品等の全国的にも学術的に貴重なものが出土しました。

これら調査された資料は、平成5年度の本事業最終の調査報告書を刊行するために整理作業を行いました。大量の遺物を抱えた中、また、事業の期限がせまる中、担当職員が四苦八苦して、報告書をまとめ上げ、ここに「新保田中村前遺跡Ⅳ」の調査報告書を上梓することができました。

発掘調査から調査報告書刊行に至るまで群馬県土木部、同高崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、高崎市教育委員会、地元新保田中地区の地域住民等には終始、ご指導、ご協力を賜りました。これら関係者の皆様ならびに調査開始から終了まで酷暑、酷暑のなか、また、水との戦いの中で調査を担当した職員と作業員の方々に衷心より感謝の意を表したく存じます。また、本報告書が関越自動車地域埋蔵文化財発掘調査の「新保遺跡」の報告書と共に、本地域の歴史を解明する上で十分活用されることを願ひ序とします。

平成6年3月1日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は、一級河川染谷川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第4分冊「新保田中村前遺跡 IV」である。本改修工事関連の発掘調査報告書はこれまでに3分冊を刊行しているが、本書はこれらの報告書の最終報告書となる。本書の報告は第6・7次調査を対象とし、調査区のE区とF区が対象となっている。
2. 今回の調査地は群馬県高崎市新保田中町字田中561-2、563-1-5、565番地と字稲荷266、267-1-3、268-1・3番地であるが、本調査は昭和59年から継続する事業であり、遺跡名は第5次調査までの遺跡名を踏襲し、大字に相当する「新保田中」に当初の発掘区内で最も広い小字である「村前」を付して遺跡名とした。
3. 発掘調査は群馬県（土木部河川課）の委託により、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 今回の調査は一連の発掘調査の第6次・第7次調査となるが、発掘調査および整理事業の実施期間は以下の通りである。

発掘調査	第1次調査	昭和59年10月1日～昭和59年12月28日
	第2次調査	昭和60年9月2日～昭和61年3月31日
	第3次調査	昭和61年7月1日～昭和62年3月31日
	第4次調査	昭和62年5月20日～昭和63年3月26日
	第5次調査	昭和63年4月7日～昭和63年12月28日
	第6次調査	平成4年10月1日～平成5年3月31日
	第7次調査	平成5年4月5日～平成5年6月25日

整理事業	第1年次	平成元年6月1日～平成2年3月31日
	第2年次	平成2年6月7日～平成3年3月31日
	第3年次	平成3年5月1日～平成3年9月31日
	第4年次	平成5年4月1日～平成6年3月31日

5. 調査の体制は以下の通りである。

第1次～第5次調査

事務担当 白石保三郎・邊見長雄・井上唯雄・松本浩一・大沢秋良・田口紀雄・上原啓巳・神保侑史・定方隆史・住谷 進・徳江 紀・巾 隆之・国定 均・笠原秀樹・須田朋子・小林昌嗣・吉田有光・柳岡良宏

第6・7次調査

事務担当 中村英一・近藤 功・佐藤 務・神保侑史・斉藤俊一・巾 隆之・国定 均・笠原秀樹・須田朋子・柳岡良宏・船津 茂・高橋定義

第1次～第5次調査

調査担当 第1次調査 石坂 茂（調査研究員）
徳江秀夫（同上）
大西雅広（同上）
第2次調査 友廣哲也（同上）
徳江秀夫（同上）

- 小林裕二（調査研究員）
- 第3次調査 相京建史（主任調査研究員）
小島敦子（調査研究員）
松村和男（同上）
- 第4次調査 相京建史（主任調査研究員）
麻生敏隆（調査研究員）
松村和男（調査研究員）
- 第5次調査 相京建史（主任調査研究員）
中山茂樹（同上）
小島敦子（同上）
- 第6・7次調査 下城 正（主幹・専門員）
桜岡正信（主任調査研究員）
石守 晃（同上）
金井 武（同上）
斉藤英敏（調査研究員）

6. 本書作成の担当は以下の通りである。

編 集 下城 正

本文執筆 下城 正 友廣哲也（2号河川跡出土土師器に関して。） 大木伸一郎（2号河川跡出土弥生土器に関して。） 金子浩昌（2号河川跡出土の骨角製品・動物遺体に関して。）

遺構写真 桜岡正信・石守 晃・金井 武・斉藤英敏

遺物写真 佐藤元彦（技師）

金属器・動物遺体保存処理 関 邦一（技師）・小材浩一（整理補助員）・樋口一之（整理補助員）

木器・植物遺体整理 整理補助員 高橋真樹子・高橋節子・五十嵐由美子・伊東博子

遺構図・遺物整理 整理補助員 平野照美・笠井初子・南雲素子・小池 緑・吉沢やよい・高橋早苗・木暮留美・飯田文子・池田和子・内山由紀子

遺物観察 下城 正 友廣哲也（2号河川跡出土土師器に関して。） 大木伸一郎（2号河川跡出土弥生土器に関して。）

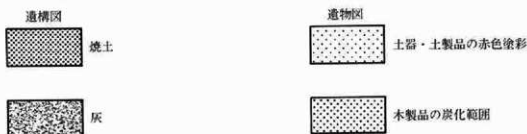
7. 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご指導・ご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表す次第である。（順不同、敬称略。）

飯高静男（石質鑑定）・金子浩昌（動物遺体鑑定）・高橋英雄・高橋宇一・田島清美・阿部光喜・阿部俊次・新保田中町区長・新保町区長・高崎市農業委員会・高崎市教育委員会

8. 遺構図面類および出土遺物は一括して、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

1. 本書に使用した方位は座標北を示す（国家座標Ⅳ系）。
2. 遺構図の縮小率は以下を原則とし、図中に表記してスケール表記は省略した。
全体図 1/250 住居跡・土坑・柱穴土層断面 1/60 円形周溝遺構 1/80 柱穴群 1/100 溜井・道路状遺構・溝・河川跡 1/200 水田・畠跡1/100
3. 本書の遺構番号は種類ごとに村前地区の番号を踏襲しているが、柱穴に関しては各調査区内での通し番号となっている。
4. 本書の挿入図中使用したスクリーンパターンは以下の内容を示す。



5. 本文中でテフラについて略称を用いたが内容は以下の通りである。

略称	名称	降下年代
As-A	浅間Aテフラ	1783年
As-Kk	浅間一柏川テフラ	1108年以降、1783年以前。
As-B	浅間Bテフラ	1108年
F P F-1	Hr-F A噴出直後の泥流堆積物	6世紀前半
Hr-F A	榛名二ツ岳決川テフラ	6世紀初頭
As-C	浅間Cテフラ	4世紀初頭

6. 本書での遺物には種類ごとに略称を付し通し番号を付した。内容は以下の通りである。

P 土器・土製品 S 石器・石製品 W 木製品 M 金属器 B 骨角製品

7. 本書の遺物図の縮小率は以下を原則とし、遺物番号と併せて縮小率を表記しスケール表記は省略した。
土器・土製品 1/3・1/4 石器・石製品 1/3・2/3 木製品 1/4・1/6 金属器 1/2 骨角製品 1/2・2/3・1/3
8. 本書に掲載した遺物の点数は土器・土製品1653点、石器・石製品285点、金属器1点、木製品644点、骨角製品148点である。

目 次

口絵	
序	
例言	
凡例	
第1章 これまでの調査経過	1
第1節 既調査の概要	1
1 調査の経過	1
2 報告の概要	2
第2節 第6・7次調査の概要	3
1 調査の方法	3
2 調査の経過	4
3 基本土層と遺構確認面	5
4 調査の概要	11
第2章 E区の遺構と遺物	12
第1節 I面の遺構と遺物	12
1 柱穴群	12
2 溝	12
3 道路状遺構	18
4 溜井	18
5 3号河川跡	22
6 土坑	22
第2節 II面の遺構と遺物	25
1 住居跡	25
2 柱穴群	49
3 1号円形周溝遺構	50
4 土坑	54
第3節 III面の遺構と遺物	55
1 水田跡	55
2 溝	58
第4節 IV面の遺構と遺物	58
1 畝跡	58
第5節 V面の遺構と遺物	62
1 住居跡	62
2 溝	68
3 土坑	69

4 2号河川跡	69
第3章 F区の遺構と遺物	224
第1節 I・II面の遺構と遺物	224
1 住居跡	224
2 土坑	251
第2節 III面の遺構と遺物	252
1 水田跡	252
第3節 V面の遺構と遺物	253
1 住居跡	253
2 土坑	271
第4章 まとめ	272
1 2号河川跡出土弥生土器について	272
2 2号河川跡出土土師器について	275
3 まとめ	280
遺物観察表	283

〈骨角製品・動物遺体編・写真図版編〉

- 1 新保田中村前遺跡出土の骨角製品
金子浩昌
- 2 新保田中村前遺跡出土の脊椎動物遺体
金子浩昌

写真図版

挿 図 目 次

第 1 図	道路位置図 (1/300,000)	1	第 60 図	207号住居跡・113号土坑・103号溝出土遺物 (1/3・1/4)	67
第 2 図	村前地区のグリット	3	第 61 図	2号河川跡河道変遷図 (1/400)	68
第 3 図	下柳地区のグリット	4	第 62 図	2号河川跡土層断面	70
第 4 図	基本土層	5	第 63 図	2-2号河川跡下層出土土器 (1) (1/3・1/4)	75
第 5 図	E区調査区東壁土層断面	7-8	第 64 図	2-2号河川跡下層出土土器 (2) (1/3)	76
第 6 図	F区調査区西壁土層断面	9-10	第 65 図	2-2号河川跡下層出土土器 (3) (1/3)	77
第 7 図	E区I面全体図 (1/250)	13	第 66 図	2-2号河川跡下層出土土器 (4) (1/3)	78
第 8 図	E区I面柱穴群 (1/100)	15	第 67 図	2-2号河川跡下層出土土器 (5) (1/3)	79
第 9 図	E区I面柱穴断面 (1/60)	16	第 68 図	2-2号河川跡下層出土土器 (6) (1/3)	80
第 10 図	51・52号溝 (1/200)	17	第 69 図	2-2号河川跡下層出土土器 (7) (1/3)	81
第 11 図	51号溝出土遺物 (1/3・1/4)	17	第 70 図	2-2号河川跡下層出土土器 (8) (1/4)	82
第 12 図	98-101号溝・道路状遺構 (1/200)	19	第 71 図	2-2号河川跡下層出土土器 (9) (1/4)	83
第 13 図	1・2号溝井・3号河川跡 (1/200)	20	第 72 図	2-2号河川跡下層出土土器 (10) (1/4)	84
第 14 図	1号溝井・3号河川跡出土遺物 (1/3・1/4・1/6)	21	第 73 図	2-2号河川跡下層出土土器 (11) (1/4)	85
第 15 図	93・95-107号土坑 (1/80)	24	第 74 図	2-2号河川跡下層出土土器 (12) (1/4)	86
第 16 図	E区II面全体図 (1/250)	26	第 75 図	2-2号河川跡下層出土土器 (13) (1/2・1/3・1/4)	87
第 17 図	179・180号住居跡 (1/60)	27	第 76 図	2-2号河川跡下層出土土器 (14) (1/3)	88
第 18 図	179号住居跡出土遺物 (1/3)	28	第 77 図	2-2号河川跡下層出土土器 (15) (1/3)	89
第 19 図	181・182号住居跡 (1/60)	29	第 78 図	2-2号河川跡下層出土土器 (16) (1/3)	90
第 20 図	181号住居跡出土遺物 (1/3)	29	第 79 図	2-2号河川跡下層出土土器 (17) (1/3)	91
第 21 図	183号住居跡 (1/60)	30	第 80 図	2-2号河川跡下層出土土器 (18) (1/3)	92
第 22 図	183号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	30	第 81 図	2-2号河川跡下層出土土器 (19) (1/3)	93
第 23 図	184・185・198号住居跡 (1/60)	31	第 82 図	2-2号河川跡下層出土土器 (20) (1/3)	94
第 24 図	184・185号住居跡出土遺物 (1/3)	31	第 83 図	2-2号河川跡下層出土土器 (21) (1/3)	95
第 25 図	184・185・198号住居跡掘り方 (1/60)	32	第 84 図	2-2号河川跡下層出土土器 (22) (1/3)	96
第 26 図	186・187・199号住居跡 (1/60)	33	第 85 図	2-2号河川跡下層出土土器 (23) (1/3)	97
第 27 図	186・187・199号住居跡掘り方 (1/60)	34	第 86 図	2-2号河川跡下層出土土器 (24) (1/3)	98
第 28 図	186・187号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	34	第 87 図	2-2号河川跡下層出土土器 (25) (1/3)	99
第 29 図	188・202号住居跡 (1/60)	36	第 88 図	2-2号河川跡下層出土土器 (26) (1/3)	100
第 30 図	188・202号住居跡出土遺物 (1) (1/3・1/4)	37	第 89 図	2-2号河川跡下層出土土器 (27) (1/3)	101
第 31 図	188・202号住居跡出土遺物 (2) (1/4)	38	第 90 図	2-2号河川跡下層出土土器 (28) (1/3)	102
第 32 図	189・190・201号住居跡 (1/60)	39	第 91 図	2-2号河川跡下層出土土器 (29) (1/3)	103
第 33 図	189・190・201号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	39	第 92 図	2-2号河川跡中層出土土器 (1) (1/4)	105
第 34 図	189・190・201号住居跡掘り方 (1/60)	40	第 93 図	2-2号河川跡中層出土土器 (2) (1/3・1/4)	106
第 35 図	191号住居跡 (1/60)	41	第 94 図	2-2号河川跡中層出土土器 (3) (1/3)	107
第 36 図	192・196号住居跡 (1/60)	43	第 95 図	2-2号河川跡中層出土土器 (4) (1/3)	108
第 37 図	192・196号住居跡出土遺物 (1/3)	43	第 96 図	2-2号河川跡中層出土土器 (5) (1/3)	109
第 38 図	193号住居跡 (1/60)	44	第 97 図	2-1号河川跡下層出土土器 (1) (1/4)	111
第 39 図	193号住居跡出土遺物 (1/3)	44	第 98 図	2-1号河川跡下層出土土器 (2) (1/4)	112
第 40 図	194号住居跡 (1/60)	45	第 99 図	2-1号河川跡下層出土土器 (3) (1/4)	113
第 41 図	195・200号住居跡 (1/60)	46	第 100 図	2-1号河川跡下層出土土器 (4) (1/3・1/4)	114
第 42 図	195号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	46	第 101 図	2-1号河川跡下層出土土器 (5) (1/3)	115
第 43 図	195・200号住居跡掘り方 (1/60)	47	第 102 図	2-1号河川跡下層出土土器 (6) (1/3)	116
第 44 図	197号住居跡 (1/60)	48	第 103 図	2-1号河川跡下層出土土器 (7) (1/3)	117
第 45 図	197号住居跡出土遺物 (1/3)	48	第 104 図	2-1号河川跡下層出土土器 (8) (1/3)	118
第 46 図	E区II面柱穴群 (1/100)	51	第 105 図	2-1号河川跡下層出土土器 (9) (1/3)	119
第 47 図	E区II面柱穴土層断面 (1/60)	52	第 106 図	2-1号河川跡下層出土土器 (10) (1/3)	120
第 48 図	1号円形溝溝遺構 (1/80)	53	第 107 図	2-1号河川跡下層出土土器 (11) (1/3)	121
第 49 図	106-111号土坑 (1/60)	54	第 108 図	2-1号河川跡下層出土土器 (12) (1/3)	122
第 50 図	E区III面全体図 (1/250)	56	第 109 図	2-1号河川跡下層出土土器 (13) (1/3)	123
第 51 図	E区III面 (0r-F A 下面) 本掘跡 (1/100)	57	第 110 図	2-1号河川跡下層出土土器 (14) (1/3)	124
第 52 図	E区IV面全体図 (1/250)	59	第 111 図	2-1号河川跡中層出土土器 (1) (1/3・1/4)	125
第 53 図	E区IV面点群 (1/100)	60	第 112 図	2-1号河川跡中層出土土器 (2) (1/3)	126
第 54 図	点群出土遺物 (1/4)	61	第 113 図	2-1号河川跡中層出土土器 (3) (1/3)	127
第 55 図	E区V面全体図 (1/250)	63	第 114 図	2-1号河川跡中層出土土器 (4) (1/3)	128
第 56 図	163・164・205号住居跡・112号土坑 (1/60)	64	第 115 図	2号河川跡上層出土土器 (1/3・1/4)	129
第 57 図	163・164・205号住居跡・112号土坑断面 (1/80)	65	第 116 図	2号河川跡出土土器 (1) (1/2・1/3)	130
第 58 図	163・205号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	66			
第 59 図	204・206・207号住居跡・103号溝・113号土坑 (1/80)				

第117図	2号河川跡出土土器 (2) (1/2・1/3・1/4)	131
第118図	2号河川跡出土土器 (3) (1/2・1/3)	132
第119図	2-1号河川跡下層出土土器 (15) (1/3)	134
第120図	2-1号河川跡中層出土土器 (5) (1/3)	134
第121図	2-1号河川跡中層出土土器 (6) (1/3)	135
第122図	2-1号河川跡中層出土土器 (7) (1/3)	136
第123図	2-1号河川跡中層出土土器 (8) (1/3)	137
第124図	2-1号河川跡中層出土土器 (9) (1/3)	138
第125図	2-1号河川跡中層出土土器 (10) (1/3)	139
第126図	2-1号河川跡中層出土土器 (11) (1/3)	140
第127図	2-2号河川跡中層出土土器 (6) (1/3)	141
第128図	2-2号河川跡中層出土土器 (7) (1/3)	142
第129図	2号河川跡上層出土土器 (2) (1/3)	142
第130図	2号河川跡上層出土土器 (3) (1/3)	143
第131図	2号河川跡出土土製品 (1) (2/3)	144
第132図	2号河川跡出土土製品 (2) (1/3・2/3)	145
第133図	2-2号河川跡下層出土土器 (1) (1/2・2/3・1/3)	147
第134図	2-2号河川跡下層出土土器 (2) (1/3)	148
第135図	2-2号河川跡下層出土土器 (3) (1/2)	149
第136図	2-2号河川跡下層出土土器 (4) (1/3)	150
第137図	2-2号河川跡下層出土土器 (5) (1/3・1/4)	151
第138図	2-2号河川跡下層出土土器 (6) (1/3)	152
第139図	2-2号河川跡中層出土土器 (1) (2/3・1/3)	153
第140図	2-2号河川跡中層出土土器 (2) (1/3)	154
第141図	2-1号河川跡下層出土土器 (1) (1/2)	155
第142図	2-1号河川跡下層出土土器 (2) (1/2)	156
第143図	2-1号河川跡下層出土土器 (3) (1/2・2/3・1/3・1/4)	157
第144図	2-1号河川跡下層出土土器 (4) (1/3・1/4)	158
第145図	2-1号河川跡中層出土土器 (1) (1/2・1/3)	158
第146図	2-1号河川跡中層出土土器 (2) (1/3)	159
第147図	2-1号河川跡上層出土土器 (1) (1/3・1/4)	160
第148図	2-1号河川跡上層出土土器 (2) (1/2・1/3)	161
第149図	2-1号河川跡上層出土土器 (1) (1/2・1/3)	162
第150図	2号河川跡上層出土土製品 (2) (1/3)	163
第151図	2-2号河川跡上層出土土製品 (2/3)	163
第152図	2号河川跡本器出土状態全体図 (1/200)	166
第153図	2号河川跡本器出土状態 (1)	167
第154図	2号河川跡本器出土状態 (2)	168
第155図	2号河川跡本器出土状態 (3)	169
第156図	2号河川跡本器出土状態 (4)	170
第157図	2号河川跡本器出土状態 (5)	171
第158図	2-2号河川跡下層出土土器 (1) (1/6)	174
第159図	2-2号河川跡下層出土土器 (2) (1/6)	175
第160図	2-2号河川跡下層出土土器 (3) (1/6)	176
第161図	2-2号河川跡下層出土土器 (4) (1/4・1/6)	177
第162図	2-2号河川跡下層出土土器 (5) (1/6)	178
第163図	2-2号河川跡下層出土土器 (6) (1/4・1/6)	179
第164図	2-2号河川跡下層出土土器 (7) (1/6)	180
第165図	2-2号河川跡下層出土土器 (8) (1/6)	181
第166図	2-2号河川跡下層出土土器 (9) (1/6)	182
第167図	2-2号河川跡下層出土土器 (10) (1/6)	183
第168図	2-2号河川跡下層出土土器 (11) (1/6・1/8)	184
第169図	2-2号河川跡下層出土土器 (12) (1/2・1/6)	185
第170図	2-2号河川跡下層出土土器 (13) (1/6・1/8)	186
第171図	2-2号河川跡下層出土土器 (14) (1/6)	187
第172図	2-2号河川跡下層出土土器 (15) (1/6)	188
第173図	2-2号河川跡下層出土土器 (16) (1/6)	189
第174図	2-2号河川跡下層出土土器 (17) (1/4・1/6)	190
第175図	2-2号河川跡下層出土土器 (18) (1/4・1/6)	191
第176図	2-2号河川跡下層出土土器 (19) (1/6)	192
第177図	2-2号河川跡下層出土土器 (20) (1/6)	193

第178図	2-2号河川跡下層出土土器 (21) (1/6)	194
第179図	2-2号河川跡下層出土土器 (22) (1/6・1/8)	195
第180図	2-2号河川跡下層出土土器 (23) (1/6・1/8・1/10)	196
第181図	2-2号河川跡下層出土土器 (24) (1/6)	197
第182図	2-2号河川跡下層出土土器 (25) (1/6・1/8)	198
第183図	2-2号河川跡下層出土土器 (26) (1/6)	199
第184図	2-2号河川跡中層出土土器 (1) (1/4・1/6)	200
第185図	2-2号河川跡中層出土土器 (2) (1/6・1/10)	201
第186図	2-2号河川跡中層出土土器 (3) (1/6)	202
第187図	2-1号河川跡下層出土土器 (1) (1/4・1/6)	203
第188図	2-1号河川跡下層出土土器 (2) (1/4・1/6)	204
第189図	2-1号河川跡下層出土土器 (3) (1/6・1/8)	205
第190図	2-1号河川跡下層出土土器 (4) (1/6)	206
第191図	2-1号河川跡中層出土土器 (1) (1/6・1/10)	207
第192図	2-1号河川跡中層出土土器 (2) (1/6)	208
第193図	2-1号河川跡中層出土土器 (3) (1/6・1/8)	209
第194図	2-1号河川跡中層出土土器 (4) (1/4・1/6・1/8・1/10)	210
第195図	2-1号河川跡中層出土土器 (5) (1/6・1/8・1/14)	211
第196図	2-1号河川跡中層出土土器 (6) (1/6・1/8)	212
第197図	2-1号河川跡中層出土土器 (7) (1/6)	213
第198図	2-1号河川跡中層出土土器 (8) (1/6・1/8)	214
第199図	2-1号河川跡中層出土土器 (9) (1/6・1/10)	215
第200図	2-1号河川跡中層出土土器 (10) (1/4・1/6)	216
第201図	2-1号河川跡中層出土土器 (11) (1/6)	217
第202図	2-1号河川跡中層出土土器 (12) (1/6)	218
第203図	2-1号河川跡中層出土土器 (13) (1/6・1/10)	219
第204図	2-1号河川跡中層出土土器 (14) (1/6・1/8)	220
第205図	2-1号河川跡中層出土土器 (15) (1/6・1/8)	221
第206図	2-1号河川跡中層出土土器 (16) (1/6)	222
第207図	2号河川跡上層出土土器 (1/6)	222
第208図	グロットおよび2号河川跡出土の縄文土器 (1/3・1/4)	223
第209図	F区Ⅰ・Ⅱ面全体図 (1/250)	225
第210図	209・210号住居跡 (1/60)	226
第211図	209・210号住居跡出土遺物 (1/4)	226
第212図	212号住居跡 (1/60)	227
第213図	212号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	227
第214図	213号住居跡 (1/60)	228
第215図	213号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	229
第216図	214号住居跡 (1/60)	231
第217図	214号住居跡出土遺物 (1) (1/3・1/4)	232
第218図	214号住居跡出土遺物 (2) (1/4)	233
第219図	208・211・215・236号住居跡 (1/60)	234
第220図	211・215号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	234
第221図	216・217・218号住居跡 (1/60)	235
第222図	216・217号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	236
第223図	219・220・229・240号住居跡 (1/60)	237
第224図	219・239号住居跡出土遺物 (1/3)	238
第225図	221号住居跡 (1/60)	239
第226図	221号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	240
第227図	222・241・242号住居跡 (1/60)	241
第228図	222号住居跡出土遺物 (1/3)	241
第229図	223・224号住居跡 (1/60)	243
第230図	223・224号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	244
第231図	225・227号住居跡・114号土坑 (1/60)	245
第232図	225・227号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	245
第233図	228・238号住居跡 (1/60)	246
第234図	228号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	247
第235図	229・230号住居跡 (1/60)	248
第236図	229号住居跡出土遺物 (1/3)	248
第237図	231・233号住居跡 (1/60)	249

第238図	231号住居跡出土遺物 (1/2・1/3)	250
第239図	237号住居跡 (1/60)	251
第240図	F区Ⅰ・Ⅱ両アリット出土遺物 (1/3・2/3)	251
第241図	F区Ⅲ面水田跡全体図 (1/250)	252
第242図	F区Ⅲ面 (Hr-F A下面) 水田跡 (1/100)	253
第243図	F区V面全体図 (1/250)	254
第244図	243・247・254号住居跡 (1/60)	256
第245図	243・245号住居跡出土遺物 (2/3・1/3・1/4)	257
第246図	234・244・250・253号住居跡 (1/60)	258
第247図	234・244号住居跡出土遺物 (1/2・2/3・1/3・1/4)	259
第248図	246・252号住居跡 (1/60)	260
第249図	246号住居跡出土遺物 (2/3・1/3)	260
第250図	252号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	261
第251図	248・256号住居跡・115号土坑 (1/60)	262
第252図	248号住居跡出土遺物 (1/4)	262
第253図	249・256号住居跡 (1/60)	263
第254図	256号住居跡出土遺物 (1/2・2/3・1/3・1/4)	264
第255図	251号住居跡 (1/60)	265
第256図	251号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	265
第257図	254号住居跡 (1/60)	266
第258図	254号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)	266
第259図	257号住居跡 (1/60)	267
第260図	257号住居跡出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	268
第261図	258-260・235号住居跡 (1/60)	269
第262図	258・260号住居跡出土遺物 (2/3・1/3・1/4)	269
第263図	261-263号住居跡 (1/60)	270
第264図	261・262号住居跡出土遺物 (2/3・1/3・1/4)	271
第265図	新保遺跡と新保田中村前遺跡の弥生時代中期後半— 古墳時代前期の遺構分布図 (1/2,000)	282

第1章 これまでの調査経過

第1節 既調査の概要

1 調査の経過

一級河川染谷川は榛名山東南麓に源を発し前橋台地中央で井野川と合流する、利根川を幹川とする第3次支川である。

本河川は昭和39年以降、治水対策・農業振興を兼ねた中小河川改修工事が随所で行われてきた。高崎市新保田中町の流域は治水対策上早期から河川改修工事の要望があり、昭和58年度になって具体化してきた。

県土木部河川課は昭和59年度より染谷川の河川改修工事を着工するため、昭和58年度に同地内工事対象地域の埋蔵文化財発掘調査の必要性を県教育委員

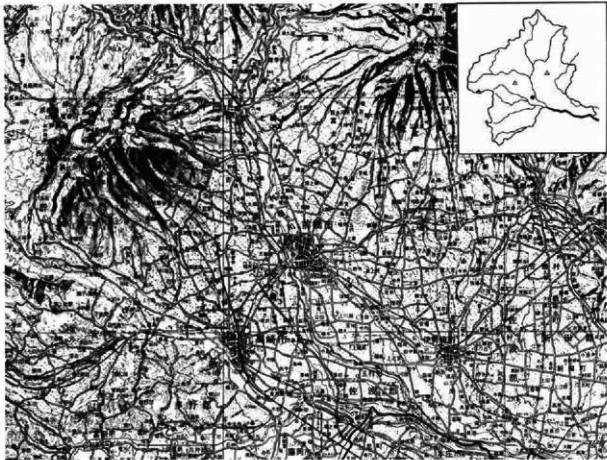
会文化財保護課に照会してきた。

これを受けて県文化財保護課は工事対象地区の分布調査を実施するとともに、対象区域が関越自動車道新潟線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査で確認された新保遺跡の隣接地であることがわかった。

新保遺跡は弥生時代～平安時代にかけての集落・寺院跡・水田跡・河川跡等が確認され多量の木製品が出土した、全国的にも著名な大遺跡である。

この要件をもとに染谷川の河川改修工事区域は、新保遺跡と同等の遺構の存在が予想されたため、県文化財保護課は県河川課に対し、対象区域の事前の埋蔵文化財調査の必要性を回答し、その取り扱いについて協議を重ねた。

これらの協議の中で試掘調査は高崎市教育委員



第1図 遺跡位置図 (1/300,000)

第1章 これまでの調査経過

が実施することになったが、発掘調査は(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することとなった。

発掘調査に先立ち県土木部と(財)群馬文事業団は「一級河川染谷川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査」の委託契約を昭和59年10月1日付で締結し、発掘調査に着手して行った。

第1次調査は昭和59年10月29日～同年12月5日の間で実施し、村前地区の北端調査区の1550㎡を発掘調査した。

第2次調査は昭和60年10月1日～昭和61年3月29日の間で実施し、村前地区のⅠ・Ⅱ区とB区の一部の3500㎡を発掘調査した。

第3次調査は昭和61年7月25日～昭和62年2月13日の間で実施し、村前地区のA・B区とD区の一部の3000㎡を発掘調査した。

第4次調査は昭和62年9月16日～昭和63年3月25日の間で実施し、村前地区のC・D区の一部と下り柳地区A・B区の一部の5900㎡を発掘調査した。

第5次調査は昭和63年4月4日～同年7月16日の間で実施し、村前地区C・D区と下り柳地区A区の5900㎡を発掘調査した。

第1次から第5次の発掘調査に対する整理事業は平成元年6月1日～平成2年3月31日の間に実施し、この間、3分冊の発掘調査報告書をまとめた。

第1分冊では溝・井戸・河川跡・水田・畠をまとめ、第2分冊では住居・竪穴遺構をまとめ、第3分冊では掘立柱建物・ピット・土坑・墓と各種関連分析とこれまでの調査成果をまとめた。

2 報告の概要

これまでに報告された村前地区、下り柳地区の遺跡の概要は以下の通りである。

住居跡は両地区で160軒が確認され、村前地区では弥生時代中期後半6軒・後期19軒、古墳時代前期14軒、6世紀後半～平安時代121軒が確認され、下り柳地区では2軒の平安時代の住居跡が確認された。また、竪穴遺構が村前地区で4基、下り柳地区で3基が確認され、水田造成にともなって破壊された住

居跡の可能性のある焼土跡が村前地区で19基確認された。

掘立柱建物は村前地区で4軒が確認され、下り柳地区では3列の柱列が確認されたがともに時期は限定できなかった。また、両地区では多数の柱穴が確認された。

溝は弥生時代～近世のもので村前地区で86条、下り柳地区で37条が確認された。これらの溝の内、弥生時代～古墳時代のものは灌漑用水を主としシガラミ構造により分水機能を持つものもある。

井戸は村前地区で36基、下り柳地区で3基が確認された。ともに円形をなす素掘り井戸で、時期は中世～近世のものである。

本遺跡を特徴付けるものとして村前地区で2本の河川跡が確認された。1号河川跡は古墳時代前期～中期のもので、多くの木製品とともに滑石質蛇紋岩製の管玉や勾玉その未製品が出土し、周辺に工房の存在が想定された。2号河川跡は弥生時代中期～古墳時代前期のもので、農具を含む多くの木製品が出土した。

生産地としては両地区で水田と畠が確認された。水田は村前地区でHr-F A水田が、下り柳地区でAs-C下・Hr-F A下・As-B下の3面の水田が確認された。畠は村前地区でAs-C下・As-B前後の畠が、下り柳地区でHr-F A下・As-B前後の畠が確認された。

土坑・土坑墓は村前地区で91基が、下り柳地区で30基が確認され、これらの内、弥生時代後期～古墳時代前期のものは村前地区で27基が確認された。

また、村前地区で弥生時代中期後半～古墳時代前期の周溝墓が11基確認され、同地区ではさらに弥生時代後期の覆床墓1基が確認された。

本遺跡は村前・下り柳地区で対照的な土地利用の変遷をたどるが、村前地区は弥生時代中期後半～古墳時代前期の当地域の拠点集落であり、その後、人為的要因と自然災害により土地利用は変化をとり、7世紀以降新保慶寺の存在地として変遷をたどり、中世には数々の館屋が築かれて行く。

第2節 第6・7次調査の概要

1 調査の方法

染谷川河川改修工事に伴う本遺跡の調査区は上流部の下り柳地区と下流部の村前地区の2つの調査区に分かれ、両者の間は約3kmの距離がある。

今回の調査の方法はこれまでの5次にわたる調査の方法を原則的に踏襲した。これまでの調査を含め、概要は以下の通りである。

①今回の調査区は村前地区の南端に位置し、染谷川左岸の調査区をE区、右岸の調査区をF区と呼称した。なお、F区は、関越自動車道新潟線建設工事で発掘調査された「新保遺跡」に接する。

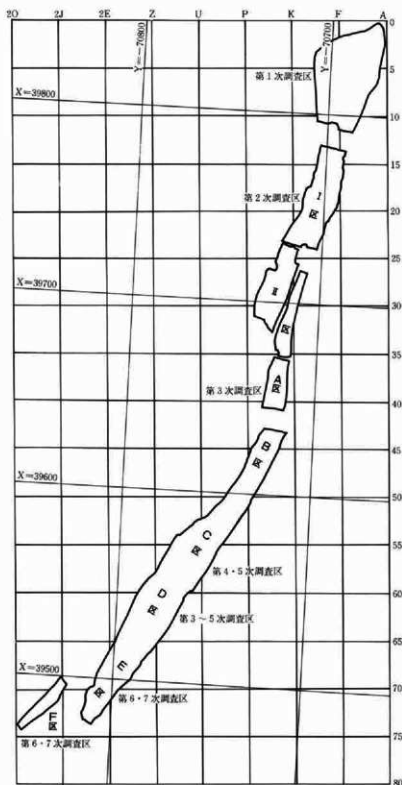
②グリッドの設定は村前地区の基準線を踏襲し、グリッドも5m四方で北東隅を呼称基準とした。

③遺構名称・番号は種類ごとに村前地区の呼称を踏襲し、柱穴だけは今回の調査区内で通し番号を付した。

④本遺跡はテフラ等により重層した文化層を持つため、これまでと同様に5面に分層して発掘調査を実施した。(遺構確認面と呼称については後述。)

⑤遺構測量には平板測量と写真測量を併用した。また、遺構写真撮影には35mmサイズとブローニーサイズカメラにより、モノクロトリバーサルフィルムを使用した。

⑥今回の調査では河道跡より約1750点の木製品や自然木が出土し、農具や建築材等の製品や未



第2図 村前地区のグリッド

0 1 : 2000 50m

第1章 これまでの調査経過

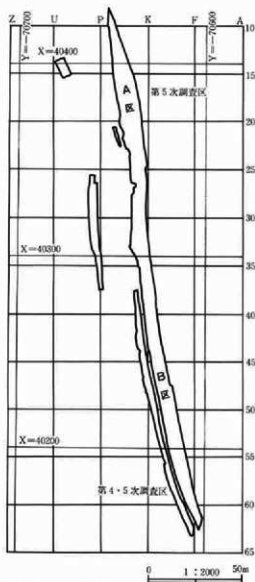
製品が約740点となった。このため調査現場において以下の基本整理を実施した。

ア 遺構より取り上げた木製品等は添え板で支え水洗いを実施した。

イ 製品・未製品と自然木の選別を行い、製品・未製品は台帳化し自然木は環境復元等の資料とした。

ウ 製品・未製品には通し番号を付し現場で写真撮影を行い、形状をスケッチし規模を計測して特徴を記して台帳化した。

エ 木製品等は現場で仮水槽に入れアク出しを行い、順次整理作業の実測の工程に組み入れた。



第3図 下り柳地区のグリッド

2 調査の経過

(第6次調査・平成4年度)

10月～12月は発掘調査の準備作業を中心に実施した。調査区E・F区の整地作業をまず実施するとともに、E区を縦断していた農業用仮水路の移設工事を実施した。

1月よりE区から本格的に発掘調査に入った。まず、E区I面の調査を行い、1月前半は柱穴群・溝・土坑の調査を主に、1月後半は溜井・道路状遺構の調査を行った。1月中にE区I面全体の写真撮影・遺構測量を終了した。

2月前半はE区II面の住居跡・柱穴群・円形周溝遺構の調査を主に行った。2月中旬からはE区南半部のIII面とV面の調査面を確認し、2・3号河川跡の調査を開始した。2月後半は北半部はII面を南半部はV面の調査を併行して行い、E区II面の調査は2月末で終了した。

3月前半はE区北半部はIII面の水田跡の調査を行い、南半部はV面の2号河川の調査を行い中層までの調査が終了した。3月後半はE区北半部はIV面の畝跡の調査を行い、南半部はV面の2号河川跡の下層の調査を行い終了した。

(第7次調査・平成5年度)

4月はE区北半部の大半を占める2号河川跡の調査に集中し、4月末までに多量に出土した木製品や土器類を取り上げて調査を終了した。

5月前半はE区V面の住居跡の調査を中心に行い、調査事務所を移転しF区の表土掘削等を行った。後半はF区I・II面の住居跡の調査を行い、5月末に調査を終了した。

6月前半はF区III面の水田跡の調査とF区V面の住居跡の調査を行い、6月中旬に調査を終了した。6月下旬は図面・写真・遺物等の基礎的な整理を行い、6月25日で現場を撤収した。

3 基本土層と遺構確認面

遺跡は関東平野北西最奥部の標高95mの平坦な前橋台地上にある。遺跡は浅間山を給源とする前橋泥流（約2万年前）を基盤としており、今回の調査区では古墳時代以降の4枚のテフラが確認された。このため、遺構確認面も5面と多層となった。

以下、今回の調査区での基本土層と遺構確認面について記す。

基本土層

- I層 褐色土 (10YR4/4) 表土。As-A (1783年) を含む砂質土。厚さ20~30cm。
- II層 褐色土 (10YR4/4) As-B (1108年) を含む砂質土で厚さ20~30cm。中・近世遺構の掘り込み面であるが、確認面はIV層上面となる。
- III層 As-B 軽石層 (10YR3/3) 下位の細かく成層した細粒の黄褐色軽石層と、上位の桃色細粒火山灰層から構成され、As-Bに同定され

た。また、これらの上位に青灰色細粒火山灰層があり、As-Kk (1108年以降、1783年以前。) に同定された (III層)。厚さ20~30cm。

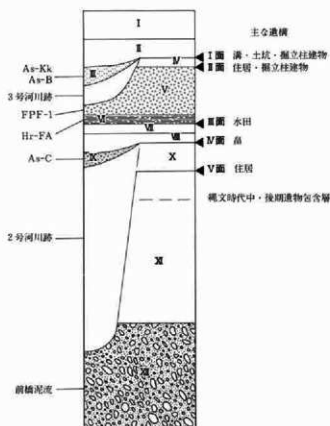
III層・III層は今回の調査では、E区52溝・1号溜井・3号河川跡の上面とF区の一部で確認された。

IV層 灰褐色土 (10YR1/4) やや粘質の土層で今回の調査では、E区で部分的に確認された。厚さ0~10cm。

IV層上面がI面遺構の確認面であるが、古墳時代後期~平安時代中期の竈穴住居跡の輪郭も薄く浮かび上がっていた。

V層 FPF-1 褐色土 (10YR5/1) ややにぶい黄褐色 (10YR7/2) をなすシルト質の土層が互層をなして堆積していた。厚さ40~80cm。

下層のHr-F Aとの間層はなく、Hr-F A直後に噴出した泥流堆積層で今回の調査区の全域で確認された。V層の堆積により遺跡周



第4図 基本土層

第1章 これまでの調査経過

辺の地形は一変し、土地利用に大変革をもたらした。

VI層 Hr-F A 明黄褐色(10YR6/6)をなし、黄褐色火山灰や白色軽石等で成層をなしている。厚さ5-10cmで、降下年代は6世紀初頭と考えられている。

VI層も今回の調査区域全域で確認されており、直下の水田面を覆っている。

VII層 黒色土(10YR1.7/1) 粘性が非常に高い土層で水田の耕作土となっている。厚さ3-5cm。

VIII層 黒褐色土(10YR3/1) As-Cを多量に含むやや粘性の低い土層で畠の耕作土となっている。厚さ5-15cm。

IX層 As-C 外見は黒褐色(10YR2/2)をなしているが軽石は灰色をなし、As-Bに比べ粒径が大きく粗い。厚さ5-20cmで降下年代は3世紀末-4世紀初頭と考えられている。

今回の調査区では台地部の畠の畝間溝内や2号河川跡の上位で確認された。

X層 黒色土(10YR2/1) 粘性の高い土層で厚さ20-30cm。弥生時代中期-古墳時代前期の堅穴住居の掘り込み面であるが、確認面はII層上面となった。

XI層 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性を帯びる砂質土で、厚さ1.50-1.80m。II層上層中に縄文時代中期-後期の遺物を包含している。

XII層 前橋泥流 浅間山の山体崩壊が原因とされる堆積層で、黄褐色をなし灰色や黒色の亜角礫や角礫を多く含む固く締まっている。厚さは15m前後で発生年代は約2万年前と考えられている。E区の2・3号河川跡や現樂谷川も本層を河床としている。

遺構確認面

今回の調査での遺構確認面は5面あるが、1-5次調査での遺構確認面と一部異なる部分があるが、今回の調査での確認面は以下の通りである。

I面 IV層上面を確認面としたが、遺構の掘り込み面はIV層上面からII層中と考えられる。I面ではAs-B降下直前から近世までの遺構が確認された。

II面 V層上面を確認面としたが、遺構の掘り込み面はIV層と考えられる。II面では古墳時代後期-平安時代中期の遺構が確認された。

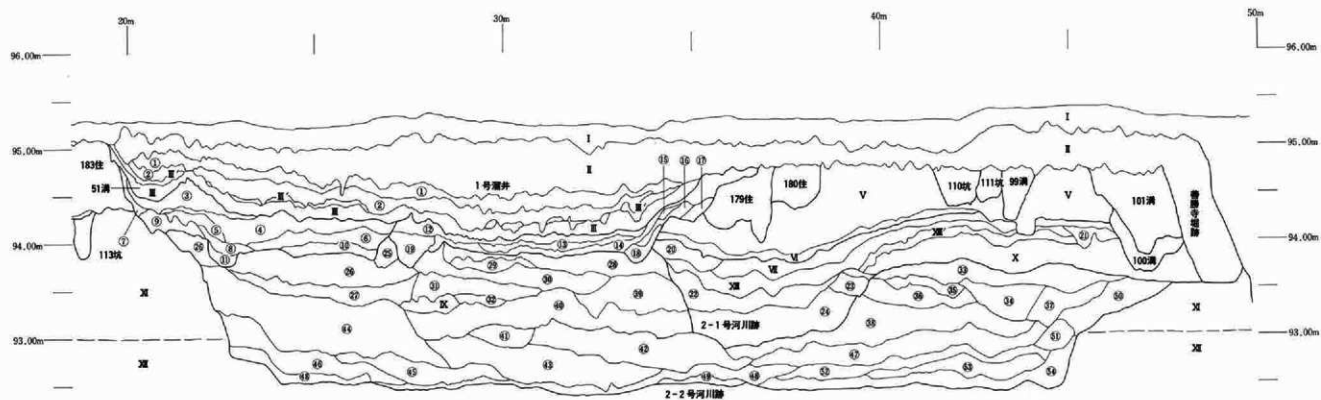
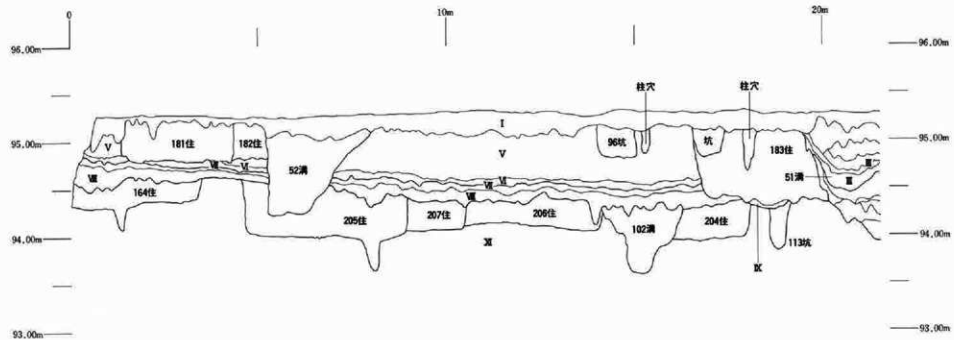
III面 Hr-F A直下のVIII層の面で水田跡の面である。Hr-F AおよびF P F-1により完全に覆われており、地形が改変し復旧の痕跡はない。

IV面 X層上面を確認面とし畠跡を確認したが、VIII層中の畠作は確認されないうえ、As-C降下を挟んでやや継続的に畠作を行っていたと考えられる。

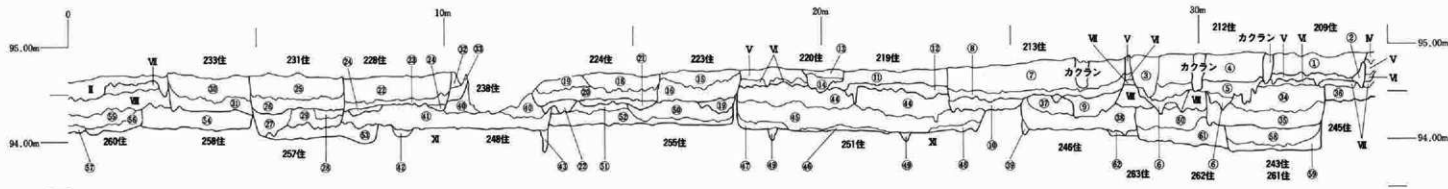
V面 XI層上面を確認したが、遺構の掘り込み面はX層中と考えられる。V面では弥生時代中期-古墳時代前期の遺構が確認された。

以上の確認面は樂谷川の左岸のC・D区に接するE区ですべての面が確認されたが、樂谷川右岸に位置するF区ではIV面の畠跡が確認されなかった。この状況はF区に接する新保遺跡と共通するものである。

なお、今回の調査でも地質とテフラの分析を古環境研究所(早田 勉氏)に依頼して実施したが、紙面の都合上掲載することができなかった。分析結果については土層の認定や遺構確認面の認定の参考とした。



第5图 E区调查区東壁土層断面



209住 ①暗褐色土(2.SY5/2) 黒褐色土小ブロックを含む粘性の低い土層。②灰黄褐色土(10YR5/2) 焼土小ブロック、炭化物粒を多く含む。212住 ①灰黄褐色土(10YR5/2) 焼土粒がわずかに混入。落ち込み層土。②黄褐色土(2.SY5/3) 黒褐色土小ブロックを少量含む、粘性低い。③灰黄褐色土(10YR4/2) 目撃小ブロックと焼土粒を少量含む。④黒褐色土(10YR4/1) 黒褐色土とV、VI層の小ブロックの混土層。213住 ①灰黄褐色土(10YR4/1) 焼土粒・炭化物粒を極少量含む。②黒褐色土(10YR4/1) 焼土と炭化物粒の小ブロックを少量含む。③黄褐色土(2.SY4/1) V、VI層の小ブロックと焼土・炭化物小ブロックの混土層。④灰黄褐色土(10YR5/2) V層と焼土・炭化物粒を少量含む。215住 ①灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒・炭化物粒を少量含む。②黒褐色土(10YR4/1) 黒褐色土とV層の小ブロックの混土層。220住 ①に灰黄褐色土(10YR4/3) や砂質土。②灰黄褐色土(10YR4/2) 黒褐色土とV層の小ブロックの混土層。③黒褐色土(10YR4/1) 焼土粒・炭化物粒を少量含む。④に灰黄褐色土(10YR5/3) 黒褐色土とV層の小ブロックの混土層。224住 ①灰黄褐色土(10YR5/2) V層と黒褐色土の小ブロックを少量含む。②黒褐色土(10YR5/1) 焼土粒・炭化物粒を多く含む。③黒褐色土(10YR3/1) V層・黒褐色土・焼土粒・炭化物粒の混土層。228住 ①灰黄褐色土(10YR5/2) 焼土小ブロックを極少量含む。②灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土・炭化物粒を少量含む。③灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土・炭化物粒を少量含む。④黒褐色土(10YR4/1) 黒褐色土とV層の小ブロックの混土層。231住 ①灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒・V層小ブロックを極少量含む。②黄褐色土(2.SY4/1) 焼土・炭化物粒の小ブロックを少量含む。238住 ①灰黄褐色土(10YR5/2) ①灰黄褐色土(10YR5/2) ①灰黄褐色土(10YR5/2) V-V層の小ブロックの混土層。243住 ①暗褐色土(10YR3/3) As-Cや焼土・炭化物粒の小ブロックを多く含む。②灰黄褐色土(10YR4/2) ②層と同様で焼土・炭化物小ブロックが豊富に含まれる。245住 ①黒褐色土(10YR3/1) As-C・焼土を極少量含む。②暗褐色土(10YR3/2) 焼土粒を極少量含む。③黒褐色土(10YR3/1) 焼土・炭化物粒を少量含む。④暗褐色土(10YR3/2) 焼土・炭化物粒を少量含む。251住 ①暗褐色土(10YR3/2) 焼土・炭化物粒を少量含む。255住 ①暗褐色土(10YR3/2) 焼土・炭化物粒を少量含む。256住 ①暗褐色土(10YR3/2) 焼土・炭化物粒を少量含む。257住 ①暗褐色土(10YR3/2) 焼土・炭化物粒を少量含む。258住 ①暗褐色土(10YR2/2) 焼土・炭化物粒を少量含む。260住 ①暗褐色土(10YR2/2) As-C・焼土・炭化物粒を少量含む。②黒褐色土(2.SY3/1) 焼土粒を極少量含む。③赤褐色土(5YR4/6) 床面が焼けて硬化している。261住 ①暗褐色土(10YR4/1) 焼土・炭化物粒を少量含む。②暗褐色土(7.SY4/1) ②層と同様。262住 ①暗褐色土(10YR2/2) 焼土粒を極少量含む。②黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒を少量含む。263住 ①灰黄褐色土(10YR5/2) 焼土粒を極少量含む。

第6図 F区調査区西壁土層断面

①暗褐色土(10YR3/4) As-Bを多量に含む砂質土。②黒褐色土(10YR3/1) As-Bの二次堆積層。③暗褐色土(10YR3/3) V層ブロックを含む粘質土。④灰黄褐色土(10YR4/2) V層小ブロックを少量含む粘質土。⑤に灰黄褐色土(10YR5/3) V層とV層の混土層。⑥暗褐色土(10YR4/2) V、VI層の混土層。⑦暗褐色土(10YR3/1) V、VI層の混土層。⑧暗褐色土(10YR4/1) As-Cを極少量含む粘質土。⑨暗褐色土(10YR3/1) As-Cの小ブロックを多く含む粘質土。⑩暗褐色土(10YR5/1) V層の二次堆積層でAs-Cが少量混入。⑪暗褐色土(10YR4/1) As-Cを極少量含む粘質土。⑫灰黄褐色土(10YR5/2) V層を多量に含む粘質土。⑬に灰黄褐色土(10YR5/3) V層を多量に含む粘質土を少量含む粘質土。⑭暗褐色土(10YR4/1) ⑭層と同様。⑮暗褐色土(10YR4/1) V層の崩落層。⑯暗褐色土(10YR4/1) V層の崩落層でフロック状をなす。⑰暗褐色土(10YR5/1) V層の崩落層、軽石粒を多く含むや砂質土。⑱に灰黄褐色土(10YR7/2) V層の崩落層で粘質土。⑲灰黄褐色土(10YR5/2) V層とV層の混土層。⑳暗褐色土(10YR4/1) 粘質土。㉑暗褐色土(10YR4/1) ブロック状をなすAs-Cを多量に含む粘質土。㉒黒褐色土(10YR3/1) As-Cを少量含む粘質土。㉓暗褐色土(10YR4/1) 粘質土とV層の混土層。㉔暗褐色土(10YR4/1) V層とV層の混土層で遺物の混入量多。㉕暗褐色土(10YR5/1) V層とV層の混土層。㉖暗褐色土(7.SY2/1) As-Cを極少量含む粘質土。㉗黒褐色土(10YR4/1) 粘性の高い粘質土。㉘暗褐色土(10YR4/1) As-Cを極少量含む粘質土。㉙暗褐色土(10YR5/1) As-Cを多量に含む粘質土。㉚暗褐色土(10YR3/1) As-C小ブロックを多量に含むや砂質土。㉛灰黄褐色土(10YR4/2) As-Cの二次堆積層。㉜暗褐色土(10YR4/1) 粘質土。㉝暗褐色土(10YR4/1) ブロック状をなすAs-Cを多量に含む粘質土。㉞暗褐色土(10YR4/1) ②層と同様。㉟黒褐色土(10YR3/1) 粘質土。㊱暗褐色土(10YR4/1) 粘質土とV層の混土層。㊲暗褐色土(10YR4/1) 粘質土とV層の混土層で遺物の混入量多。㊳暗褐色土(10YR4/1) As-Cを極少量含む粘質土。㊴暗褐色土(10YR4/1) As-Cを多量に含む粘質土。㊵暗褐色土(10YR3/1) As-C小ブロックを多量に含むや砂質土。㊶暗褐色土(10YR4/2) As-Cの二次堆積層。㊷暗褐色土(10YR4/1) 粘質土。㊸暗褐色土(10YR4/1) ブロック状をなすAs-Cを多量に含む粘質土。㊹暗褐色土(10YR4/1) ②層と同様。㊺黒褐色土(10YR3/1) 粘質土と砂質土がミナリに堆積。㊻暗褐色土(10YR4/1) 粘質土とV層の混土層。㊼暗褐色土(10YR4/1) 粘質土とV層の混土層で遺物の混入量多。㊽暗褐色土(7.SY1/1) 粘質土と砂質土がミナリに堆積。㊾暗褐色土(10YR4/1) 粘質土とV層の混土層。㊿暗褐色土(10YR4/1) 粘質土とV層の混土層で遺物の混入量多。㊿暗褐色土(7.SY1/1) 粘質土と砂質土がミナリに堆積。㊿暗褐色土(10YR4/1) 粘質土とV層の混土層。㊿暗褐色土(7.SY4/1) ②層と同様。㊿暗褐色土(10YR4/1) やや粘りの多い粘質土。

B区調査区東壁土層断面

4 調査の概要

本遺跡の立地する前橋台地は東限を旧利根川河床である広瀬・桃ノ木低地帯とし、西・南限を烏川、北限を相馬ヶ原扇状地とする東西約11km、南北約18kmで標高60m～120mの平坦な台地である。この台地上には榛名山を源とする中小の河川が東南流し平行して自然堤防が形成され、微地形を構成している。しかし、6世紀前半の榛名山二ヶ岳の噴出物により、旧地形が大きく変化した。遺跡はこのような前橋台地の中央部やや北方に位置し、新保遺跡に接する染谷川沿いにある。

前橋台地上での縄文時代の遺跡は希薄であるが、烏川沿いの下佐野遺跡で中期の集落が確認されている。

弥生～古墳時代の遺跡は烏川左岸や井野川流域で確認されているが、前橋台地東半部の調査が今後進めば遺跡分布も変化するものと考えられる。また、本遺跡の東方約5kmには前期古墳である前橋八幡山・前橋天神山古墳を擁する広瀬・朝倉古墳群があり、同じく南方約5kmには前期古墳の元島名将軍塚古墳がある。

また、本遺跡の北方約4kmには上野国府跡があり、今回の調査区に接して7世紀後半～10世紀の新保庵寺が推定されている。

今回の調査対象区域は染谷川左岸のE区と右岸のF区であり調査区対象面積は1000㎡であるが、護岸対策や道・水路の現状により、実質の調査面積はE区が557㎡、F区が193㎡である。以下、両区の各調査面の遺構の概要を記する。

E区Ⅰ面では柱穴114本、溝6本、溜井2基、道路状遺構1条、河川跡1条、土坑14基が確認された。これらの遺構は平安時代～近世の時期で、As-B降下以前のものは溝1条、溜井・河川跡の各遺構である。他の遺構は中世～近世のものである。

E区Ⅱ面では住居跡23軒、柱穴109本、円形周溝遺構1基、土坑4基が確認された。住居跡は7世紀～10世紀のものであり、円形周溝遺構は終末期古墳と考えられる。

E区Ⅲ面ではHr-F A下面で水田跡が小範囲ながら確認された。確認面の西半部は2号河川跡の痕跡を留め低地面となっていたが、東半部は大アゼで区画された内部を小アゼにより区画された小区画水田がわずかに確認された。

E区Ⅳ面ではⅧ・Ⅸ層を取り除いたⅩ層黒色土面で島の畝間溝が東半部で確認された。畝間溝は南北に走向するものと東西に走向するものがあり、南北に走向する一群に古い傾向が窺われた。

E区Ⅴ面では弥生時代中期後半～古墳時代前期の住居跡5軒、溝1本、土坑2基、2号河川跡1条が確認された。住居跡は2号河川跡の左岸に立地する一群で全体規模が確認されたものはない。2号河川跡はD区で確認された河川跡と同じであり名称も同様に付した。また、2号河川跡は時期や走向等から新保遺跡の大溝と同じものであることが判明した。今回確認された2号河川跡の全体規模は長さ40m、幅14m、深さ1.5mで、大ききは2-1号河川跡と2-2号河川跡に分かれ、全体として5条の漸次西進する河道変化が認められた。2号河川跡からはパン箱に約280箱の土器片や約1750点の木製品や自然木、パン箱約30箱のシカ・イノシシを中心とする動物遺体や骨角製品が出土した。特に多量に出土した動物遺体と骨角製品の優品は今回の調査を特徴付けるものである。

F区は表層の攪乱が著しくⅠ・Ⅱ面の遺構はⅤ層中の削平面で確認された。Ⅰ・Ⅱ面の遺構は住居跡32軒、柱穴11本、土坑1基が確認された。住居跡は重複率が高く9～10世紀のものがほとんどである。

F区Ⅲ面もⅡ面住居跡の掘り込みが深く、わずかに水田面と小アゼが確認されただけで水田区画も不明であった。また、Ⅳ面は確認されなかった。

F区Ⅴ面では弥生時代中期後半～古墳時代前期の住居跡26軒と土坑1基が確認された。住居跡は重複率が高く調査範囲も狭いために全体規模が判明したものはない。

今回の調査では2号河川跡の出土遺物以外にパン箱に約50箱の遺物が出土した。

第2章 E区の遺構と遺物

第1節 I面の遺構と遺物

1 柱穴群(第8・9図 図版5-1)

E区I面では114本の柱穴が確認された。これらの柱穴はE区の北東寄りに密集して分布し、一部の柱穴は51・52号溝や95・96号土坑と重複する。

多くの柱穴が確認されたが柱筋が判明したり、構造が判明したものはなかった。

柱穴の平面形は円形を基調とするもの96本、方形を基調とするもの18本で円形を基調とする柱穴群である。

平均的な規模は径が0.33～0.27mで深さは0.24mである。また、柱痕が確認された柱穴は13本で、平均的な規模は径0.15mである。

柱穴の覆土はほとんどがAs-Bを含む混土層で、As-Aを含むものはなかった。

30本の柱穴から遺物が出土したが、9～10世紀の土師器・須恵器の小片が少量混入していただけであり、時期を示す遺物は出土しなかった。

柱穴群は分布に片寄りが見られるが構造等は不明であり、時期もAs-B降下以降(1108年)、As-A降下以前(1783年)といった大きな幅の中でしか捉えることができなかった。

2 溝

E区I面では5条の溝が確認された。また、染谷川に平行してE区の西端には「善勝寺堀」と言われていた堀の痕跡が認められた。

51号溝(第10・11図 図版5-2, 50-1)

位置 2C-65～2C-69

重複 183・189～193・195・196・200・201号住居跡より新しく、98号土坑より古い。

走向 ほぼ南北に直線的に走向し、1号溜井と接する部分で南東方向へ走向を変える。

規模 幅2.10m 深さ0.64～0.74m 調査長21.0m

形状 断面は半円形をなし、北から南へ流下する。
埋没土 底面より約0.10mの間層を挟んでAs-Bの純層堆積があり、上下の土層に水流堆積の痕跡が認められた。

出土遺物 7～10世紀の土師器の小片を中心とする約730点の遺物が埋没土中から出土した。

調査所見 D区から続く直線的な溝でAs-Bの堆積状態から1号溜井とは同時期と考えられる。本溝は1号溜井の改修に合わせて南端部で流路を2回改修しており、1号溜井を避けるように東方へ屈曲を強めている。本溝の機能していた時期はAs-B降下直前の頃と考えられ、用水路としての性格が前報告で与えられている。

52号溝(第10図 図版5-3)

位置 2A-65～2A-66

重複 181・182号住居跡、1号円形周溝遺構より新しく、93号土坑より古い。

走向 今回の調査箇所ではほぼ南北に走向する。

規模 幅1.55～1.65m 深さ0.70m 調査長5.50m

形状 断面形が逆台形をなす。

埋没土 下層は周壁の崩落土で埋没し、中～上層はAs-Bを含む砂質土で埋没している。

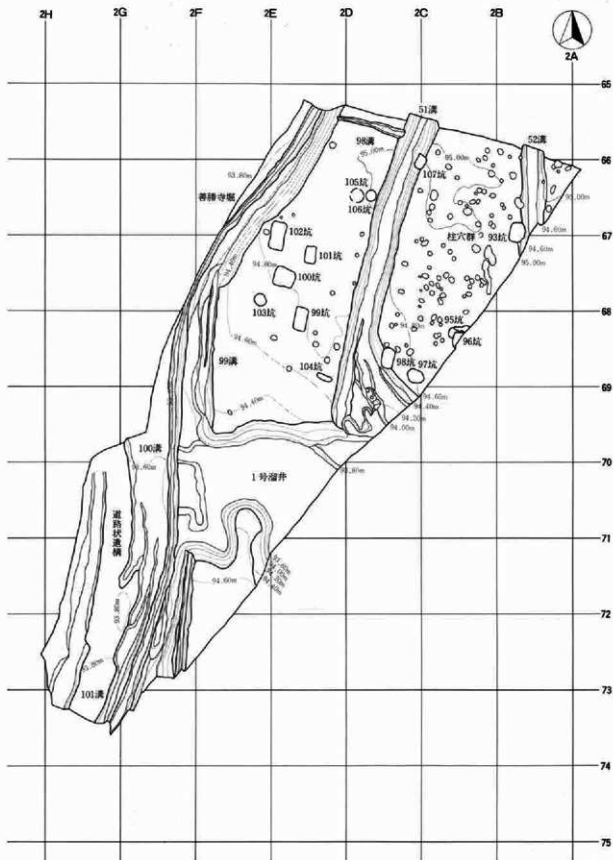
出土遺物 埋没土中より6～10世紀の土師器の小片を中心とする遺物が約50点出土した。

調査所見 断面形が箱掘り状をなすAs-B降下以降As-A降下以前の時期の用水路と考えられる。

98号溝(第12図 図版6-1)

位置 2C-65

重複 51号溝と同時期と考えられ、善勝寺堀に切られる。



第7図 E区I面全体図 (1/250)

第2章 E区の遺構と遺物

走向 ほぼ東西に直線的に走向する。

規模 幅0.22～0.60m 深さ0.12～0.27m 調査長4.65m

形状 断面形が半円形をなし、東から西へ傾斜している。

埋没土 As-Bは混入せず粘質土で埋没している。

出土遺物 須恵器毫の小片が1点出土しただけである。

調査所見 埋没土や平面確認の状態から51号溝と同時期と考えられ、51号溝から分岐し3号河川跡方向へ水を落とす水路と考えられる。

99号溝 (第12図 図版6-2)

位置 2E-67～2F-72

重複 1号溜井より新しく善勝寺堀よりも古い。

走向 2ヶ所で距離をおいて確認されたが、南北にほぼ直線的に走向する。

規模 幅0.44～0.77m 深さ0.15～0.42m 調査長14.50m

形状 幅が狭く断面形は箱掘り状をなす。

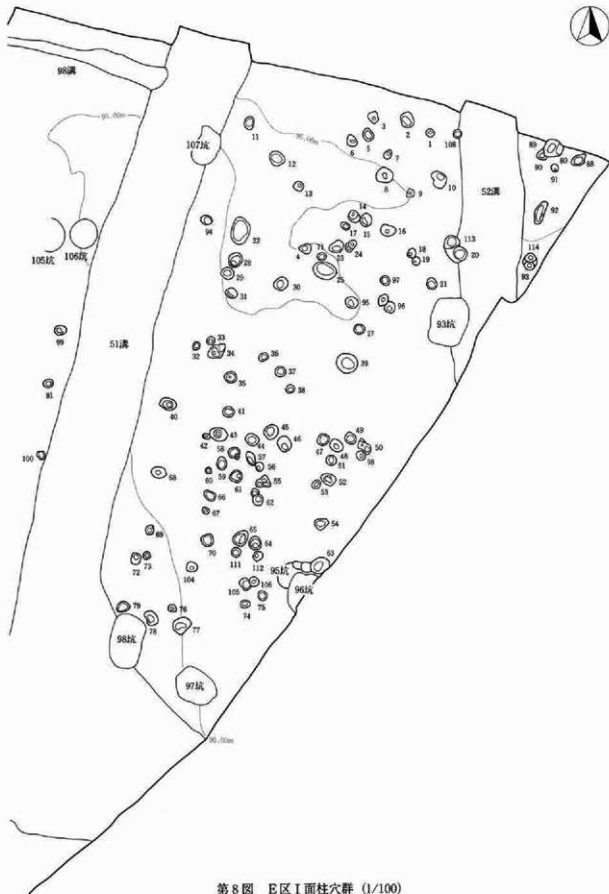
埋没土 粘質土と砂質土が互層をなすラミナ状堆積をなす。

出土遺物 9～10世紀を中心とする土器小片が約40

E区I面柱穴集計表

(単位:cm)

番号	平面形	規模	深さ	柱穴径	番号	平面形	規模	深さ	柱穴径	番号	平面形	規模	深さ	柱穴径
1	円	24×21	-10		39	円	56×52	-20		77	方	48×39	-38	
2	方	40×33	-35		40	円	44×31	-26		78	円	43×29	-11	
3	方	30×26	-23	14	41	円	30×26	-13		79	円	36×29	-15	
4	円	32×27	-6		42	円	19×15	-21		80	円	22×15	-56	
5	円	34×29	-26		43	円	48×37	-44		81	円	26×23	-8	
6	方	28×26	-14		44	円	35×29	-39		82	方	17×17	-27	
7	円	23×22	-31		45	円	41×37	-37	20	83	円	33×31	-9	
8	円	46×42	-68	16	46	円	41×33	-38	18	84	円	28×25	-11	
9	方	23×23	-26		47	円	35×31	-34		85	方	37×36	-11	
10	円	46×35	-38		48	円	37×32	-47		86	円	43×42	-8	
11	円	33×26	-22		49	方	30×28	-11		87	方	58×32	-8	
12	円	40×36	-29		50	円	43×15	-20		88	円	43×28	-3	
13	方	28×23	-41		51	円	27×27	-16		89	方	50×48	-42	
14	方	32×30	-44		52	円	39×28	-24	14	90	円	30×22	-14	
15	円	34×32	-18		53	円	27×24	-14		91	円	21×17	-5	
16	円	39×29	-34		54	円	38×27	-22		92	円	62×24	-9	
17	円	25×18	-14		55	円	25×22	-11		93	円	33×23	-36	
18	円	24×24	-20	16	56	円	23×21	-27		94	円	30×27	-3	
19	円	22×20	-20	18	57	円	39×21	-12		95	円	34×28	-3	
20	円	37×36	-71		58	円	31×27	-20		96	円	35×25	-26	
21	円	30×27	-9		59	円	36×27	-17		97	円	28×24	-12	10
22	方	65×49	-32		60	方	17×16	-15	12	98	円	25×23	-26	
23	円	38×31	-14		61	円	32×32	-25	99	円	33×23	-29		
24	円	34×22	-10		62	円	44×29	-38		100	円	24×21	-16	
25	円	64×45	-6		63	円	53×42	-24		101	円	41×39	-14	
26	方	31×28	-32		64	円	36×32	-42		102	円	17×16	-19	
27	円	28×26	-19		65	円	45×35	-35	18	103	円	39×36	-23	
28	円	42×36	-22		66	円	34×22	-19		104	円	28×25	-31	
29	円	35×31	-24		67	円	20×18	-8		105	方	33×24	-17	
30	円	37×36	-16		68	円	41×30	-20		106	円	27×27	-25	
31	円	33×30	-36		69	方	24×21	-41	16	107	円	24×19	-35	14
32	円	22×20	-33		70	円	31×31	-17		108	円	23×23	-27	
33	円	21×19	-32		71	円	22×19	-3		109	円	33×31	-12	
34	方	57×36	-40		72	方	28×24	-41		110	円	42×32	-8	
35	円	32×29	-20		73	円	19×19	-25	12	111	円	26×26	-18	
36	円	25×22	-10		74	円	25×23	-28		112	方	27×24	-11	
37	円	28×27	-21		75	円	26×25	-24		113	円	46×34	-57	
38	円	25×25	-15		76	円	24×20	-10		114	円	34×23	-38	



第8図 E区I面柱穴群 (1/100)

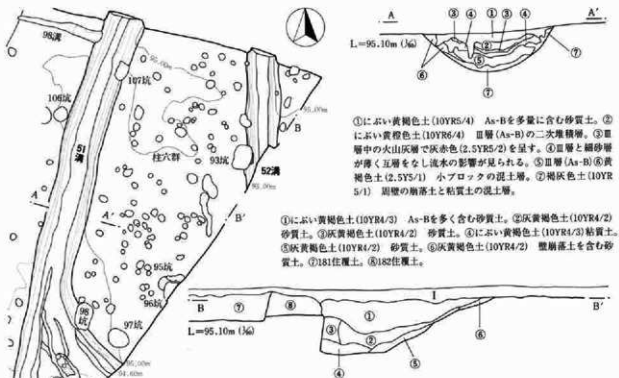
第2章 E区の遺構と遺物



※断面位置は左が西方向、右が東方向となる。L=95.20m

第9図 E区I面柱穴断面(1/60)

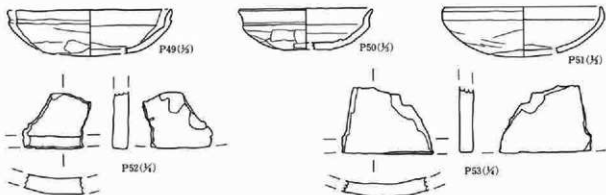
第1節 I面の遺構と遺物



①にぶい黄褐色土(10YR5/4) As-Bを多量に含む砂質土。②にぶい黄褐色土(10YR6/4) Ⅲ層(As-B)の二次堆積層。③Ⅲ層中の火山灰層で灰赤色(2.5YR5/2)を呈す。④Ⅲ層と細砂層が薄く互層をなし流水の影響が見られる。⑤Ⅲ層(As-B)⑥黄褐色土(2.5Y5/1) 小ブロックの混土層。⑦褐灰色土(10YR 5/1) 崩壊の崩落土と粘質土の混土層。

①にぶい黄褐色土(10YR4/3) As-Bを多く含む砂質土。②灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質土。③灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質土。④にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘質土。⑤灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質土。⑥灰黄褐色土(10YR4/2) 壁崩落土を含む砂質土。⑦181住履土。⑧182住履土。

第10図 51・52号溝 (1/200)



第11図 51号溝出土遺物 (1/3・1/4)

点出土した。

調査所見 善勝寺堀と走向を同じく善勝寺堀に先行する用水路と考えられる。

100号溝 (第12図 図版6-2)

位置 2 D-65~2 F-67~2 G-13

重複 1号溜井より新しく、101号溝・善勝寺堀よりも古い。

走向 北東から南東へ緩やかに蛇行して走向する。

規模 幅0.36~0.90m 深さ0.21~0.51m 調査長43.00m

形状 幅が狭く断面形は箱掘り状をなす。

埋没土 V層を主体とした両壁崩落による粘質土で埋没している。

出土遺物 弥生時代後期~平安時代の土器小片が約80点出土した。

第2章 E区の遺構と遺物

調査所見 99号溝と同様の溝と考えられる。

101号溝 (第12図 図版6-2)

位置 2F-71～2G-73

重複 100号溝より新しく善勝寺堀よりも古い。

走向 99・100号溝に平行し緩やかに弧を描いてほぼ南北に走向する。

規模 幅0.28～0.80m 深さ0.05～0.10m 調査長12.50m

形状 善勝寺堀による削平が著しい。底面の断面形は緩やかな半円形をなす。

埋没土 100号溝と同様の粘質土で埋没。

調査所見 99～101号溝は善勝寺堀に先行する同一機能を持った小水路と考えられ、ほぼ同一箇所を掘り直して走向している。この3条の溝の南端部ではさらに数回の改修の痕跡が認められた。

3 道路状遺構 (第12図 図版6-3)

染谷川左岸堤防下で現河川に切られる状態の道路面と考えられる硬化面が1条確認された。

位置 2G-70～2G-73

重複 なし。

走向 染谷川左岸堤防や善勝寺堀と同じ走向で、ほぼ南北で緩やかな弧を描いて走向する。

確認範囲 幅1.30～1.80m 長さ15.60m

確認面 硬化面はAs-Aを含む砂質土を基盤とし、概ね3層に分かれる厚さ0.15mの面が硬化していた。

出土遺物 近代の所産と思われる染付片を含む陶磁器小片5点と平安時代の土器小片約30点が出土した。

調査所見 染谷川と善勝寺堀との間にある現堤防上の道路に先行する近代の道路面と考えられる。

4 溜井

1号溜井 (第13・14図 図版7-1・2, 50-2)

位置 2D～2F-69～71

重複 東半部は調査範囲外となり西方排水部は99～101号溝や善勝寺堀により切られている。また、Ⅱ

面179号住居跡より新しい。

形状 全体形状は不明であるが、3号河川跡に面する台地縁辺を大きく掘り込んで構築している。底面は平坦で周壁は緩やかに立ち上がる。土層断面の所見からは大きく2回に分けて掘り込まれ、南半部が古く北半部が新しい。また、周壁底面に沿って3ヶ所の湧水井戸が掘り込まれていた。これらの井戸は平面形が楕円形をなし、規模は0.60×1.00m、深さ0.20～0.57mである。また、溜井の西端は排水部となっており改修に合わせて2条の溝が西方へ延びていた。

規模 東西8.70+m 南北8.60+m 深さ0.55～0.75m

埋没土 南半部の古い溜井はV層を多く含む粘質土で埋没しており、北半部の新しい溜井はⅣ・Ⅴ層を多く含む粘質で埋没し、両者の厚さは0.30～0.50mである。これらの埋没土の上部をAs-Bの純層が覆っていた。

出土遺物 埋没土中からは古墳時代後期～平安時代の約900点の土器小片が出土した。特に北東隅にある湧水井戸周辺から集中して出土した。

調査所見 1号溜井は近辺の平安時代集落が廃絶された後、As-B降下直前に51号溝とともに構築された灌漑用の遺構と考えられる。3号河川跡とは底面で0.80m、As-B降下時で0.70mの比高差があり、3号河川跡が埋没した後台地縁辺部に構築され、3号河川跡沿いの低地を利用して排水部より溝を掘削し、下流部に給水したものと考えられる。

2号溜井 (第13図)

位置 2F-72

重複 100号溝・善勝寺堀より古い。

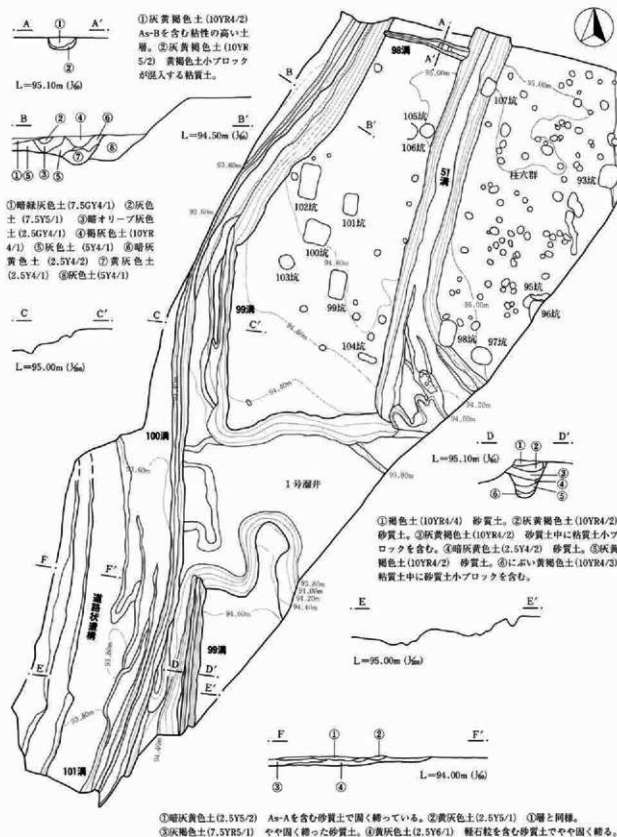
形状 西半部が不明であるが台地縁辺部を半円形に掘り込んでいる。

規模 東西1.42+m 南北1.65m 深さ0.43m

埋没土 1号溜井の古い方と同様の埋没土。

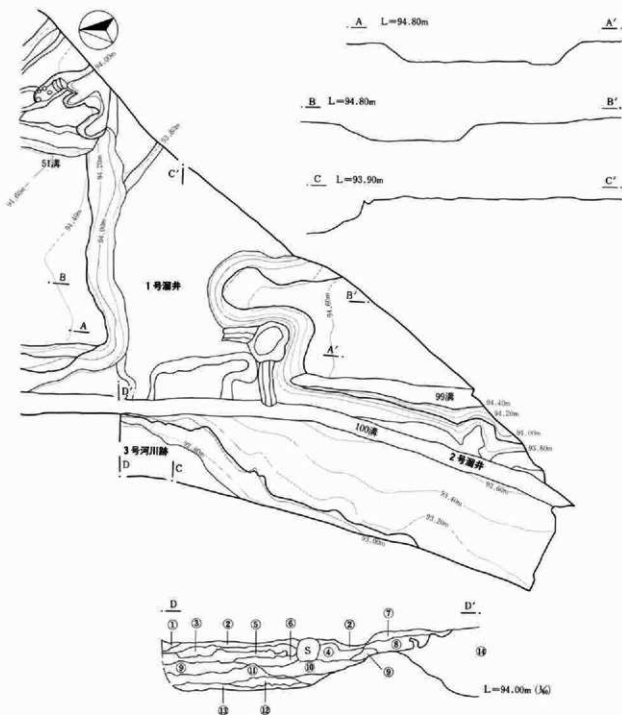
出土遺物 なし。

調査所見 1号溜井内にある湧水井戸と同様の形



第12図 98-101号溝・道路状遺構 (1/200)

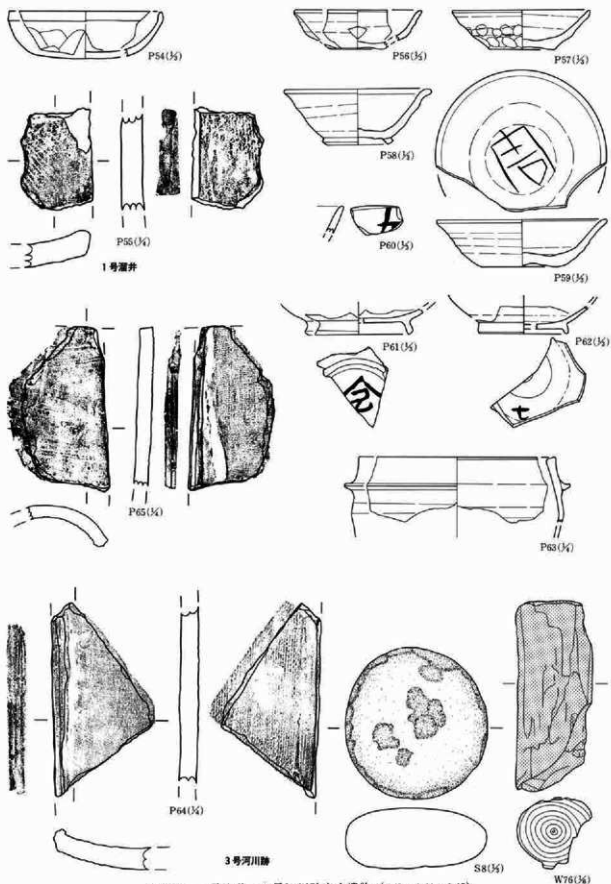
第2章 E区の遺構と遺物



①黄灰色土 (2.5Y4/1) As-Cを少量含む粘質土。②暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 粘性の低い土層。③灰黄褐色土 (10YR5/2) As-Cを少量含む砂質土。④灰黄褐色土 (10YR4/2) 炭化物粒を極少量含む粘質土。⑤黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘質土。⑥灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘質土。⑦灰黄褐色土 (10YR4/2) As-Cを極少量含む粘質土。⑧黄灰色土 (2.5Y4/1) As-Cを少量含む粘質土。⑨黄灰色土 (2.5Y4/1) 細砂質土層。⑩灰黄色土 (10YR4/2) 炭化物の小ブロックを含む粘質土。⑪黄灰色土 (10YR4/1) 炭化物小ブロックを含む粘質土。⑫黄灰色土 (2.5Y4/1) 粒子の密な砂質土中に小円礫が少量混入。⑬黄灰色土 (2.5Y4/1) 砂質土。⑭黄灰色土 (2.5Y4/1) 小円礫を多量に含む砂質土。⑮2号河川跡覆土。

第13図 1・2号掘井・3号河川跡 (1/200)

第1節 1面の遺構と遺物



第14図 1号溜井・3号河川跡出土遺物 (1/3・1/4・1/6)

第2章 E区の遺構と遺物

状・規模であり、覆土や構築位置等から溜井と考えられた。時期も1号溜井と同時期と推定される。

5 3号河川跡 (第13・14図 図版7-3・50-3・51-1)

位置 2G-69～2G-71

重複 道路状遺構が上層にのり染谷川によって西半部を切られている。2号河川跡より新しい。

走向 やや蛇行しながら南北に走向するものと推定される。

形状 底面は平坦で東岸は緩やかに立ち上がる。

規模 幅2.70+m 深さ0.42m 調査長13.20m

埋没土 小礫を含む砂質土と粘質土が粗く互層をなして堆積、最上層にAs-Bの純層堆積がのっている。

出土遺物 埋没土中より弥生時代後期～平安時代の約1040点の土器片や石器類が出土したが、主体をなす遺物は10世紀代のものであった。新保庵寺に近接するところから「周」の刻書土器や「会」「×□七」の墨書土器とともに瓦片33点が出土した。

調査所見 3号河川跡は染谷川の旧河道と考えられ、10世紀前後に変流してE区平安時代集落に近付き、As-B降下時には埋没したものと考えられる。

6 土坑

14基の土坑が確認され、柱穴群と同様にE区の北半部に分布している。しかし、柱穴群が北東部に集中するのに対して、土坑群は概ね西半部や南辺にあり、柱穴群の周辺に分布している。

形状は長方形をなすものが7基、円形が6基、長楕円形が1基で、形状ごとに規模も大きな変化はない。また、すべての土坑の埋没土にはAs-Bが混入していた。出土遺物は平安時代を中心とする土器小片が少量ずつ出土しているが時期を示すものではなく、103号土坑より1点だけ近世陶磁器小片が出土した。土坑の時期は柱穴群と同様と考えられ、性格は不明である。

93号土坑 (第15図 図版8-1)

22

位置 2A-66

重複 52号溝より新しい。

形状 隅丸長方形をなし断面形は逆台形をなす。

規模 1.60×1.22m 深さ0.85m

長軸方位 N-22°-E

埋没土 As-Bを含むブロックの混土層で埋没。一時期に埋没した様相を示す。

出土遺物 土師器小片6点が出土した。

95号土坑 (第15図 図版8-2)

位置 2B-68

重複 96号土坑より古く63号柱穴より新しい。

形状 円形をなすと推定される。

規模 0.73×0.39+m 深さ0.10m

埋没土 As-Bを含む粘質土で埋没。

出土遺物 土師器小片1点。

96号土坑 (第15図 図版8-2)

位置 2B-68

重複 95号土坑より新しい。

形状 東半部は調査区外となるが円形をなすと推定される。

規模 1.14×0.50+m 深さ0.27m

埋没土 粘質土のブロックで埋没。

出土遺物 土師器小片2点出土。

97号土坑 (第15図 図版8-3)

位置 2C-68

重複 柱穴より新しい。

形状 楕円形をなす。

規模 1.16×0.86m 深さ0.19m

長軸方位 N-63°-W

埋没土 As-Bを含む粘質土で埋没。

出土遺物 土師器・須恵器の小片12点と砥石片1点出土。

98号土坑 (第15図 図版8-5・6)

位置 2C-68

重複 51号溝より新しい。

形状 隅丸長方形をなし断面形は箱形をなす。

規模 1.40×0.83m 深さ0.56m

長軸方位 N-18°-E

埋没土 As-Bを含む粘質土のブロックで埋没。一時期に埋没した様相を示す。

出土遺物 なし。

99号土坑 (第15図 図版8-4)

位置 2D-68

重複 なし。

形状 長方形をなし断面形は箱形をなす。

規模 1.50×0.83m 深さ0.16m

長軸方位 N-13°-E

埋没土 As-Bを含む砂質土で埋没。

出土遺物 土師器・須恵器の小片54点と砥石片1点出土。

100号土坑 (第15図 図版8-7)

位置 2D-67

重複 なし。

形状 隅丸方形をなし断面形は箱形をなす。

規模 1.40×1.17m 深さ0.20m

長軸方位 N-65°-W

埋没土 As-Bを含む砂質土のブロックで埋没。

出土遺物 土師器の小片3点出土。

101号土坑 (第15図)

位置 2D-67

重複 なし。

形状 長方形をなし断面形は箱形をなす。

規模 1.12×0.73m 深さ0.12m

長軸方位 N-10°-E

埋没土 As-Bを含む砂質土で埋没。

出土遺物 土師器・須恵器の小片3点出土。

102号土坑 (第15図 図版8-8)

位置 2D-67

重複 なし。

形状 長方形をなし断面形は箱形をなす。

規模 1.77×0.93m 深さ0.26m

長軸方位 N-16°-E

埋没土 As-Bを含む砂質土で埋没。

出土遺物 土師器・須恵器の小片18点出土。

103号土坑 (第15図)

位置 2E-67

重複 なし。

形状 円形をなし底面は平坦で周壁は緩やかに立ち上がる。

規模 0.74×0.71m 深さ0.28m

埋没土 As-Bを含む砂質土で埋没。

出土遺物 近世陶磁器小片と土師質土器小皿小片と須恵器碗小片各1点出土。

104号土坑 (第15図)

位置 2D-68

重複 なし。

形状 長楕円形をなし底面に傾斜を持つ。

規模 1.03×0.35m 深さ0.17~0.05m

長軸方位 N-68°-W

埋没土 粘質土で埋没。

出土遺物 土師器小片1点出土。

105号土坑 (第15図)

位置 2C-66

重複 西半部を攪乱されている。

形状 円形をなし底面は平坦。

規模 0.95×0.43m 深さ0.04m

埋没土 As-Bを含む砂質土で埋没。

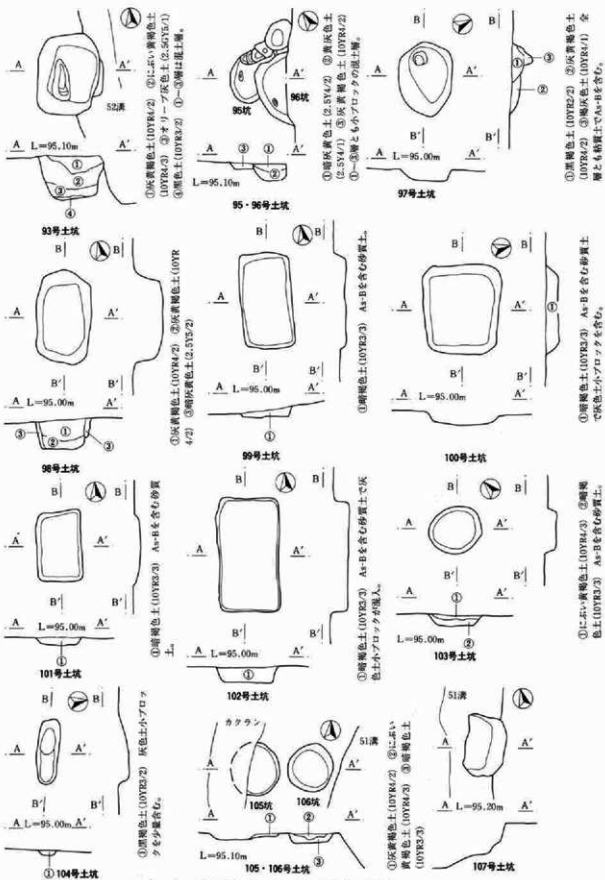
出土遺物 なし。

106号土坑 (第15図)

位置 2C-66

重複 なし。

形状 円形をなし底面は平坦。



第15図 93・95-107号土坑 (1/60)

規模 0.78×0.73m 深さ0.16m
埋没土 As-Bを含む砂質土で埋没。
出土遺物 土師器・須恵器の小片5点出土。

107号土坑 (第15図)

位置 2C-66
重複 51号溝より新しい。
形状 隅丸長方形をなすと推定され、断面形は箱形をなす。
規模 0.95×0.64m 深さ0.51m
長軸方位 N-28°-E
埋没土 As-Bを含む粘質土で埋没。
出土遺物 なし。
なお、94号土坑は欠番である。

第2節 II面の遺構と遺物

1 住居跡

II面では7世紀後半～10世紀代の竪穴住居跡が23軒確認された。これらの住居群はII面全域に重複して分布しているが1号円形周溝遺構と重複するものはない。住居跡は一辺が4～5mの長方形をなし東カマドを持ち、柱穴・周溝はない。これらの住居群は6世紀前半の地形変化後、7世紀後半～10世紀代まで連続と続く新保・新保田中村前遺跡集落の一部である。

179号住居跡 (第17・18図 図版11-1-3, 52-1)

位置 2E-71
重複 1号溜井より古く180号住居跡より新しい。
形状 東壁寄りの部分は調査区外で北西隅が1号溜井に切られているが、東西に長軸を持つ隅丸長方形をなすと考えられる。
長軸方位 N-58°-E
規模 2.93×2.66m
埋没土 焼土と炭化物を少量含む粘質土で埋没。
壁 0.05～0.14mの高さが確認され、やや斜めに立ち上がる。

周溝 なし。
柱穴 なし。
床面 カマド前がやや高く他は平坦で全面がやや固く締まっていた。
貯蔵穴 なし。
カマド 位置 焚き口部分だけが確認され南東隅に位置している。規模 焚き口幅0.43m 奥行不明。遺存状態 焚き口には高さ0.15mの河原石を用いた2本の袖石が直立していた。燃焼面からカマド前床面には厚さ0.05mの灰が堆積し、周壁は焼けて固くなっていた。遺物出土状態 出土遺物なし。
掘り方 約0.14mほど凹凸を持って掘り込まれ、4本の小ビットと東壁寄りの2ヶ所に楕円形をなす床下土坑が検出された。

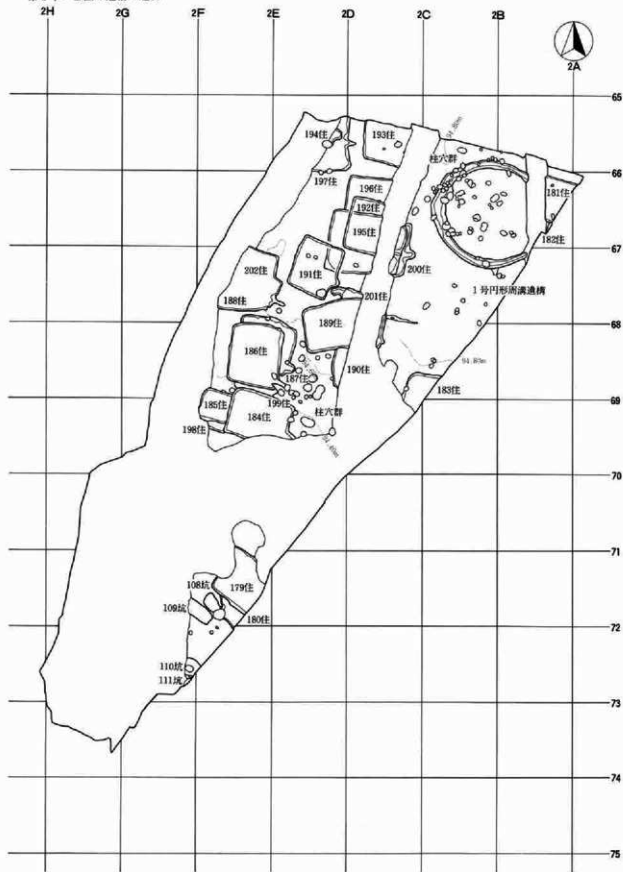
遺物出土状態 カマド前床面や南壁寄り床面から須恵器塊の小片が集中して出土した。埋没土からは須恵器塊や羽釜の小片が約60点出土した。掘り方からは土師器甕の小片を中心とする遺物が約90点出土した。

時期 出土遺物や重複関係から9世紀後半の住居跡と考えられる。

180号住居跡 (第17図 図版11-1・3)

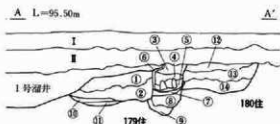
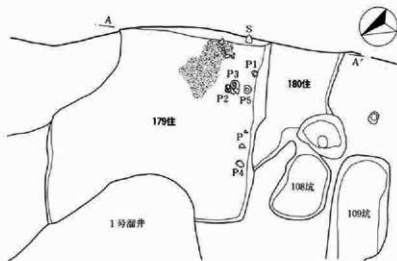
位置 2E-71
重複 179号住居跡より古い。
形状 東半部は調査区外となり北半部は179号住居跡に切られているため形状不明。
長軸方位 不明。
規模 2.35×1.12+m
埋没土 焼土と炭化物を極少量含む粘質土で埋没。
壁 0.05～0.12mの高さが確認されやや斜めに立ち上がる。
周溝 なし。
柱穴 なし。
床面 やや軟弱で平坦。
貯蔵穴 不明。
カマド 南壁より突出する楕円形の浅い掘り込みが確認され極少量の焼土と灰が検出されたが、カマド

第2章 E区の遺構と遺物



第16図 E区Ⅱ面全体図 (1/250)

第2節 II面の遺構と遺物



覆土

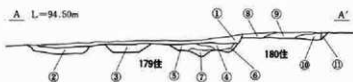
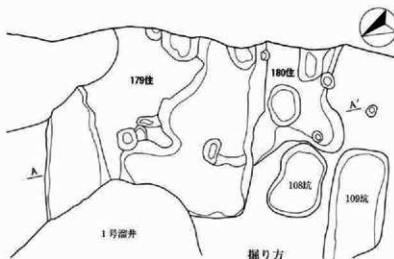
- ① 褐灰色土(10YR5/1) IV層小ブロックを多く含む粘質土。
- ② 褐灰色土(10YR4/2) 焼土粒と黒色灰小ブロックを多く含む粘質土。
- ③ 褐灰色土(7.5Y4/1) 焼土粒と炭化物粒を極少量含む粘質土。
- ④ 褐灰色土(10YR5/1) 焼土粒と炭化物粒を少量含む粘質土。
- ⑤ 黄灰色土(2.5Y4/1) 焼土を多く含む、やや砂質。

掘り方

- ⑥ 暗赤褐色土(2.5YR3/6) カマドの覆壁で赤化し固く締っている。
- ⑦ 土にぶい黄褐色土(10YR4/2) 炭化物粒を少量含む粘質土。
- ⑧ 灰黄褐色土(10YR5/2) IV層の小ブロックの混じり合った土層でやや砂質。
- ⑨ 褐灰色土(10YR4/1) ②と同質。
- ⑩ 褐灰色土(10YR4/1) 焼土粒を多量に含む。
- ⑪ 灰黄褐色土(10YR5/2) 焼土粒を少量含む。

覆土

- ⑫ 褐色土(7.5YR4/3) 焼土粒と炭化物粒を極少量含む粘質土。
- ⑬ 灰褐色土(7.5YR4/2) 炭化物粒を極少量含む粘質土。
- ⑭ 灰黄褐色土(10YR5/2) IV層小ブロックを少量含む粘質土。



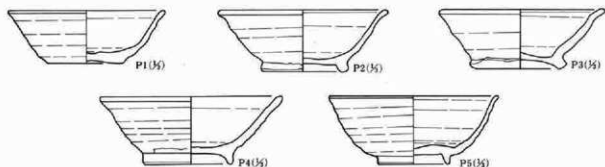
覆土

- ① 灰褐色土(10YR4/1) 灰オリーブ色土小ブロックを少量含む粘質土。

掘り方

- ② 灰褐色土(10YR5/1) 酸化鉄分が斑点状に沈着。粘質土。
- ③ 黄灰色土(2.5Y5/1) 炭化物粒が少量混入。粘質土。
- ④ 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰オリーブ色土小ブロックを多く含む粘質土。
- ⑤ 黄灰色土(2.5Y5/1) 炭化物ブロックを少量含む粘質土。
- ⑥ 灰色土(5Y5/1) 酸化鉄分が斑点状に沈着。粘質土。
- ⑦ 灰色土(7.5Y5/1) ⑥と同様で炭化物小ブロックを少量含む粘質土。
- ⑧ 灰黄褐色土(10YR5/2) 酸化鉄分が斑点状に沈着。粘質土。
- ⑨ 土にぶい黄褐色土(10YR5/3) 灰色土小ブロックと焼土粒が混入。粘質土。
- ⑩ 灰色土(10Y6/1) 黄褐色の酸化鉄分が沈着。粘質土。
- ⑪ 灰オリーブ色土(5Y6/2) IV層小ブロックを多く含む粘質土。

第17図 179・180号住居跡 (1/60)



第18図 179号住居跡出土遺物 (1/3)

となる確証は得られなかった。

掘り方 楕円形をなす2基の床下土坑が検出された。

遺物出土状態 埋没土中より羽釜の口縁部小片が1点出土した。

時期 179号住居跡よりも古い9世紀代の住居跡と推定される。

181号住居跡 (第19・20図 図版11-4, 52-2)

位置 2A-66

重複 52号溝より古く182号住居跡より新しい。

形状 東半部は調査区外で西端部は52号溝に切られているため形状不明。

長軸方位 不明。

規模 2.84×2.17+m

埋没土 小ブロックが混入した粘質土で埋没。

壁 0.16~0.21mの高さが確認されほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で全面が固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

カマド 不明。

掘り方 全面的な掘り込みはないが、北西隅で不整楕円形で断面形が灌鉢状をなす規模0.89×0.68mで深さ0.25mの床下土坑が検出された。

出土遺物状態 埋没土中より土師器杯・甍片約10点と磨石1点が出土した。

時期 出土遺物により7世紀後半の住居跡と考えられる。

182号住居跡 (第19図 図版11-4)

2A-66で181号住居跡と52号溝に切られ大半が調査区外となる住居跡の一部を確認した。確認された部分は西壁の一部とわずかな床面だけである。西壁は高さ0.14mで床面は貼り床され深さ0.15mの掘り方を持つ。出土遺物は掘り方より土師器の小片7点が出土しただけである。6~7世紀の住居跡と推定される。

183号住居跡 (第21・22図 図版11-5~8, 52-2)

位置 2B-68

重複 51号溝・96号土坑・191号柱穴より古い。

形状 東半部は調査区外で南半部は51号溝に切られているため形状不明。

長軸方位 不明。

規模 2.67×1.78+m

埋没土 下層に炭化物を少量含む粘質土で埋没。

壁 0.30mの高さが確認されやや斜めに立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

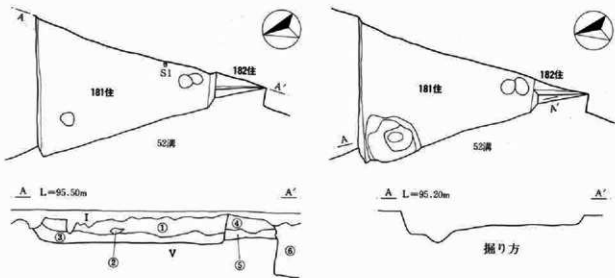
床面 平坦で薄く貼り床され全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

カマド 不明。

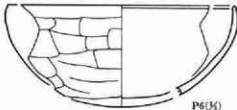
掘り方 全面が凹凸を持って0.05~0.14m掘り込まれていた。

遺物出土状態 埋没土中から土師器・須恵器の杯・甍片が約90点出土した。掘り方からも同様の遺物が

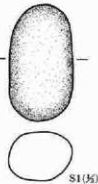


①暗灰黄色土(2.5Y5/2) 軽石小ブロックを少量含む粘質土。②灰黄褐色土(10YR5/2) 軽石を多く含む砂質土ブロック。③灰黄褐色土(10YR4/2) 黒褐色土小ブロックを少量含む粘質土。④灰黄褐色土(10YR5/2) 軽石粒を少量含む。⑤灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土。⑥52号溝覆土。

第19図 181・182号住居跡 (1/60)



第20図 181号住居跡出土遺物 (1/3)



約60点出土した。

時期 出土遺物から8世紀前半と考えられる。

184号住居跡 (第23～25図 図版12-1～4, 52-3)

位置 2E-69

重複 1号溜井より古く185・198・199号住居跡より新しい。

形状 東西に長軸を持つ長方形をなす。

長軸方位 N-72'-W

規模 4.13×3.16m

埋没土 V・VI層小ブロックを含む粘質土で埋没。

壁 0.05mの高さが確認された。

周溝 なし。

柱穴 なし。

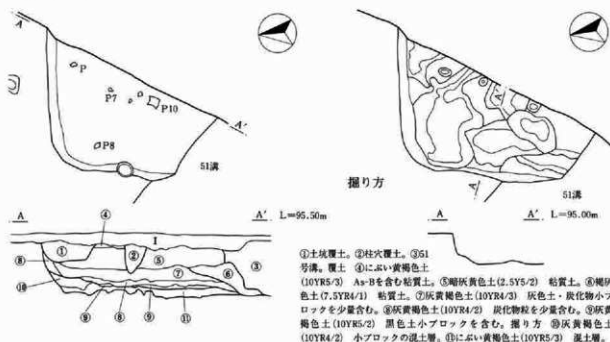
床面 平坦で全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

カマド 位置 南壁を1号溜井で切られているが、東壁の中央寄りに位置する。形状 東壁より楕円形に突出する。規模 焚き口幅0.48+m 奥行0.74m 遺存状態 燃焼面がやや焼けており、焼土ブロックが散乱していた。また、浅い掘り方を持つ。遺物出土状態 羽釜の小片7点が燃焼面より出土した。

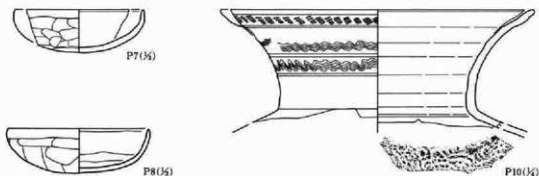
掘り方 中央部は掘り方がなく、周壁に沿って0.42～0.15m凹凸を持って掘り込まれている。また、楕円形の床下土坑2基がカマド前に掘り込まれていた。遺物出土状態 埋没土中より土師器・須恵器・灰輪陶器の塊や変片が約100点出土し、掘り方からは須恵器坏(P-11)が北西隅から出土し、他に埋没土と同様の小片が4点出土した。

時期 出土遺物から10世紀前半の住居跡と考えられる。



- ①土坑覆土。②柱穴覆土。③51
溝溝。覆土 ④にぶい黄褐色土
(10YR5/3) As-Bを含む粘質土。⑤暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘質土。⑥褐色
土(7.5YR4/1) 粘質土。⑦灰黄褐色土(10YR4/3) 灰土・炭化物小ブ
ロックを少量含む。⑧灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物粒を少量含む。⑨灰黄
褐色土(10YR5/2) 黒色土小ブロックを含む。掘り方 ⑩灰黄褐色土
(10YR4/2) 小ブロックの混土層。⑪にぶい黄褐色土(10YR5/3) 混土層。

第21図 183号住居跡 (1/60)



第22図 183号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

185号住居跡 (第23-25図 図版12-1・2, 52-3)

位置 2E-69

重複 184号住居跡より古く198号住居跡より新しい。

形状 隅丸方形をなす。

長軸方位 N-69°-W

規模 2.04×1.96m

埋没土 V・VI層小ブロックを含む粘質土で埋没。

壁 0.45-0.14mの高さが確認されほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で全面がやや軟弱であった。

貯蔵穴 なし。

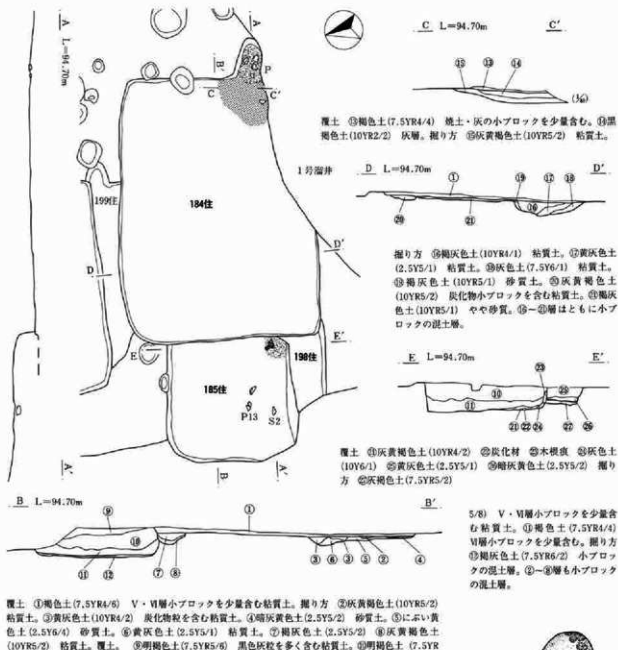
カマド 南東隅に灰が薄く堆積しており近くにカマドがあったと考えられるが確認できなかった。

掘り方 なし。

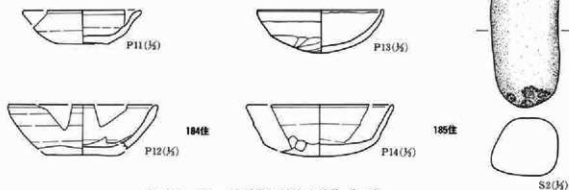
遺物出土状態 薦編石1点と土師器・須恵器の坏片3点が南壁寄り中央部床面から出土し、埋没土中からは土師器・須恵器の坏・甕の小片が約70点出土した。

時期 出土遺物から7世紀後半の住居跡と考えられる。

第2節 II面の遺構と遺物

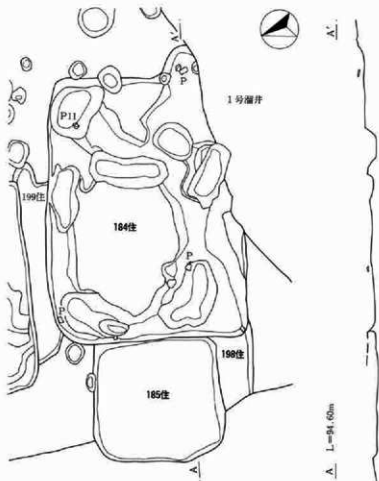


第23図 184・185・198号住居跡 (1/60)



第24図 184・185号住居跡出土遺物 (1/3)

第2章 E区の遺構と遺物



第25図 184・185・198号住居跡掘り方 (1/60)

186号住居跡 (第26～28図 図版12-5～7, 52-4, 53-1)

位置 2 E-68

重複 207号柱穴より古く187・199号住居跡より新しい。

形状 南北に長軸を持つ長方形をなす。

長軸方位 N-10°-E

規模 4.07×3.43m

埋没土 炭化物を極少量含む粘質土で埋没。

壁 0.20～0.08mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で中央部とカマド前は固く締まってい

た。

貯蔵穴 なし。

カマド 位置 南東隅に位置する。規模 焚き口幅0.48m 奥行0.43m 煙道長0.45+m 幅0.22m 遺存状態 焚き口には袖石と袖の高まりの名残が残存していた。燃焼部はあまり焼けていなかったが、煙道部は良く焼けており焼土や灰が堆積していた。遺物出土状態 土師器・須恵器の塊・瓦片6点が出土した。

掘り方 周壁に沿う部分は掘り方を持たず、中央部が0.29～0.20mの深さで凹凸を持って掘り込まれていた。また、中央部には円形で規模0.72×0.67m深さ0.13mの床下土坑1基が確認された。

遺物出土状態 床面から出土したものは東壁寄り中央部が多く、須恵器塊や羽釜片が多い。埋没土中からは土師器・須恵器の坏・塊や羽釜・瓦の小片が約230点出土した。掘り方からも同様の遺物が約80点出土した。

時期 出土遺物から10世紀前半の住居跡と考えられる。

187号住居跡(第26～28図 図版12-5・6・8, 53-1)

位置 2 D-68

重複 186号住居跡・175号柱穴より古い。

形状 大半を186号住居跡に切られているが、東西に長軸を持つ長方形と考えられる。

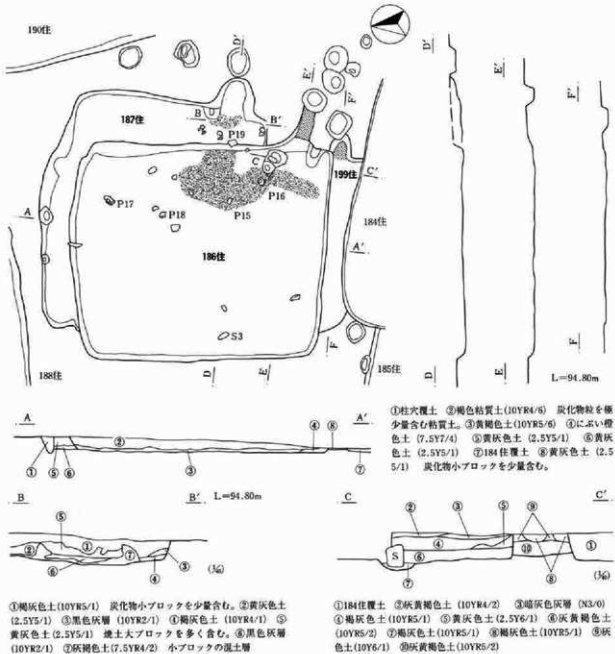
長軸方位 N-77°-W

規模 3.75×3.12m

埋没土 炭化物を少量含む粘質土で埋没。

壁 0.20～0.14mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。



第26図 186・187・199号住居跡 (1/60)

柱穴 なし。

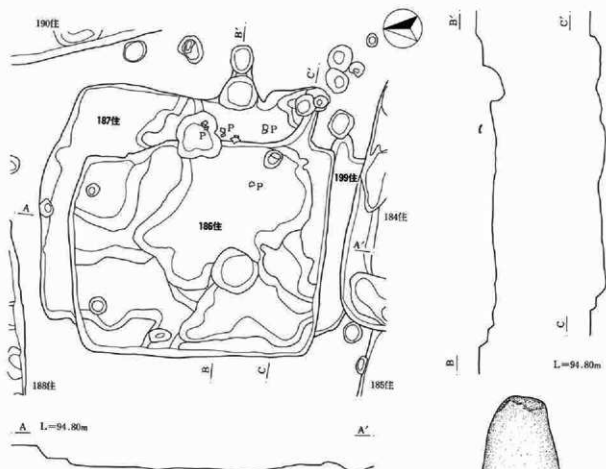
床面 平坦でカマド前は固く締まっているが他の部分は軟弱である。

貯蔵穴 不明。

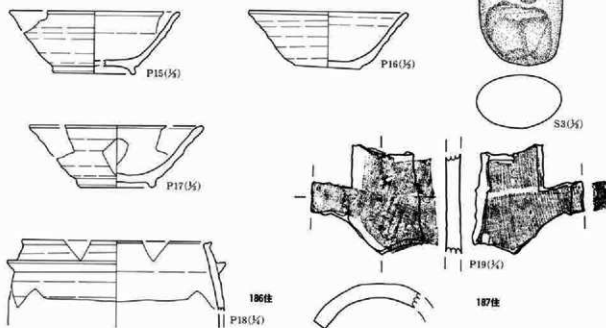
カマド 位置 南東隅に位置している。形状 東壁から楕円形状に突出している。規模 焚き口幅0.53m 奥行0.70m 遺存状態 焚き口北側には袖の高まりが残存していた。燃焼部はあまり焼けてい

なかった。カマド前床面には灰が薄く堆積していた。遺物出土状態 土師器坏片4点と羽釜片1点が出土。掘り方 部分的に掘り方を持たない所があるが、大部分は0.18-0.14m掘り込まれていた。また、カマド前には不整形円形の床下土坑1基が確認された。遺物出土状態 床面から出土したものはカマド前に集中し須恵器甕や羽釜・瓦の小片10点が出土した。埋没土中からは土師器・須恵器の坏・甕片が約20点

第2章 E区の遺構と遺物



第27図 186・187・199号住居跡掘り方 (1/60)



第28図 186・187号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

出土し、掘り方からも同様の遺物が約10点出土した。
 時期 出土遺物や重複関係から10世紀代の住居跡と
 考えられる。

188号住居跡 (第29～31図 図版13-1～4, 53-2,
 54-1)

188号住居跡と202号住居跡は調査開始時点で1軒
 の住居跡と誤認して調査を行ったため、遺物の混入
 を招きプランの確認ができなくなった部分がある。

位置 2E-67

重複 202号住居跡より古い。

形状 東壁から南壁に沿う部分が確認されただけ
 で、形状不明。

長軸方位 不明。

規模 東西3.23+m 南北0.90m

埋没土 V層小ブロックを含む粘質土で埋没。

壁 0.13mの高さが確認されほぼ垂直に立ち上が
 る。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦でやや固く締まっている。

貯蔵穴 不明。

カマド 位置 南東隅にある。形状 燃焼部がや
 や東壁より突出し、煙道がやや長く延びる。規模
 焚き口幅0.52m 奥行0.45m 煙道部長0.73m 幅
 0.20m 遺存状態 焚き口北側に軸石があり、燃焼
 部はあまり焼けていない。煙道部は良く焼けており、
 焼土と灰のブロックが堆積。燃焼面からカマド前
 にかけて灰が薄く堆積していた。また、カマド前の掘
 り方には円形のピットが掘られていた。

掘り方 南壁に沿う部分は掘り方を持たず、小ピ
 ットが7本確認された。

遺物出土状態 床面から出土したものは南壁に沿
 う部分に集中し土師器・須恵器の坏・壺・甕片や羽
 釜・瓦片が約20点出土した。埋没土や掘り方からは
 202号住居跡のものも含め、床面出土と同様の遺物
 と灰釉陶器片などが約260点出土した。

時期 出土遺物や重複関係から10世紀前半の住居跡

と考えられる。

189号住居跡 (第32～34図 図版13-6～8, 54-3)

調査段階では1軒の住居跡として扱ったが、東半
 部と西半部では床面の高さが異なること、南・北壁
 に歪みを持つこと、出土遺物が7世紀と10世紀のも
 のに大別されたこと等により、2軒の住居跡である
 ことが判明した。2軒の住居跡は中央部で平行に重
 複していたと考えられる。

189号住居跡 (東半部)

位置 2C-68

重複 51号溝より古く、西半部・190・201号住居跡
 より新しい。

形状 方形に近い形状と推定される。

長軸方位 N-10°-E

規模 3.22×3.10+m

埋没土 V層小ブロックを少量含む粘質土で埋没。

壁 0.22～0.10mの高さが確認され、ほぼ垂直に立
 ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で全面が固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

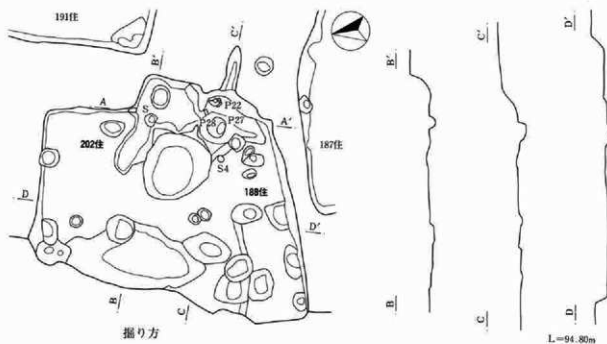
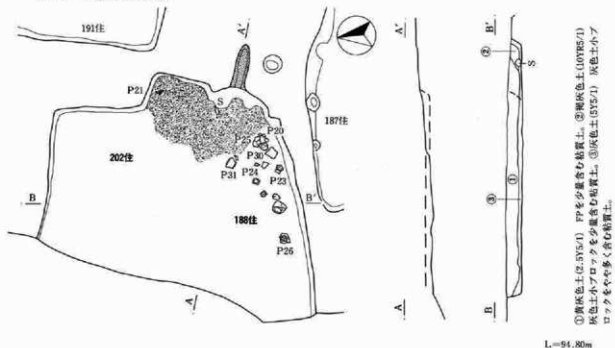
カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模
 焚き口幅0.72m 奥行0.37m 遺存状態 燃焼部奥
 壁部分と煙道の立ち上がり部分が残存するだけであ
 る。燃焼面にはわずかに焼土が散布していた。遺
 物出土状態 埋没土からは羽釜小片が掘り方から土
 師器小片が少量出土した。

掘り方 全面が0.26～0.05mの深さで凹凸を持って
 掘り込まれていた。

遺物出土状態 須恵器壺・羽釜・灰釉陶器の小片約
 20点が埋没土中より出土した。

時期 出土遺物や重複関係により10世紀代の住居跡
 と考えられる。

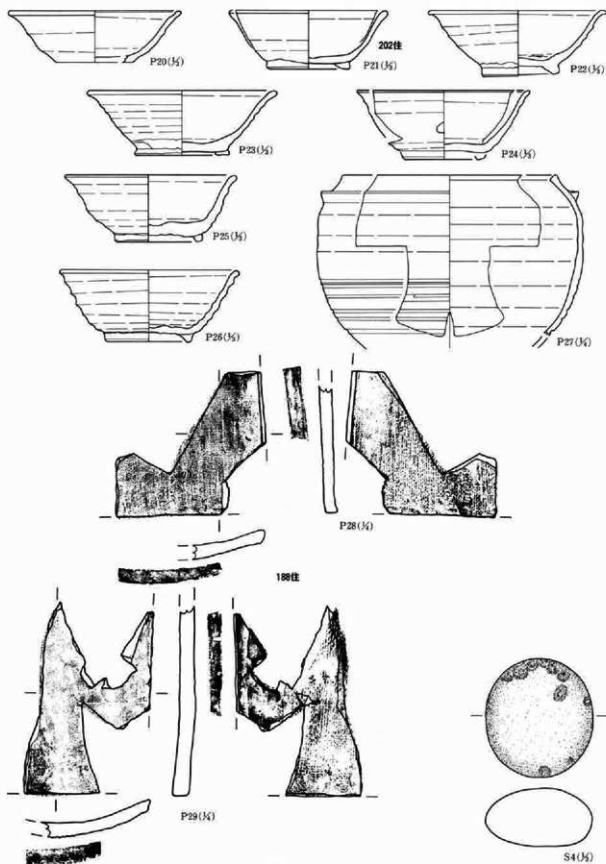
第2章 E区の遺構と遺物



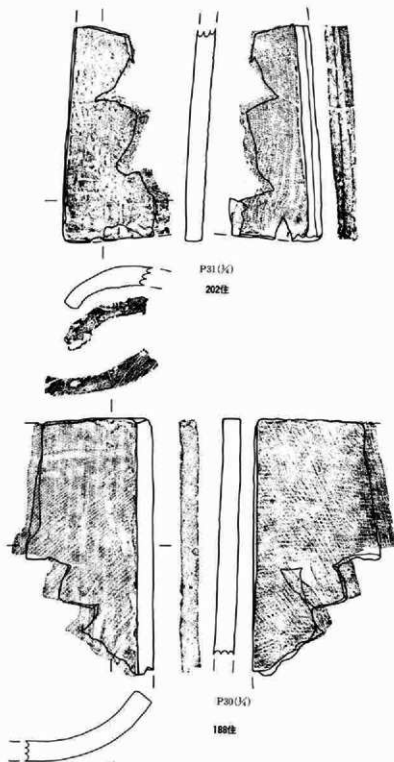
①黄灰色土(2.5Y5/1) 砂質土。②灰オリーブ色土(5Y6/2) 粘質土。③褐灰色土(10YR4/1) 黒色灰や炭化物小ブロックを多く含む、粘性の高い土層。④褐灰色土(10YR5/1) 炭化物小ブロックを少量含む粘質土。⑤灰褐色土(7.5YR5/2) 淺黄色土小ブロックを少量含む、粘性の高い土層。⑥褐灰色土(10YR6/1) 炭化物粒・淺黄色土小ブロックを少量含む粘質土。

第29図 188・202号住居跡 (1/60)

第2節 II面の遺構と遺物



第30図 188・202号住居跡出土遺物(1) (1/3・1/4)



第31図 188・202号住居跡出土遺物(2)(1/4)

189号住居跡(西半部)

位置 2D-68

重複 189(東半部)・190・201号住居跡より古い。

形状 不明。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で軟弱であった。

貯蔵穴 不明。

長軸方位 不明。

規模 2.95×2.10+m

埋没土 V層小ブロックを含む粘質土で埋没。

壁 0.21~0.15mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 ほぼ全面が固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

カマド 不明。

掘り方 掘り方を持たない部分が多く、3ヶ所で不整形の掘り込みが確認された。

遺物出土状態 埋没土中より土師器の坏・甕片が約80点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により7世紀前半の住居跡と考えられる。

190号住居跡(第32~34図 図版13-6・7, 54-2)

位置 2D-68

重複 189号住居跡(東半部)・51号溝より古い。

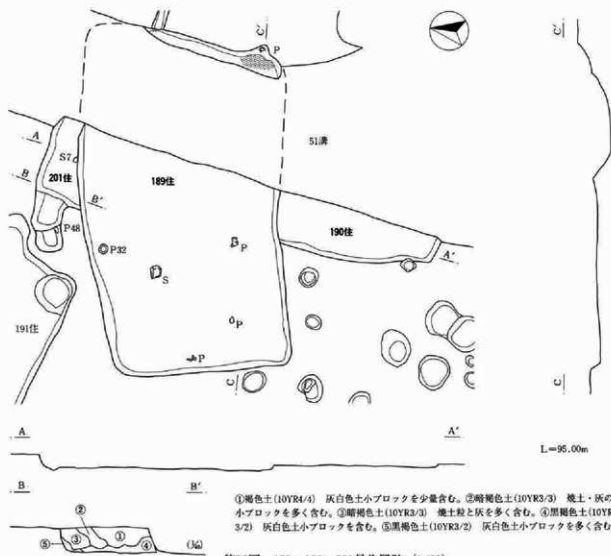
形状 不明。

長軸方位 不明。

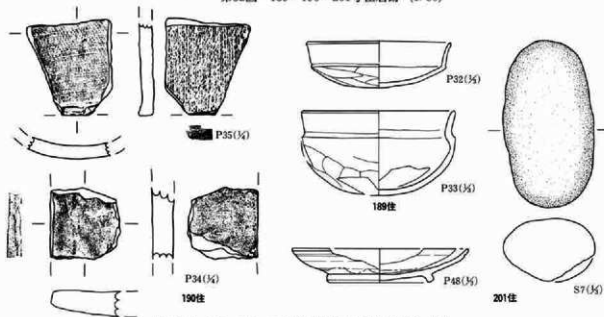
規模 2.55×0.83+m

埋没土 V層が混入した粘質土で埋没。

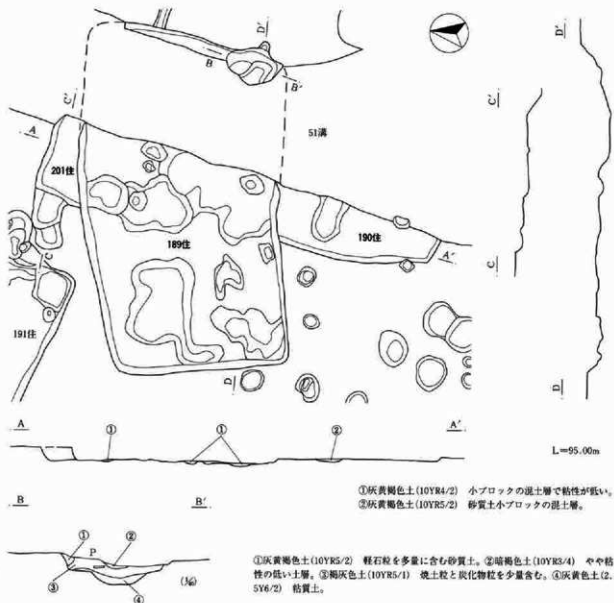
壁 0.16~0.05mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。



第32図 189・190・201号住居跡 (1/60)



第33図 189・190・201号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)



第34図 189・190・201号住居跡掘り方 (1/60)

カマド 不明。

掘り方 大部分は掘り方を持たないが、3ヶ所で小さい掘り込みが確認された。

遺物出土状態 埋没土や掘り方より須恵器甕・羽釜・灰釉陶器・瓦の小片が12点出土した。

時期 出土遺物や重複関係から9～10世紀代の住居跡と考えられる。

191号住居跡 (第35図 図版14-1～4)

位置 2D-67

重複 195・196号柱穴より古く、195号住居跡より新しい。

形状 長方形をなす。

長軸方位 N-24°-E

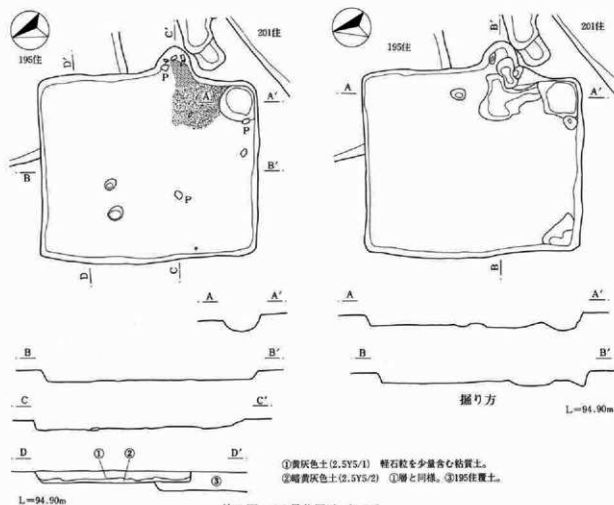
規模 3.41×3.00m

埋没土 粘質土で埋没。

壁 0.16～0.06mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。



第35図 191号住居跡 (1/60)

床面 平坦で中央部だけがやや固く締まっていた。
貯蔵穴 位置 南東隅にある。形状 円形をなす。
規模 $0.47 \times 0.46\text{m}$ 深さ 0.15m 遺物出土状態
数点の遺物が出土した。

カマド 位置 東壁の中央部寄りにある。規模
焚き口幅 0.62m 奥行 0.50m 遺存状態 東壁より
半円形に突出し、燃焼部には焼土と灰が堆積し、灰
はカマド前にも広がっていた。遺物出土状態 須
恵器破片1点と羽釜片4点が出土した。

掘り方 カマドとカマド前に掘り込みがあるが、他
の部分は掘り方は確認されなかった。

遺物出土状態 須恵器破片・羽釜・土師器片を中心と
する小片が約90点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により10世紀代の住居跡
と考えられる。

192号住居跡 (第36・37図 図版15-1・2, 55-1)

位置 2C-66

重複 51号溝より古く、195・196号住居跡より新しい。

形状 長方形をなすと推定される。

長軸方位 N-18°-E

規模 $3.50 \times 2.04\text{m}$

埋没土 V層小ブロックと灰を少量含む粘質土で埋
没。

壁 $0.22 \sim 0.16\text{m}$ の高さが確認され、ほぼ垂直に立
ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

第2章 E区の遺構と遺物

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにあったと推定される。規模 不明。遺存状態 袖石1石と灰の堆積が認められた。また、袖石の掘り方2ヶ所が確認された。遺物出土状態 須恵器陶片2点が出土した。

掘り方 なし。

遺物出土状態 床面から出土したものは須恵器碗を中心に砥石1点（S-5）がカマド前から南壁寄り中央部で出土した。埋没土からは須恵器碗・羽釜・土師器杯・甕の小片が約130点出土した。

時期 出土遺物や重複関係から10世紀前半の住居跡と考えられる。

193号住居跡（第38・39図 図版14-5～8, 55-2）

位置 2C-65

重複 51号溝より古く、前回調査の84号住居跡と重複する。

形状 不明。

長軸方位 不明。

規模 3.07×2.65+m

埋没土 軽石粒を極少量含む粘質土で埋没。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で中央部とカマド前は固く締まっていた。

貯蔵穴 掘り方調査時に南東隅で不整形の落ち込みが確認されたが明確ではなかった。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。形状 51号溝に切られ不明。規模 不明。遺存状態 袖石1石とカマド前の灰の堆積が確認され、カマド前では0.22～0.05mの掘り方が確認された。

掘り方 カマド部分を除いて掘り方は確認されなかった。

遺物出土状態 床面から出土したものはカマド前から中央部に集中し、須恵器碗や羽釜片が11点出土した。埋没土や掘り方からも同様の遺物が約30点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により10世紀前半の住居

跡と考えられる。

194号住居跡（第40図 図版15-3・4）

位置 2D-65

重複 197号住居跡より新しく、ほとんどを善勝寺堀で切られる。

形状 不明。

長軸方位 不明。

埋没土 焼土や灰を多量に含む粘質土で埋没。

壁 0.05mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 不明。

柱穴 不明。

床面 やや固く締まっていた。

貯蔵穴 位置 南東隅にある。形状 楕円形をなすと推定され2段に落ち込み、最深部は円形をなす。規模 0.71×0.47m 深さ0.60m 遺物出土状態 遺物は出土しなかった。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.55m 奥行0.55m 遺存状態 東壁より楕円形に突出する。燃焼面は強く焼けておりやや硬化していた。また、カマド前には灰がやや厚く堆積していた。深さ0.10mの掘り方を持つ。遺物出土状態 須恵器碗や羽釜の小片4点が出土した。

掘り方 カマド前で0.18mの深さで全面が平坦に掘り込まれていた。

遺物出土状態 カマド内よりすべての遺物が出土した。

時期 明確ではないが出土遺物により10世紀代の住居跡と考えられる。

195号住居跡（第41～43図 図版15-5～8, 55-3）

位置 2C-67

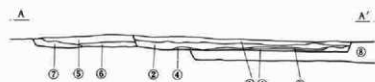
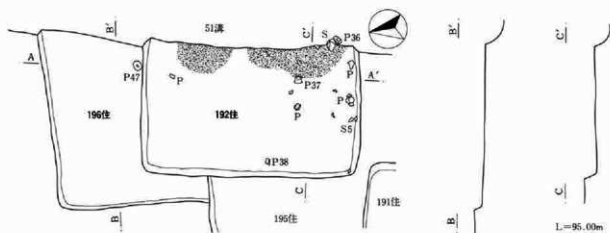
重複 191・192・196・200号住居跡・51号溝より古い。

形状 東壁に丸みのある長方形をなす。

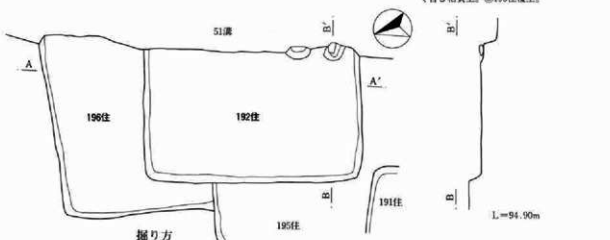
長軸方位 N-80°-W

規模 5.16×4.02m

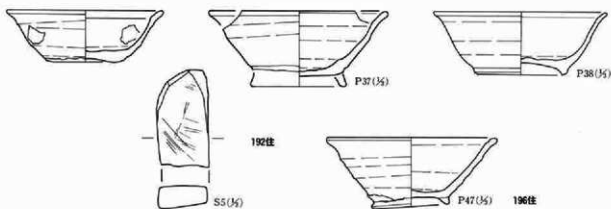
第2節 II面の遺構と遺物



①灰黄色土 (2.5Y6/2) 粘質土。②褐灰色土 (10YR6/1) 粘質土。③黒褐色土 (2.5Y2/1) 炭化物粒を多量に含む。④黒色灰層 (2.5Y3/1) 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) 粘質土。⑤黄灰色土 灰色土小ブロックを少量含む粘質土。⑦灰黄褐色土 (10YR5/2) 灰色土小ブロックを多く含む粘質土。⑧195住覆土。

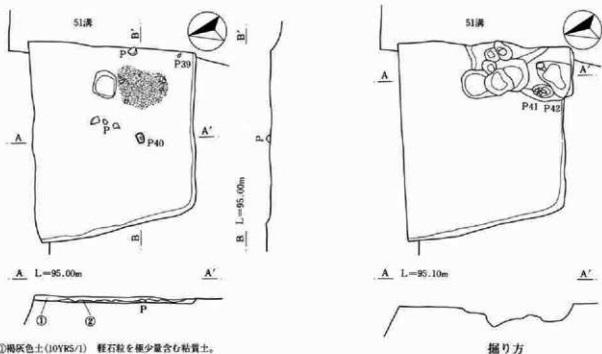


第36図 192・196号住居跡 (1/60)



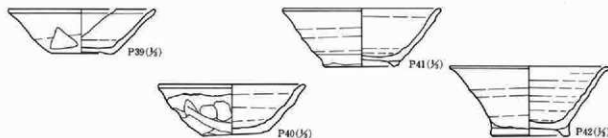
第37図 192・196号住居跡出土遺物 (1/3)

第2章 E区の遺構と遺物



- ①褐色土(10YR5/1) 軽石粒を極少量含む粘質土。
 ②灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質土。

第38図 193号住居跡 (1/60)



第39図 193号住居跡出土遺物 (1/3)

埋没土 V層を含む粘質土で埋没。

壁 0.29~0.20mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦ではほぼ全面が固く締まっていた。

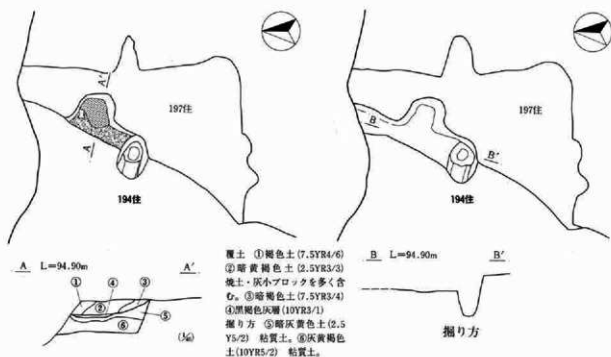
貯蔵穴 位置 南東隅にあり51号溝に切られている。形状 隅丸方形をなすと推定され底面は平坦。規模 0.93×0.55+m 深さ0.15m 遺物出土状態 土師器甕小片1点と円罐2点出土。

カマド 位置 東壁の中央部にある。規模 煙道部長1.20m 幅0.12m 遺存状態 51号溝に切れ煙道部だけが確認された。煙道部は良く焼けており

焼土ブロックが堆積していた。遺物出土状態 燃焼部と煙道部との境から土師器甕が正位で出土した。掘り方 中央部は掘り方を持たず、周壁に沿う部分が0.06~0.04mの深さで掘り込まれていた。また、円形のピットが北東隅と南東隅寄りで確認された。

遺物出土状態 床面から出土したものは土師器甕(P-45)が北東隅から逆位で須恵器壺(P-46)が北西隅寄りで出土した。埋没土中や掘り方からは土師器杯・甕片が約180点出土した。

時期 出土遺物や重複関係から7世紀後半の住居跡と考えられる。



第40図 194号住居跡 (1/60)

196号住居跡 (第36・37図 図版55-2)

位置 2C-66

重複 192号住居跡・51号溝より古く、195号住居跡より新しい。

形状 192号住居跡・51号溝に大半が切られているため不明。

長軸方位 不明。

規模 2.70+×2.33+m

埋没土 V層小ブロックを含む粘質土で埋没。

壁 0.10mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦でやや固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

カマド 不明。

掘り方 なし。

遺物出土状態 須恵器塊 (P-47) の完形が中央部床面より出土。埋没土中からは須恵器塊・甕の小片が約30点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により9世紀後半の住居

跡と考えられる。

197号住居跡 (第44・45図 図版16-1・2, 55-3)

位置 2D-65

重複 194号住居跡・167・168号柱穴より古い。

形状 善勝寺堀に大半が切られているため不明。

長軸方位 不明。

規模 4.14+×2.53+m

埋没土 V層小ブロックを含む粘質土で埋没。

壁 0.22~0.15mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

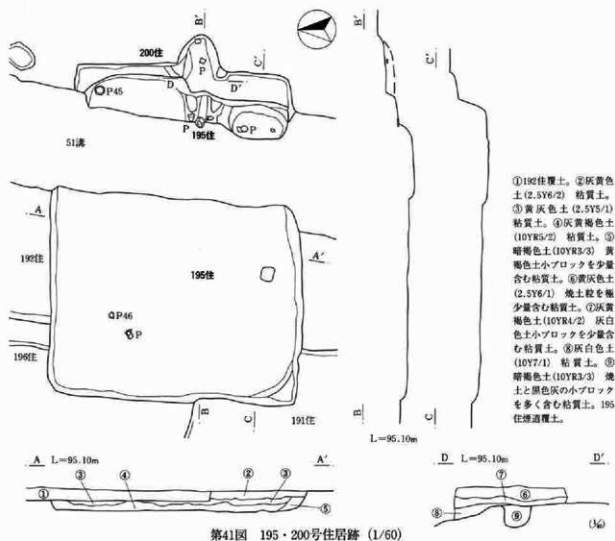
柱穴 なし。

床面 平坦でカマド前は固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

カマド 位置 東壁中央部に位置していると考えられる。規模 焚き口幅0.50m 奥行0.34m 煙道部長0.44m 幅0.30~0.17m 遺存状態 燃焼部は東壁よりわずかに突出し、煙道部はやや長く延びる。燃焼部には両袖の高まりがわずかに残る。燃焼部はやや強く焼けており、焼土や灰のブロックが堆積し

第2章 E区の遺構と遺物



第41図 195・200号住居跡 (1/60)



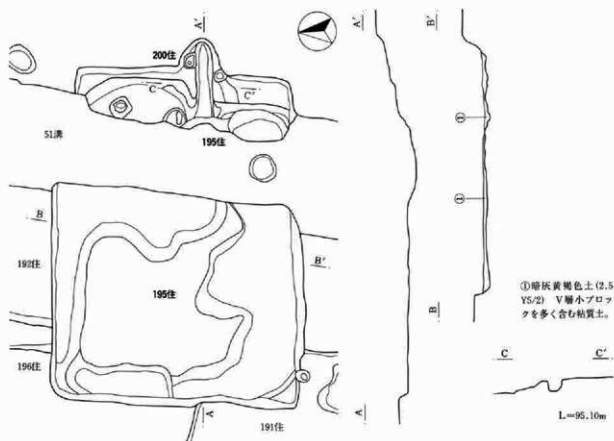
第42図 195号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

ていた。カマド前には灰が薄く堆積していた。遺物出土状態 埋没土からは土師器・須恵器の壘小片が2点出土し、掘り方から磨石(S-6)1点が出土した。

掘り方 全面が0.07~0.03mの深さでやや平坦に掘

り込まれていた。

遺物出土状態 埋没土中から土師器環・壘片が約40点出土し、掘り方からも同様の遺物が4点出土した。時期 出土遺物や重複関係から7世紀代の住居跡と考えられる。



第43図 195・200号住居跡掘り方 (1/60)

198号住居跡 (第23・25図 図版12-1・2)

位置 2E-69

重複 184・185号住居跡より古い。

形状 南壁に沿う一部を確認しただけで形状不明。

長軸方位 不明。

規模 1.23×0.55+m

埋没土 V層を多く含む粘質土で埋没。

壁 0.20mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で軟弱。薄い貼り床をなす。

貯蔵穴 不明。

カマド 不明。

掘り方 0.05mの深さで全面が掘り込まれていた。

遺物出土状態 埋没土中より須恵器妻小片が1点、

掘り方より土師器坏片が5点出土。

時期 出土遺物や重複関係から7世紀代の住居跡と考えられる。

199号住居跡 (第26・27図 図版12-5・6)

位置 2E-68

重複 184・186号住居跡より古い。

形状 184・186号住居跡に大半を切られているため形状不明。

長軸方位 不明。

規模 2.80×0.47+m

埋没土 炭化物を少量含む粘質土で埋没。

壁 0.04mの高さが確認された。

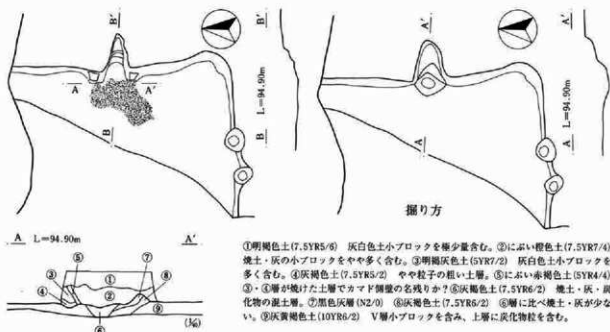
周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦でやや軟弱。

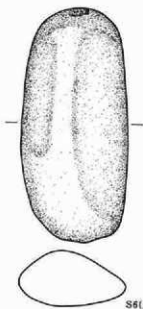
貯蔵穴 不明。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模



第44図 197号住居跡 (1/60)

①明褐色土(7.5YR5/6) 灰白色土小ブロックを極少量含む。②にぶい褐色土(7.5YR7/4) 焼土・灰の小ブロックをやや多く含む。③明褐色土(5YR7/2) 灰白色土小ブロックを多く含む。④灰褐色土(7.5YR5/2) やや粒子の粗い土層。⑤にぶい赤褐色土(5YR4/4) ⑥・⑧層が焼けた土層でカマド側壁の名残りか? ⑦灰褐色土(7.5YR6/2) 焼土・灰・炭化物の混土層。⑧黒色灰層(S2/0) ⑨灰褐色土(7.5YR6/2) ⑥層に比べ焼土・灰が少ない。⑩灰黄褐色土(10YR6/2) V層小ブロックを含み、上層に炭化物粒を含む。



第45図 197号住居跡出土遺物 (1/3)

焚き口幅0.36+m 奥行0.45m 遺存状態 東壁より楕円形に突出し浅く確認された。焼焼面はやや焼けていた。遺物出土状態 出土遺物なし。

掘り方 なし。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 出土遺物もなく重複関係等により、6世紀後半-10世紀代という大きな時間幅の中でしか捉える

ことができない。

200号住居跡 (第41・43図 図版15-5・8)

位置 2C-67

重複 195号住居跡より新しく51号溝より古い。

形状 51号溝に大半を切られているため不明。

長軸方位 不明。

規模 3.45+×0.44+m

埋没土 V層小ブロックを含む粘質土で埋没。

壁 0.12-0.06mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦でやや軟弱。

貯蔵穴 不明。

カマド 位置 東壁の中央部にある。規模 焚き口幅0.55m 奥行0.75m 遺存状態 東壁より楕円形に突出し195号住居跡のカマドの上にいる。焚き口両袖基部の高まりが残存する。焼焼面の焼けは弱く焼土と灰が堆積していた。遺物出土状態 土師器瓦片が5点出土した。

掘り方 なし。

遺物出土状態 埋没土からは遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物や重複関係により6世紀後半～7世紀代の住居跡と推定される。

201号住居跡(第32～34図 図版16-3・4, 54-3)

位置 2C-67

重複 189号住居跡・51号溝より古い。

形状 不明。

長軸方位 不明。

規模 1.25×0.80+m

埋没土 粘質土で埋没。

壁 0.20mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で軟弱。

貯蔵穴 不明。

カマド 位置 北西隅にある。規模 焚き口幅0.57m 奥行0.87m 遺存状態 西壁より楕円形に2段に立ち上がって突出。燃焼面はあまり焼けていなかったが、埋没土には焼土と灰のブロックが多量に堆積。遺物出土状態 灰軸陶器皿片(P-48)が燃焼面より出土した。

掘り方 なし。

遺物出土状態 磨石(S-7)1点が北西隅寄り床面より出土した。

時期 出土遺物や重複関係により10世紀前半の住居跡と考えられる。

202号住居跡(第29～31図 図版13-1・2・5, 53-1)

位置 2E-67

重複 188号住居跡より新しい。

形状 西端部を善勝寺堀に切られているため形状不明。

長軸方位 不明。

規模 3.25×2.90+m

埋没土 V層小ブロックを含む粘質土で埋没。

壁 0.17～0.12mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.95m 奥行0.87m 遺存状態 東壁より隅丸形状に突出。焚き口北側に袖石1石がある。焚き口幅が広く奥壁に屈曲がある所から、作り換えている可能性がある。カマド内からカマド前には灰が厚く堆積し、カマド内には焼土と灰のブロックが堆積。遺物出土状態 須恵器塊(P-21)1点と羽釜片1点が出土。

掘り方 全面が0.18～0.09mの深さで凹凸を持って掘り込まれている。また、楕円形の床下土坑がカマド前に1基あり、多くの小ピットが確認された。

遺物出土状態 188号住居跡に混入。

時期 188号住居跡と遺物が混入してしまい明確ではないが、188号住居跡より新しい10世紀代の住居跡と考えられる。

2 柱穴群(第46・47図 図版16-5)

E区II面では109本の柱穴が確認された。これらの柱穴はほぼ二群に分かれて集中して分布していた。北側の一群は1号円形周溝遺構周辺の2A・B-66グリットを中心とした区域に分布し、南側の一群は184・186・190号住居跡周辺の2D-68・69グリットを中心とした区域に分布している。

また、一部の柱穴は住居跡や1号円形周溝遺構と重複する関係にある。

多くの柱穴が確認されたがI面と同様に柱筋が判明したり、構造が判明したものはなかった。

柱穴の平面形は円形を基調とするものが93本、方形を基調とするものが16本で、I面と同じ傾向を示している。

柱穴群の平均的規模は径0.33～0.27m、深さ

第2章 E区の遺構と遺物

E区Ⅱ面柱穴集計表

(単位:cm)

番号	平面形	規模	深さ	柱痕径	番号	平面形	規模	深さ	柱痕径	番号	平面形	規模	深さ	柱痕径
115	円	58×38	-25		151	円	30×25	-26		189	円	20×17	-12	
116	円	21×20	-16		152	円	37×18	-29		190	方	27×25	-8	
117	円	17×15	-9		153	円	30×24	-5		191	円	25×21	-8	
118	円	45×30	-40		154	円	30×23	-9		192	円	19×16	-7	
119	円	40×27	-26		155	円	25×16	-8		193	方	16×15	-13	
120	円	32×28	-15		157	円	23×17	-18		195	円	20×18	-9	
121	円	27×24	-3		158	円	20×18	-14		196	円	24×23	-8	
122	円	33×30	-15		159	円	38×37	-32		197	円	31×30	-15	
123	円	26×22	-8		160	円	30×30	-40		198	円	36×33	-4	
124	円	40×32	-10		161	円	28×26	-31	15	199	円	43×41	-12	
125	円	47×21	-10		162	方	34×31	-35	16	200	円	31×29	-8	
126	円	35×32	-13		163	円	54×35	-56		201	円	45×35	-10	
127	円	48×30	-12		165	円	23×21	-20		202	円	58×47	-80	22
128	円	24×23	-8		166	方	52×37	-4		203	円	17×17	-5	
129	円	30×30	-7		167	方	30×28	-17		204	円	26×24	-36	12
130	方	39×38	-27	18	168	方	30×29	-16		205	円	41×33	-13	12
131	円	30×30	-17	14	169	円	30×19	-2		206	円	40×37	-19	
132	円	26×24	-22		170	方	31×23	-6		207	円	40×37	-7	
133	円	45×25	-20		171	方	21×19	-8		208	方	41×36	-6	
134	円	21×15	-7		172	円	20×17	-12		209	円	23×22	-22	
135	円	38×35	-31		173	方	27×19	-16		210	円	22×17	-5	
136	円	20×19	-26	14	174	円	23×21	-28		211	方	27×27	-11	
137	円	29×27	-54		175	円	30×22	-1		212	円	35×30	-8	
138	円	18×15	-3		176	円	30×19	-21		213	円	47×40	-8	
139	方	59×36	-7		177	円	22×17	-16		214	円	34×31	-7	
140	方	41×24	-6		178	円	55×50	-26		215	円	28×15	-3	
141	円	19×18	-5		179	円	24×20	-6		216	円	22×20	-14	
142	円	14×12	-1		180	方	26×23	-33	20	217	方	23×23	-18	
143	円	28×26	-8		181	円	57×48	-26		218	円	35×32	-33	
144	円	29×22	-5		182	円	57×49	-20	15	219	円	42×35	-23	20
145	円	34×29	-7		183	円	90×53	-20		220	円	24×20	-12	
146	円	40×31	-5		184	円	21×15	-7		221	円	33×28	-34	
147	円	40×24	-6		185	円	20×20	-31		222	円	56×43	-16	
148	円	47×37	-9		186	円	23×20	-10		223	円	45×35	-22	
149	円	30×18	-10		187	円	50×31	-8						
150	円	54×28	-7		188	円	20×15	-8						

0.17mである。柱痕が確認された柱穴は11本で、平均的な径は0.17mである。柱穴規模や柱痕径はⅠ面と同じであるが、規模の大小の差がⅠ面よりも大きい。

柱穴の埋没土はV・VI層の混土層で、As-Bを含むものではない。

柱穴からは土師器・須恵器の小片が極少量出土しただけである。

柱穴群の時期は6世紀後半以降でAs-B降下以前という大きな時間幅の中でしか捉えることができなかったが、住居跡や1号円形周溝遺構と重複する柱穴は新しい傾向にあり、As-B降下時期に近い柱穴が多いと推定される。

3 1号円形周溝遺構 (第48図 図版16-5, 17-1)

位置 2A・B-66

重複 52号溝より古く、多くの柱穴と重複関係にあるが柱穴の方が新しい傾向にある。また、181号住居跡は位置的に重複していると考えられるが(52号溝によって接点不明)、重複率の高いE区住居群が一定距離を置いている。

形状 周溝が円形に巡り、東端部は52号溝によって切られている。

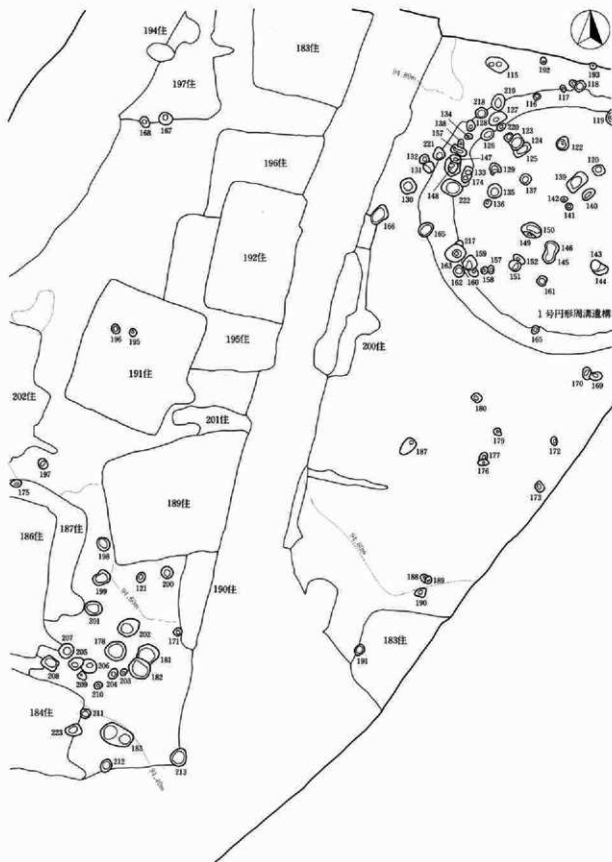
全体規模 7.02×6.26+m

周溝規模 幅0.94~0.40m 深さ0.27~0.13m

周溝埋没土 V層小ブロックの混土層で埋没。

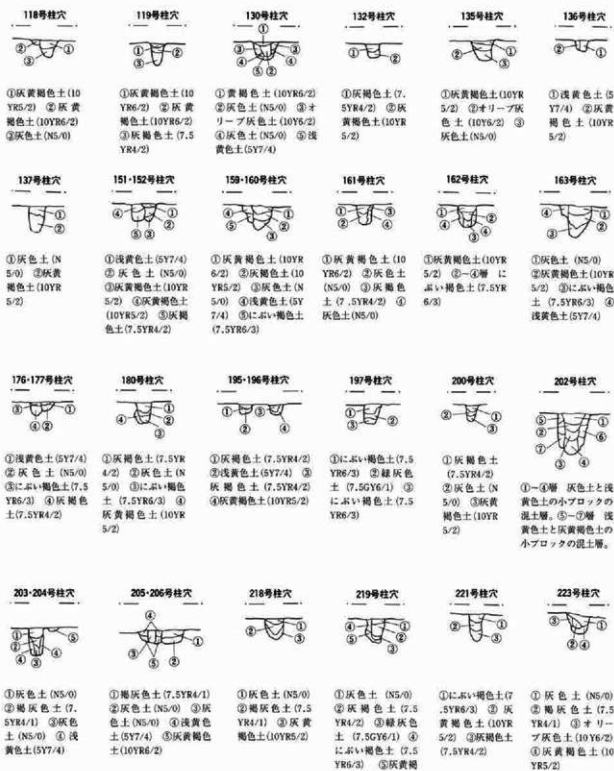
周溝出土遺物 埋没土中より土器小片が極少量出土

第2節 II面の遺構と遺物



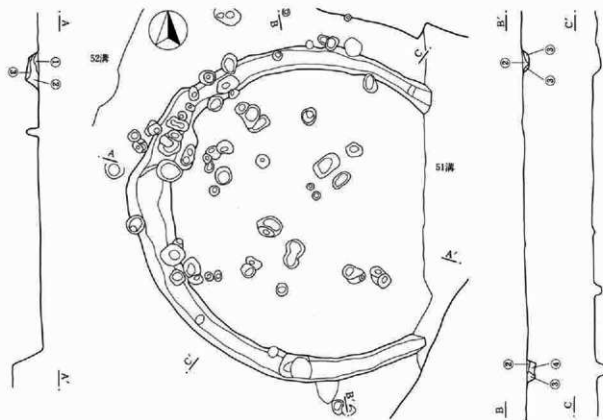
第46図 E区II面柱穴群 (1/100)

第2章 E区の遺構と遺物



※Ⅱ面柱穴の層土はⅣ～Ⅵ層の小ブロックの混土層で構成されている。 L=95.10m

第47図 E区Ⅱ面柱穴土層断面(1/60)



①にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 灰白色土と褐色土の小ブロックの混土層。②灰黄褐色土 (10YR4/2) 灰白色土と明黄褐色土の小ブロックの混土層。③灰白色土 (N7/0) ①層と同様。④褐色土 (5YR5/1) 灰白色土と黒褐色土の小ブロックの混土層。

L=95.30m

第48図 1号円形周溝遺構 (1/80)

しただけで埴輪片や葺石は出土しなかった。

墳丘 確認されなかった。

その他の構造 遺構確認段階で円形周溝中心部で面の乱れが確認された。1m強の範囲で明確なプランは確認できなかったが、凹凸を持った浅い掘り込みであった。調査段階で記録を取らなかったが、本遺構の主体部に係る掘り込みであった可能性もある。
調査所見 1号円形周溝遺構は小規模で狭い周溝が確認されただけで、墳丘は確認されず埴輪も出土せず主体部も推定するに留まる遺構であるが、古墳である可能性は高いと考える。

時期はV層上面に構築されているところから6世紀後半以降であり、181号住居跡と重複している可能性が高いところから8世紀前半にはその存在がやや薄れてきたと考えられる。しかし、完全に重複する住居跡が存在しない点は、住居群の存続していた

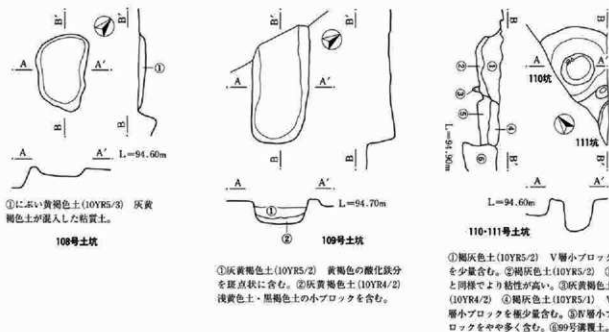
間はその存在が意識され続けたものと考えられる。

1号円形周溝遺構は形状や規模から埴輪や葺石を持たない終末期古墳の類例と考えられる。また、本遺構は近辺に古墳群がなく公田や矢島・江木といった後期古墳群とは約1kmの距離を置いている。終末期古墳にみられる単独存在傾向は本遺構にもあり、この点からも本遺構が終末期古墳の類例と考えられる。

なお、本遺構は新保庵寺の推定域内にあり、新保庵寺の領域やその関係が検討を要するところである。

〔「円形周溝遺構」の名称は検出状態からの名称付けであり古墳の系統性を意味するものではない。〕

第2章 E区の遺構と遺物



① 灰黄褐色土(10YR5/2) 黄褐色の酸化鉄分を斑点状に含む。② 灰黄褐色土(10YR4/2) 浅黄色土・黒褐色土の小ブロックを含む。

① 褐灰色土(10YR5/2) V層小ブロックを少量含む。② 褐灰色土(10YR5/2) ①と同様で粘り性が高い。③ 灰黄褐色土(10YR4/2) ④ 褐灰色土(10YR5/1) V層小ブロックを極少量含む。⑤ B層小ブロックをやや多く含む。⑥ 99号溝覆土。

第49図 108～111号土坑 (1/60)

4 土坑

II面では4基の土坑が確認された。形状は楕円形や円形をなし、E区南端部に分布していた。I面の土坑とは形状や分布・埋没土を異にする。4基の土坑からは出土遺物はほとんどなく、時期や性格は明確でない。

108号土坑 (第49図 図版17-2)

位置 2 E-71

重複 なし。

形状 楕円形をなす。

規模 1.15×0.80m 深さ0.14m

長軸方位 N-38°-W

埋没土 V層を多く含む粘質土で埋没。

出土遺物 なし。

109号土坑 (第49図 図版17-4・5)

位置 2 E-71

重複 99号溝より古い。

形状 長楕円形をなす。

規模 1.73×0.90m 深さ0.36m

長軸方位 N-51°-W

埋没土 V層小ブロックを含む粘質土で埋没。

出土遺物 なし。

110号土坑 (第49図 図版17-3)

位置 2 F-72

重複 99号溝より古く、111号土坑より新しい。東端部は調査区外となる。

形状 円形をなすと推定され、底面は2段に落ち込む。

規模 1.15×0.80+m 深さ0.56m

埋没土 V層小ブロックを含む粘質土で埋没。

出土遺物 土師器の小片が3点出土。

111号土坑 (第49図 図版17-3)

位置 2 F-72

重複 99号溝より古く110号土坑より新しい。大半が調査区外となる。

形状 不明。

規模 0.82×0.35+m

埋没土 V層小ブロックを多く含む粘質土で埋没。

出土遺物 なし。

第3節 Ⅲ面の遺構と遺物

Ⅲ面では Hr-F A で覆われた水田面と低地面が確認され、両者を横断する溝1条も同時に確認された。水田面は前回調査までの村前地区や下り柳地区、そして新保遺跡でも確認されている。今回の調査は本地区に広範囲に広がる水田の一部である。

1 水田跡 (第51図 図版18-1・2)

被覆層と水田の残存状況 確認された水田面と低地面は6世紀初頭降下の Hr-F A によって覆われていた。Hr-F A は厚さ0.05~0.10m で分析の結果1次堆積層であることが判明した。また、Hr-F A の上層には間層をおかず泥流層 (F P F-1) が0.40~0.80m の厚さで覆っており、水田は当地点では復旧されず地形が大きく変化した。

水田は大アゼで区画された内部を小区分した小区画水田で残存状態はあまり良くなく、区画が明確にわかる水田は1枚であった。

また、Ⅲ面は1号溜井や善勝寺堀等により一部が壊されていた。

耕作土 水田の耕作土はⅣ層の黒色土で非常に粘性が高く、土圧により厚さ0.03~0.05m に圧縮されていた。

地形 Ⅲ面では東半部が水田面、西半部が低地面と高低差を持って大きく二分されて確認された。低地面は2号河川跡の痕跡の低地であり、最深部は2-1号河川跡(2号河川跡の中で最も新しい河道跡。)に沿っており、標高93.70~93.90m で水田面との比高差は0.50~0.90m である。低地面では水田区画は確認されなかったが、これはあまりにも湿地的な環境であったため水田耕作に適さなかったものと考えられる。水田面は標高が94.40~94.60m で北が高く南が低い。

区画とアゼの走向 水田は大アゼで区画され同時に低地面との境界としている。大アゼは幅1.17~0.62m、高さ0.02~0.06m で、わずかに北東から南東へ緩やかな弧を描いて走向している。大アゼは2

号河川跡の左岸上端をほぼトレースしている。

内部は小アゼにより小区画に区分されている。小アゼは幅0.20~0.12m、高さ0.01~0.03m で土圧により圧縮され遺存状態は良くない。水田区画は高低差をより持つ南北方向に長軸を持つ傾向にある。

面積 区画が確認された水田は1面だけであり、面積は4.2m²と小規模なものであった。

取排水の方法 水口は3ヶ所で確認され小アゼの隅に切られていた。取水状況を示す遺構はないが、大アゼの1ヶ所(2B-66)が幅0.32m にわたり切れており、かけ流しによる低地面への排水部と考えられる。

遺物出土状態 耕作土中より弥生時代後期~古墳時代後期の土器小片が約100点出土した。

前回までの調査で下り柳地区と村前地区ではより広範囲に Hr-F A 下水田が確認されており、その概要は以下の通りである。

下り柳地区では発掘区の全域で Hr-F A 下水田が確認されており、341面の水田区画が確認された。水田の面積は2~4m²の小区画水田で、等高線に直行する方向の帯状区画を小さく区切って行く方法で水田区画が作られていた。また、部分的に大きな区画をとる水田の縁も確認された。

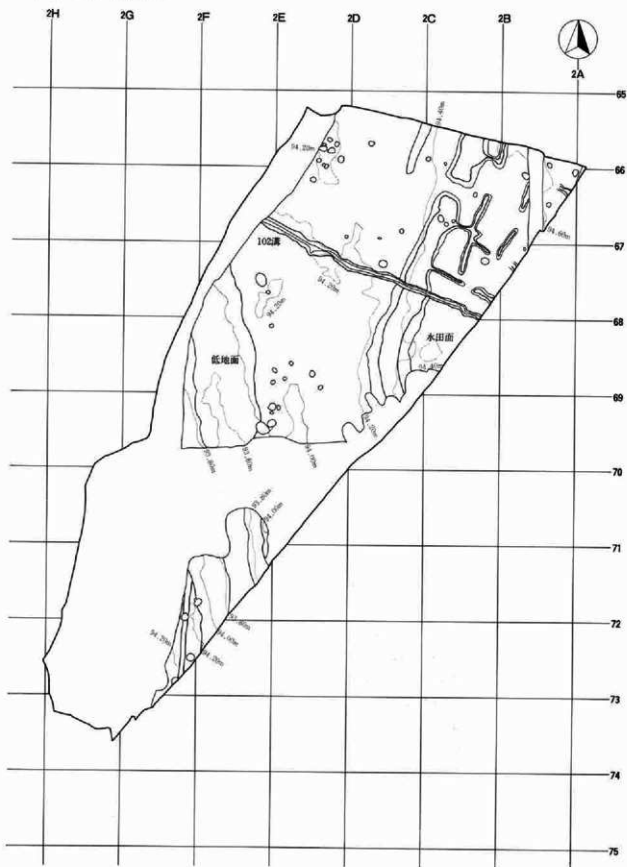
村前地区では3地点で Hr-F A 下水田が確認された。本地区でも2~4m²の小区画水田が多くを占めるが、20m前後や40m前後のやや大きな区画もあり、3種の水田区画が存在していた。

小区画水田は傾斜地を開田するための工夫と考えられ、大きな区画の水田は比較的平坦な地点のため開田できたものと考えられた。これらの水田区画の差は下層の遺構の影響とともに地形が大きく関係していた。

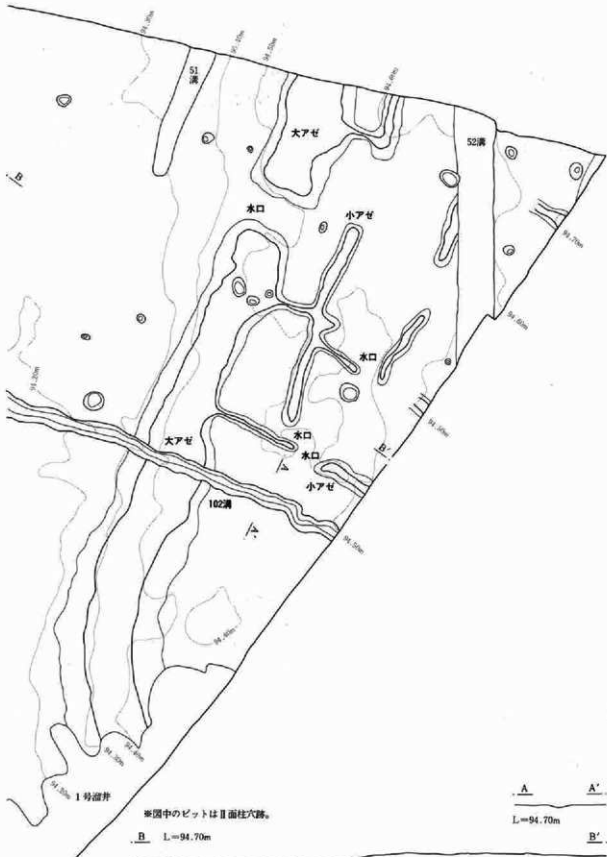
また、村前地区では同じ Hr-F A で埋没していた溝も確認された。この溝は水田域よりやや標高の高い地点を走向しており、C・D区水田への灌漑用水としての性格が考えられた。

今回調査の水田は極めて小範囲であるが、上記水

第2章 E区の遺構と遺物



第50图 E区Ⅲ面全体图 (1/250)



第51図 E区Ⅲ面 (Hr-F A下面) 水田跡 (1/100)

第2章 E区の遺構と遺物

田の一部を構成するものである。

2 溝

102号溝 (第51図 図版18-1・2)

位置 2B-67~2E-66

重複 水田面や大アゼを切っている。

走向 水田面と低地面をやや東西に横断する状態で直線的に走向する。

規模 幅0.62~0.24m 深さ0.12~0.03m 調査長15.40m

形状 断面形は浅いU字状をなす。低面レベルは東端部が高く西端部が低い。比高差は0.34mである。

埋没土 水田面と同じHr-FAで埋没。

出土遺物 なし。

調査所見 水田面と同じHr-FAで埋没しているが、大アゼを切っていることや、地形の全体的な傾斜に逆らう状態で構築されている点から、水田休閑期に一時的に掘られた溝と考えられる。

第4節 IV面の遺構と遺物

これまでの調査で下り柳地区と村前地区ではAs-C上畠・Hr-FA下畠・As-B前後の4面の畠が5地点で確認されている。これらの畠はともに畝は確認されず畝間の溝だけが確認されている。

今回の調査区に続くC・D区ではAs-C上畠が確認され、畝間溝の方向性や間隔等により29グループの畠跡に分けられた。畠の区画はつかめなかったが、高い重複率により一定期間の連続した畠作を確認し、村前地区での集落域から畠作域として水田域の変遷を確認した。

1 畠跡 (第53・54図 図版19-1~5, 55-4)

被覆層と残存状況 畝間溝の被覆層はAs-Cを多量に含む黒色土(Ⅷ層)で、一部の溝にはAs-Cの純層に近い被覆層であった。

畠跡は畝間の溝が確認されただけで畝の高まりは確認されなかった。

畠跡は2号河川跡の痕跡であるE区西半部低地面を除く、東半部台地面全面で小範囲ながら確認された。畠跡の下層には弥生時代中期後半~古墳時代前期の住居跡が存在する。

畠跡の地形 前述のように畠跡はE区東半部の台地で確認された。標高は94.30~94.50mで平坦であるが北がやや高く南北の比高差は0.20mであった。

畝の走向と区画 今回の調査でも溝の走向や間隔、被覆層や重複関係から三群に分けることができた。

第1群 ほは南北に走向する一群で2本の溝が確認された。溝の幅は0.30~0.15m、深さ0.10~0.05mで間隔や区画は解らなかつたが、被覆層はAs-Cの純層に近く、土層の上からは他の二群に比べ最も古い一群であり、畠作がAs-C降下前から開始されていた可能性が窺える一群である。

第2群 やや北東から南西へ走向する一群で重複関係を持つ10本の溝が確認された。溝の幅は0.28~0.16m、深さは0.13~0.07mで、間隔は0.90~0.40mである。台地縁辺に平行する一群で区画性が窺える一群である。被覆層や重複関係の観察から、第1群より新しく第3群より古い可能性が高い。

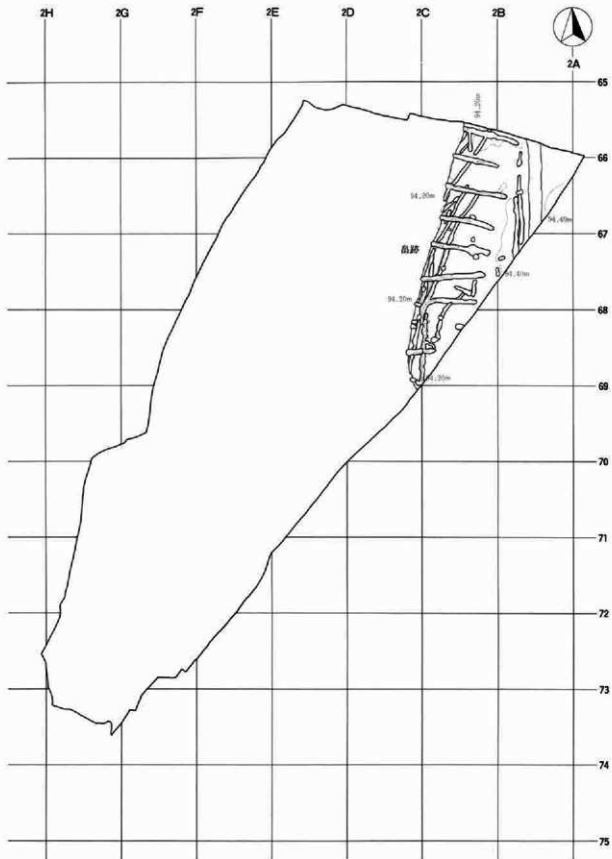
第3群 やや東西に走向する一群で、群内で重複関係を持たない9本の溝が確認された。溝の幅は0.34~0.26m、深さ0.20~0.11mで間隔は1.65~1.35mである。台地縁辺に直交し区画性が窺える一群である。被覆層や重複関係から、第1・2群より新しい可能性が高い。

耕作土 第2・3群はAs-Cを含む黒色土を耕作土としており、Ⅷ層(As-Cを含まない黒色土)に痕跡を残す「疑似畠」である。第1群はAs-Cの純層に近い被覆層であり、Ⅷ層を耕作土とするAs-C降下前の畠である可能性がある。

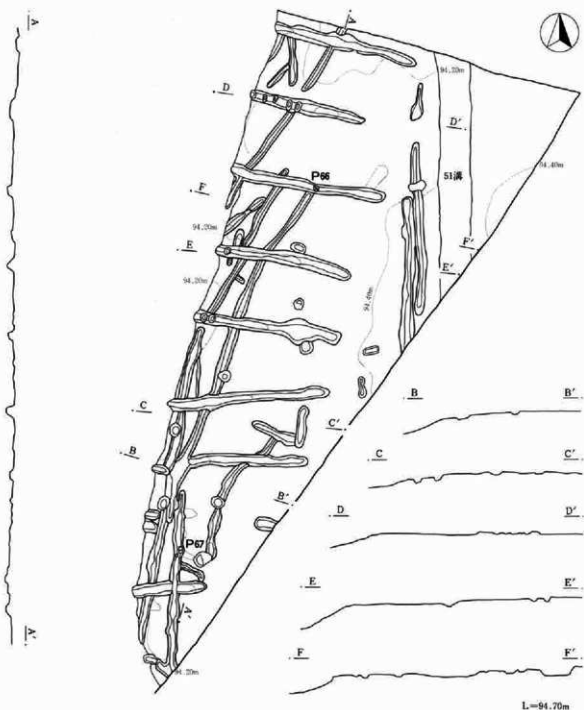
出土遺物 被覆層からは弥生時代中期後半~古墳時代前期の土器小片が約2900点と石片約20点が出土した。これは下層の埋没住居の遺物を耕作の際、掘込んだものと考えられる。

また、S字状口縁台付甕(P-66)が第3群の溝から出土内から、土師器甕(P-67)が第2群の溝から出土

第4節 IV面の遺構と遺物



第52図 E区IV面全体図 (1/250)

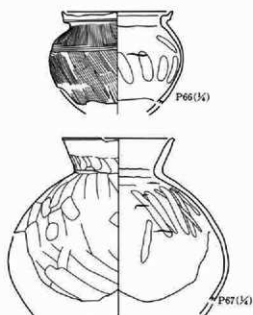


第53図 E区IV面島跡 (1/100)

した。

調査所見 今回の調査では一部の島跡に As-C 降下前の可能性が窺えたが、2号河川跡左岸一帯が島作地帯へと全面的に転換するのは以前の調査通りに As-C 降下後と考えられる。

島作転換時期は下層の住居跡等の関係から古墳時代前期初頭の頃と考えられ、出土遺物により古墳時代前期前半の短期間で島作は終息し水田へと転換して行ったものと考えられる。



第54図 畠跡出土遺物 (1/4)

新保田中村前遺跡の植物珪酸体分析について

本遺跡の調査中株式会社古環境研究所に依頼して植物珪酸体分析を行い、イネ科栽培植物の検討と遺跡周辺の古環境・古植生の推定を試みた。紙面の都合上すべてを掲載できないため、結論のみを抜粋した。

試料

試料は第1地点(台地部北端)、第2地点(台地部中央)、第3地点(2号河川跡北部)、第4地点(2号河川跡中央部)、第5地点(3号河川跡)から計24点を採取した。

稲作の可能性について

本遺跡ではAs-C(4世紀中葉)より下位層の時期には低地部の一部で稲作が開始されていたものと考えられ、As-C直下層には台地部を含めて比較的広い範囲で稲作が行われていたものと推定される。As-C混層の時期には低地部を中心に稲作が本格化したものと考えられ、As-B(1108年)直下層の時期までおおむね継続して稲作が行われていたものと推定される。その後、As-Bの堆積によって稲作は一時中断されたと考えられるが、As-Kk直下層の時期には再開されていたものと推定される。

植生および環境の推定

稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属が多く生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺の台地部などではネザサ属なども多く見られたものと推定される。その後、As-C(4世紀中葉)混層やHr-F A(6世紀初頭)混層の時期に、このようなヨシ原を聞いて本格的な稲作が開始されたものと推定される。なお、稲作の開始後もヨシ属がある程度見られることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことも想定される。

第5節 V面の遺構と遺物

V面では住居跡6軒、溝1条、土坑1基、河川跡(2号河川跡)1条が確認された。住居跡は弥生時代中期後半～古墳時代前期のもので、2号河川跡左岸に分布する住居跡の一部である。2号河川跡は前回の調査で一部が確認され新保遺跡の大溝に続く河川跡である。2号河川跡からは大量の土器片や木製品・自然木が出土した。特にシカ・イノシシ等の動物遺体や骨角器も多量に伴出し、本地点の河川跡周辺で動物の解体や骨角器の製作が行われていたことが考えられる。

1 住居跡

163号住居跡(第56～58図 図版21-1, 56-1)

前回の調査で北壁寄りの部分を確認し、今回の調査で南半部が確認された住居跡である。

位置 2A-65

重複 205号住居跡より古く162号住居跡より新しい。164号住居跡との前後関係はつかめなかった。

形状 隅丸方形をなす。

長軸方位 N-3°-E

規模 5.70×4.92m

埋没土 炭化物・焼土を少量含む粘質土で埋没。上層にはAs-Cを含む。

壁 約0.10mの高さが確認された。

周溝 周壁沿いに全周する。幅0.36～0.16m、深さ0.15～0.10m。

柱穴 柱穴はピット1～5で北東隅の柱穴は調査区域のため確認できなかったが6本柱の柱穴と考えられる。ピット1～3は径0.53～0.45m、深さ0.69～0.23mで主柱穴と考えられる。ピット4・5は径0.38～0.25m、深さ0.69～0.39mと規模がピット1～3と比べ一回り小さく補助的な柱穴と考えられる。

入口施設 なし。

床面 平坦で炉周辺が固く締まっていた。

貯蔵穴 なし。

炉 位置 中央部や北寄りにある。形状 不整

円形をなす。規模 0.70×0.70m 深さ0.10m 遺存状態 底面が良く焼けており、埋没土には焼土・灰が多量に含まれていた。遺物出土状態 出土遺物なし。

遺物出土状態 竜見町式土器甕(P-78)がピット5より出土し、埋没土中から弥生中期後半～後期の土器片約120点、磨石(S-10)1点、剃片3点が出土した。

時期 出土遺物や重複関係から弥生時代中期後半と考えられる。

164号住居跡(第56・57図 図版21-1)

前回調査で北壁寄りの一部を確認し、今回の調査で西壁寄りの一部を確認したが大半は調査区外となる。今回の調査では土器1点が出土しただけである。

205号住居跡(第56～58図 図版21-1～3, 56-2)

位置 2A-66

重複 163・207号住居跡・177号土坑より新しい。南東隅が調査区外となる。

形状 長方形をなす。

長軸方位 N-8°-W

規模 7.06×5.30m

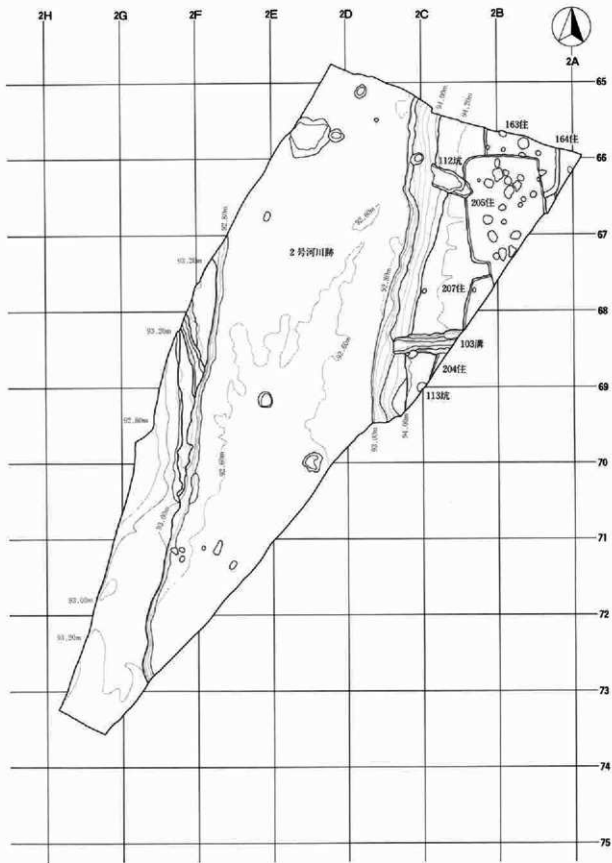
埋没土 上層はAs-Cと炭化物を少量含む粘質土で下層は炭化物を多く含む粘質土で埋没。

壁 0.40～0.16mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

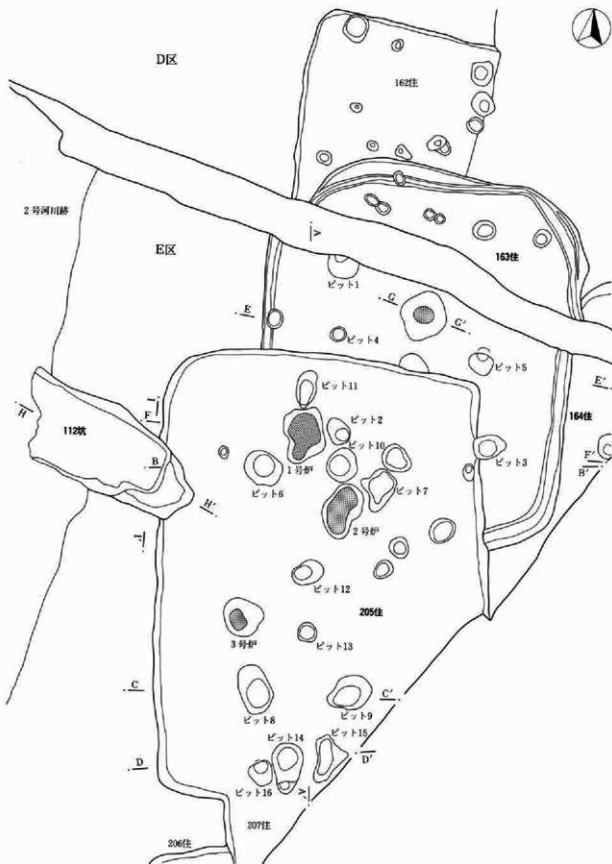
周溝 なし。

柱穴 ピット6～9の4本が主柱穴と考えられる。規模は径0.76～0.60m、深さ1.00～0.64mである。また、1・2号炉に近接するピット12・13は棟支えの柱と考えられ、規模は径0.55～0.53m、深さ0.70～0.57mである。また、ピット12(径0.50×0.36m 深さ0.60m)とピット13(径0.32m 深さ0.17m)は住居の中心部にありピット11と柱筋が通り、この2本も棟支えの柱穴と考えられる。ピット10・11は1・2号炉とともに建て換えられている。なお、床面上には他に7本のピットがあり規模が径0.50～

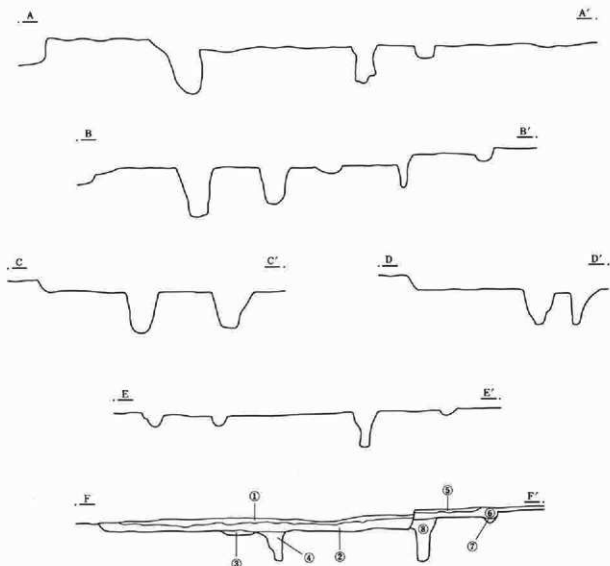
第5節 V面の遺構と遺物



第55図 E区V面全体図 (1/250)



第56図 163・164・205号住居跡・112号土坑 (1/60)



①黒褐色土(10YR2/2) As-Cと炭化物を少量含む粘質土。②黒褐色土(10YR2/3) 炭化物粒を多量に含み、焼土粒・褐色土小ブロックを少量含む粘質土。③黒色土(10YR2/1) 炭化物粒を多量に含み、焼土小ブロックを少量含む粘質土。④黒褐色土(10YR2/2) 灰褐色土小ブロックを多く含む粘質土。⑤黒褐色土(10YR2/2) As-C・炭化物粒・焼土粒を少量含む。⑥黒褐色土(10YR2/2) 灰褐色土小ブロックを極少量含む。⑦黒褐色土(10YR3/1) 粘質土。⑧黒褐色土(10YR2/2) 灰褐色土小ブロックを少量含む。



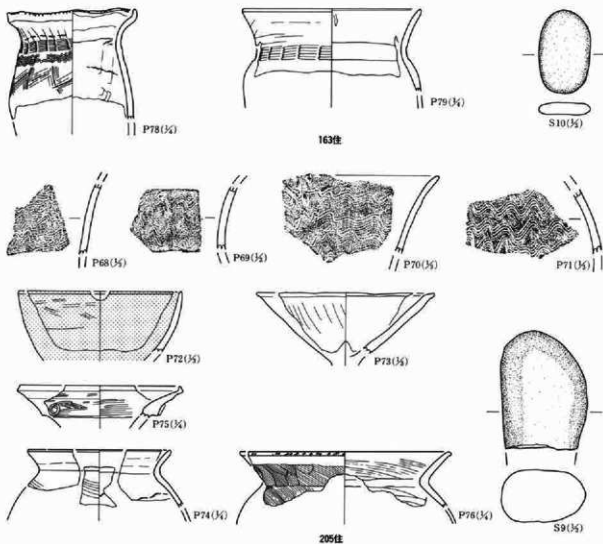
①黒色粘質土(7.5YR2/1) 焼土・黒色灰の小ブロックを多く含む粘質土。②黒褐色土(7.5YR2/2) 焼土小ブロックを極少量含む。

①黒褐色土(10YR3/1) As-Cを多量に含む粘質土。②黒褐色土(10YR2/2) As-C・炭化物粒を少量含む。③黒色土(10YR2/1) 炭化物粒を多く含む、灰黄褐色土小ブロックを少量含む。④黒色土(10YR1.7/1) 炭化物粒・灰黄褐色土小ブロックを多く含む粘質土。

L=94.50m

第57図 163・164・205号住居跡・112号土坑断面 (1/60)

第2章 E区の遺構と遺物



第58図 163・205号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

0.20m、深さ0.44～0.09mと小さい。

入口施設 南壁中央部にあるビット14・15の2本が入口の柱穴と考えられる。平面形は不整楕円形で規模は径0.82～0.40m、深さ0.53mである。

床面 平坦で中央部がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

炉 3基の炉が確認され1・2号炉は作り換えられている。3基とも遺物は出土しなかった。

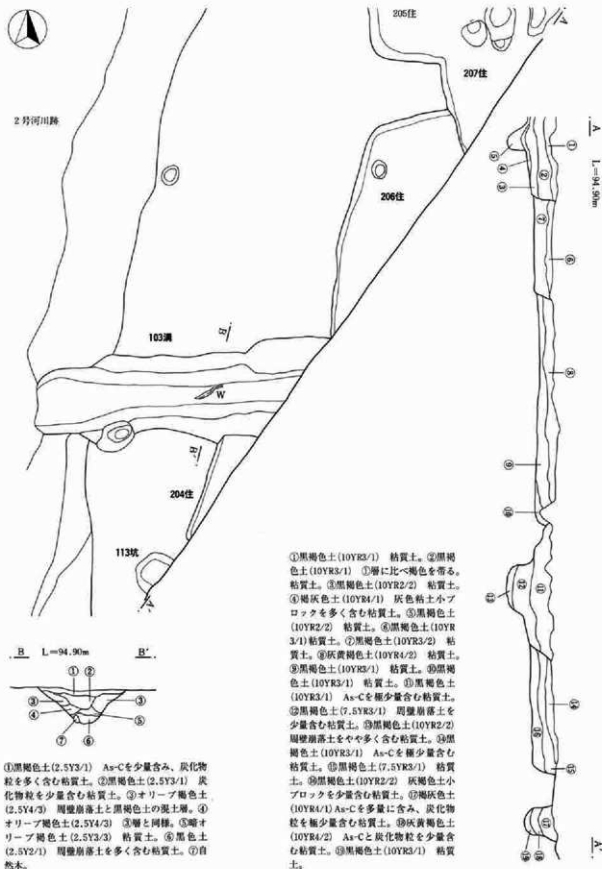
1号炉 位置 中央部北壁寄りにあり、主柱穴ビット6・7の中間東寄りに位置する。形状 不整楕円形をなす。規模 0.87×0.54m 深さ0.05m 遺存状態 底面が強く焼け硬化していた。埋没土には焼土・炭化物・粘土ブロックが多く含まれていた。

2号炉 北壁寄り中央部にあり、主柱穴ビット6・7の中間西寄りに位置する。形状 不整楕円形をなす。規模 0.94×0.65m 深さ0.06m 遺存状態 1号炉と同様の状態であった。

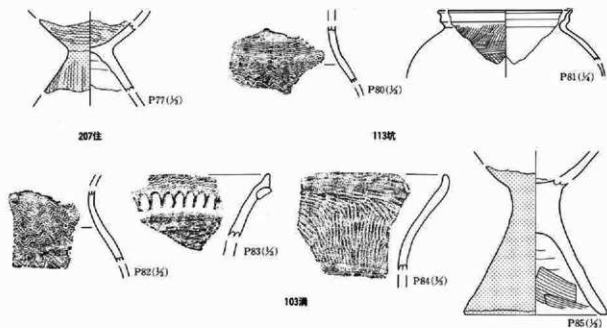
3号炉 西壁寄り中央部にある。形状 不整楕円形をなす。規模 径0.62m 深さ0.07m 遺存状態 底面がやや焼けており、埋没土には焼土・炭化物・粘土が少量含まれていた。

遺物出土状態 弥生後期土器片や土師器片が約1040点、磨石1点、剃片7点が埋没土中より出土した。

時期 出土遺物や重複関係等により弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えられる。



第59図 204・206・207号住居跡・103号溝・113号土坑 (1/60)



第60図 207号住居跡・113号土坑・103号溝出土遺物 (1/3・1/4)

204号住居跡 (第59図)

2B-68に位置し103号溝より古い。西壁寄りの一部を確認しただけで、ほとんどが調査区外となり全容は不明である。出土遺物はなく、時期も103号溝に切られていること等により弥生時代に属する住居跡と推定されるに留まる。

206号住居跡 (第59図)

2B-67に位置し207号住居跡・103号溝より古い。北西隅の周壁・床面・小ピット1本を確認しただけで、ほとんどが調査区外となり全容不明。遺物は弥生時代後期の土器片が約40点埋没土中より出土した。時期は出土遺物や重複関係等により弥生時代に属する住居跡と推定される。

207号住居跡 (第59・60図 図版56-3)

2B-67に位置し、205号住居跡より古く206号住居跡より新しい。西壁の一部と床面を確認しただけでほとんどが調査区外となり全容不明。205号住居跡のピット16 (径0.39m 深さ0.34m) は本住居跡の柱穴である可能性がある。埋没土中より弥生時代

後期の高坏 (P-77) や同期の土器片約20点と剃片1点が出土した。時期は出土遺物や重複関係等により弥生時代後期の住居跡である可能性が高い。

2 溝

103号溝 (第59・60図 図版21-4, 56-4)

位置 2B・C-68

重複 204・206号住居跡より新しい。2号河川跡と一時期併存関係にあると考えられる。

走向 ほほ東西に直線的に走向し2号河川跡と直交して合流する。

規模 幅1.47~1.15m 深さ0.65~0.56m 調査長4.00m

形状 断面形は逆台形で底面はやや丸みを帯びる。底面レベルは東が高く西が低い。比高差は0.14mである。

埋没土 最上層はAs-Cを含む粘質土で、下層は周壁崩落土ブロックを含む粘質土で埋没。

出土遺物 弥生時代後期~古墳時代前期の土器片約270点と磨石1点が埋没土中より出土した。

調査所見 本溝の時期は弥生時代後期末~古墳時代

前期と考えられ、2号河川跡の後半期の河道と合流していると考えられる。住居群の中を横断する状況が推察されるが調査範囲も狭く性格は不明。

3 土坑

112号土坑 (第56・57図 図版21-5)

位置 2B-66

重複 205号住居跡より古く、2号河川跡の前半期より新しいと考えられる。

形状 長楕円形をなすと推定される。

規模 3.16×1.38m 深さ0.46m

長軸方位 N-64°-W

埋没土 最上層はAs-Cや炭化物を少量含む粘質土で、下層は地山ブロックや炭化物を多く含む粘質土で一時期に埋没した様相を示す。

出土遺物 弥生時代後期土器片が約100点埋没土中より出土した。また、中央部底面から脆弱な骨片(分析は行っていない。)が出土した。

調査所見 本土坑は出土遺物等により弥生時代後期の墓坑と考えられるが、墓域と離れており河川線にあること等検討の余地が残されている。

113号土坑 (第59・60図 図版56-3)

位置 2B-68

重複 なし。東半部が調査区外となる。

形状 不明。

規模 0.58×0.42+m 深さ0.29m

埋没土 上層ほどAs-Cを多く含む粘質土で埋没。自然に埋没した様相を示す。

出土遺物 弥生時代後期の土器片13点とS字状口縁台付甕片1点出土した。

調査所見 本土坑の時期は出土遺物により古墳時代前期と考えられるが性格は不明である。

4 2号河川跡 (第61～208図 図版22-1-36-3, 57-1-175-2)

位置 E区中央部の2C-E-65-72で確認された。

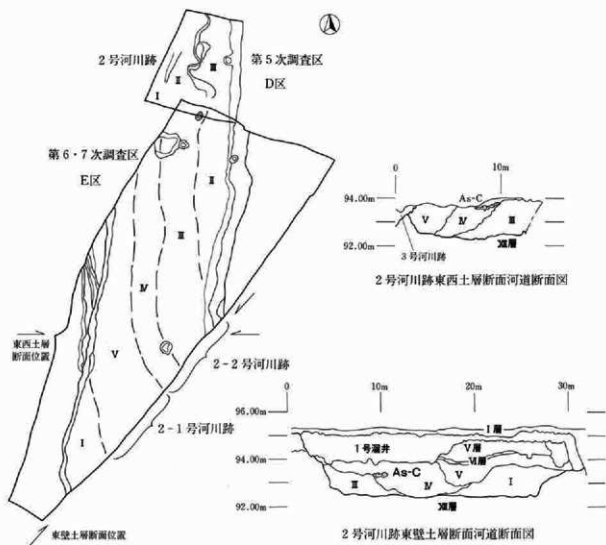
名称 2号河川跡は前回の調査でその一端が検出され、新保遺跡の「大溝」との関連性が考えられた。今回の調査で確認された河川跡は前回調査の河川跡と合致し走向も「大溝」を向いている所から、名称を前回調査と同じに用いた。また、前回調査では2号河川跡をさらに第I～Ⅲの3河道に細分したが、今回の調査段階では対応関係が確認できなかったために、平面確認で明確に区分された2つの河道に分けて「2-1号河川跡」と「2-2号河川跡」の独自の細分名称を付した。

調査方法 前述のごとく今回の調査では平面や土層観察で明確に区分された「2-1号河川跡」と「2-2号河川跡」の2つの河川跡に分けて調査を進めて行った。さらに土層観察や木製品の出土状態から2-2号河川跡は4本の河道に分けられたが、平面上の分離は困難であり一括の河川跡として調査を行った。

また、今回の調査では深さが約1.50mある両河川跡を上・中・下の3層のほぼ0.50m単位に分けて調査を行った。上層は2-1・2号河川跡ともAs-Cを含む粘質土で土器類や木製品等をあまり含まない層である。中層は2-1号河川跡ではAs-C 2次堆積の細粒軽石と粘質土のラミナ状の堆積層で、弥生土器片・石器・動物遺体を少量含み、古式土器片や木製品等をやや多く含む層である。2-2号河川跡では細粒の砂層と粘質土のラミナ状の堆積層で、各種の遺物を少量含む層である。下層は2-1号河川跡ではAs-C 2次堆積の粗粒軽石と粘質土のラミナ状の堆積層で、弥生土器片をやや多く含み古式土器片・石器類・木製品・動物遺体を少量含む層である。2-2号河川跡では粗粒砂層・小礫と粘質土のラミナ状の堆積層で、4本の河道を一括したために出土傾向に片寄りが生じているが古式土器片は出土せず弥生土器片・石器類・木製品・動物遺体等が多量に含まれていた層である。

全体規模 幅約14m、深さ約1.50mで新保遺跡の「大溝」と深さは同じであるが幅がやや狭い。今回の調査長は約40mである。

走向 北から南へ直線的に流下し、調査区内での比



第61図 2号河川跡河道変遷図 (1/400)

高差は約0.20mである。

断面形状 河床は平坦でⅤ層の前橋泥流を約0.80m削り込んでいる。兩岸は急角度で立ち上がっている。
河道の変遷 新保遺跡の「大溝」では弥生時代中期後半～古墳時代前期の6本の小河道の変遷が捉えられ、一時期の小河道の幅は3m前後から6～7mで北東から南西へ蛇行して移り変わる変遷が捉えられた。

前回の調査では3本の小河道が捉えられた。第Ⅰ河道は6世紀以降の時期、第Ⅱ河道が弥生時代後期、第Ⅲ河道が弥生時代中期末～後期の時期で、東から

西へ移り変わる変遷が捉えられた。

今回の調査では2-1号河川跡だけが平面確認で分離することができ兩岸の立ち上がりも検出することができた。その後、遺物の出土状態や土層観察の結果から第61図に示すような河道の変遷が捉えられた。今回の調査では2号河川跡内に5本の河道が確認され、概ね東から西へと移り変わる第Ⅰ～第Ⅴの小河道が捉えられた。

第Ⅰ河道は2号河川跡の右岸南西部で確認され第Ⅴ河道によって切られている。幅は約5mで自然木がわずかに出土しただけで遺物は出土しなかった。



①3号河川跡覆土。②黒褐色土(10YR2/2) 黒褐色粘質土とAs-C二次堆積層がラミナ状に堆積。③褐色土(10YR4/4) 酸化鉄分沈着。粘質土。④褐灰色土(10YR4/1) As-C二次堆積と黒褐色粘質土の混土層。⑤黒褐色土(10YR3/1) 黒色粘質土とAs-C二次堆積層がラミナ状に堆積。⑥灰黄褐色土(10YR4/2) ④層と同様。鉄分沈着。⑦黒色土(10YR2/1) ⑤層と同様。⑧褐灰色土(10YR4/1) ④層と同様。⑨黒褐色土(10YR3/1) 粘性の高い粘質土。⑩黄灰色土(2.5Y4/1) ブロック状の炭化物を少量含む。⑪黒褐色土(2.5Y3/1) 若干色調の異なる粘質土が互層をなして堆積。⑫黒褐色土(10YR3/1) 二次堆積のAs-Cと黒色土の混土層。⑬黒褐色土(10YR3/2) 二次堆積のAs-Cを多量に含む。⑭As-C にぶい黄褐色(10YR4/3)をなし、粒径は1-5mm。⑮灰黄褐色土(10YR4/2) 酸化鉄分沈着。粘質土。⑯黒褐色土(10YR3/1) 粘性の高い粘質土。⑰にぶい黄褐色土(10YR4/3) 細砂層。⑱灰黄褐色土(10YR4/2) 斑点状に酸化鉄分が沈着した粘質土。⑲黒褐色土(7.5YR3/1) 粘質土。⑳灰黄褐色土(10YR4/2) 粒子粗く粘性低い。㉑黒色土(2.5Y2/1) 炭化物を少量含む粘質土。㉒黒褐色土(2.5Y3/1) ブロック状の炭化物を少量含む粘質土。㉓灰黄褐色土(10YR4/2) やや粘性が低い。㉔にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粒径1-5mmの砂層。㉕黒褐色土(10YR3/1) わずかに酸化鉄分が沈着した粘質土。㉖褐灰色土(10YR4/1) 炭化物粒・黄褐色土粒を極少量含むやや粘性の低い粘質土。㉗黄灰色土(2.5Y4/1) 粒径1-3mmの砂層。㉘褐灰色土(10YR4/1) 粒径1mmの砂層。㉙灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土。㉚褐灰色土(10YR5/1) 細砂層と粘質土がラミナ状に堆積。㉛黒褐色土(10YR3/1) 粘性の極めて高い粘質土。㉜褐灰色土(10YR4/1) 色調の若干異なる粘質土が互層をなす。㉝褐灰色土(10YR4/1) 粒径1-3mmの砂層。㉞黒色土(2.5Y2/1) 植物遺存体を多量に含む粘質土。㉟黒褐色土(2.5Y3/1) 粘質土。㊱灰色土(5Y5/1) 粒径1mmの砂層。㊲黒褐色土(10YR3/2) 砂層と粘質土層がラミナ状に堆積。㊳暗緑灰色砂層(10GY4/1) 粒径1-5mm。㊴灰色砂層(5Y4/1) 粒径1-5mmで小円礫も含む。㊵黒褐色土(10YR3/1) 細砂層と粘質土層がラミナ状に堆積。㊶黒色土(7.5Y2/1) 粘性の極めて高い粘質土。㊷オリーブ灰色土(5GY5/1) 砂質土で小円礫が混入。

第62図 2号河川跡土層断面

第Ⅱ河道は2号河川跡の左岸で確認され第Ⅲ河道に切られている。幅は約4mである。第Ⅳ河道は2号河川跡の中央部左岸寄り確認され、第Ⅲ河道を切り第Ⅴ河道に切られている。幅は3-5mである。第Ⅴ河道(2-1号河川跡)は2号河川跡の右岸で確認され、第Ⅰ・第Ⅳ河道を切っている。幅は3-7mである。

これらの河道の時期は新河道が旧河道を侵している点や遺物の一括取り上げにより遺物が混入し合っている状況にあるが、平面確認による河川の分離状態や中層と下層の遺物の出土傾向により、概括的な時期の認定は行うことは可能と考えられる。層位や出土遺物の時期傾向によると第Ⅱ・第Ⅲ河道は弥生時代中期～後期、第Ⅳ河道は弥生時代後期～古墳時代前期、第Ⅴ河道は古墳時代前期と考えられ、第Ⅰ

河道はより古い河道と考えられる。

前回調査との対比では第5次調査第Ⅲ河道と第6次調査第Ⅱ河道が同一と考えられ、第5次調査第Ⅱ河道と第6次調査第Ⅲ河道が同一と考えられる。第5次調査第Ⅰ河道に対比される河道は確認されなかった。

遺物出土状態 2号河川跡からは各種の遺物が多量に出土した。これらの遺物は木製品の出土状態が示すように小河道に沿って帯状に各種の遺物が混在して出土した。

土器類はバン箱に約280箱に及ぶ量が出土した。これらの土器類は破片がほとんどで石器類等とともに生活活動に伴い廃棄されたものと考えられる。出土土器の時期は弥生時代中期前半～古墳時代前期で

あるが、圧倒的に出土量が多い時期は弥生時代後期のものである。これらの土器の中には東北部や南関東、東海西部・畿内・北陸といった他地域の系統を引くものがあり、広範な交流関係があったことを示している。

石器類はパン箱に約20箱が出土した。出土石器の多くは剥片であり縄文時代の遺物を極少量混入しているが、出土量の最も多いものは「不定形刃器」と呼ばれる剥片石器である。その他に磨製石鏃・磨石・砥石・打製石斧・磨製石斧等が少量ずつ出土した。これらの石器中には種類により石質が限定されるものや未製品も含まれており、石材流通の一端や近接集落での製作を示している。

木製品は約1750点が出土し、小枝のような自然木も木製品と同量以上に出土した。図示した644点の木製品は人為的加工が顕著なものであり、残る約1100点の木製品は自然木と見分けがつかないものや一部に工具痕がある枝落としされたような材や分割時の端材のような木製品である。644点の木製品の多くを占めるものは分割材と一部に加工が認められる加工材である。製品としては鋤・鍬等の農具と柱材・板材等の建築材が多く、次に斧柄・横づち等の工具である。丸木弓も17点出土した。これらの木製品は破損品が多く河川への廃棄が考えられるが、未製品も少量含まれている点や直径約0.30m、長さ約6mの原木と考えられる木が6点出土している所から河川による貯木も行われていたと考えられる。また、多くの分割材や加工材が出土している所から近接集落での盛んな木材加工を示している。

また、2号河川跡からはオニグルミ・モモ・トチノキ・ヒョウタン等の種子類が約1070点出土した。

また、今回の調査ではシカやイノシシの遺体がパン箱に約30箱出土し各種の骨角器も出土した。これらの遺体や骨角器は主に弥生時代後期のものと考えられ、近辺集落での集中した動物解体や骨角器製作があったことを示している。(詳細については金子浩昌氏に依頼した報告が第2分冊にある。)

その他、2号河川跡からは金属器と銅型各1点が出

土した。なお、調査方法により微細な遺物や自然物は取り上げられなかった。

調査所見 2号河川跡は前橋台地上に流出した自然河川である。2号河川跡はⅡ層前橋泥流(約2万年前)を河床としⅡ層灰黄褐色土(上層より縄文時代中・後期の遺物を包含している。)を浸食している所から縄文時代後期以降に調査地点を流下したものと考えられ、その痕跡は窪地としてHr-F A降下時まで残っていた。

2号河川跡は河床にポットホールがあることや最下層の堆積層が粗砂と小礫である所から流れ出しの一時期に強い水流があったと考えられる。2号河川は概ね東から西へ小河道が変遷していったことが捉えられたが第Ⅰ河道は最も古く遺物が出土していない点から、流出後しばらくの間は近辺に人的活動がなかったものと考えられる。

2号河川跡の兩岸の台地に人的活動が見え出すのは遺構は検出されていないが出土遺物により弥生時代中期前半からと考えられる。弥生時代中期後半からは小集落が形成され弥生時代後期には拠点的な大規模集落に発展し各種の活動の痕跡が河川内に反映している。大規模集落の形成は古墳時代前期まで継続し、本遺跡内の情勢だけから見れば古墳時代前期における2号河川跡の埋没により遺跡から集落は消滅をする。

2号河川跡は現染谷川の旧河道と考えられ流出後断絶はあるものの次のような変遷をたどると推定される。2-2号河川跡(弥生時代中期～後期)→2-1号河川跡(古墳時代前期)→3号河川跡(As-B降下前)→前回調査の第Ⅰ河道(6世紀以降)→現河川へと連なり、それぞれの時期に生活活動の痕跡を留めて行ったと考えられる。

木構遺構(第155図 図版34-1~3)

2-1号河川跡中流部(2E-69)で根元から枝分かれ部までの大木が河川に直交し水平に出土し、両端部には杭が打ち込まれていた遺構が出土した。出土状態や構造から橋と考えられる。

橋に用いられた木は根回り0.65m、最細部0.32m、長さ3.60mの直木で根や枝は切断されている。木は根元を右岸に枝分かれ部を左岸にし、上面は磨り減り平坦になっており、河川跡底面より約0.70mの高さに据えられていた。

また、両端部には計8本の杭が打ち込まれていた。右岸側には河川跡と平行に4本が護岸のために列をなし、3本が橋を支えるように打ち込まれていた。左岸側には1本が橋を支えるように打ち込まれていた。

本遺構は丸木を用いた1本橋の構造であり、上面の磨り減り具合から頻繁に使用されていたことが窺われ、河川跡両岸に展開していた集落間の交流点と考えられる。

2号河川跡出土弥生土器

2-2 河川跡下層出土土器

中期の弥生土器 (第63-69図 図版57-1~63-1)

壺 全形の判明するものがないため、口縁、頸部-肩部、胴部に分けて評述する。口縁形状は、短く外反する単口縁a類(451-454, 464)と受け口状ないしは内湾して立ち上がるものb類(465-472)、直上に立ち上がるc類(544-546)に三分される。文様は、a類が口唇部に縄文を捺捺するのみ、b類が沈線による山形文(465)、連弧文(467)、波状文(468-469)、鋸歯文(470-472)を施し、縄文や櫛描文もみられる。c類は口頸部一体の文様構成で、縄文地に沈線で直線文(545)、波状文(546)を描く。b類の場合、口縁の屈曲が強く縄文を地文とする465と467は古相、内湾して波状文や鋸歯文を描く469-472は新相ととらえられる。472は櫛描施文で鋸歯文を描いたもので、最も新しい様相を示す。a類の454は口縁内面に棒状、ないしは細かい縦紐状の原体(註1)を捺捺して列点文とする稀少な例である。467は頸部以下を赤色塗彩しており、短頸壺の可能性がある。

頸部から肩部の形状は、緩くくびれてなだらかに下影れの胴部に移行する。ここでは主に施文された

頸部資料を図示した。文様は横位の沈線文が主体を占めており、縄文地あるいは沈線間に縄文充填を行うa類(452, 455, 463, 473-483, 496)、沈線のみ描くb類(451, 484-495, 497, 499)、櫛描文を描くc類(456, 498, 500)に分けられる。量的にはa類とb類で大部分を占め、c類はわずかである(註2)。沈線文は複数の直線文を主体とし、これに波状文(455, 473, 496)ないし山形文(495)を組み合わせる。斜線充填(497)や鋸歯文(456)は少ない。487は植物茎状具で6本の横線を描き、間をあけて端部刺突を施し、簾状文類似の文様を描出する。胴部は下影れの形状が主体と思われ、施文部は胴中位以上に限られる。文様は頸部と同様に縄文地あるいは沈線間に縄文充填を行うa類(505-559)、沈線のみ描くb類(560-577)にほぼ二分される。櫛描文は見られない。a類、b類とも横位に連続する直線文、山形文、重山形文、波状文、連弧文を主な単位文様とし、これらの組み合わせによる施文を基本とする。565-567は連弧文や山形文の空隙を茎状具刺突で充填しており、547や548の縄文充填と同じ意匠と考えられよう。肩部は無文が主だが、501-504・605は櫛描文や沈線で垂下文を描く。505-513・515-524・526-528・542-546は、複数の沈線による連続山形文、直線文、方形区画文を描き空隙部を縄文で充填する文様の一群で、列点状刺突(505-511, 524, 542, 543)や縄文部分に赤色塗彩を行うなど他に比べて装飾性が高い。施文部も544-546の口縁部から胴部下半まで一連であったと思われる。また縄文も施文区画にあわせて方向を変えながら充填する手法を取る(516-521)。沈線間の帯部を磨り消す手法と併せて、a類のなかでも古段階に位置付けられる文様である。575は胴最大幅の位置に横位穿孔の突起を付加する小型壺である。578・579・589・590は細い寛指沈線で同心円状の文様を描く一群で、590に見られる胴下半部の縄文(付加条と思われる)から、東北地方南部-北越に広く分布し、中期後半に位置付けられている平行沈線文系土器(註3)と思われる。581-588は、茎状具による沈線で曲線的な帯文を描き、なかに縄文充填を施す一群で、とくに

581・584・585は同心円状の文様で帯内に赤色塗彩を施す特徴から、これも東北地方南部に類例を求められる。また580は小破片だが、櫛描直線文と3本の櫛状具による刺突列をめぐらす。この特徴から北陸地方の小松式甕に近い。文様をもつ破片のうち、赤彩されるのは全体の2-3割程度を占め、そのうち文様を含めて器面を塗り潰すもの(455, 550, 551, 555など)、沈線部にのみ施すもの(478, 547, 568, 573など)、縄文部分を帯状に施すもの(512, 513, 544-546など)、無文部分を塗るもの(453, 456)があり、「赤色塗彩」に特別な意味合いを認めることもできようが、文様の強調ということも見逃せない要素だろう。

591・592・593・598は太い集合沈線で三角か菱形連繋文を描き、刺突および縄文で充填する。593-595は縄文地に中太の沈線で重四角文を描き、沈線間を磨消す。従来須和田式に相当する。596は不明瞭な縄文を地文として残す甕で、重四角文ないしはコの字重ね文を施す。599, 600は壺の頸部で横位の刺突列で無文部とを区画しており、類例は南信の中期後半にあたる北原式に見られる。601・602は櫛描直線文、波状文と縄文帯を交互に施す例で、当地の中期土器には一般的でない文様構成である。607-609は多条沈線文(609は2条平行沈線)を施す。いずれも中期の所産と思われる。609については、間隔の狭い2条平行沈線で連弧文状の文様を施していることから、東北地方南部に類例を求められよう。壺の器面調整は、概ね外面が研磨、内面が撫でとなっており、一部に刷毛目を残すもの(451)も見られる。

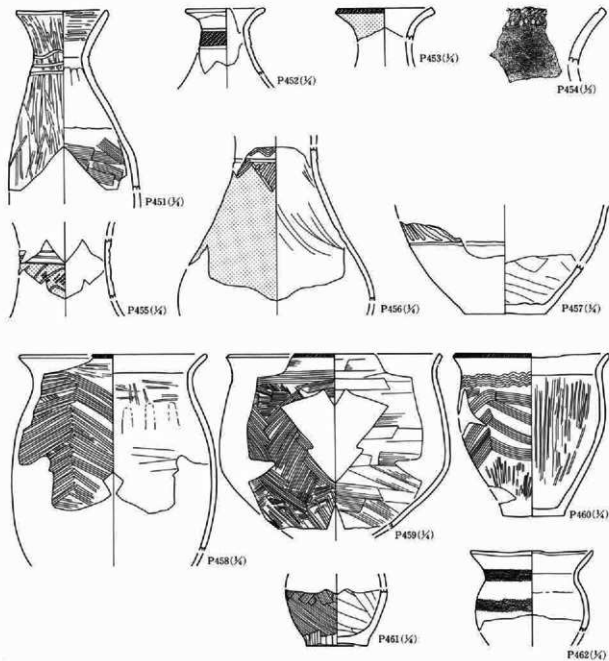
甕 口縁形状は、単口縁で短く外反するa類(458-460, 462, 611, 632, 633, 639-647)と端部が内湾ぎみに立ち上がるものb類(610, 628-631)に二分される。文様は、口唇部に縄文(458-460, 628-632, 639, 645)か、押圧ないし刻み(610, 633, 640, 642-644)を加え、口縁b類には外面に沈線波状文を施す(630, 631)。体部は全形を知り得るものが少ないが、張りが弱く「甕」形(458)ないしは、直線的にすまざる形(459, 460)が多い。体部文様は、櫛描羽状文(458-460, 639-641, 643-667)と、沈線によるコの字重ね

文(註4)(610-627)が主体を占める。後者は地文に縄文を施す例(613-615, 617)、条痕を施す例(619)も見られる。頸部文様は体部と同一が多く、櫛描直線文(459, 625, 640, 647, 650, 651)、簾状文(648, 649)、波状文(460)も見られる。縄文は原体LRを主とする単節斜縄文が多く、0段に燃った糸を用いたと思われる例もみられる(532, 541, 615, 628)。甕の体部に施文される条痕は、目の粗い板状具や、細い植物茎を束ねた櫛描施工具を利用する(639, 643, 646, 647)。口唇部の押圧と刻みは指頭(633, 640)、篋状具(610, 642, 644)、櫛描施工具(643)による。板状具も想定されるがここでは見られなかった。内面調整は丁寧に研磨されるのが多く、刷毛目(459)や撫で(610)も見られる。634-636は口縁から頸部付近にかけて縦位の羽状文、ないしは重山形文を単沈線で描出したもので、竜見町式土器や親縁関係にある栗林式には類例が見られない。643は口縁が直立気味であることから、他の甕より古く位置付けられる可能性が高い。637は横位縄文帯に2条一東の櫛描波状文を垂下した例で、他に類例を見ない。642は小型短頸壺(あるいは小型甕)というべき器種で、口縁がやや長く無文であり、球形胴で細かい櫛描波状文のみ施文することから、後期に下る可能性がある。

後期の弥生土器 (第70-91図 図版63-2-83-1)

壺 口縁が大きく外反し、頸部のくびれが強く、胴部がやや下膨れの形状で、下記にしめした文様や整形の特徴を有するものを壺として扱った。ただし、口縁-頸部だけでは壺、甕いずれとも決めかねるものも多い(691, 693, 799-804)が、ここでは便宜的に壺に一括した。なお、口径の大きさから、30cm近い大型品(672, 687, 688, 694)、20cm強の中型品(684, 686, 695)、15cm強の小型品(685, 689, 697)に三分される見通しもあるが、ここでは破片資料が主体のため一括して扱う。668は細頸の小型壺で、古相の器形を継承し、全体に赤彩を施す。口縁形状は、外反する単口縁a類(669, 684, 697)、端部が受け口状に立ち上がるものb類(672)、粘土帯を装飾的に付加する折り返し口縁c類(685-690, 694, 695, 698, 700)、口唇部がわずか

第5節 V面の遺構と遺物

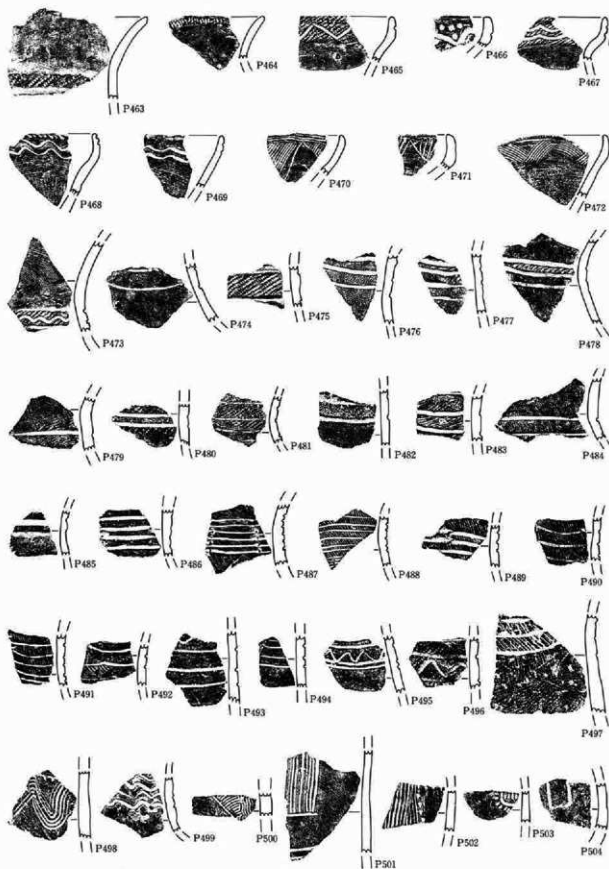


第63図 2-2号河川跡下層出土土器(1) (1/3・1/4)

に肥厚して上方につまみあげるd類(861,873,877~880)、口唇部が外折するe類(870,871)に分けられる。更に、口縁a類は長さが短いもの(669)と大きく漏斗状に開くもの(684,697)に分けられ、前者が古相を示す。b類も段状に屈曲するもの(672)から緩く内湾するもの(794)までの変化があるが、その違いは漸移的である。d類は、上方につまみあげて外側に小さな平坦面を作り出し、施文面とすることを目的とし

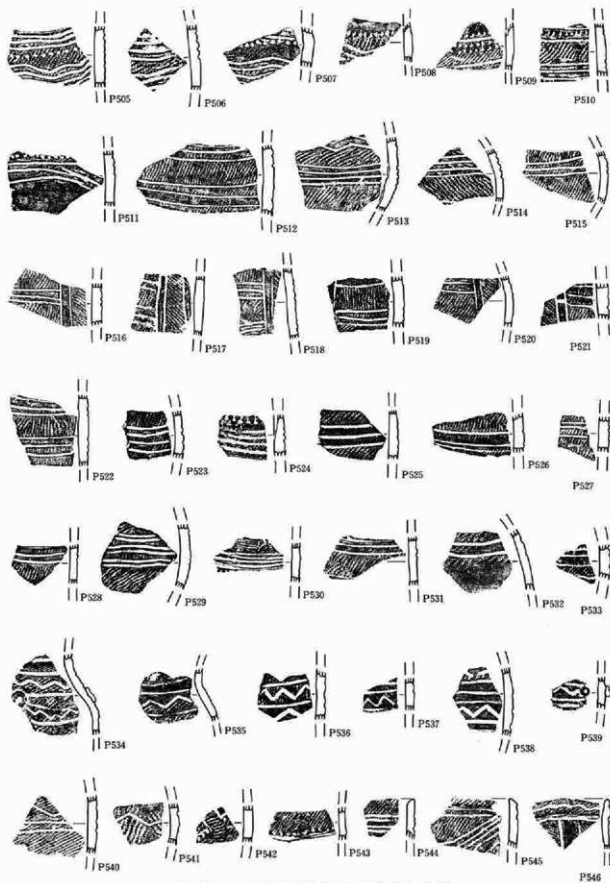
たものだろう。口縁形状のうちa・b・d・e類は少数で、全体の過半数を占めるのがc類の折り返し口縁である。これは付加する粘土紐の断面形状が、三角形か方形(688,700,837)、涙滴状(687,811,824など)、蒲鉾状(690,698,805)、薄板状(694,827)の変化があり、断面の強く張り出すものほど装飾の多い傾向がある。なお、装飾効果を高めるために粘土紐を2~3段重ねる手法は、張り出しの強いもの以外のいず

第2章 E区の遺構と遺物



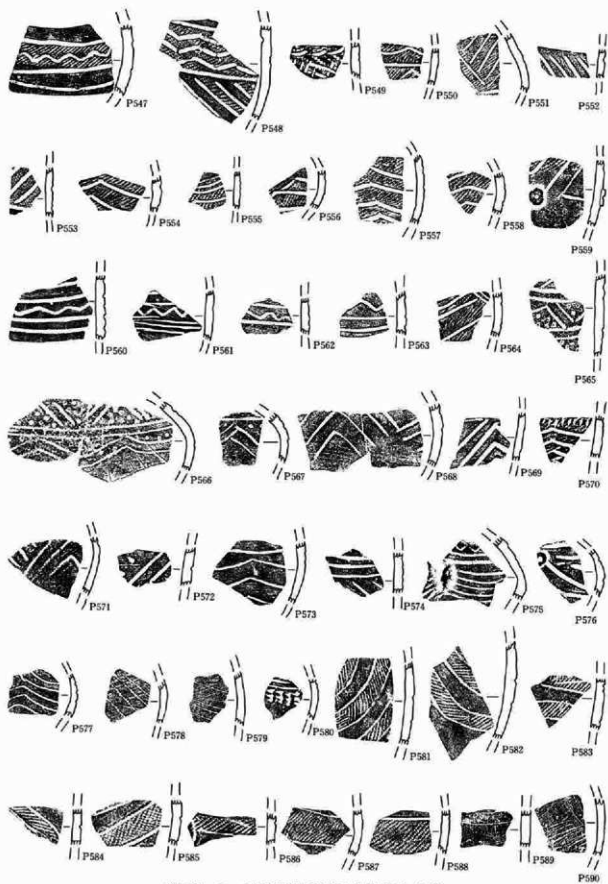
第64図 2-2号河川跡下層出土土器(2)(1/3)

第5節 V面の遺構と遺物

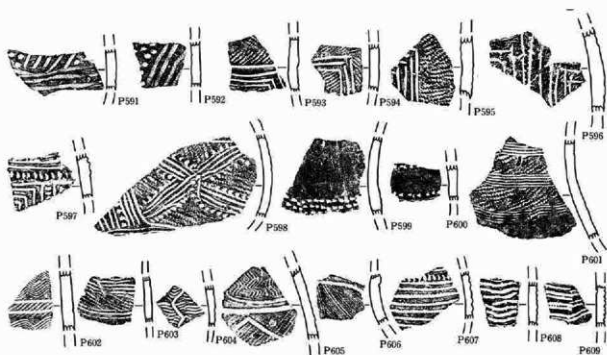


第65図 2-2号河川跡下層出土土器(3)(1/3)

第2章 E区の遺構と遺物



第66図 2-2号河川跡下層出土土器(4) (1/3)



第67図 2-2号河川跡下層出土土器(5)(1/3)

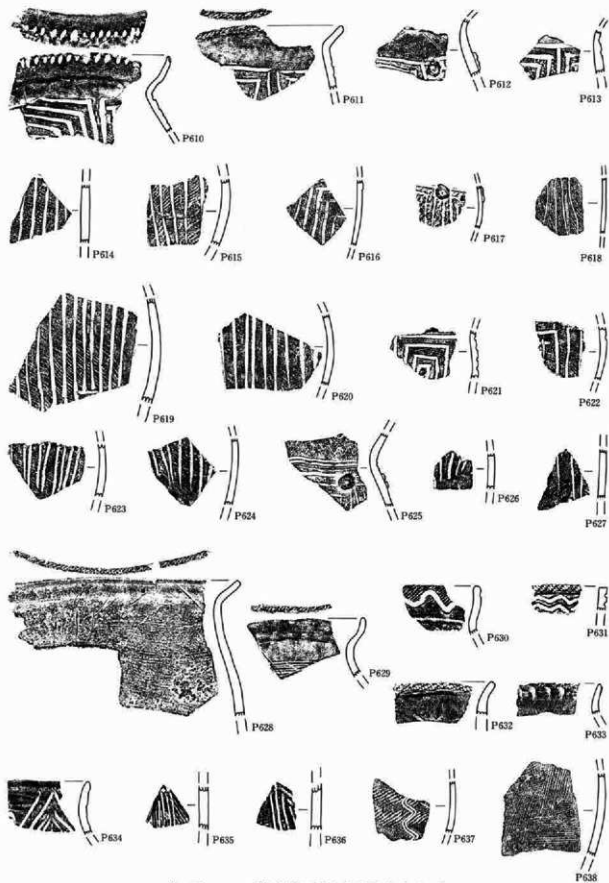
れにも見られる(687, 867, 868, 869)。

口縁文様は、a類、d類、e類には刻み(870, 872, 877~880)、b類の口縁外面に櫛描波状文を施す(672, 790, 791, 795, 792)のが主流である、793は外面に波状文、口唇部に刻みを併用した例だが、類例は少ない。2本一対の棒状貼付文(698, 837~847)、ボタン状貼付文(848~850)は口縁c類に付し、刻みとの併用は見られず波状文か無文であるという傾向がある。刻みの施文具には、板木口(805, 809, 813, 822~826, 868, 869, 877~880)が主流で、他に寛(700, 815~817, 867, 871)、棒状布か細かい羅紋状原体(807, 820)、櫛描施文具(690, 811, 814, 828)、指頭(819, 863)が見られる。

頸部~肩部の形状は、屈曲が強く球形に近い胴部へ移行する。ここでは文様部分を主に図示した。頸部文様は籠状文が主流で、2段に重ねるもの(680, 957)、波状文と組み合わせるもの(675, 676, 678, 699, 953, 954)が見られる。後者は肩部全体に波状文が施されることで、後期全般を通じた壺の主要文様となる(677, 696)。893は刺突列を組み合わせた稀少例であ

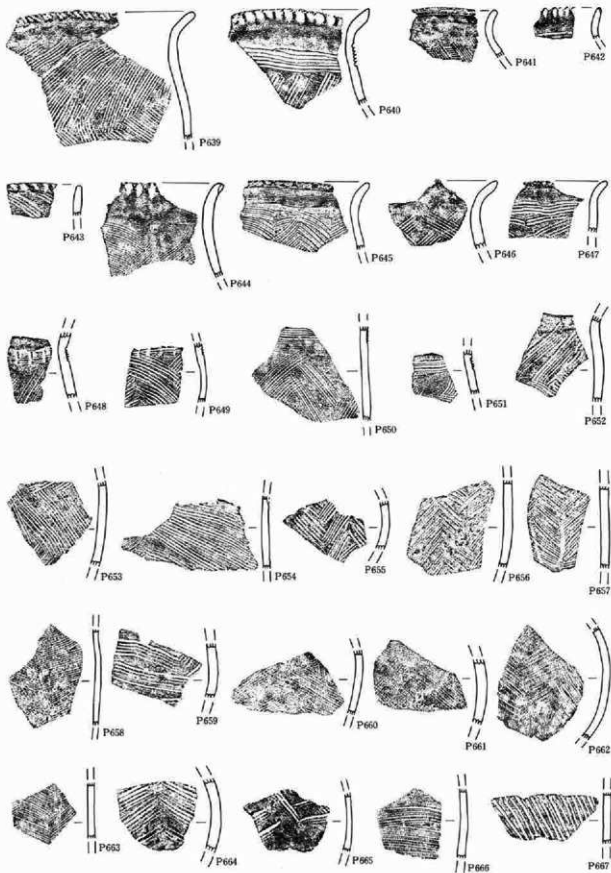
る。頸部のみに用いられる文様としては、細い寛沈線による横位羽状文(矢羽根状文)が見られる(888~891)。892は斜行する沈線を格子にしている。T字文(881~886)は櫛描施文具で横位直線文を描き、一定間隔で沈線を垂下する。881は等間隔に沈線で区切った籠状文の模倣である。882は櫛描施文具を2本束ねて垂下した例である。また、T字文に類する例として、横位の櫛描波状文帯と同じ櫛描波状文を垂下する例(894, 895)も見られる。後期に特徴的な肩部の文様としては鋸歯文があげられる。頸部ないし肩部文様帯の下位に施文されるのが常で、単独で用いられることはない。第83図には各種鋸歯文を掲げた。細い寛沈線で区画し内部を斜線充填するもの(904~913)が主流で、他に格子(914, 915)、収束線(699, 916~918)、刺突(692, 922~925)が見られる。稀少例としては、羽状沈線(919)、横線(920, 921)、無文(930)があげられる。また、沈線区画なく胴部を赤彩し、鋸歯文状に塗り残した内部に刺突を充填するもの(926)や櫛描文を描くもの(930)、刷毛目で鋸歯文を描くもの(931)も特殊例である。なお、鋸歯文は併用される他

第2章 E区の遺構と遺物



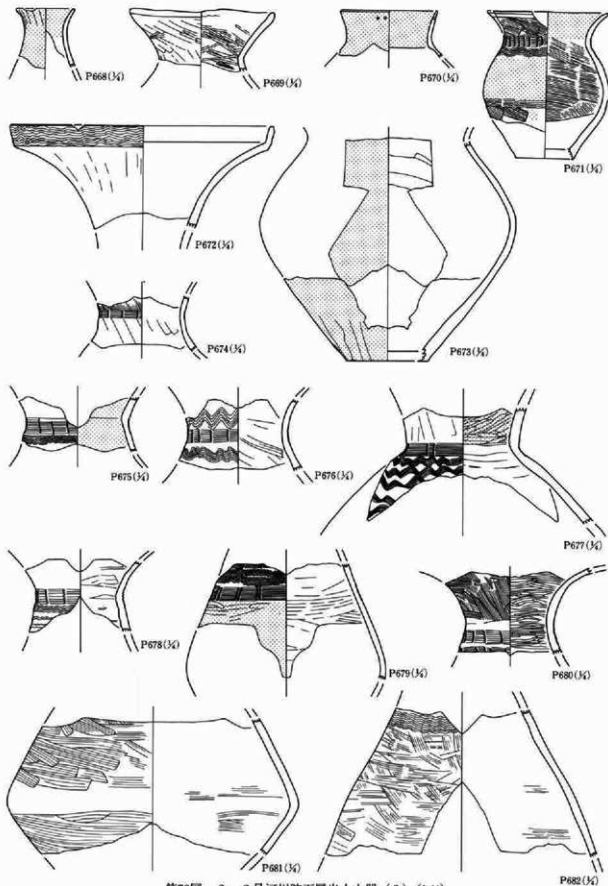
第68図 2-2号河川跡下層出土土器(6)(1/3)

第5節 V面の遺構と遺物



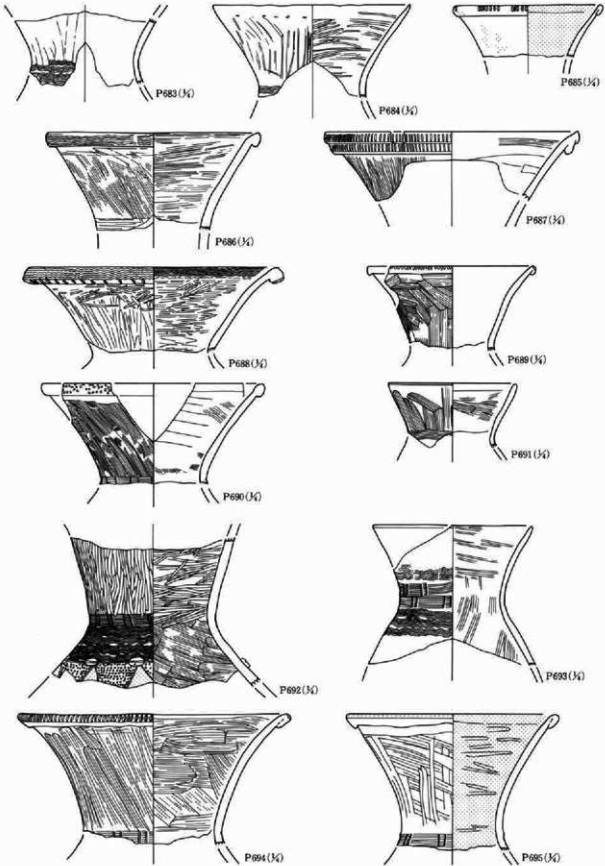
第69図 2-2号河川跡下層出土土器(7)(1/3)

第2章 E区の遺構と遺物

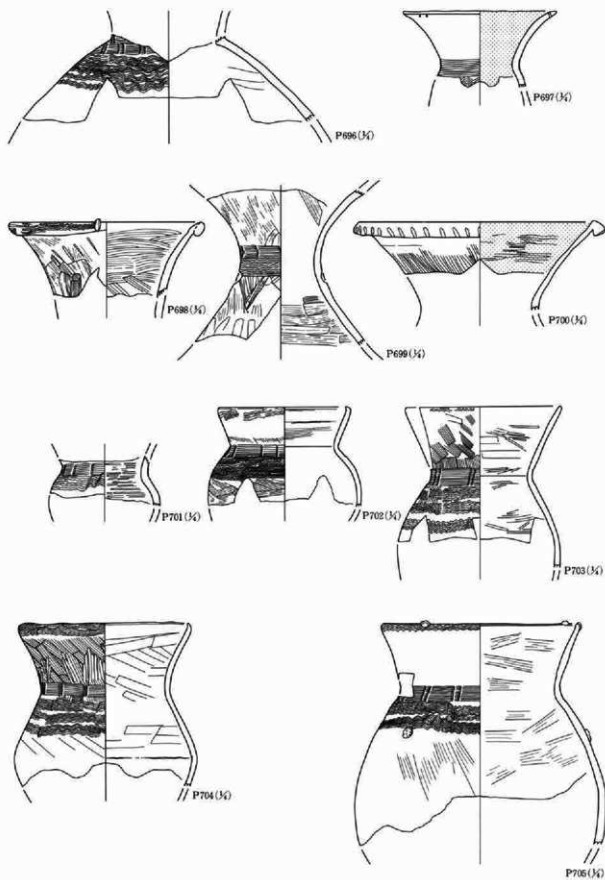


第70図 2-2号河川跡下層出土土器(8)(1/4)

第5節 V面の遺構と遺物

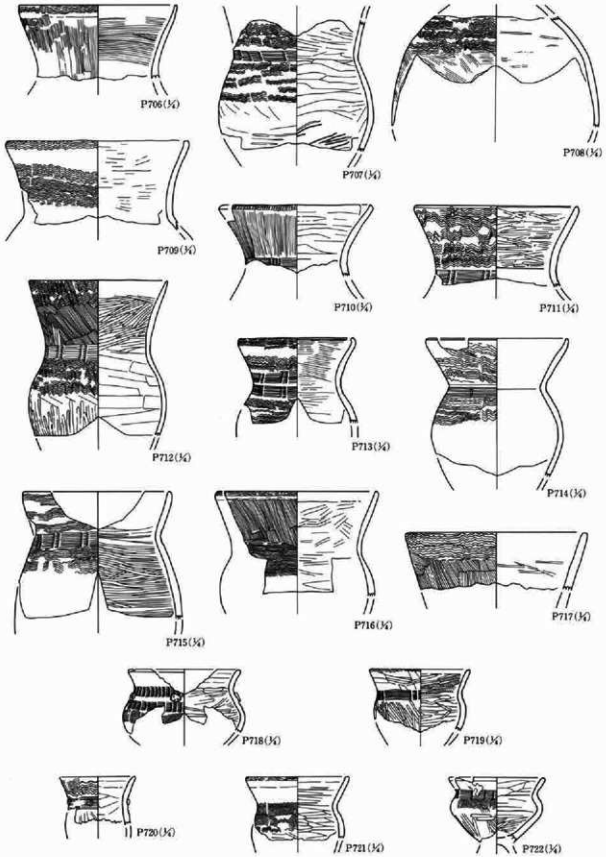


第71図 2-2号河川跡下層出土土器(9)(1/4)

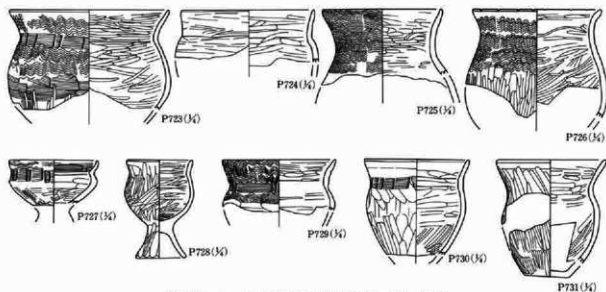


第72図 2-2号河川跡下層出土土器(10)(1/4)

第5節 V面の遺構と遺物



第73図 2-2号河川跡下層出土土器 (11) (1/4)



第74図 2-2号河川跡下層出土土器 (12) (1/4)

の文様との間に横線線で区画するもの(692, 905, 916など)としないもの(914, 917, 922など)、また鋸歯文の頂点や交差部分にボタン状貼付文を付加するもの(905, 916, 922, 930など)としないもの(904, 913, 914など)に分けられる。ボタン状貼付文は、鋸歯文と併用する以外にも、肩部文様帯の下位にアクセントとして貼付されることが多く、区画沈線との併用(896~898)や、単独での貼付(899~901)がある。

壺の赤彩は、口縁内面に多く見られる(675, 677, 685, 697, 700, 821, 822, 826, 839~841, 870~874, 956, 964)が、外面を塗彩する例は比較的少数(679, 692, 794, 795, 828, 847, 892, 899~902, 926, 927, 929, 930)で、しかも胴部無文部分を主とする傾向がある。外面の大部分を赤彩する例としては、小型細頸壺(668)、短頸壺類(670, 671, 796, 797, 965)があげられる。

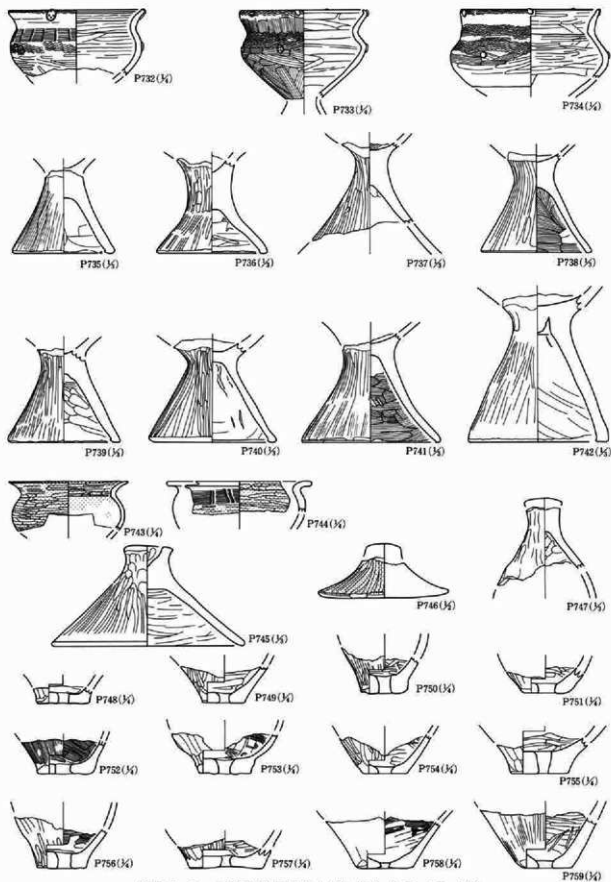
壺の器面調整技法は、全体に研磨よりも刷毛目や撫でが卓越する。口縁内面に研磨(669, 677, 680)、胴部内面に刷毛目か撫でを施すのが主流といえる。

短頸壺 口縁は弓なりに強く外反し、やや肩が張るか「粟」形の胴部を持つ「深鉢形」ともいえる器形で、外面および口縁内面に赤彩を施し、またしばしば口縁上端に蓋を結び付ける小孔を穿つ点(670, 875)で壺と区別される。口縁形状は、蓋を作用することが想

定され、受け口(796, 797)、水平に開くものが見られる。744は後者の小型品だろう。文様は、頸部への粟状文施文を基本とする。796と797は口縁に波状文、肩部に鋸歯文を施し、671は肩と胴下位に赤彩部分を区画するように波状文を施文した例である。670, 673は赤彩のみ施している。

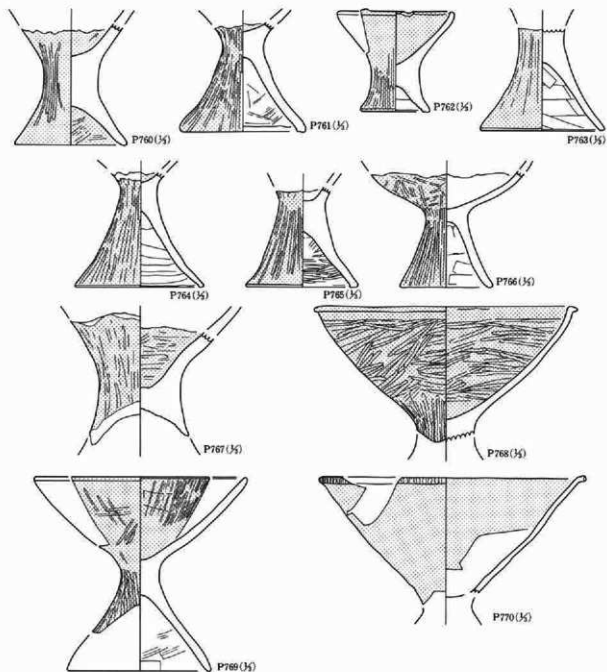
壺 口縁は長く直線的で、やや外方に開き、頸部が弱い「く」の字状か曲線的にしまり、「粟」形ないしはやや肩の張る胴部を持つ平底の器形を壺とする。壺と同様に、口径の大きさと20cm強の大型品(705)から12cm前後の小型品(713)まで2~3の形式細分が可能だが、ここでは一括して扱う。口縁形状は、単口縁a類(693, 703, 705, 711, 712, 717)、端部をつまみ上げて内屈、内湾するものb類(702, 704, 710, 713, 798)、折り返し口縁のc類(1026~1038)に大きく三分される。更にb類は内側への屈曲の度合で細分も可能だが、中間形態も多くそのバラエティーを図示するのみに留める。口縁c類は、壺に見られたような変化は少なく、ほとんどが断面蒲鉾状か薄板状である。頸部や胴部の形状は変化が少なく分類対象とならない。

第5節 V面の遺構と遺物



第75図 2-2号河川跡下層出土土器 (13) (1/2・1/3・1/4)

第2章 E区の遺構と遺物

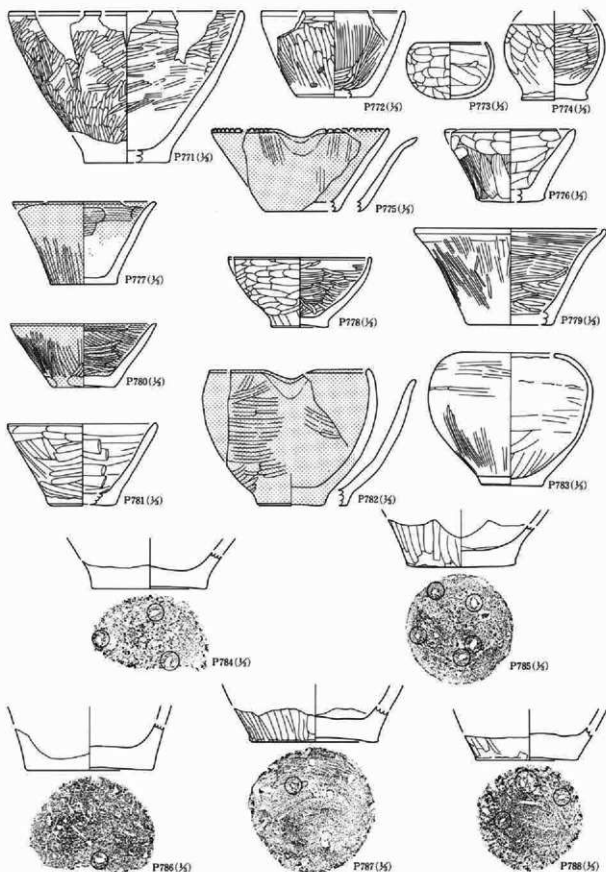


第76図 2-2号河川跡下層出土土器 (14) (1/3)

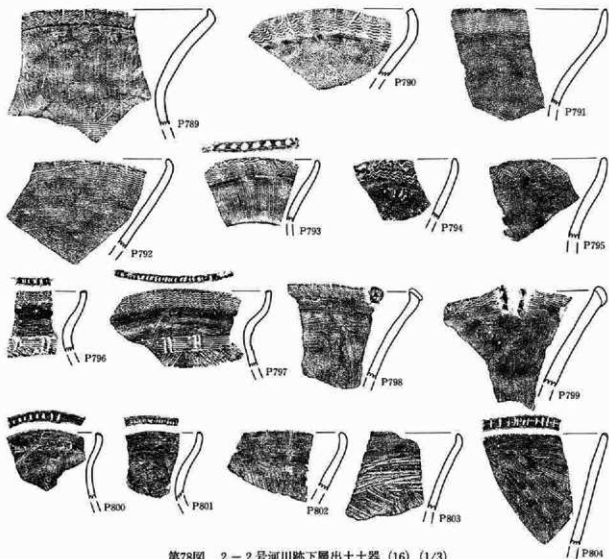
文様は、櫛描簾状文と波状文にほぼ限定され、他に口唇部への刻みが見られる(710, 812, 1018～1020, 1030～1033)のみである。櫛描文は施文部位と単位文様の組み合わせによって、いくつかのパリエーションがみられる。頭部に簾状文、肩部に波状文を組み合わせるものをa類、頭部から肩部を波状文のみ施すb類、頭部に簾状文で口縁全体と肩部に波状文を施すc類、口縁～肩部全体に波状文を施すd類に

大きく四分される。更にa・b類は、口縁上端ないし口唇部への施文で三分される。すなわち、a類では無文(966～968, 970, 971, 974, 1010～1013)、刻み(710, 1018, 1020)、波状文(702～705, 975, 976, 978, 980, 984, 986, 992, 993)、b類では無文(969)、刻み(1019)、波状文(983, 995)である。a・b類からc・d類へは型式変化ととらえられるが、その過渡的な形態(693, 709, 713, 972, 973, 991, 1027)も見られる。この

第5節 V面の遺構と遺物



第77図 2-2号河川跡下層出土土器 (15) (1/3)



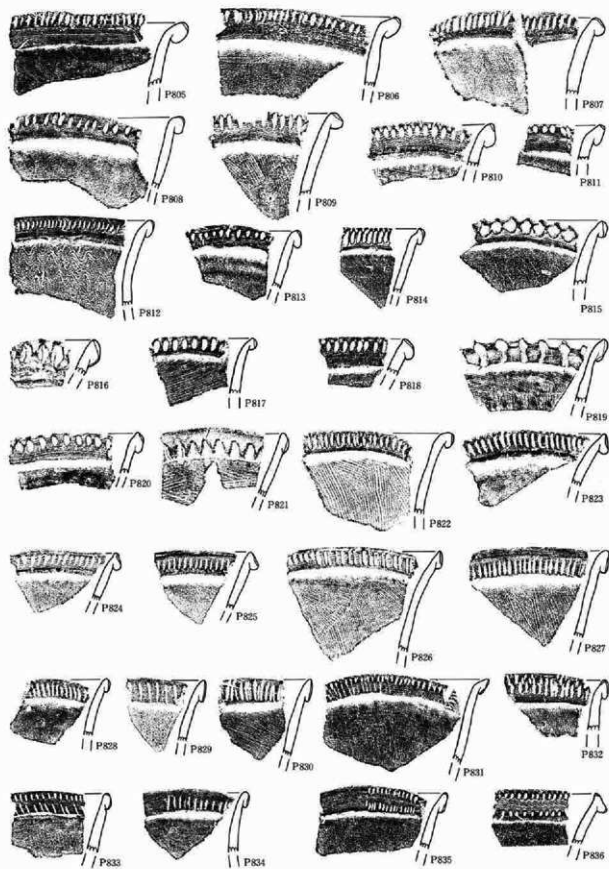
第78図 2-2号河川跡下層出土土器 (16) (1/3)

他に文様要素としては、ボタン状貼付文(1022～1025、1046)が上げられる。1026～1038は折り返し口縁で、口縁外面に波状文(1026～1029)、刻み(1030～1033)、無文(1034～1038)に分けられ、それぞれ文様a・b類に見られた口縁上端文様のバリエーションと同様の变化を見せる。1039～1052は壺ないし甕の頸部～胴部を掲げた。いずれも頸部の簾状文と肩部ないし口縁部の波状文をくみあわせた例である。簾状文は、等間隔止め(1039～1043)、2連止簾状文(1044～1050、1052)、3連以上の多連止簾状文(704、710、1051)が見られ、2連止簾状文が最も多い。

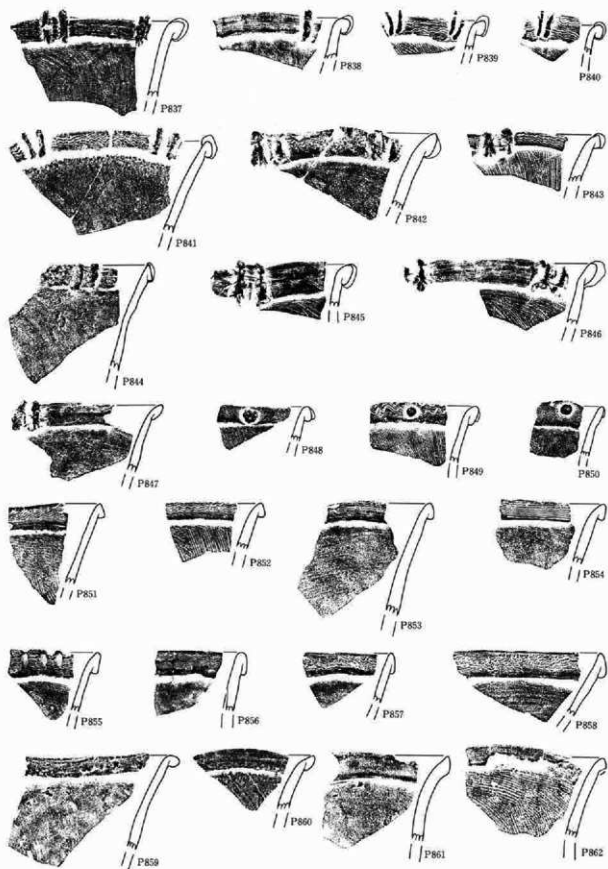
932～948は甕体部の小破片で、文様構成が不明な

がら上記したものとはやや異なる櫛描文を施した例を上げた。932～936、938は頸部に簾状文、その下に波状文、体部に単位の大なる櫛描羽状文を施す。943～948は横位の波状文帯に一定の間隔で櫛描直線文を垂下させる。前者は後期初頭、後者は中期後半に位置付けられよう。941・942はコンパス状に施文する櫛描波状文(註5)で、当地域の後期櫛描文には一般的ではない。

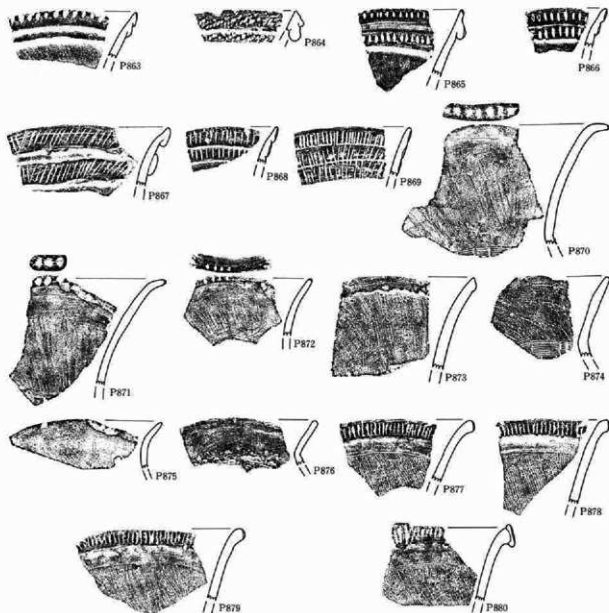
高杯 中期後半～後期のものを一括した(760～770、1078～1092)、口縁端部の形状に変化が見られ、外折して水平に開くもの(1084)、肥厚して外折するもの(1078、1079)、小さく外折するもの(768、1081～1083



第79図 2-2号河川跡下層出土土器 (17) (1/3)



第80图 2-2号河川跡下層出土土器 (18) (1/3)



第81図 2-2号河川跡下層出土土器 (19) (1/3)

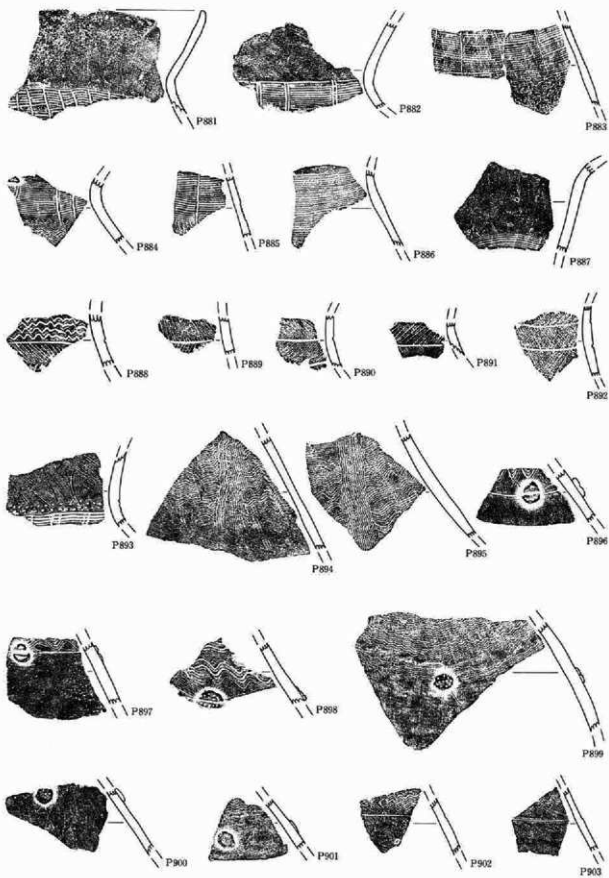
)、緩く外反するもの(770,1085~1088)、内湾するもの(762,769,1089,1090)、折り返し口縁(1091,1092)がある。脚部は、低い円錐形で杯部との結合部が柱状(760,762)と背の高い円錐形(761,763~766,769)に二分される。前者は中期後半に溯る可能性がある。

文様は、口唇部に集中し、刻み(770,1082,1085,1086,1091,1092)、櫛描波状文(1089,1090)、貼付文(1088)が見られる。762のように小さな突起を数箇所に付すものもあるが、図示できなかった。赤彩品は数量

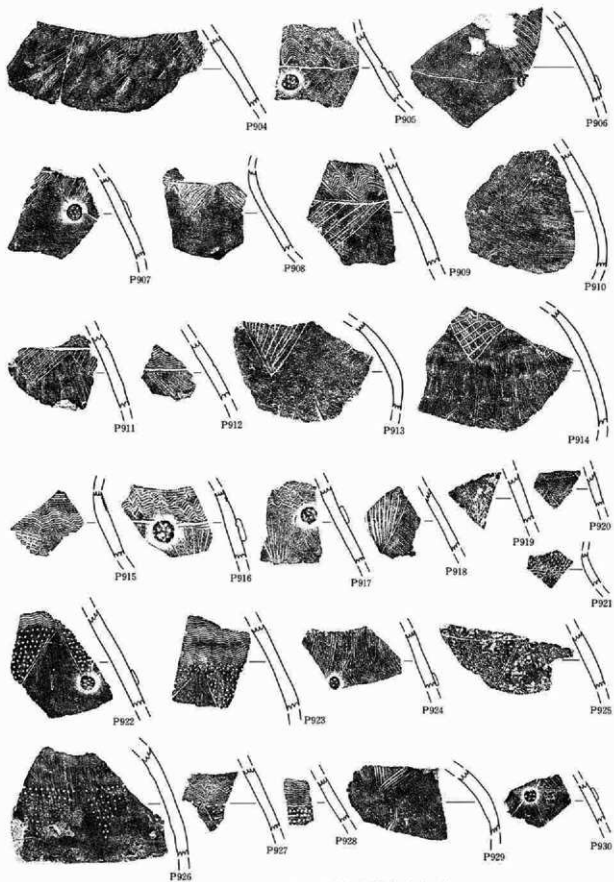
的に主体を占めると思われる。器面調整は研磨が主流で、板木口による撫で(1082)も見られる。

台付壺 全形を知り得ないが、口縁が短く外反し、体部が扁平な球形か肩の張る無花果形で、円錐形の脚部をもつ器形を一括する。口縁の形状から、端部が内屈ないし内湾するもの(1054~1057)、直線的に開くもの(1061,1068~1070,1076)に二分される可能性はあるが、ここでは中間的な形状(1058,1062,1064など)も多く、峻別は困難である。体部は肩の張る無花

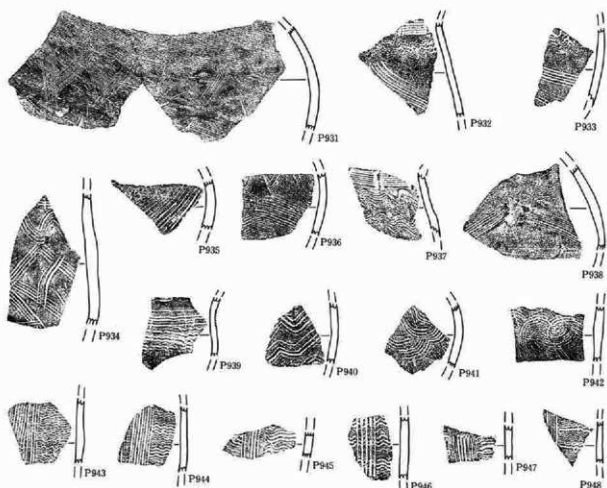
第2章 E区の遺構と遺物



第82図 2-2号河川跡下層出土土器(20) (1/3)



第83図 2-2号河川跡下層出土土器(21)(1/3)



第84図 2-2号河川跡下層出土土器(22)(1/3)

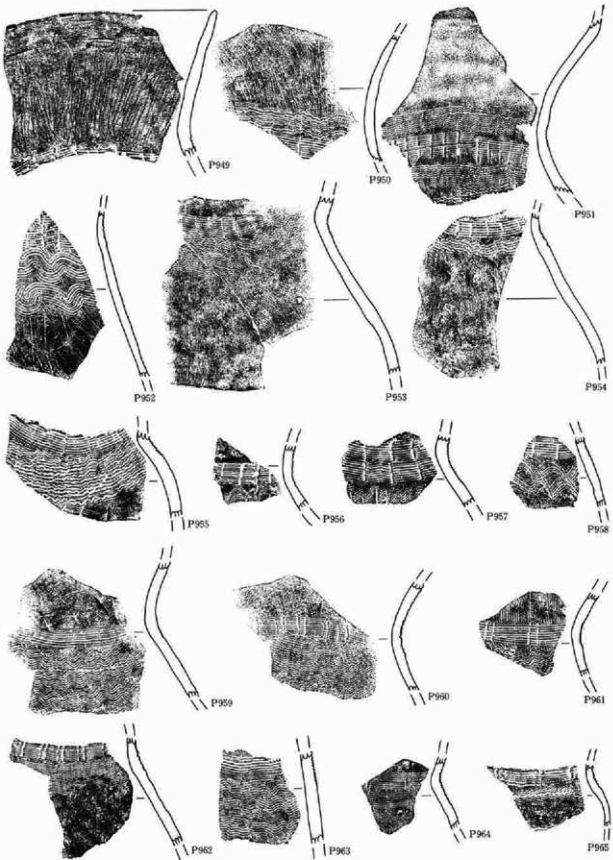
果形(732~734)と、扁球形(718,723)に分けられる。

文様は、頸部に簾状文、肩部に波状文を組み合わせるa類は、更に口縁無文(1065~1069,1075)と口縁上端に波状文を施すもの(732,1053~1058,1061~1065,1070,1071,1076)に二分される。他に、頸部~肩部に波状文のみ施文するb類(733,734,1063,1072~1074)がある。718は煮炊具としての用途が疑わしい小型品で、頸部~肩部に間隔の狭い等間隔止簾状文を二段に施す文様が特殊といえる。他に文様要素としては、口縁と肩に小さいボタン状貼付文を交互に付すものが多い(718,732~734,1053~1055,1057,1058,1061~1064,1068,1070~1073,1077)。脚部(735~742)は正円錐形に近い形状で、赤彩をせず、被熱痕を残す点で高杯脚部と区別される。器面調整は、内面が丁寧な研磨、外面は撫でや刷毛目(733)及び研磨

(732,734)を施す。

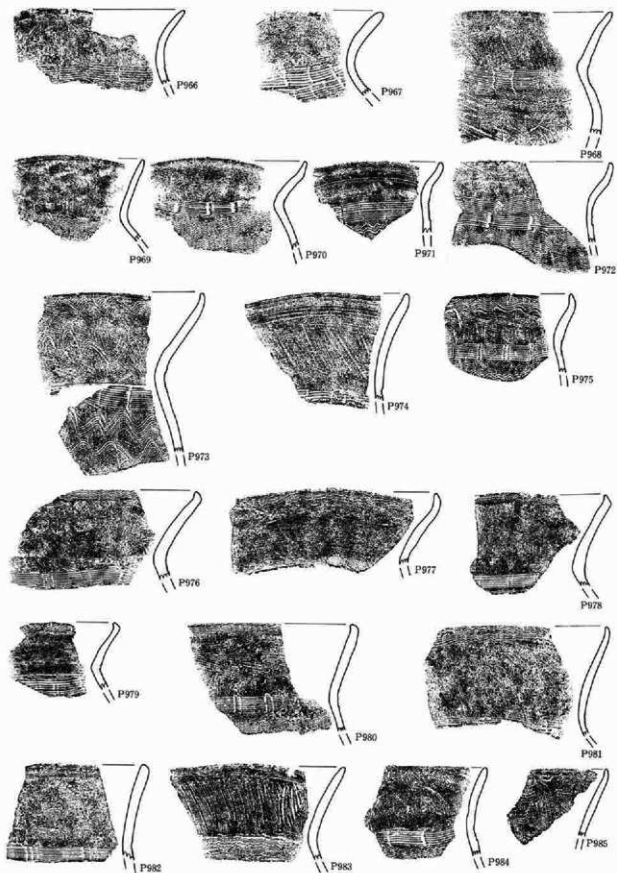
台付壺と同一形状ながら、口径10cm以下の小型器種の一群がある(719,722,727,728)。丁寧に作られた実用品だが、煮炊に使用された被熱痕は見られず、また赤彩品もしばしば見られることから台付壺とは用途の異なる器種と考えられる。これを、「小型台付鉢」と仮称しておきたい。

鉢 逆載頭円錐形の単純な器形で、口径の大きさにより20cm近い大型品(771)、15cm前後の中型品(779)、11cm前後の小型品(772,776~778,780,781)にはほぼ三分される。口縁形状に外反(777,779)、内湾(771,778)、直口(772,780,781)の変化、器高が高く底径の大きいもの(772,777)と器高低く底径の小さいもの(778)などの器形変化が見られる。赤彩品の多いことや器面を研磨で仕上げる手法は高杯と共通する。施

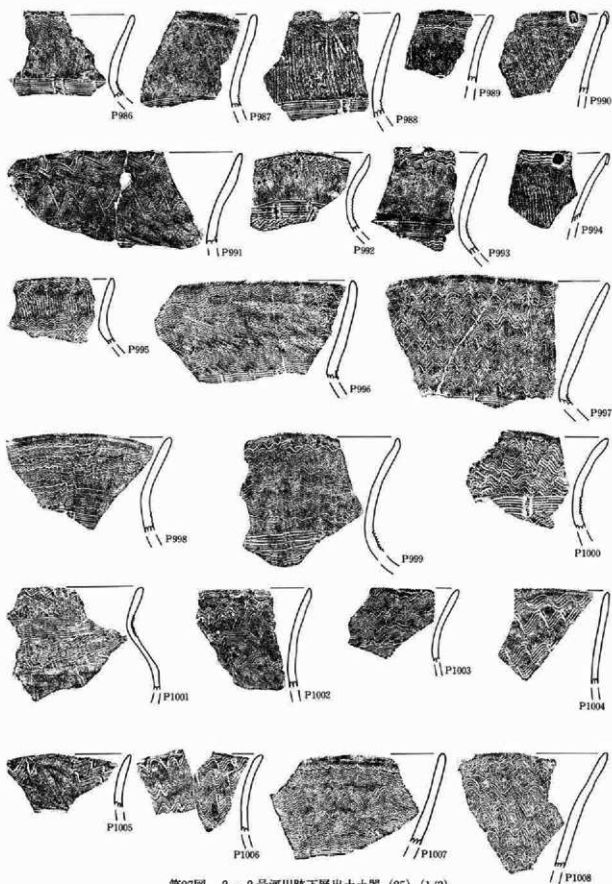


第85図 2-2号河川跡下層出土土器(23)(1/3)

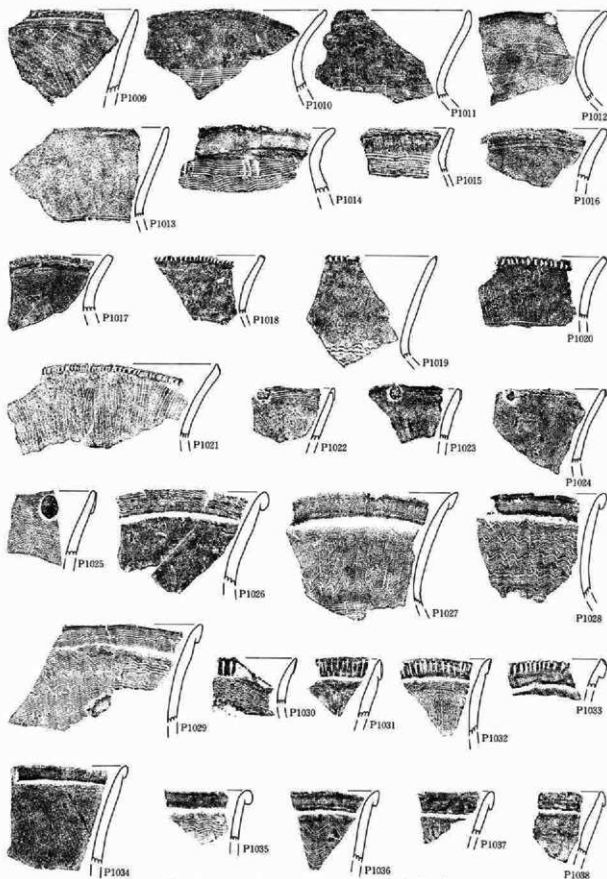
第2章 E区の遺構と遺物



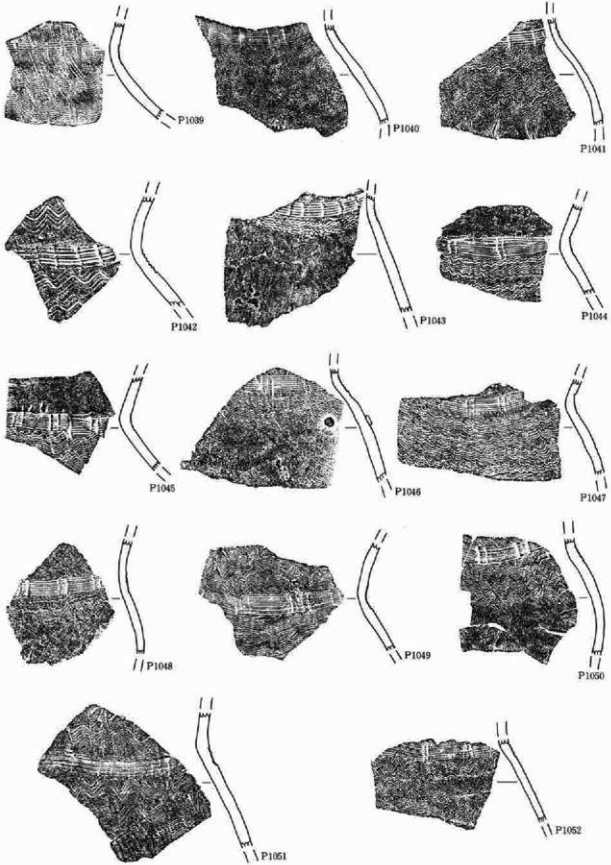
第86図 2-2号河川跡下層出土土器(24)(1/3)



第87図 2-2号河川跡下層出土土器 (25) (1/3)

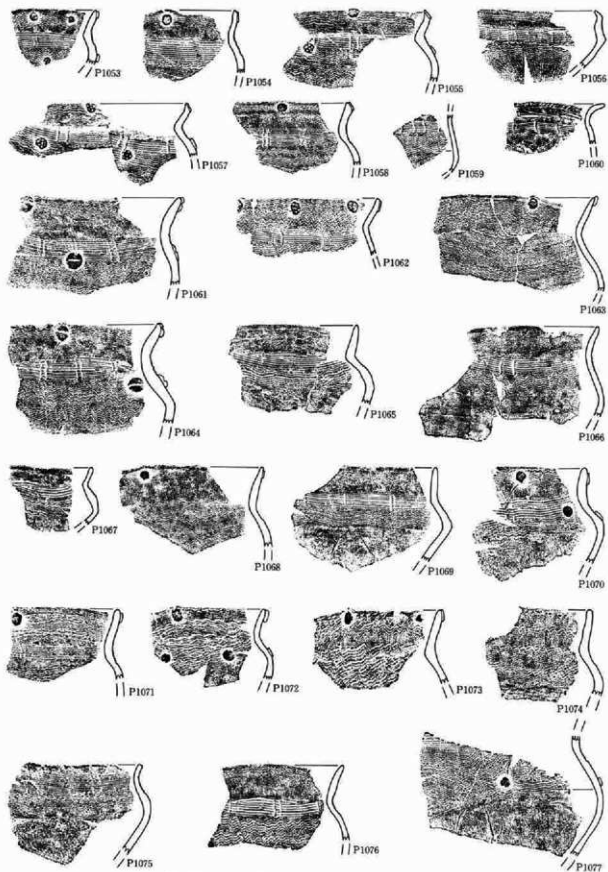


第88図 2-2号河川跡下層出土土器(26) (1/3)



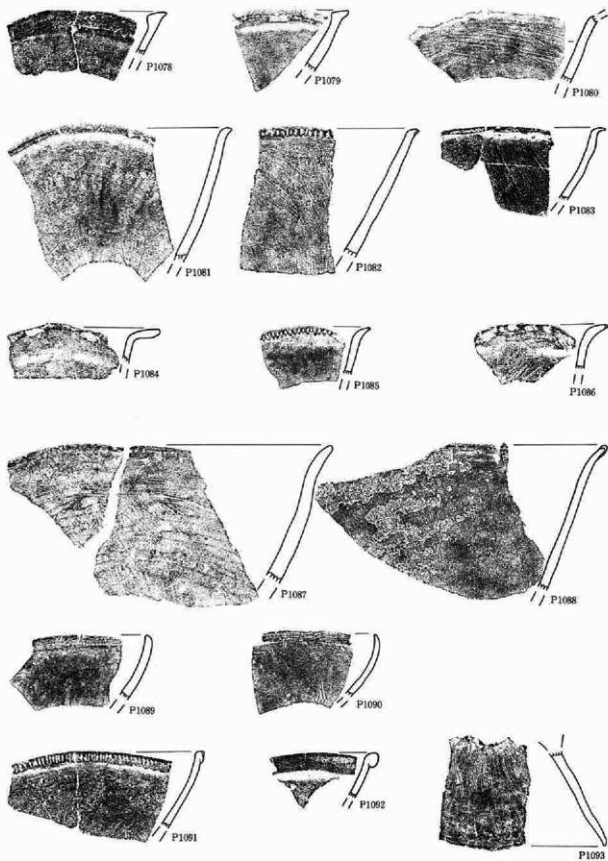
第89図 2-2号河川跡下層出土土器(27)(1/3)

第2章 E区の遺構と遺物



第90図 2-2号河川跡下層出土土器(28)(1/3)

第5節 V面の遺構と遺物



第91図 2-2号河川跡下層出土土器 (29) (1/3)

文した鉢は不明確であったが、高杯と同様に口唇部への刻みや波状文の存在も考えられよう。

片口鉢 775は逆載頭円錐形、782は「碗形」を呈する。いずれも器面を研磨、前者は口唇に刻み、赤彩を施す。783は口縁部を欠損するが、片口鉢と推定される。なお、782の内面には白色の灰状物質がこびりついており、外面に粥状の液体が流れた痕跡を残す。

有孔鉢 全形の分かるものはない。748～759は底部のみの破片である。底部中央に径12～15mmの孔を穿つもので、比較的底径が小さく全体が逆円錐形に近いと推定されるもの(749, 750, 754～756, 758, 759)、底径大きく逆載頭円錐形に近いもの(748, 757)がある。器面は研磨されるが、内面に刷毛目を残すものも見られる(752, 753, 756, 758)。いずれも内容物の付着や被熱痕は見られなかった。

壺 746は壺、745は中型品の壺に用いられたと推定される。

手捏ね土器 773は「碗形」、774は甕形の下半部であろう。古墳時代初頭に下る可能性がある。

その他 784～788は壺ないしは甕の底面に残された稜痕の見られる例を図示した。また鉢772の体部下位にも稜痕が見られる。

2-2号河川跡中層出土土器(第92～96図 図版84-1～88-1)

ここでは中期と後期を一括して扱う。

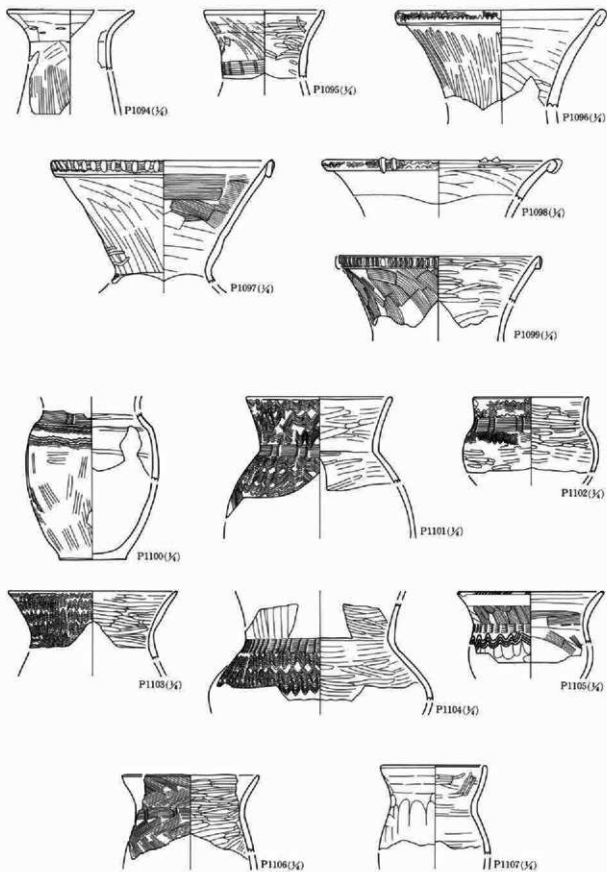
壺 1094は、口縁が小さく開く細頭の器形から中期後半、1095は同じく細頭ながら、頭部の屈曲が弱く櫛溝波状文を施すことから前者より後出的といえる。1096～1099は折り返しを持つ口縁部である。1123～1133は壺の頭部～肩部破片で施文されたものを図示した。1123～1127は頭部に簾状文、肩部に波状文を組み合わせる一般的な文様構成で、1123では簾状文を二段に重ねて幅広に施文する稀少例である。1128、1129、1149は肩部文様帯下位のボタン状貼付文で、文様帯を画する横沈線は省略され、貼付文にのみ施されている。1130はT字文の変種で、横位直線文の代わりに波状文を施す。1131～1133は鋸歯文部分を掲げ

た。

鉢 2-2号河川跡下層出土壺に比べて、口縁は直線的なa類(1101, 1103, 1137)と折り返し口縁のc類(1135, 1138～1140)が主体を占め、内湾するb類は少ない。文様は、口縁下半に無文部分を残すa・b類(1104, 1134～1136, 1143)より口縁～肩部全体に施文するc類が主体を占め、下層出土土器群とは構成が逆転している。1106は小型甕で、口縁と肩部に横位羽状文を施文した例で、本遺跡出土土器中のなかでは異質といえる(註6)。1105は小型の甕で、口唇部の刻み、間の狭い等間隔止簾状文と目の粗い一帯の波状文を施す。この特徴から、中期後半～後期初頭に位置付けられる。

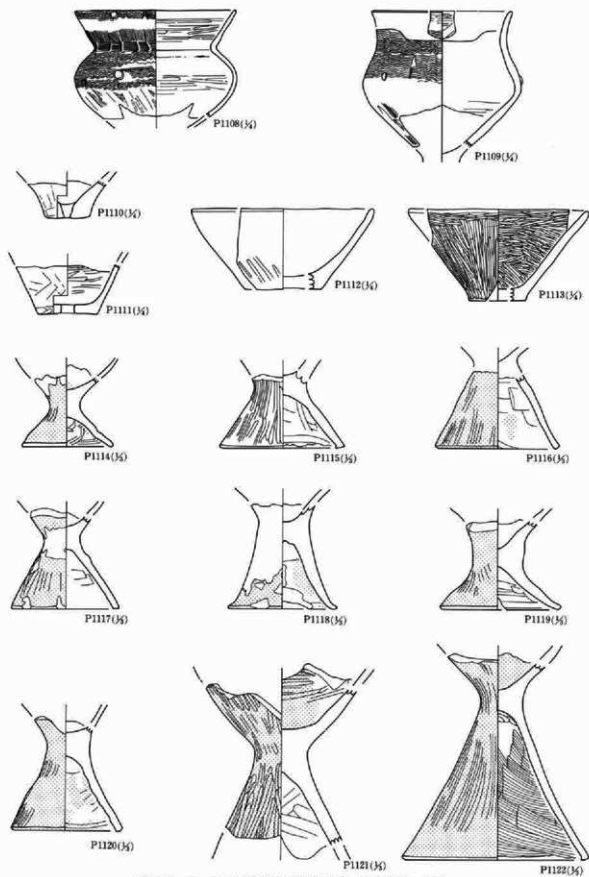
台付壺 ここでは、内湾ないし内屈する口縁はほとんど見られず、外反(1102, 1109, 1141)が直線的に開くもの(1108)が主体である。文様も、下層出土土器群で主体となる口縁無文か、口縁下半に無文部分を残すもの(1108)は少数で、口縁～肩部に施文するもの(1102, 1109, 1141)が多い。1136は甕か台付壺のいずれかであるが、口縁が内湾し文様a類を施文した少数例である。1148は、簾状文を模倣して櫛溝直線文とこれを切る沈線を垂下した例である。1150～1152はボタン状貼付文を肩部波状文の中央に付加した例で甕ないしは台付壺と思われる。

高杯 口縁(1154～1166)は、下層出土のものに比べて外折して水平に開く形状が見られず、その他はほぼ同様の変化が見られる。1154, 1156, 1158～1163, 1165は口唇部に刻みを施した例である。脚部(1114～1122)のうち、1114と1119は低い円錐形で、他より古相を示す。



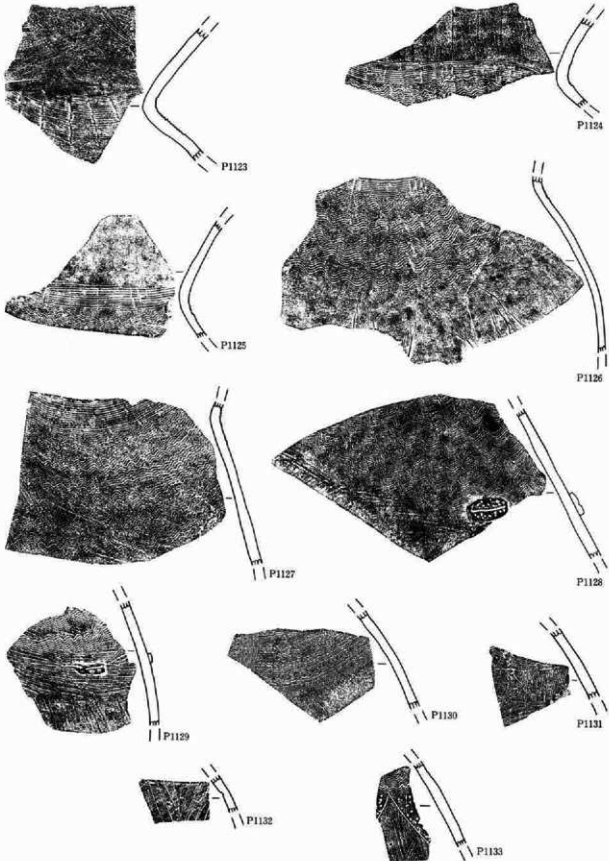
第92図 2-2号河川跡中層出土土器 (1) (1/4)

第2章 E区の遺構と遺物



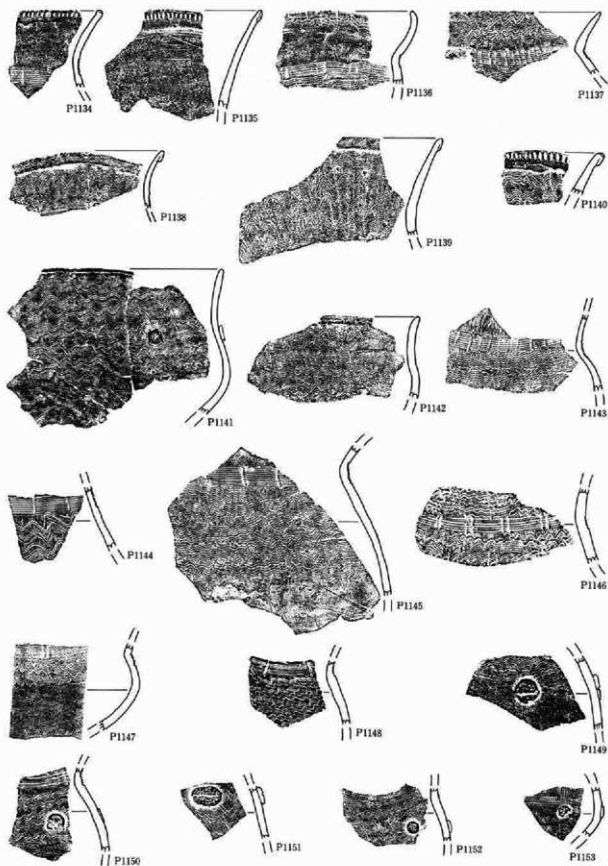
第93図 2-2号河川跡中層出土土器(2) (1/3・1/4)

第5節 V面の遺構と遺物

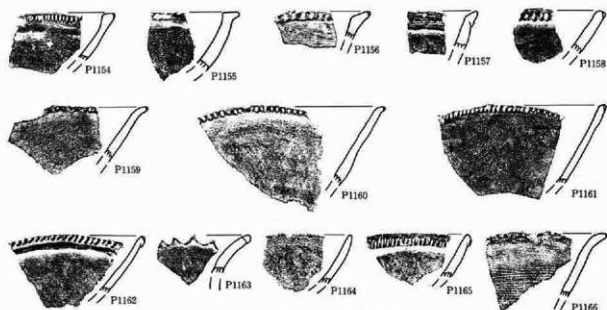


第94図 2-2号河川跡中層出土土器(3)(1/3)

第2章 E区の遺構と遺物



第95図 2-2号河川跡中層出土土器(4)(1/3)



第96図 2-2号河川跡中層出土土器(5)(1/3)

2-1号河川跡下層出土土器

中期後半の弥生土器(第97・101・102図 図版88-2・93・94)

壺 1168, 1218~1222は受け口の外面に縄文を地文とした口縁で, 1218~1221では沈線による波状文を施す。1167, 1230, 1231, 1273は細頸壺の頸部に縄文地文ないし沈線間を縄文充填している。1225, 1226は2本平行沈線による波状文, 1274は1本沈線による波状文, 1271と1272は横沈線を施した例である。1224はやや太い沈線による横位羽状文を描く。1275も同一文様を描出するが, 沈線が細く鋭い。1276は頸部で, 沈線区画のなかを櫛描直線文で充填した垂下文を描く。1227~1229は頸部に櫛描波状文, 櫛描波状文を施しており, 壺のなかでは後出的な文様といえる。1236~1259, 1277~1279は胴部破片である。1236~1240は縄文を地文に, 多条沈線による横位の直線文や波状文を描き, この沈線文に沿って刺突列点をめぐらせた文様構成をとる。1236~1238は縄文施文部に赤彩を施している。これは2-2号河川跡下層出土の505~511と同種の文様である。1241と1251は縄文地文に沈線文を描く例で, 1241は直線文と波状文, 下位に山形文をやや太い沈線で描く。1251は連弧文

を描く。1242, 1243, 1252, 1253, 1280は帯状の沈線間を縄文で充填した例で, 1252は波状文と連弧文, 1253は連弧文を描く。1244~1250, 1255, 1256は, 沈線文に刺突列点をめぐらす。1250では, 上位に2本平行沈線による波状文, 下位に重連弧文を描く。1254, 1257~1259, 1277, 1279は沈線文のみで, 波状文(1254), 直線文(1257), 重連弧文(1258, 1259, 1279), 重波状文(1277)を施す。1223は頸部破片で, 櫛描直線文間に縄文を充填し, 列点状刺突をめぐらせた例である。櫛描文と縄文の組み合わせは珍しい。縄文はL R(1167, 1218~1221, 1223, 1236~1238, 1251~1253, 1273), R L(1239, 1241, 1243, 1278), 無筋L(1240), 複筋L R R(1222, 1230~1232), 羅経文(1242)が見られる。

壺 1261, 1262は口縁が小さく外反するなどで肩の器形で, 体部に櫛描羽状文を施す。1266, 1267は同種文様を施した体部である。1262では頸部に直線文, 1266では簾状文を施す。1269は乱れた斜格子状の文様と思われる。1270は受け口の口唇に縄文, 口縁外面に沈線山形文を3段に重ねる。1234, 1235, 1263~1265, 1283は「コ」の字重ぬ文の例で, 1283を除いて縄文を地文とする。1263は文様単位の中央部にボタン状貼付文を付す。1268は横位の櫛描波状文を5段以上重

ね、櫛描直線文を垂下した例である。1281は口唇に刻みをめぐらし、口縁一帯部に植物茎状具を2本束ねた施文具を用いて連直文と波状文を重ね、そのうえに直線文を垂下させた文様を描く。文様構成は1268に近似する。1282は縄文地に横位沈線帯を1条めぐらした例、1284は寛で小さな渦巻き文を刻んだ口縁部例である。

後期の弥生土器 (第97～100・103～110図 図版88-2～92-1・95～102-2)

壺 口縁部は内湾するもの(1285～1288)と折り返し(1269, 1289～1310)に二分される。前者には口縁外面に櫛描波状文(1285, 1286, 1288)や鋸歯文(1287)が施される。後者は折り返し粘土帯の断面が三角形(1290, 1292, 1293, 1297)、涙滴形(1294～1296, 1303)、溜鉢形(1289, 1298, 1304, 1305)、薄板状(1308～1310)の変化が見られる。文様は、刺突と櫛描波状文、貼付文を単独ないしは組み合わせる。刺突施文具には、寛(1291, 1292, 1300, 1302, 1307～1309)、木口(1293, 1297, 1299, 1301)、指頭(1292, 1298)、編織様の原体(1290, 1294, 1295)、植物茎状具の先端(1304)等が見られる。総じて断面形が厚く幅広いものほど複数の文様を組み合わせる傾向がある。1169は口縁を折り返したのみで無文の例である。頸部～肩部は、弱い「く」の字状の屈曲からなで肩の形状をとり、文様は頸部に簾状文、肩部に波状文の組み合わせが主体を占める。T字文(1170, 1319, 1322, 1323)は少数で、寛が数本の櫛描施文具で垂下線を描く。1313は波状文を垂下させた例である。頸部文様は簾状文以外に、斜格子文(1324, 1325)、羽状文(1326, 1327)がある。また、肩部の波状文の下位に鋸歯文やボタン状貼付文を巡らせる例も多い。鋸歯文には沈線による斜線充填(1177～1179, 1328～1335, 1338～1341)、格子(1336, 1337)、刺突(1342～1346)、併用(1320)が見られる。鋸歯文は沈線区画が大部分であるが、稀少例として櫛描文(1347)、区画のないもの(1348, 1349)も見られる。ボタン状貼付文は鋸歯文の交点にアクセントとして用いる(1329, 1333, 1337, 1338, 1342, 1344, 1345, 1346)ほか、肩部波状文の下端を限るアクセシ

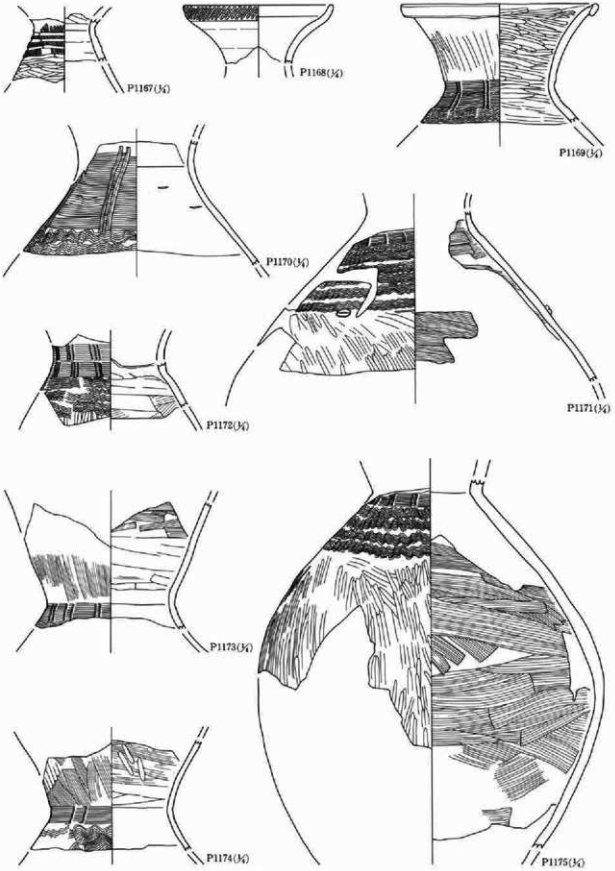
ト(1176, 1171, 1318, 1321, 1350, 1352～1356)として単独でも用いられている。後者の場合、波状文を画する横沈線が見られないことから、前者より省略された文様構成といえる。赤彩品は少なく、鋸歯文のネガティブな文様として用いられている(1339～1342, 1344, 1346)。

甕 口縁端部の形状は、内湾気味のもの、直状の単口縁、折り返し口縁が見られるが、前二者は明確に分離できない。2-2号河川跡下層に比べて、内湾あるいは内屈の強いものは少ない。また、口縁の長短、頸部の屈曲度によっても分類が可能だが、これは大中小の器種の相違にもとづく可能性が高く、ここでは破片が主体のためこれらを要項で一括する。文様は、口縁上端と肩部に波状文、頸部に簾状文を施すもの(1180, 1358～1365, 1368, 1369, 1372, 1391)、簾状文のかわりに波状文を施すもの(1182, 1366)、口縁全体に波状文を施すもの(1186, 1184, 1180, 1377～1383, 1385～1390)、口縁無文(1188～1190, 1357, 1370, 1371, 1373)が見られる。1183は口縁の上端と頸部、1375・1376は口縁の上半に二段の波状文を施す例で、前二者の中間的な文様構成といえる。口縁上端が内湾気味のものには、口縁無文か上端に波状文を施し、折り返し口縁には口縁全体に波状文を施す例が多い。口唇部に刻みは壺に比べて少ない(1384～1387, 1392)。

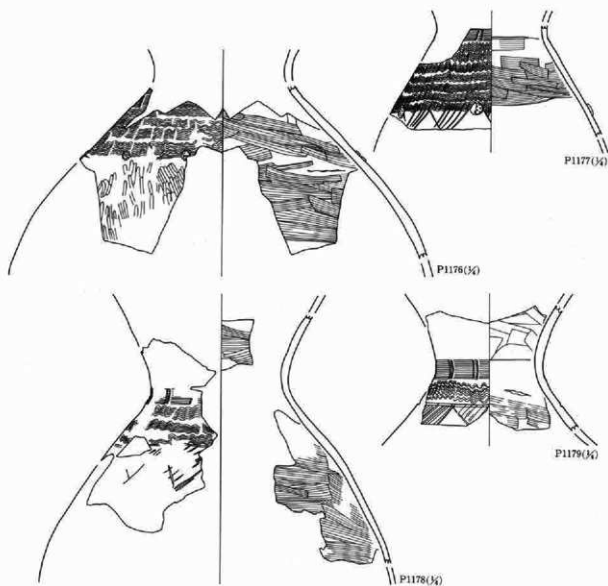
台付壺 口縁～肩部の破片だが、器形と文様の特徴から1181, 1195, 1196, 1372～1374, 1408～1415は台付壺と考えられる。口縁形状には内湾と直状の単口縁が見られるが、中間的なものも多く峻別は難しい。文様は、頸部の簾状文を基本とし、これに口縁上端と肩に波状文を施すもの(1181, 1372, 1374, 1409～1412, 1415)、口縁全体に波状文を施すもの(1408, 1413, 1414)、口縁無文(1373)がある。1196は口縁から肩部まで波状文のみ施す例である。脚部は高杯と酷似するため分離が難しいが、1214は被熱痕の存在から台付壺と思われる。

高杯 1207は脚部が短く外反する形状から中期後半にまで遡りうる。口縁形状は、小さく外折(1418～

第5節 V面の遺構と遺物



第97図 2-1号河川跡下層出土土器 (1) (1/4)



第98図 2-1号河川跡下層出土土器(2)(1/4)

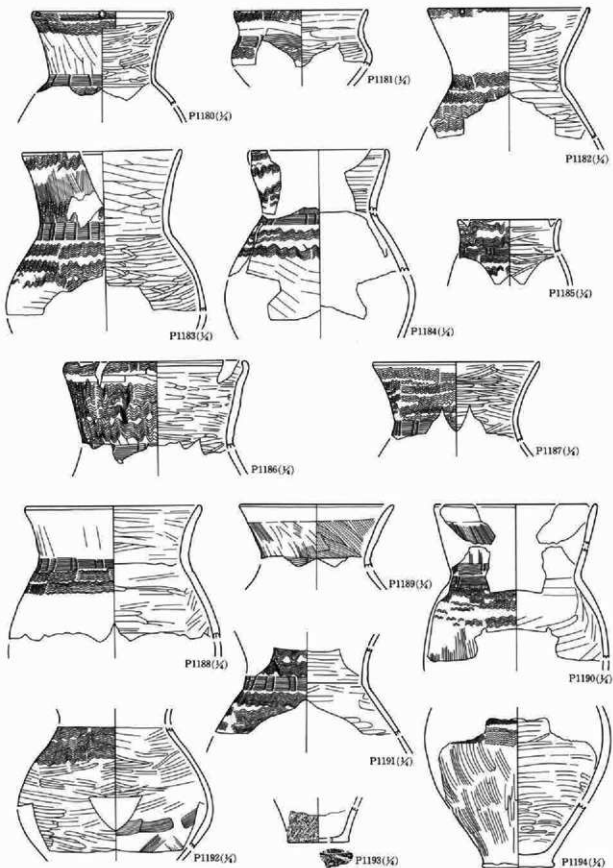
1426、1433~1436)、折り返し(1428~1432、1437)、外反(1438、1439)、内湾(1427、1440、1441)するものが見られる。文様は口唇部への刻みにほぼ限定される(1427~1439)。赤彩品は大部分を占め、内外面に施す以外に内面のみ(1424、1433、1437~1439)、外面の一部無彩(1425、1428、1441)が見られるが、外面のみ赤彩するものはない。1441は、口縁下に沈線と刻んだボタン状貼付文を連ね、口縁と体部に波状文を施した稀少例で、高杯としては過剰装飾ともいえる。1442は籠織沈線で斜線(羽状文か)を施した口縁である

が、壺の可能性もある。脚部は円錐形で、裾径と高さから大(1215)、中(1209、1211~1213)、小(1208、1210)に三分される。

鉢 逆載頭円錐形の形状で、口縁が内湾気味で比較的底径の大きいもの(1203、1205)と、口縁外反気味で底径の小さいもの(1204、1206)に分けられ、前者は赤彩を施す。ただし、実物は図示した場合ほどの差異は見受けられない。

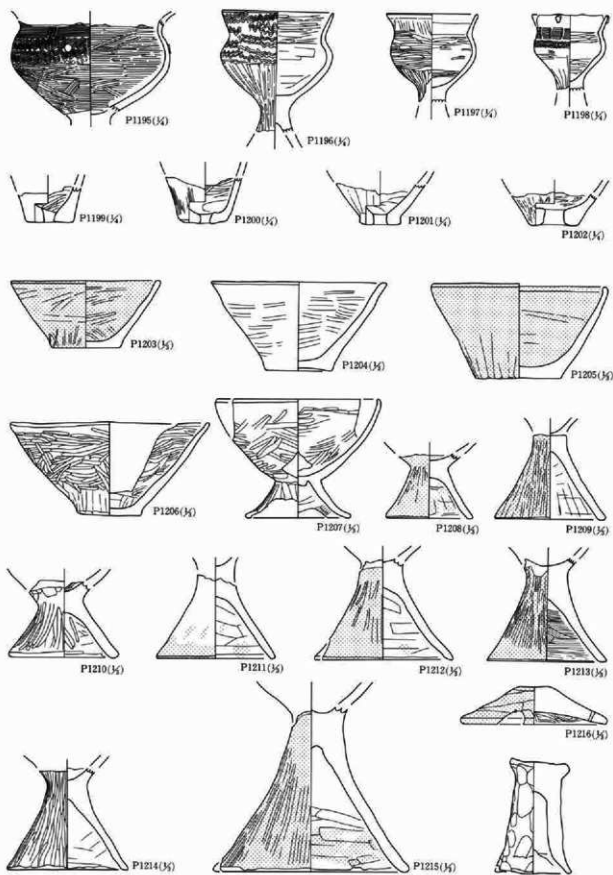
有孔鉢 底部のみが知られる(1199~1202)。いずれも焼成前の中央部一穴穿孔で、内外面は磨きを主と

第5節 V面の遺構と遺物

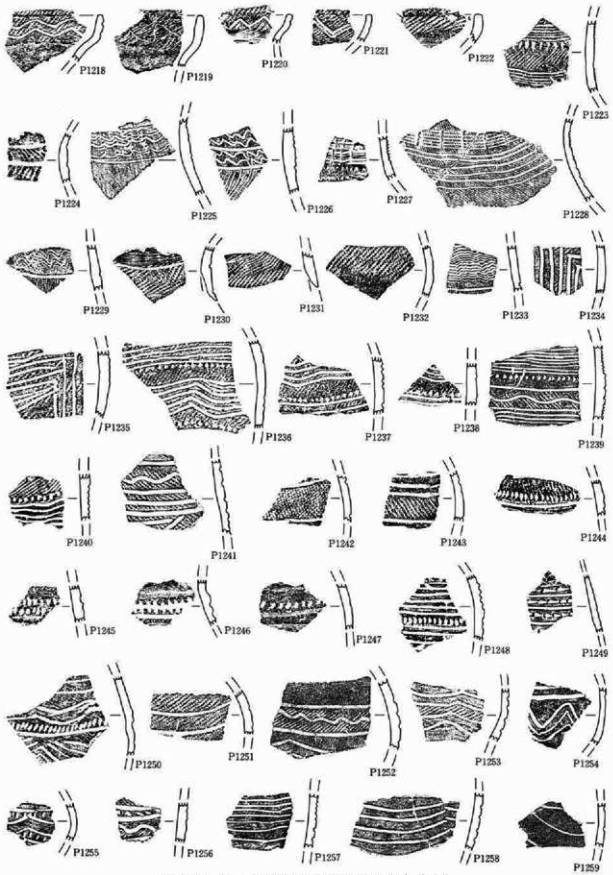


第99図 2-1号河川跡下層出土土器(3)(1/4)

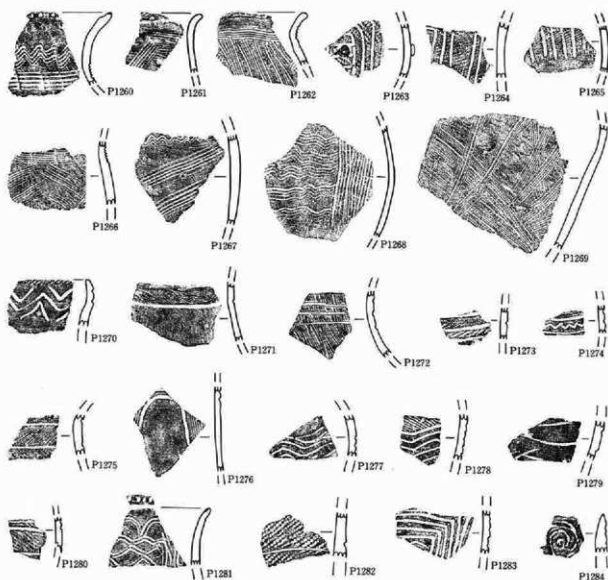
第2章 E区の遺構と遺物



第100図 2-1号河川跡下層出土土器(4) (1/3・1/4)



第101図 2-1号河川跡下層出土土器(5)(1/3)



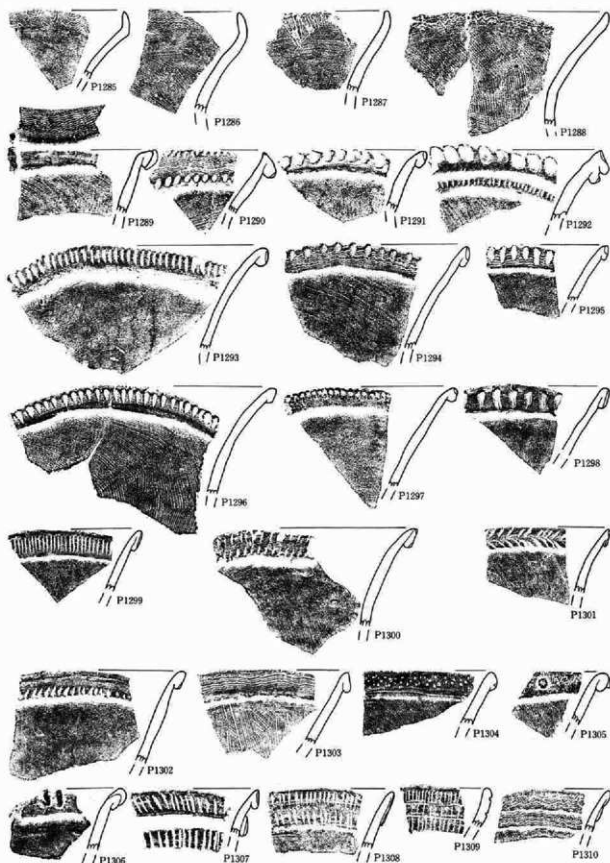
第102図 2-1号河川跡下層出土土器(6) (1/3)

する。被熱痕は不明瞭。

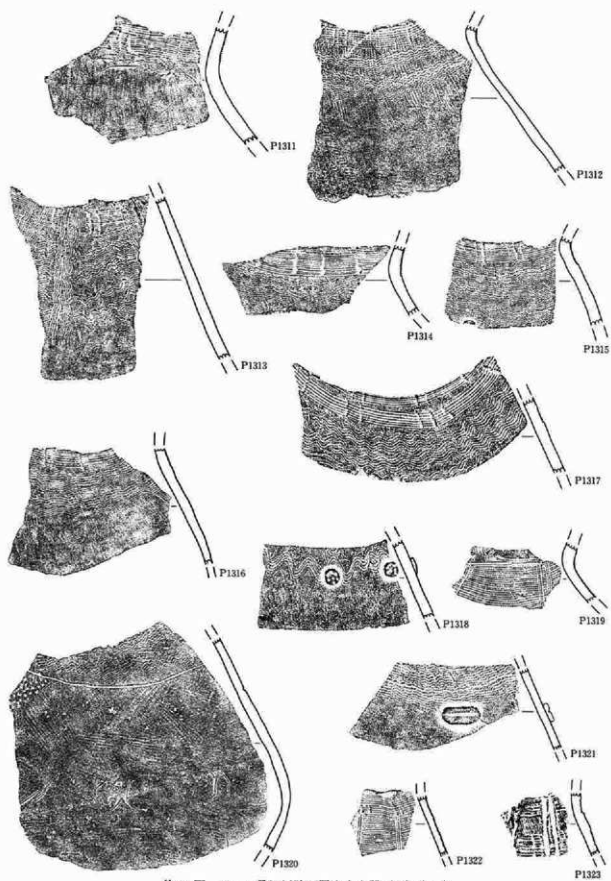
その他 1197と1198は小型台付鉢、1216は赤彩を施した壺用蓋、1416と1417は小壺である。1217は古墳時代の竈支脚に近似するが、器種不明。

縄文施文系土器 縄文を主文様とする一群を一括する。ただし、1443、1445の口縁片は中期にまで遡り得るもので、すべて後期とは限らない。1444と1447は口縁外面に2～3cm幅の横位斜縄文を施した例で、壺と思われる。1446は内湾する短い口縁の外面全体に縄文を施す。1448と1449は粘土紐積み上げ痕を残し

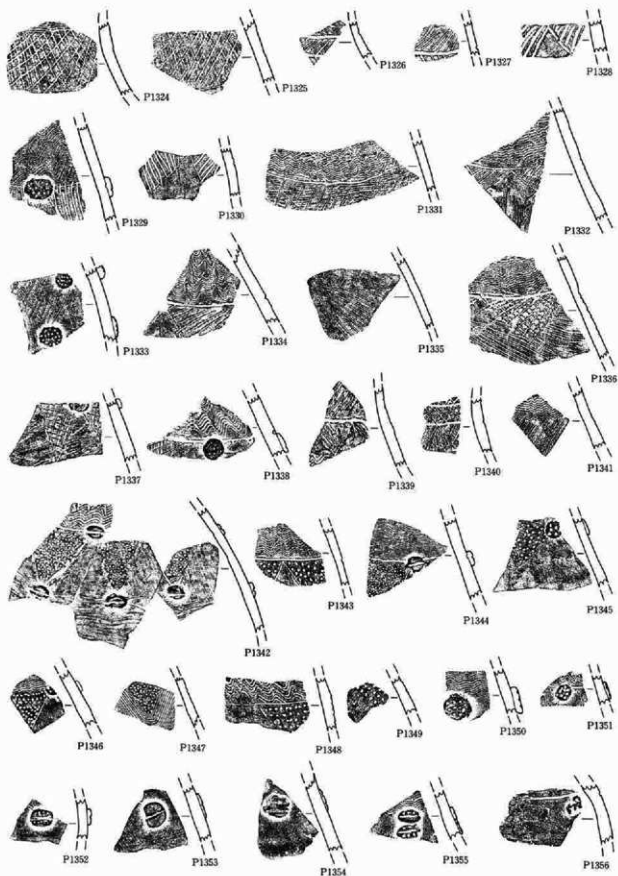
た外反する口縁の外面全体に縄文を施す。1450～1455は縄文は見られないが粘土紐積み上げ痕を裝飾要素とした壺の口縁である。1456～1470、1472～1473はいずれも壺ないしは壺の頸部～肩部破片で、横位斜縄文を施す。原体末端を強く押捺して横位の段状表現をしたもの(註7)は1470に見られる。1474は回転方向を変えた羽状縄文、1475は細密で細い無節、1476～1478は沈線で区画した例である。1479～1484は柳播文と縄文を併用した例で、ここには縷状文(1479～1482)、波状文(1483、1484)が見られる。縄文原体はL



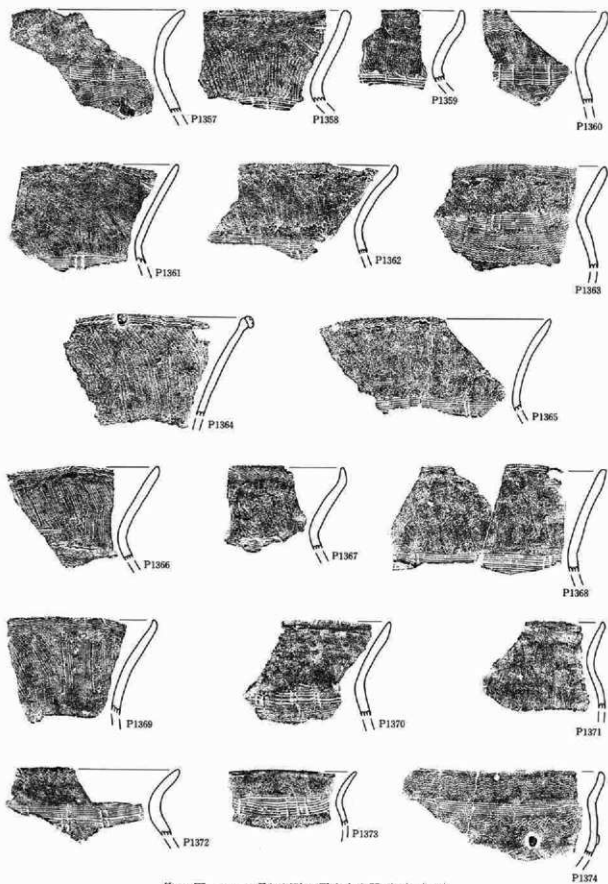
第103図 2-1号河川跡下層出土土器(7)(1/3)



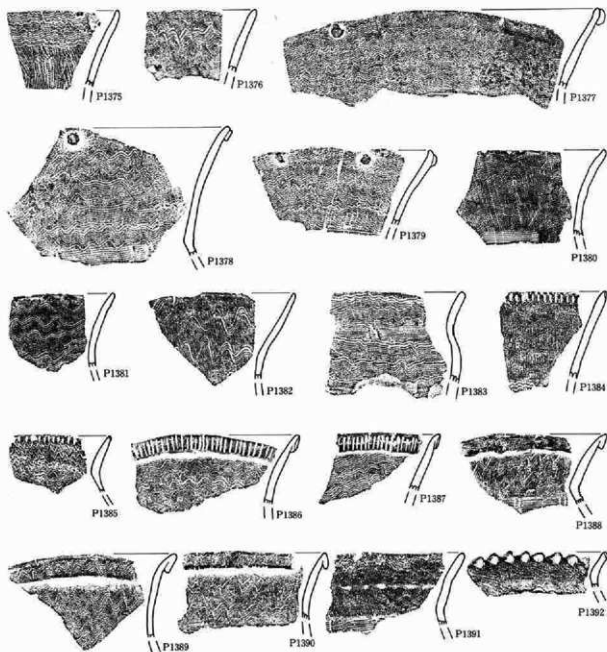
第104図 2-1号河川跡下層出土土器(8)(1/3)



第105図 2-1号河川跡下層出土土器(9)(1/3)



第106図 2-1号河川跡下層出土土器(10)(1/3)

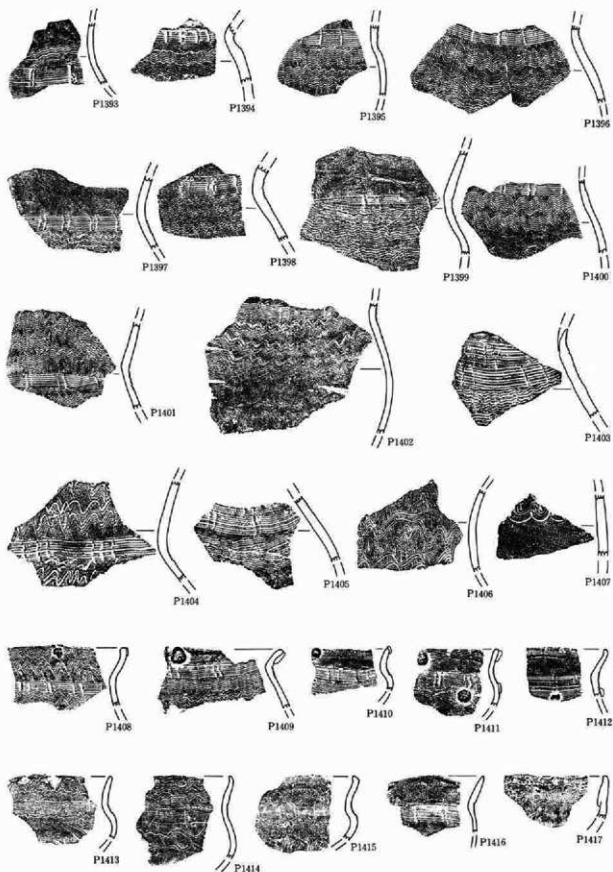


第107図 2-1号河川跡下層出土土器(11)(1/3)

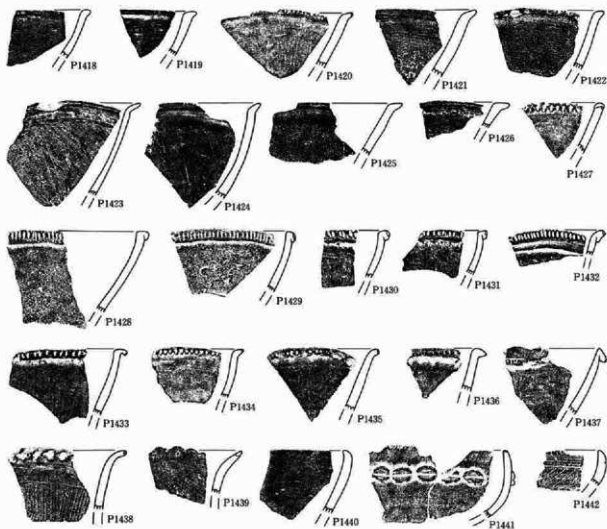
R (1444, 1446~1449, 1456, 1457, 1466~1469, 1472, 1473, 1476, 1477), R L (1458, 1459, 1462, 1465, 1470, 1471, 1474, 1478~1480), 1444~1447, 1457, 1463, 1464, 1476~1478は、節の中に同じ太さの束が整然と数条並行する特有の縄文で、複節L R R, R L Lが多い。1471は前々段多条(条数は不明)と思われる。1481と1482は麻状文が反時計回りに施しており、異質。1483は無節Rを施文し下端に結節をめぐらす。なお、1193は付加条第1種(LR + 2L)を施した胴下半部

で、底面には木葉痕が残る。1444, 1446~1449, 1456~1474は赤井戸・吉ヶ谷系土器(註8), 1479と1480は櫛式と赤井戸・吉ヶ谷系の折衷土器、1193は二軒屋式と思われる。なお、1450~1455は積み上げ痕を残すことから赤井戸式類縁として扱われる場合が多く、ここでも一緒に図示したが、その系統的位置付けは再検討する必要がある(註9)。

第2章 E区の遺構と遺物



第108図 2-1号河川跡下層出土土器 (12) (1/3)



第109図 2-1号河川跡下層出土土器 (13) (1/3)

2-1号河川跡中層出土土器 (第111~114図 図版103-1~106-1)

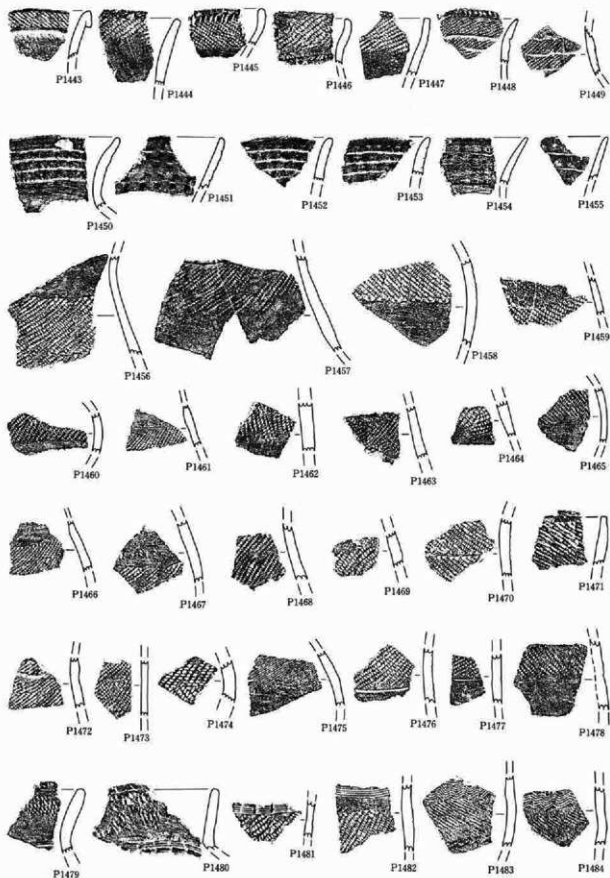
高杯の脚部(1499、1500)と壺頸部(1521)は中期後半~後期初頭に位置付けられよう。

壺 口縁が外反して開き、頸部が「く」の字状に屈曲する形状で、胴部は中位かやや下位に最大径をもつ(1485)。図示した口縁破片はいずれも折り返して、断面が涙滴状(1502~1507)、薄板状(1518)、わずかに膨らむ程度(1508、1517)のものが見られる。2段以上の粘土紐付加も見られる(1509~1516)が、概して整形に丁寧さを欠く。口縁の刻みは、指頭(1502、1503、1508)、棒状布ないし編紐(1504)、篦(1505、1506、1509、1511~1515)、板木口(1510)がある。図示しな

かったが1516のように無文も多い。刻み以外では波状文を施す(1507、1517、1518)。頸部~肩部は、簾状文と波状文の組み合わせ(1485、1519、1520)が主で、下位に鋸歯文も見られる(1522~1526)。1521は頸部から肩部にかけて細かい横位帯状の斜縄文を数段施し、これを地文として沈線による鋸歯文を描く。1522は頸部簾状文の直下に鋸歯文を施文し、なおかつ簾状文が反時計回りという異質なものである。赤彩は比較的少なく、ここでは1524にみるだけである。

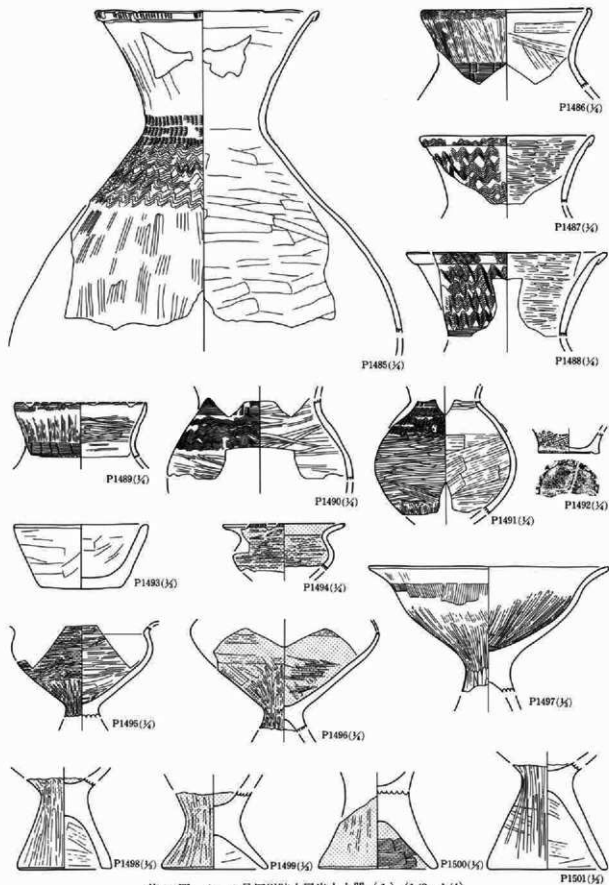
壺 口縁上端が内湾して口頸部が短く、口縁上端と頸部以下に施文するもの(1486、1489、1527~1530)と、口縁がやや長く外反し、全体に波状文を施すもの(1487、1488、1533)、口縁中位に波状文を施すもの

第2章 E区の遺構と遺物



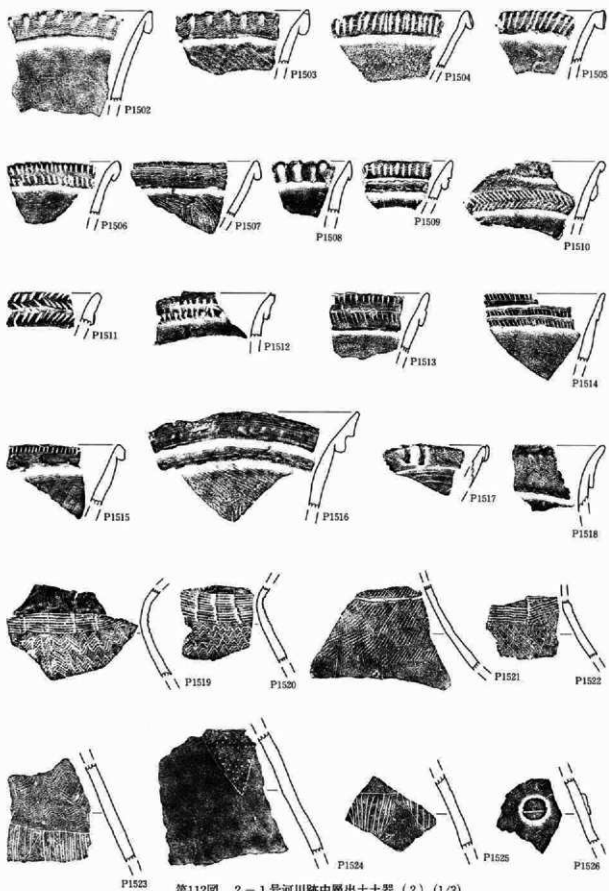
第110図 2-1号河川跡下層出土土器 (14) (1/3)

第5節 V面の遺構と遺物

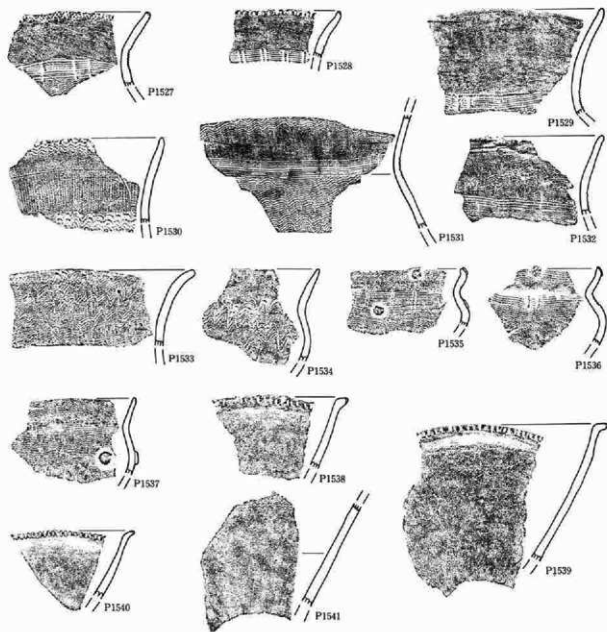


第111図 2-1号河川跡中層出土土器(1) (1/3・1/4)

第2章 E区の遺構と遺物



第112図 2-1号河川跡中層出土土器(2)(1/3)



第113図 2-1号河川跡中層出土土器(3)(1/3)

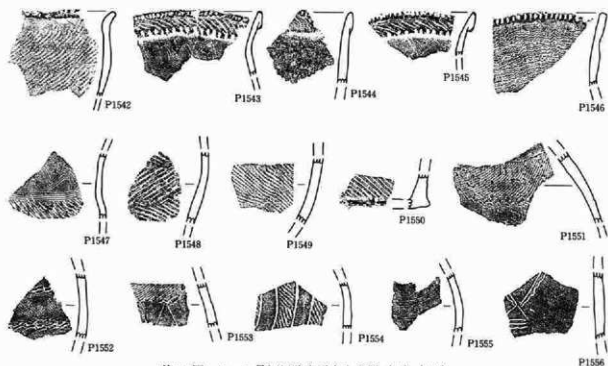
(1531、1532)の三者が見られる。前者は口縁に波状文(1486、1489)のほか、縄文(1527)、刻み(1528、1530)がある。1534～1537は口縁～肩部破片で台付甕ないしは小型甕と思われる。1535と1536は口縁上端が内湾して肩の張る器形で、口縁下半を無文とし、小さいボタン状貼付文を付す。1534と1537は直線的な口縁に張りの弱い体部をもつ器形で、前者は口縁無文、後者は口縁に波状文を施す。

高杯・鉢 高杯は杯部が浅鉢形(1538～1539)で、機

能的に類似するものとして小型の扁平な台付甕形で赤彩を施した台付鉢(1494～1496)がある。1497はその中間的な形状を呈する。前者は口唇部が小さく外折し、後者は口縁が強く屈曲して外反する。1539、1540、1494～1496は赤彩される。1497は器形の特徴から、他よりも後出的といえよう。1493は逆載頭円錐形の小型鉢で、器壁が厚く底径の大きいのが特徴である。

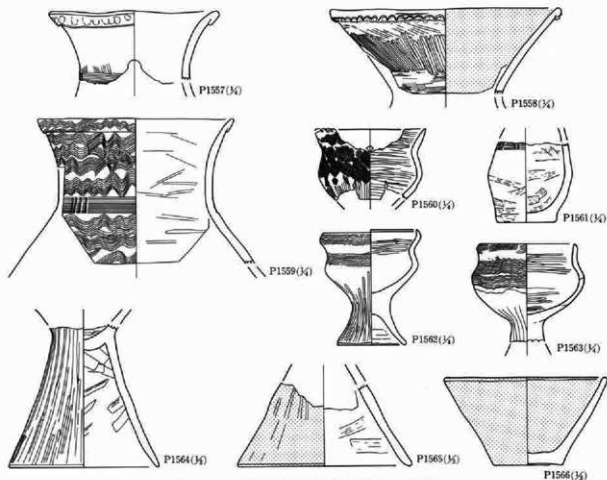
外来系土器 1554と1555は、沈線で渦文ないしは同

第2章 E区の遺構と遺物



第114図 2-1号河川跡中層出土土器(4) (1/3)

心円文を描く東北地方南部系の壺肩部破片である。前者は渦文内を縄文で充填し、他を磨り消す。後者は細い平行沈線を用いる。いずれも中期後半に位置付けられるが、前者が南御山Ⅱ式、後者が山草荷式ないし陣場式と並行すると思われる。1492、1543～1550は、栃木県に主な分布地域をもつ後期の二軒屋式土器と思われる。1543、1545は口縁部、1492・1547・1548・1550は肩部全体に付加条縄文(1種で2条付加)を施す。1548は同一原体を縦横に押捺して羽状を構成する。1543・1545～1547の頸部には、先端の鋭い櫛状具で波状文を描く。なお、1492には底面に木葉痕を残す。1551～1553は南関東系の後期、弥生町式と思われる壺肩部破片で、S字状結節文で区画した横位帯内部に細かい斜縄文を充填する。原体は、1551と1552はLRで、1552は細かい羅網による回転痕と思われる。1542は口縁が僅かに外反する深鉢形で、口唇部と外面全体に斜縄文(LR)を施文する。1556は全体に丁寧な研磨を加えた黒色の土器で器形は不明。直線と波線を組み合わせた鋭い沈線で幾何学様の文様を描く。時期や型式は不明。



第115図 2号河川跡上層出土土器 (1/3・1/4)

2号河川跡上層出土土器 (第115図 図版106-1)
 壺 (1557・1558)、甕 (1559)、小型台付鉢 (1560・1562・1563)、高杯 (1564・1565)、鉢 (1566)、小型甕 (1561) を掲げた。弥生土器は少なく、小型品を除いてほとんどが小破片で、器形に分かるものはわずかである。甕は1599のように口縁から肩部にかけて波状文、頸部には2連止以上の多連止縷状文を施すものがほとんどである。

2号河川跡出土土器 (第116～118図 図版107-1～109-1)

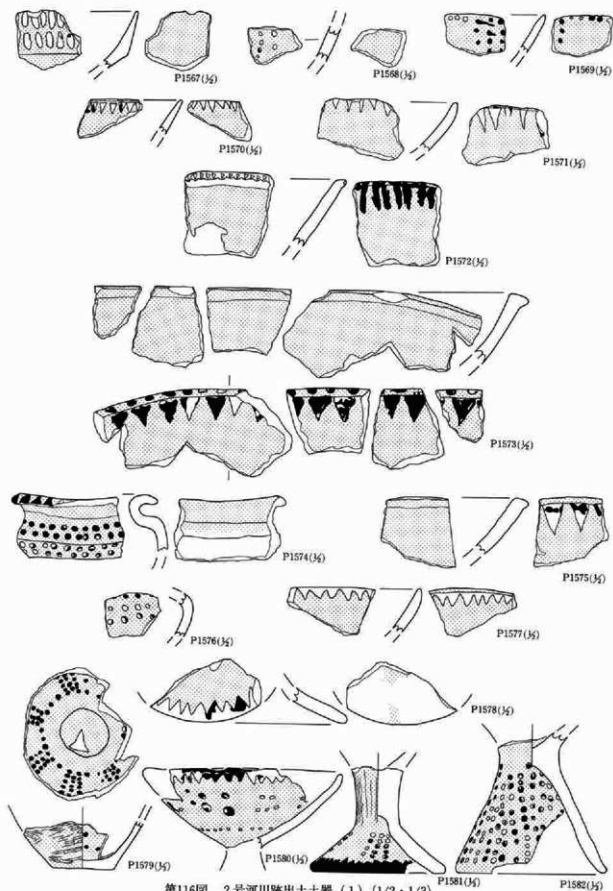
第116図には黒漆による彩文を施した土器を示した。1567は壺口縁、1568～1572・1577は高杯ないしは鉢の口縁、1573～1576・1580は高杯口縁、1579は鉢底部、1581・1582は高杯脚部である。いずれも、赤彩の

うえに黒漆で列点や鋸歯文を配列して文様を描く。彩文は西日本の前期弥生土器に特徴的に見られるように、赤色顔料(ベンガラが主)で文様を描くのが通例であるが、本例のような赤地に黒漆の彩文は、弥生土器ではほとんど類例を見ない異色の存在(註10)といえる。時期は、1581が中期後半～後期初頭で他は後期に属すると思われる。

第118図は手づくね・ミニチュア土器を一括した。器形から、鉢 (1610・1611)、甕 (1613・1614)、甕 (1616・1617)、高杯ないし台付甕 (1618～1622・1627～1629)、壺 (1623・1626) と実用器種の大部分を模倣する。1615・1624・1625の浅い筒形品は器種不明で、古墳時代に下る可能性がある。

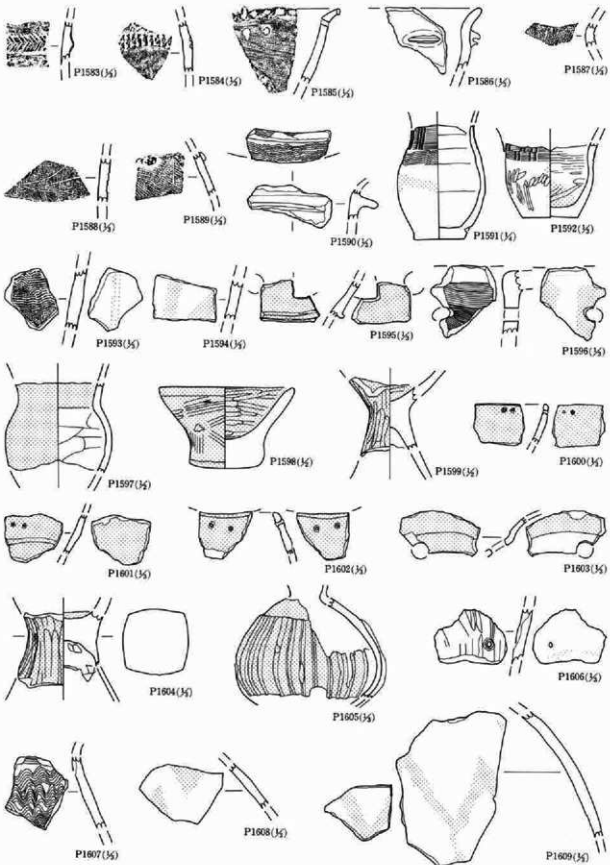
第117図は特異な器形や文様をもつものを掲げた。1583は頸部に断面三角突帯を貼付けて縷形状の刻

第2章 E区の遺構と遺物



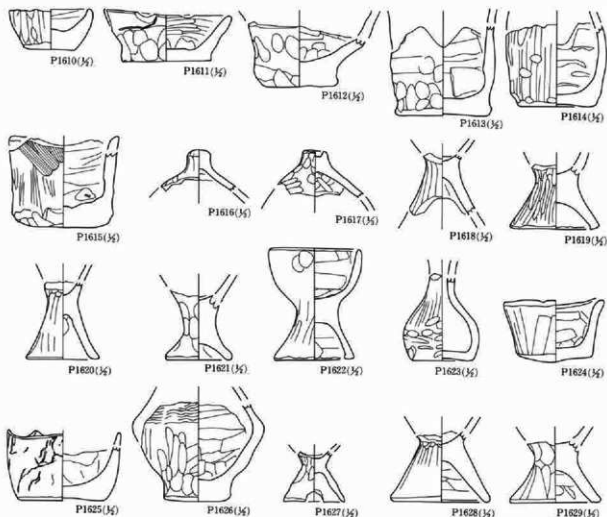
第116図 2号河川跡出土土器 (1) (1/2・1/3)

第5節 V面の遺構と遺物



第117図 2号河川跡出土土器(2) (1/2・1/3・1/4)

第2章 E区の遺構と遺物



第118図 2号河川跡出土土器(3) (1/2・1/3)

み、1583は肩部と胴部の境に兼先で刺突列を施した例で、後者は当地の弥生土器には見られない手法である。1586は壺口縁に粘土を貼付けて顔を表現した例で、目の部分にあたる。1588と1589は沈線による記号文ないしは絵画的表現が表されている。1589は三本の直線が下方に開く「水鳥の足」文とも呼ばれる矢印記号であり、中期後半に良く見られるが、これはボタン状貼付文から後期の所産と思われる。1590は鐃状に突出した壺の口縁と思われる。1591と1594は、部分的に赤彩を施した彩文である。1598は小型鉢だが、一般的な器形(1566など)に比べて大きさが1/2ほどしかなく、また底部が突出し器壁も厚い、1597の短頸壺形や1599の高杯形と同様にミニチュアと考えられる。1600と1602は鉢ないしは高杯と思われる口縁に2

個一対の小孔を穿つ。1595・1596・1603は、脚部以外に穿孔していることから、高杯ないし裝飾器台と思われる。1604は横断面が方形の脚部をもつ大型の高杯で、他に顔を見ない。1605は細い粘土紐を垂下させて筆状に包みこんだ状態を擬した壺で、当地の弥生土器には稀少例である。1608と1609は大きな鋸歯文を赤彩で描いた壺肩部で、南関東ないし東海地方西部の後期土器ないしはその影響をうけた例である。古墳時代初頭に属する可能性あり。

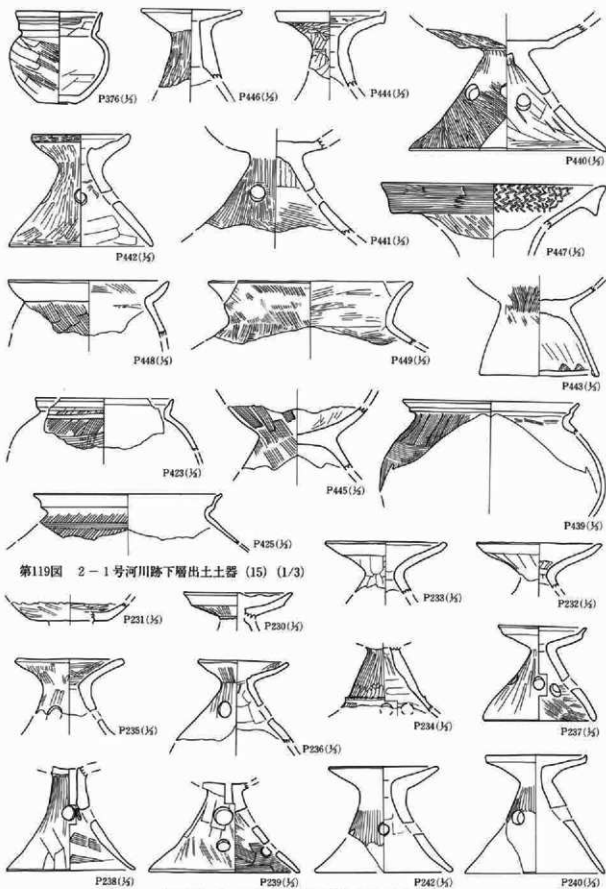
[注]

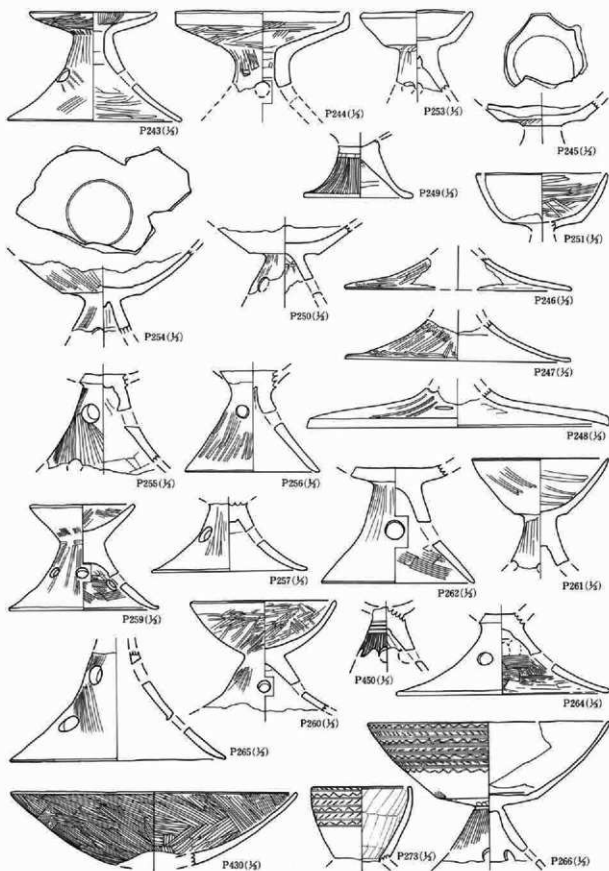
- 1 一見単節筒縄文に近似するが、筋は深く小さな菱形で、右捻りとも左捻りとも取れる特殊な縄文様式がある。本場では、中期後半の電見町式よりも後期の赤井戸・吉ヶ谷系の縄文土器群によく見られる。類似は南関東でも知られており、横濱市大塚遺跡の報告では撰った縄ではなく、3本以上の縄の編みした紐を結び上げた原体を復元し、これによる特殊な回転圧痕を「編紐文」と命名して紹介している(1994 坂上)。この原体によれば確かに近似した文様を呈する事ができるが、回転押痕を施した赤井戸式などの実例をみると、筋の細かいものはよいものが多い。このことから本文中で述べたように布を柔軟な棒状具に包めた原体も考え得る。ただし、この場合形状に固定しておく方法が不明であり、復元はできない。
- 2 縄文の普及、定着を後期土器のメルクマールとすれば、類についてはa・b類と分類して後期に含めてもよい。しかし、宮城県清里厚田塚遺跡出土土器群は、縄文が優位を占めているにもかかわらず、当地域の中期末段階に位置付ける点では評価がほぼ定まっている。筆者もこれに従って類をこの段階と考え、中期として扱ったが、どちらに位置付けるかはこの際大きな問題ではない、というのも、これを過渡期的な土器群として中期に位置付けることで、単なるタイムスケールとしてはなんらの問題なく説明できるからである。むしろここで問題なのは、土器そのものの変遷過程に中期や後期といった時代区分の前期を読み取るか否かだろう。本文中においては便宜的な分類として「後期」と「中期」に分類して記述したが、当然のことながら存在する過渡期的土器群は明確に分離できるものではなく、中途半端な位置付けとなっている。従来当地域の弥生時代編年においても、この点をあみないままか、あるいは隣接地域の編年群を援用して時期区分を行って来た傾向がある。異なるない編年の検証によって漸移的な変遷過程が明確になって来た時点では、従来の前・中・後の三時期区分では十分説明しきれなくなっているのが現状だろう。だとすれば、今後の編年では中期か後期かを問うことは重要な意味はもたず、むしろ電見町式や棒式の概念とその変遷過程の再確認を図り、土器様式の変遷に見られるはずの本家の編年について検討を行うべきと考える。
- 3 小瓶片のため、搬入品か模倣品かの判別は困難。旧利根川(現在の広瀬川)左岸の群馬県中央部から東部にかけての地域と北部の片品川流域には、少数ながら中期後半の東北地方南部の土器が分布する。これはあるルートを通じて会津盆地や相馬地方との交流を示す事例であるが、後期以降は2〜3の例外を除いてほとんど交流の痕跡が見られなくなるのがわかっている(1986 柿沼、1988 大木)。
- 4 井上、柿沼氏が関東地方北西部の弥生土器群の中で、「丸く子文」と呼称したものと同一の文様を指す。(1977 井上・柿沼)
- 5 藤沼流紋文Ⅱ型(1964 佐原)に相当する。棒式の流紋文はⅠ型を基本としており、本例はきわめて例外的な存在である。
- 6 横位の編紐羽状文を施した妻は長野県久木地方の影響と思われるが、群馬県ではほとんど普及していない。この文様はむしろ壺の唇部文様として採用され、県南西部の鍋川流域土器部では一般化している。
- 7 岡田篤雄が赤井戸式土器の縄文の特徴として「段状縄文」と命名したものにあたると。(1966 岡田)
- 8 赤城山麓に分布の中心があると思われる赤井戸式土器は、埼玉県中央部の比企丘陵周辺を中心に分布する吉ヶ谷式土器に類似しており、両者はしばしば混同された。あるいは何らの型式的検討もなされることなくどちらかの名称で呼ばれることが多い。現状では不自然な分布の問題や、それぞれの特徴について充分に説明されているとは言いがたく、安易に両者を同一視するのは早計である。しかしながら、外見上ほとんど違いのないこの土器について、まったく別の型式のように異なる名称で呼びならわすのは不都合であるし、今後の研究の妨げにもなりかねない。また、実際に遺跡から出土する本類土器をどちらの名称で呼ぶべきかは現実の問題として悩まされる。仮言すれば、群馬県で出土したら赤井戸、埼玉県なら吉ヶ谷といった歴史的背景を無視した呼称にもなりかねないし、そのような提言は本類土器のもつ本来の歴史的重要性を著しく重なる結果になるだろう。ここでは、将来に両者は同一様式としてとらえられるとの見通し(1985 大木・小島)に立ち、一括して取り扱うつもりである。名称としては、「赤井戸」と「吉ヶ谷」の学史的名称を残しつつ両者を包括して、「赤井戸・吉ヶ谷系土器」と称称しておく。なお、分布の問題については、近年両地域の中間地帯にあたる群馬県南西部の鍋川流域でほとんどその存在が知られるようになってきており、この地域の分析が両者の関係を解するひとつの鍵になるのではないかと期待している。
- 9 鍋川流域では、この種の土器が棒式土器に伴う例が増えてきている。なかには縄文ではなく縄文を主文様としてもつ場合も少なくない。確かに赤井戸・吉ヶ谷系土器には多く見られる手法であるが、これは限られた型式的特徴として固定的にとらえるよりも、南関東や印旛・手賀沼地域の後期の要に見られる同一手法の土器も視野に含めて、その出自や変遷、分布の背景を再検討すべきだろう。
- 10 同様の例は、長野県長野市篠ノ井遺跡群聖山遺跡地点S B-56出土の鉢に見られる。

[参考文献]

- 1964 佐原 真「第五章 後述 土器製作技術の変遷 注」『第2巻』
- 1966 岡田篤雄「彌生土器およびその周辺の弥生式文化」
- 1977 井上唯雄・柿沼忠介「入門講座 弥生土器—北関東2—」『考古学ジャーナル』141
- 1978 馬目一「入門講座 弥生土器—南東北4—」『考古学ジャーナル』156
- 1981 財団法人群馬県縄文文化財調査事業団「清里厚田塚遺跡」
- 1985 大木幹一郎・小島純一「赤井戸式土器と吉ヶ谷式土器」『柏川村の遺跡』柏川村教育委員会
- 1986 柿沼忠介「寛口前原遺跡」『群馬県史 資料編2 原始古代2』
- 1986 北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所 群馬県考古学協議会「第7回 三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器」
- 1988 大木幹一郎「群馬県東部における弥生時代中期後半の土器について」『群馬の考古学 創立十周年記念論集』財団法人群馬県縄文文化財調査事業団
- 1988 財団法人群馬県縄文文化財調査事業団「新保遺跡Ⅱ」
- 1990 財団法人群馬県縄文文化財調査事業団「新保田中村前遺跡Ⅰ」
- 1991 大木幹一郎「赤井戸式土器の類型について」『研究紀要』8 財団法人群馬県縄文文化財調査事業団
- 1992 財団法人群馬県縄文文化財調査事業団「新保田中村前遺跡Ⅱ」
- 1993 財団法人群馬県縄文文化財調査事業団「新保田中村前遺跡Ⅲ」
- 1994 坂上弘弘「IVまとめ」『大塚遺跡Ⅱ』財団法人横濱市ふるさと歴史財団

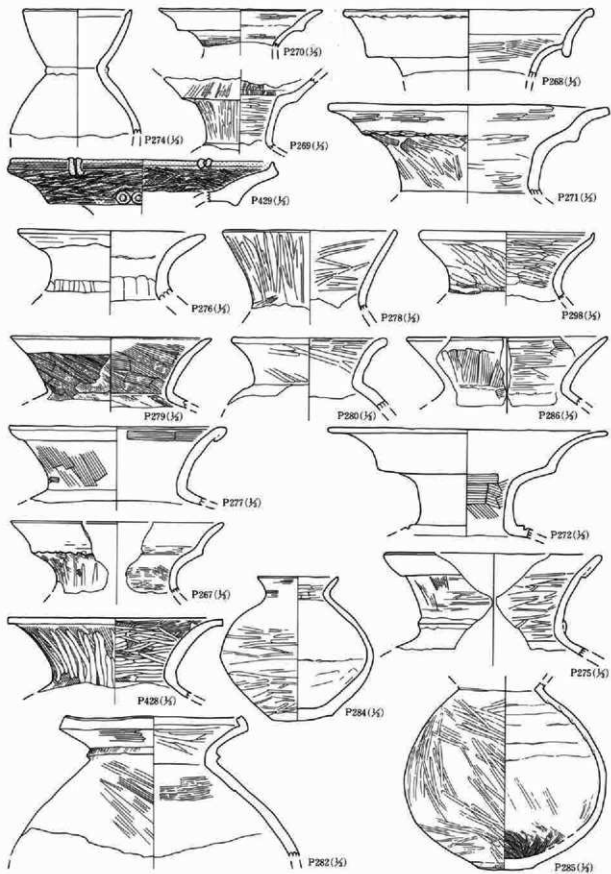
第2章 E区の遺構と遺物



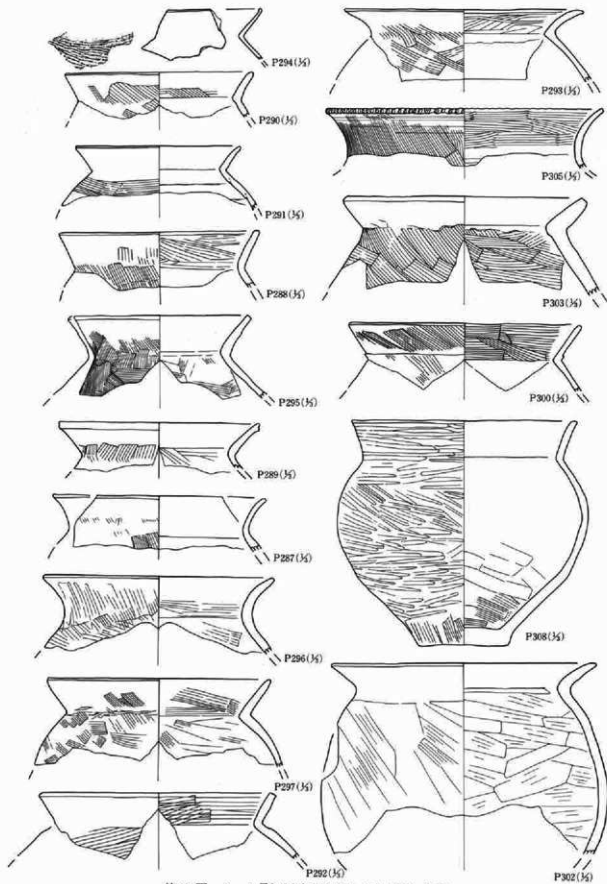


第121図 2-1号河川跡中層出土土器(6)(1/3)

第2章 E区の遺構と遺物

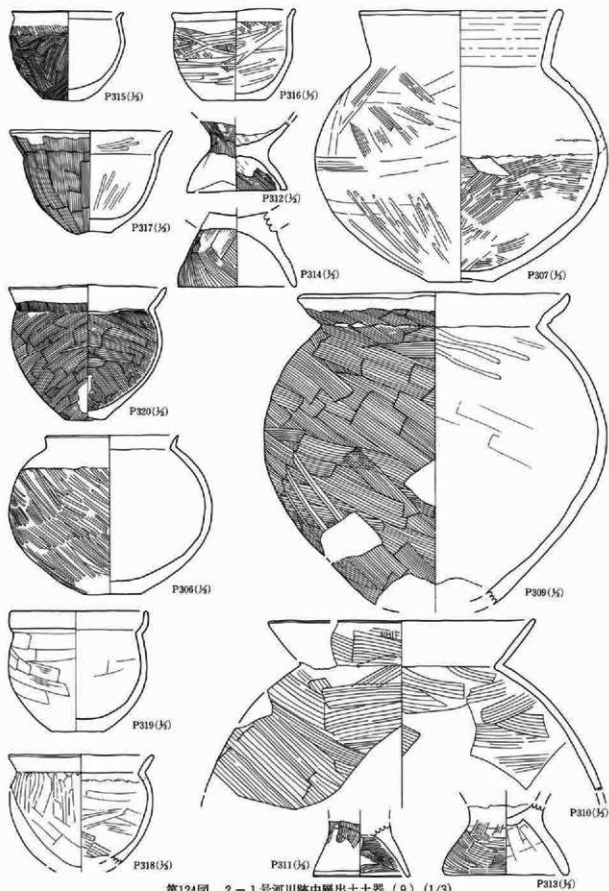


第122図 2-1号河川跡中層出土土器(7)(1/3)

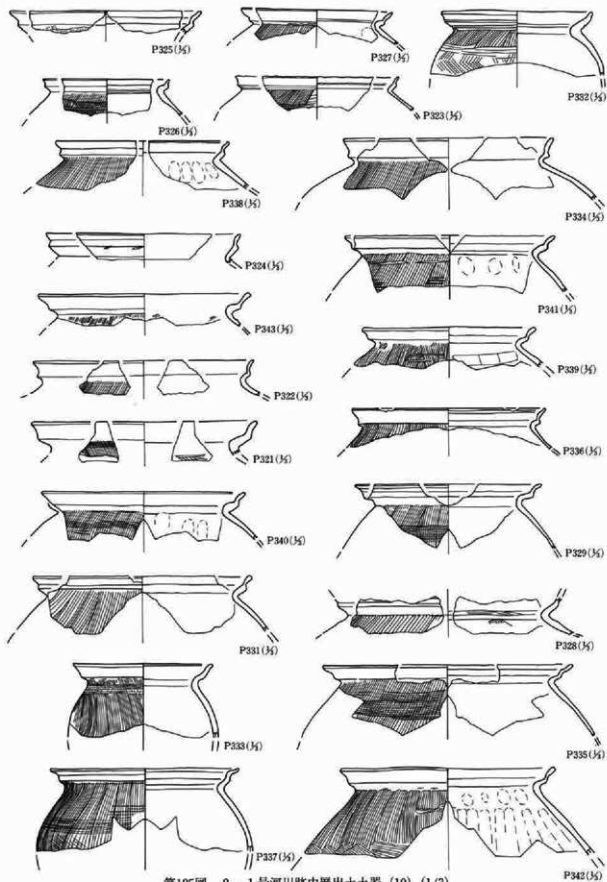


第123図 2-1号河川跡中層出土土器(8)(1/3)

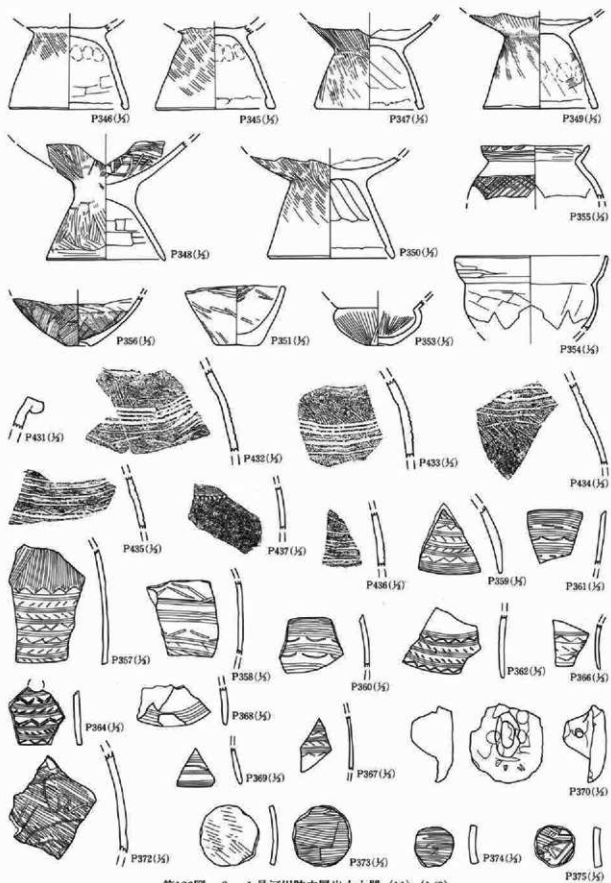
第2章 E区の遺構と遺物



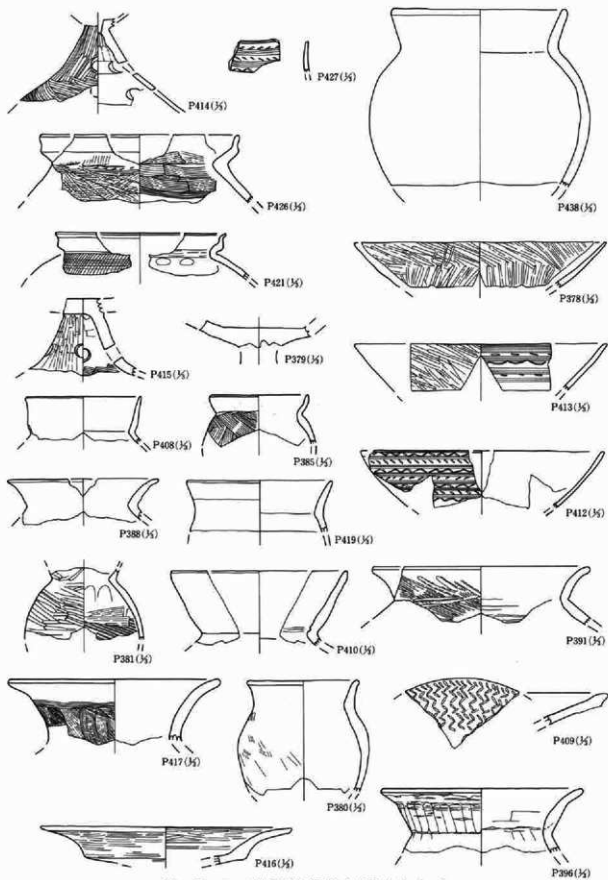
第124図 2-1号河川跡中層出土土器(9)(1/3)



第125図 2-1号河川跡中層出土土器 (10) (1/3)

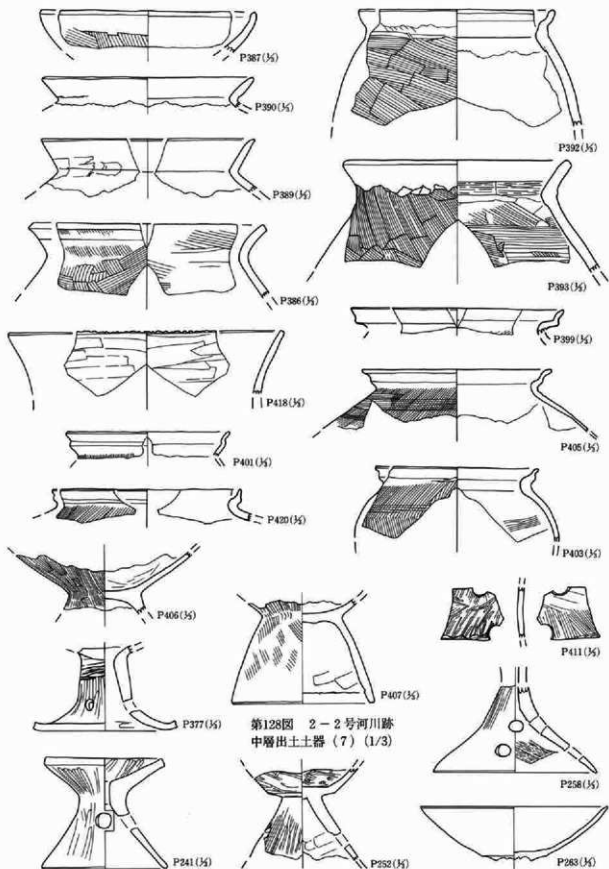


第126図 2-1号河川跡中層出土土器 (11) (1/3)



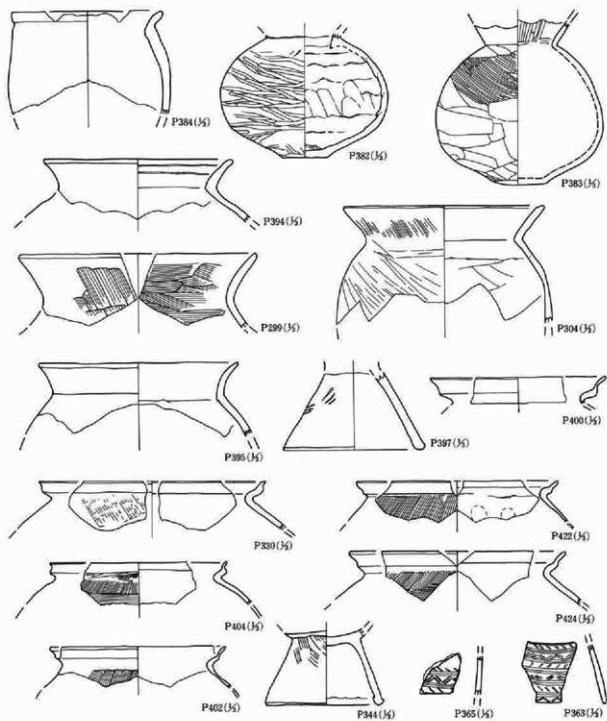
第127図 2-2号河川跡中層出土土器(6)(1/3)

第2章 E区の遺構と遺物



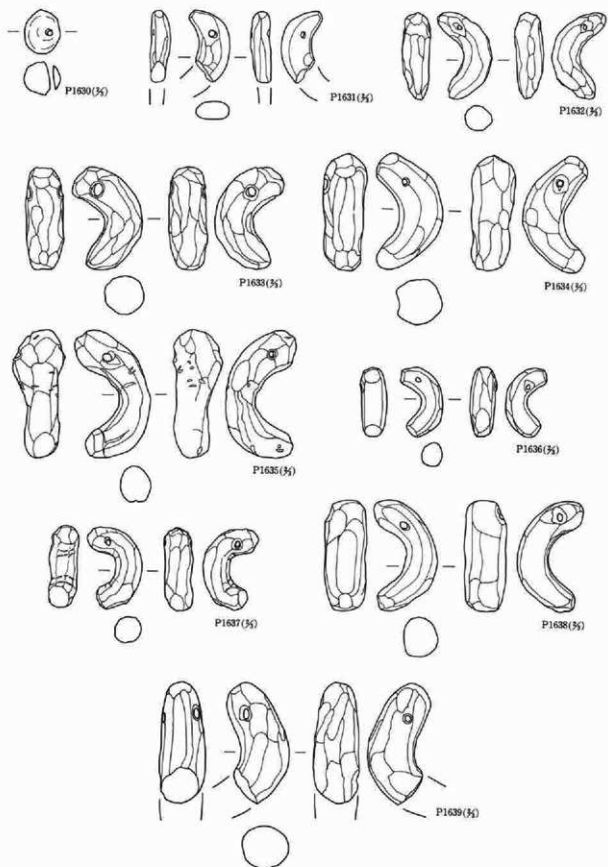
第128図 2-2号河川跡
中層出土土器 (7) (1/3)

第129図 2号河川跡上層出土土器 (2) (1/3)

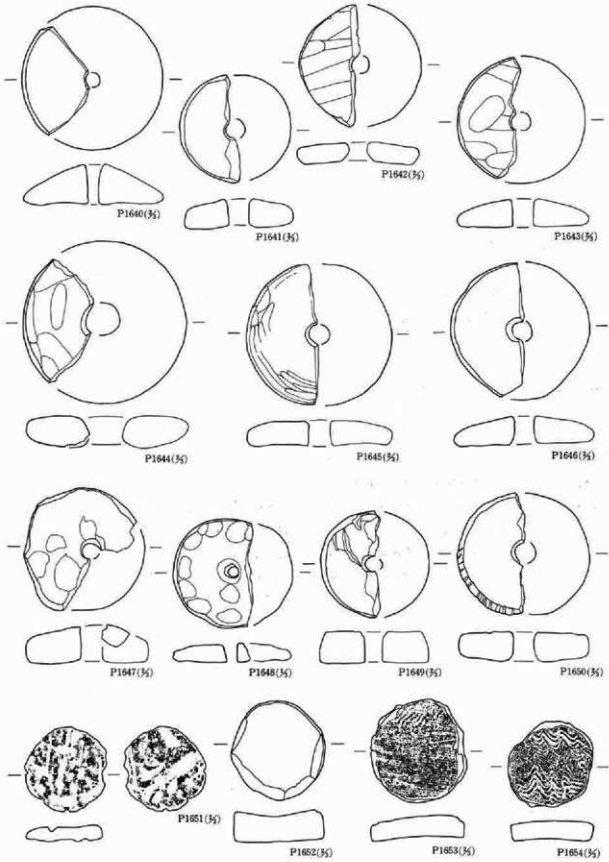


第130図 2号河川跡上層出土土器(3)(1/3)

第2章 E区の遺構と遺物



第131図 2号河川跡出土土製品 (1) (2/3)



第132図 2号河川跡出土土製品(2) (1/3・2/3)

2号河川跡出土石器

2号河川跡からは他の遺物とともに16種類の石器類が出土した。これらの石器類は縄文時代石器の混入や小河道の切り合いによる混入があるが、弥生時代後期を中心とした時期の石器様相を一部示している可能性がある。石器の種類による2-2号河川跡と2-1号河川跡の量比や様相は変化がなく、一括して扱うこととした。

なお、出土総点数1308点のうち約50%は頁岩と黒色安山岩の剥片で素材剥片と考えられる。剥片を除く石器類(647点)のうち最も量比の多いものは剥片石器と磨石でこの2種で全体の50%強を占め、次に多いのは砥石・台石で全体の20%弱を占める。以下、出土石器の概要を記する。

磨製石鎌(第133・143図 図版121-1)

13点が出土し、うち7点が未製品で7点が破損している。製品は五角形を呈する凹基式で中軸線上に小孔を持ち側縁部に沿って稜を持つ。長さは4.1~2.1cm、幅2.3~1.5cm、厚さ0.3~0.1cm、重さ1g前後と小型のもので、幅広のもの(S-36~38)と幅の狭いもの(S-42~44)とがある。

また、未製品や素材剥片も含め県南西部に産する珪質準片岩を使用しており、素材を持ち込んで集落内で製作していたものと考えられる。

打製石鎌(第133・143図 図版121-1, 129-1)

3点が出土し、うち1点(S-285)は縄文時代の無茎石鎌と考えられる。S-48・49はやや五角形をなす小型の有茎石鎌で弥生時代のものと考えられる。

磨製石斧(第133・134・143図 図版121-2・129-1)

7点が出土したが縄文時代の乳房状磨製石斧である1点(S-59)以外はすべて破片で、磨石に転用されたものが1点(S-55)ある。5点は大型蛤刃石

斧でS-56は基部が平基で断面形状が円形に近い。S-205は偏平片刃石斧の破片と考えられる。大型蛤刃石斧に使用された石材ははんれい岩・かんらん岩・閃緑岩であり、県内で大型蛤刃石斧に使用される例の多い石質である。

打製石斧(第134・143・145図 図版124-1, 129-1, 130-2)

13点が出土し短冊形5点(S-63~66・227)、分銅形4点(S-67~69・206)、楔形2点(S-62・70)、有肩形?1点(S-71)、不明1点である。縄文時代のものも混入していると考えられ、自然面を残すものが多い。石材としては安山岩・玄武岩・頁岩が用いられている。

石核(第134・139・148図)

10点が出土し不定形で自然面を残し多方向より打撃が加えられている。石材は頁岩で剥片石器のほとんどを占める石材であり剥片も同様である点から、剥片石器の母岩と考えられる。

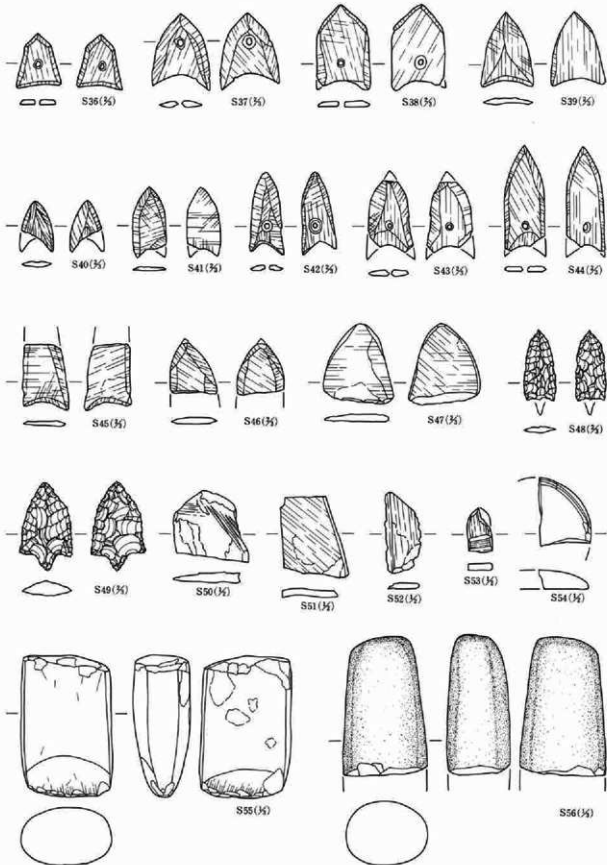
剥片石器(第135・139・141~143・145・148・149図 図版122-1, 125-2, 127-1, 128-1, 129-2, 130-2, 132-2, 133-1)

169点が出土したが剥片の中には微細な剝離が側縁部にあるものもあり使用による可能性はあるがこれらは除外した。剥片石器は側縁部の刃部の辺数により4種類に大別し、さらに各刃部の接続状態により9種類に区分した。

1側縁刃部剥片石器 不定形をなす剥片の1側縁部を刃部としたもので、直線的な刃部を持つもの(S-72・73・133・158~161・163~166・229・251・272)と弧状に外湾する刃部を持つもの(S-74・75・134・135・162・228・231)とがある。

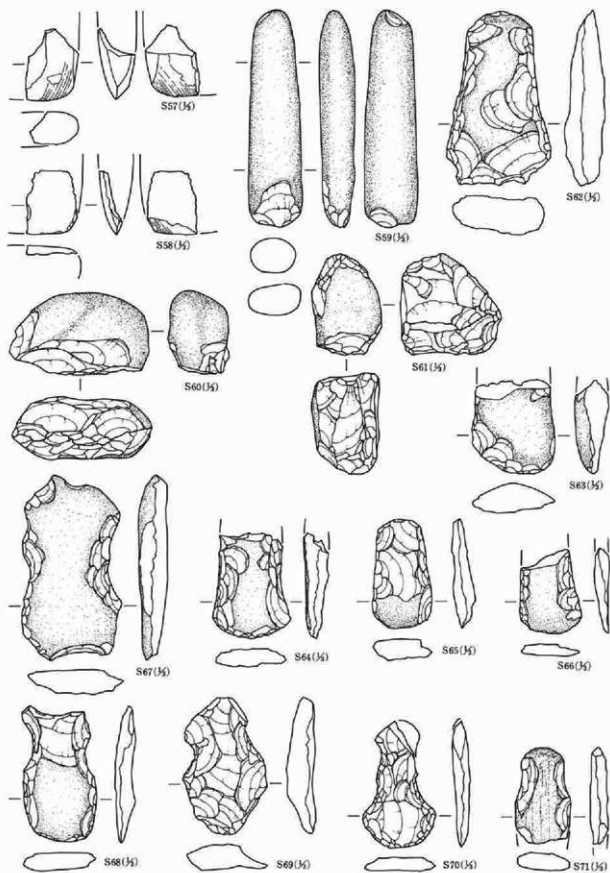
2側縁刃部剥片石器 不定形をなす剥片の2側縁部を刃部としたもので、L字形や逆L字形に刃部を付けたもの(S-76~80・136・137・169~173・273)や相対する側縁部を刃部とするもの(S-81・82・

第5節 V面の遺構と遺物

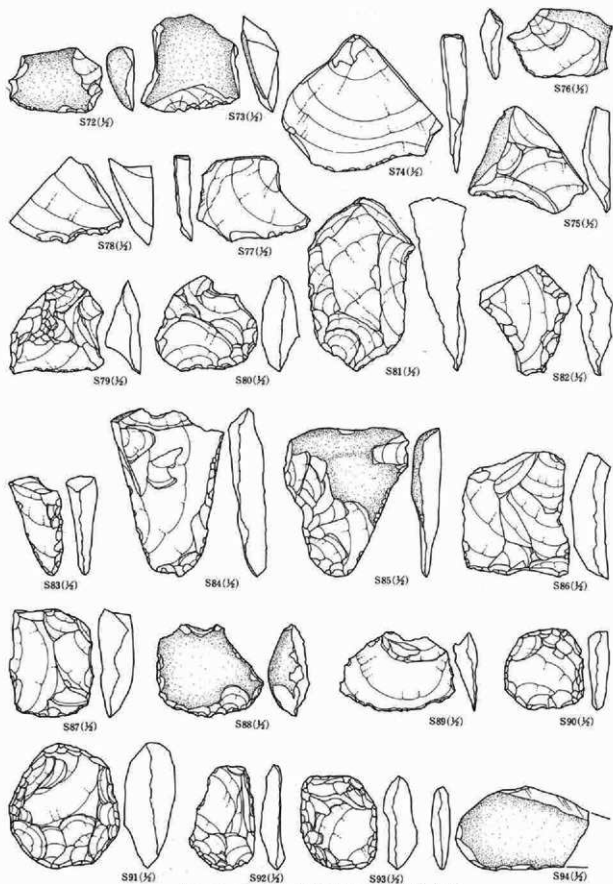


第133図 2-2号河川跡下層出土石器(1) (1/2・2/3・1/3)

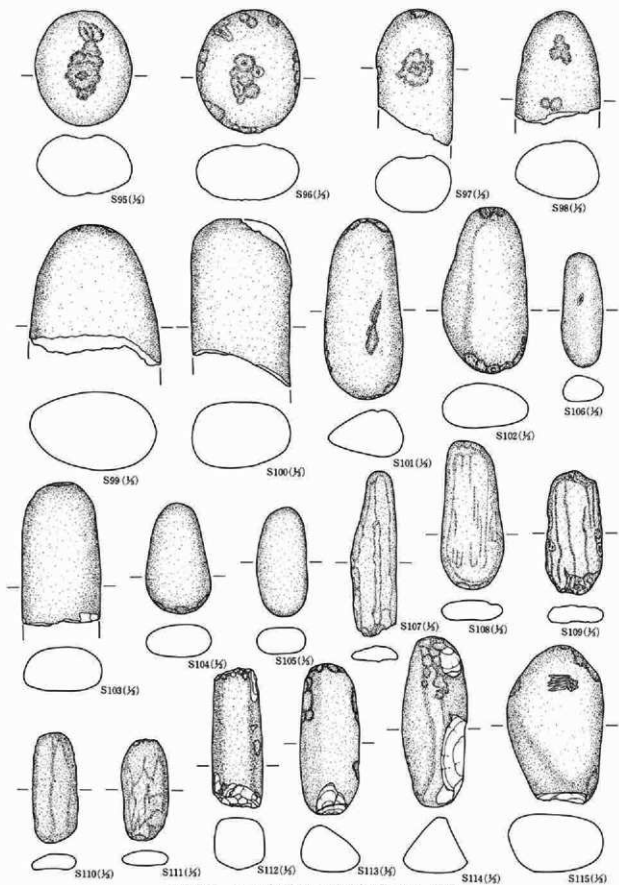
第2章 E区の遺構と遺物



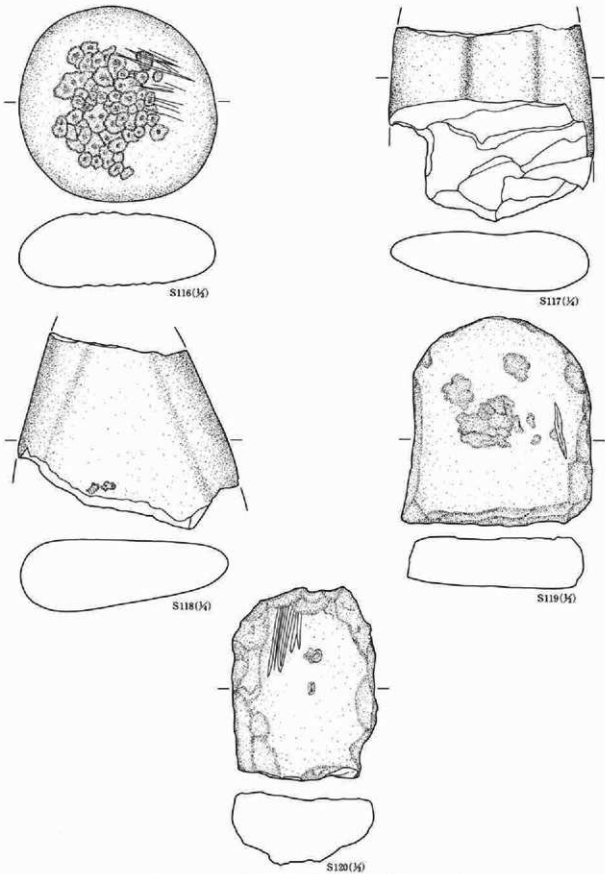
第134图 2-2号河川跡下層出土石器(2)(1/3)



第135图 2-2号河川跡下層出土石器(3) (1/2)

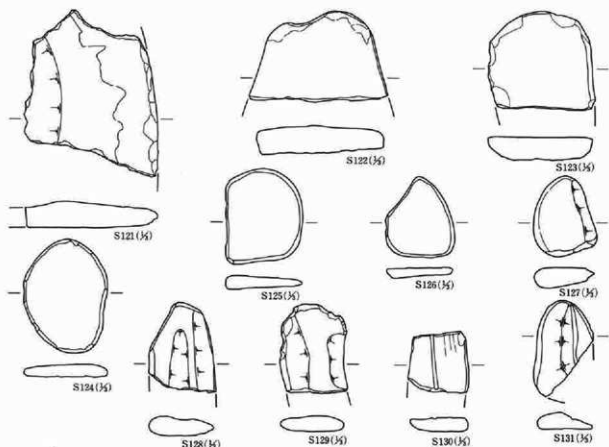


第136図 2-2号河川跡下層出土石器(4)(1/3)



第137図 2-2号河川跡下層出土石器(5) (1/3・1/4)

第2章 E区の遺構と遺物

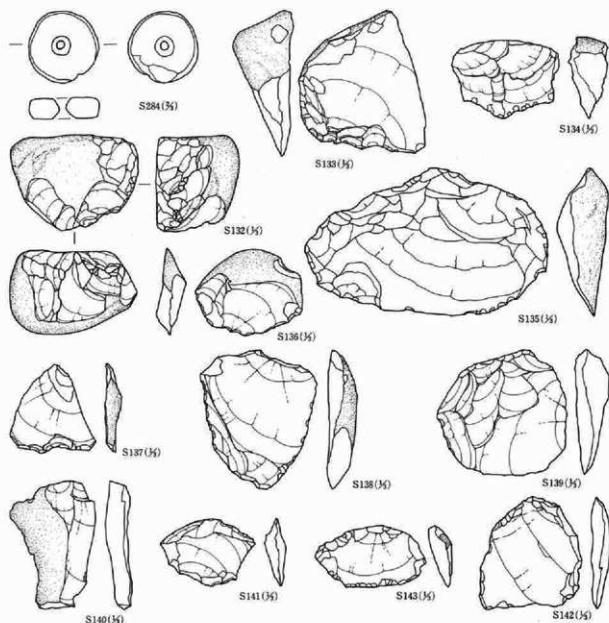


第138図 2-2号河川跡下層出土石器(6) (1/3)

2号河川跡出土石器集計表

種類	出土位置		2-2河		2-1河		計
	下層	中層	上層	下層	中層	上層	
磨製石鏃	12			1			13
磨製石鏃の素材	12	1	3	5	1		22
打製石鏃	2			1			3
磨製石斧	5			2			7
打製石斧	10			2	1		13
石杖	5	1	1			3	10
製片石器	40	18	6	85	17	3	169
製片	425	46	2	129	55	4	661
凹石	4	1	1				6
磨石	25	16	12	19	23	9	104
敲石	9	3	1			1	14
燧石	31			10		3	44
凹石・磨石等の破片	53	7	10	38	9	5	122
礫石・台石	52	10	4	26	23	1	116
紡錘車	1			1			2
多孔石					1		1
海産貝		1					1
計	686	104	40	319	130	29	1308

注 磨製石鏃の中には未製品も含まれている。礫石・台石は破片も含まれている。各種の石器には縄文時代のもも少量混入している。



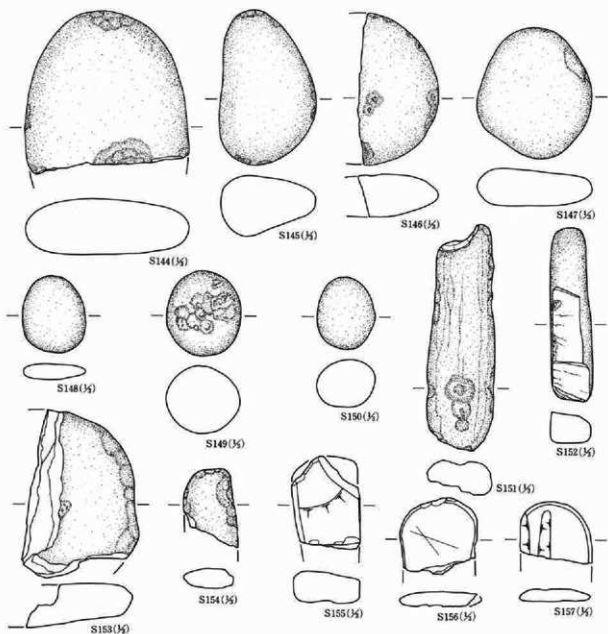
第139図 2-2号河川跡中層出土石器(1) (2/3・1/3)

178~180・230)、V字状に刃部を付けたもの(S-83・138・175~177・232)とがあり、S-83・176・177はドリル状をなす。

3側縁刃部剥片石器 不定形をなす剥片の3側縁部を刃部としたもので、直線的に□形に刃部を付けたもの(S-86・87・140・181・183・184・188~191・194・195・233・262)、先端部が丸くU字状に刃部を付けたもの(S-84・88・89・139・182・185~187・192・193・234・274)とがある。

側縁刃部全周剥片石器 側縁部すべてを刃部としたもので、円形や楕円形をなすもの(S-90・91・196・235)や多角形をなすもの(S-92・93・141~143・197~201・236・237)とがある。

これらの石器は石核の形状や剥き取り方からも定形的な素材の取り方は行っておらず、素材の形状や必要に応じた刃部の付け方をしていたものと考えられ、まさに不定形の刃器である。しかし、石材も限定しており、剥片の量からも多量に作出されたもの



第140図 2-2号河川跡中層出土石器(2)(1/3)

と考えられ、日常の生活において多用されていたと考えられる。

なお、S-94・218は刮片ではないがともに偏平な河原石を使用し石材は軟質の緑色片岩で、1側縁部に細い剝離を加え刃部としている。やや特異な刃器である。

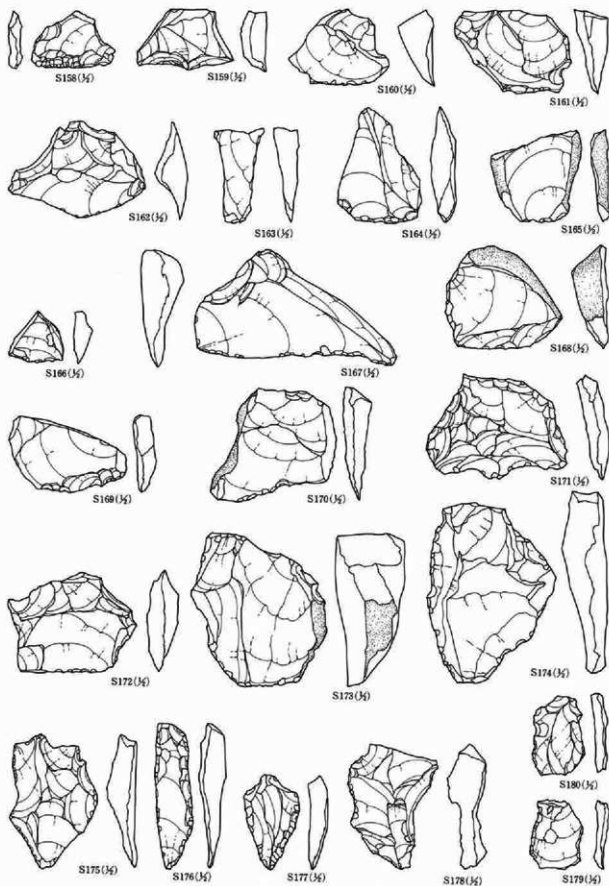
凹石・磨石・磨石 (第136・140・143・146・148・149図 図版123-1, 126-1, 129-1, 131-1・2,

132-2, 133-1)

凹石は6点が出土した。円形や楕円形の中型の河原石を使用。形態から縄文時代の遺物の可能性が高いが刮片石器等と同じように縄文的伝統が残っていた可能性もある。凹石と磨石の石材は利根川水系の粗粒安山岩や石英閃緑岩がほとんどを占めている。

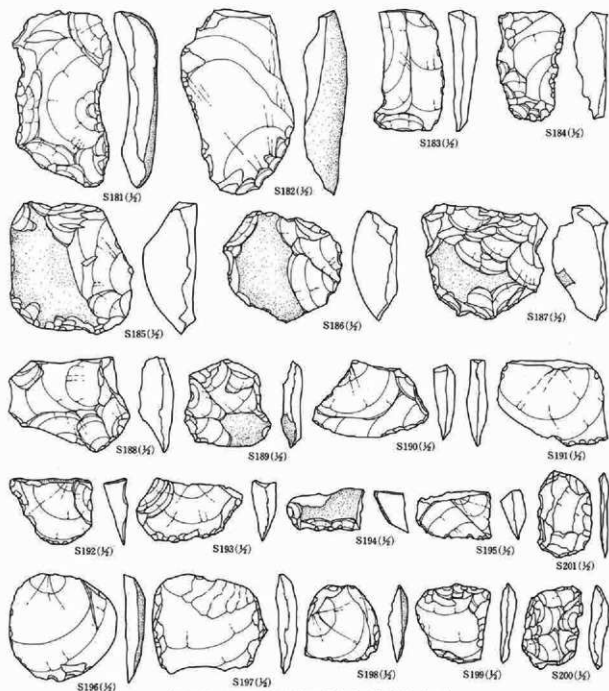
磨石は104点が出土した。楕円形や長楕円形をなす河原石をそのまま使用している。ほとんどのものが全面が良く磨れており、両端部や側縁部に敲打痕

第5節 V面の遺構と遺物



第141図 2-1号河川跡下層出土石器(1)(1/2)

第2章 E区の遺構と遺物



第142図 2-1号河川跡下層出土石器(2) (1/2)

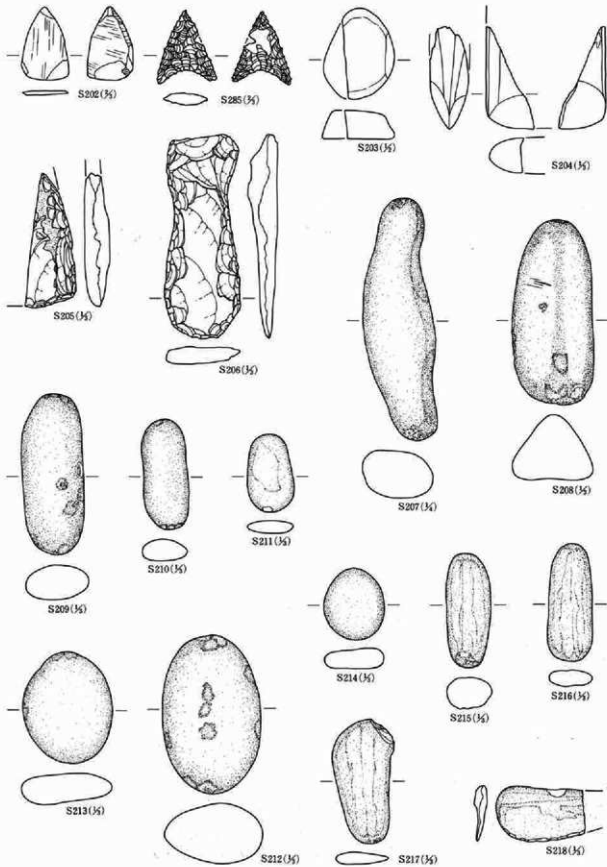
が集中している。法量的に大・中・小の3種類に大まかに分けられ、目的によって使い分けがされていたと考えられる。また、S-243やS-266のように棒状のものもある。

薦石としたものは県南西部に産する黒色片岩と雲母石英片岩を石材とする割れやすく軟質な河原石

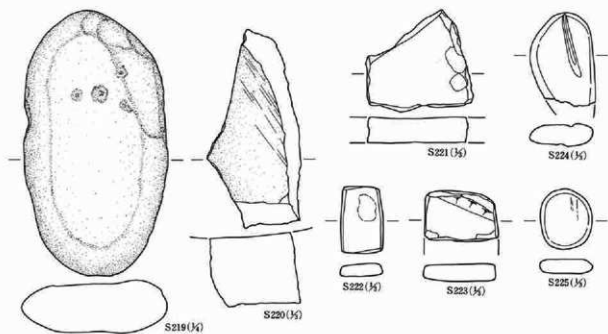
で、44点が出土した。

敲石 (第136・140・148図 図版123-1, 126-1, 132-2)

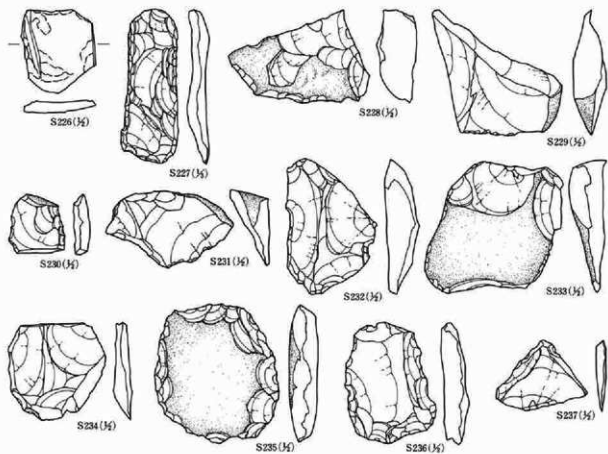
14点が出土し、長楕円形をなす頁岩や砂岩等のやや硬質の河原石を使用している。上下両端部に敲打



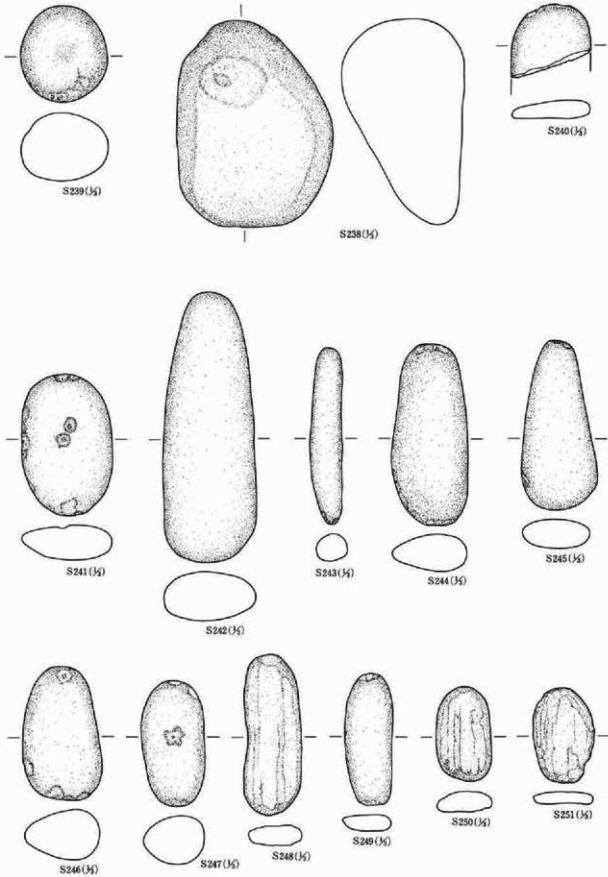
第143図 2-1号河川跡下層出土石器(3) (1/2・2/3・1/3・1/4)



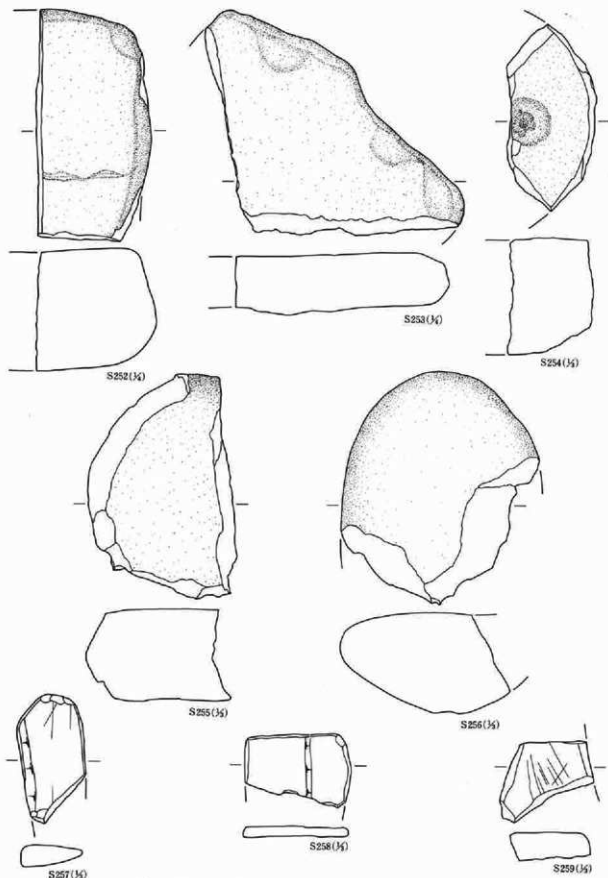
第144図 2-1号河川跡下層出土石器(4) (1/3・1/4)



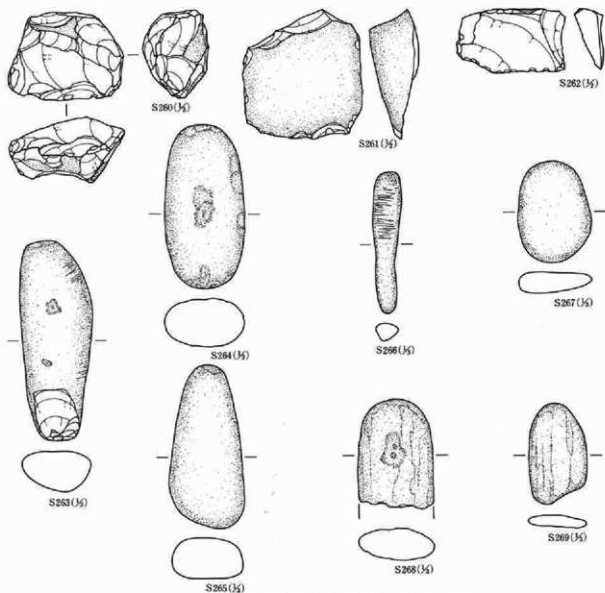
第145図 2-1号河川跡中層出土石器(1) (1/2・1/3)



第146圖 2-1号河川跡中層出土石器(2)(1/3)



第147図 2-1号河川跡上層出土石器(1) (1/3・1/4)



第148図 2-1号河川跡上層出土石器(2) (1/2・1/3)

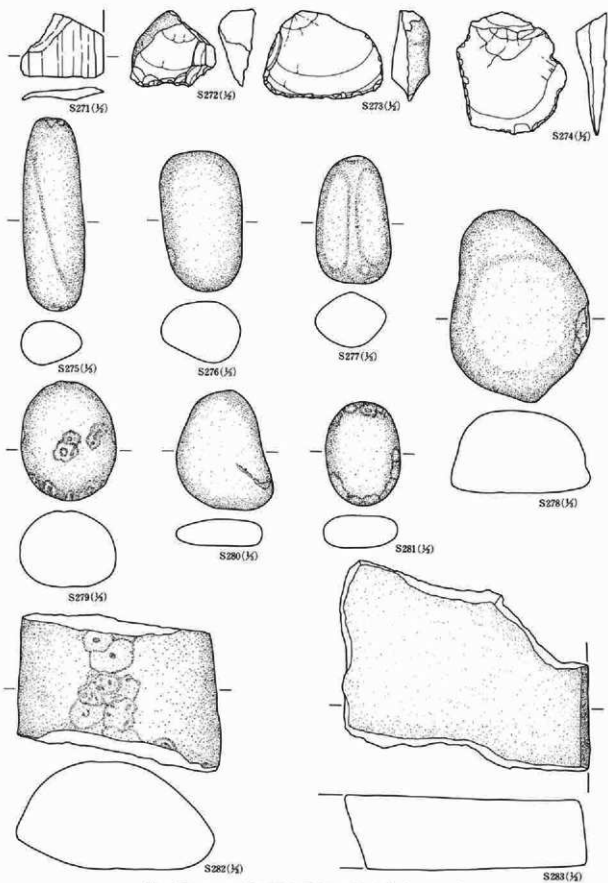
痕が集中する傾向にあり、端部が割れている例がある。

砥石・台石 (第137・138・140・144・147・149図 図版124-2, 125-1, 126-1, 130-1, 132-1, 133-1)

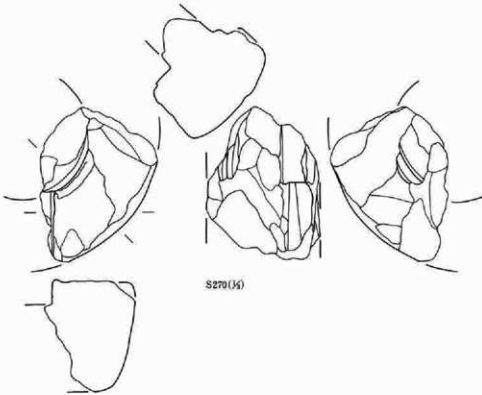
砥石・台石は破片を含め116点が出土した。大型の砥石(台石)は割れたものが多く形状は不明であるが整形されたものもあり、石材はほとんどが粗粒安山岩である。研磨面は平坦なものも多く木目が荒いものと細かいものがある。ほとんどの大型砥石は敲打痕があり、複の機能を有していたと考えられ

る。小型の砥石の石材は砂岩が大部分を占め、定形的なものではなく研磨面も一定していない。小型の砥石にも木目の荒いものと細かいものがある。砥石類の出土量の多さも2号河川跡出土遺物の特徴である。

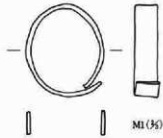
第2章 E区の遺構と遺物



第149図 2-2号河川跡上層出土石器(1) (1/2・1/3)



第150図 2号河川跡上層出土石製品(2)(1/3)



第151図 2-2号河川跡上層出土金属器(2/3)

2号河川跡出土木製品

2号河川跡からは5種32種類の木製品や加工材が出土した。木製品の種類は新保遺跡の「大溝」とほぼ同じであるが若干内容に差がある。また、各種類の数量は調査面積が狭いために総じて減っている。「大溝」と異なる主な点は種類として堅臼が加わったことと数量的に斧柄が多くなった点である。

なお、各種の木製品や加工材の出土状態はほとんどが種類による分布の片寄りがなく、各種が混在して河川跡全般に分布している。しかし、丸木弓と原木だけは分布に片寄りがある。丸木弓は2-2号河川跡では第IV河道の中・上流(2D・E-65-68)に集中し、2-1号河川跡では下流(2D-69)に集中していた。丸木弓は全てが破損しており、何らかの儀礼を伴って一括廃棄された可能性がある。原木(長さ2-4m、径20-40cm)6点は2-1号河川跡の下流(2E-70・71)に集中しており、貯木の場であった可能性がある。

以下、新保遺跡の木製品・加工材の分類に従って内容を記す。

広鋸(第158・187図 図版134-3, 135-1, 157-2)
7点が出土し未製品3点が含まれる。d類に似たものとしてW-482・485がある。着柄突出部から鋸身への移行部はやや段をもつが、着柄隆起がほとんどない。W-549は着柄隆起が高く、d類に似た未製品である。W-420は山形の頭部をもつg類と考えられ、W-176・208はg類に似た未製品である。W-369はf類の形状であるが鋸身下半に段をもつ。

狭鋸(第158図 図版135-1)

W-610の未製品1点が出土した。a類とb類の中間の形態で鋸身は一定の幅をもち、着柄隆起はなだらかで刃部はやや丸い。

横鋸(第158・159・187・192図 図版135-1・157-2・158-1・161-1)

12点が出土し1点(W-66)は未製品で、W-139・207は形状が明確でない。W-146・154・468・528・590・619はb₁類と考えられ、上下端が平行し着柄隆起がなだらかである。W-172・275・312はb₂類と考えられ、着柄隆起はしっかりとした稜をもつ。b₁類としたものには着柄孔が斜めに穿孔されているものが5点ある。

一本鋸(第158図 図版135-1)

W-380の1点が出土した。しっかりとした作りであるが特異な形態であり、一本鋸として分類した。

二又鋸(第159・184・187・191・207図 図版136-1, 155-2, 158-1, 161-1, 175-1)

10点が出土し、W-3・107・499・546の4点は小片である。W-252・337・339・490はb類と考えられ、固定部に段が刻まれ鋸身が開ききみとなっている。W-53・132はc類と考えられ、鋸身が直線的で又部の切り込みも直線的である。

三又鋸(第191図 図版161-1)

W-299の1点だけが出土した。移行部に段をもつが破損しており形態は不明。

長柄鋸(第159・192図 図版136-1, 162-1)

5点が出土し、W-508は未製品でW-145・520は破損品である。W-156はa類と考えられ、指入れ穴のある握部をもち幅広い鋸身である。W-220は鋸身が二又となっており、「大溝」では出土しなかった種類である。

着柄鋸・鋸(第160・174・184・187・192図 図版137-1, 148-1, 155-2, 157-2, 162-1)

9点が出土した。W-136は破損品でW-96・147・161・164・510・525・526・631は未製品である。未製品の多くは分割後厚みを調整し、刃部を山形に移行部を斜めに着柄部を方形に削り込んだ荒削りの段階のものである。

土掘具 (第191・192図 図版161-1, 162-1)

「大溝」では出土しなかった種類で2点が出土した。W-39は直柄で楕円形の刃部をもつ。W-634はW-39と同じ楕円形の刃部をもち、着柄部に段をもつ。

農具柄 (第161・162・184・187・192図 図版137-1, 138-1, 155-2, 158-1, 162-1)

直柄が32点、膝柄が8点出土した。直柄には割材が16点、丸木が14点使用されていた。直柄の中にはグリップエンドがT字形のもの1点(W-194)、指入れ穴をもつもの1点(W-203)、太くなるもの1点(W-109)、不明1点(W-431)がある。また、鋤・鍬の固定部状のもの2点(W-636・647)も含めた。膝柄はW-103・607は未製品で、W-258・284・367・387は破損品である。W-481はほぼ完存し、緊縛部が小さいタイプである。W-555は履柄と考えられる。

髷臼 (第193図 図版163-1)

2点が2-1号河川跡下流部の近接した位置で出土した。ともに破損品であるがW-4は大型で円筒形をなし、W-31も大型で鼓状をなす。

杵 (第193・207図 図版162-1, 175-1)

2点が出土しともに破損品である。W-1・210はともに握部から搦部へなだらかに移行し、両端部に最大径をもつ。「大溝」では握部に突出があり、今回出土した2点は新しいタイプである。

木篋 (第194図 図版164-1)

2点が出土した。W-9は破損品であるがe類で、W-313はa類と考えられる。

斧柄 (第163・164・188・194図 図版139-1, 140-1, 158-1, 164-1)

直柄6点、直柄未製品5点、履柄4点の計15点が出土した。直柄6点(W-379・406・410・491・495・533)は頭部が後方に出っ張るタイプのc類で、全

てが破損している。直柄未製品のうち3点(W-158・393・439)は分割後柄部を荒削りしただけである。2点(W-192・388)は形状がほぼ整えられているが柄部が太く斧孔が未貫通である。履柄4点(W-133・167・342・447)のうち3点は破損品である。3点は頭部が後方に出っ張り1点は出っ張っていない。

有柄J字形木製品 (第164・185図 図版140-1, 156-1)

W-568の1点が出土した。W-640も本種類の可能性があるが判断できなかった。

横槌 (第193・198図 図版163-1, 167-1)

3点が出土した。W-323は割材を使用したd類で分割時の形状を残す。W-340はb類の未製品と思われる。W-346は丸木を使用した細身のa類と思われる。

糸巻 (第163図 図版138-1)

2点(W-503・553)が出土し、割材を用いたa類と考えられる。

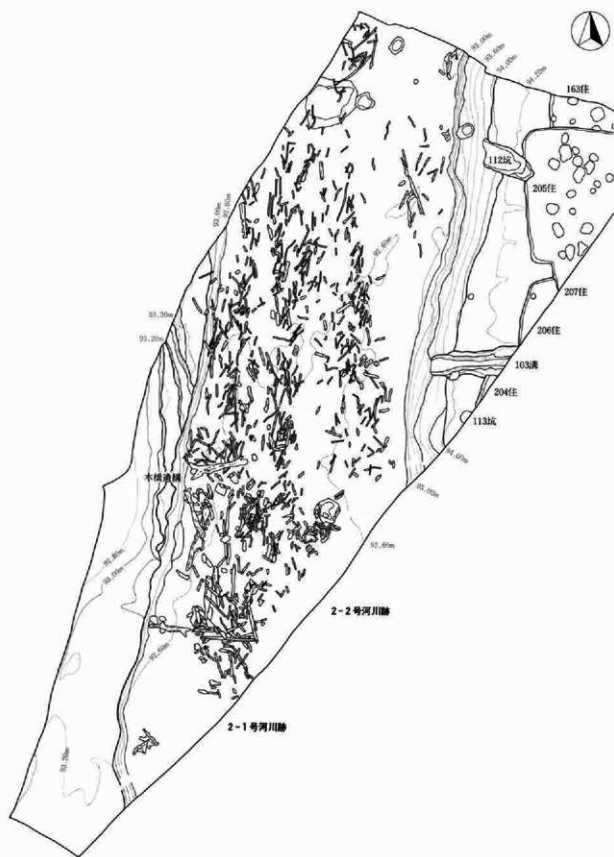
容器 (第163・184・188・193・194図 図版138-1, 139-1, 155-2, 159-1, 163-1, 164-1)

7点が出土し、4点が破損品で2点が未製品である。W-70・368は径約30cmの円形をした未製品である。W-547は円形で小型の浅鉢でW-473とともにc類と考えられる。W-13・324は平底のc類と考えられる。W-36は曲物の底板と考えられ「大溝」では出土しなかった種類である。

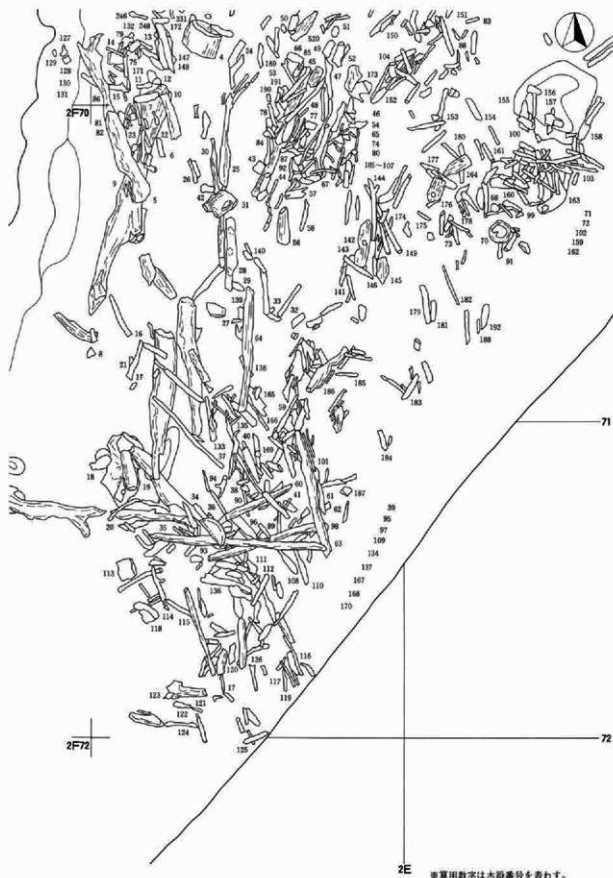
作業台 (第163・194・200図 図版138-1, 164-1, 169-1)

3点(W-87・300・625)が出土した。板状や角材状をなし、ともに金属器の刃部のくい込み痕が見られた。

丸木弓 (第165・184・188・194図 図版140-1,



第152図 2号河川跡木器出土状態全体図 (1/200)



第153図 2号河川跡木器出土状態(1)

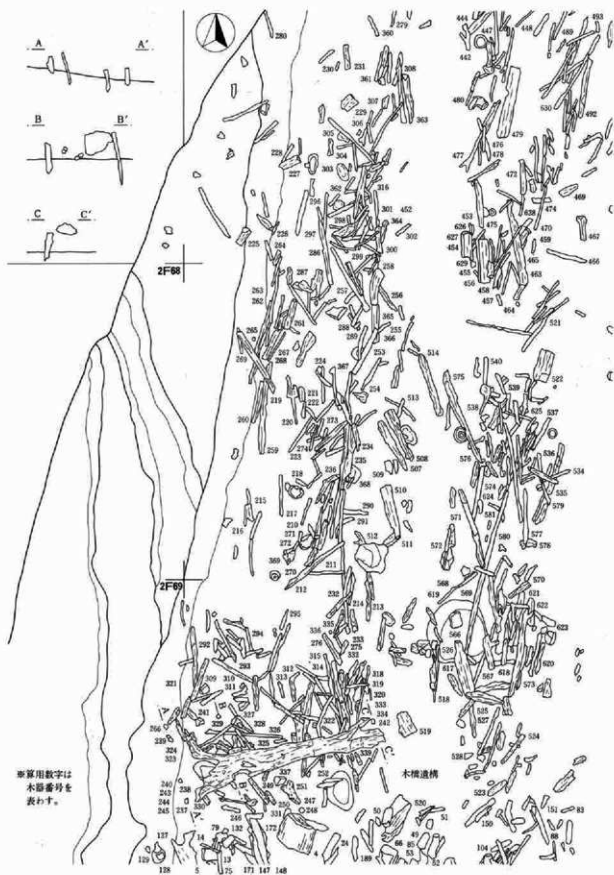
第2章 E区の遺構と遺物



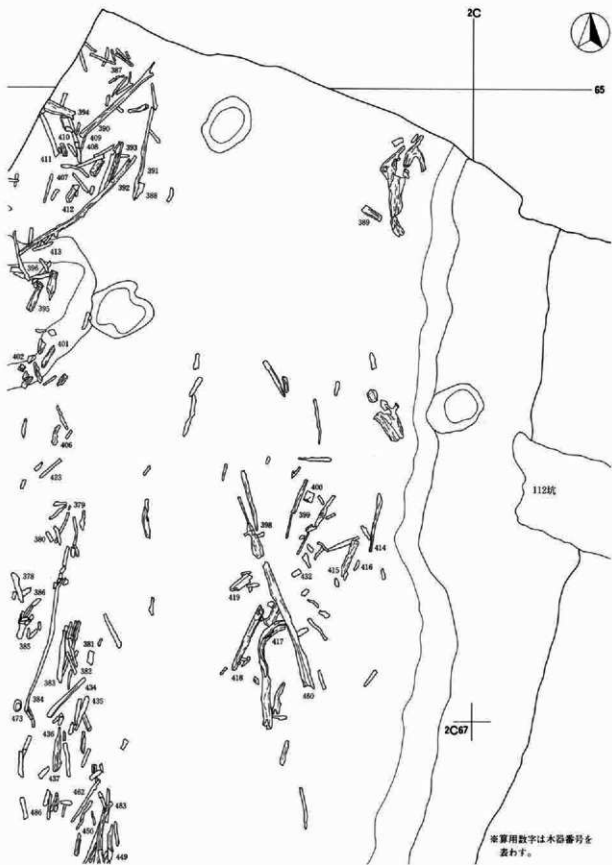
*算用数字は木器番号を表わす。

第154図 2号河川跡木器出土状態(2)

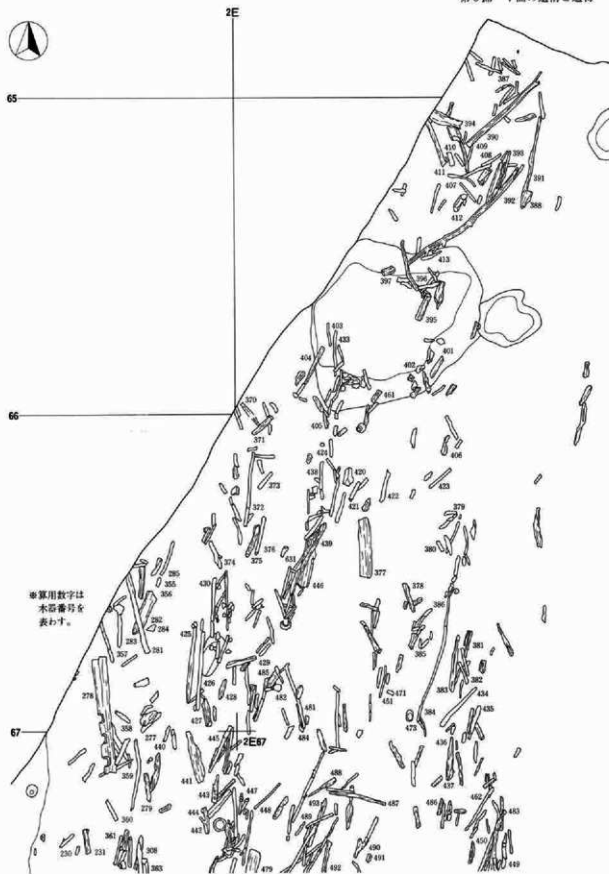
第5節 V面の遺構と遺物



第155図 2号河川跡木器出土状態(3)



第156図 2号河川跡木器出土状態(4)



第157図 2号河川跡木器出土状態(5)

第2章 E区の遺構と遺物

141-1, 155-1, 158-1, 164-1)

17点(W-174・182・195・197・202・206・209・403・436・438・448・451・470・484・531・643・646)が出土し、すべて破損しており樹種はイヌガヤだけである。弓幹部や弭部を半円形に削ったものが多く、弭部は凸状に削り出されている。

梯子 (第194図 図版164-1)

W-28の1点が出土した。破損品で足かけ部に傾斜面がなく、方形に突出した段となっている。

角柱材 (第170図 図版144-1)

2点(W-419・444)が出土とともに破損している。分割材を使用し組み手の段をもつ。

丸柱材 (第170・185・189図 図版144-1, 156-1, 159-1)

3点が出土した。ともに径約7cmの丸木材を使用している。W-98は組み手の段をもち、W-363・390は枝分かれ部を利用して又を作出している。

樅木材 (第170・185・196・199図 図版144-1, 156-1, 166-1, 168-1)

4点が出土した。長さが1m以上残存し径が3cmほどの直線的な材を樅木材としたが確証はない。W-86・279・372は丸木材でW-315は角材である。

板材 (第166-169・185・189・195図 図版141-1-144-1, 156-1, 160-1, 164-1, 165-1)

73点が出土した。板材は分割時の厚みを調整したものを選んだ。柾目板がほとんどで板目板は小片4点だけである。板材にはW-614のように段をもつものがある。また、両端部が切断された小断片も多く、建築材や鋤・鍬の工程材も含まれていると考えられる。

杭 (第175・185・197・199・201・202図 図版149-1, 156-1, 167-171-1)

一方の端部を尖らせ打ち込み時の歪みや敲打による端部の潰れが生じているものを杭とした。18点を杭としたがこのうちW-240・241・244・245・336・351は木橋遺構に打ち込まれていた。加工材や分割材の中には杭状の端部をもつものも多く含まれていたがこれらは杭として扱わなかった。

角材 (第159・161・169-171・173-175・186・188・189・192・194・198-201・207図 図版136-1, 137-1, 144-1, 145-1, 147-1, 148-1, 157-1, 159-1, 162-1, 164-1, 167-170-1, 175-1)

加工材の中で分割後樹芯部を除く部分を使用し、何らかの加工が認められたものや可能性のあるものも含めて本類とした。杭状の端部をもつものや四面体をなすものも多く、149点が出土した。また、本類には組み手と思われる段をもつもの(W-341・524)、建築材と考えられるもの(W-278)、棒状の加工をもつもの(W-117・262・425・426・430・492)、農具柄状や鋤先状をなすもの(W-521・649)、多面体の加工をなすもの(W-196・328・350・504・539)、用途不明のもの(W-402・635)、赤彩されているもの(W-94・186)等も含まれた。

丸木材 (第170・172・173・185・187・190・196-198図 図版144-1, 146-1, 147-1, 156-1, 160-1, 165-167-1)

加工材の中で樹芯部をもち加工があるものを本類とし、58点が出土した。丸木で両端部が切断されたものが多い。本類には棒状や刺突具状のもの(W-20・199・433・569・580)、又部を利用した加工品(W-144・477)等を含んでいる。

分割材 (第176-183・186・191・202-207図 図版149-1, 155-1, 156-2, 157-1, 171-175-1)

ミカン割りに分割したままの材で最も出土量が多く、185点が出土した。1/2や1/4分割のものは少なく、さらに細かく分割されたものが多い。幅や長さも様々で各種加工品の製作工程の中で素材を得るため

に、多くの分割材が産出されたと考えられる。

樹皮（第169図）

W-650～653はサクラの樹皮の加工品とみられ、幅2.5～4.0cm、厚さ0.1～0.2cmで渦巻き状に丸まって出土した。装飾や緊縛のための素材と考えられる。

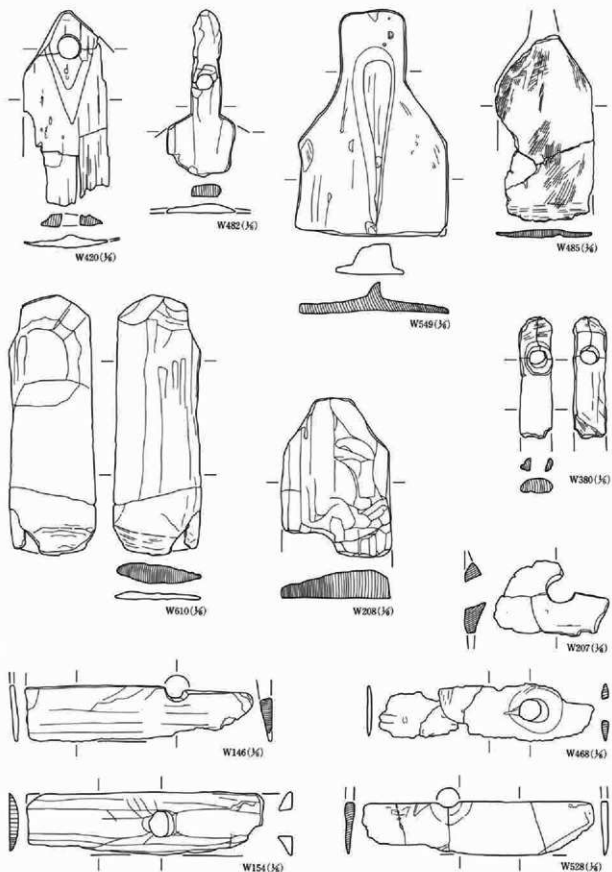
なお、2号河川跡出土木製品の欠番はW-101・123・134・338である。W-76は3号河川跡出土木製品で樹種はコナラ節である。

2号河川跡出土木製品集計表

種類	器種	2-2河下層		2-2河中层		2-1河下層		2-1河中层		2河土層		計
		製品	未製品	製品	未製品	製品	未製品	製品	未製品	製品	未製品	
農具	広葉状櫛	3	2			1	1					7
	櫛		1									1
	櫛	7				3		1	1			12
	一本	1										1
	二又	3		1		1		4		1		10
	三又							1				1
	長柄	3	1					1				5
	着柄		6		1	1			1			9
	土製								2			2
	農具	17		3		5		7				32
農具	3				1		2				8	
計	37	12	4	1	12	1	16	4	1		88	
工具	壺							2				2
	白							1		1		2
	木製							2				2
	櫛							3				3
	糸	2										2
	容器	2			1			3				7
	芥	9	3			2	1	1				15
	有柄	1						2				1
作	1						2				3	
計	15	3		1	2	1	14		1		37	
弓	丸木	11		1		4		1			17	
建築材	榑子							1				1
	角柱材	2										2
	丸柱材	1		1		1						3
	棟木材	1		1				2				4
	板材	43		4		6		20				73
計	47		6		7		23				83	
加工材	杭	2		1		1		14				18
	角材	58		10		21		59		1		149
	丸木材	18		1		6		33				58
	分割材	99		16		1		68		1		185
	木端			1				4				5
	樹皮	4										4
計	181		29		29		178		2		419	
総計	291	15	40	2	54	2	232	4	4		644	

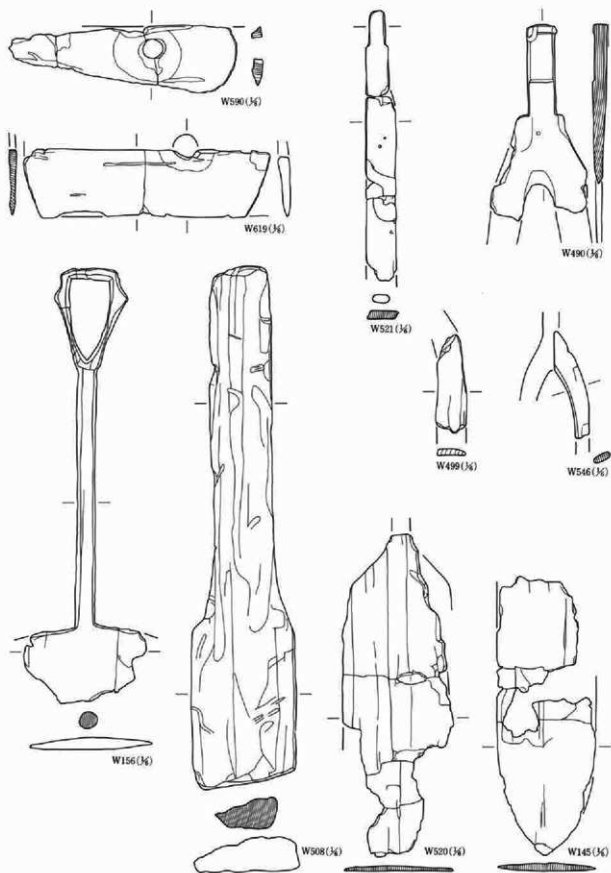
註 器種の集計には可能性のある木製品も含めている。木製品644点中、炭化材が107点含まれている。

第2章 E区の遺構と遺物

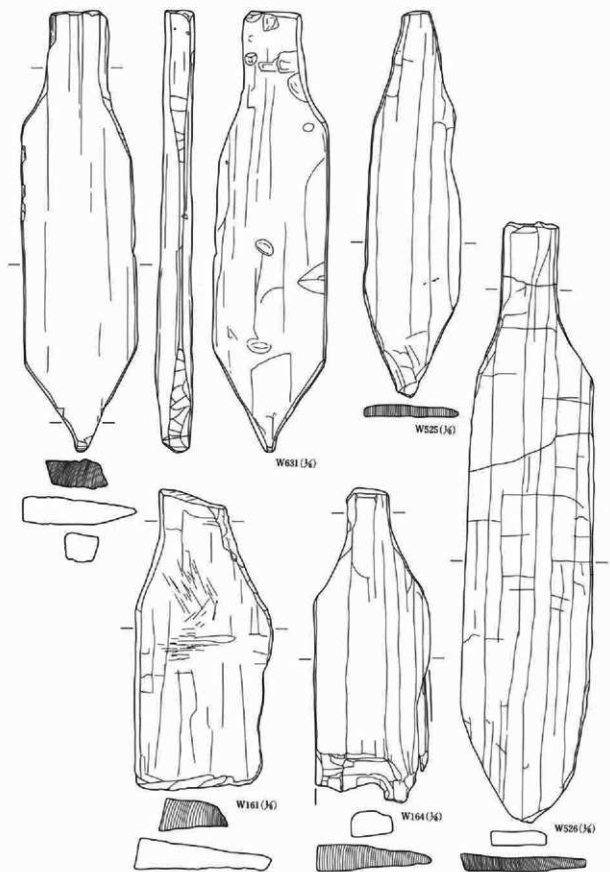


第158図 2-2号河川跡下層出土土器(1) (1/6)

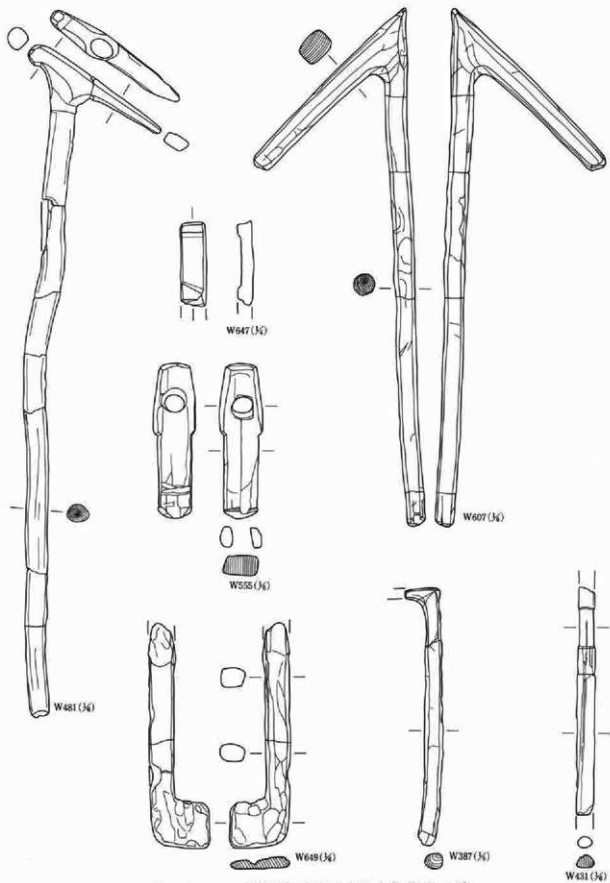
第5節 V面の遺構と遺物



第159図 2-2号河川跡下層出土木器(2)(1/6)

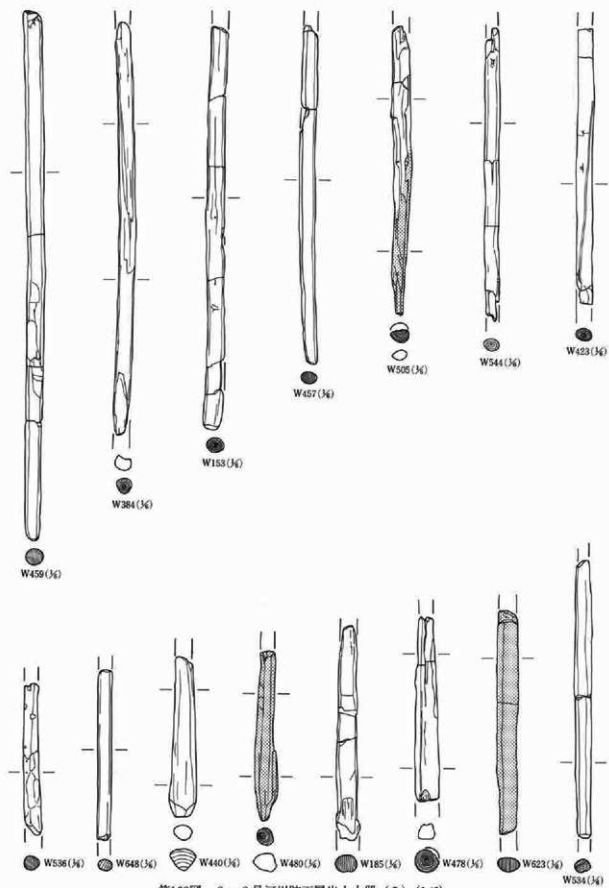


第160图 2-2号河川跡下層出土木器(3)(1/6)

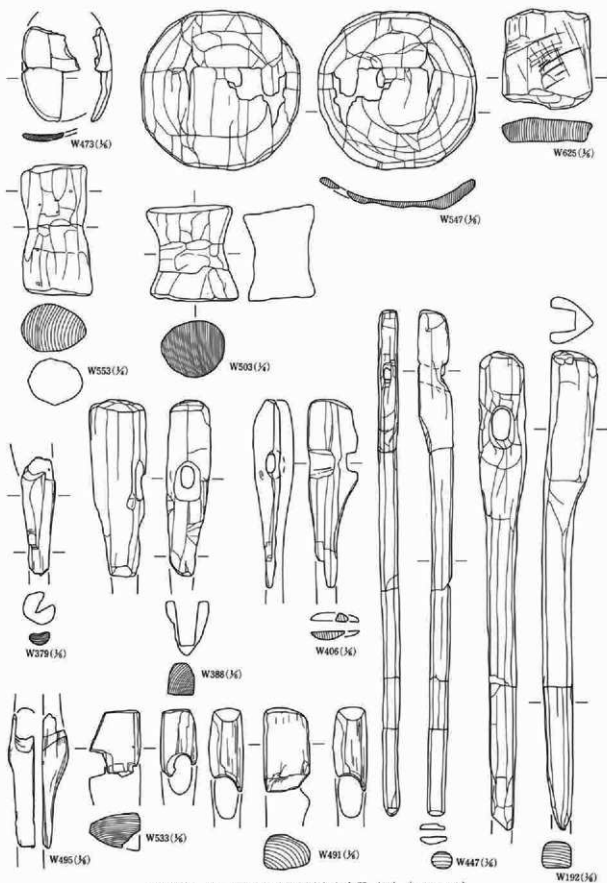


第161図 2-2号河川跡下層出土木器(4) (1/4・1/6)

第2章 E区の遺構と遺物

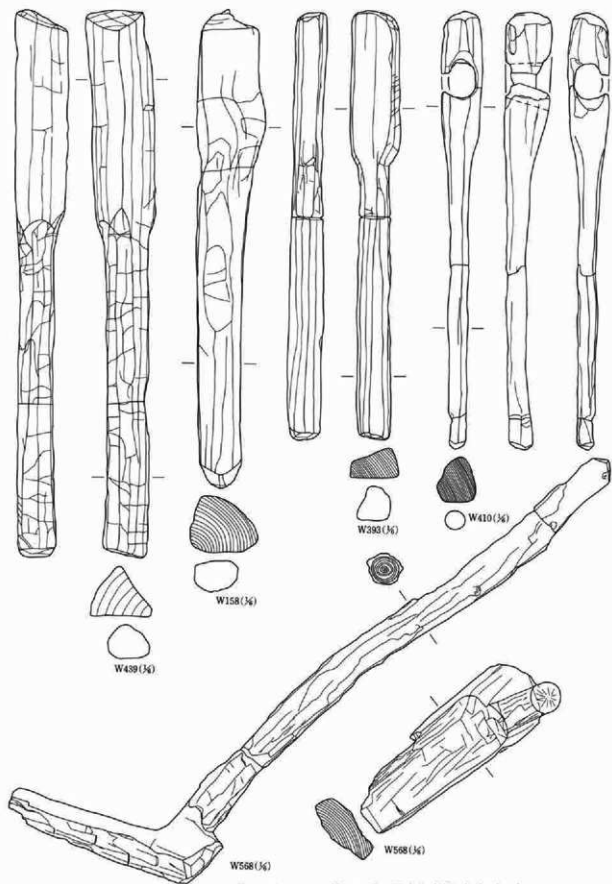


第162図 2-2号河川跡下層出土木器 (5) (1/6)



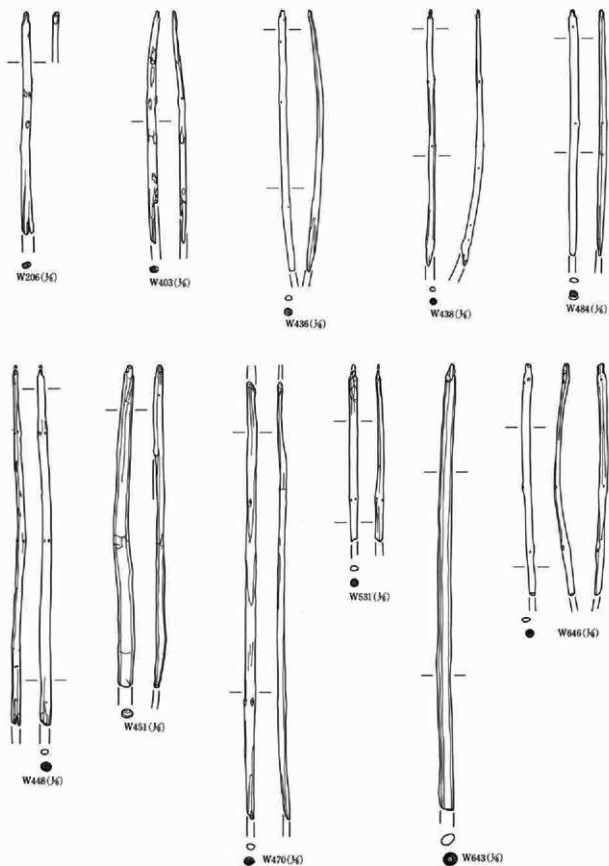
第163図 2-2号河川跡下層出土土器(6) (1/4・1/6)

第2章 E区の遺構と遺物

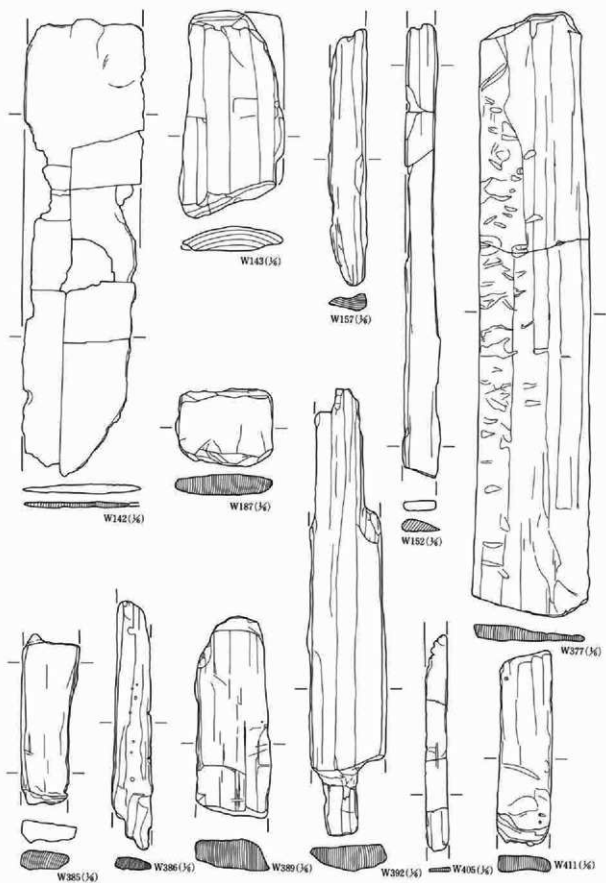


第164図 2-2号河川跡下層出土木器(7)(1/6)

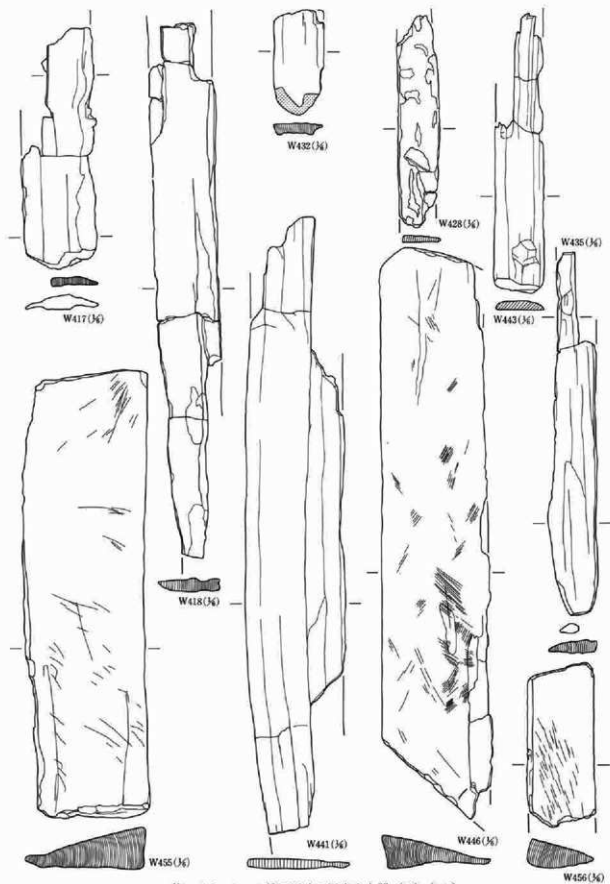
第5節 V面の遺構と遺物



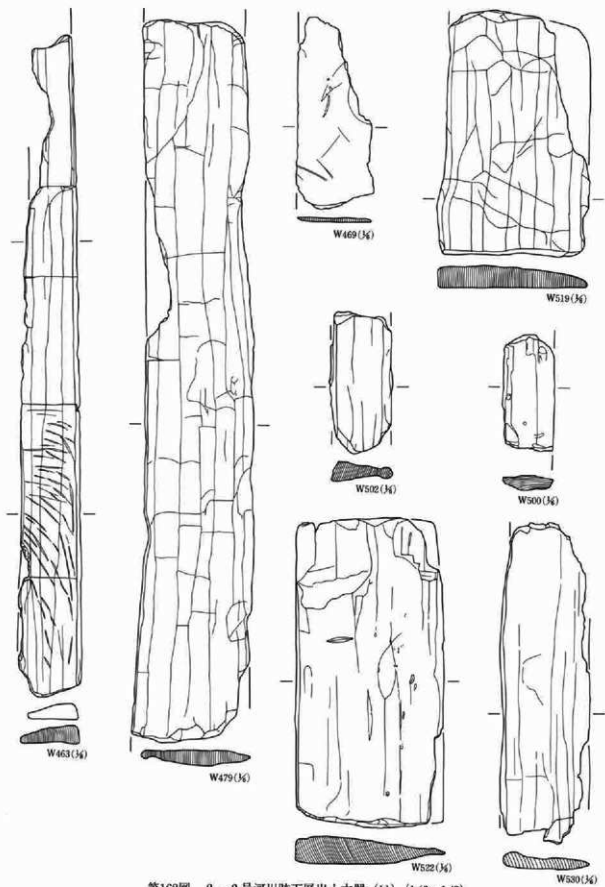
第165図 2-2号河川跡下層出土木器(8)(1/6)



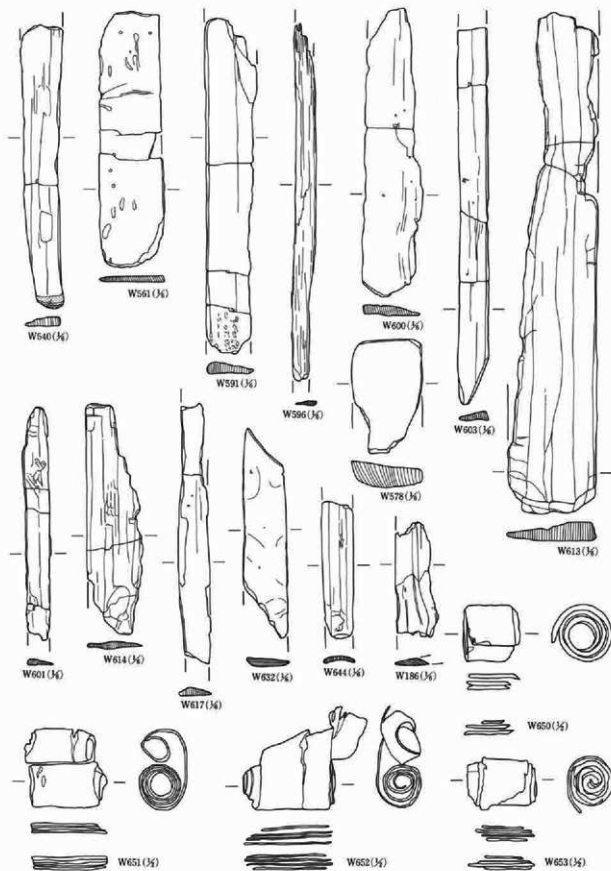
第166图 2-2号河川跡下層出土木器(9)(1/6)



第167図 2-2号河川跡下層出土木器 (10) (1/6)

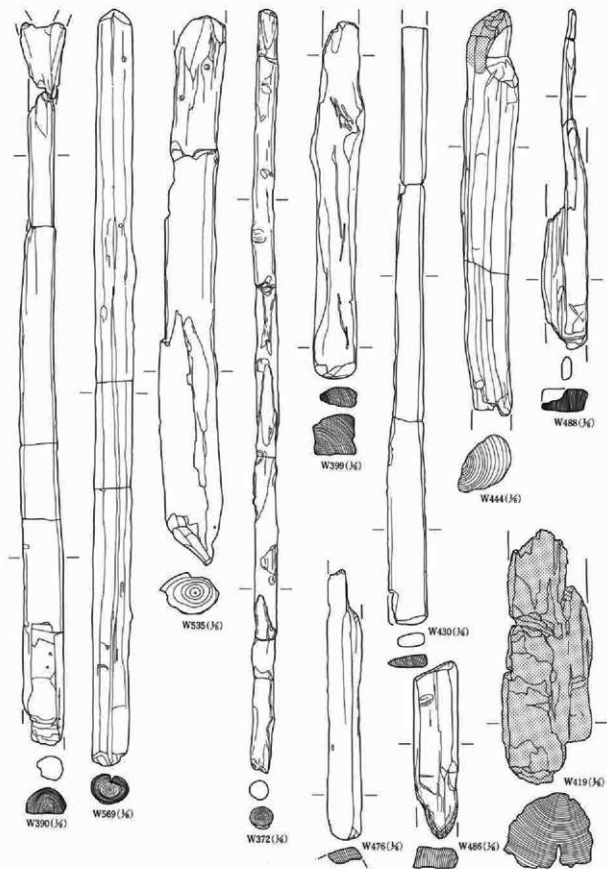


第168图 2-2号河川跡下層出土木器 (11) (1/6・1/8)

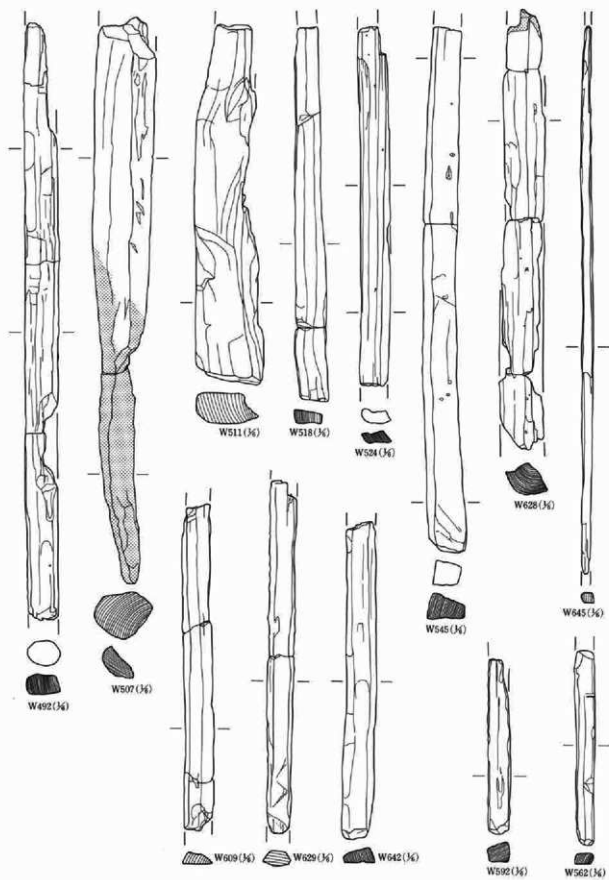


第169図 2-2号河川跡下層出土木器 (12) (1/2・1/6)

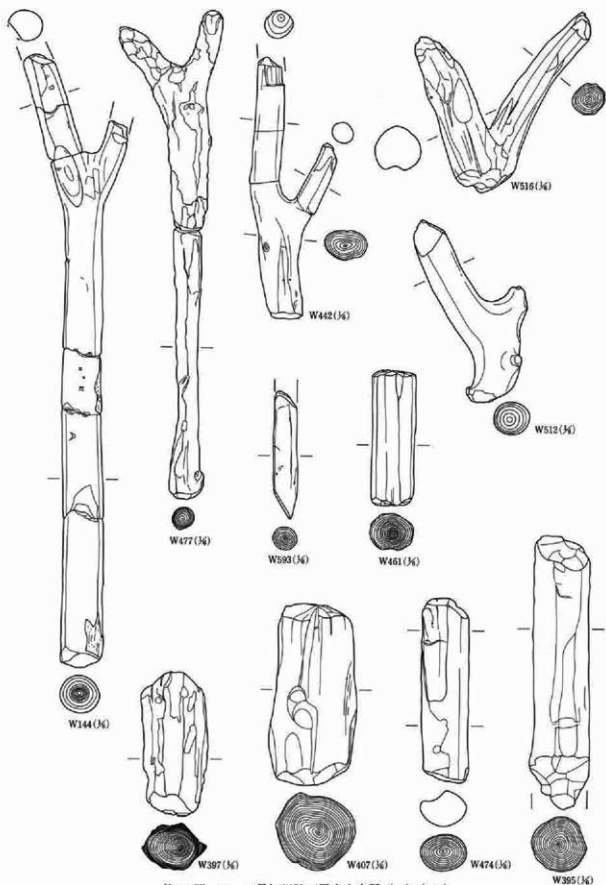
第2章 E区の遺構と遺物



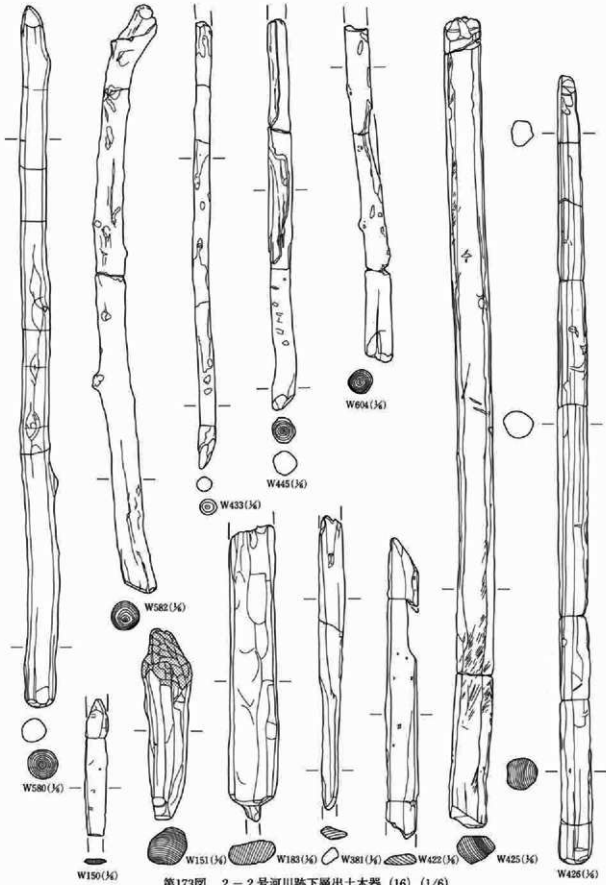
第170図 2-2号河川跡下層出土木器 (13) (1/6・1/8)



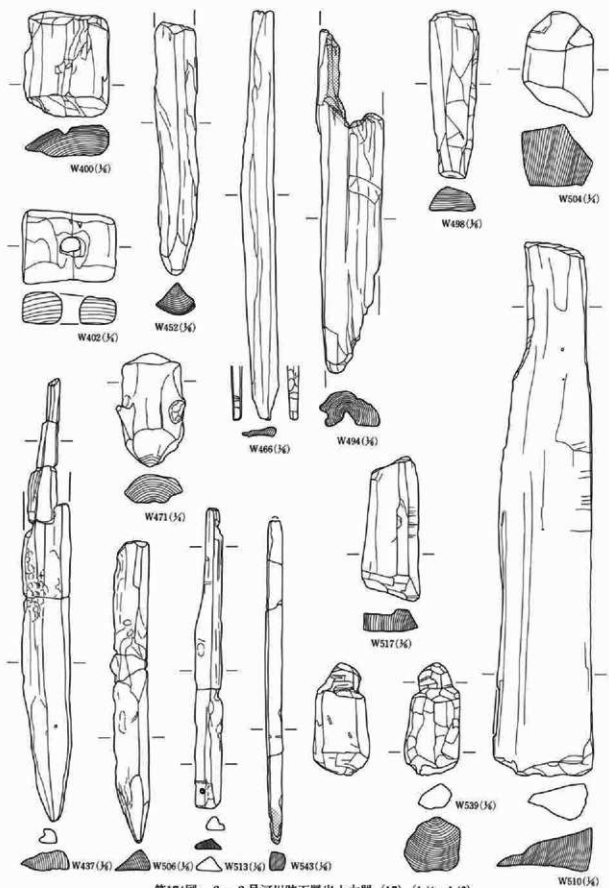
第171図 2-2号河川跡下層出土木器 (14) (1/6)



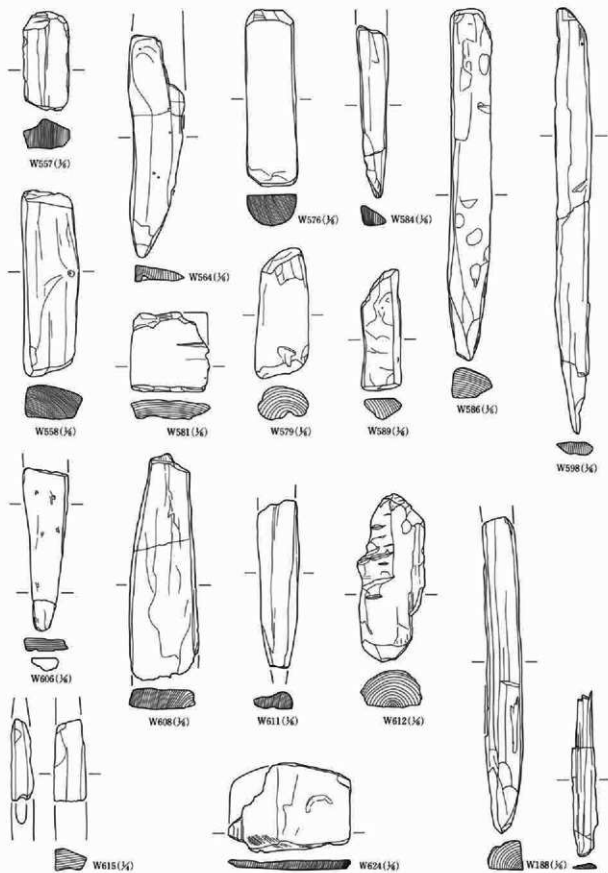
第172図 2-2号河川跡下層出土木器 (15) (1/6)



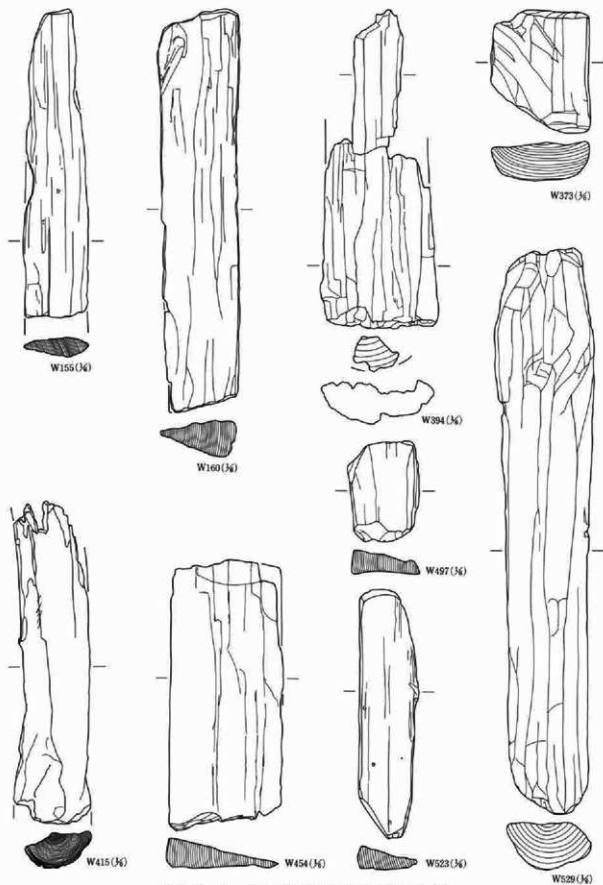
第173図 2-2号河川跡下層出土木器 (16) (1/6)



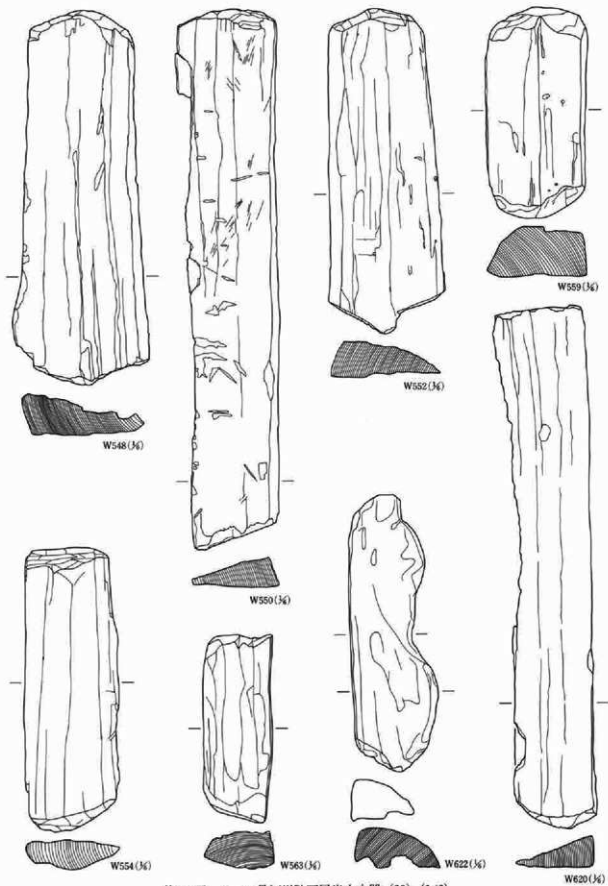
第174図 2-2号河川跡下層出土木器 (17) (1/4・1/6)



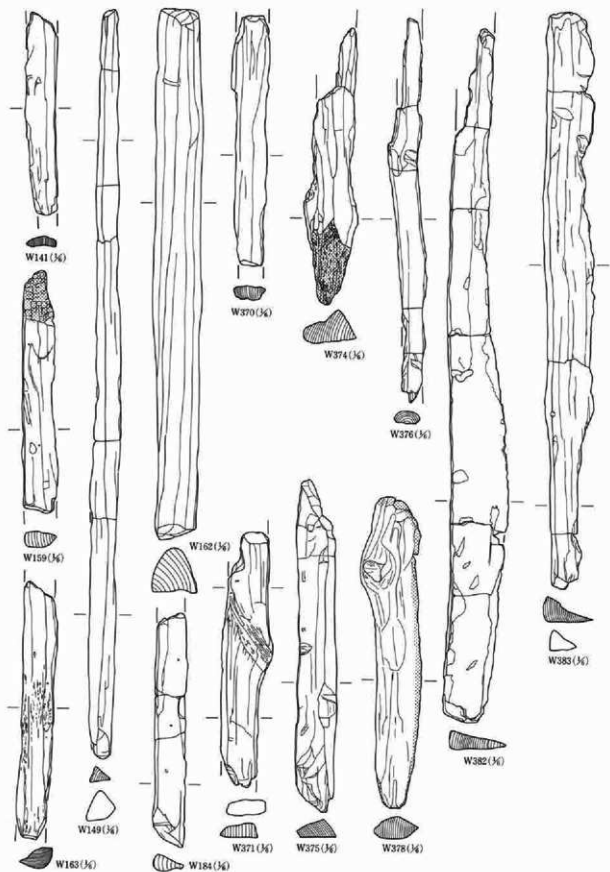
第175図 2-2号河川跡下層出土木器 (18) (1/4・1/6)



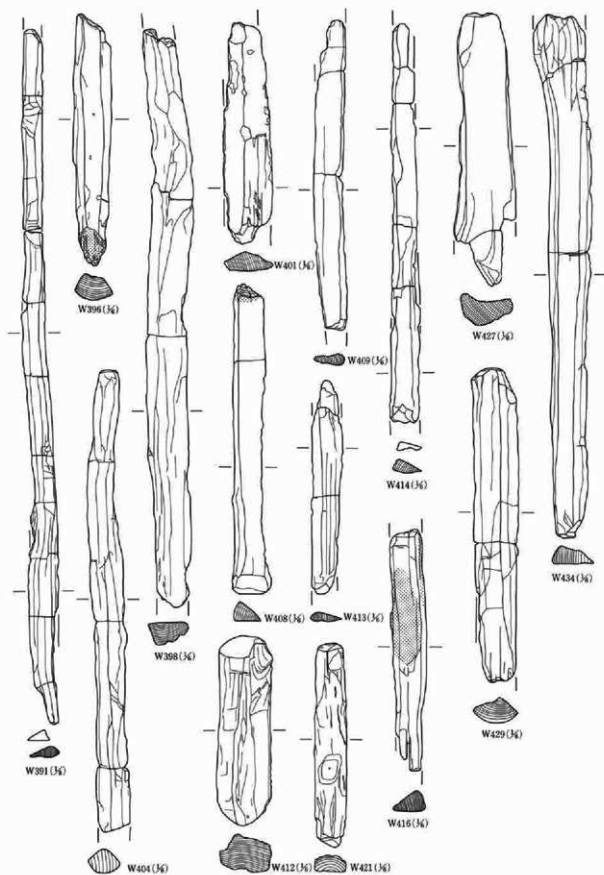
第176図 2-2号河川跡下層出土木器 (19) (1/6)



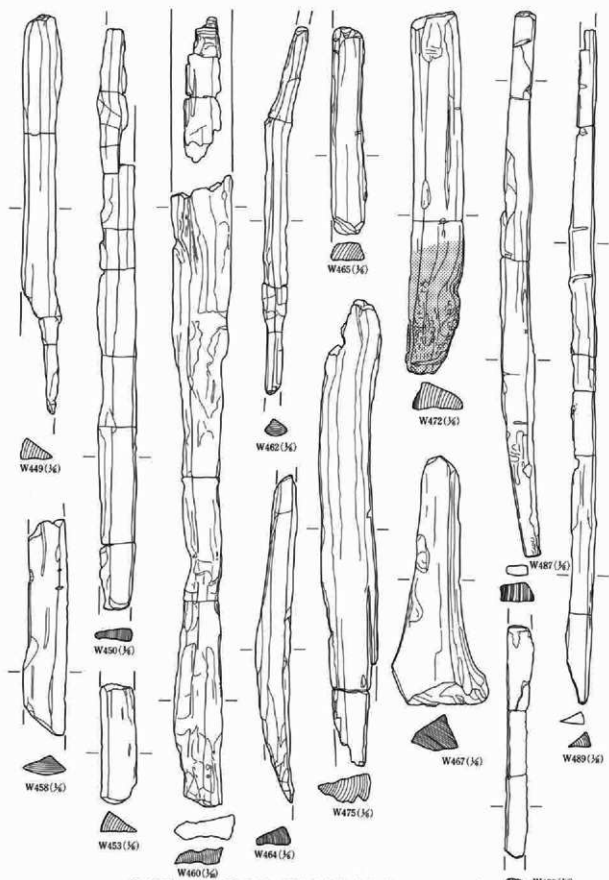
第177図 2-2号河川跡下層出土木器 (20) (1/6)



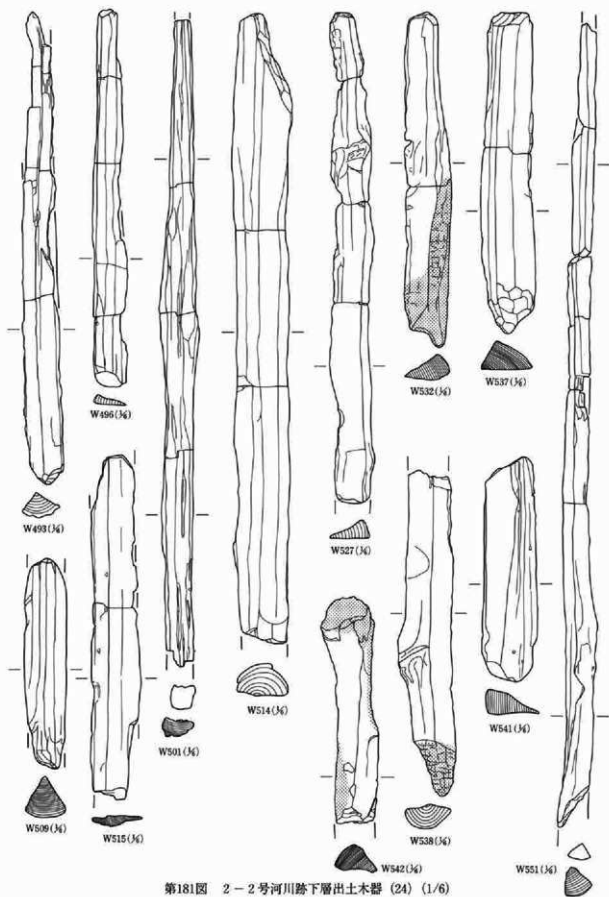
第178図 2-2号河川跡下層出土木器 (21) (1/6)



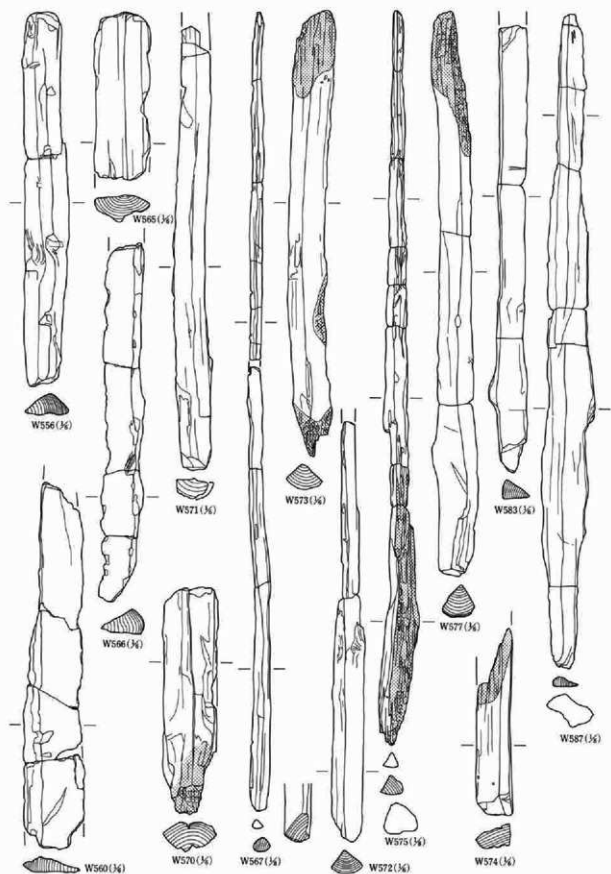
第179図 2-2号河川跡下層出土木器 (22) (1/6・1/8)



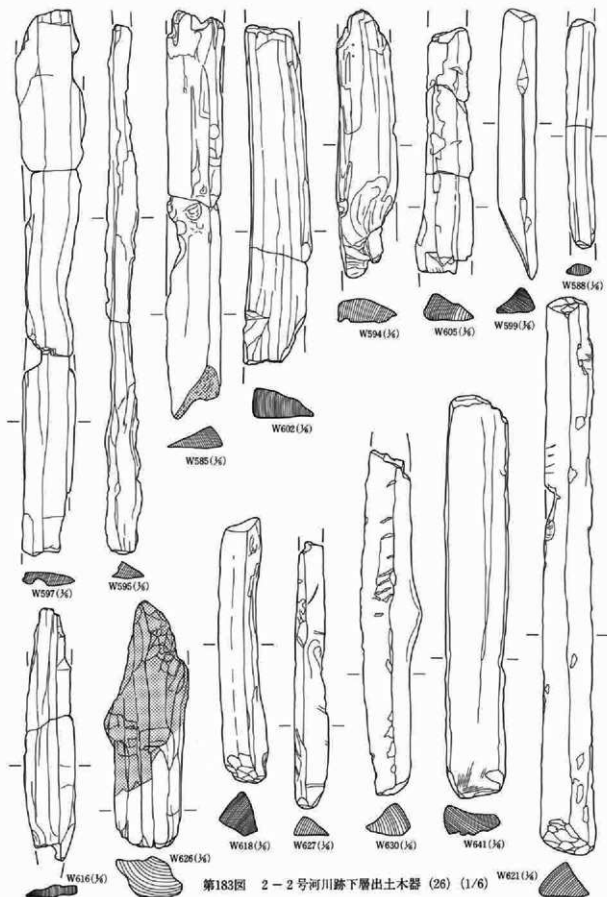
第180図 2-2-2号河川跡下層出土木器 (23) (1/6・1/8・1/10)



第181图 2-2号河川跡下層出土木器 (24) (1/6)

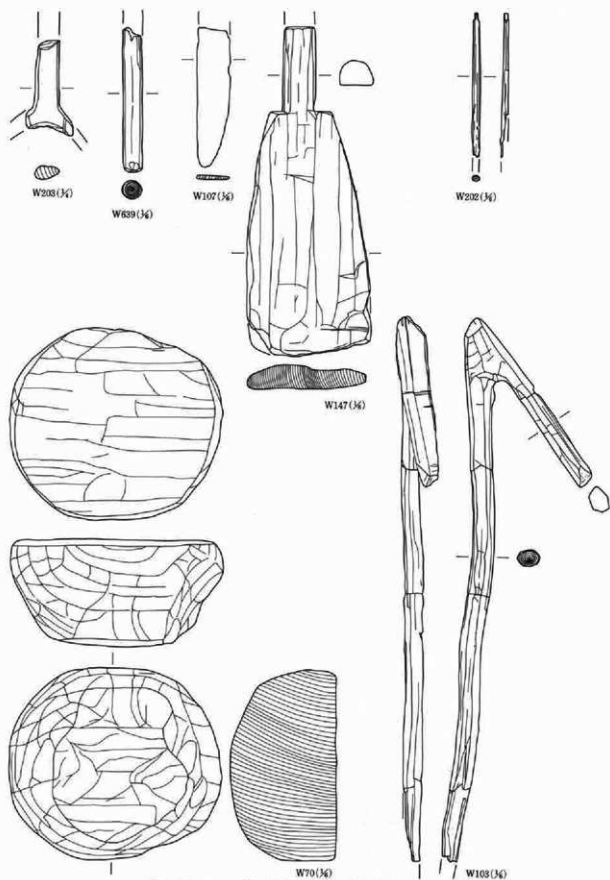


第182図 2-2号河川跡下層出土木器 (25) (1/6・1/8)

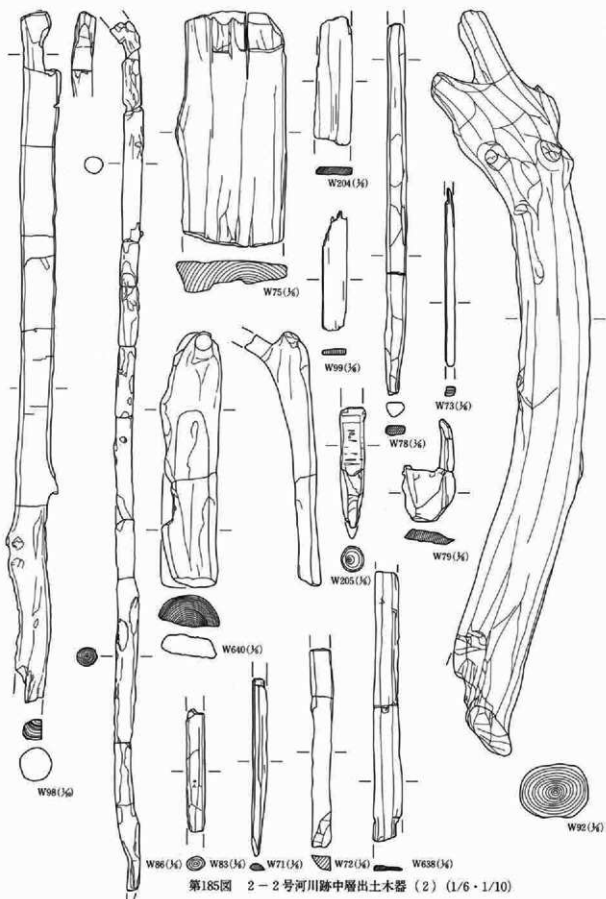


第183図 2-2号河川跡下層出土木器(26) (1/6)

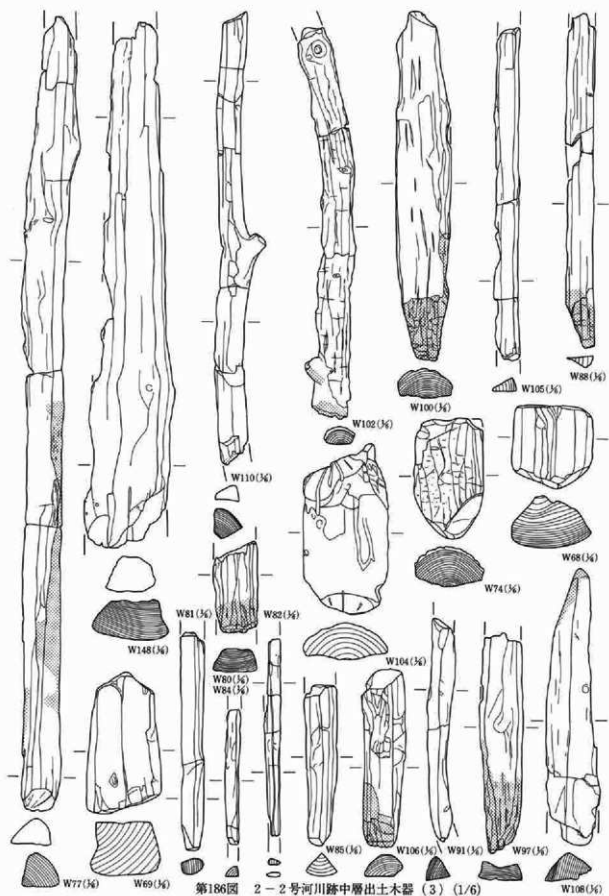
第2章 E区の遺構と遺物



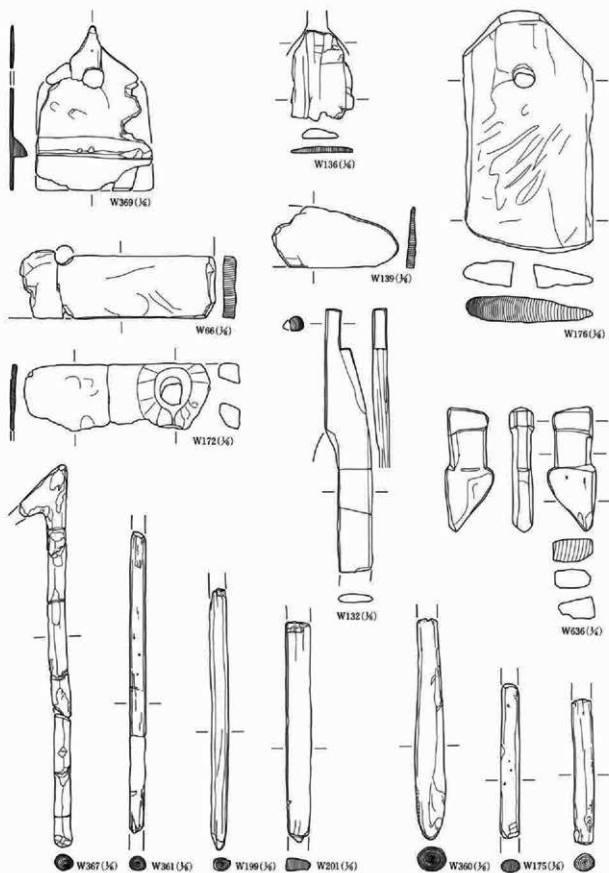
第184図 2-2号河川跡中層出土木器 (1) (1/4・1/6)



第185図 2-2号河川跡中層出土木器(2) (1/6・1/10)

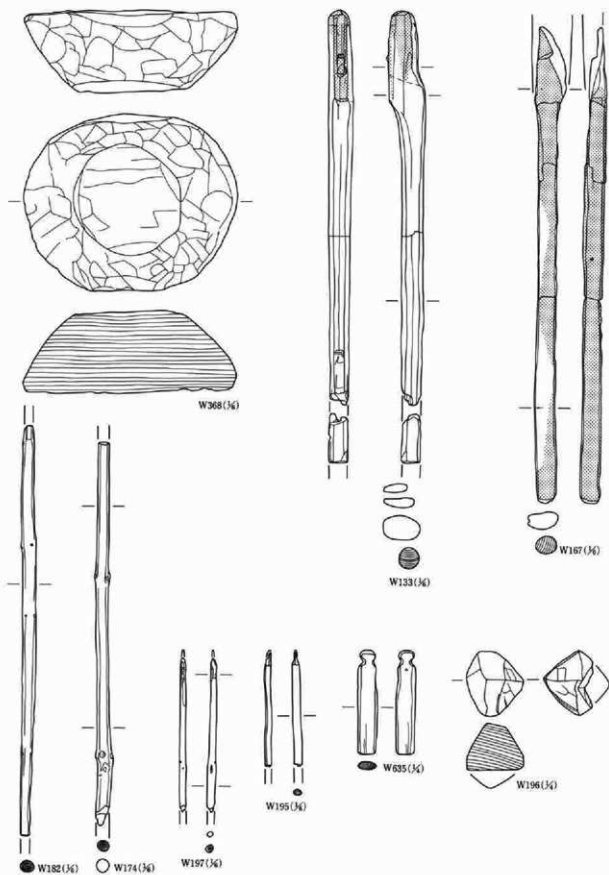


第186図 2-2号河川跡中層出土木器 (3) (1/6)

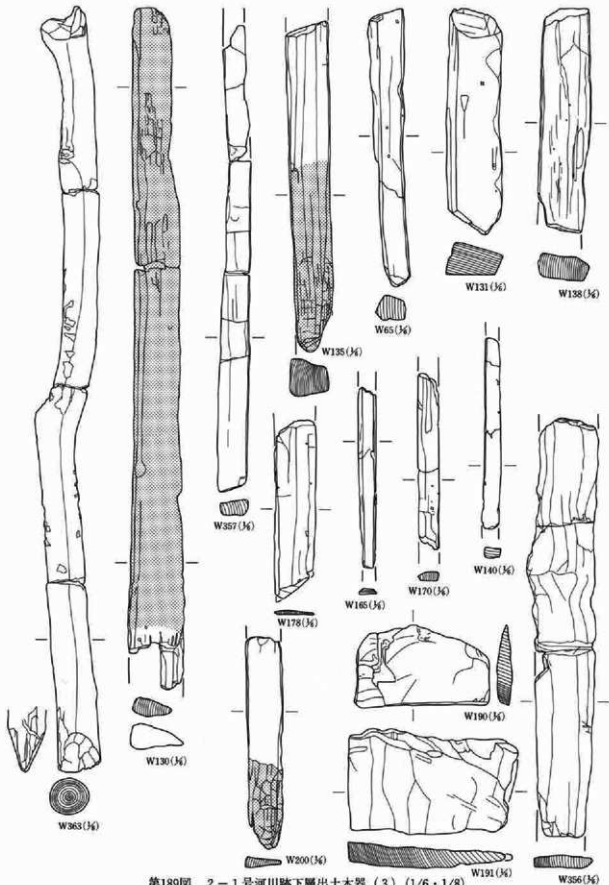


第187図 2-1号河川跡下層出土木器(1) (1/4・1/6)

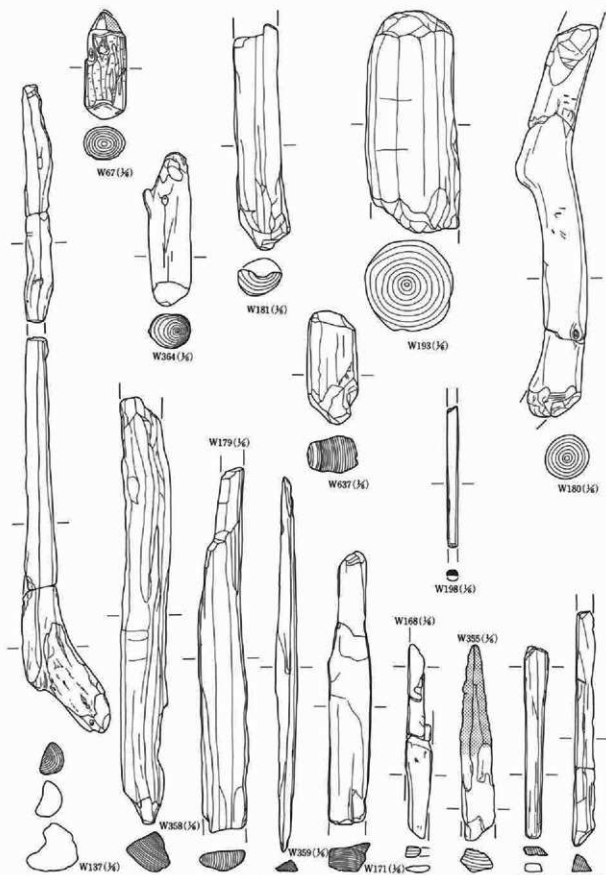
第2章 E区の遺構と遺物



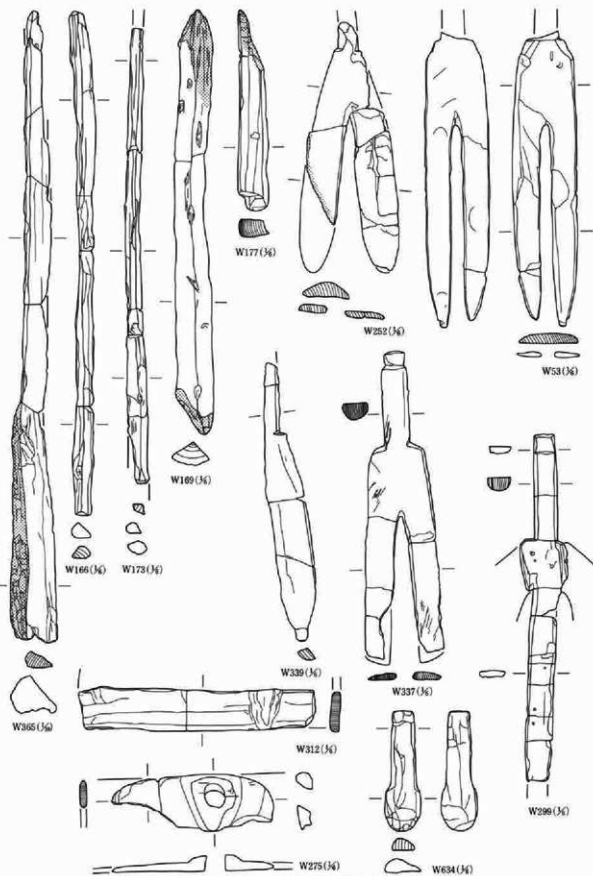
第188図 2-1号河川跡下層出土木器(2) (1/4・1/6)



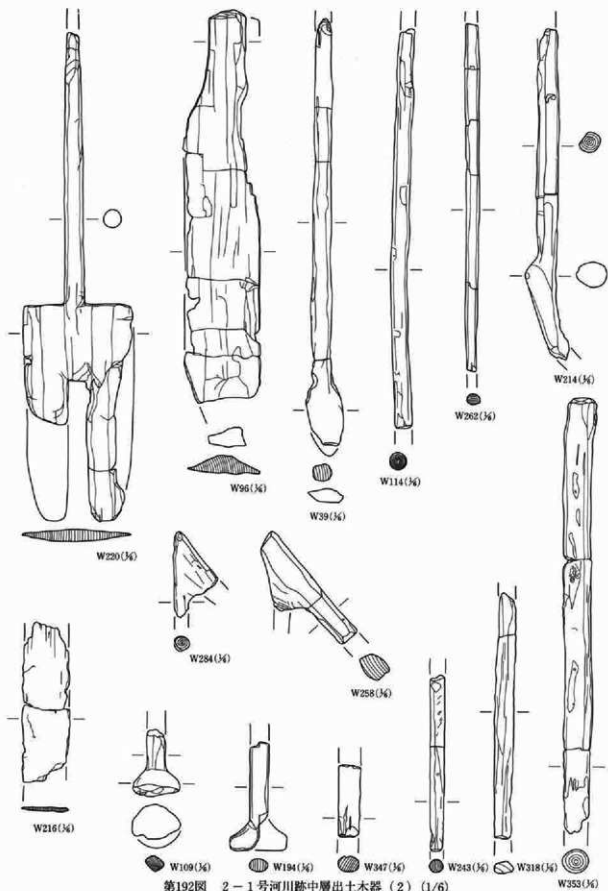
第189図 2-1号河川跡下層出土木器(3) (1/6・1/8)



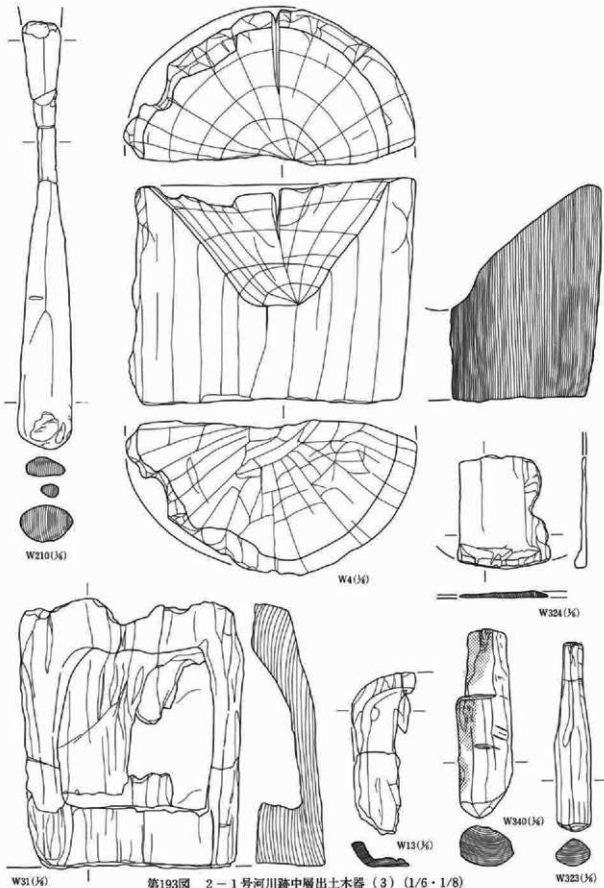
第190図 2-1号河川跡下層出土木器(4)(1/6)



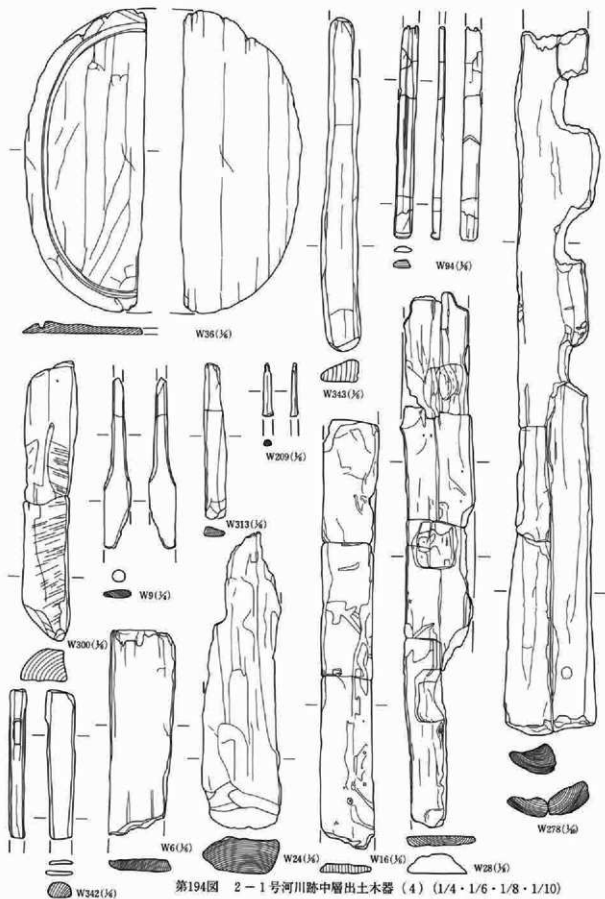
第191図 2-1号河川跡中層出土土器 (1) (1/6・1/10)



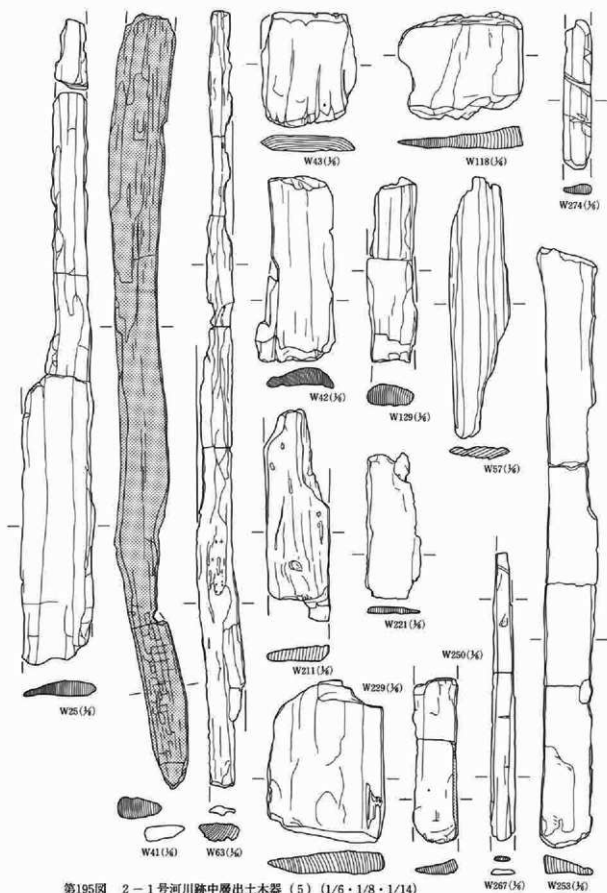
第192図 2-1号河川跡中層出土木器(2)(1/6)



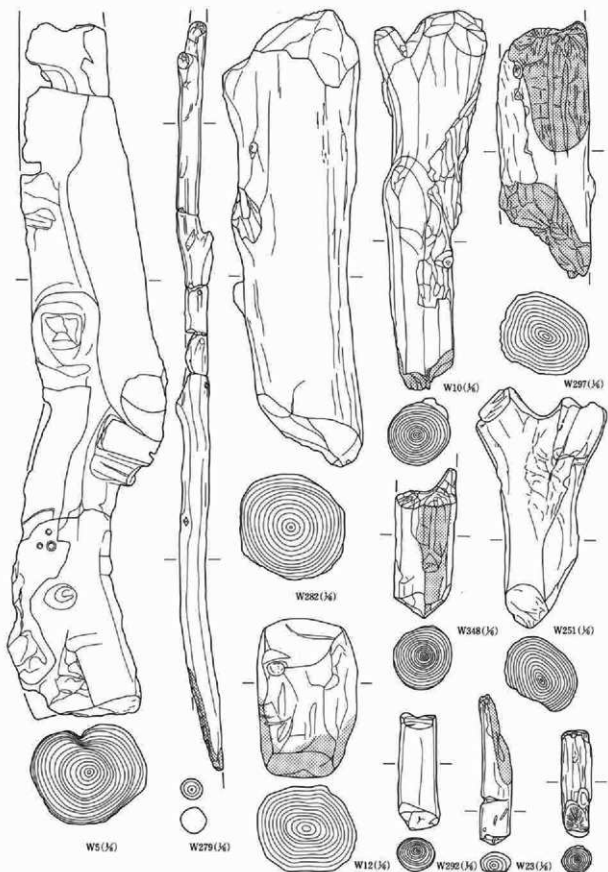
第193図 2-1号河川跡中層出土土器(3) (1/6・1/8)



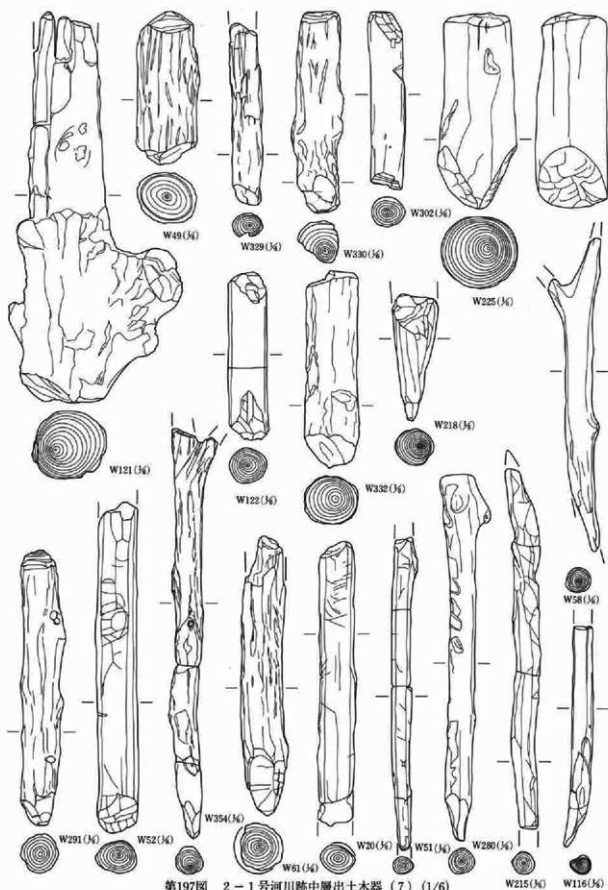
第194図 2-1号河川跡中層出土木器(4) (1/4・1/6・1/8・1/10)



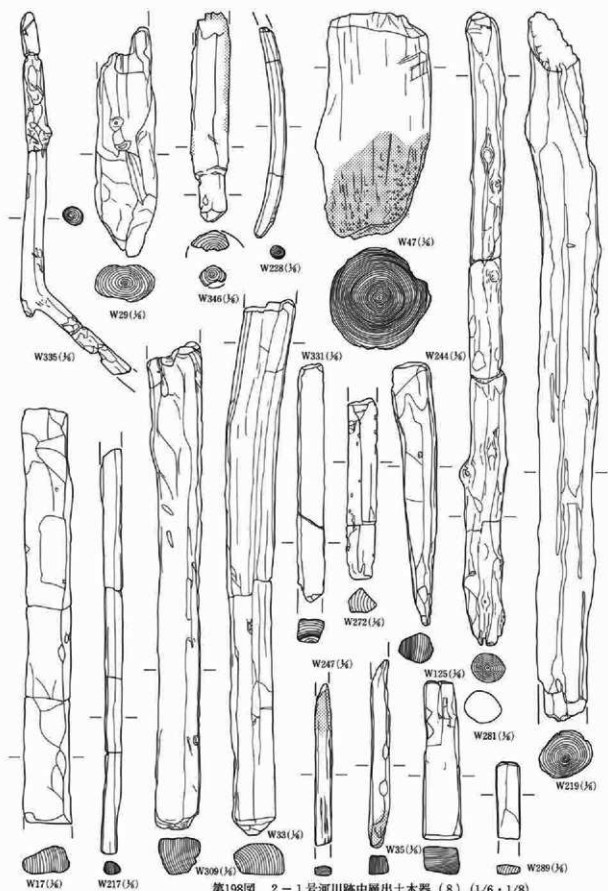
第195図 2-1号河川跡中層出土木器(5) (1/6・1/8・1/14)



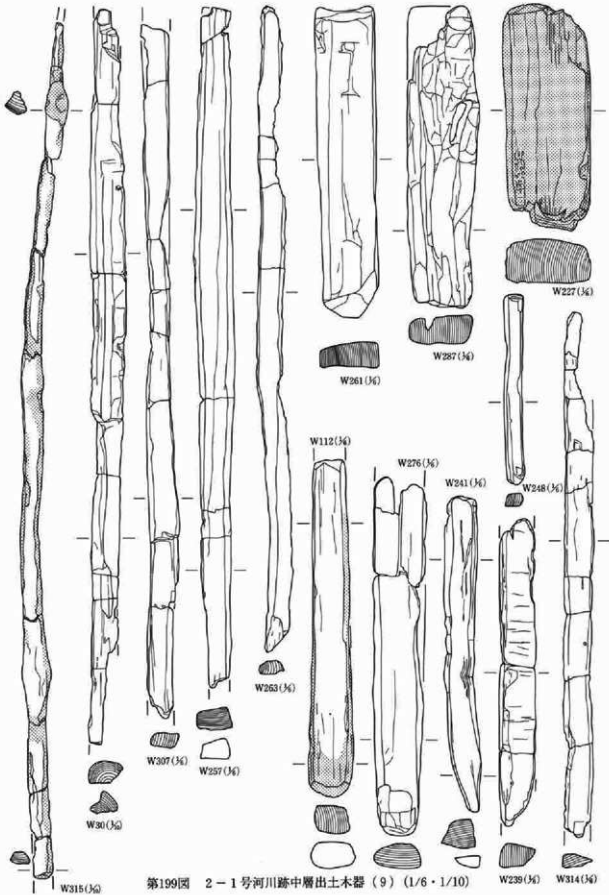
第196図 2-1号河川跡中層出土木器(6) (1/6・1/8)



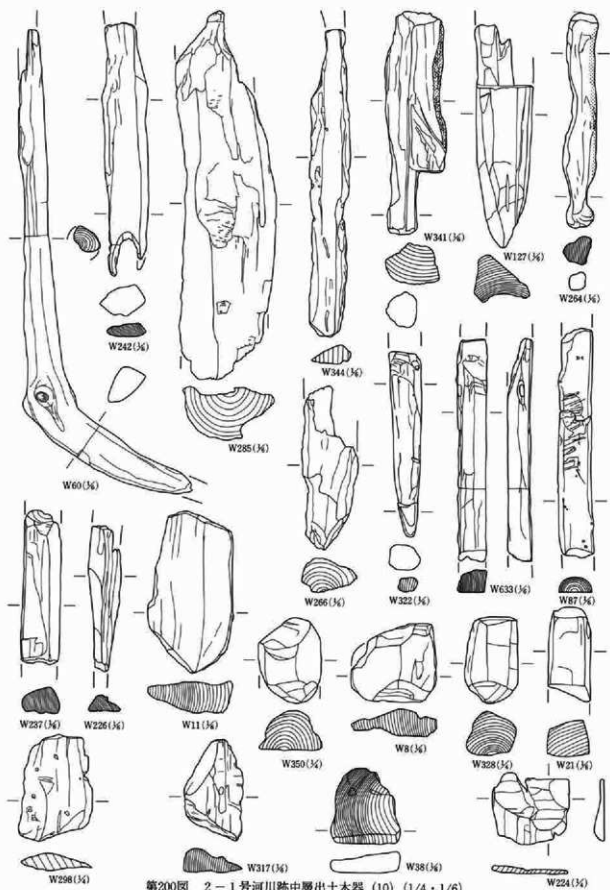
第197图 2-1号河川跡中層出土木器(7)(1/6)



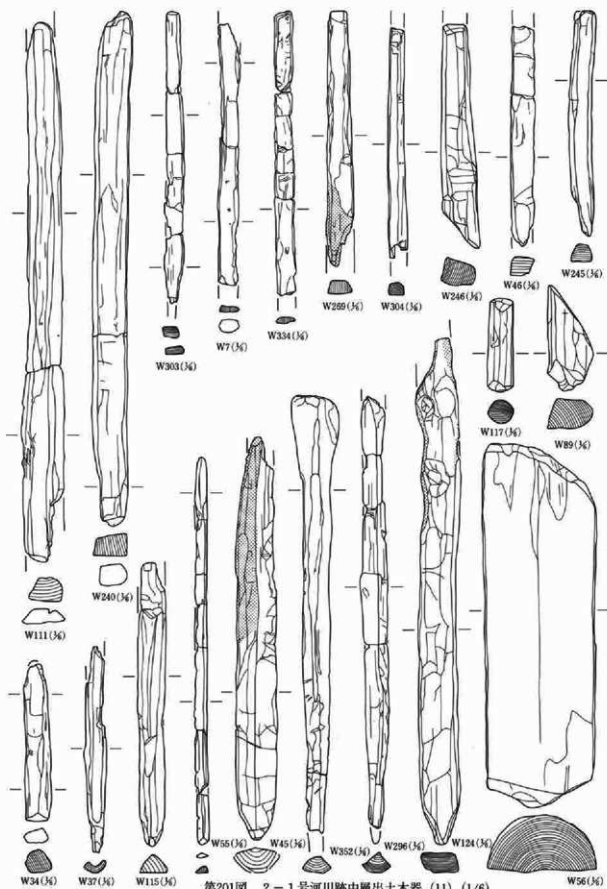
第198図 2-1号河川跡中層出土木器(8) (1/6・1/8)



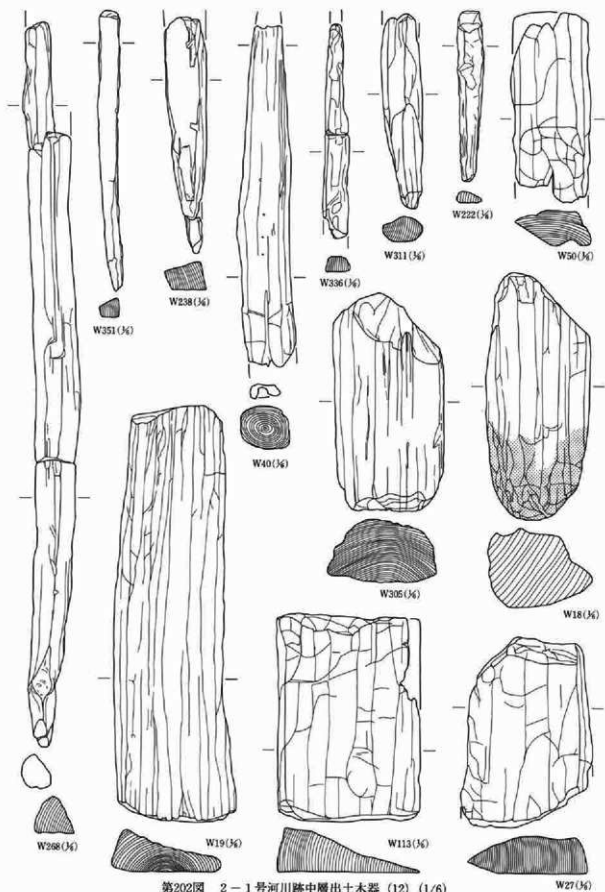
第199図 2-1号河川跡中層出土木器(9)(1/6・1/10)



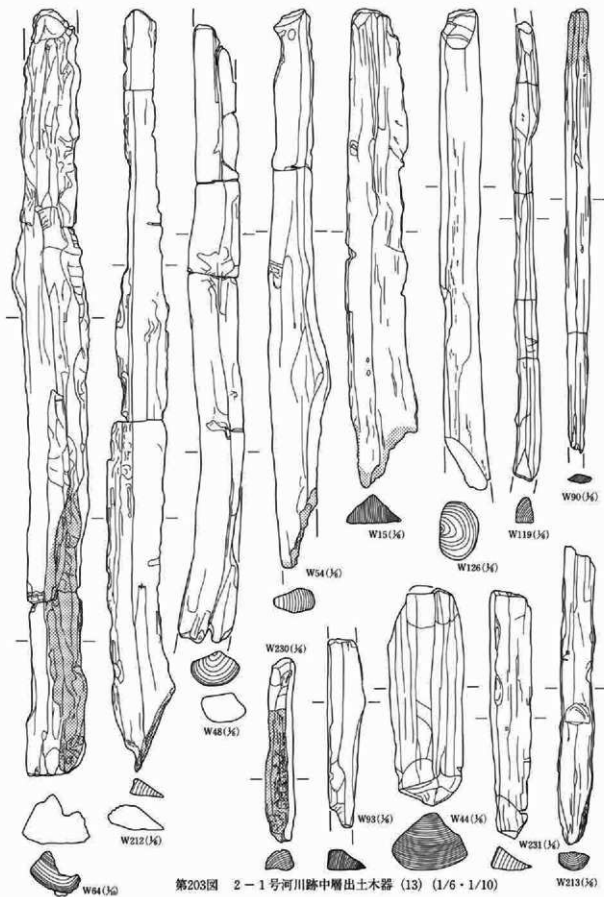
第200図 2-1号河川跡中層出土木器(10) (1/4・1/6)



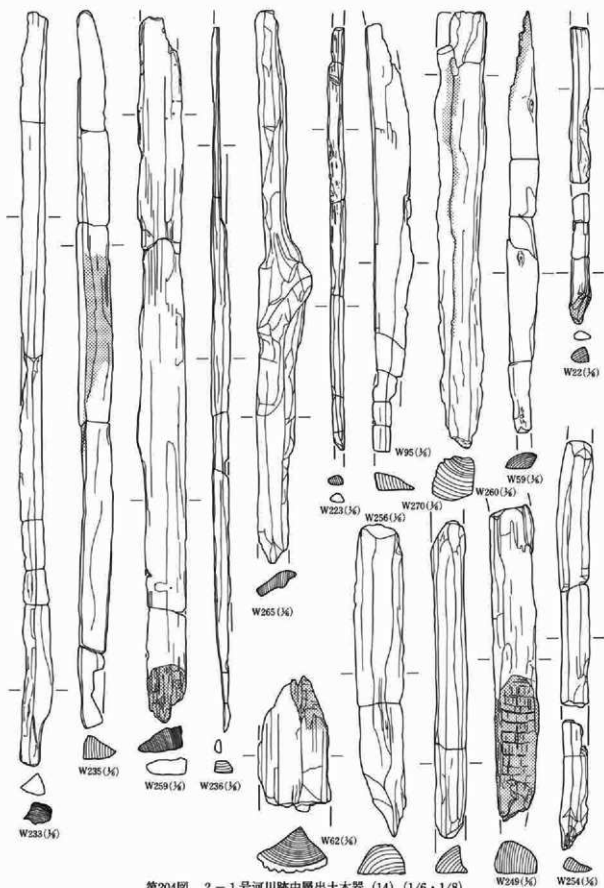
第201圖 2-1号河川跡中層出土木器 (11) (1/6)



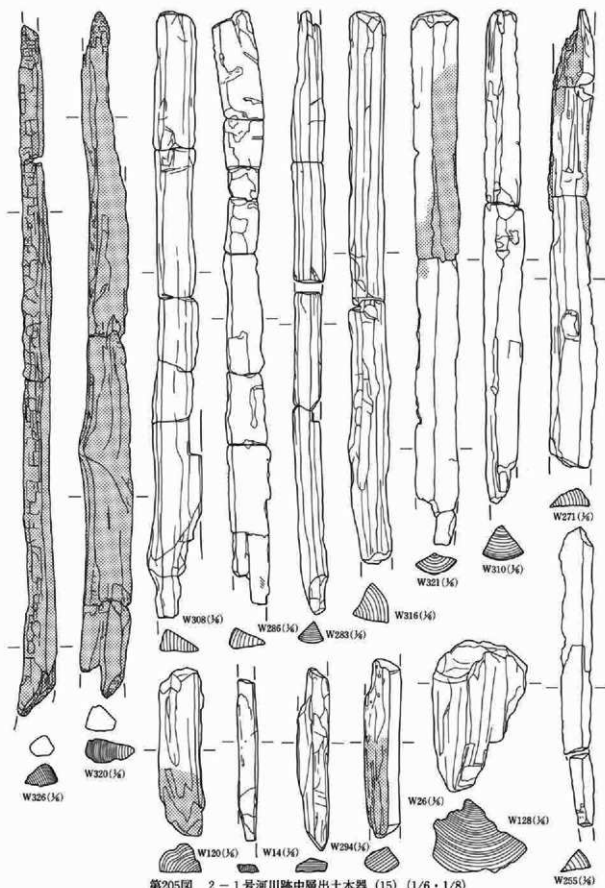
第202図 2-1号河川跡中層出土木器 (12) (1/6)



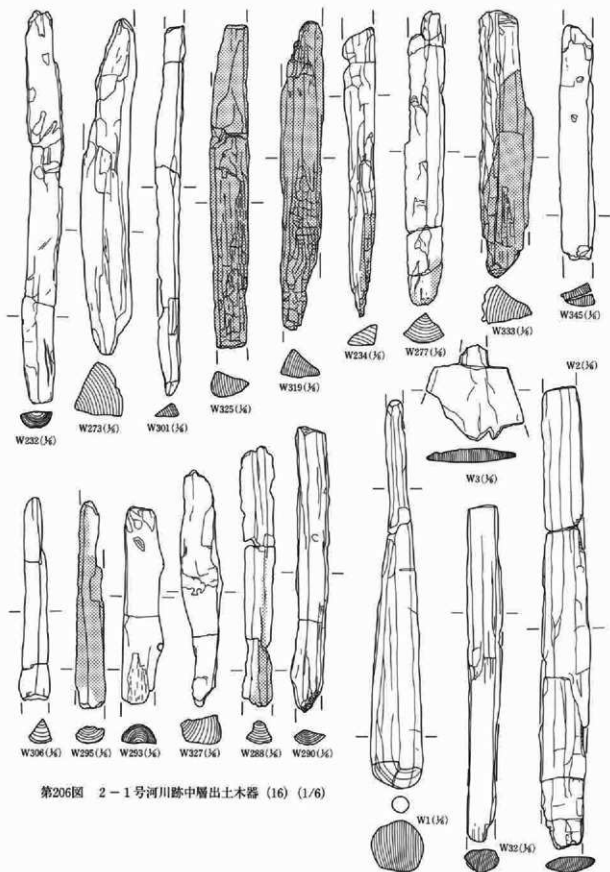
第203図 2-1号河川跡中層出土木器 (13) (1/6・1/10)



第204図 2-1号河川跡中層出土木器 (14) (1/6・1/8)

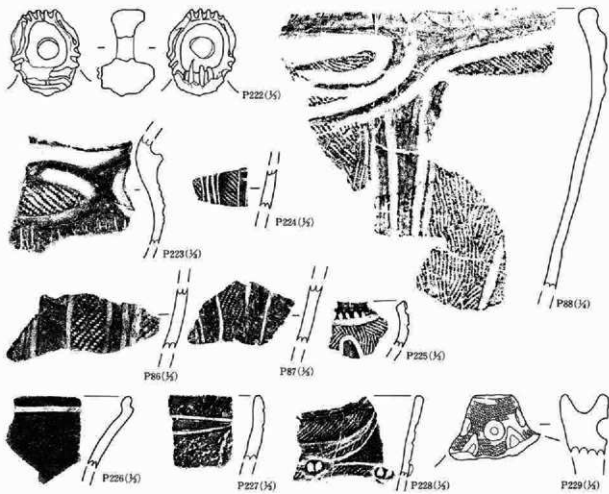


第205図 2-1号河川跡中層出土土器 (15) (1/6・1/8)



第206図 2-1号河川跡中層出土木器 (16) (1/6)

第207図 2号河川跡上層出土木器 (1/6)



第208図 グリットおよび2号河川跡出土の縄文土器 (1/3・1/4)

第3章 F区の遺構と遺物

第1節 I・II面の遺構と遺物

F区は表土下が直接V層（FPF-1）となるためI・II面の遺構が同一面で検出された。I面の遺構は円形の柱穴が11本確認されただけである。II面の遺構は竪穴住居跡32軒、土坑1基が確認された。住居群は8～10世紀代の時期で、高い重複率を示していた。

1 住居跡

208号住居跡（第219図）

2 J-69に位置し211号住居跡より古い。北壁の一部から北西隅が確認された。壁は高さ0.12mが確認され床面は平坦でやや固く締まっていた。掘り方は全面がほぼ0.20m掘り込まれていた。出土遺物はなく時期不明。

209号住居跡（第210・211図 図版39-1, 176-1）

位置 2 J-68

重複 なし。

形状 東壁にあるカマドと東南隅の部分を確認しただけで、他は調査区外となる。

長軸方位 不明。

規模 1.44×1.23+m

埋没土 粘性の低い土層で埋没。

壁 0.10mの高さが確認され、垂直に立ち上がっていた。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦でやや固く締まっていた。

貯蔵穴 位置 東南隅にある。形状 隅丸長方形をなす。規模 0.75×0.54m 深さ0.21m 遺物出土状態 瓦片2点（P-92・93）が出土。

カマド 位置 東壁にある。規模 焚き口幅0.72+m 奥行0.46m 煙道幅0.30m 長さ0.58m 遺

存状態 東壁より半円形に突出し、さらに煙道がのびていた。燃焼面はやや焼けていた。遺物出土状態 出土遺物なし。掘り方 燃焼面は播鉢状に0.18m掘り込まれていた。

掘り方 不明。

遺物出土状態 埋没土中より土師器や須恵器の壊・甕の小片が約50点出土した。

時期 出土遺物により9～10世紀代の住居跡と推定される。

210号住居跡（第210・211図 図版39-1, 176-1）

位置 2 I-69

重複 211・215号住居跡と重複しているが前後関係不明。

形状 不明。掘り方だけが確認された。

長軸方位 不明。

規模 3.67×2.86+m

埋没土 粘性の低い黒褐色土で埋没。

壁 不明。

周溝 北壁から西壁にかけて確認された。幅0.18m 深さ0.05～0.01m

柱穴 なし。

床面 不明。

貯蔵穴 不明。

カマド 不明。

掘り方 中央部から南東隅方向にかけて3基の楕円形の床下土坑が確認された。

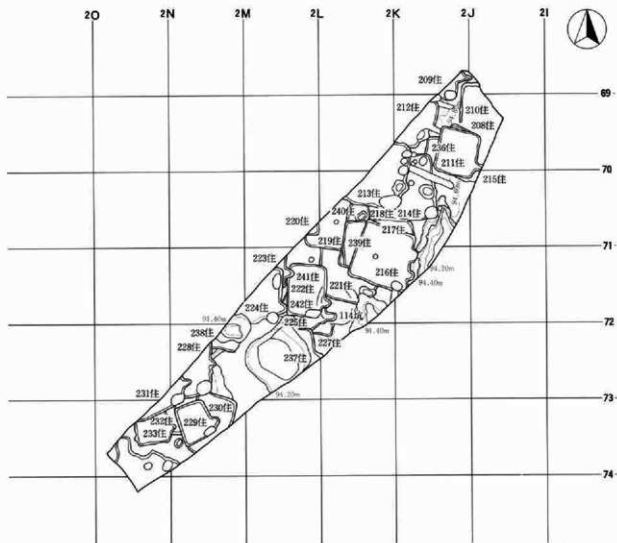
遺物出土状態 掘り方より土師器・須恵器の壊・坑小片が16点出土し、瓦片4点が出土した。

時期 出土遺物により9世紀代の住居跡と推定される。

211号住居跡（第219・220図 図版39-2・3, 178-1）

位置 2 J-69

重複 215号住居跡より古く、208・212・236号住居



第209図 F区I・II面全体図(1/250)

跡より新しい。

形状 隅九方形。

長軸方位 N-15°-E

規模 3.03×2.62m

埋没土 焼土・炭化物粒を含む灰黄褐色土で埋没。

壁 0.20-0.05mの高さが確認され、垂直に立ち上がっていた。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 なし。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模

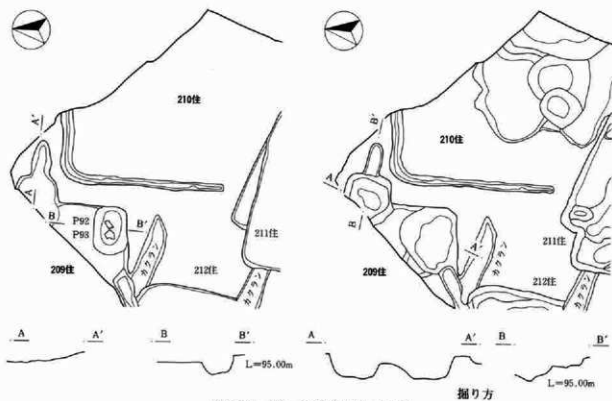
焚き口幅0.58m 奥行0.55+m 遺存状態 東壁より大きく突出し、燃焼面は強く焼け灰がカマド前から南東隅にかけて分布していた。遺物出土状態 土師器甕(P-96)の小片がカマド内からカマド前にかけて出土した。掘り方 カマド内からカマド前にかけて約0.20m掘り込まれていた。

掘り方 全面が0.25-0.15m凸凹に掘り込まれ、南東隅、南西隅、東壁寄りさらには楕円形の床下土塊が確認された。

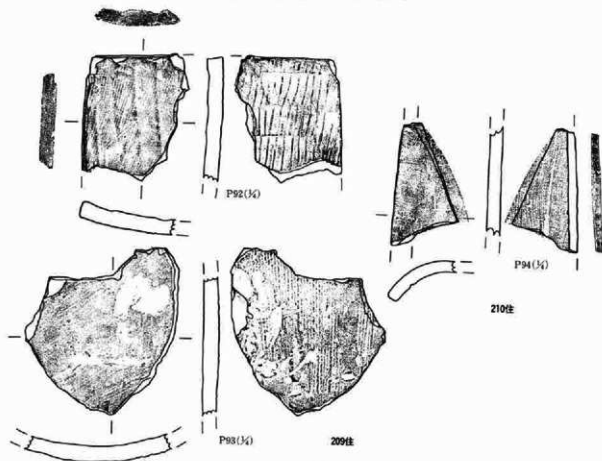
遺物出土状態 埋没土中より土師器・須恵器・瓦の小片が約100点、掘り方より約40点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により9世紀後半と考え

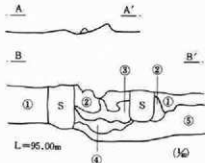
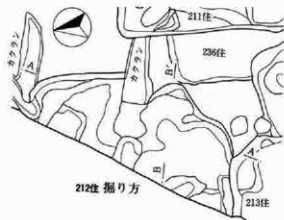
第3章 F区の遺構と遺物



第210図 209・210号住居跡 (1/60)

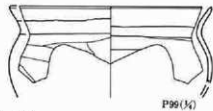
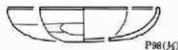


第211図 209・210号住居跡出土遺物 (1/4)



覆土 ①灰黄褐色土(10YR5/2) 黒色土小ブロックを少量含む粘質土。②焼けた砂岩と焼土小ブロックの混土層。③褐灰色土(10YR4/2) 焼土小ブロックを極少量含む粘質土。掘り方 ④灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土・黒色土小ブロックを極少量含む。⑤黒褐色土(10YR3/1) 焼土小ブロックを少量含む。

第212図 212号住居跡 (1/60)



第213図 212号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

られる。

212号住居跡(第212・213図 図版39-2・4, 176-2)

位置 2J-69

重複 211・213号住居跡より古い。

形状 不明。西半部大半が調査区外となる。

長軸方位 不明。

規模 3.40×1.28+m

埋没土 粘性の低い黄褐色土で埋没。

壁 0.12mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 なし。

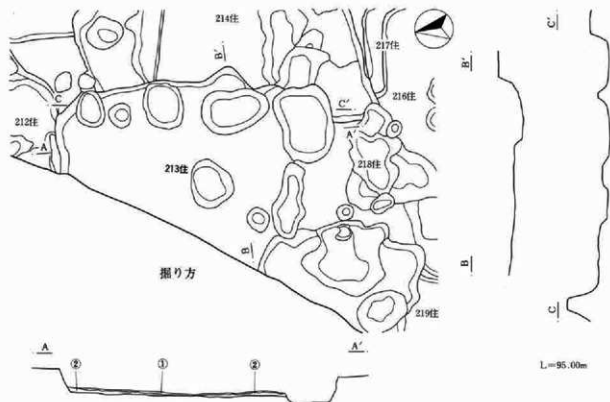
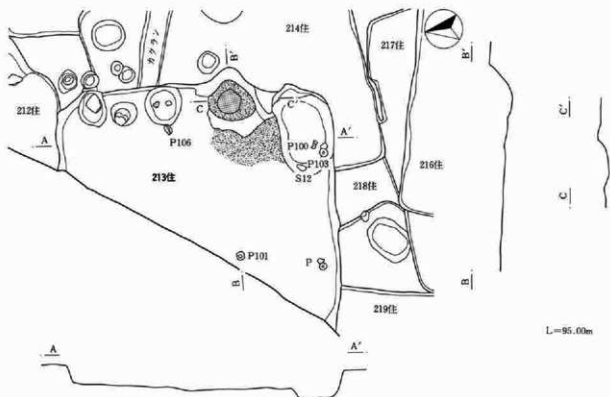
カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.47m 奥行0.65m 遺存状態 焚き口両袖に立石があり、燃焼部中央には支柱石がある。燃焼面・周壁ともやや焼けていた。遺物出土状態 土師器壺(P-99)が小片で散布していた。掘り方 掃鉢状に全面が0.37m掘り込まれていた。

掘り方 0.38~0.20mの深さで全面が凸凹に掘り込まれていた。

遺物出土状態 埋没土や掘り方より土師器・須恵器の小片が約70点出土した。

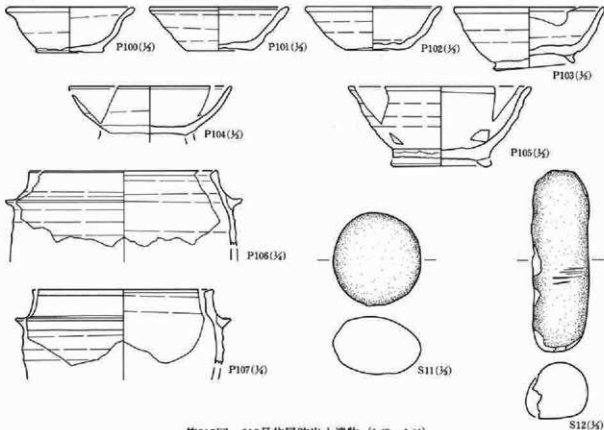
時期 出土遺物や重複関係により8世紀後半の住居跡と考えられる。

第3章 F区の遺構と遺物



- ①灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土・黒色灰の小ブロックを少量含む粘質土。
 ②暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒・炭化物粒を極少量含む粘質土。

第214図 213号住居跡 (1/60)



第215図 213号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

213号住居跡(第214・215図 図版39-5~8, 176-3,

177-1)

位置 2 J-70

重複 212・214・218・219号住居跡より新しい。

形状 北西部が調査区外となるが隅丸方形をなすと考えられる。

長軸方位 N-14°-E

規模 4.37×3.63+m

埋没土 焼土・炭化物粒を少量含む灰黄褐色土で埋没。

壁 0.38~0.20mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦でほぼ全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 位置 南東隅にある。形状 隅丸長方形
規模 1.25×0.87m 深さ0.21m 遺物出土状態
須恵器坏・埴4点(P-100~103)と磨石(S-12)

1点が出土。

カマド 位置 東壁南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.90m 奥行1.02m 遺存状態 東壁より半円形にやや突出。一方の袖部の高まりを残す。燃焼部はやや凹み弱く焼けている。カマド前には灰がやや厚く堆積。遺物出土状態 なし。

掘り方 全面が0.05~0.10m掘り込まれ中央部に楕円形の床下土坑が1基確認された。

遺物出土状態 埋没土や掘り方より須恵器坏・埴や羽釜片が約190点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により10世紀前半の住居跡と考えられる。

214号住居跡(第216~218図 図版40-1~3, 177-2, 178-1)

位置 2 J-70

重複 213・217・218号住居跡より古く、236号住居跡より新しい。

第3章 F区の遺構と遺物

形状 ほぼ方形をなし北西部を213号住居跡に切られる。

長軸方位 N-2°-W

規模 4.18×3.85m

埋没土 粘性の低い灰黄褐色土で埋没。

壁 0.08~0.15mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がっていた。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 ほぼ平坦でカマド前がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 位置 南東隅にある。形状 円形。規模 0.75×0.80m 深さ0.20m 遺物出土状態 土師器壺片(P-112)が1点出土した。

カマド 位置 東壁のやや南東隅寄りにある。規模 焚き口幅1.00m 奥行1.05m 遺存状態 奥壁がわずかに東壁より突出する状態で、袖や煙道は確認されず、良く焼けた燃焼部が浅く凹んで検出されカマド前には灰が薄く堆積していた。遺物出土状態 平瓦片が8点出土した。

掘り方 全面が0.05~0.18m掘り込まれており、北東隅と南壁寄り中央部に3基の不整楕円形の床下土坑が確認された。

遺物出土状態 埋没土や掘り方より須恵器碗・瓦・土師器台付壺の小片が約200点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により9世紀後半の住居跡と考えられる。

215号住居跡(第219・220図 図版39-2, 178-2)

2 I-69にあり211号住居跡より新しい。掘り方と南北壁の一部が確認されただけである。南北軸の規模は3.08mで掘り方には円形の小ピットが2基確認された。掘り方からは須恵器碗や羽釜の小片が4点出土した。時期は10世紀代と推定される。

216号住居跡(第221・222図 図版40-4-7, 178-2, 179-1)

位置 2 K-71

230

重複 217・239号住居跡より新しい。

形状 方形をなす。

長軸方位 N-13°-W

規模 3.77×3.85m

埋没土 炭化物や焼土を極少量含む黒褐色土で埋没。

壁 0.13~0.21mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 位置 南東隅にある。形状 楕円形をなす。規模 0.56×0.80m 深さ0.20m 遺物出土状態 出土遺物なし。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.63m 奥行0.83m 遺存状態 東壁より半円形に突出する状態で袖や煙道は確認されなかった。燃焼部底面が弱く焼けており、2本の支柱が確認された。遺物出土状態 須恵器碗・羽釜・灰軸陶器の小片が22点、磨石1点が出土した。

掘り方 不整楕円形をした床下土坑がカマド前から東壁寄り中央部に5基、中央部に6基、西壁寄り中央部に1基が確認された。

遺物出土状態 須恵器碗・羽釜・灰軸陶器・瓦の小片約180点が埋没土や掘り方より出土した。須恵器碗(P-119)が南壁寄り中央部の床面から出土し、羽釜(P-120)が掘り方より出土した。

時期 出土遺物や重複関係により10世紀前半の住居跡と考えられる。

217号住居跡(第221・222図 図版40-4・7, 179-2)

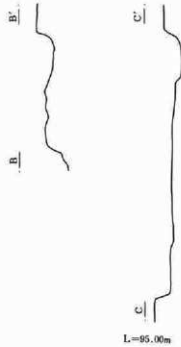
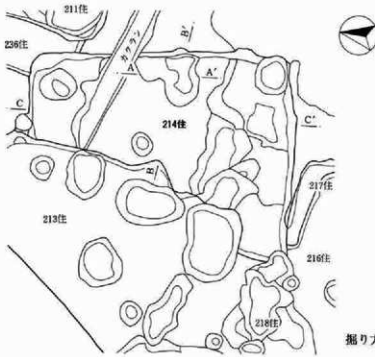
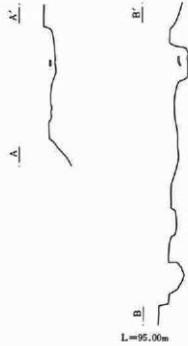
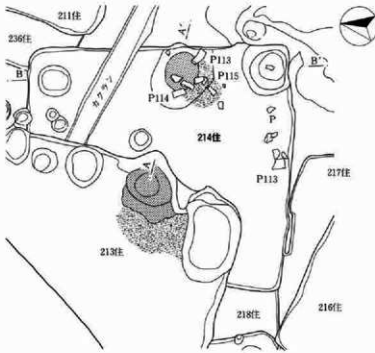
位置 2 J-70

重複 216号住居跡より古く、214・218号住居跡との前後関係は確認できなかった。

形状 北東隅から北壁の一部が確認されただけで形状不明。

規模 0.80+×2.85+m

長軸方位 不明。



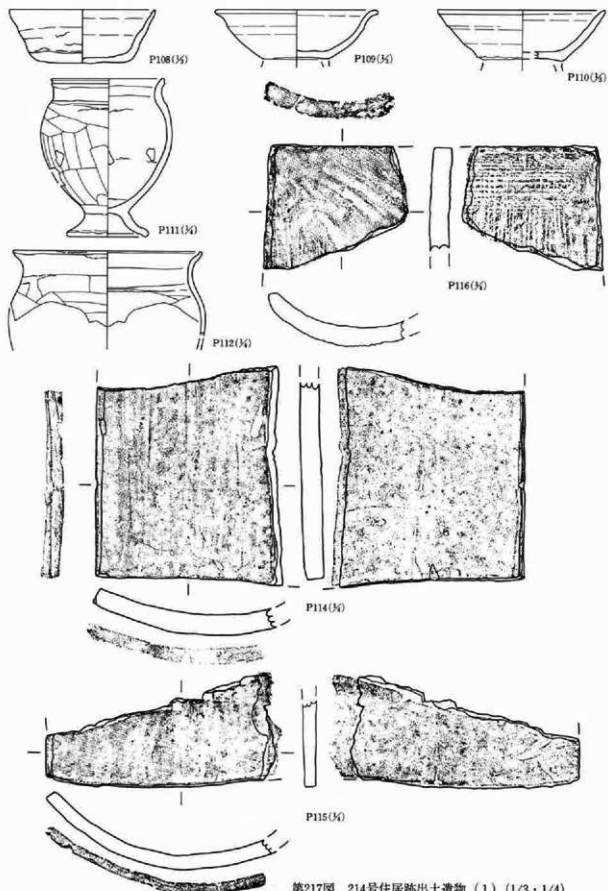
掘り方



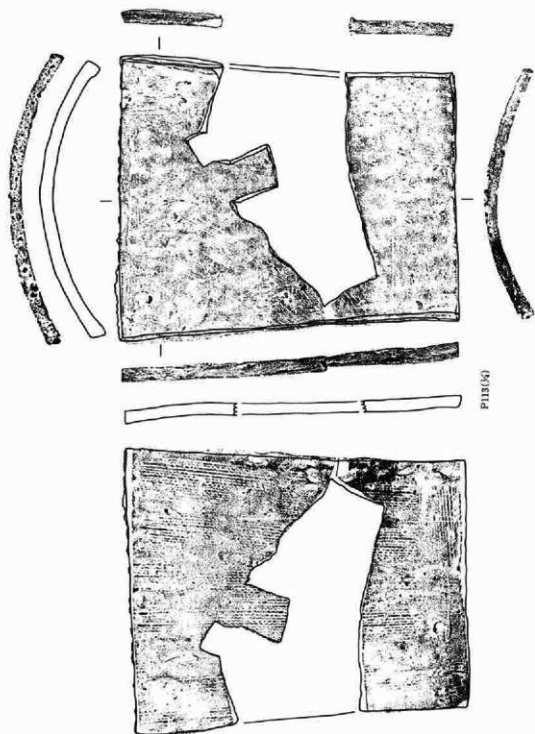
- ①黒色灰層(10YR1.7/1) 焼土粒を極少量含む。
- ②黒褐色土(10YR3/2) 灰質褐色土小ブロックを極少量含む粘質土。
- ③黒色土(10YR1.7/1) 焼土小ブロックを極少量含む粘質土。

第216図 214号住居跡 (1/60)

第3章 F区の遺構と遺物



第217図 214号住居跡出土遺物 (1) (1/3・1/4)

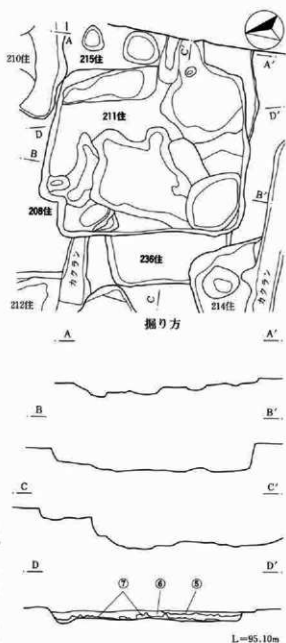
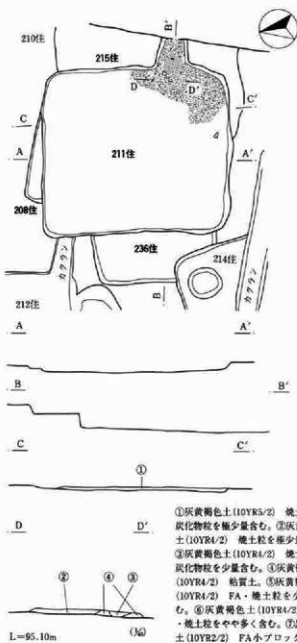


第218図 214号住居跡出土遺物(2)(1/4)

埋没土 VI層小ブロックを少量含む粘質土で埋没。
 壁 0.08mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がっていた。
 周溝 なし。
 柱穴 なし。

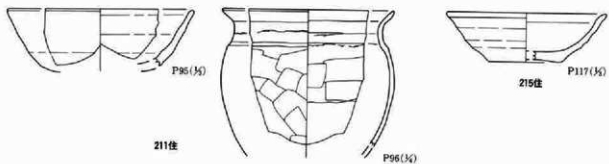
床面 平坦でやや軟弱な状態であった。
 貯蔵穴 不明。
 カマド 不明。
 掘り方 全面がほぼ0.05m掘り込まれていた。
 遺物出土状態 埋没土や掘り方より須恵器塊・土師

第3章 F区の遺構と遺物

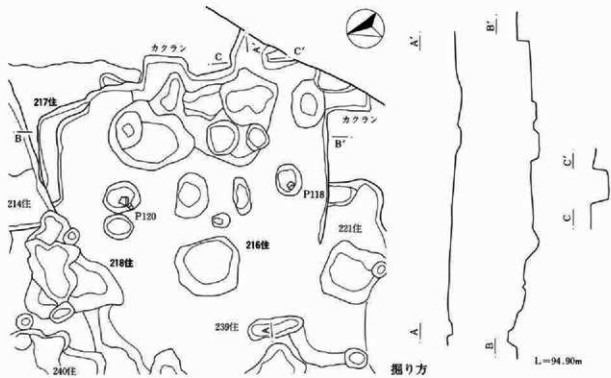
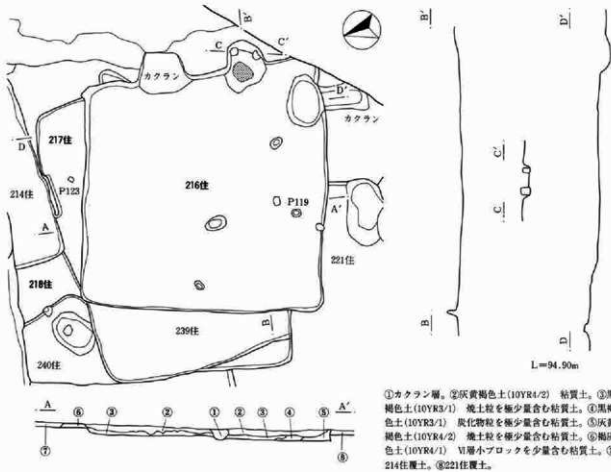


① 灰黄褐色土(10YR5/2) 焼土粒・炭化物粒を極少量含む。② 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒を極少量含む。③ 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒・炭化物粒を少量含む。④ 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土。⑤ 灰黄褐色土(10YR4/2) FA・焼土粒を少量含む。⑥ 灰黄褐色土(10YR4/2) FA・焼土粒をやや多く含む。⑦ 黒褐色土(10YR2/2) FA小ブロックを少量含む。

第219図 208・211・215・236号住居跡 (1/60)

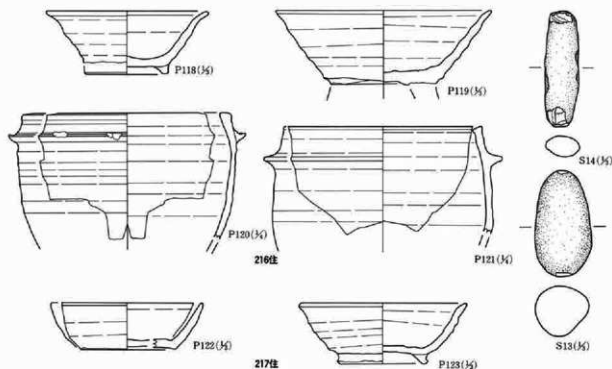


第220図 211・215号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)



第221図 216・217・218号住居跡 (1/60)

第3章 F区の遺構と遺物



第222図 216・217号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

器変・瓦の小片が約20点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により9世紀前半の住居跡と考えられる。

218号住居跡 (第221図 図版40-4・7)

2 K-70に位置し213・214・240号住居跡より古い。南壁寄りの一部が確認されただけである。壁は0.05mの高さが確認され、床面は平坦で軟弱であった。掘り方には不整形の床下土坑が1基確認された。遺物は埋没土より須恵器埵・灰軸陶器・土師器甕の小片が4点出土しただけである。時期不明。

219号住居跡 (第223・224図 図版40-4, 179-2)

位置 2 K-70

重複 213・220・239号住居跡より古く、240号住居跡より新しい。北西部は調査区外となる。

形状 不明。

長軸方位 N-4°-E

規模 3.35+×2.57m

埋没土 焼土・炭化物を少量含む灰黄褐色土で埋没。

壁 約0.10mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦ではほぼ全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

カマド 不明。

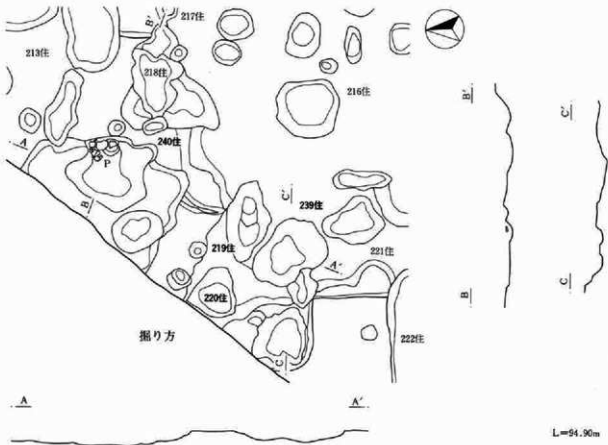
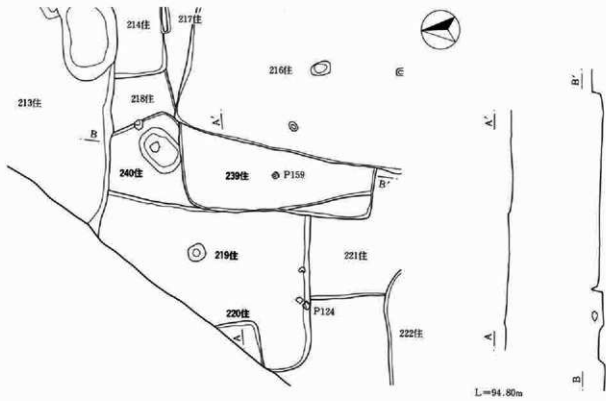
掘り方 全面が凸凹に掘り込まれ南東隅・南西隅・中央部の3ヶ所に不整形円形の床下土坑が確認された。

遺物出土状態 埋没土や掘り方より須恵器埵・埵、土師器甕の小片が約160点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により9世紀後半の住居跡と考えられる。

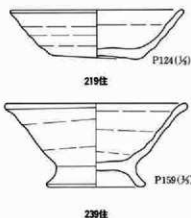
220号住居跡 (第223図 図版40-4・8)

2 L-70に位置し219号住居跡より新しい。南東



第223図 219・220・239・240号住居跡 (1/60)

第3章 F区の遺構と遺物



第224図 219・239号住居跡出土遺物 (1/3)

隅の小範囲を確認しただけで、出土遺物も灰軸陶器片が1点出土しただけである。時期不明。

221号住居跡(第235・236図 図版41-1・2, 179-3)

位置 2K-71

重複 216・222号住居跡より古く、219・239号住居跡・114号土坑より新しい。

形状 不明。

長軸方位 N-6°-E

規模 3.96×3.13+m

埋没土 粘性の低い黄褐色土で埋没。

壁 約0.05mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦でやや軟弱であった。

貯蔵穴 不明。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.60+m 奥行1.07m 遺存状態 東壁よりほとんど突出せず何らの構造も確認できなかった。熱焼面は床面より約0.10m窪んでおりほとんど焼けていなかった。遺物出土状態 カマド内からはP-125-129の須恵器坏・埴、灰軸陶器埴、平瓦が出土した。

掘り方 ほぼ全面が掘り込まれ、南壁寄りと西壁寄りの2ヶ所に不整形の床下土坑が確認された。

遺物出土状態 埋没土より須恵器坏・埴、土師器甕、瓦の小片が約40点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により10世紀前半の住居跡と考えられる。

222号住居跡(第227・228図 図版41-1・3・6, 180-1)

位置 2L-71

重複 221・223・224・241・242号住居跡・114号土坑より新しい。

形状 隅丸長方形

長軸方位 N-2°-W

規模 3.41×2.54m

埋没土 粘性の低い灰黄褐色土で埋没。

壁 約0.06mの高さが確認され、垂直に立ち上がる。周溝 なし。

柱穴 なし。

貯蔵穴 位置 南東隅にある。形状 楕円形。

規模 0.95×0.57m 深さ0.25m 遺物出土状態 須恵器埴(P-130)1点が出土した。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.57m 奥行0.52m 遺存状態 東壁より半円形に突出し、片方の焚き口には袖石が据えられていた。カマド内と前に灰が薄く堆積していた。遺物出土状態 出土遺物なし。

掘り方 全面が凸凹に掘り込まれ、中央部に不整形楕円形の床下土坑が1基確認された。

遺物出土状態 埋没土や掘り方より須恵器坏・埴、羽釜・土師器甕の小片が約110点出土した。

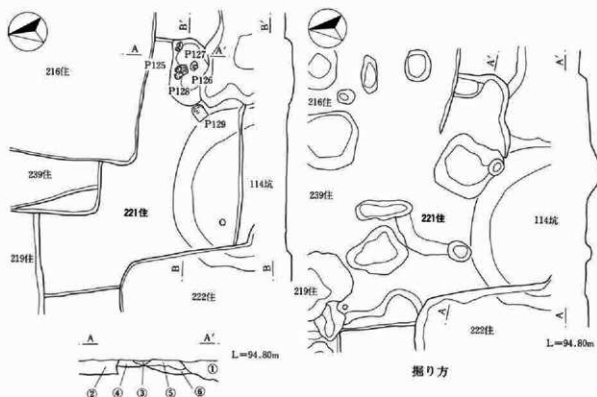
時期 出土遺物や重複関係により10世紀前半の住居跡と考えられる。

223号住居跡(第229・230図 図版41-1・4・6, 180-1)

位置 2L-71

重複 222・224号住居跡より古い。南東隅寄りの部分を確認しただけで他は調査区外となる。

形状 不明。



①暗褐色土(10YR3/4)をなすAs-Bの二次堆積層。②216住覆土。③にぶい黄褐色土(10YR6/3) M層小ブロックを多く含む。④灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒を極少量含む。⑤灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土。⑥黒褐色土(10YR3/1) 炭化物大ブロックを少量含む。

第225図 221号住居跡 (1/60)

長軸方位 不明。

規模 $2.18 \times 1.82 + m$

埋没土 焼土・炭化物を極少量含む灰黄褐色土で埋没。

壁 約0.15mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦でやや軟弱であった。

貯蔵穴 位置 南東隅にある。形状 不整楕円形。規模 $0.95 \times 0.54m$ 深さ0.35m 遺物出土状態 須恵器杯・碗 (P-136~138) 3点が出土した。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.55m 奥行0.60m 遺存状態 東壁より半円形に突出し焚き口両袖に河原石を使用。焼焼面の焼けは弱い。遺物出土状態 須恵器杯(P-134)と土師器甕(P-131)が各1点ずつ出土し、平瓦片

(P-132) 1点が掘り方より出土した。

掘り方 全面が0.10mほど掘り込まれていた。

遺物出土状態 埋没土や掘り方より須恵器杯・碗、土師器甕の小片が約30点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により9世紀前半の住居跡と考えられる。

224号住居跡(第229・230図 図版41-1・5, 180-2)

位置 2L-71

重複 223・242号住居跡より新しい。南壁が攪乱され西半部は調査区外となる。

形状 不明。

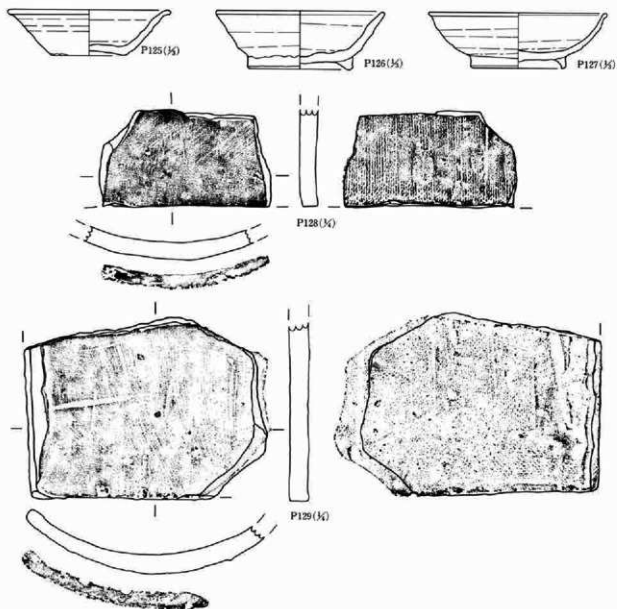
長軸方位 N-3°-E?

規模 $3.63 \times 3.00 + m$

埋没土 焼土・炭化物を極少量含む褐色土で埋没。

壁 約0.18mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上

第3章 F区の遺構と遺物



第226図 221号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦ではほぼ全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 位置 南東隅にある。形状 円形。規模 0.75×0.70m 深さ0.20m 遺物出土状態 須恵器坏 (P-133・135) の2点が出土した。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.57m 奥行0.62m 遺存状態 東壁より半円形に突出し片方の焚き口に袖石を残す。燃焼面

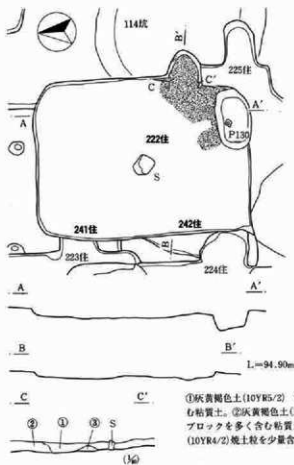
の焼けは弱い。遺物出土状態 土師器甕 (P-139) が出土した。

掘り方 全面が0.05~0.12m掘り込まれていた。

遺物出土状態 埋没土や掘り方より須恵器坏・塊、土師器甕、瓦の小片が約110点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により9世紀前半の住居跡と考えられる。

225号住居跡 (第231・232図 図版41-1・3・6, 180-3)



①灰黄褐色土(10YR5/2) 焼土粒を少量含む粘質土。②灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土小ブロックを多く含む粘質土。③灰黄褐色土(10YR4/2)焼土粒を少量含む粘質土。

第227図 222・241・242号住居跡 (1/60)



第228図 222号住居跡出土遺物 (1/3)

位置 2K-71

重複 222・237号住居跡より古く、227号住居跡・114号土坑より新しい。南西隅寄りには攪乱されている。

形状 不明。

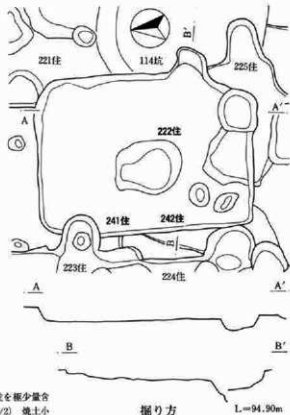
長軸方位 不明。

規模 2.30×1.48+m

壁 わずかに数センチの立ち上がりが確認されただけである。

周溝 なし。

柱穴 なし。



床面 平坦で軟弱であった。

貯蔵穴 なし。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.55m 奥行0.73m 遺存状態 東壁より楕円形に突出し燃焼面の焼けは弱く、他の構造は確認されなかった。遺物出土状態 出土遺物なし。掘り方 全面が0.10-0.15m掘り込まれ、南壁寄り中央部に楕円形の床下土坑が1基確認された。

遺物出土状態 土師器坏や須恵器坏・埴の小片が埋没土や掘り方より約30点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により8世紀前半の住居跡と考えられる。

227号住居跡 (第231・232図 図版41-1, 180-3)

2K-72に位置し、114号土坑より新しく225・237号住居跡より古い。南東隅を確認しただけであ

第3章 F区の遺構と遺物

り全体形状等不明。出土遺物は埋没土や掘り方より須恵器坏・埴や瓦の小片が約20点出土しただけである。時期は不明。

228号住居跡(第233・234図 図版41-7・8, 180-4, 181-1)

位置 2M-72

重複 230・231・238号住居跡より新しい。北西部が調査区外となる。

形状 不明。

長軸方位 不明。

規模 3.36+×3.35+m

埋没土 焼土・炭化物を極少量含む灰黄褐色土で埋没。

壁 0.10~0.20mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦でカマド前から中央部が固く締まっていた。

貯蔵穴 位置 南東隅にある。形状 隅丸方形 規模 0.90×0.88m 深さ0.44m 遺物出土状態 須恵器坏(P-143)と土師器壺片が各1点ずつ出土した。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.55m 奥行0.65m 遺存状態 煙道部への立ち上がりが東壁より突出する状態で、他の構造は確認されなかった。燃焼面の焼けは弱くカマド前に灰がやや厚く堆積していた。遺物出土状態 須恵器壺片と瓦片4点と須恵器皿1点が出土した。

掘り方 周壁に沿う部分だけが0.05mほど掘り込まれていた。

遺物出土状態 遺物はカマド、貯蔵穴、南壁寄り中央部に集中し、図示した以外に埋没土や掘り方より須恵器坏・埴の小片を中心に約120点の遺物が出土した。

時期 出土遺物や重複関係により9世紀前半の住居跡と考えられる。

229号住居跡(第235・236図 図版42-1~3・7, 181-2)

位置 2M-73

重複 230・232号住居跡より新しい。

形状 隅丸方形。

長軸方位 N-28°-W

規模 2.58×2.10m

埋没土 焼土を多く含む灰黄褐色土で埋没。

壁 0.14~0.22mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で軟弱であった。

貯蔵穴 位置 南東隅にある。形状 楕円形。規模 0.74×0.54m 深さ0.21m 遺物出土状態 須恵器埴(P-149)1点が出土した。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.65m 奥行0.72m 遺存状態 東壁より楕円形に突出し、周壁が良く焼けており燃焼部底面からカマド前には灰が堆積していた。遺物出土状態 掘り方より須恵器坏小片2点、土師器壺小片3点が出土した。

掘り方 全面が0.10~0.18m掘り込まれ、南壁寄り中央部に楕円形の床下土坑が1基確認された。

遺物出土状態 埋没土や掘り方より須恵器坏・埴や土師器壺の小片が約130点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により9世紀後半の住居跡と考えられる。

230号住居跡(第235図 図版42-1・7)

位置 2M-73

重複 228・229号住居跡より古い。北東部が調査区外となる。

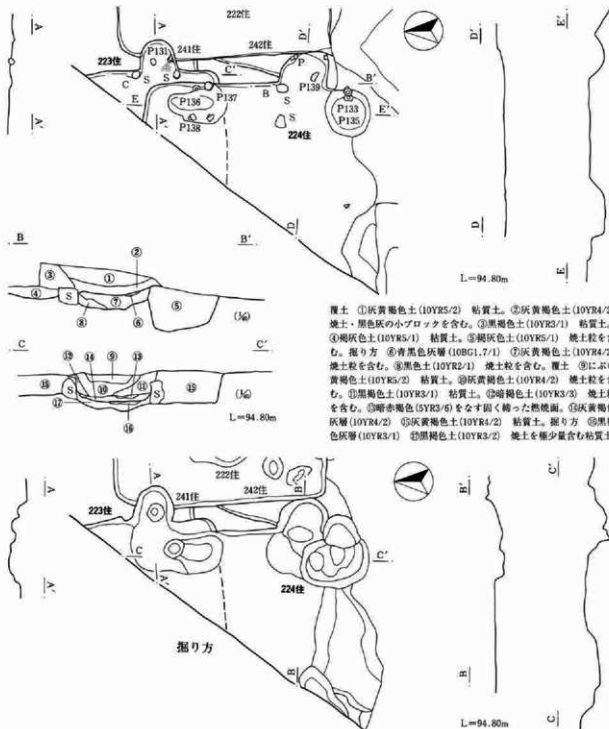
形状 隅丸長方形?

長軸方位 N-13°-E

規模 4.10×2.64m

埋没土 焼土小ブロックを含む褐色土で埋没。

壁 約0.10mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上



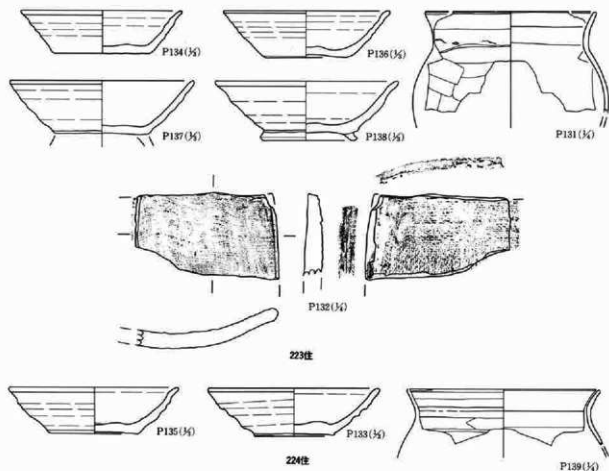
覆土 ①灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質土。②灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土・黒色灰の小フロックを含む。③黒褐色土(10YR3/1) 粘質土。
 ④褐色土(10YR5/1) 粘質土。⑤褐色土(10YR5/1) 焼土粒を含む。掘り方 ⑥青黒色灰層(10BG1.7/1) ⑦灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒を含む。⑧黒色土(10YR2/1) 焼土粒を含む。覆土 ⑨ぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質土。⑩灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒を含む。⑪黒褐色土(10YR3/1) 粘質土。⑫暗褐色土(10YK3/3) 焼土粒を含む。⑬暗赤褐色(5YR3/6)をなす固く締った燃焼面。⑭灰黄褐色灰層(10YR4/2) ⑮灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土。掘り方 ⑯黒褐色灰層(10YR3/1) ⑰暗褐色土(10YK3/2) 焼土を少量含む粘質土。

第229図 223・224号住居跡 (1/60)

がる。
 周溝 なし。
 柱穴 なし。
 床面 平坦で全面がやや固く締まっていた。
 貯蔵穴 不明。

カマド 不明。
 掘り方 全面が約0.05m掘り込まれ、西壁中央部寄りに楕円形の床下土坑が1基確認された。
 遺物出土状態 埋没土や掘り方より須恵器杯・碗の小片を中心とする約50点の遺物が出土した。

第3章 F区の遺構と遺物



第230図 223・224号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

時期 出土遺物や重複関係により9世紀代の住居跡と推定される。

231号住居跡(第237・238図 図版42-1・4・5・7, 181-3・4)

位置 2M-72

重複 228・232・233号住居跡より新しい。北西部大半が調査区外となる。

形状 不明。

長軸方位 不明。

規模 3.33×1.70+m

埋没土 灰黄褐色土で埋没。

壁 約0.30mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

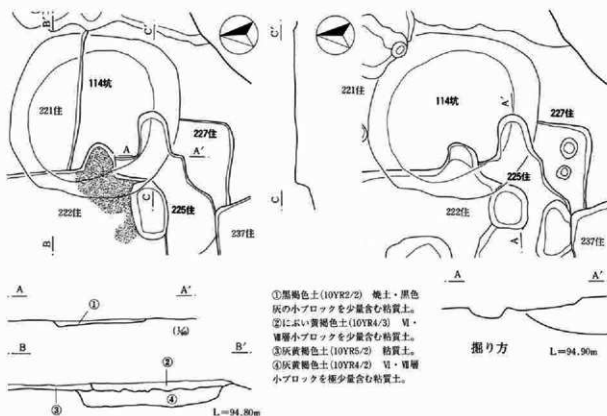
床面 平坦で全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 位置 南東隅にある。形状 楕円形。規模 0.94×0.60m 深さ0.18m 遺物出土状態 土師器坏(P-156)・須恵器坏(P-151)の2点が出土した。

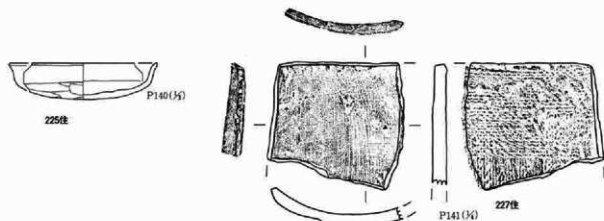
カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.65m 奥行0.81m 遺存状態 東壁より楕円形に突出する状態で他の構造は確認されなかった。燃焼面には焼土と灰が堆積していた。遺物出土状態 出土遺物なし。

掘り方 全面が0.15mほど掘り込まれていた。

遺物出土状態 図示した土師器・須恵器の坏・埴類はすべて貯蔵穴周辺から出土した。これら以外には埋没土や掘り方から土師器・須恵器の坏・埴、土師



第231図 225・227号住居跡・114号土坑 (1/60)



第232図 225・227号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

器臺を中心とする小片が約120点出土した。

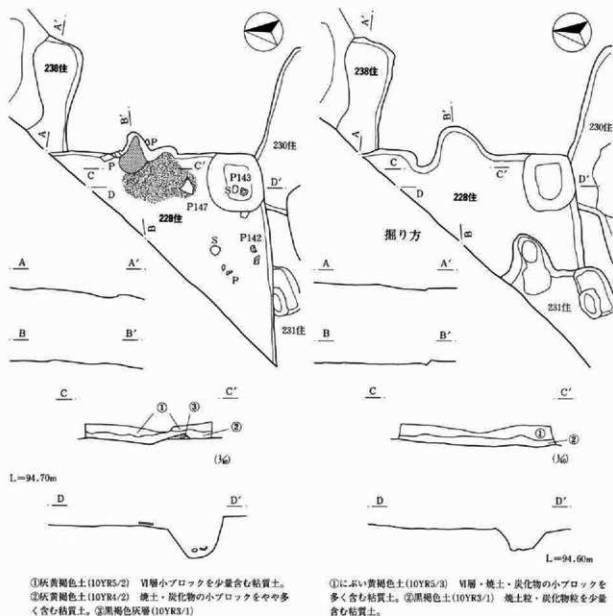
時期 出土遺物や重複関係により8世紀後半の住居跡と考えられる。

232号住居跡 (第237図 図版42-1・7)

2 M-73に位置し229・231・233号住居跡より古

く、南壁寄りの一部が確認されただけである。壁高は0.22mの高さが確認され、床面は軟弱であった。埋没土中からは9世紀代の土師器・須恵器の坏・壺を中心とする小片が16点出土した。

第3章 F区の遺構と遺物



第233図 228・238号住居跡 (1/60)

233号住居跡 (第237図 図版42-1・6・7)

位置 2N-73

重複 232号住居跡より新しく231号住居跡より古い。

形状 不明。

長軸方位 不明。

規模 2.20×2.00+m

埋没土 炭化物を少量含む灰黄褐色土で埋没。

壁 0.20~0.34mの高さが確認され、ほぼ垂直に立

ち上がる。

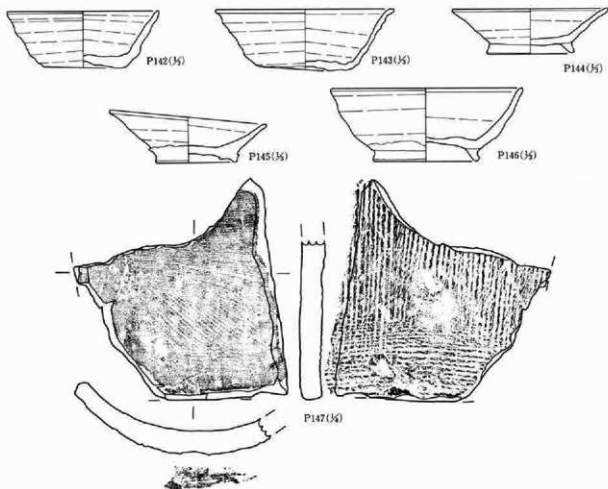
周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 カマド前から中央部が固く締まっていた。

貯蔵穴 なし。

カマド 位置 東壁の南東隅寄りにある。規模 焚き口幅0.73m 奥行0.80m 遺存状態 東壁より半円形に突出し他の構造は確認できなかった。燃焼面は部分的に焼けていた。遺物出土状態 出土遺



第234図 228号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

物なし。

掘り方 中央部が不整形に0.10mほど掘り込まれていた。

遺物出土状態 埋没土や掘り方より土師器杯・甕、須恵器杯・埴を中心とする小片が約120点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により8世紀後半の住居跡と考えられる。

236号住居跡 (第219図 図版39-2)

位置 2J-69

重複 211・214号住居跡より古い。西半部を確認しただけである。

形状 不明。

長軸方位 不明。

規模 2.02×0.80+m

埋没土 灰黄褐色土で埋没。

壁 約0.15mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 全面が固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

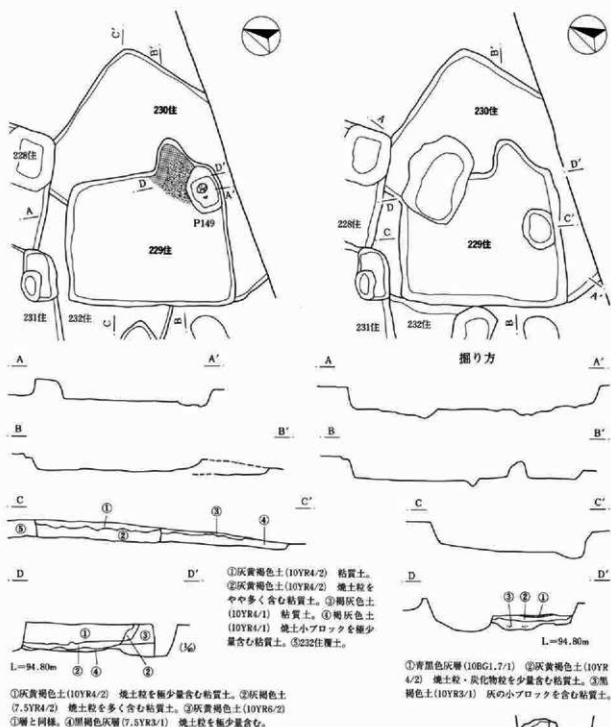
カマド 不明。

掘り方 全面が0.12mほど掘り込まれていた。

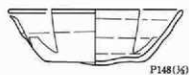
遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 層位や重複関係から6世紀～9世紀の住居跡と考えられる。

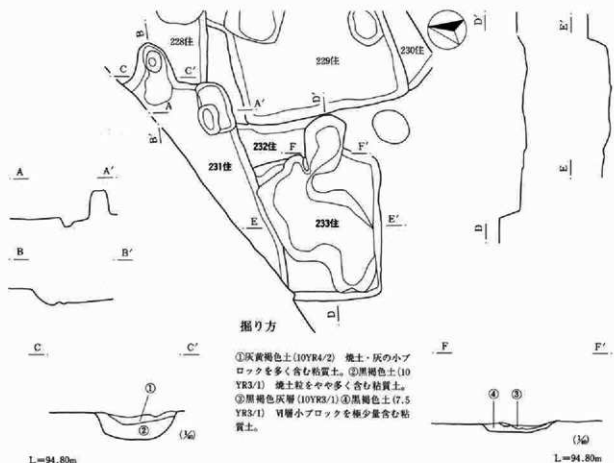
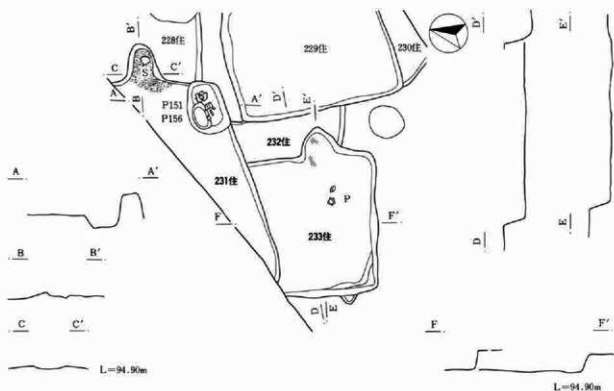
第3章 F区の遺構と遺物



第235図 229・230号住居跡 (1/60)

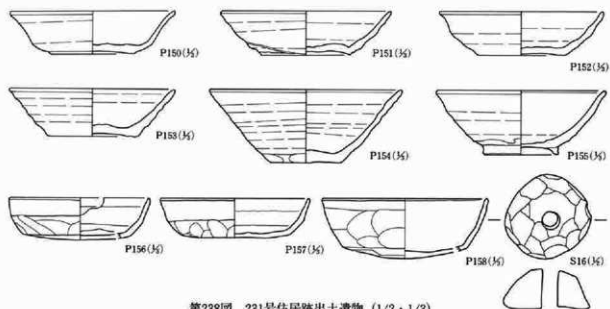


第236図 229号住居跡出土遺物 (1/3)



第237図 231～233号住居跡 (1/60)

第3章 F区の遺構と遺物



第238図 231号住居跡出土遺物 (1/2・1/3)

237号住居跡 (第239図)

位置 2 L-72

重複 225・227号住居跡より新しい。東南隅寄りには調査区外となり、大半が攪乱されている。

形状 不明。

長軸方位 不明。

規模 2.95×0.86+m

埋没土 炭化物を極少量含む粘質土で埋没。

壁 約0.12mの高さが確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 なし。

柱穴 なし。

床面 平坦で全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

カマド 位置 東壁にある。規模 焚き口幅0.92+m 奥行0.87+m 遺存状態 東壁より半円形に突出し南半部は調査区外となる。何らの構造も確認されなかったが、燃燒面には灰と焼土が薄く堆積していた。遺物出土状態 埋没土や掘り方より9～10世紀代の須恵器杯・埴、土師器甕の小片が約20点出土した。

掘り方 全面が0.10mほど掘り込まれていた。

遺物出土状態 カマド以外からは遺物が出土しな

かった。

時期 出土遺物や重複関係により9～10世紀代の住居跡と推定される。

238号住居跡 (第233図)

2 M-72に位置し、228号住居跡より古い。南東隅の一部が確認されただけで、他は調査区外か攪乱されている。壁は約0.05mの高さが確認され、床面は軟弱で掘り方は全面が約0.05m掘り込まれていた。出土遺物はないが6～9世紀の住居跡である。

239号住居跡 (第223・224図 図版40-4・8, 179-2)

位置 2 K-70

重複 216・217・219・221・240号住居跡より新しい。西半部だけが確認された。

形状 不明。

長軸方位 不明。

規模 3.06×1.30+m

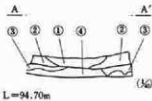
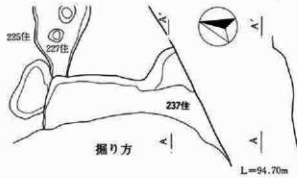
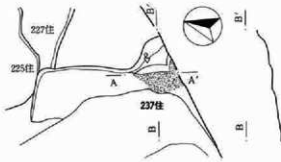
埋没土 灰黄褐色土で埋没。

壁 約0.13mの高さが確認され、垂直に立ち上がる。

周溝 不明。

柱穴 不明。

床面 平坦で全面がやや固く締まっていた。



覆土 ①灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土・炭化物の小ブロックを少量含む粘質土。②黒褐色土(10YR3/1) 炭化物粒を極少量含む粘質土。振り方 ③灰黄褐色土(10YR4/2) ④黒小ブロックと焼土粒を少量含む粘質土。④暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒・炭化物粒を少量含む粘質土。

第239図 237号住居跡 (1/60)

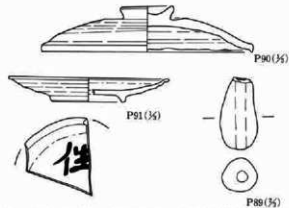
貯蔵穴 不明。

カマド 不明。

振り方 全面が0.05mほど振り込まれていた。

遺物出土状態 埋没土より須恵器坏・坩、土師器甕、瓦の小片が約30点出土した。

時期 出土遺物や重複関係により9-10世紀代の住居跡と考えられる。



第240図 F区I・II面グリット出土遺物 (1/3・2/3)

いる。南壁の一部と床面をわずかに確認しただけで遺物も出土せず、住居跡としての可能性が考えられた。

2 土坑

114号土坑 (第231図 図版42-8)

位置 2K-71

重複 221・222・225・227号住居跡より古い。

形状 円形で断面は皿状をなす。

規模 2.65×2.58m

埋没土 Hr-F Aと黒色土のブロックを多く含む灰黄褐色土で埋没。

出土遺物 土師器甕、須恵器坏・甕の小片が約70点出土した。

時期 8世紀代の土坑と考えられる。

240号住居跡 (第223図 図版40-4・8)

2K-70に位置し、南東隅の一部と貯蔵穴が確認されただけである。218号住居跡より新しく、213・219・239号住居跡より古い。壁は約0.10mの高さが確認され床面は軟弱であった。貯蔵穴は楕円形をなし規模は0.73×0.52m、深さ0.06mである。出土遺物は須恵器坏・坩の小片3点だけである。時期は不明。

241号住居跡 (第227図)

2L-71に位置し、222・224号住居跡に切られている。西壁寄りの一部を確認しただけである。壁は約0.05mの高さが確認され、床面は軟弱であった。遺物は出土しなかった。時期は不明。

242号住居跡 (第227図)

2L-71に位置し、222・223号住居跡に切られて

第2節 F区Ⅲ面の遺構と遺物

1 水田跡 (第242図 図版43-1・2)

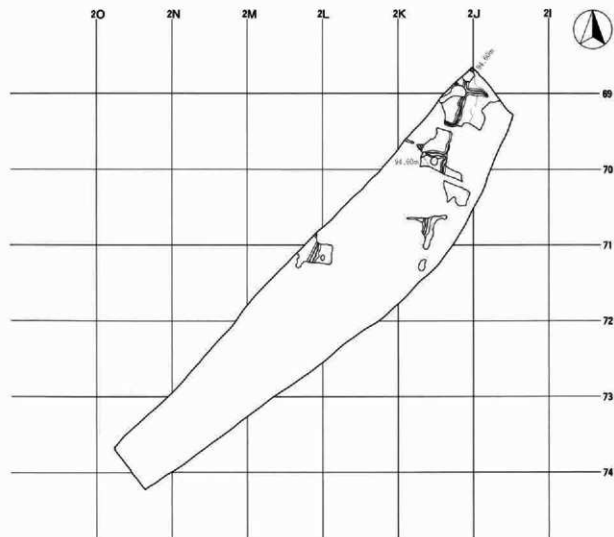
F区ではE区と同様にHr-F Aによって覆われた水田面が北半部でわずかに検出された。F区では泥流層(F P F-1)がなく、I・Ⅱ面の住居跡や柱穴によって大部分の水田面が破壊されており、部分的な小アゼと水田面が確認されただけで、水田区画は検出できなかった。

小アゼは部分的な確認ながら南北アゼ3条、東西アゼ4条で最も長く検出されたアゼは南北アゼの8.20mである。アゼの幅は0.30~0.40m、高さ0.03

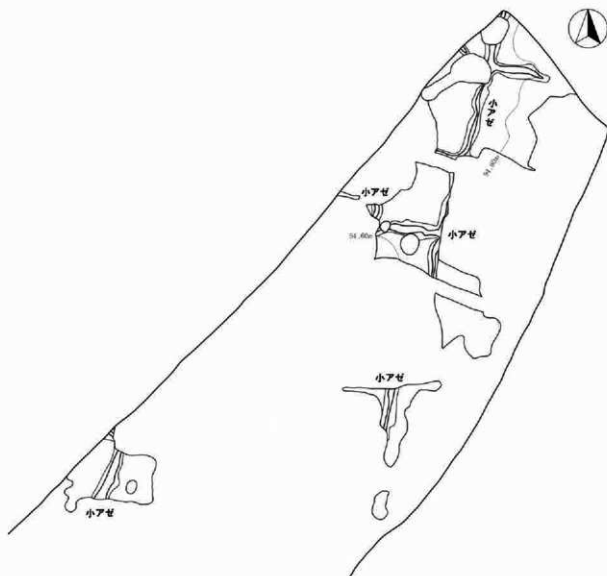
~0.06mである。南北アゼの走向はほぼN-11°-Eで2号河川跡の痕跡の影響を受けているものと考えられる。

水田面の標高は94.60mでE区とはほぼ同一レベルである。水田区画は確認されなかったが残された小アゼからやや南北に長軸を持つ小区画水田と考えられ、2号河川跡の痕跡の右岸に展開する新保遺跡の古墳時代水田に続くものである。

なお、F区ではE区と異なりⅣ面の畠跡は確認されなかったがこれは新保遺跡と同様の傾向である。



第241図 F区Ⅲ面水田跡全体図 (1/250)



第242図 F区III面 (Hr-F A下面) 水田跡 (1/100)

第3節 F区V面の遺構と遺物

F区V面では小範囲ながら弥生時代中期後半～古墳時代前期の竪穴住居跡23軒、土坑1基が検出された。住居群は重複率が高く、2号河川跡右岸に展開する大集落の一部である。

また、F区の弥生時代後期の住居跡からはニホンジカやイノシシの骨片が多く出土する傾向にあり、2号河川跡より出土した多量の動物遺体や骨角製品との関連が推察される地点である。

1 住居跡

234号住居跡 (第246・247図 図版46-1, 182-2)

位置 2 J-70

重複 246・250～252号住居跡より新しい。

調査時点で244号住居跡と同一の住居跡と誤認したが244号住居跡より古いと考えられる。

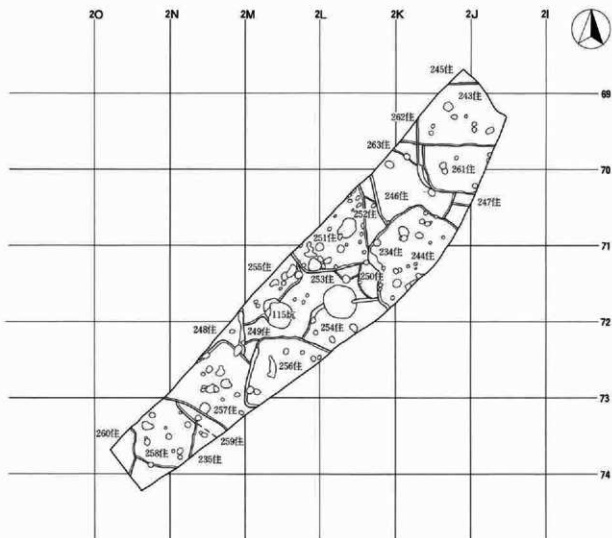
形状 隅丸長方形と推定される。

長軸方位 N-35°-E

規模 5.20×1.50+m

埋没土 黒褐色土で埋没。

壁 0.12mの高さが確認され、西壁はやや弧状をな



第243図 F区V面全体図 (1/250)

す。

周溝 なし。

柱穴 明確でない。

床面 平坦でやや軟弱であった。

貯蔵穴 なし。

炉 位置 中央部やや西壁寄りにある。形状 楕円形。規模 $0.68 \times 0.58 + m$ 遺存状態 床面より約0.07m窪んでおり、底面が良く焼けている。遺物出土状態 出土遺物なし。上面に白色粘土がのっていた。

遺物出土状態 244号住居跡に混入してしまった。

時期 出土遺物や重複関係により弥生時代後期と考

えられる。

235号住居跡 (第261図 図版49-1)

2M-73に位置し、西壁寄りの一部が確認された。258・259号住居跡より古く、東半部は調査区外となる。壁は0.05mほどが確認され、床面は平坦で軟弱であった。他の施設は確認されず遺物も出土しなかった。時期不明。

243号住居跡 (第244・245図 図版45-1, 182-1)

位置 2I-69

重複 245-247・261-263号住居跡より新しい。北

西隅と東壁寄りには調査区外となる。

形状 隅丸方形と推定される。

長軸方位 N-1°-E?

規模 7.97×5.88+m

埋没土 炭化物を少量含む黒褐色土で埋没。上層はAs-Cを多量に含むが下層は含まない。

壁 約0.15mの高さが確認され、南壁と西壁はわずかに弧状をなす。

周溝 なし。

柱穴 ビット1・2の2本の主柱穴が確認された。

規模 は径0.60~0.52m、深さ0.85~0.79mで4本主柱穴と推定される。

床面 中央部は固く締まっていたが、周壁に沿う部分は軟弱であった。

貯蔵穴 不明。

炉 中央部床面が4ヶ所円形(径0.48~0.23m)に焼けていた。周辺床面には灰が薄く堆積していた。

遺物出土状態 埋没土や床面から古墳時代前期を中心とする(弥生時代後期の土器片少量混入。)土器片が少量出土した。

時期 出土遺物や重複関係により古墳時代前期の住居跡と考えられる。

244号住居跡(第246・247図 図版46-1, 182-2)

位置 2J-71

重複 254号住居跡より古く、246・250号住居跡より新しい。東半部は調査区外となる。

形状 隅丸長方形と推定される。

長軸方位 N-25°-E?

規模 7.13×2.13+m

埋没土 炭化物を多く含む黒褐色土で埋没。

壁 約0.18mの高さが確認され、周壁はやや弧状をなす。

周溝 なし。

柱穴 ビット1・2が主柱穴と考えられ、規模は径0.55m、深さ0.87~0.61mで4本主柱穴と推定される。

床面 全面がやや凸凹しているが固く締まってい

る。

貯蔵穴 不明。

炉 中央部やや北寄りに床面が円形(径0.35m)に焼け固くなっていた。

遺物出土状態 弥生時代後期後半を中心とする土器片が埋没土中よりやや多く出土した。また、埋没土中からはシカやイノシシの骨片が少量出土した。

時期 出土遺物や重複関係により弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

245号住居跡(第244・245図 図版45-1, 182-3)

位置 2J-68に位置し243号住居跡より古い。床面の一部を確認しただけで大半は調査区外となる。埋没土は炭化物や焼土を少量含む黒褐色土で、弥生時代後期の土器片が少量出土した。また、骨片が床面より出土した。時期は出土遺物により弥生時代後期前半と考えられる。

246号住居跡(第248・249図 図版45-1・2, 182-3)

位置 2J-69

重複 243・244・261号住居跡より古く、247・252・262・263号住居跡より新しい。北西部は調査区外となる。

形状 胴張りの隅丸長方形と推定される。

長軸方位 N-3°-W

規模 5.76+×5.40+m

埋没土 炭化物を少量含む黒褐色土で埋没。

壁 約0.20mの高さが確認され、周壁は弧状をなす。

周溝 西壁だけに確認され、幅0.14m、深さ0.03mでU字状をなす。

柱穴 ビット1は主柱穴と考えられ規模は径0.50m、深さ0.32mで高坏(P-179)が出土した。他の柱穴は明確ではない。

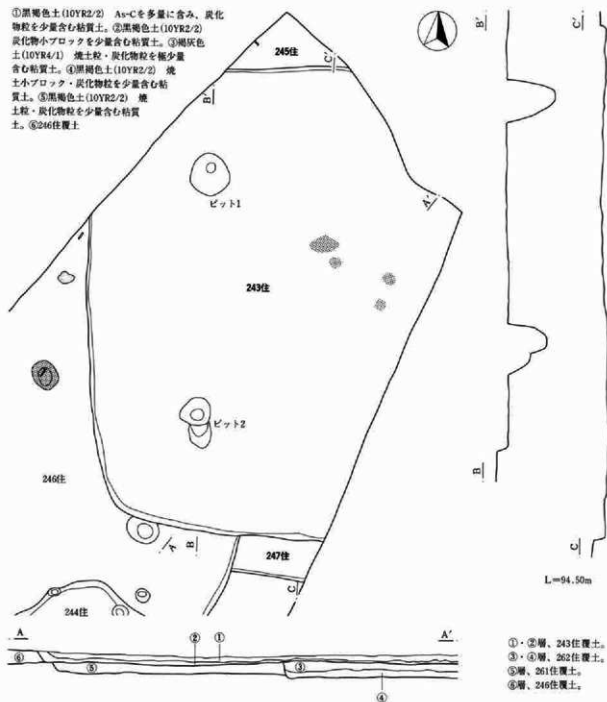
床面 平坦で全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

炉 中央部よりやや北寄りに位置していると考えられ、規模は径0.46×0.38m、深さ0.05mで円形をなし底面は良く焼けていた。炉内からはニホンジカの

第3章 F区の遺構と遺物

- ①黒褐色土(10YR2/2) As-Cを多量に含み、炭化物粒を少量含む粘質土。
 ②黒褐色土(10YR2/2) 炭化物小ブロックを少量含む粘質土。
 ③褐色土(10YR4/1) 焼土粒・炭化物粒を極少量含む粘質土。
 ④黒褐色土(10YR2/2) 焼土小ブロック・炭化物粒を少量含む粘質土。
 ⑤黒褐色土(10YR2/2) 焼土粒・炭化物粒を少量含む粘質土。
 ⑥246住覆土



第244図 243・247・254号住居跡 (1/60)

角片が出土した。

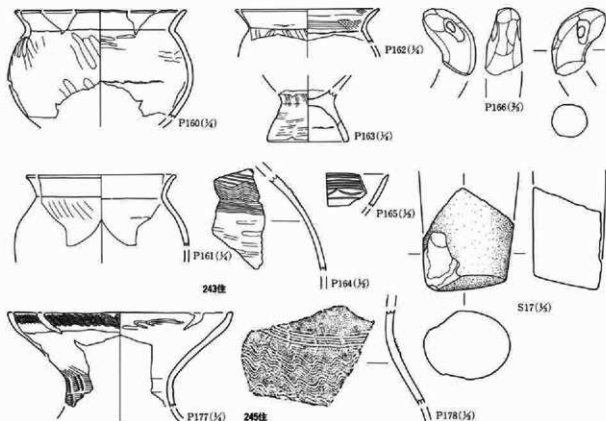
遺物出土状態 埋没土中からは弥生時代後期の土器片が少量出土した。また、勾玉(S-20)1点が炉北の床面より出土した。また、埋没土中からはニホンジカの歯が出土した。

時期 出土遺物や重複関係により弥生時代後期前半

と考えられる。

247号住居跡 (第244図 図版45-1)

2J-70に位置し南壁の一部と床面をわずかに確認しただけである。243・246・261号住居跡より古い。壁高は約0.13mで床面は平坦で軟弱であった。



第245図 243・245号住居跡出土遺物 (2/3・1/3・1/4)

遺物は弥生時代後期の土器片が数点出土しただけで、時期は不明である。

248号住居跡 (第251・252図 図版47-2, 183-2)

2 M-72に位置し249・255・257号住居跡より新しい。西半部大部分が調査区外となる。東壁の一部と床面・柱穴1本を確認しただけである。東壁は直線的に延び、幅0.33-0.17m、深さ0.10-0.04mの周溝が巡る。床面は平坦でやや固く締まっていた。ビット1は主柱穴の1本と考えられ、径0.45m、深さ0.47mで上面より土師器壺片(P-209)が出土した。遺物は弥生時代後期-古墳時代前期の土器片が少量出土した。本住居跡の時期は古墳時代前期前半と考えられる。

249号住居跡 (第253図 図版47-2)

2 L-72に位置し248・256・257号住居跡より古

い。北西隅と床面の一部を確認しただけである。壁高は0.05mで床面は平坦で軟弱であった。遺物は出土せず本住居跡の時期は不明。

250号住居跡 (第246図 図版46-1)

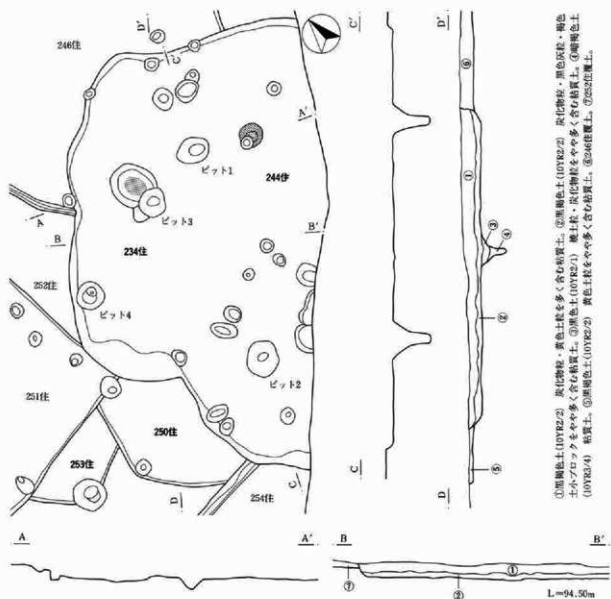
2 K-71に位置し234・244・251・254号住居跡より古く、253号住居跡より新しい。南西隅と床面の一部を確認しただけである。壁高は0.07mで床面は平坦でやや軟弱であった。遺物は弥生時代後期の土器片が約10点出土しただけで、本住居跡の時期は不明である。

251号住居跡 (第255・256図 図版46-2・3, 183-4, 184-1)

位置 2 K-70

重複 250・252・253号住居跡より古く、234・255号住居跡より新しい。北半部は調査区外となる。

第3章 F区の遺構と遺物



第246図 234・244・250・253号住居跡 (1/60)

形状 隅丸長方形と推定される。

長軸方位 N-1°-E?

規模 5.25×5.08+m

埋没土 焼土・炭化物を少量含む暗褐色土で埋没。

壁 約0.12mの高さが確認され、東・南壁は直線的であるが西壁はやや弧状をなす。

周溝 なし。

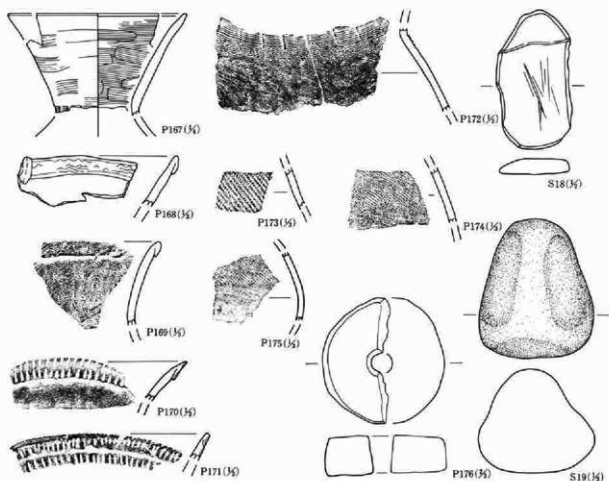
柱穴 ビット1・2は主柱穴で南壁寄り中央部で対で確認された。規模は径0.55~0.45m、深さ0.80mである。ビット3・4は入口柱穴で南壁に沿って対で確

認された。規模は径0.40~0.34m、深さ0.56~0.48mである。ビット5・6は棟支えの柱穴と考えられ南壁寄り中央部と中央部で確認された。規模は径0.35~0.27m、深さ0.54~0.30mである。また、周壁に沿って小ビットが14本確認された。

床面 平坦で中央部は特に固く締まっていた。

貯蔵穴 南西隅にあり不整形をなし規模は径0.76m、深さ0.55mである。内部からはニホンジカやイノシシの骨片が多く出土した。

炉 東壁寄り中央部で1基確認された。形状は不整



第247図 234・244号住居跡出土遺物 (1/2・2/3・1/3・1/4)

楕円形をなし規模は1.35×1.00mで床面より0.05mほど窪んだ2つの底面を持つ。一方の底面は強く焼けており、他方の底面には灰が堆積し土層に粘土がのっており、河原石と壺片が出土した。また、周辺床面も一部焼けていた。

遺物出土状態 弥生時代後期の土器が少量出土し、磨石(S-22)・台石(S-23)各1点と剃片7点が出土した。

時期 出土遺物や重複関係により弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

252号住居跡(第248・250図 図版45-1・3, 183-1)

2 K-70に位置し234・246・251号住居跡より古い。北壁の一部と床面を確認しただけである。壁高は0.05mで床面は平坦で軟弱であった。P-188・

189の壺2個体が北壁に接して潰れた状態で出土し、他に弥生時代後期土器片が少量出土した。本住居跡の時期は弥生時代後期前半と考えられ、253号住居跡と同一である可能性もある。

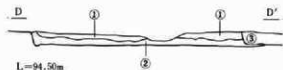
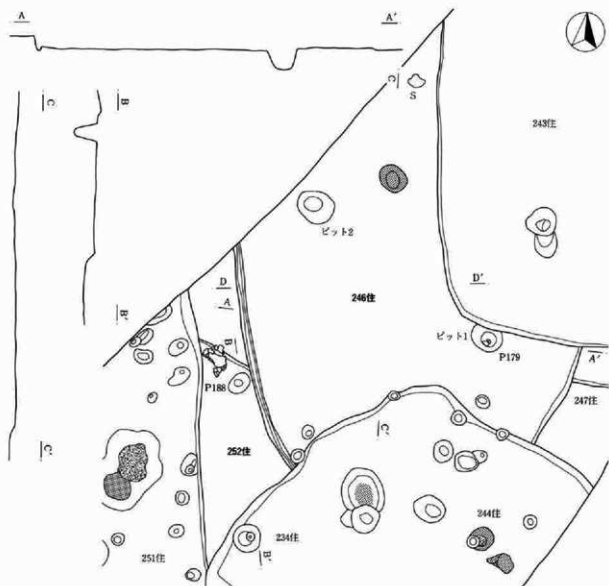
253号住居跡(第246図 図版46-1)

2 K-71に位置し250・251号住居跡より古い。南西隅と床面の一部を確認しただけである。壁高は約0.05mで床面は平坦で軟弱である。遺物は弥生時代後期の土器片がわずかに出土しただけで、本住居跡の時期は不明である。

254号住居跡(第257・258図 図版47-1, 184-2)

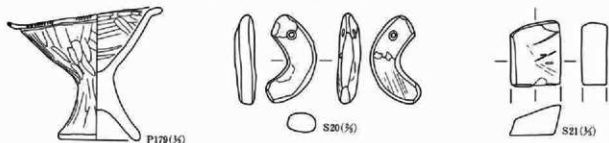
2 K-71に位置し244・250・256号住居跡より新しい。南半部の大半が調査区外となる。北壁から西

第3節 V面の遺構と遺物

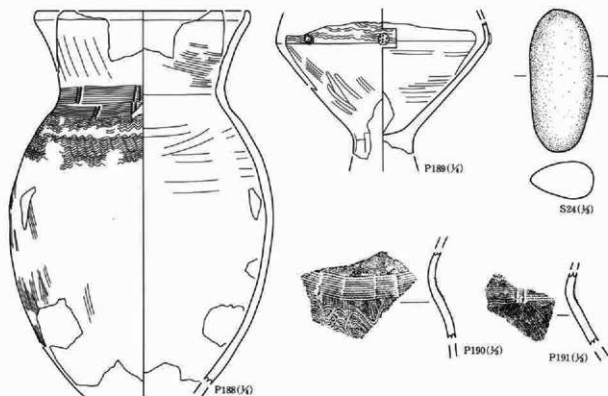


- ①黒褐色土(10YR2/1) 炭化物粒を少量含む粘質土。
- ②黒褐色土(10YR2/1) 炭化物粒・褐色土小ブロックを少量含む粘質土。
- ③243住覆土。

第248図 246・252号住居跡 (1/60)



第249図 246号住居跡出土遺物 (2/3・1/3)



第250図 252号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

壁の一部と床面、柱穴が確認されただけである。壁高は約0.15mで2辺ともやや弧状をなす。周溝は北壁から北西隅にかけて部分的に巡り、幅0.18m、深さ0.04mである。ピット1は主柱穴の1本と考えられ、径0.43×0.33m、深さ0.30mである。他に3本のピットが確認された。床面は平坦で全面がやや固く締まっていた。他の遺構は不明で、遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が少量出土した。本住居跡の時期は古墳時代前期前半と考えられる。

255号住居跡 (第251図 図版47-1)

位置 2L-71

重複関係 248・251号住居跡、115号土坑より古い。東壁から北東隅にかけてと床面の一部、柱穴が確認されただけで、西半部の大部分が調査区外となる。

形状 不明。

長軸方位 不明。

規模 5.10+×1.53+m

埋没土 焼土・炭化物を含む褐灰色土で埋没。

壁 約0.15mの高さが確認され、東壁は直線的に延びる。

周溝 なし。

柱穴 北東隅に6本の小ピットが確認されたが性格不明。

床面 平坦で全面がやや固く締まっている。

貯蔵穴 不明。

炉 不明。

遺物出土状態 弥生時代後期を中心とする土器片が少量出土した。また、ニホンジカの骨片も少量出土した。

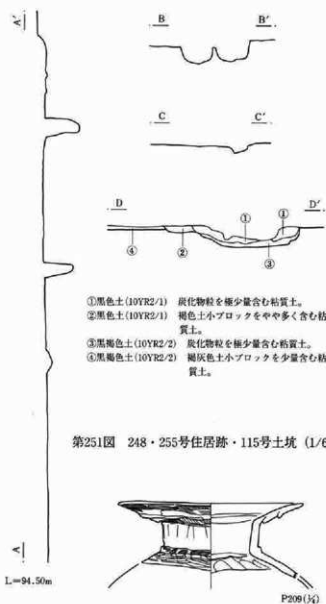
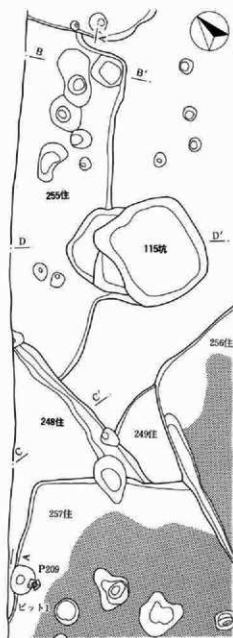
時期 出土遺物や重複関係により弥生時代後期の住居跡と推定される。

256号住居跡 (第253・254図 図版47-1～3, 183-3)

位置 2L-72

重複 254号住居跡より古く249・257号住居跡より

第3章 F区の遺構と遺物



- ①黒色土(10YR2/1) 炭化物粒を極少量含む粘質土。
- ②黒色土(10YR2/1) 褐色土小ブロックをやや多く含む粘質土。
- ③黒褐色土(10YR2/2) 炭化物粒を極少量含む粘質土。
- ④黒褐色土(10YR2/2) 褐色土小ブロックを少量含む粘質土。

第251図 248・255号住居跡・115号土坑 (1/60)



第252図 248号住居跡出土遺物 (1/4)

新しい。東半部は調査区外となる。

形状 隅丸長方形と推定される。

長軸方位 N-85°-W

規模 4.65×4.32+m

埋没土 焼土を多量に含み炭化物を少量含む黒褐色土で埋没。

壁 約0.15mの高さが確認され、西壁は直線的で北壁は弧状をなす。

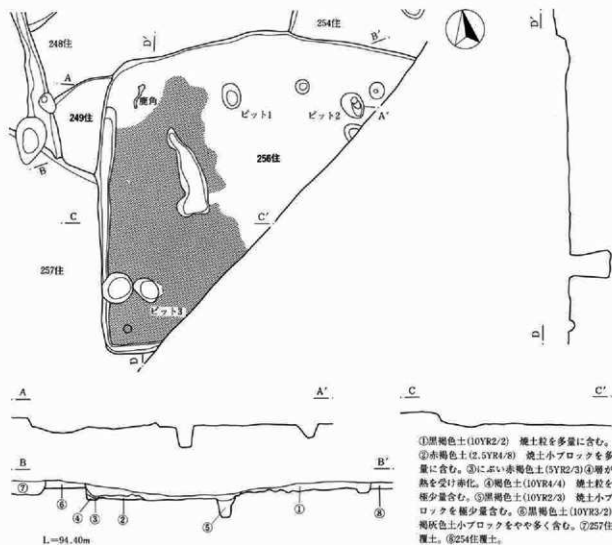
周溝 南壁から西壁にかけて巡り、幅0.25~0.15m、

深さ0.08mである。

柱穴 ビット1・2が柱穴と考えられ規模は径0.41m、深さ0.31mである。

床面 西半部は床面が焼けて赤色に硬化していた。中央部は焼けておらず平坦でやや固く締まっていた。埋没土や床面の状況から焼失家屋と考えられる。

貯蔵穴 南西隅にあるビット3は径0.42×0.33m、深さ0.61mで小規模であるが貯蔵穴の可能性がある。



第253図 249・256号住居跡 (1/60)

炉 不明。

遺物出土状態 埋没土より弥生時代後期の土器片や剃片石器・磨石・砥石等が少量出土し、勾玉(S-26)1点が中央部床面から出土した。また、北西隅床面からニホンジカの落角が出土し、埋没土中からもイノシシを含む骨片がやや多く出土した。

時期 出土遺物や重複関係により弥生時代後期前半の住居跡と考えられる。

257号住居跡(第259・260図 図版48-1-3, 184-3)

位置 2M-72

重複 249・259号住居跡より古く、248・256・258

号住居跡より新しい。北西隅が歪んでおり、さらに住居跡が重複している可能性がある。東壁部は調査区外となる。

形状 隅丸長方形と推定される。

長軸方位 N-51°-W

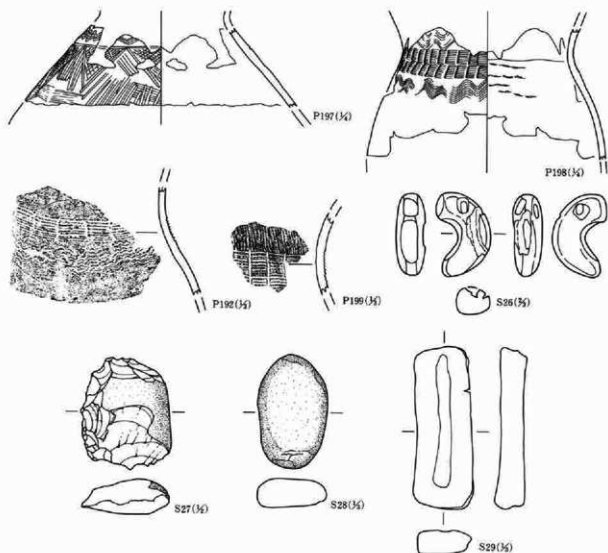
規模 4.72×4.57m

埋没土 焼土ブロックや炭化物を多く含む黒褐色土で埋没。

壁 約0.10mの高さが確認され、各辺とも直線的に延びる。

周溝 なし。

柱穴 ビット1-4の4本の主柱穴と考えられ、規模



第254図 256号住居跡出土遺物 (1/2・2/3・1/3・1/4)

は径0.50～0.35m、深さ0.75～0.16mである。

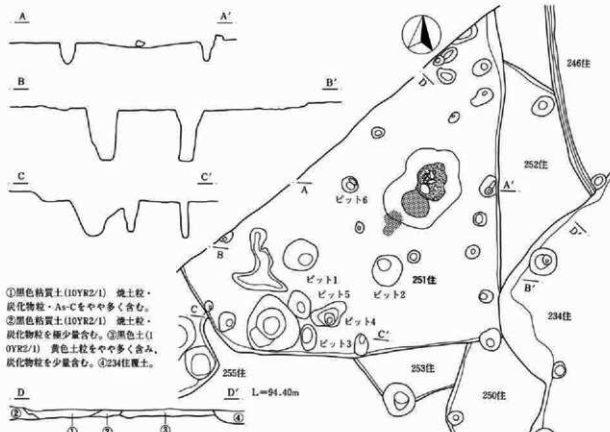
床面 中央部全面が焼けて赤色に硬化していた。埋没土の状況や炭化材の出土状態から焼失家屋と考えられる。

貯蔵穴 位置 南壁に接した中央部にある。形状 隅丸方形。規模 0.76×0.66m 深さ0.10m 遺物出土状態 出土遺物なし。

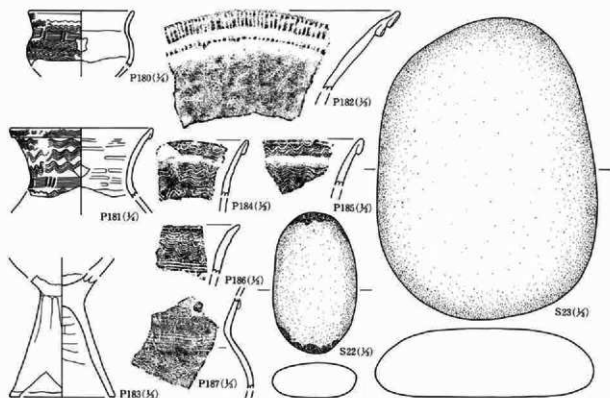
炉 位置 中央部やや西壁寄りにある。形状 不整形円形 規模 0.72×0.65m 深さ0.08m 遺存状態 床面と同様に全面が良く焼け硬化している。遺物出土状態 甕(P-204)1点と磨石1点が出土した。

遺物出土状態 埋没土中より弥生時代中期後半～後期の土器片と石器、剥片等が少量出土した。また、ニホンジカの骨片が少量出土した。

時期 出土遺物や重複関係により弥生時代中期後半と考えられる。

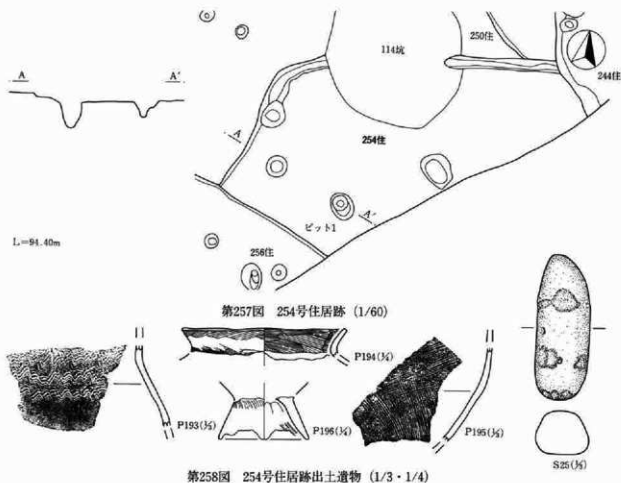


第255図 251号住居跡 (1/60)



第256図 251号住居跡出土遺物 (1/3・1/4)

第3章 F区の遺構と遺物



258号住居跡 (第261・262図 図版49-1, 185-1)

位置 2N-73

重複 257・260号住居跡より古く、235・259号住居跡より新しい。東西両壁寄りには調査区外となる。

形状 長方形をなすと推定される。

長軸方位 N-73°-W

規模 4.60×4.55m

埋没土 焼土・炭化物を極少量含む黒褐色土で埋没している。

壁 約0.12mの高さが確認され、南壁は直線的に延びる。

周溝 なし。

柱穴 ビット1-4の4本主柱穴と考えられ、規模は径0.45-0.40m、深さ0.47-0.33mである。ビット5は中央部にあり横支えの柱穴と考えられ、規模は径0.36m、深さ0.14mである。

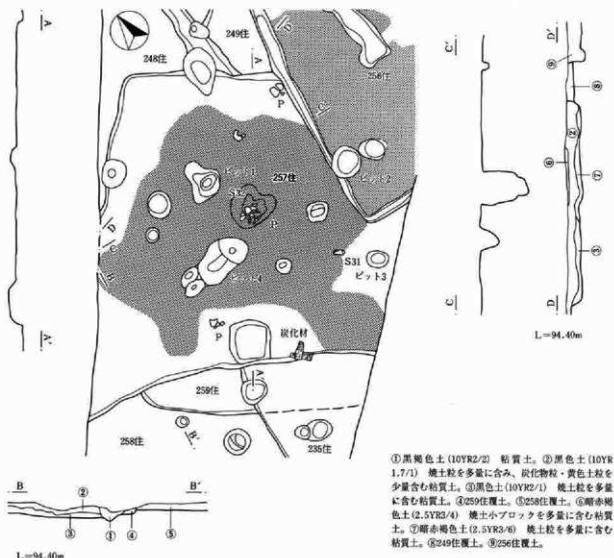
床面 平坦で全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

炉 位置 中央部やや西壁寄りにある。形状 不整形円形 規模 0.78×0.55m 深さ0.13m 遺存状態 床面よりやや深く窪んでおり、底面が良く焼けていた。遺物出土状態 出土遺物なし。

遺物出土状態 埋没土中より弥生時代後期の土器片と刺片が少量出土し、磨製石鏃の未製品1点と磨石1点が出土した。

時期 出土遺物や重複関係により弥生時代後期前半の住居跡と考えられる。



第259図 257号住居跡 (1/60)

259号住居跡 (第261図 図版49-1)

2 M-73に位置し、235・257・258号住居跡より古い。南壁の一部から南西隅にかけてと床面が確認されただけで、南東隅は調査区外となり大部分が257号住居跡に切られている。

南壁は壁高約0.10mで直線的に延びる。床面は平坦で軟弱であった。また、南壁寄りに浅いピットが1本確認された。遺物は弥生時代中期～後期の土器片が約10点出土した。また、南壁寄りの床面からニホンジカの骨片が4点出土した。

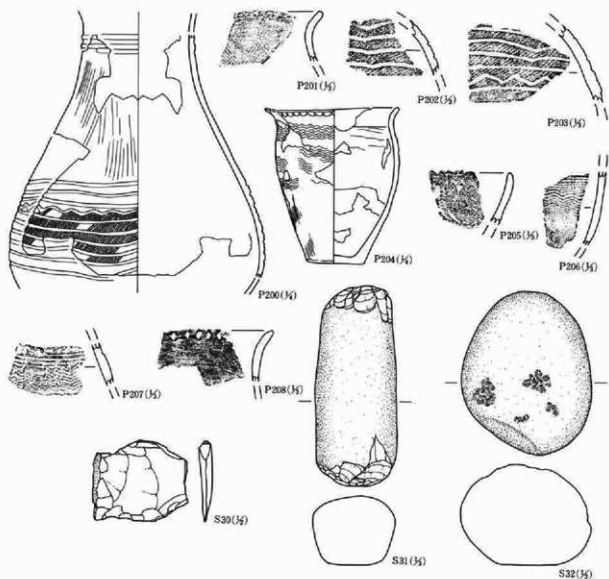
本住居跡の時期は明確ではないが弥生時代中期に属すると推定される。

260号住居跡 (第261・262図 図版49-1, 185-1)

2 N-73に位置し258号住居跡より新しい。東壁の一部から北東隅にかけてと床面の一部が確認された。西半部から東半部の大部分は調査区外となり、全容は不明。

埋没土は焼土、炭化物を含む黒褐色土で上層にはAs-C軽石が多量に混入していた。壁は約0.10mの高さが確認された。床面は中央部寄りが焼けており赤色に硬化していた。周壁に沿う部分は軟弱であった。本住居跡も埋没土や床面の状況から焼失家屋の可能性が。遺物は古墳時代前期の土器片が少量出土しただけである。

第3章 F区の遺構と遺物



第260図 257号住居跡出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

本住居跡の時期は出土遺物により古墳時代前期前半と考えられる。

261号住居跡 (第263図 図版49-2, 185-2)

位置 2 J-69

重複 243号住居跡より古く、245-247・262・263号住居跡より新しい。東半部と北西隅は調査区外となる。

形状 不明。

長軸方位 不明。

規模 7.27×5.57+m

埋没土 焼土・炭化物を含む褐灰色土で埋没。

壁 約0.14mの高さが確認され、西壁・南壁ともわずかに弧状をなす。

周溝 西壁の一部で確認され、幅0.22m、深さ0.05mである。また、壁との段差があるところから本住居跡は改築している可能性がある。

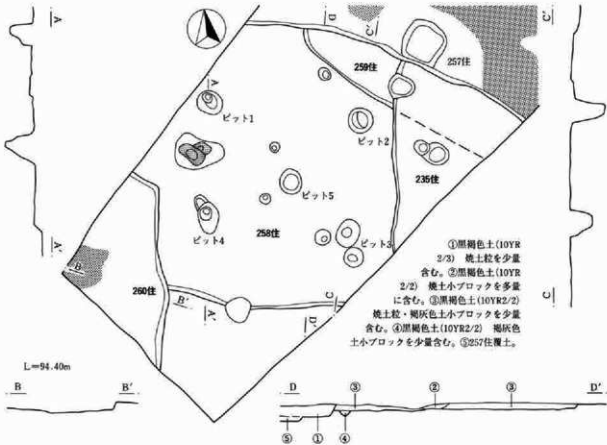
柱穴 小ビットが5本確認されたが主柱穴等は不明である。

床面 平坦で全面が固く締まっていた。

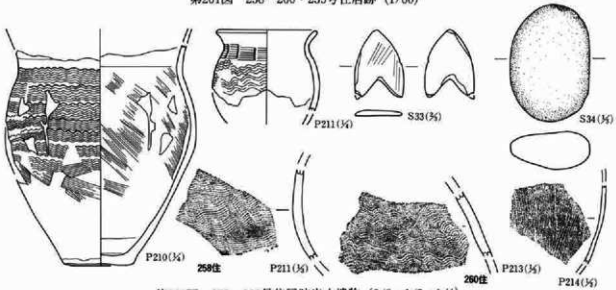
貯蔵穴 不明。

炉 不明。

第3節 V面の遺構と遺物



第261図 258-260・235号住居跡 (1/60)



第262図 258・260号住居跡出土遺物 (2/3・1/3・1/4)

時期 出土遺物や重複関係から弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

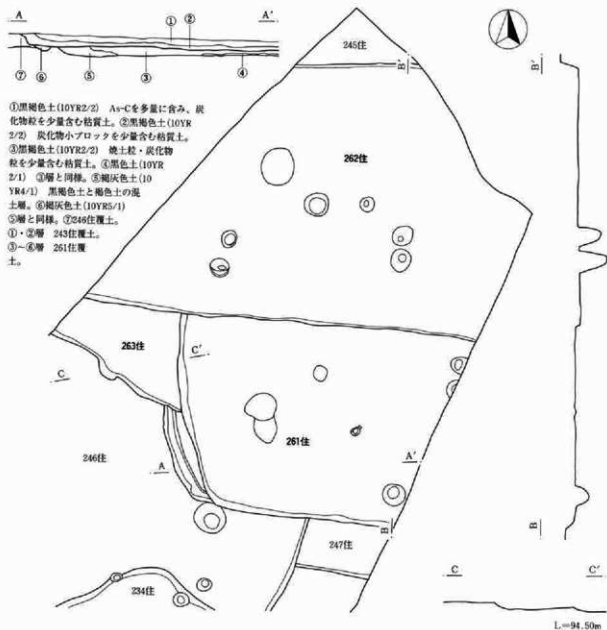
262号住居跡 (第263・264図 図版49-2, 185-3)

位置 2 J-69

重複 243・261号住居跡より古く、245・263号住居跡より新しい。東西両壁部が調査区外となる。

形状 長方形をなすと推定される。

第3章 F区の遺構と遺物



第263図 261-263号住居跡 (1/60)

長軸方位 N-89°-W?

規模 6.18+×4.15m

埋没土 焼土を極少量含む黒褐色土で埋没。

壁 約0.18mの高さが確認され、南北両壁は直線的に延びる。

周溝 なし。

柱穴 径0.36-0.24m、深さ0.55-0.13mの小ピットが6本確認されたが主柱穴等は不明である。

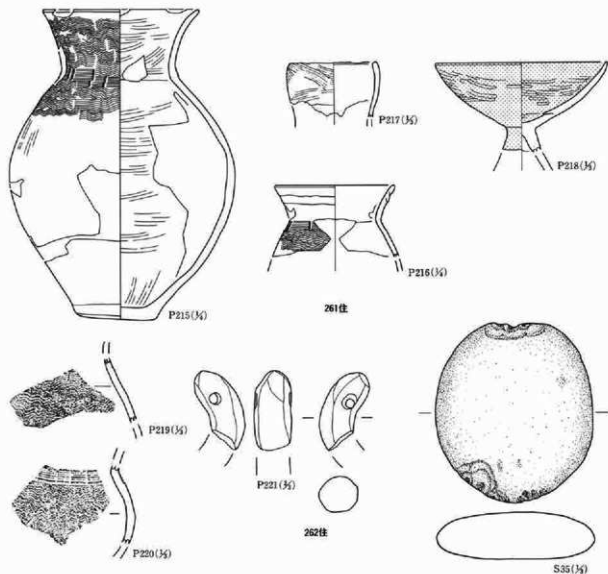
床面 平坦で全面がやや固く締まっていた。

貯蔵穴 不明。

炉 不明。

遺物出土状態 埋没土中より弥生時代後期の土器が少量出土し、剃片2点、磨石1点、勾玉1点が出土した。

時期 出土遺物や重複関係により弥生時代後期に属する住居跡と考えられる。



第264図 261・262号住居跡出土遺物 (2/3・1/3・1/4)

263号住居跡 (第263図 図版49-2)

2 J-69に位置し、243・246・261・262号住居跡より古い。南壁の一部と床面を確認しただけで大部分は他の住居跡に切られている。壁高は約0.06mが確認され、床面は平坦でやや固く締まっていた。遺物も出土せず本住居跡の時期は不明である。

2 土坑

115号土坑 (第251図 図版49-3)

位置 2 L-71

重複 255号住居跡より新しい。

形状 隅丸長方形をなし北西部に楕円形の張り出しを持つ。

規模 1.66×1.40m 深さ0.30m

埋没土 炭化物を極少量含む黒褐色土で埋没。

出土遺物 弥生時代後期の土器小片が約20点出土した。

第4章 まとめ

1 2号河川跡出土弥生土器について

本遺跡の弥生土器は、河川跡出土品が大部分を占めるため、同時性を保証する一括性に欠ける。従って器種構成の検討や型式組列の検証を行うには不十分な資料であり、本遺跡独自の土器編年を示すことは難しい。ただし具体的な土器の属性分析とこれに基づいた編年観は、同一遺跡の集落部分の報告で既に示されている(註1)のでこれに従うこととし、ここでは従来の編年観に従って本遺跡出土弥生土器の編年の位置付けと特徴的な土器について若干述べるに止めたい。

(1) 編年上の位置付け

最古のものとしては、やや太い沈線と刺突で文様を描く一群(591・592・598)があげられる。従来の須和田式(註2)に含まれ、中期前半～中葉に位置付けられる。また、これと異り沈線による幾何文様と刺突列点、磨消縄文を施す一群が目目される。器種は壺と思われ、直上に延びる筒状口縁(544～546)、胴部(505～530・542・543・1236～1238)がこれにあたる。1本ないし2本平行沈線による複数条の横線文や方形区画文、三角連繋文に類似する文様を描き、文様区画内に縄文を充填して赤彩を施し、他の部分は磨消する。544～546の口縁形態は北関東東部の中期前半～中葉に位置付けられる筒型土器に類似する。これらは既知の土器型式の範囲には含まれない。文様の特徴を他型式と比較すると、複数の沈線による直線的な文様構成と刺突列点の組み合わせから、従来の須和田式に近いが、沈線が細く赤彩部分が多い点が異なる。また長野県北～中部に分布する栗林I式の文様構成にも近似するが、相違点として複数沈線と縄文部分への赤彩があげられる。沈線が細く2本平行線も見られること、単位の小きな波状文や連続山形文が出現していることを勘案すれば、時期的には須和田式より

は後出的で栗林I式に近いといえる。縄文部分の赤彩は、東北地方南部から北関東にかけて、主に中期前半の磨消し縄文系土器に見られる手法である(註3)。以上の文様の特徴と他型式との比較から、本土器群は中期中葉に位置付けられ、栗林I式にはほぼ並行し、系統的には須和田式ないしは南御山II式や野沢式など中期前半の東北地方南部から北関東東部に分布する縄文土器の流れを濃く受け継いでいる可能性を示している。すなわち、型式の連続性はともかく従来不明瞭であった中期前半～中葉の須和田式と中期後半の竜見町式の間の時期を埋める土器群として位置付けられよう。ここでは断片的な資料であるから、見直しを述べるに止め、明確な型式認定や編年上の位置付けについては、器形や器種の判明する良好な一括資料の出現を待って再検討したい。(註4)。

本遺跡出土弥生土器で主体をしめるのは中期後半から後期にかけてである。中期後半としたものうち、大部分はいわゆる竜見町式に属する。器種は、壺・甕・小型壺・高杯が見られる。後期に比べて数量が少なく、器形全体の判明するものはない。文様で見ると、縄文と沈線による文様構成や垂下文など古相を示すもの、沈線のみによる簡素な文様構成や鋸歯文を施す新相のものが見られる。甕も同様に、縄文や整然とした櫛描羽状文を施す古相のものから、櫛描斜格子文や波状文などの新相まで存在する。後期についても、従来の編年観に従って初頭のものから終末期に至るまで、型式的に連続することが分かる。数量的には、中期的な要素を払拭して定型化した器形と櫛描簾状文と波状文の組み合わせが確立した後期中葉以降の段階が主体を占める。

遺構別では、2-1号河川跡と2-2号河川跡の出土土器で時期的な偏差は見られず、いずれも中期中葉から後期末までのものが含まれている。層順でみると、下層には後期まで含むものの終末段階のものは少ない、中層では後期が主体、上層では弥生時代に属

するもの自体が少ないとの傾向を示す。

以上にみたように、本遺跡の弥生土器は中期前半～中葉段階から後期末まで大きな間断なく連続しており、数量的には後期中葉以降にピークを迎えるといつてよいだろう。

(2) 後期土器に見る文様の傾向

群馬県の代表的な後期弥生土器は、櫛指文を主文様とする櫛式土器である。櫛式は本遺跡の在る利根川右岸の標名山東南麓から前橋台地にかけての地域を一大中心地として分布するが、県内の他の主要河川流域に展開する低地部分にも大小の分布地域が形成される。そこでは同一型式内での地域色といえる特徴を見いだすことができる。昨今では各地域毎の福年網の整備とともに、この地域色の内容やその背景についても重要な研究テーマとなってきた。地域色抽出の作業を行う場合、本地域の土器はその中心的な存在として常に比較の対象となる。すでに多くの先学によって示された内容と重複するが、本遺跡出土土器について再度その文様の特徴と傾向を確認しておくことは無駄ではなからう。

壺の文様は頸部に簾状文、肩部に波状文の組み合わせが基本的な文様構成でほぼ共通しており、古相では頸部に横位の沈線羽状文(矢羽根状文)も見られる。この基本構成に他の単位文様が付加されていくつかの変化を見せるが、その単位文様のうち最も多いのが鋸歯文である。鋸歯文は頸部ないしは肩部文様帯の下位に逆三角形の向きで施し、それ以下の無文部分を画する。斜線充填が主流だが、斜格子、収束線、刺突などの変化も見られる。また鋸歯文とならんで多い付加文様に貼付文がある。円板状の粘土塊を貼りつけたもので、鋸歯文と同様に文様帯の境界や鋸歯文の角部分などにアクセントとして付される例が多い。口縁は折り返しが過半数を占め、この部分に刻み、波状文、刺突、貼付文などを加えるものが多い(註5)。口縁部分における装飾の多寡は時期的な変遷とも大いに関係があり、新しいものほど薄く簡素になるといいう傾向が伺える。赤彩は外面の無文部分や

口縁内面など部分的に施されることがあるが、決して多くはなく主流とはなり得ない。なお、長野県北～中部の箱清水式に多い丁字文はここでは少数で客体的な存在である。

壺は、口縁上端と肩部に波状文、頸部に簾状文を施すものと、口縁全体と肩部に波状文、頸部に簾状文を施すものが主流を占める。この両者が基本的な文様の組み合わせと言えるだろう(註6)。頸部簾状文がなく波状文のみを施文する例、口縁無文や口唇部に刻みを施す例も見られるが、ここでは少数派である。また、壺にも折り返し口縁が多いことは特徴として上げられよう。台付壺は壺と同様の文様構成をとるが、口縁や胴部最大幅の部分にボタン状貼付文を付すものが多い。

高杯と鉢は基本的に無文で、その代わりに赤彩品が過半数を占める。その中で1568～1582に見られる漆文は、彩文の技法とともに数少ない例外といえる。

以上に述べた文様の特徴は、後期全般を通じた傾向であり、これを更に細分された時期毎に見れば細部においてやや異なる傾向の表れることが予想される。具体的な地域色の把握にはそこまで言及する必要があるが、ここでは大まかな特色を示すに留めておきたい。

(3) 外來系および客体的な土器群について

中期後半では、曲線的な沈線文と充填縄文、沈線による渦巻き文を特徴とする東北地方南部の土器に類するものが見られる。これらは、南御山Ⅱ式や野沢式、山草荷式ないしは陣場式に相当すると思われるが、搬入品か模倣品かは判断できなかった。これらは判明する限り壺に器種が限られている。

後期には赤城山麓や澁川流域に分布する縄文施文の赤井戸・吉ヶ谷系土器と栃木県に分布する二軒屋式土器が伴う。また南関東の久が原式や弥生町式の破片も見られるが、極めて少ない。赤井戸・吉ヶ谷系土器は少ないながら2-1号河川跡下層に集中して出土しており、極めて限られた時期に限られた場所で使用されたことを暗示している。なお、これら後

第4章 まとめ

期の外來系土器は櫛式のみならず次の古墳時代初期の土器群にも伴うことが多いので、時間的位置付けには注意を要する。

以上の中期後半～後期の外來系土器は、断片的な資料のため明確な型式認定や帰属時期を検討することができなかったが、判明した限りでは従来から知られている群馬県内での様相と概ね一致するもので

ある。なお、古墳時代の土器として扱った東海西部系や畿内系、北陸系の外來系土器についても、櫛式の末期段階で共存する可能性があり、これらは二軒屋式や南関東系の土器とともに、弥生時代末期～古墳時代初期における他地域との交流を示す一群としてみる必要があることを付記しておく。

[注]

- 1 佐藤明人は新保遺跡で検出された大溝出土の土器約1万点をを用いて、主に口縁形態と単位文様の推移に着目した属性分析を行った。その結果、中期後半を2時期、後期を3時期に区分する編年表を示している。(1988 佐藤)
- 2 関 義樹によって従来の「須和式」が、割実の多目と胴下半部を無文とする「出流原タイプ」と、胴下半部に条痕を施す「平沢タイプ」に二分されるとの大別業が提示された(1984 関)。これに従えば、本遺跡出土土器は「出流原タイプ」と考えられる。
- 3 これは東北地方の縄文晩期の手法を受け継いだものとの解釈がある。(1986 工峯)
- 4 本例に近似する例としては、栃木県下都賀郡壬生町御新田遺跡SI-01から出土した一語資料が目玉される。これは報文で文様パターン②とされたものに相当する。また藤田典夫はこの種の土器を須和式系の系統で大きく隔絶せずに扱おうとするの見直しを述べている(1986 藤田)。
- 5 例り返し口縁は中期後半～後期初期にはほとんど見られず、後期の中葉以降に盛行するようである。遺口縁における受け口形態の衰退とはほぼ軌を一にしていることから、口縁文様帯の維持とあいまって形態変換したと考えられる。そして、この変化は櫛式土器に限らず東海地方や南関東など他地域の後期弥生土器にも共通する現象でもあり、土器の様式圏を越える広い範囲で、「器の形」に関する認識を共有する場面も存在したことを示唆している。しかし、櫛式と極めの近い関係にあるはずの「船清水式」には折り返し口縁はほとんど見られない。この事実は、土器の変化(言い換えれば新たな様式の選択・採用)が行けりて一元的な土器の系統の内在的要因のみを東縛されるのでなく、重層する外來的要因によってもかなり大きな影響を受け得ることを示している。
- 6 口縁上縁と頸部一帯部に施した口縁中位以下を無文とする一群を後期の中葉、口縁全体を波状文で充填する一群を後期後葉とする理解が一般的だが、群馬県南西部の廣川流域では、前者が後葉段階においても卓越するようである。

[参考文献]

- 1930 杉原莊介「高崎市附近の弥生式遺跡」『考古学』10-9
- 1939 杉原莊介「上野櫛式遺跡調査報告」『考古学』10-10
- 1968 工峯善通「北関東1」『弥生式土器集成-本編2』
- 1975 金澤村「水沼遺跡」
- 1977-1978 井上唯雄・杉原悠介「入門講座 弥生土器-北関東1-4-1」『考古学ジャーナル』140-141-143-145
- 1978 外山和夫「群馬県地域における弥生時代資料集成1」群馬県立博物館
- 1982 外山和夫「群馬県吉井町祝神の弥生遺跡」『信濃』34-4
- 1982 三宅敦夫・相原建史「櫛式土器の分類-標名山東南麓を中心として-」第3回3県シンポジウム群馬県資料
- 1983 都出比呂志「弥生土器における地域色の性格」『信濃』35-4
- 1984 関 義樹「須和式土器の再検討」『埼玉県立博物館紀要』10
- 1985 大木神一郎・小島純一「赤井戸式土器と古谷谷式土器」『柏川村の遺跡』柏川村教育委員会
- 1986 工峯善通「赤形紋」『弥生文化の研究』3
- 1986 藤田典夫「栃木県における弥生時代中期後半の土器」『第7回 三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会 千川水系古代文化研究所 群馬県考古学談話会
- 1987 栃木県教育委員会「御新田遺跡 富士原遺跡 ヤツナラ遺跡 下り遺跡」
- 1988 佐藤明人「8 考察 (1) 出土弥生土器について」『新保遺跡Ⅱ』群馬県教育委員会・財団法人群馬県歴史文化財調査事業団
- 1988 飯島克巳・若狭 徹「櫛式土器編年の再構成」『信濃』40-8
- 1988 相原建史「清里・庚申塚遺跡のその後」『群馬の考古学』財団法人群馬県歴史文化財調査事業団
- 1988 大木神一郎「群馬県東部における弥生時代中期後半の土器について」『群馬の考古学』財団法人群馬県歴史文化財調査事業団
- 1988 佐藤明人「櫛式土器の様式変遷と地域性」『群馬の考古学』財団法人群馬県歴史文化財調査事業団
- 1988 平野進一「弥生土器の終焉」『群馬の考古学』財団法人群馬県歴史文化財調査事業団
- 1990 群馬県歴史文化財調査事業団「新保田中村前遺跡Ⅰ」
- 1992 群馬県歴史文化財調査事業団「新保田中村前遺跡Ⅱ」
- 1993 群馬県歴史文化財調査事業団「新保田中村前遺跡Ⅲ」

2 2号河川跡出土土師器について

1. 本遺跡は弥生時代から古墳時代へと続く遺跡である。新保田中村前遺跡にある2号河川跡は大きく分けて1・2の2つの流れが認められ各々2号河川跡1・2とくくられている。2条の流れは出土する土器、弥生時代後期樽式土器と土師器の違いから時期をやや前後する事が分かっている。出土遺物である弥生土器からの検討は前章弥生土器についてあるとうり、河川跡からの出土遺物も上・中・下層にとりあげられている。2号河川跡での1・2の時期的な違いは下に示したとうりである。2-2号河川跡下層からは弥生時代中期の遺物が多く2-1号河川跡よりも流れ始めは古いことが想定されている。これらの出土遺物は河川跡出土という前提の中ではあるが検討の対象としたい。

ここでは出土土師器と弥生土器との共伴の関係から本遺跡内での時期的・文化的な変質の過程を概観して見たい。

2-1号河川跡

下層 弥生土器は中期の遺物も若干混じるが主体

は弥生後期樽式土器である。土師器の出土も少量ではあるが検出されている。北陸系土器376が検出され、口縁部は5の字状を呈し、疑凹線が巡る。同型の土器は有馬遺跡82号住居跡からも出土しているが有馬例は疑凹線は確認されてはいない。漆町福年では白江段階に比定される。また440高坏下部は稜を認めることができ、廻間遺跡等に検出される東海の福年とさらに漆町福年との比較でも並行するものであり、本流路の中でも比較的古い段階の一群である。外来の土器の中でも県内では古い段階におけるものである。

中層 弥生土器は樽式土器を主体とし、土師器の出土も下層に比較して多い。弥生時代の土器は樽式土器のみではなく、赤井戸式土器もまじり、県内での弥生時代終末から古墳時代初頭期の様相が伺える。器台は裾部が内湾気味のもの237などが含まれるがやや時間幅がある様である。高坏は坏下部に稜を残すもの、胴上部に沈線が巡るもの266等を含む。また中層からは畿内系のタタキ甕が検出され294、口縁端部内面が僅かに肥厚し、胴部内面は削り、外面にタタキが認められ、庄内新一布留古段階にある。

2-1号河川跡		
	弥生土器	土師器
下層	弥生時代中期～樽式土器	出土月影・S字甕等
中層	樽式土器	出土バレス高坏等
上層	樽式土器	出土

2-2号河川跡		
	弥生土器	土師器
下層	弥生時代中期～樽式土器	2～3点出土
中層	樽式土器	出土
上層	樽式土器	＊

2-2号河川跡

下層 弥生土器は中期～後期を主体としている。土師器は数点のみであり、S字状口縁台付甕を含んでいる。

中層 弥生土器は後期樽式土器を主体としている。高坏・甕等が出土している。

2-2号河川跡出土土器も総体を見ると前章弥生土器について指摘しているように鋸歯文を赤彩で描かれた壺の肩部が検出されており、南関東や東海地方西部の後期土器の影響を見ることができる。このような例は前章弥生土器についてでも指摘するように群馬県内では樽式土器の純粋な存在の中に古墳時代へとの変質の初段階に多く認められるものである。

検討

まず層位的な問題であるが2号河川跡1・2は共に上・中・下層中から弥生土器中期から後期樽式土器に連続して出土している。このように本遺跡2号河川跡を弥生時代から古墳時代へと連続するという前提で検討するが、「弥生土器について」で指摘したように「河川跡出土品が大多数のため同時性を保証する一括性に欠ける。」ことも含めなければならない。

また、さらにもう1つの前提として群馬県内での土師器の出現は弥生時代後期樽式土器からの明確な発展変質という事を認めることはできない(樽式土器が土師器と混じる現象や樽式土器が土師器化する段階の土器は多数認められる。見立溜井遺跡・堤東遺跡等)このため従来の土師器の先後関係も他地域の土器との共伴関係を基に設定してきた。いずれにしても新保田中村前遺跡2号河川跡では同一の層位中から樽式土器と土師器の関係を見ることができた。

前段の分類での中期を含む2-1号河川跡下層からは北陸系・東海東・西部・南関東系の土器が認められ、小型土器、器台、高坏、甕が検出されている。

しかし在地の弥生時代中期に属する土器は少なく、おおかたは後期樽式土器が主体になる。447は口縁内面に羽状文様があり文様にはやや乱れた様相が認められるが加飾が認められる。440高坏は坏部下段に稜を持つ。東海西部系と考えられるが坏部下段の稜は廻間遺跡のⅡ段階前半段階と並行する。S字状口縁台付甕は423のように口縁部の立ち上がりが明確とは言えない。

器台はやや器高の高いものが多く検出されている。

中層では高坏・ひさご壺外面にパレス文様の加飾が施される266・273。高坏は坏下段部に稜が認められ、ひさご壺口縁端部は面をなしている。他に、小型高坏251、脚上部に凹線が巡る高坏、口縁端部内面に調整を加え内湾する274、二重口縁壺、単口縁甕、刷毛目を基調とし、口縁端部に刻みを入れるものも出土している305。305は単口縁台付甕の可能性もあり、南関東の影響も感じさせるものである。S字状口縁台付甕には口縁部外面に刺突状の刻みを確認できるものもある324が、このS字状口縁台付甕は他の共伴遺物との比較からみても廻間遺跡A類と時期的に並行するものではない。

以上のように群馬県内弥生土器樽式土器と外来の土師器が共伴する事が認められる。前提としたように県内での古墳時代に土師器化するのには樽式土器から発展する事ではなく他地域との交流が始まる。北陸小型土器は漆戸町年では白江段階にあたる。県内での北陸系の土器は現在かなり多数認めることができ、本遺跡を含め有馬遺跡、上縄引遺跡、下田中遺跡等で検出され、また最近の例では沼田市町田小沢Ⅱ遺跡1号住居跡にも検出され、その例は増えている。町田小沢Ⅱ遺跡1号住居跡では甕が出土し、口縁部は5の字を呈し、外面に縦凹線が巡り、肩部には刺突が認められ内面に削りが施され、北陸月影式の影響が強く認められる。また共伴する遺物は在地樽式土器である。この例は有馬遺跡211号住居跡出土壺の段階に近いと考えられる。町田小沢Ⅱ遺跡

1号住居跡、有馬遺跡211号住居跡の例は県内樽式土器の後葉の土器と共伴し、弥生時代後期の段階に北陸の土器との接触があった。また上縄引遺跡でも5の字口縁部に波状文を施すなど樽式土器と月影式土器は融合している。この段階は弥生時代の文化を色濃く残した古墳時代移行期と理解している。このため樽式土器主体の複核構成の中、他地域の土器が混入する。

A類S字状口縁台付甕は現在群馬県内では熊野堂遺跡で検出報告がなされている。熊野堂遺跡出土のS字状口縁台付甕は口縁部外面に刺突状にきざみが施されているが、A類S字状口縁台付甕に並行する時期に比定するにはやや問題がある。それは新保田中村前遺跡2-1号河川跡中層中からも同様な口縁部に刺突状の痕跡を残す破片がある。さらに共伴する中層の土器は例えば東海系である450のような脚部上部に凹線を巡らす器台、畿内では布留0-1段階に並行するような土器と共伴するなどすぐにA類に時期的に並行するとは考えられない。前述したようにS字状口縁台付甕は搬入時には模倣の在土器が多いと考えられ、高坏、ヒサゴ壺口縁部にパレス様に文様を施すことと合わせ外来の土器を模倣していることが理解できる。

2-1号河川跡中層出土294は畿内タタキの甕である。県内でもタタキ調整の報告例は殆どない。甕は外面タタキで内面に削りが認められ、畿内庄内新段階から布留古段階に想定できる。

2-1号河川跡の土器は下層・中層の間の土器は高坏、器台等の共伴関係から見て先後関係は明確ではなく、このことからタタキの甕等とも比較し、下・中層の土師器は畿内庄内新段階から布留古段階に想定できる。また北陸漆町編年との比較では白江段階に比定でき廻間編年ではⅡ-Ⅲ段階に想定する。

さらに従来からの県内の編年観・文化観からしてもこの段階の土師器は在来の樽式土器との関係から見て弥生時代、古墳時代の変換の資料としては貴重なものであり、本遺跡と隣接する新保遺跡ともその内容や集落の立地、樽式土器から土師器への変換

等からみても極めて重要な資料である。

本遺跡2号河川跡出土土器はここまでの検討のよりにその編年的な検討は外来の土師器との共伴関係によるところが大きい。このような過程は批判も多いが群馬県の弥生土器である樽式土器からの独自変換はないとの前提にある。このため共伴する外来土師器との共伴関係から導き出している。従前より樽式土器の終末段階に土師器が搬入すると見られがちであったが外来土器が搬入するのは樽式土器第3期にあたり、外来土器を受け入れることにより樽式土器の組成が変質するとみられる。(1)土器も廻間編年だけでなく、近年は畿内の土器、北陸漆町遺跡等の編年観からみた共伴事例からもその並行関係が認められる。このような作業の中では東海編年のみに頼る編年観だけではなく前述の3地域の年代観とのつかわせが必要となる。

S字状口縁台付甕

S字状口縁台付甕は群馬県内で多数検出され、事実弥生時代と古墳時代前期を区画するメルクマールとしての地位を維持している。事実古墳時代にならないとS字状口縁台付甕の出現はないが古墳時代前期の甕を代表する1つである。しかし、2号河川跡でもS字状口縁台付甕のみでなく単口縁台付甕・単口縁の甕が多数検出されている。最下層ではあまりS字状口縁台付甕は多いとは言えない。ただS字状口縁台付甕は従来の樽式土器の土器群と比較すると視覚的にも、機能的にも激変するものであり、従前より時代を画する土器としている。いずれにしてもS字状口縁台付甕を含む土師器がいつの段階で群馬の地へ導入されたのかが問題であり、その好例として本遺跡2号河川跡が果す意味は大きいと考えられる。S字状口縁台付甕は県内では熊野堂遺跡でA類と同様の口縁部外面に刷毛状工具による刻みが認められる甕が樽式土器と共伴する例が認められている。しかしこのS字状口縁台付甕は共伴する他の土器や樽式土器との比較では廻間遺跡にあるA類段階に即並行するものとは言いがたい。作業の結果はS字状

口縁台付甕の例をみると口縁部外面に刺突状文様の存在をイコール週間編年のA類とはならないことを他の共伴事例との関係から示している。前段で検討してきたように群馬県の弥生時代後期は樽式土器があり、その後期段階に土師器が導入されてくる。この時期を樽式土器の終末と理解するのではなく土師器の導入したという結果によると理解すべきであろう。いづれにせよ土師器が導入され、受容されるのは東海週間編年Ⅱ段階、北陸漆町編年白江段階にあるようである。有馬遺跡211号住居跡例や、沼田市町田小沢Ⅱ遺跡1号住居跡のように北陸土器がまず樽式土器の中に搬入され、以後東海系、畿内系土器が導入されていく。

土器導入の意味

従前より群馬県では古墳時代前期の土器の変質に対して入植民説が定説となっている。つまり新来の人々が大半して群馬の地に入り、新しい古墳時代社会を建立した。かれら新しい人々は畿内、東海地域の背景をもった政治的な介入とされている。またその征服集団の長の墓が古墳である。としている。

筆者はこの入植民説には反対の立場にある。その理由は土器の導入は県内では弥生時代に始まり、同一住居跡・同一遺跡の中で樽式土器と土師器が混在、あるいは融合して出土するからである。さらに土器の問題でも新保田中村前のように北陸・東海・畿内・あるいは南関東の土器が微妙に時期を異にして搬入している。

入植民があったとすれば彼らの集落が認められない点があり、入植民の存在を示す遺構・遺跡が認められない点もその大きな理由である。このように決して他の民族(集団)の入れ替わりとするだけの根拠は充分ではない。新保田中村前遺跡のように弥生時代から古墳時代へ継続する遺跡の中に外来の勢力が介在したことも認められないし、北陸や、畿内、東海の土師器は明らかに樽式土器後期に搬入を始めその土器を弥生時代の人々が上手に受容している姿を認められる。(2)

筆者は群馬県内の古墳時代前期を3期に区分している。第Ⅰ期は樽式土器後期に土師器が搬入する段階(東海西部では週間編年Ⅱ段階)、第Ⅱ期は畿内系的小型増が出現する段階(畿内編年では布留古段階)第Ⅲ期は布留新段階に設定している。なお第Ⅰ期には北陸の白江段階を想定している。

以上の時間設定からみるとまず樽式土器段階に搬入する土師器はやがて古墳時代第Ⅰ期に向けて集落の立地を大きく変換していく。樽式土器後期に山麓を中心としていた集落は第Ⅰ期の中でその立地場所を平野部への移動している。これは入植ではなく弥生時代から古墳時代への時代変換時にある移動と考えられる。元々平野部に近い新保田中村前、新保遺跡等は立地移動の必要性がなくそのまま平野部に継続している。第Ⅰ期には既に古墳時代へ向けた胎動が始まるものと理解でき、第Ⅱ期になると平野部に古墳時代集落が展開している。この事実は樽式土器文化の人々が新たな古墳文化を取り入れ平野部にその拠点を移動するものと理解している。おそらく農業技術的な変化が想像できる。

第Ⅰ期から遅くとも第Ⅱ期の前半にかけてこのような集落立地の変換が行われたものと理解している。また北部の山麓に位置する遺跡は谷部に開拓の手を広げている。もともと山麓にいた弥生時代の人達が新しい開拓を始めた、そのきっかけを作ったのは外来の人であり、物であった。もちろん外来の人、物は明らかに入って来ているがそれはこの時代に限ったことでもなく、また文化の搬入の方法が人の介在による要因で環境を激変させることもない。弥生時代の遺跡や人々は土師器の導入に伴い、消えてなくなる事はないし、古墳時代になっても弥生時代の遺跡が新保田中村前遺跡のように途切れることもない。

新保田中村前遺跡2号河川跡出土土器群はこのような弥生時代から古墳時代への変換の時期にあったものと考えられる。

註

- (1) 筆者は棒式土師の終末段階を成立させたものが外来の土師の導入であると理解している。土師器が棒式土師終末期に導入するのではなく、棒式土師3期に土師器が導入し、棒式土師の衰亡が始まったのである。また古墳時代の交換も北陸の土師が導入する段階があってその後東海・畿内系の土師や文化が古墳時代化を促していく。
- (2) 筆者は弥生時代から古墳時代への移行期には土師の交換に伴い、集落の立地、墓制等さまざまな実質があると理解している。これらのすべてを入境民の存在とすることには理解できない。なによりも古墳という時代を画する墓制や文化、社会構造全体の実質を入境民説で理解するために入境を行う集団の衣・食・住をもすべて捨てる必要が生じる。近年群馬県内でも入境民説を主張する論考を拝見する。入境を示唆される時期は群馬の弥生から古墳時代への変換期とはほぼ同じ時期にある。もしこの段階に全国的に入境・征服が行われたとするならばそれだけの人間が組織が動くことになるのか、そして入境集団を維持する背景の古墳時代社会の国家の成立、統一にまでかかわる大きな問題であるとおもうのだが。

引用・参考文献

- 相模建史・小島敦子「新保田中村古墳群Ⅲ」財団法人群馬県歴史文化財調査事業団1993
- 赤塚次郎「S字型土師器」財団法人愛知県歴史文化財調査センター 1986
- 赤塚次郎「東海系土師器3・4世紀の伊勢湾沿岸地域」『古代文化』4・4 1992
- 赤塚次郎「聖徳太子」愛知県歴史文化財調査センター調査報告書第19集愛知県歴史文化財調査センター1990
- 赤山容造・佐藤明人・小宮敦久「菅野遺跡・下田中・矢場遺跡」群馬県企業局 1990
- 飯塚卓二・井川達雄「下佐野遺跡」財団法人群馬県歴史文化財調査事業団 1990
- 石塚俊博「千葉県柏市戸塚山遺跡の調査にむけて」『古代96号』1993
- 石塚 茂「野原高塚遺跡」財団法人群馬県歴史文化財調査事業団 1983
- 宇賀神誠二「上木戸遺跡」第3巻16号5-(2)中央自動車道長野緑地歴史文化財発掘調査報告書2 長野県教育委員会 (財)長野県歴史文化財センター 日本道路公団名古屋建設局 1988
- 宇賀神誠二「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県歴史文化財センター紀要2』財団法人長野県歴史文化財センター 1988
- 梅澤重昭「群馬県史」通史編一 第五章三・四・六節五 1990
- 尾崎喜左衛門・今井新次・松島英二「石田川」石田川刊行会1968
- 女塚和志雄・関根慎二「野野原遺跡(2)」財団法人群馬県歴史文化財調査事業団
- 加納俊介「古墳の成立と土師器の移動」『季刊考古学』24号1988
- 上綱引達雄「第3回三軒弥生時代シロゾウム土師器終末期の土師 4世紀の土師」群馬県考古学協会 1982
- 「群馬県史」通史編1 原始古代1 群馬県史編さん委員会1990
- 佐藤明人「新保田遺跡Ⅱ」群馬県教育委員会 財団法人群馬県歴史文化財調査事業団1988
- 佐藤明人「有馬遺跡Ⅱ」群馬県教育委員会 財団法人群馬県歴史文化財調査事業団1988
- 坂井 隆「野野原遺跡Ⅱ地区・両遺跡」財団法人群馬県歴史文化財調査事業団1987
- 田嶋明人「御野遺跡Ⅰ」石川県歴史文化財センター 1986
- 田中新一「出現期古墳の理解と展望」『古代77号』早稲田大学考古学会1984
- 田口一郎「元島名将塚古墳」高崎市教育委員会1981
- 田口一郎「群馬県における東海系土師器」『東海系土師の移動から見た東日本の後期弥生土師』第Ⅲ分冊関東・中央高地編 東海歴史文化財研究所 1991
- 千野 浩「本村東沖遺跡出土の弥生時代後期・北陸系土師について」『本村東沖遺跡』長野県教育委員会1993
- 出越茂和「金沢市近岡ナカシマ遺跡」金沢市教育委員会1986
- 寺沢 薫「畿内の古式土師器をめぐる二、三の問題」『矢野遺跡』1988
- 友藤哲也「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳』vol.2群馬土師観会1991
- 友藤哲也「群馬県の古墳時代初期の検討」『古代94号』早稲田大学考古学会1992
- 友藤哲也「群馬県における古墳初期文化の再検討」『古代集落の謎解明』五口時雄先生古稀記念考古学論文集1988
- 友藤哲也「上野の古墳時代文化の受容」『古代探査Ⅷ』滝口聖先生追悼論文集1995
- 友藤哲也「北関東の古墳時代文化の受容」『古代第98号』1994
- 西川修一「狭野遺跡になれなかった壺」『古代94号』1992
- 山 隆之「下野遺跡」群馬県教育委員会1980
- 橋本博文「関東北部における古墳出現期の様相」『東日本の古墳の出現』山川出版社1994
- 北田井克仁「南関東市上の北陸系土師について」『古代83号』1987
- 北田井克仁「東国における外来土師の展開」『陶古論叢』久保三先生追悼論文集1983
- 松田 猛「東海遺跡」群馬県教育委員会1985
- 前原 豊「内郷遺跡」前橋市歴史文化財発掘調査団1991
- 高島 卓「北陸系土師の動向」『長野県考古学』69・70 1993
- 宮本啓郎「金沢市南保D遺跡」金沢市教育委員会1981
- 谷内裕香司「北加賀出土の布留系土師について—北安江遺跡出土の布留系土師の分析から—」『北安江遺跡』石川県歴史文化財センター 1985
- 若狭 徹「井野川流域を中心とした弥生時代後期遺跡群の動向」『群馬文化220号』1990
- 若狭 徹「群馬県における弥生土師の展開過程」『群馬考古学手帳1』群馬土師観会1991
- 「赤い土師のクニ」 長野県歴史文化財センター1994

3 まとめ

今回の調査で一級河川染谷川河川改修工事に伴う一連の発掘調査は終了し報告書も最終刊となる。これまでの報告の中で新保遺跡＝新保田中村前遺跡の意義については出土遺物や遺構の分析により十分に論じられている所であり、再論を必要としない所であるが、これまでの論証を要約し、若干、今回の調査成果を踏まえまとめとした。

本遺跡は関東平野北西最奥部に広がる平坦な前橋台地のほぼ中央に位置する。遺跡は後背湿地に囲まれた南北に延びる自然堤防上に占拠した、弥生中期から古墳前期の継続的大規模拠点集落である。本遺跡の最大の特徴は2号河川跡（新保遺跡大溝）を核として集落域、墓域、生産域が展開している点であり、2号河川跡の存在なしには本遺跡も存在しえなかった。

2号河川跡は調査の結果、縄文中・後期以降、弥生中期以前に遺跡地に流出した河川であり、5・6条の小河道変遷が捉えられ、古墳前期に埋没し遺跡地の土地利用に転換をもたらした。

2号河川跡周辺に居住が開始されるのは出土土器により弥生中期中葉の頃であり、遺構は確認されていないが小集落が形成され始めたものと考えられる。県内での弥生前期から中期前半の遺跡は県央の前橋台地を中心とする地域ではほとんど確認されておらず、この点から本遺跡は平野部中央へ進出した先進的集落と言える遺跡である。

弥生中期後半からは集落が確認されており、2号河川跡兩岸に一定距離をおいて、数軒の竪穴住居跡から構成される小支群が散在的に分布している。現状では新保遺跡（以下、新保）C区に2群、新保田中村前遺跡（以下、村前）II区、C区、E区、F区に各1群ずつの小支群が間隔をおいて分布している。また、村前B区では周溝墓が小支群の間で確認されている。水田跡は不明であるが後の時期のように周囲の低湿地に存在していたと考えられる。弥生中期後半において、2号河川跡を核として一定占有

地を持つ複数の小支群から構成される居住域を内側に、その外縁の一定区画に墓域を配し、この周りを生産域である水田跡が取り巻いていた状況を看取することができる。これは後に継続的に展開する集落配置の基本形態の成立が本時期になされたものと考えられる。

弥生後期になると住居跡は調査区域のほぼ全域に分布し、集落規模が最大の拡張を見せる。比較的短期間で推移する周辺遺跡の状況に比べ弥生後期に拠点的大集落に発展した。集落は2号河川跡の近辺まで延び、大規模竪穴住居跡を含む住居群が2～4軒の重複で広がっている（新保遺跡の報告では2～3軒の単位住居群からなる支群構成が考えられており、後期末葉に増大する）。墓域は新保C区に2群、D区に1群、村前B区とC区に各1群ずつの周溝墓群が確認されている。これらの墓域のうち、古墳前期まで継続する墓域は新保C区東半部の1群と村前B・C区の2群であり、墓域も一定区画での継続性を示している。また、村前II区では礎床墓が1基確認されており、有馬遺跡や中村遺跡の例からも拠点集落の一側面をみせている。なお、水田跡は明確には確認されていないが、新保A・B区では灌漑用の溝群とアゼが確認されており、集落域と墓域を取り巻く低湿地に水田が展開していたことは確実であり、本遺跡の継続的な生産基盤となっていた。

古墳前期になると弥生後期に比べ数的に減少するが住居跡は新保C区南半部を除き（墓域だけとなる）、調査区全域に広がりを見せる。本遺跡の集落は弥生中期後半の占有域を基本として拡大し、弥生後期から古墳前期にかけて強い継続性を示している。水田跡も弥生後期と同様に新保B・C区で溝群が確認されており生産域の維持が図られている。本遺跡は弥生時代から古墳時代へとといった時代の大きな画期を集落内に内包して変遷を遂げた遺跡である。

また、出土土器の面からは当地域の基本的な変遷状況を確認することができ、その過程において周辺各地の系統を引く土器の移入が活発であったことが判明

した。石器の側面からは砥石類の多出とともに不定形刃器の多さに縄文的伝統を脱しきえない本県弥生時代の状況を見ることが出来る。多量に出土した木製品からは本遺跡が製作・流通・消費の中核的集落であったことがわかる。また、多くの骨角製品は縄文的伝統の上に東海地方の影響を受けた橿原文化圏の一側面を示す貴重な資料である。

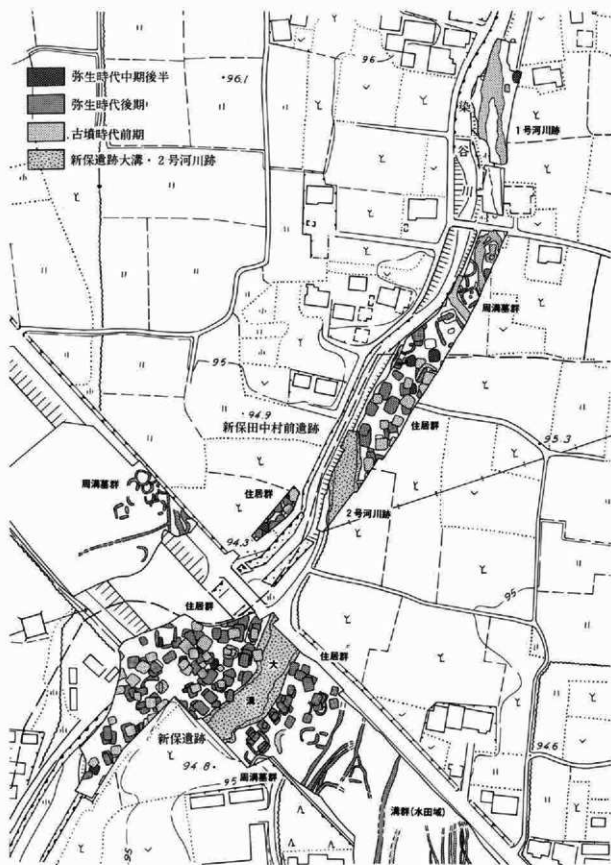
本遺跡は微視的には2号河川跡の埋没・移動によ

り集落拠点を移動（村前Ⅱ区に古墳中期に入る河川跡と溝がある。）して行ったものと考えられるが、巨視的には古墳前期の県内平野部への集落進出と期を一にした拠点の移動が考えられる。

なお、文末ながら今回の報告にあたって早稲田大学 金子浩昌氏には多大な脊椎動物遺体や骨角製品の基礎整理から分析まで多大なる御尽力をいただき、ここに記して感謝の意を表すのであります。

参考文献

- 『群馬県史 通史編1 原始古代1 第4章』 群馬県 1990
 『新保遺跡 I・II』 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 佐藤明人 1986 1988
 『新保田中村前遺跡 I・II・III』 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 小島敦子 1990 1992 1993



第265図 新保遺跡と新保田中村前遺跡の弥生時代中期後半～古墳時代前期の遺構分布図 (1/2,000)

遺物觀察表

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-1	須恵器 坏	E区Ⅱ面17 9住カマド 前床面	2/3残存	器高4.2 口径12.6 底径 5.8	◎砂粒を多く含む。 ◎普通 ◎灰白色 N7/0	底部右回転糸切り無調整。体部はやや外湾して立ち上り、口縁部は外反する。器面回転などで調整。
P-2	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面17 9住カマド 前床面	2/3残存	器高4.9 口径13.6 底径 7.0	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰白色 Y6/1	底部右回転糸切り無調整、付台高。体部はやや外湾して立ち上り、口縁部は外反し肥厚する。器面回転などで調整。
P-3	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面17 9住カマド 前床面	完形	器高4.7 口径13.2 底径 7.7	◎細砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 N7/0	底部右回転糸切り無調整、付台高。体部はわずかに外湾して立ち上り、口縁部は外反し肥厚する。器面回転などで調整。
P-4	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面17 9住南壁寄 り床面	2/3残存	器高5.4 口径14.6 底径 7.3	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰白色 5Y7/1	底部右回転糸切り無調整、付台高。体部はわずかに外湾して立ち上り、口縁部はやや外傾し肥厚する。器面回転などで調整。
P-5	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面17 9住カマド 前床面	2/3残存	器高5.5 口径13.6 底径 5.5	◎粗砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 Y6/1	底部右回転糸切り無調整、付台高。体部は外湾して立ち上り、口縁部は外反する。器面回転などで調整。
P-6	土師器 坏	E区Ⅱ面18 1住覆土	口縁部一底 体部小片	器高(8.0) 口径(16.2)	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎明赤褐色 5YR5/6	底体部は丸く深い。口縁部はわずかに内湾する。底体部外面彫削り、内面横などで。口縁部内外面横などで。
P-7	土師器 坏	E区Ⅱ面18 3住中央部 床面	口縁部一底 体部小片	器高3.4 口径(10.6)	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎明赤褐色 5YR5/8	底体部は丸く浅い。口縁部はわずかに内湾する。底体部外面彫削り、内面横などで。口縁部内外面横などで。
P-8	土師器 坏	E区Ⅱ面18 3住北西隅 床面	ほぼ完形	器高4.5 口径11.3	◎粗砂粒を多く含む。 ◎普通 ◎ 褐色(5YR6/6)	底体部は丸く浅い。口縁部はわずかに内湾する。底体部外面彫削り、内面横などで。口縁部内外面横などで。
P-10	須恵器 罍	E区Ⅱ面18 3住中央部 覆土	口縁部一肩 部片	残存高12.0 口径(33.6)	◎白色鉱物粒を多く含む。 ◎硬質	口縁部はわずかに内湾して立ち上り上半で斜め上方へ大きく開く。肩部は段を持って肥厚しわずかに内湾する。頸部はくの字に屈曲する。口縁部直下にはやや長く引き込んだ何点刺突文が連続し、口縁部中位には2条の凹線と波状文が施されている。口縁部内外面回転などで調整。肩部外面カキ目、内面同心円印。
P-11	土師質土器 小皿	E区Ⅱ面18 4住北東隅 掘り方	2/3残存	器高2.7 口径(9.5) 底径4.5	◎細砂粒を含む。 ◎普通 ◎にぶい 褐色7.5YR6/4	底部右回転糸切り無調整。体部は縦やかに外湾して立ち上り、口縁部はやや外反する。器面回転などで調整。
P-12	須恵器 坏	E区Ⅱ面18 4住覆土	1/4残存	器高(3.5) 口径(13.8)	◎細砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 Y6/1	底部調整不明。体部は外湾して立ち上り、口縁部はそのまま外傾し肥厚する。器面回転などで調整。
P-13	土師器 坏	E区Ⅱ面18 5住中央部 覆土	1/2残存	器高3.4 口径10.2	◎砂粒を多く含む。 ◎普通 ◎にぶい 褐色7.5YR6/4	体部は丸くやや深い。口縁部は外湾ぎみに開き、肩部は玉縁状をなす。体部外面彫削り、内面横などで。口縁部内外面横などで。
P-14	須恵器 坏	E区Ⅱ面18 5住覆土	1/3残存	器高4.1 口径(11.8) 底径(8.9)	◎白色鉱物粒を含む。 ◎硬質 ◎ 灰白色N7/0	底部は丸みを帯び、口縁部は外傾して立ち上る。底部外面彫削り後などで調整、内面などで調整。口縁部内外面回転などで調整。
P-15	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面18 6住カマド 前床面	1/4残存	器高4.9 口径(12.6) 底径6.7	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰白色 N4/0	底部右回転糸切り無調整、付台高。体部は外傾して直線的に立ち上り、口縁部は外反する。器面回転などで調整。
P-16	須恵器 坏	E区Ⅱ面18 6住カマド 前覆土	2/3残存	器高4.5 口径(12.8) 底径5.2	◎細砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 N6/0	底部右回転糸切り無調整。体部はわずかに外湾して立ち上り、口縁部はそのまま外傾する。器面回転などで調整。
P-17	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面18 6住北東隅 床面	1/5残存	器高4.9 口径(14.0) 底径6.2	◎砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 N7/0	底部右回転糸切り無調整、付台高。体部は外傾して直線的に立ち上り、口縁部は外反し肥厚する。器面回転などで調整。
P-18	須恵器 羽釜	E区Ⅱ面18 6住中央部 床面	口縁部一割 部上半片	残存高7.3 口径(20.2)	◎砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 N7/0	口縁部は内傾し肩部はM字状をなす。胴部は縦やかに外湾する。肩は断面三角形で斜め上方を向く。器面回転などで調整。
P-19	瓦 丸瓦	E区Ⅱ面18 7住カマド 内	一方の側部 を残す小片 内	厚さ1.4	◎細砂粒を含む。 ◎硬質 ◎灰白色 4/0	表面素文。裏面布目、合せ目あり。側部の面取り1回。
P-20	須恵器 坏	E区Ⅱ面18	1/4残存	器高4.1 口径	◎砂粒を含む。	底部右回転糸切り無調整。体部は外湾して立ち上

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
		8住南東隅 床面		径 (13.8) 底径 (6.2)	◎軟質 ◎灰白色	リ、口縁部は外反しやや肥厚する。器面回転などで調整。
P- 21	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面18 8住南東隅 床面	1/2残存	器高4.6 □ 径 (12.4) 底径6.2	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰白色	底部右回転糸切り無調整。付高台。体部はわずかに外湾して立ち上り、口縁部は外反し肥厚する。器面回転などで調整。
P- 22	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面18 8住カマド 廻り方	2/3残存	器高5.2 □ 径14.2 底径 6.2	◎砂粒を含む。 ◎軟質 ◎にぶい 褐色7.5YR7/4	底部右回転糸切り無調整。付高台。器部は外湾して立ち上り、口縁部は強く外反する。器面回転などで調整。
P- 23	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面18 8住南東隅 床面	1/2残存	器高5.1 □ 径 (15.2) 底径7.6	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎にぶい 黄褐色10YR7/2	底部右回転糸切り無調整。付高台。体部はやや外湾して立ち上り、口縁部は外反し肥厚する。器面回転などで調整。ロクロ目明確。
P- 24	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面20 2住南壁寄 り床面	1/2残存	器高5.5 □ 径 (13.8) 底径7.0	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰白色	底部右回転糸切り無調整。付高台割離。体部は外湾して立ち上り、口縁部は外反する。器面回転などで調整。
P- 25	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面18 8住南東隅 床面	ほぼ完形	器高5.2 □ 径13.7 底径 7.0	◎粗砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎ 灰色7.5Y6/1	底部右回転糸切り無調整。付高台。体部は外湾して立ち上り、口縁部は外反しやや肥厚する。器面回転などで調整。
P- 26	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面18 8住南壁寄 り覆土	2/3残存	器高5.7 □ 径14.3 底径 7.0	◎砂粒・小礫を含む。 ◎軟質 ◎ 灰色7.5Y5/1	底部右回転糸切り無調整。付高台。体部は外湾して立ち上り、口縁部は外反する。器面回転などで調整。ロクロ目明確。
P- 27	須恵器 羽釜	E区Ⅱ面18 8住カマド 廻り方	口縁部一割 部上半小片	残存高17.0 口径 (22.8)	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰白色 2.5Y7/1	口縁部は内傾・縁部は斜めに平面をなす。胴部は緩やかに外湾する。筒は断面三角形で斜め上方を向く。器面回転などで調整。
P- 28	瓦 平瓦	E区Ⅱ面18 8住覆土	一方の小口 と側部を残 す小片	厚さ1.0~1.5	◎黒色鉱物粒を多く含む。 ◎硬質 ◎灰色N5/0	表面布目。裏面縁縄文。側部の面取り2回。
P- 29	瓦 平瓦	E区Ⅱ面18 8住廻り方	一方の小口 と側部を残 す小片	厚さ1.7	◎砂粒を含む。 ◎硬質 ◎灰色7. 5Y6/1	表面布目。裏面縁縄文。側部の面取り1回。
P- 30	瓦 平瓦	E区Ⅱ面18 8住南東隅 床面	一方の小口 と側部を残 す小片	厚さ2.3	◎黒色鉱物粒を多く含む。 ◎硬質 ◎灰色N5/0	表面布目。裏面平行叩き。側部の面取り1回。
P- 31	瓦 丸瓦	E区Ⅱ面18 8住南東隅 床面	一方の小口 と側部を残 す小片	厚さ1.8	◎砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 2.5GY8/1	表面素文。裏面粗い布目。側部の面取り3回。
P- 32	土師器 坏	E区Ⅱ面18 9住北壁床 面	完形	器高3.7 □ 径11.6 後径 10.8	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色7. 5YR7/6	口縁部はやや外傾し端部は段を有する。體はやや丸くわずかに突出する。底部は浅く丸い。口縁部内外面縁などで。底底部外面施磨り、内面などで調整。
P- 33	土師器 広口壺	E区Ⅱ面18 9住覆土	1/3残存	器高 (6.7) 口径 (12.4)	◎細砂粒を含む。 ◎不良 ◎にぶい 褐色7.5YR7/3	口縁部はわずかに外反し、頸部は緩やかな段を持って屈曲する。底底部は深く丸い。口縁部内外面縁などで。底底部外面施磨り、内面などで調整。
P- 34	瓦 平瓦	E区Ⅱ面19 0住覆土	一方の側部 が残存する 小片	厚さ1.8~2.5	◎白色鉱物粒を含む。 ◎硬質 ◎ 灰色N4/0	表面素文で、一部に布目痕が見える。裏面素文。側部の面取り1回。
P- 35	瓦 平瓦	E区Ⅱ面19 0住覆土	一方の小口 が残存する 小片	厚さ1.5	◎白色鉱物粒を含む。 ◎硬質 ◎ 灰白色N7/0	表面布目。裏面縁縄文。
P- 36	須恵器 坏	E区Ⅱ面19 2住カマド 前床面	2/3残存	器高4.1 □ 径12.6 底径 6.2	◎細砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰黄色 2.5Y7/2	底部右回転糸切り無調整。体部は外湾して立ち上り、口縁部は外反する。器面回転などで調整。
P- 37	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面19 2住カマド 前覆土	1/3残存	器高 (6.0) 口径 (14.4) 底径 (6.3)	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰白色 N7/0	底部右回転糸切り無調整。付高台割離。体部はやや外湾して立ち上り、口縁部は外反し肥厚する。器面回転などで調整。
P- 38	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面19 2住南壁覆 土	2/3残存	器高5.0 □ 径13.8 底径 7.4	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰色5 Y6/1	底部右回転糸切り後などで調整。付高台。体部は外湾して立ち上り、口縁部は外反し肥厚する。器面回転などで調整。
P- 39	須恵器 坏	E区Ⅱ面19 3住南東隅 床面	2/3残存	器高3.5 □ 径11.8 底径 4.8	◎細砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 10Y7/1	底部右回転糸切り無調整。体部は外傾して立ち上り、口縁部は外反する。器面回転などで調整。
P- 40	土師器 坏	E区Ⅱ面19 3住中央部	完形	器高4.1 □ 径11.8 底径	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎淡黄褐色	底部平底。体部は外傾して立ち上り、口縁部はわずかに外反する。口縁部内外面回転などで調整。体

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-41	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面19 3住カマド 前掘り方	2/3残存	器高4.6 □ 径12.7 底径 6.1	色10YR8/3 ◎砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰色7.5Y6/1	部下外面と底部寛削り。体部輪郭不明なり。 底部右回転糸切り無調整。付高台。体部は外傾して立ち上り、口縁部はわずかに外反する。器面回転などで調整。
P-42	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面19 3住カマド 前掘り方	2/3残存	器高3.5 □ 径12.8 底径 6.4	◎粗砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 5Y8/2	底部右回転糸切り無調整。付高台。体部は外傾して立ち上り、口縁部は外反する。器面回転などで調整。
P-43	土師器 坏	E区Ⅱ面19 5住掘り方	2/3残存	器高3.8 □ 径10.0	◎粗砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄色2.5YR 6/3	口縁部は内反し肩部は玉縁状をなす。底部部は丸く深い。口縁部内外面横なで。底部部外面寛削り、内面などで調整。
P-44	土師器 坏	E区Ⅱ面19 5住掘り方	口縁部一底 体部小片	器高(4.2) □ 径(13.6)	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄色5YR7/3	口縁部はやや内反し、底部部は丸く浅い。口縁部内外面横なで。底部部外面寛削り、内面などで調整。
P-45	土師器 甕	E区Ⅱ面19 5住北東隅 床面	口縁部一割 部上半片	残存高7.6 □ 径14.6	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄色7.5YR7/4	口縁部は外傾して開き、頸部は小段を持つてくの字に屈曲する。胴部は直線的に下り長脚化をなす。口縁部内外面横なで。肩部外面縦方向の削り、内面横なで。
P-46	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面19 5住カマド 内	1/4残存	器高6.0 坏 部径25.5 脚 部径14.0	◎砂粒を含む。 ◎硬質 ◎灰色7.5Y6/1	坏部は水平に基げ端部は外傾して開く。肩部は内湾して下方に開き、底部部は平坦となり端部はほぼ直角の様を持つ。器面回転などで調整。脚部外面縦方向の研削。
P-47	須恵器 高台付埴	E区Ⅱ面19 6住中央部 床面	完形	器高5.7 □ 径13.6 底径 6.2	◎粗砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎ 灰白色2.5Y7/1	底部右回転糸切り無調整。付高台。体部は外傾して立ち上り、口縁部は外反しわずかに肥厚する。器面回転などで調整。
P-48	灰釉陶器 皿	E区Ⅱ面20 1住カマド 掘り方	1/4残存	器高2.7 □ 径14.0 底径 8.6		底部回転削り、くの字に屈曲する付高台。体部は外湾して緩やかに開き、そのまま口縁部に至る。口縁部外面直下に1条の凹線が走る。器面回転などで調整。施釉は口縁部一帯部下まで。
P-49	土師器 坏	E区Ⅰ面51 溝覆土	口縁部一底 体部小片	器高(3.5) □ 径(13.1) 底径 (13.0)	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎褐色5YR6/8	口縁部はやや外傾して短く開き、縁はわずかに突出する。底部部は丸く浅い。口縁部内外面横なで。底部部外面寛削り、内面などで調整。
P-50	土師器 坏	E区Ⅰ面51 溝覆土	1/3残存	器高3.2 □ 径10.7 底径 10.2	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎明褐色 7.5YR5/8	口縁部はやや外反して短く開き、縁はわずかに突出し丸い。底部部は丸く浅い。口縁部内外面横なで。底部部外面寛削り、内面などで調整。
P-51	土師器 坏	E区Ⅰ面51 溝覆土	1/4残存	器高(3.9) □ 径(12.9)	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 褐色7.5YR6/3	口縁部は短くわずかに内傾し、底部部との境は丸く屈曲する。底部部は丸く浅い。口縁部内外面横なで。底部部外面寛削り、内面などで調整。器面厚減。
P-52	瓦 平瓦	E区Ⅰ面51 溝覆土	一方の小口 を残す小片	厚さ1.6	◎砂粒を多く含む。 ◎硬質 ◎灰白色 N7/0	表面布目。裏面絡縄文。
P-53	瓦 平瓦	E区Ⅰ面51 溝覆土	一方の小口 を残す小片	厚さ1.5	◎黒色鉱物粒を含む。 ◎硬質 ◎ 灰色N7/0	表面横なで、布目横わずかに残存。裏面絡縄文、小口寄り横方向の絡縄文。
P-54	土師器 坏	E区Ⅰ面1 溝非覆土	口縁部一底 体部小片	器高(3.9) □ 径(12.0)	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄色10YR6/4	口縁部は短くわずかに内傾し、底部部との境は緩やかに屈曲する。底部部は丸くやや浅い。口縁部内外面横なで。底部部外面寛削り、内面などで調整。
P-55	瓦 平瓦	E区Ⅰ面1 溝非覆土	一方の側部 を残す小片	厚さ2.2	◎砂粒・小塵を含む。 ◎硬質 ◎ 赤灰色5R5/1	表面布目。裏面絡縄文。側部の面取り1回。
P-56	土師質土器 皿	E区Ⅰ面3 河覆土	1/2残存	器高3.1 □ 径10.3 底径 4.2	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色5YR7/4	底部右回転糸切り無調整。体部は外湾して立ち上り、口縁部はわずかに外反する。器面回転などで調整。内面および口縁部の一部に黒色付着。
P-57	土師器 坏	E区Ⅰ面3	1/4残存	器高3.1 □ 径(11.3) 底径 (5.0)	◎粗砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR6/4	底部右回転糸切り、周縁部などで調整。体部はやや外湾して立ち上り、口縁部はわずかに内反する。体部外面指押え、内面などで調整。内面窪付着。
P-58	須恵器 高台付埴	E区Ⅰ面3 河覆土	1/3残存	器高4.4 □ 径(12.0) 底径 (4.8)	◎粗砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰色N 6/0	底部右回転糸切り無調整。付高台。体部はわずかに外湾して立ち上り、口縁部は外反し肥厚する。器面回転などで調整。
P-59	須恵器 坏	E区Ⅰ面3	2/3残存	器高3.8 □	◎砂粒を多く含む。	底部右回転糸切り無調整。体部は外湾して立ち上り

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
		河覆土		径13.6 底径6.6	◎軟質 ◎黄灰色	り、口縁部は外反する。器面回転で調整。口タロ目明確。底部内面に「馬」の刻青あり。
P-60	須恵器 坏小碗	E区I面3 河覆土	口縁部小片	法量不明	◎軟質 ◎灰色N4/0	口縁部が外反する器形で、内面に墨痕あり。
P-61	灰釉陶器	E区I面3 河覆土	底部小片	法量不明	◎赤 ◎硬質 ◎灰白色N8/0	底部右回転糸切りでくの字に屈曲する高台が付く。底部外面に「金」の墨書あり。
P-62	灰釉陶器	E区I面3 河覆土	体部下端一 底部小片	法量不明	◎密、白色威物粒を含む。 ◎硬質 ◎灰白色N8/0	底部右回転糸切り無調整。垂直に下る高台が付く。底部内面に×□□七の墨書あり。
P-63	須恵器 羽釜	E区I面3 河覆土	口縁部一割 部上半小片	残存高6.9 口径(21.0)	◎軟質 ◎灰白色N7/0	口縁部はやや内傾し肩部は緩やかなM字状をなす。母は断面台形で水平に延びる。器面回転で調整。
P-64	瓦 平瓦	E区I面3 河覆土	一方の側部 を残す小片	厚さ2.0～2.5	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎軟質 ◎灰白色7.5Y7/1	表面布目。裏面結縄文。頸部の面取り3回。
P-65	瓦 丸瓦	E区I面3 河覆土	一方の側部 と小口を残す小片	厚さ1.4	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎軟質 ◎灰褐色7.5Y6/1	表面素文。裏面布目。頸部の面取り3回。
P-66	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面高 跡東北城岡 溝	口縁部一割 部中位残存	残存高9.8 口径11.8 胴 部最大径14.2	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎普通 ◎灰黄褐色10YR5/2	口縁部は強い段を持って屈曲し、上半は外傾して開く。胴部は上半に最大径を持つ。胴部外面斜め方向の刷毛目、肩部の横位の刷毛目。内面で調整。
P-67	土師器 甕	E区V面高 跡南北城岡 溝	口縁部一割 部中位残存	残存高17.2 口径12.0 胴 部最大径23.6	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい褐色7.5YR6/3	口縁部は外傾し、胴部はくの字に屈曲する。胴部は中位に最大径を持ち、やや半球形と考えられる。口縁部内外面横なで。胴部外面横なで、内面で調整。胴部内面輪破み痕あり。
P-68	埴土器 甕	E区V面20 5住覆土	口縁部小片	法量不明	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい褐色10YR7/4	口縁部外面に乱れた横波状文が全面に施されている。内面横位の施磨き。
P-69	埴土器 甕	E区V面20 5住覆土	口縁部小片	法量不明	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい黄褐色10YR7/4	口縁部外面に横波状文が全面に施されている。外面刷毛で。内面施磨き。
P-70	埴土器 甕	E区V面20 5住覆土	口縁部小片	法量不明	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部は外反し、乱れた横波状文が全面に施されている。内面施磨き。
P-71	埴土器 甕	E区V面20 5住覆土	胴部上半小 片	法量不明	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎不良 ◎灰黄褐色10YR5/2	外面全面に横波状文が施されている。内面施磨き。
P-72	埴土器 高坏	E区V面20 5住覆土	坏部小片	残存高4.6 坏部径(13.0)	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎良好 ◎赤色7.5R4/6	坏部は外湾して立ち上り深い。内外面施磨き後赤色塗彩。
P-73	埴土器 高坏	E区V面20 5住覆土	坏部小片	残存高4.8 坏部径(14.2)	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい褐色7.5YR7/3	坏部は外傾して立ち上り、口縁部はさらに短く外傾する。外面横位。内面横位の施磨き。
P-74	土師器 甕	E区V面20 5住覆土	口縁部一割 部上半片	残存高5.8 口径(15.3)	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい褐色7.5YR7/3	口縁部は短く外傾し、胴部はくの字に屈曲する。胴部は緩やかに外湾する。口縁部内外面横なで。胴部外面施磨き。内面横なで輪破み痕あり。器面摩滅。
P-75	土師器 有段口縁壺	E区V面20 5住覆土	口縁部小片	法量不明	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎良好 ◎赤色7.5R4/3	強く外反する口縁部で肩部は短く直立し、段は後面三角形で斜め下方を向く。内外面とも施磨き後赤色塗彩。
P-76	土師器 甕	E区V面20 5住覆土	口縁部一割 部上半片	残存高6.0 口径(22.4)	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎不良 ◎灰白色10YR8/2	口縁部は外傾し肩部はやや玉縁状をなし、刻み目が施される。胴部はくの字に強く屈曲する。口縁部上半内外面横なで。口縁部下半一割部内外面刷毛目。
P-77	埴土器 高坏	E区V面20 7住覆土	坏部下半一 脚部上半片	残存高6.2	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎良好 ◎赤色7.5R4/3	坏部はわずかに外湾して立ち上り、脚部は直線的に斜め下方へ開く。坏部内外面、脚部外面施磨き後赤色塗彩。胴部内面で。
P-78	竜見町式土 器 甕	E区V面16 3住柱穴内	口縁部一割 部上半残存	残存高11.5 口径13.8	◎軟質 ◎赤褐色を多く含む。 ◎不良 ◎褐色	口縁部は内反さみに立ち上り受け口状をなす。胴部は緩やかにくびれ、胴部は緩やかに膨らみを持つ。

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
					10YR4/1	口縁部上端開目。頸部には9条1単位右回り等間隔縞状文、胴部上半には巻波状文1段と巻波連続山形文が施される。口縁部内外面横まで、胴部内外面横まで、胴部内面輪轆痕あり。器面やや摩滅。
P-79	棒式土器 壺	E区V面16 3E柱穴内	口縁部-胴部 上半残存	残存高8.7 口径19.0	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰褐色 7.5YR6/2	口縁部は縦やかに外傾す。頸部は縦やかにくびれる。頸部には9条1単位左回り等間隔縞状文が施される。器面やや摩滅。
P-80	棒式土器 壺	E区V面11 3E覆土	頸部-胴部 上半小片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰褐色 7.5YR6/2	◎砂粒を多く含む。頸部には10条1単位左回り2連止縞状文、胴部上半には巻波状文が施される。器面やや摩滅。
P-81	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面11 3E覆土	口縁部-胴部 上半小片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰褐色 7.5YR5/2	口縁部は斜め上方に屈曲し頸部内面が凹線状をなす。胴部上半は大きく外湾する。胴部外面斜め方向の刷毛目、胴部には横位の刷毛目。内面まで調整。
P-82	棒式土器 壺	E区V面11 3E覆土	頸部-胴部 上半小片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR7/4	胴部上半に3段の巻波状文が施されている。器面やや摩滅。
P-83	棒式土器 壺	E区V面11 3E覆土	口縁部小片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰白色 10YR8/2	折り返し口縁で下半は円形に連続押圧され上半には巻波状文が施されている。外面横まで、内面横まで。
P-84	棒式土器 壺	E区V面11 3E覆土	口縁部-胴部 小片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰白色 2.5Y8/2	口縁部下半は縦やかに内湾し上半は内反する。頸部に単位不明の右回り等間隔止縞状文が施されている。口縁部上半内外面横まで、下半内外面刷毛まで。
P-85	棒式土器 高坏	E区V面10 3E覆土	胴部片	残存高10.7 胴部径11.4	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色7.5R4/6	胴部は斜め下方へ直線的に開く。外面赤色塗彩、内面刷毛まで。器面やや摩滅。
P-86	縄文土器 深鉢	2B-68II 層	胴部小片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎褐色 10YR6/7	3条の縦位沈線・縄文施文部・磨消部からなる体部破片。縄文はR L縦位光曜施文。加曾利EⅡ式。
P-87	縄文土器 深鉢	2B-68II 層上層	胴部小片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色5YR7/4	縦位沈線・縄文施文部・磨消部からなる体部下半の破片。縄文はR L縦位光曜施文。加曾利EⅡ式。
P-88	縄文土器 深鉢	2B-68II 層上層	口縁部-胴部 小片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄褐色7/3	口縁部に横位区画を配する大型の深鉢。隆帯で囲まれ、隆帯縁にはなでを加える。体部は凹線を2条1単位で懸垂し磨消部と縄文施文部を画す。縄文はR L光曜施文。加曾利EⅡ式。
P-89	土製品 土鉢	2N-73As -B下落ち 込み	一方の端部 欠損	残存長2.8 径1.4 孔径 0.3	◎砂粒を少量含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR6/3	長楕円形をなす小型の鉢で、長軸に貫通孔がある。重さ5g+
P-90	須恵器 壺	2N-73As -B下落ち 込み	定形	器高3.6 口径 16.8 横径 4.2	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰白色 5Y7/1	ボタン状積みで、天井部中央はやや窪み口縁部に向って縦やかに開く。口縁部はわずかに内湾し端部は垂直に折れ込み出されている。天井部外面中央回転切り後で調整。外面回転磨削。口縁部内外面、天井部内面回転で調整。
P-91	灰釉陶器 皿	F区I・II 南端部	1/4残存	器高1.9 口径 12.8 底径 5.8	◎密 ◎良好 灰白色N7/0	ハの字に開く付台で、体部は縦やかに外湾して立ち上り、口縁部は反外し隆帯状をなす。器面回転で調整。軸は体部上半-口縁部内外面、体部内面に「住」の磨きあり。
P-92	瓦 平瓦	F区II面20 9位貯蔵穴	一方の小口 と端部を残す 小片	厚さ1.5	◎砂粒を含む。 ◎硬質 ◎灰白色 2.5GYS/1	表面布目。裏面平行叩き。側部の面取り1回。苔木造り。
P-93	瓦 平瓦	F区II面20 9位貯蔵穴	小片	厚さ1.6	◎砂粒を含む。 ◎硬質 ◎灰白色 7.5Y8/1	表面布目。裏面結縄文。
P-94	瓦 丸瓦	F区II面21 0位覆土	一方の側部 を残す小片	厚さ1.3	◎黒色鉱物粒を含む。 ◎硬質 ◎ 灰色7.5Y6/1	表面布目。裏面雲文。裏面の面取り3回。
P-95	須恵器 坏小碗	F区II面21 1位覆土	口縁部-体部 小片	残存高4.5 口径(15.0)	◎砂粒を含む。 ◎硬質 ◎灰白色	体部は外傾して立ち上り、口縁部はそのまま外傾する。器面回転で調整。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-96	土師器 甕	F区Ⅱ面21 1位覆土	口縁部-胴 部上半片	残存高14.3 口径 (18.2)	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③にぶい 褐色5YR6/3	口縁部はやや傾けた口の字口縁で、上端は外傾し 下半は内湾する。胴部への移行部は緩やかな段を 持ち、胴部上半は外湾する。口縁部内外面横まで、 胴部外面側の方向の施磨り、内湾面方向の施磨り。
P-97	土師器 坏	F区Ⅱ面21 2位掘り方	1/4残存	器高 (3.0) 口径 (11.2)	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③にぶい 褐色2.5YR6/3	口縁部はわずかに内反し、底面は丸く浅い。口 縁部内外面横まで、底面外面施磨り、内面まで 調整。
P-98	土師器 坏	F区Ⅱ面21 2位掘り方	口縁部-底 体部小片	器高 (2.8) 口径 (12.4)	①砂粒を含む。 ②良好 ③にぶい 褐色7.5YR6/4	口縁部はわずかに内反し、底面は丸く浅い。口 縁部内外面横まで、底面外面施磨り、内面まで 調整。
P-99	土師器 甕	F区Ⅱ面21 2位カマド 内	口縁部-胴 部上半片	残存高8.1 口径 (21.4)	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③にぶい 褐色5YR7/3	口縁部は外傾し胴部は丸くくびれ、胴部上半は緩 やかに内湾する。口縁部内外面横まで、胴部外面 施磨り、内面横まで、口縁部外面施磨りあり。
P-100	須恵器 坏	F区Ⅱ面21 3位貯蔵穴 内	1/2残存	器高3.6 口 径10.4 底径 5.4	①粗砂粒を含む。 ②軟質 ③暗灰色 N3/0	底面右回転糸切り無調整。体部はそのまま外傾して立ち 上り、口縁部は外反する。器面回転で調整。
P-101	須恵器 坏	F区Ⅱ面21 3位中央部 表面	完形	器高3.5 口 径11.2 底径 5.1	①粗砂粒を多く含 む。②軟質 ③ 灰黄色2.5Y7/2	底面右回転糸切り無調整。体部は外傾して立ち上 り、口縁部はそのまま外傾し厚ぼろす。器面回転 で調整。粗面作りである。
P-102	須恵器 坏	F区Ⅱ面21 3位覆土	完形	器高3.4 口 径11.0 底径 4.2	①砂粒を多く含む。 ②軟質 ③灰黄色 2.5YR7/3	底面右回転糸切り無調整。体部はわずかに外湾して 立ち上り、口縁部は外反する。器面回転で調整。
P-103	須恵器 高台付埴	F区Ⅱ面21 3位貯蔵穴 内	完形	器高5.0 口 径12.0 底径 6.1	①砂粒を多く含む。 ②軟質 ③にぶい 黄褐色10YR7/2	底面右回転糸切り無調整。付高台。体部はやや外 湾して立ち上り、口縁部はわずかに外反する。器 面回転で調整。
P-104	須恵器 高台付埴	F区Ⅱ面21 3位覆土	2/3残存	器高3.7 口 径13.0 底径 6.6	①砂粒を含む。 ②軟質 ③暗灰色 N3/0	底面右回転糸切り無調整。付高台制扉。体部は外 湾し、口縁部はそのまま外傾する。器面回転で 調整。
P-105	須恵器 高台付埴	F区Ⅱ面21 3位覆土	1/4残存	器高 (6.4) 口径14.0 底 径 (8.0)	①砂粒を多く含む。 ②軟質 ③灰白色 2.5Y8/1	底面右回転糸切り後で調整。付高台端部欠落。体 部は外湾し、口縁部は外反する。器面回転で調整。
P-106	須恵器 羽釜	F区Ⅱ面21 3位車室寄 り覆土	口縁部-胴 部上半小片	残存高8.0 口径 (20.0)	①粗砂粒を多く含 む。②軟質 ③ 灰黄色2.5Y7/2	口縁部は内傾し端部は平面をなす。胴部は緩やか に外湾する。肩は断面三角形で水平に延びる。器 面回転で調整。
P-107	須恵器 羽釜	F区Ⅱ面21 3位覆土	口縁部-胴 部上半小片	残存高7.8 口径 (19.0)	①砂粒を多く含む。 ②軟質 ③にぶい 褐色7.5YR7/3	口縁部はわずかに内傾し、端部はやや皿状をな す。胴部は緩やかに外湾する。肩は断面三角形で 斜めの上方向を向く。器面回転で調整。
P-108	土師器 坏	F区Ⅱ面21 4位覆土	2/3残存	器高4.3 口 径11.4 底径 8.1	①砂粒を含む。 ②良好 ③にぶい 褐色5YR6/4	底部は平底で、体部は外傾しそのまま口縁部に至 る。口縁部内外面、底面体内面横まで、体部外面、 底面外面指押え。
P-109	須恵器 坏	F区Ⅱ面21 4位覆土	1/3残存	器高3.9 口 径 (13.0) 底径 (5.1)	①砂粒を含む。 ②軟質 ③灰白色 5Y7/2	底面右回転糸切り無調整。体部は外湾し、口縁部 は外反する。器面回転で調整。
P-110	須恵器 高台付埴	F区Ⅱ面21 4位覆土	1/3残存	器高4.0 口 径13.3 底径 6.0	①粗砂粒を含む。 ②軟質 ③灰白色 5Y7/1	底面右回転糸切り無調整。付高台制扉。体部は外 傾し、そのまま口縁部に至る。器面回転で調整。
P-111	土師器 台付甕	F区Ⅱ面21 4位覆土	2/3残存	器高16.8 口 径12.1 胴部 最大径14.0 脚部径8.8	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③にぶい 赤褐色2.5YR4/4	口縁部はやや丸みを帯びた口の字口縁で、端部直下 に1本の粗い凹線が走る。胴部は中位に最大径を 持ち、緩やかに外湾する。脚部は強く内湾して開 く。口縁部・胴部内外面横まで、胴部外面施磨り、 内面まで。
P-112	土師器 甕	F区Ⅱ面21 4位貯蔵穴 内	口縁部-胴 部上半片	残存高8.9 口径 (20.2)	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③にぶい 褐色7.5YR6/3	口縁部は丸みを帯びた口の字口縁で、端部は玉縁状 をなす。胴部は外湾する。口縁部内外面横まで、 胴部外面施磨り、内面横まで、輪縁あり。
P-113	瓦 平瓦	F区Ⅱ面21 4位カマド 内	一距欠損	長さ36.0 幅 24.1-30.0 厚さ1.3	①砂粒を含む。 ②硬質 ③灰黄色 N5/0	表面布目。裏面給縄文、小口寄り横方向の給縄文。 傾部の面取り2回。
P-114	瓦 平瓦	F区Ⅱ面21 4位カマド 内	一方の小口 と傾部を残 す小片	厚さ2.1	①白色 ②硬質 ③ 灰黄色 N5/0	表面布目、大部分残まで。裏面書文、裏まで。傾 部の面取り2回。

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-115	瓦 平瓦	F区Ⅱ面21 4住カマド 内	一方の小口 と側部を残 す小片	厚さ1.6	◎砂粒を含む。 ◎軟質 ◎淡黄色 5Y7/3	表面布目、一部黒なで。裏面黒文、黒なで。側部 の面取り1回。
P-116	瓦 平瓦	F区Ⅱ面21 4住カマド 内	一方の小口 と側部を残 す小片	厚さ2.0	◎砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 5Y8/2	表面布目。表面絡縄文、小口寄り横方向の絡縄文。 側部の面取り2回。
P-117	須恵器 坏	F区Ⅱ面21 5住覆土	1/3残存	器高3.9 口 径(12.8) 底径(5.8)	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰色5 Y6/1	底部右回転糸切り無調整。体部は外湾し、口縁部 は外反する。器面回転などで調整。
P-118	須恵器 高台付埴 輪	F区Ⅱ面21 6住南壁寄 り廻り方	2/3残存	器高4.5 口 径13.0 底径 6.6	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰色7. 5Y5/1	底部右回転糸切り無調整。付高台。体部は外傾し、 口縁部は外反し肥厚する。器面回転などで調整。
P-119	須恵器 高台付埴 輪	F区Ⅱ面21 6住南壁寄 り床面	2/3残存	残存高5.9 口径(17.2) 底径(9.1)	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎にぶい 黄褐色10YR7/3	底部右回転糸切り無調整。付高台斜縁。体部は外 傾し、口縁部はやや外反する。器面回転などで調整。 クロコ目明瞭。
P-120	須恵器 羽釜	F区Ⅱ面21 6住北壁寄 り廻り方	口縁部一側 部上半小片	残存高13.4 口径(22.3)	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰白色 N7/0	口縁部は内傾し、肩部は平坦。胴部ははやや外湾する。 踵は断面台形で斜め上方に屈曲する。
P-121	須恵器 羽釜	F区Ⅱ面21 6住覆土	口縁部一側 部上半小片	残存高11.3 口径(21.0)	◎砂粒を含む。 ◎軟質 ◎細灰色 7.5YR4/1	口縁部は内傾し、肩部は平坦。胴部ははやや外湾する。 踵は断面台形で水平に並び、器面回転などで調整。
P-122	須恵器 坏	F区Ⅱ面21 7住廻り方	1/4残存	器高3.7 口 径(12.2) 底径(8.1)	◎砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 N7/0	底部黒なで調整。体部は内湾し、そのまま口縁部 に至る。器面回転などで調整。
P-123	須恵器 高台付埴 輪	F区Ⅱ面21 7住北壁寄 り覆土	1/2残存	器高4.8 口 径(13.5) 底径(7.2)	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎にぶい 黄褐色10YR7/2	底部付高台。体部は内湾し、口縁部は外反する。 器面回転などで調整。クロコ目明瞭。
P-124	須恵器 坏	F区Ⅱ面21 9住南壁寄 り覆土	2/3残存	器高3.9 口 径13.8 底径 6.7	◎砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 2.5Y8/2	底部右回転糸切り無調整。体部は外傾し、口縁部 もそのまま外傾する。器面回転などで調整。
P-125	須恵器 坏	F区Ⅱ面22 1住カマド 内	2/3残存	器高3.6 口 径13.0 底径 6.0	◎砂粒を含む。 ◎軟質 ◎細灰色 10YR4/1	底部右回転糸切り無調整。体部は外傾し、口縁部 は強く外反し肥厚する。器面回転などで調整。
P-126	須恵器 高台付埴 輪	F区Ⅱ面22 1住カマド 内	2/3残存	器高4.6 口 径13.5 底径 8.4	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎淡黄色 5Y8/3	底部右回転糸切り無調整。体部は外傾、口縁部も そのまま外傾する。器面回転などで調整。
P-127	灰胎陶器 埴輪	F区Ⅱ面22 1住カマド 内	ほぼ完形	器高4.4 口 径14.3 底径 7.7	◎密、砂粒を含む。 ◎硬質 ◎灰白色 10Y7/1	底部回転などで調整。付高台は垂直に下る。体部は 外湾し、口縁部は外反し肩部は玉縁状をなす。器 面回転などで調整。施釉は底部内外を除く部分。釉 は淡緑色。
P-128	瓦 平瓦	F区Ⅱ面22 1住カマド 内	一方の小口 を残す小片	厚さ1.7	◎砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 7.5Y7/1	表面布目、一部黒なで。裏面絡縄文。
P-129	瓦 平瓦	F区Ⅱ面22 1住カマド 前床面	一方の小口 と側部を残 す小片	厚さ2.0	◎砂粒・小礫を含 む。◎硬質 ◎ 灰色N6/0	表面布目。裏面絡縄文、小口寄り横方向の絡縄文。 側部の面取り3回。
P-130	須恵器 高台付埴 輪	F区Ⅱ面22 2住貯蔵穴 内	1/3残存	器高5.2 口 径(13.0) 底径6.4	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎黄褐色 2.5Y7/2	底部回転糸切り後などで調整。付高台。体部ははや 外湾し、口縁部は外反し肥厚する。器面回転などで 調整。
P-131	土師器 甕	F区Ⅱ面22 3住カマド 内	口縁部一側 部上半小片	残存高10.7 口径(18.4)	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 橙色5YR6/3	口縁部はコの字口縁の崩れた形状で、口縁部上半 は外傾し、下半は内湾する。胴部は緩やかに外湾 する。口縁部内外面黒なで。胴部内外面黒なで、内 面黒なで。
P-132	瓦 平瓦	F区Ⅱ面22 3住カマド 廻り方	一方の小口 と側部を残 す小片	厚さ1.8	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰白色 10Y7/1	表面布目。裏面絡縄文、小口寄り横方向の絡縄文。 側部の面取り2回。
P-133	須恵器 坏	F区Ⅱ面22 4住貯蔵穴 内	2/3残存	器高3.6 口 径13.8 底径 6.5	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎ 灰色N5/0	底部右回転糸切り無調整。体部は外傾し、口縁部 もそのまま外傾し肥厚する。器面回転などで調整。 クロコ目明瞭。
P-134	須恵器 坏	F区Ⅱ面22 3住貯蔵穴	ほぼ完形	器高3.4 口 径13.3 底径	◎砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰白色	底部右回転糸切り無調整。体部は外傾し、口縁部 もそのまま外傾する。器面回転などで調整。クロコ

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	粘土・焼成・色調	特徴・その他
P-135	須恵器 坏	F区Ⅱ面22 4住貯蔵穴 内	2/3残存	9.2 器高3.6 口 径13.4 底径 7.0	2.5Y7/1 ◎粗砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎ 灰色7.5Y5/1	目明瞭。 底部右回転赤切り無調整。体部はわずかに外湾し、 口縁部は肥厚する。器面回転などで調整。ロクロ目 明瞭。
P-136	須恵器 坏	F区Ⅱ面22 3住貯蔵穴 内	2/3残存	器高3.7 口 径13.3 底径 6.4	◎粗砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰色7. 5Y6/1	底部右回転赤切り無調整。体部はわずかに外湾し、 口縁部はそのまま外傾する。器面回転などで調整。
P-137	須恵器 高台付埴	F区Ⅱ面22 3住貯蔵穴 内	1/2残存	器高4.2 口 径15.3 底径 (7.6)	◎粗砂粒・小礫を含む。 ◎軟質 ◎ 灰色N6/0	底部右回転赤切り無調整。付高台割離。体部は外 傾し、口縁部もそのまま外傾する。器面回転などで 調整。
P-138	須恵器 高台付埴	F区Ⅱ面22 3住貯蔵穴 内	完形	器高4.7 口 径14.6 底径 7.2	◎粗砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎ 灰色N6/0	底部右回転赤切り無調整。付高台。体部はやや外 湾し、口縁部は外反する。器面回転などで調整。
P-139	土師器 壺	F区Ⅱ面22 4住カマド 内	口縁部～胴 部上半小片	残存高5.8 口径(10.3)	◎細砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎ にぶい灰色7.5YR 7/4	口縁部はやや崩れたコの字口縁で、上半は外傾し 下半はやや内傾する。口縁部内外面横溝で。胴部 外面彫り、内面塗などで。
P-140	土師器 坏	F区Ⅱ面22 5住掘り方	1/4残存	器高2.9 口 径(11.8)	◎粗砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 棕色7.5YR6/4	口縁部はやや外反し、底体部は丸く浅い。口縁部 内外面横溝で。底体部外面彫り、内面などで調整。
P-141	瓦 平瓦	F区Ⅱ面22 7住掘り方	一方の小口 と側部を残 す小片	厚さ1.5	◎粗砂粒を含む。 ◎硬質 ◎灰色N 6/0	表面布目。裏面絡縄文、小口寄り横方向の絡縄文。 側部の面取り2回。
P-142	須恵器 坏	F区Ⅱ面22 8住南壁寄 り床面	1/2残存	器高4.5 口 径12.0 底径 6.5	◎粗砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎ 灰色N6/0	底部右回転赤切り無調整。体部は外湾し、口縁部 は外反する。器面回転などで調整。粗線作りである。
P-143	須恵器 高台付埴	F区Ⅱ面22 8住貯蔵穴 内	完形	残存高4.9 口径14.3 底 径7.2	◎粗砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰白色 N7/0	底部右回転赤切り無調整。付高台割離。体部は外 傾し、口縁部は外反する。器面回転などで調整。
P-144	須恵器 高台付埴	F区Ⅱ面22 8住覆土	1/2残存	器高3.6 口 径(12.3) 底径(7.0)	◎粗砂粒・小礫を含む。 ◎軟質 ◎ 灰白色N7/0	底部右回転赤切り無調整。付高台。体部は大きく 外傾し、口縁部もそのまま開く。器面回転などで調整。
P-145	須恵器 高台付埴	F区Ⅱ面22 8住カマド 内	2/3残存	器高4.0 口 径12.6 底径 6.4	◎粗砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎にぶい 黄褐色10YR7/2	底部右回転赤切り無調整。付高台。体部は大きく 外傾し、口縁部もそのまま開く。器面回転などで調整。 焼き詰めを生じている。
P-146	須恵器 高台付埴	F区Ⅱ面22 8住貯蔵穴 内	ほぼ完形	器高5.8 口 径15.3 底径 8.4	◎粗砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎ 灰色N6/0	底部右回転赤切り無調整。付高台。体部は外湾し 深く、口縁部はわずかに外反する。器面回転などで 調整。
P-147	瓦 平瓦	F区Ⅱ面22 8住カマド 前床面	一方の小口 と側部を残 す	厚さ2.4	◎粗、粗砂粒を含む。 ◎軟質 ◎ 暗灰色N3/0	表面布目。裏面絡縄文、小口寄り横方向の絡縄文。 側部の面取り2回。
P-148	須恵器 坏	F区Ⅱ面22 9住覆土	1/2残存	器高4.5 口 径14.0 底径 8.0	◎粗砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰色7. 5Y6/1	底部回転赤切りなどで調整。体部は外傾し、口縁 部はわずかに外反する。器面回転などで調整。
P-149	須恵器 高台付埴	F区Ⅱ面22 9住貯蔵穴 内	2/3残存	器高4.9 口 径14.2 底径 6.9	◎粗砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎にぶい 棕色5YR7/3	底部右回転赤切り後などで調整。付高台。体部は外 湾し、口縁部は外反する。器面回転などで調整。器 面横溝。
P-150	須恵器 坏	F区Ⅱ面23 1住覆土	2/3残存	器高3.4 口 径(13.2) 底径6.6	◎黒紫色色物粒を含む 径(13.2) 底 径6.6 ◎ 灰白色N7/0	底部右回転赤切り無調整。体部は外湾し、口縁部 は外反する。器面回転などで調整。
P-151	須恵器 坏	F区Ⅱ面23 1住南壁寄 り覆土	1/2残存	器高3.5 口 径13.6 底径 7.0	◎粗砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎灰色N 4/0	底部右回転赤切り無調整。体部はやや外湾し、口 縁部は外傾する。器面回転などで調整。
P-152	須恵器 坏	F区Ⅱ面23 1住覆土	1/2残存	器高3.4 口 径13.2 底径 6.7	◎粗砂粒を含む。 ◎軟質 ◎灰白色 7.5Y8/1	底部右回転赤切り無調整。体部はやや外湾し、口 縁部は外傾する。器面回転などで調整。
P-153	須恵器 坏	F区Ⅱ面23 1住覆土	2/3残存	器高3.7 口 径13.2 底径 7.2	◎粗砂粒を多く含む。 ◎軟質 ◎ 灰色N4/0	底部右回転赤切り無調整。体部は外傾し、口縁部 はそのまま開く。器面回転などで調整。ロクロ目明 瞭。
P-154	須恵器 坏	F区Ⅱ面23 1住覆土	2/3残存	器高5.8 口 径15.4 底径	◎粗砂粒・小礫を含む。 ◎軟質 ◎	底部回転赤切り後などで調整。体部は外傾し深く、 口縁部はそのまま開く。器面回転などで調整。体部

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	粘土・焼成・色調	特徴・その他
				5.4	灰白色N7/0	下端発掘り。
P-155	須恵器 坏	F区Ⅱ面23 1住覆土	2/3残存	器高5.1 口径13.7 底径6.1	①粗砂粒を含む。 ②軟質 ③にぶい 黄褐色10YR7/4	底部右回転糸切り無調整、付台。体部は外湧し、口縁部は外反する。器面回転で調整。
P-156	土師器 坏	F区Ⅱ面23 1住南壁寄り床面	ほぼ完形	器高2.3 口径11.6 底径8.5	①粗砂粒を多く含む。 ②良好 ③にぶい 褐色7.5YR7/4	底部は平底で、体部-口縁部は外傾する。口縁部内外面横なで、体部外面横なで、内面なで、底部外面発掘り、内面なで。
P-157	土師器 坏	F区Ⅱ面23 1住覆土	1/2残存	器高3.1 口径12.0 底径8.5	①粗砂粒を多く含む。 ②良好 ③にぶい 褐色7.5YR7/4	底部は平底で、体部-口縁部は外傾する。口縁部内外面横なで、体部外面横なで、内面なで、底部外面発掘り、内面なで。
P-158	土師器 坏	F区Ⅱ面23 1住覆土	1/3残存	器高(4.8) 口径(13.4) 底径(9.3)	①粗砂粒を多く含む。 ②良好 ③にぶい 褐色5YR7/4	底部はわずかに外湧する平底で、体部-口縁部は外傾する。口縁部内外面横なで、体部外面発掘り、内面なで。底部外面発掘り、内面なで。
P-159	須恵器 高台付埴	F区Ⅱ面23 9住西壁寄り床面	2/3残存	器高6.6 口径14.6 底径8.0	①粗砂粒を多く含む。 ②軟質 ③にぶい 褐色7.5YR6/3	底部右回転糸切り後なで調整。高台はやや高くハの字に開く。体部はわずかに外湧し、口縁部は外反し肥厚する。器面回転で調整。
P-160	土師器 壺	F区V面24 3住覆土	口縁部-胴部上半片	残存高11.4 口径(18.4)	①粗砂粒を多く含む。 ③不良 ④にぶい 黄褐色10YR6/4	口縁部は短く外傾し、頸部はくの字に屈曲する。胴部は強く外湧する。口縁部内外面横なで、胴部内外面横なで、内面輪軸みあり。
P-161	土師器 壺	F区V面24 3住覆土	口縁部-胴部上半小片	残存高7.5 口径(16.0)	①粗砂粒を多く含む。 ②良好 ③にぶい 黄褐色10YR7/2	口縁部は短く外傾し、頸部はくの字に屈曲する。胴部は外湧する。口縁部内外面横なで、胴部内外面横なで。
P-162	土師器 壺	F区V面24 3住覆土	口縁部-胴部上半小片	残存高3.6 口径(15.4)	①粗砂粒を多く含む。 ③不良 ④にぶい 黄褐色10YR7/2	口縁部は短く外傾し、頸部はくの字に屈曲する。口縁部内外面横なで、一部刷毛なで。胴部内外面横なで。
P-163	土師器 台付壺	F区V面24 3住覆土	胴部片	残存高5.4 胴部径8.8	①粗砂粒を多く含む。 ③不良 ④赤褐色 色2.5YR7/4	脚部はわずかに内湧して開き、頸部はやや外湧する。外面刷毛目、内面輪軸みあり。器面は火受けて荒れている。
P-164	土師器 壺 (ハレス文)	F区V面24 3住覆土	胴部上半小片	法量不明	①粗砂粒を多く含む。 ②良好 ③洗灰褐色 7.5YR8/4	棒状工具による直線文が施されている。外面磨き、内面横なで。
P-165	土師器 高坏(ハレス文)	F区V面24 3住覆土	坏部口縁小片	法量不明	①粗砂粒を含む。 ②良好 ③褐色 5YR7/8	内面に直線文と遠征文が施されている。器面やや摩滅。
P-166	土製品 勾玉	F区V面24 3住覆土	頸部片	残存長2.6 径1.3×1.4 重さ4g+	①粗砂粒を多く含む。 ③不良 ④にぶい 黄褐色6/4	指押えによる粗線な作りで、頸部に径0.4×0.9の楕円形の孔を持つ。
P-167	棒式土器 壺	F区V面23 4・244住覆土	口縁部-胴部片	残存高10.5 口径(19.1)	①粗砂粒を多く含む。 ③不良 ④明褐色 7.5YR7/1	口縁部は外傾し長い。口縁部は無文で、頸部に右回り等間隔止集状文が施されている。口縁部内外面刷毛なで。
P-168	棒式土器 壺	F区V面23 4・244住覆土	口縁部小片	法量不明	①粗砂粒を多く含む。 ③不良 ④にぶい 褐色7.5YR7/3	折り返し口縁で貼付文が付く。折り返し口縁部に溝槽状文が施されている。器面磨滅。
P-169	棒式土器 壺	F区V面23 4・244住覆土	口縁部小片	法量不明	①粗砂粒を多く含む。 ③不良 ④にぶい 褐色7.5YR7/3	折り返し口縁でやや外反する。折り返し口縁部から外面全体に溝槽状文が施されている。内面磨滅。
P-170	棒式土器 壺	F区V面23 4・244住覆土	口縁部小片	法量不明	①粗砂粒を含む。 ②良好 ③暗灰色 N3/0	折り返し口縁で上下間隔に刻み目が施されている。内外面発掘り。
P-171	棒式土器 壺	F区V面23 4・244住覆土	口縁部小片	法量不明	①粗砂粒を多く含む。 ②良好 ③にぶい 褐色7.5YR7/4	多段口縁で刻み目が施されている。
P-172	棒式土器 壺	F区V面23 4・244住覆土	胴部-胴部上半小片	法量不明	①粗砂粒を多く含む。 ③不良 ④灰黄褐色 10YR5/2	頸部に10条1単位の右回り等間隔止集状文が施され、胴部上半には溝槽状文が施されている。内面磨滅。
P-173	赤井戸式土器 壺	F区V面23 4・244住覆土	胴部小片	法量不明	①粗砂粒を含む。 ②良好 ③黒色 10YR2/1	R.L縄文が横位に施されている。
P-174	赤井戸式土器 壺	F区V面23 4・244住覆土	胴部小片	法量不明	①粗砂粒を多く含む。 ③不良 ④黄灰色 2.5Y6/1	R.L縄文が横位に施されている。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-175	赤井戸式土器 罍	F区V面23 4・244住覆 土	胴部小片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎黄灰色 2.5Y4/1	R.L.縄文が横断に施されている。
P-176	土製品 紡錘車	F区V面23 4・244住覆 土	1/2残存	径(5.0) 厚さ1.5 重 さ20g+	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色10YR7/3	断面は長方形でなで仕上げされている。
P-177	棒式土器 罍	F区V面24 5住覆土	口縁部-頸 部片	残存高10.0 口径(24.0)	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎褐色7. 5YR6/6	口縁部上半は外湾し下半は外傾する。頸部は緩やかにくびれる。口縁部上半に帯状波状文を1条施し、頸部に10条1単位の右回り2連止帯状文を2段に施す。内外面磨き。
P-178	棒式土器 罍	F区V面24 5住覆土	胴部-胴部 上半片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎淡黄褐色 7.5YR8/4	頸部が緩やかにくびれる器形で、胴部に7条1単位の右回り等間隔止帯状文を施し、胴部上半に帯状波状文を施す。器面磨き。
P-179	棒式土器 高坏	F区V面24 6住柱穴内	ほぼ定形	器高10.6 坏 部径12.4 脚 部径6.6	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄褐色10YR7/2	坏部は外傾して急角度で開き、口縁部は水平に延びる。脚部はわずかに内湾して短く開く。器面内外面磨き。坏部内湾わずかに赤色塗彩痕あり。
P-180	棒式土器 罍	F区V面25 1住覆土	口縁部-胴 部上半片	残存高5.8 口径11.5	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 褐色7.5YR6/3	口縁部は外傾し、頸部は緩やかに内湾する。胴部外湾。胴部に8条1単位の右回り2連止帯状文を施し、口縁部と胴部上半に帯状波状文を施す。内面磨き。
P-181	棒式土器 罍	F区V面25 1住覆土	口縁部-胴 部上半片	残存高7.4 口径15.2	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎褐色7. 5YR4/3	折り返し口縁で口縁部は緩やかに外反し、頸部は緩やかに内湾する。帯状波状文を折り返し口縁部と口縁部に3段、胴部上半に施す。胴部に8条1単位の右回り2・3連止帯状文を施す。内面磨き。
P-182	棒式土器 罍	F区V面25 1住覆土	口縁部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎褐色2. 5YR7/6	2段の折り返し口縁で、外反して開く器形と考えられる。折り返し口縁部には刻み目がある。内外面磨き。
P-183	棒式土器 高坏	F区V面25 1住覆土	脚部片	残存高9.8 脚部径8.3	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 褐色7.5YR6/3	直線的に開くやや長い脚部で、裾部は平坦。内面磨き。内面磨き。器部外周の一部に赤色塗彩痕あり。
P-184	棒式土器 罍	F区V面25 1住覆土	口縁部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎にぶい 褐色7.5YR6/4	折り返し口縁で、折り返し口縁部と口縁部に帯状波状文を施す。内面磨き。
P-185	棒式土器 罍	F区V面25 1住覆土	口縁部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎にぶい 赤褐色5YR5/4	折り返し口縁で、折り返し口縁部と口縁部に帯状波状文を施す。器面や厚成。
P-186	棒式土器 罍	F区V面25 1住覆土	口縁部-胴 部小片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄褐色10YR4/3	単口縁で、口縁部に帯状波状文を頸部に帯状文を施す。内面磨き。
P-187	棒式土器 台付罍	F区V面25 1住覆土	口縁部-胴 部上半片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 褐色7.5YR6/3	口縁部は外傾して開きボタン状貼付文が付く。頸部はやや強く内湾し、胴部は大きく外湾する。口縁部と胴部上半に帯状波状文を施し、頸部に9・10条1単位の右回り2連止帯状文を施す。内面磨き。
P-188	棒式土器	F区V面25 2住覆土	口縁部-胴 部残存	残存高39.2 口径23.0 胴 部最大径28.1	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰褐色 7.5YR6/2	口縁部はやや外傾して開き胴部は内反する。頸部は緩やかに内湾し、胴部は緩やかに外湾し長筒形をなす。口縁部は無文で、頸部に10条1単位の右回り2連止帯状文を2段に配す。胴部上半には帯状波状文を4段施す。器面内外面磨き。
P-189	棒式土器 台付罍	F区V面25 2住覆土	胴部中位一 脚基部残存	残存高14.4 胴部最大径(22.6)	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎暗赤褐色 2.5YR3/3	胴部上半で最大径を持つ器形と考えられ、上半で強く屈曲して外湾し、下半は脚基部に向って直線的に内傾する。胴部最大部に刺突されたボタン状貼付文があり、上半に帯状波状文を施す。器面内外面磨き。
P-190	棒式土器 罍	F区V面25 2住覆土	口縁部下半 -胴部上半 片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰黄褐色 10YR4/2	緩やかにくびれる胴部で、10条1単位の右回り等間隔止帯状文を施す。口縁部と胴部上半には帯状波状文を施す。器面内外面磨き。
P-191	棒式土器 罍	F区V面25 2住覆土	口縁部下半 -胴部上半 片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎にぶい 褐色7.5YR6/3	緩やかにくびれる胴部で、9条1単位の右回り2連止帯状文を施す。口縁部下半無文。胴部上半帯状波状文。口縁部外周磨き。内面磨き。

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特 徴 ・ そ の 他
P-192	棒式土器 壺	F区V面25 6住覆土	口縁部下半 -胴部上半片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄褐色10YR7/3	頸部は横やかにくびれ、胴部は外湾する。口縁部 下半は無文。頸部に9条1単位の右回り等間隔止 縷状文を施し、胴部上半に帯状波状文を施す。内 外面磨たて。
P-193	棒式土器 壺	F区V面25 4住覆土	胴部上半片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR6/4	3段の帯状波状文を施す。器面内外面磨たて。
P-194	土師器 壺	F区V面25 4住覆土	口縁部片	残存高2.9 口径(17.7)	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 赤褐色2.5YR5/4	外傾して開く器形で肩部は平坦。内外面とも刷毛 なで。
P-195	土師器 S字状口縁 台付壺	F区V面25 4住覆土	胴部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良	外面斜め方向の刷毛目、内面刷毛目、なで調整。
P-196	土師器 台付壺	F区V面25 4住覆土	胴部片	残存高4.4 胴部径(9.6)	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR7/3	直線的にハの字に短く開く。外面脚部に刷毛目、 内面刷毛目で、指押え。
P-197	棒式土器 壺	F区V面25 6住覆土	胴部上半片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰白色 5Y8/2	上半は帯状波状文、下半は沈線を1条流し直下 に断面文を配し、内部に施状工具による斜格子文 を施す。外面刷毛なで後磨き、内面刷毛なで。
P-198	棒式土器 壺	F区V面25 6住覆土	口縁部下半 -胴部中位 片	残存高13.8 胴部最大径(25.6)	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎淡褐色 2.5YR7/3	頸部は横やかにくびれ、胴部は外湾する。口縁部 下半と胴部上半に帯状波状文を施し、頸部に9条 1単位の左回り等間隔止縷状文を2段に施す。器 面磨たて。
P-199	棒式土器 壺	F区V面25 6住覆土	胴部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰白色 2.5Y8/2	頸部に施状工具の沈線によるT字文。外面刷毛な で。
P-200	竜見町式土 器 壺	F区V面25 7住覆土	頸部-胴部 片	残存高25.5 胴部最大径(27.2)	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎淡褐色 5Y6/3	頸部は大きく内湾し細く、胴部は中位からやや下 半に最大径を持つ器形と考えられ、狭く外湾する。 頸部に平行沈線、胴部中位上半に3条の平行沈線 を施し、胴部最大径にかけて縄文LR施文後、沈 線による1条の山形文と重連弧文を施す。外面刷 毛の磨き、内面器面刷毛。
P-201	竜見町式土 器 壺	F区V面25 7住覆土	口縁部-胴 部上半片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄褐色10YR6/3	口縁部が外反する器形で、肩部に縄文を施す。胴 部上半に縦位の羽状文、口縁部内外面なで。胴部 外面刷毛なで、内面磨き。
P-202	竜見町式土 器 壺	F区V面25 7住覆土	胴部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄褐色10YR6/3	LR縄文を施文後、沈線による重連弧文を施す。 器面磨たて。
P-203	竜見町式土 器 壺	F区V面25 7住覆土	胴部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰黄褐色 10YR5/2	上半に平行沈線が走り、下半はLR縄文施文後、 沈線による山形文と重連弧文を施す。器面やや磨 たて。
P-204	竜見町式土 器 壺	F区V面25 7住部内	ほぼ完形	器高16.6 口 径14.4 底径 6.1	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色10YR7/3	口縁部は外反し頸部は横やかに内湾する。胴部は 横やかに外湾し上半に最大径を持つ。口縁部-胴 部上半帯状波状文。器面磨たて。外面縦方向、内面 横方向の磨き。
P-205	棒式土器 壺	F区V面25 7住覆土	口縁部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰褐色 5YR6/2	口縁部上半はわずかに内反する。全面に帯状波状 文を施す。器面磨たて。
P-206	棒式土器 壺	F区V面25 7住覆土	頸部-胴部 上半片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色5YR7/4	頸部に右回り2連止縷状文、直下に帯状波状文 を施す。器面やや磨たて。
P-207	棒式土器 壺	F区V面25 7住覆土	頸部-胴部 上半片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰白色 7.5YR8/1	頸部に右回り等間隔止縷状文、直下に帯状波状 文を1条施す。
P-208	棒式土器 壺	F区V面25 7住覆土	口縁部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰色 4Y/1	外反して開く。肩部に刷毛目。
P-209	土師器 壺	F区V面24 8住柱穴内	口縁部-胴 部上半片残存	残存高7.9 口径19.8 胴 部径10.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎褐色 5YR6/6	口縁部下半は垂直に延び、上半は外傾して大きく 開き垂下する棒を持つ。頸部には刷毛目を持つ凸 帯が走る。胴部上半は斜めに開く。口縁部外 面刷毛目、内面磨たて。胴部外面刷毛なで後磨た

遺物観察表

遺物番号	種加・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	粘土・焼成・色調	特徴・その他
P-210	樽式土器 甕	F区V面25 8住覆土	頸部～底部 残存	残存高22.8 胴部最大径20.3 底径7.5	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色10YR6/2	で、内面磨面。 頸部は内湾し、胴部は上半に最大径を持ち縦やかに外湾する。胴部無文。胴部上半横線状文。内外面斜め方向の刷毛文。
P-211	樽式土器 甕	F区V面25 8住覆土	口縁部～胴部 上半片	残存高7.7 口径(10.8)	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部は外反し頸部は内湾。胴部は縦やかに外湾する。口縁部無文。胴部は8条1単位の右回り等間隔止塵状文。胴部上半横線状文。内面磨面。
P-212	樽式土器 甕	F区V面25 8住覆土	口縁部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい黄褐色10YR7/3	端部欠損。外面全面に横線状文。内面磨面。
P-213	樽式土器 甕	F区V面26 0住覆土	胴部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい褐色7.5YR6/4	外面全面に横線状文。器面磨面。
P-214	土師器 S字状口縁 台付甕	F区V面26 0住覆土	胴部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい黄褐色10YR7/2	外面刷毛目。内面なで。
P-215	樽式土器 甕	F区V面26 1住南壁寄り 床面	ほぼ定形	母高32.8 口径16.8 胴部最大径24.2 底径8.8	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色10YR6/2	口縁部は外反し頸部は内湾。胴部は中位に最大径を持ち縦やかに外湾する。口縁部と胴部上半に横線状文。胴部に8条1単位の右回り等間隔止塵状文を施す。外面縦方向の磨面、内面横方向の磨面。
P-216	樽式土器 甕	F区V面26 1住覆土	口縁部～胴部 上半片	残存高7.5 口径(12.9)	◎粗砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい黄色2.5Y6/3	口縁部は外傾して向き、頸部はくの字に屈曲する。口縁部は無文で2段の輪縁のみが明確に走る。胴部には7条以上1単位の右回り等間隔止塵状文。胴部上半は横線状文。器面磨面。
P-217	土師器 ひさご壺	F区V面26 1住覆土	口縁部片	残存高4.3 口径(7.4)	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい黄褐色10YR7/3	やや内反して立ち上る。外面刷毛文で後角なで。内面横なで。
P-218	樽式土器 高坏	F区V面26 1住覆土	坏部～脚基 部残存	残存高6.8 坏部径13.8	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10R5/5	坏部は内湾して開く。脚基部は細い。坏部内外面、脚基部外面磨面を赤色塗彩。
P-219	樽式土器 甕	F区V面26 2住覆土	頸部～胴部 上半片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい黄褐色10YR5/3	胴部右回り2連止塵状文。胴部上半横線状文。内面横方向の磨面。
P-220	樽式土器 甕	F区V面26 2住覆土	頸部～胴部 上半片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰黄褐色10YR6/2	胴部右回り等間隔止塵状文。胴部上半横線状文。器面磨面。
P-221	土製品 勾玉	F区V面26 2住覆土	胴部片	残存長3.0 径1.5 重さ7g+	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰白色2.5Y8/1	指押えなで仕上げの楕圓な合作りで、胴部に0.4×0.6の楕圓形の孔を持つ。
P-222	縄文土器 深鉢	E区V面2 河上層	突起部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎明赤褐色5YR5/8	円盤状突起である。おそらく、波状口縁部に付されるものと思われる。円盤状の粘土板を2枚合せ、中位の孔は貫孔し、突起周縁を短沈線・三叉文で飾る。中層中葉末焼町型(焼町土器)か。
P-223	縄文土器 深鉢	E区V面2 ～2河中等	口縁部～体部 上半片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰黄色2.5Y6/2	口縁部稍凹状。口唇部は強く外反する。区画上位は隆起で下位は凹線によって区画される。体部は腹位条線が施される。区画内縄文はR.L光澤施文。加曾利EⅢ式
P-224	縄文土器 深鉢	E区V面2 河上層	体部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎淡黄色2.5Y8/3	数条の縦位沈線と縄文施文からなる体部破片。沈線文は弧状になる傾向も見せる。R.L細縄文を縦位に光位に光澤施文する。堀之内Ⅰ式
P-225	縄文土器 深鉢	E区V面2 ～2河中等	口縁部～体部 上半片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎褐色10YR4/1	内湾する口縁部で内縁の在り方からおそらく波状口縁を呈するものと思われる。口唇部に刺突文が連続し直下に沈線が沿う。体部上半に沈線による逆U字状モチーフが配される。横位沈線下はR.L横位・縦位施文による矢羽状構成が見られる。U字状区画内は磨面部となる。加曾利EⅣ式
P-226	縄文土器 深鉢	E区V面2 ～2河下層	口縁部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰赤オリーブ色5Y5/2	口縁部は内湾し、沈線が沿う。以下幅広の無文部を設ける。堀之内Ⅰ式か。
P-227	縄文土器	E区V面2	口縁部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。	器面磨面する。口縁部に沿う2条の沈線と垂下沈

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
	深鉢	- 2 河内層			赤不具 ⑤暗灰黄色 2.5Y5/2	縁が収束する。縄文はR1縦位施文、裾之内2式か。
P-228	縄文土器 深鉢	E区V面2 - 1 河内層	口縁部片	法量不明	⑥砂粒を多く含む。 赤不具 ⑤にぶい 黄褐色10YR7/3	放射口縁部破片。瘤状付付文を中核に三叉状印刷、沈線が施される。無筋1を施文する。安行3a式
P-229	縄文土器 深鉢	E区V面2 - 2 河内層	突起部片	法量不明	⑥砂粒を多く含む。 赤不具 ⑤暗灰黄色 2.5Y5/1	中央の円柱状突起。円孔を3箇所に設け凹縁が口縁部に沿う。地文の縄文はR1斜位施文。時期不明。加曾野E型式であろうか。
P-230	土師器 器台	E区V面2 - 1 河内層	器受部残存	残存高2.0 口径8.6	⑥細砂粒を含む。 赤良好 ⑤褐色	器受部は短く弱い外反を持ち外傾する。内面、丁車な磨き。外面、外反部は横なで、裾下部は外方への磨き。
P-231	土師器 器台	E区V面2 - 1 河内層	器受部破片	残存高1.5	⑥細砂粒を含む。 赤良好 ⑤褐色	器受部外面に横をもつ。内面、磨き。外面、磨き。
P-232	土師器 器台	E区V面2 - 1 河内層	器受部残存	残存高3.5 口径10.0	⑥砂粒を含む。 赤良好 ⑤褐色	器受部弱く外反するが端部は内傾する。内面、口縁部横なで、器受部なで、中心孔の周辺部による調整痕。外面、口縁部横なで、器受部施文工具により履方向の粗いなで。
P-233	土師器 器台	E区V面2 - 1 河内層	器受部残存	残存高4.0 口径9.8	⑥砂粒を多く含む。 赤良好 ⑤淡黄褐色	器受部弱く外反し、端部は内傾する。内面、口縁部横なで、下部なで、外面、口縁部横なで、下部施文工具による粗いなで、屈曲部には施文工具による調整痕。
P-234	土師器 器台 (高 坏?)	E区V面2 - 1 河内層	脚部残存	残存高5.2	⑥細砂粒を含む。 赤良好 ⑤淡黄色	脚部ハの字状に開き、中段に貼り付け部をもち、施文工具により磨きが入る。形み部の下は欠損しているが孔が2ヶ所確認され、3孔を穿つものと考えられる。内面、なで、施文工具によるなで、施文痕。外面、縦方向の磨き。
P-235	土師器 器台	E区V面2 - 1 河内層	器受部2/3 残存	残存高5.2 口径8.7	⑥砂粒を多く含む。 赤良好 ⑤明赤褐色	口縁部弱く外反し外傾する。端部は面をもつ。脚部の孔は3孔が確認される。内面、磨き。外面、刷毛状工具後、磨き。脚部縦方向の磨き。
P-236	土師器 器台	E区V面2 - 1 河内層	脚部1/2欠 損	残存高6.4 口径7.2	⑥細砂粒を含む。 赤良好 ⑤明赤褐色	器受部弱く内湾し外傾する。脚部ハの字状に開く。内面、器受部磨き。中心孔施文工具による調整痕。脚部横なで、底面磨き。外面、磨き。
P-237	土師器 器台	E区V面2 - 1 河内層	器受部1/3 欠損	器高7.5 口径 7.0 底径 8.7	⑥砂粒を多く含む。 赤良好 ⑤灰褐色	器受部外傾し端部はつまみ上げたように屈曲する。端部は面をもたない。脚は端部内湾する。脚は器受部径より開く。脚部に4孔。内面、器受部摩擦するが磨き、脚部刷毛目。外面、磨き。
P-238	土師器 器台	E区V面2 - 1 河内層	脚部2/3残 存	残存高8.2 底径10.2	⑥細砂粒を含む。 赤良好 ⑤にぶい 褐色	脚はやや外湾きみに開く。3孔。内面、刷毛目後なで、外面、土磨磨き。下部刷毛調整後なで、磨きなで。
P-239	土師器 器台	E区V面2 - 1 河内層	脚部残存	残存高7.0 底径12.0	⑥砂粒を多く含む。 赤良好 ⑤暗灰色	脚ハの字状に開く。孔は2段で計6孔。内面、刷毛目。外面、刷毛・調整後施磨き。
P-240	土師器 器台	E区V面2 河上層	1/3残存	器高9.3 口径 8.2 底径 11.1	⑥砂粒を多く含む。 赤良好 ⑤にぶい 褐色	器受部強く外傾し、口縁部つまみあげ上方を向く。脚部はハの字に開き口径より広がる。脚部の孔は3孔。内面、器受部刺落部広いなで、脚部なで、外面、器受部なで。脚部なで後磨き。
P-241	土師器 器台	E区V面2 河上層	1/2残存	器高8.9 口径 6.4 底径 10.0	⑥砂粒を多く含む。 赤良好 ⑤にぶい 赤褐色	器受部直線状に外傾し、端部に平直面をもつ。脚部ハの字状に開く。脚部孔は3孔、中心孔はやや狭い。内面、磨き。脚部なで、磨きなで、外面、器受部・脚部磨き、脚部横なで。
P-242	土師器 器台	E区V面2 - 1 河内層	脚部1/2欠 損	器高8.3 口径 8.7 底径 5.6 中心孔 径1.3	⑥細砂粒を含む。 赤良好 ⑤にぶい 褐色	器受部外傾し、脚部弱く外湾きみに開く。底径が口径より広い。脚部孔は4孔。内面、器受部なで、脚部なで、脚部は横なで、外面、器受部施文工具によるなで、脚部磨き。裾部は横なで。
P-243	土師器 器台	E区V面2 - 1 河内層	1/2残存	器高8.6 口径 10.2 底径 13.9 中心孔 径1.3	⑥細砂粒を含む。 赤良好 ⑤淡黄褐色	器受部弱く内湾しながら外傾し、端部上方に弱く屈曲する。脚部は弱く外反しながら開く。径は口径より広い。脚部孔は3孔。内面、器受部磨き、脚部磨き。外面、器受部・脚部磨き。
P-244	土師器 器台	E区V面2 - 1 河内層	器受部一部 胴下半部欠 損	残存高6.4 口径14.0 中 心孔径1.3	⑥細砂粒を多く含む。 赤良好 ⑤ 明暗灰色	器受部大きく開き外傾する。端部は幅広く平直面をもつ。胴下半部は欠損するが広く開くものと思われる。脚部孔は1孔が断面で確認される。内面、器受部磨き。脚部なで、外面、器受部磨き。

遺物観察表

遺物番号	種類・器様	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-245	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	坏部破片	残存高1.8	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤褐色	高部横なで、脚部なで。 坏下部に稜をもつ。内面底部に円形の凹面をもつ。内外面ともに磨磨き。
P-246	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	脚部破片	残存高2.5 底径18.2	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	坏の大きく開く小型高坏と思われる。内面、横なで。外面、磨磨き。
P-247	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	脚部破片	残存高3.2 底径18.0	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤褐色	坏の大きく開く小型高坏と思われる。断面で1孔確認。内面、横なで。外面、磨磨き。
P-248	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	脚部破片	残存高3.0 底径24.2	◎細砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎ ◎にぶい黄褐色	坏の大きく開く小型高坏と思われる。残存部に3孔確認。底部に斜の面にをもつ。内面、脚部横なで、裏面、縦部横なで。外面、磨磨き。
P-249	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	脚部残存	残存高4.6 底径8.2	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい褐色	脚部部で外反ぎみに開く。内面、裏なで、なで、縦部横なで。外面、全面縦方向の磨磨き、磨き最上位に1糸の工具による弱い凹線痕。
P-250	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	坏下部脚上 部残存	残存高5.6	◎細砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎ ◎灰褐色	坏下部に明瞭な稜をもち外傾して立ち上る。内面、坏部なで、脚部なで。外面、坏部なで、脚部磨磨き。
P-251	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	坏部1/2残 存	残存高4.6 口径10.4	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰褐色	坏下部に弱い稜をもつ。内面、磨磨き。外面、なで。
P-252	土師器 高坏	E区V面2 河上層	坏下部脚上 部残存	残存高7.1	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎浅黄褐色	坏下部に稜をもつ。坏内面底部は平面面をもつ。脚部孔3孔。内面、坏部磨磨き、脚部磨磨き。外面、坏部磨磨き。
P-253	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	坏部残存	残存高6.5 口径8.8	◎細砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎ ◎明灰褐色	坏下部に稜をもつ。孔は断面に3孔。器面はかなりあれている。内面、坏部なで、磨磨き、脚部なで。外面、坏部なで、脚部磨磨き。
P-254	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	坏下部脚上 部残存	残存高6.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい褐色	坏下部に稜をもつ。脚部断面に4孔確認。内面底面に円形のくぼみがある。内面、坏部丁寧なで、脚部磨磨き。外面、坏部磨磨き、脚部磨磨き。
P-255	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	脚部残存	残存高8.0	◎細砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎ ◎にぶい黄褐色	脚や外反ぎみに開く。脚部に2段6孔。内面、裏なで。外面、磨磨き。
P-256	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	脚部残存	残存高8.0 底径10.8	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい黄褐色	脚はほぼハの字状に開く。脚部3孔。内面、裏なで、なで、縦部横なで。外面、裏なで後磨磨き。
P-257	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	脚部残存	残存高5.4 底径12.4	◎細砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎ ◎にぶい褐色	脚部外反ぎみに開く。脚部に3孔。内面、裏なで、坏部との接合部磨磨き。外面、裏なで後、磨磨き。
P-258	土師器 器台	E区V面2 河上層	脚部残存	残存高7.3 底径13.1	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	脚部中段から下内湾ぎみに開く。脚部2段で6孔。内面、裏なで。外面、磨磨き、裏なで。
P-259	土師器 器台	E区V面2 -1河中层	器8/3 器台	器8.3 口径 9.4 底径 12.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎明褐色	器受部、脚部ハの字状に開く。底径が口径より広い。脚部孔7孔。内面、器受部磨磨き、脚部磨磨き。外面、器受部磨磨き、脚部磨磨き。外面、磨磨き、器受部磨磨き、脚部磨磨き。
P-260	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	1/2残存	残存高8.8 口径11.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	坏部内湾ぎみに立ち上る。脚部中段以下は外反ぎみに開くと思われる。脚部孔3孔。内外面磨磨き。
P-261	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	坏部1/3残 存	残存高8.2 口径8.2	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい黄褐色	口縁部弱く内湾する。坏下部に稜をもつ。脚は広く開くと考えられる。脚部の孔は断面で2孔確認されたがその配置から4孔が想定される。内面、坏部粗い磨磨き、脚部なで。外面、裏なで、なで状の磨磨き、脚部磨磨き。
P-262	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	脚部4/5残 存	残存高9.3 底径12.3	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰褐色	脚部下段から内湾ぎみに開く。坏部底面はほぼ平面面をなし、円形のくぼみの痕跡。内面、坏部磨磨き、脚部磨磨き。外面、縦部横なで。外面、脚部磨磨きで後磨磨き。
P-263	土師器 高坏	E区V面2 河上層	坏部1/3残 存	残存高6.4 口径15.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎明褐色	口縁部弱く内湾する。下部に弱い稜をもつ。内外面ともに摩滅著しい。内面底部に円形状のくぼみがある。内外面裏調整後磨磨き。
P-264	土師器 高坏	E区V面2 -1河中层	脚部4/5残 存	残存高6.4 底径17.0	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい褐色	脚部縦に向かい弱く外反しながら開く。3孔。外面、裏調整後磨磨き。内面、上部は指頭痕状調整、縦部磨磨き。
P-265	土師器	E区V面2	脚部3/5残 存	残存高9.6	◎細砂粒を含む。	脚部縦に向かい弱く外反しながら開く。孔は上下

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	粘土・焼成・色調	特徴・その他
	高坏	-1河中華	存	底径17.2	◎良好 ◎暗赤褐色	2段に並び6孔。外面、亀調整後磨き。内面、亀調整。
P-296	土師器 高坏	E区V面2 -1河中華	1/3残存 残存高11.0 口径19.4		◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎浅黄褐色	口縁部弱く内湾しみに立ち上り、坏下部に明瞭な稜をもつ。頸部には3孔、下半半指。外面、磨き。口縁部には山形文、直線文、列点文。内面、坏部磨き、頸部亀調整、坏内面底部に円形のくぼみあり。
P-297	土師器 壺 (二重口縁)	E区V面2 -1河中華	口縁部破片 残存高5.7 口径17.0		◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎淡褐色	口縁部後をなす。外面、上段横なで、下段刷毛調整後磨き。内面、上段磨き、下段刷毛調整後磨き。
P-298	土師器 壺 (二重口縁)	E区V面2 -1河中華	口縁部破片 残存高5.3 口径10.0		◎小石を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	二重口縁部上段厚く下方へ下る。外面、亀調整。内面、亀調整後磨き。
P-299	土師器 壺 (二重口縁)	E区V面2 -1河中華	頸部全周 残存高5.9		◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	頸部上位に向かい、やや径が広がる二重口縁。外面、亀調整後磨き。内面、亀調整後磨き。
P-270	土師器 壺 (二重口縁)	E区V面2 -1河中華	口縁部1/2 残存 残存高2.9 口径13.0		◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	外方へ開く二重口縁。上段横なで、下段亀調整後横なで。内面、亀調整後磨き。
P-271	土師器 壺 (二重口縁)	E区V面2 -1河中華	口縁部1/2 残存 残存高5.8 口径22.2		◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎浅黄褐色	口縁部外反する。外面、口縁部亀調整後磨き、頸部刷毛調整後磨き。
P-272	土師器 壺 (二重口縁)	E区V面2 -1河中華	口縁部ほぼ 残存 残存高8.5 口径22.2		◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎淡赤褐色	口縁部外反する。外面、亀調整後横なで。内面、亀調整後横なで、磨き。
P-273	土師器 ひさご壺	E区V面2 -1河中華	口縁部残存 残存高5.9 口径8.0		◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤灰色	口縁部内湾する。口縁部内面に凹線状にくぼみ。外面、なで、口縁部曲線状工具による山形文、列点文が直線文の間に施される。内面、亀なで。
P-274	土師器 ひさご壺	E区V面2 -1河中華	3/4残存 残存高9.8 口径8.6		◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁部弱く内湾する。口縁部内面に面取り状に内傾する。頸部に凸帯巡る。外面、亀調整後磨き、なで。内面、亀調整、亀なで。
P-275	土師器 壺	E区V面2 -1河中華	口縁部破片 残存高8.0 口径17.4		◎細砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎明褐色	口縁部折り返し外傾する。頸部凸帯状に高る。外面、亀調整後横なで、磨き。内面、亀調整後磨き。
P-276	土師器 壺	E区V面2 -1河中華	口縁部全周 残存高4.8 口径15.0		◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	口縁上平外反する。外面口縁上平横なで、頸部亀調整。口縁下平は粗い調整。内面、亀調整後磨き、頸部亀調整。
P-277	土師器 壺	E区V面2 -1河中華	口縁部全周 残存高6.2 口径17.2		◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁部折り返し部大部分欠落。外面、亀調整後横なで、磨き。内面、亀調整後横なで、磨き。
P-278	土師器 壺	E区V面2 -1河中華	口縁部全周 残存高6.3 口径14.0		◎細砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁部には直線的に外傾する。内外面ともに亀調整後磨き。
P-279	土師器 壺	E区V面2 -1河中華	口縁部1/2 残存 残存高5.5 口径16.0		◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎明褐色	口縁上半部弱く外反する。外面、口縁上半部横なで、下半部刷毛目。内面刷毛目。
P-280	土師器 壺	E区V面2 -1河中華	口縁部全周 残存高5.2 口径12.4		◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎淡褐色	口縁部弱く外反する。内外面ともに粗い亀調整後横なで、磨き。
P-282	土師器 壺	E区V面2 -1河中華	口縁部-胴部2/3残存 残存高11.0 口径14.0		◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎明赤褐色	口縁部弱く外反し、腰部内側へ屈曲する。頸部に貼付痕が凸部を作る。外面、口縁部亀調整後磨き、胴部亀調整後磨き、貼付部は腹に寛により調整。内面、口縁部-胴部亀調整後磨き、胴部亀なで。
P-284	土師器 壺	E区V面2 -1河中華	ほぼ完成 器高11.4 口径6.5 底径4.8 胴部最大径12.0		◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁部短く外反する。外面、口縁部亀調整後横なで、胴部亀調整後、磨き。内面、口縁部-胴部磨き、胴部亀なで。
P-285	土師器 壺	E区V面2 -1河中華	胴部3/4残存 残存高15.2 底径4.6 胴部最大径16.0		◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	最大径下半部にある。外面、磨後磨き。内面、底部刷毛、上胴部亀なで。
P-286	土師器 壺	E区V面2 -1河下層	口縁部破片 残存高5.0 口径16.0		◎細砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎	頸部強く屈曲する。外面、口縁部横なで、亀なで。内面、亀なで。

遺物観察表

遺物番号	種類・器様	出土位置	残存状態	計測値(cm)	粘土・焼成・色調	特 徴・その他
P-287	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部破片	残存高4.2 口径17.0	にぶい黄褐色 赤良好 赤灰褐色	胴部横やかに外傾し、口縁部外反する。外面、などで、刷毛目。内面、など。
P-288	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部破片	残存高4.5 口径16.0	赤良好 赤灰褐色	胴部の字状に外傾する。外面、刷毛目。内面、刷毛目。
P-289	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部破片	残存高4.0 口径16.0	赤良好 赤明赤灰色	胴部の字状に外傾する。口縁部凹面をもつ。外面、などで、刷毛目。内面、口縁部などで、胴部刷毛目。
P-290	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部破片	残存高3.7 口径15.0	赤良好 赤淡赤褐色	胴部の字状を呈す。外面、口縁部などで、刷毛目。内面、口縁部刷毛目後横などで、胴部など。
P-291	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部破片	残存高5.1 口径13.1	赤良好 赤灰褐色	胴部の字を呈す。外面、口縁部横などで、胴部刷毛目。内面、重など。
P-292	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部破片	残存高5.2 口径18.8	赤良好 赤にぶい 褐色	胴部の字を呈す。口縁部部平坦面をもつ。外面、口縁部重などで、胴部刷毛目。内面、口縁部刷毛目、胴部重など。
P-293	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部破片	残存高5.5 口径18.8	赤良好 赤灰褐色	胴部の字を呈し、口縁部外反する。外面、口縁部横などで、胴部刷毛目。内面、口縁部磨き状の亀調整、内面など。
P-294	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部破片	残存高4.0 口径14.0	赤良好 赤灰褐色	口縁部部内面薄く肥厚する。外面、口縁部横などで、胴部叩き。内面、口縁部刷毛目後横などで、胴部叩き。
P-295	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部破片	残存高6.6 口径14.0	赤良好 赤にぶい 褐色	胴部の字を呈す。外面、口縁部刷毛目後横などで、胴部・胴部刷毛目。内面、口縁部横などで、胴部・胴部刷毛目後など。
P-296	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部破片	残存高6.0 口径18.5	赤良好 赤淡赤褐色	胴部横やかに外反する。外面、口縁部刷毛目後横などで、胴部刷毛目。内面、口縁部横などで、胴部重など。
P-297	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部破片	残存高6.9 口径17.8	赤良好 赤にぶい 褐色	胴部の字に外傾する。外面、口縁部刷毛目後横などで、胴部刷毛目、部分的に内面、口縁部外面と同一と思われる工具の弱いなどで、胴部亀削り。
P-298	土師器 壺	E区V面2 -1河の中層	口縁部破片	残存高5.5 口径14.0	赤良好 赤淡赤褐色	口縁部部上方へつまみ上げたように延びる。外面、口縁部部付近横などで、口縁下部磨き、胴部刷毛目。内面、磨き。
P-299	土師器 甕	E区V面2 河上層	口縁部破片	残存高5.9 口径19.0	赤良好 赤灰褐色	胴部横やかに外反する。外面、口縁上部横などで、下部重など。内面、重など。
P-300	土師器 甕	E区V面2 河の中層	口縁部破片	残存高5.3 口径18.6	赤良好 赤にぶい 褐色	口縁部直線状に外傾する。外面、刷毛目などで、胴部刷毛目後などで、胴部重先により重をもつ。内面、口縁部刷毛目、胴部重など。
P-302	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部-胴部破片	残存高15.0 口径21.0 胴部最大径22.8	赤良好 赤灰褐色	口縁部短く外傾する。最大径下胴部にある。外面、口縁部横などで、胴部重など。内面、口縁部横などで、胴部重など。
P-303	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部破片	残存高7.7 口径19.4	赤良好 赤褐色	口縁部短く外傾する。外面、口縁部横などで、胴部刷毛目。内面、口縁部横などで、胴部刷毛目。
P-304	土師器 甕	E区V面2 河上層	口縁部-胴部1/3残存	残存高9.1 口径16.0 胴部最大径17.0	赤良好 赤にぶい 褐色	胴部の字を呈す。外面、口縁部重などで後横などで、胴部横い重などで。内面、口縁部横などで、胴部重など。
P-305	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	口縁部1/3残存	残存高4.6 口径22.0	赤良好 赤にぶい 黄褐色	口縁部横やかに外反する。外面、刷毛目、口縁部部叩き。内面、刷毛目。
P-306	土師器 壺	E区V面2 -1河の中層	ほぼ完形	器高12.0 口径10.6 底径4.4 胴部最大径16.1	赤良好 赤にぶい 黄褐色	口縁部短く弱く外反する。外面、口縁部横などで、胴部磨き。内面、口縁部横などで、胴部などで。
P-307	土師器 壺	E区V面2 -1河の中層	2/3残存	器高21.5 口径16.2 底径5.2 胴部最大径23.2	赤良好 赤灰褐色	口縁部直線状に立ち上る。外面、口縁部横などで、胴部重などで後磨き。内面、口縁部横などで、上胴部などで、下胴部刷毛目。
P-308	土師器 甕	E区V面2 -1河の中層	2/3残存	器高17.8 口径18.0 底径7.0 胴部最大径	赤良好 赤にぶい 褐色	口縁部直線状に外傾する。外面、口縁部磨き、胴部重調整後磨き。内面、口縁部などで、胴部重など。

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-309	土師器 甕	E区V面2 -1河川中	2/3残存 底部欠落	大径19.6 残存高24.8 口径22.0 胴部最大径27.6	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰褐色	口縁部短く弱く内湾して外傾する。外面、口縁部刷毛目後横線で、胴部刷毛目。内面、口縁部横線で、胴部横線で。
P-310	土師器 甕	E区V面2 -1河川中	1/4残存	残存高15.0 口径21.4	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎淡褐色	口縁部直線状に外傾し、頸部くの字を呈す。外面、口縁部上半横線で、下半刷毛目、胴部刷毛目。内面口縁部横線で、胴部刷毛目、横線で。
P-311	土師器 甕 (脚)	E区V面2 -1河川中	脚部残存	残存高4.8 底径7.7	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎淡褐色	外面、刷毛目後横線で、胴部横線で。内面、横線で、胴部横線で。
P-312	土師器 甕 (脚)	E区V面2 -1河川中	脚部残存	残存高5.6 底径8.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰褐色	外面、下胴部刷毛目、脚部横線で。内面、胴底部刷毛目、脚部刷毛目、横線で。
P-313	土師器 甕 (脚)	E区V面2 -1河川中	脚部残存	残存高5.5 底径10.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰褐色	外面、刷毛目。内面、横線で。
P-314	土師器 甕 (脚)	E区V面2 -1河川中	脚部残存	残存高5.9 底径9.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰白色	外面、刷毛目。内面、横線で。
P-315	土師器 小型土器	E区V面2 -1河川中	ほぼ完形	器高7.0 口径8.9 底径2.7	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	口縁部短く外側へ屈曲する。外面、口縁部横線で、体部刷毛目。内面、口縁部横線で、体部横線で。
P-316	土師器 小型土器	E区V面2 -1河川中	完形	器高7.3 口径9.9 底径5.2 胴部最大径9.5	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰褐色	口縁部短く外側へ屈曲する。外面、口縁部横線で、体部刷毛目後横線。内面、口縁部横線で、体部刷毛目後横線。
P-317	土師器 小型土器	E区V面2 -1河川中	2/3残存	器高8.2 口径13.0 底径3.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい褐色	口縁部内面に鋭い稜をもち上方外側へ開く。外面、口縁部横線で、体部刷毛目。内面、横線で、磨き。
P-318	土師器 小型甕	E区V面2 -1河川中	口縁部-胴下部破片	残存高8.8 口径11.7	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎淡褐色	頸部くの字を呈し、口縁部直線状に外傾する。外面、口縁部横線で、胴部調整線。内面、口縁部横線で、胴部横線で。
P-319	土師器 小型甕	E区V面2 -1河川中	完形	器高9.5 口径11.0 底径4.2 胴部最大径11.1	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎黒褐色	口縁部内湾して上方へ立ち上る。外面、口縁部横線で、胴部横線で。内面、口縁部横線で、胴部横線で。
P-320	土師器 小型甕	E区V面2 -1河川中	2/3残存	器高10.7 口径12.6 底径3.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい褐色	口縁部くの字に外傾する。外面、口縁部横線で、胴部刷毛目。内面、口縁部横線で、胴部刷毛目。
P-321	土師器 甕 (受け口)	E区V面2 -1河川中	口縁部破片	残存高3.2 口径18.0	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい褐色	口縁部受け口を呈す。外面、口縁部上段横線で、下段部に刷毛目後横線。内面、口縁部横線で、胴部刷毛目。
P-322	土師器 S字状口縁台付甕	E区V面2 -1河川中	口縁部破片	残存高2.7 口径17.6	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色	口縁部上段外反した直立さみ、口縁部内外面横線で、胴部外面刷毛目。内面、横線で。
P-323	土師器 S字状口縁台付甕	E区V面2 -1河川中	口縁部破片	残存高2.7 口径13.1	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎淡黄褐色	口縁部上段短くやや外傾する。外面、口縁部横線で、胴部刷毛目後横線。屈曲部集状工具により凹線状に調整。内面、口縁部段の境に彫刻による凹線状の調整線。横線で。
P-324	土師器 S字状口縁台付甕	E区V面2 -1河川中	口縁部破片	残存高2.1 口径15.6	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎黒褐色	外面横線に刷毛目工具による刺突3ヶ所、上段短く外傾する。内外面横線で。
P-325	土師器 S字状口縁台付甕	E区V面2 -1河川中	口縁部破片	残存高1.8 口径15.4	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰褐色	上段外傾する。口縁部内外面横線で。外面、胴部刷毛目。
P-326	土師器 S字状口縁台付甕	E区V面2 -1河川中	口縁部破片	残存高2.8 口径10.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい褐色	上段部短く直立さみ。外面、口縁部横線で、胴部刷毛目後横線方向の弱い刷毛目。内面、口縁部横線で、胴部刷毛目。胴部横線で。
P-327	土師器 S字状口縁台付甕	E区V面2 -1河川中	口縁部破片	残存高2.5 口径12.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎淡褐色	上段外傾する。外面、口縁部横線で、胴部刷毛目。内面、口縁部横線で、胴部刷毛目、胴部横線で。
P-328	土師器 S字状口縁台付甕	E区V面2 -1河川中	口縁部破片	残存高3.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎淡黄褐色	外面、口縁部横線で、胴部刷毛目。内面、口縁部横線で、胴部刷毛目、胴部横線で。
P-329	土師器	E区V面2	口縁部破片	残存高5.1	◎砂粒を多く含む。	上段部長く外傾する。外面、口縁部横線で。胴部

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
	S字状口縁 台付壺	-1河中等	口縁部破片	口径14.8	◎良好 ◎褐色	刷毛依横刷毛。内面、なで。
P-330	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高3.9 口径18.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	上段長く屈曲する。外面、口縁部横なで、胴部横 なで。内面、なで。
P-331	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高4.5 口径17.5	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁部外傾する。外面、横なで、胴部刷毛目、内 面、なで。
P-332	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高5.2 口径12.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	口縁部受け口状S字を明確に呈さない。外面、口 縁部横なで、胴部刷毛後不連続な横刷毛。内面、 口縁部横なで、胴部なで。胴部の横筋は刷毛では ない。
P-333	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高5.8 口径11.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰褐色	口縁部受け口状S字を明確に呈さない。外面、口 縁部横なで、胴部刷毛目、胴部上位になで状の筋 い横刷毛。内面、口縁部横なで、内面なで、指な で。
P-334	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高4.9 口径16.6	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰褐色	口縁部上段長く立ち上る。外面、口縁部横なで、 胴部なで。
P-335	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高5.6 口径20.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎褐色	口縁部外傾する。外面、口縁部横なで、胴部刷 毛後数本の横刷毛。内面、口縁部横なで、胴部なで。
P-336	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高3.1 口径15.4	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰褐色	口縁部内面強い稜をもつ。外面、口縁部横なで、 胴部刷毛目。内面、口縁部横なで、胴部なで。
P-337	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高6.5 口径15.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎黒褐色	口縁部先端外傾する。外面、口縁部横なで、胴部 刷毛後横刷毛。内面、口縁部横なで、先端外傾部 内側に凹面をもつ。胴部なで。
P-338	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高3.9 口径14.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁上段部屈曲する。外面、口縁部横なで、胴部 刷毛目。内面、口縁部横なで、先端部凹面をもつ。 胴部なで、指なで。
P-339	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高2.3 口径14.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎明灰褐色	口縁部外傾する。外面、口縁部横なで、胴部刷 毛目。内面、口縁部横なで、胴部横なで。
P-340	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高3.9 口径16.2	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁部外傾する。外面、口縁部横なで、胴部刷 毛後、不連続な横刷毛。内面、口縁部横なで、胴部 指なで、なで。
P-341	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高4.5 口径16.6	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁部外傾する。外面、口縁部横なで、胴部刷 毛後、2ヶ所に横刷毛。上部に先状に横方向にな で、内面、口縁部横なで、指頭なで。
P-342	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高7.1 口径17.1	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	口縁部外傾する。外面、口縁部横なで、口縁下部 鹿先痕。胴部刷毛目、斜方向刷毛目、4ヶ所に施 す。内面、口縁部横なで、胴部なで、指頭なで。
P-343	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高2.7 口径17.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁部部肥厚する。外面、口縁部横なで、胴部刷 毛目。内面、口縁部横なで、胴部わずかに刷毛目。
P-344	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 河上層	胴部残存	残存高5.9 底径9.5	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎黒褐色	外面、刷毛痕なで。内面、鹿底部に黒鹿先痕、 脚部指なで調整。胴部折り返し。
P-345	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	胴部1/3残 存	残存高6.5 底径9.5	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	外面、刷毛痕なで調整。内面、鹿底部刷毛目、工 具止め痕、脚部指なで、指頭痕、胴部折り返し。
P-346	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	胴部残存	残存高6.7 底径9.6	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	外面、刷毛痕なで調整。内面、鹿なで、指頭痕、 胴部折り返し。
P-347	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	胴部残存	残存高6.9 底径8.8	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎褐色	外面、鹿底部刷毛目、脚部刷毛痕なで調整。内面、 鹿底部鹿先痕多数、脚部横なで、胴部折り返し。
P-348	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河中等	胴部残存	残存高9.4 底径9.5	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄色	外面、鹿底部刷毛目、脚部刷毛痕なで調整。胴部 横なで。内面鹿底部刷毛目。鹿なで、鹿先痕、脚 部鹿なで。

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	粘土・焼成・色調	特徴・その他
P-349	土師器 S字状口縁 台付甕	E区V面2 -1河中等	脚部残存	残存高7.5 底径9.2	◎細砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄色	外面、変底部刷毛目、脚部刷毛後で調整。内面、変底部焼先直多敷、脚部艶などで、指頭直。
P-350	土師器 S字状口縁 台付甕	E区V面2 -1河中等	脚部残存	残存高8.2 底径10.2	◎細砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰褐色	外面、変底部刷毛目、脚部刷毛後で調整。内面、変底部艶などで、脚部艶などで、指頭折り返し。
P-361	土師器 小型土器	E区V面2 -1河中等	口縁部一部 欠損	器高4.7 口 径8.0 底径 3.5	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	外面、寛調整後磨き。内面、寛などで後磨き。
P-363	土師器 小 型増型土器	E区V面2 -1河中等	1/3残存	残存高3.6 底径1.8	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	底部円形で凹面状。内外面磨き。
P-354	土師器 小型土器	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高5.8 口径12.3	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤褐色	口縁だれたらすの字状を呈す。外面、口縁部などで、磨き状態などで、体部艶などで。内面、口縁部などで、体部艶などで、など。
P-355	土師器 小型甕	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	残存高4.2 口径8.6	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁部内湾ぎみに立ち上る。外面、口縁部縦凹線 高る。口縁端部付近に磨状工具による刺突文、肩 部に焼先と思える針格子状の凹線文。内面、口縁 部磨き、胴部艶などで。
P-356	土師器 甕	E区V面2 -1河中等	底部破片	残存高3.8 底径2.0	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	底部尖りまみで凹面をもつ。内外面刷毛目。
P-357	土師器 高坏 (パ レス文)	E区V面2 -1河中等	脚部破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	外面、磨き、山形文、直線文、刺突文。内面、寛 調整、裾部横などで。
P-358	土師器 不明 (パ レス文)	E区V面2 -1河中等	破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	外面、山形文、直線文。内面、などで。
P-359	土師器 高坏 (パ レス文)	E区V面2 -1河中等	脚部破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	外面、磨き後、山形文、直線文、刺突文。内面、 艶などで。
P-360	土師器 ひ きご置? (パ レス文)	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎淡褐色	外面、磨き。内面、直線文、連弧文。
P-361	土師器 ひ きご置? (パ レス文)	E区V面2 -1河中等	口縁部破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	外面、磨き。内面、直線文、連弧文、焼先状に横 位に入る。
P-362	土師器 高坏 (パ レス文)	E区V面2 -1河中等	脚部破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	外面、磨き後直線文、山形文、刺突文。内面、艶 などで、裾部横などで。
P-363	土師器 高坏? (パ レス文)	E区V面2 河上層	脚部破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎浅黄褐色	外面、直線文、磨状工具による山形文。内面、横 などで。
P-364	土師器 高坏? (パ レス文)	E区V面2 -1河中等	脚部破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎浅黄褐色	外面、直線文、磨状工具による山形文、刺突文。 内面、横などで、破片断面に孔。
P-365	土師器 不明 (パ レス文)	E区V面2 河上層	破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	外面、直線文、磨状工具による山形文、刺突文、 羽状文。内面、などで。
P-366	土師器 不明 (パ レス文)	E区V面2 -1河中等	破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎浅黄褐色	外面、直線文、磨状工具による山形文、刺突文。 内面、などで。
P-367	土師器 高坏? (パ レス文)	E区V面2 -1河中等	破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎浅黄褐色	外面、山形文、刺突文、直線文。内面、などで。
P-368	土師器 高坏? (パ レス文)	E区V面2 -1河中等	脚部破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	外面、艶などで、裾部直線文。内面、艶などで。
P-369	土師器 ひ きご置? (パ レス文)	E区V面2 -1河中等	破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	外面、磨き。内面、直線文、連弧文。
P-370	土師器	E区V面2	把手部?	法量不明	◎細砂粒を含む。	把手状、艶による調整、突出部に孔。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	粘土・焼成・色調	特 徴・その他
	不明	-1河中层			◎良好 ◎灰黄色	
P-372	土師器 不明 葉?	E区V面2 -1河中层	破片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	外面、粗い刷毛後、棒状工具による不定形の凹線。 内面、寛なで。
P-373	土師器 円形土器	E区V面2 -1河中层	周辺を丸く 打欠く	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	外面、刷毛後なで。内面、寛なで。
P-374	土師器 円形土器	E区V面2 -1河中层	周辺を丸く 打欠く	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	内外面、磨き。
P-375	土師器 円形土器	E区V面2 -1河中层	周辺を丸く 打欠く	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰黄色	外面、磨き。内面、なで。
P-376	土師器 小型土器	E区V面2 -1河下層	ほぼ定形	器高7.3 口 径7.0 底径 3.0 胴部最 大径8.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁部5の字を呈す。外面、口縁部なで後縦凹線 高る、体部寛なで後磨き。内面、口縁部寛なで後 磨き、体部寛なで。
P-377	土師器 器台	E区V面2 -2河上層	脚部2/3残 存	残存高6.5 底径11.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎淡褐色	脚部外反し端部に平坦面をもつ。3孔。外面、上 部横方向の磨き、下部縦方向の磨き、裾部横なで。 内面、寛なで。
P-378	土師器 高坏	E区V面2 -2河中层	口縁部破片	残存高3.5 口径20.0	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	内外面磨き。
P-379	土師器 高坏	E区V面2 -2河中层	坏底部破片	残存高2.0	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎浅黄褐色	坏底部内面に円形状のくぼみ、内外面磨き。
P-380	土師器 小型壺	E区V面2 -2河中层	口縁部-胴 部1/4残存	残存高9.0 口径8.5	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	口縁部短く外傾する。外面、口縁部横なで、胴部 磨削り後寛なで。内面、口縁部横なで、胴部なで。
P-381	土師器 (ひきごぎ ?)	E区V面2 -2河中层	肩部破片	残存高5.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	胴部細くなる。外面、磨き。内面、肩部指痕直、 胴上部なで、寛なで、胴下部刷毛目。
P-382	土師器 壺	E区V面2 -2河中层	口縁部欠損	残存高9.8 底径3.6 胴 部最大径13.4	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰褐色	胴下位に最大径があり、底部へ向け鋭い稜がある。 外面、寛なで、磨き。内面、磨、指なで。
P-383	土師器 壺	E区V面2 -2河上層	口縁部欠損	残存高13.0 底径4.3 胴 部最大径13.2	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎浅黄褐色	胴下位に最大径があり、底部へ向け鋭い稜がある。 外面、口縁-胴部割差、胴上部磨き、胴中-下位 差削りなで。内面、口縁部磨き、胴部なで。
P-384	土師器 壺	E区V面2 -2河上層	口縁部全周	残存高8.1 口径12.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	器な成形、左右の口縁部は不統一である。内外面 雑な磨調整。
P-385	土師器 小型壺	E区V面2 -2河中层	口縁部破片	残存高4.1 口径8.0	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	口縁内湾さみ。外面、口縁部横なで、胴部刷毛目。 内面、口縁部横なで、胴部なで。
P-386	土師器 壺	E区V面2 -2河中层	口縁部破片	残存高5.7 口径19.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎黒赤褐色	口縁部平坦面をもつ。外面、口縁部刷毛後横なで。 胴部刷毛目。内面、刷毛後寛なで。
P-387	土師器 壺	E区V面2 -2河中层	口縁部破片	残存高3.0 口径17.0	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰白色	口縁部内湾する。端部内側肥厚する。外面、口縁 部刷毛後横なで。内面、横なで。
P-388	土師器 小型壺	E区V面2 -2河中层	口縁部破片	残存高3.5 口径12.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁部外反する。外面、口縁部横なで、下部磨直。 内面、口縁部横なで、胴部なで。
P-389	土師器 壺	E区V面2 -2河中层	口縁部破片	残存高4.6 口径17.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁部くの字を呈し、端部に平坦面をもつ。外面、 口縁部横なで、胴部横なで、口縁-胴部に粘土の 凹凸。内面、口縁部横なで、胴部横なで。
P-390	土師器 壺	E区V面2 -2河中层	口縁部破片	残存高2.3 口径17.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁短く外傾する。内外面横なで。
P-391	土師器 壺	E区V面2 -2河中层	口縁部破片	残存高4.4 口径17.4	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	口縁部外反する。外面、口縁部横なで後寛なで、 寛先反し斜めの凹線、胴部刷毛目。内面、口縁部 横なで、胴部横なで。
P-392	土師器 壺	E区V面2 -2河中层	口縁部破片	残存高9.1 口径15.6	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎黒褐色	口縁部深く受け口状を呈す。外面、口縁部横なで、 胴部刷毛目。内面、口縁部横なで、胴部なで。

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・地成・色調	特徴・その他
P-383	土師器 甕	E区V面2 -2河中庸	口縁部-胴部破片	残存高8.5 口径18.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	口縁部短く外反する。外面、口縁部横なで、胴部刷毛目、胴部刷毛目による凹凸多い。内面、口縁部横なで、兼なで、胴部刷毛目。
P-384	土師器 甕	E区V面2 -2河上層	口縁部破片	残存高4.6 口径15.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	口縁部短く外反する。外面、口縁部横なで、胴部兼なで。内面、口縁部横なで、兼なで、胴部横なで、口縁部に黄先状の凹縁2条。
P-385	土師器 甕	E区V面2 -2河上層	口縁部-胴部破片	残存高5.6 口径16.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	口縁部外反する。外面、口縁部横なで、胴部兼なで。内面、口縁部横なで、胴部兼なで。
P-386	土師器 甕	E区V面2 -2河上層	口縁部破片	残存高5.0 口径16.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎褐色	口縁先端短く外反する。外面、口縁部縦方向に窪で調整の凹凸残る。その上を横なで、胴部兼なで。内面、口縁部横なで、胴部兼なで。
P-387	土師器 甕 (台付甕)	E区V面2 -2河上層	胴部残存	残存高6.1 底径11.3	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎浅黄褐色	内外面ともに割落著しい。内外面調整。
P-389	土師器 S字状口縁 台付甕	E区V面2 -2河中庸	口縁部破片	残存高2.0 口径17.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	口縁上段部直立さみ。内外面口縁部横なで。内面、胴部刷毛目。
P-400	土師器 S字状口縁 台付甕	E区V面2 -2河上層	口縁部破片	残存高2.0 口径14.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	口縁部外傾する。内外面横なで。
P-401	土師器 S字状口縁 台付甕	E区V面2 -2河中庸	口縁部破片	残存高2.1 口径13.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎暗褐色	口縁部立ちさみ。内外面横なで。外面、胴部刷毛目。
P-402	土師器 S字状口縁 台付甕	E区V面2 -2河上層	口縁部破片	残存高3.3 口径14.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰褐色	口縁部外傾する。外面、口縁部横なで、胴部くびれなで、胴部刷毛目。内面、口縁部横なで、胴部-胴部兼なで。
P-403	土師器 S字状口縁 台付甕	E区V面2 -2河中庸	口縁部破片	残存高5.8 口径13.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 赤褐色	口縁部上段短い。外面、口縁部横なで、胴部刷毛目後、肩部に横刷毛。内面、口縁部横なで、胴部兼なで、胴部兼なで。
P-404	土師器 S字状口縁 台付甕	E区V面2 -2河上層	口縁部破片	残存高3.3 口径14.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎泥灰色	口縁上段部短く屈曲する。外面、口縁部横なで、胴部刷毛目後、横方向の刷毛。内面、口縁部横なで、兼なで。
P-405	土師器 S字状口縁 台付甕	E区V面2 -2河中庸	口縁部破片	残存高4.6 口径15.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰褐色	口縁部外傾する。外面、口縁部横なで、胴部刷毛目後、横方向の刷毛。内面、口縁部横なで、胴部兼なで。
P-406	土師器 S字状口縁 台付甕	E区V面2 -2河中庸	胴部破片	残存高4.9	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰褐色	外面、刷毛目。内面、薬底部残存、胴部兼なで。
P-407	土師器 S字状口縁 台付甕	E区V面2 -2河中庸	胴部1/3残存	残存高8.1 底径11.5	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	外面、刷毛目。内面、兼なで、折り返し。
P-408	土師器 小型土器 (北條系?)	E区V面2 -2河中庸	口縁部破片	残存高3.7 口径9.2	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	口縁部立ちさみで、胴部縦かにかーブする。内外面兼なで。内面、体部兼なで。
P-409	土師器 壺	E区V面2 -2河中庸	口縁部破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎淡褐色	口縁部外面下方に延びると思われるが欠損。外面、磨き。内面、磨き後塵による刺突文、山形文。
P-410	土師器 壺 ?	E区V面2 -2河中庸	口縁部破片	残存高5.7 口径14.2	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	口縁部下位で細くなる。内外面ともに調整。
P-411	土師器 高坏 (パレス文)	E区V面2 -2河中庸	胴部破片	法量不明	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎浅黄褐色	孔2。外面、磨き、下位に刺突文による山形文、直線文。内面、土位置削り、下位兼なで。
P-412	土師器 高坏 (パレス文)	E区V面2 -2河中庸	口縁部破片	残存高4.5 口径19.4	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎浅黄褐色	外面、彫刻工具による山形文、刺突文、直線文。内面、丁寧なで。
P-413	土師器 高坏 (パレス文)	E区V面2 -2河中庸	口縁部破片	残存高3.7 口径20.1	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎淡褐色	外面、磨き。内面、直線文、刺突文、直線文。
P-414	土師器 器台	E区V面2 -2河下層	胴部2/3残存	残存高6.8	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 赤褐色	外面、磨き。内面、兼なで、調整。孔3。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-415	土師器 高坏	E区V面2 -2河下層	脚部1/2残存	残存高6.1	③細砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥褐色	外面、磨き。内面、丸調整、裏側で、孔4。
P-416	土師器 壺 (二重口縁)	E区V面2 -2河下層	口縁部破片	残存高2.9	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥褐色	口縁部外反する。内外面丸調整後磨き。
P-417	土師器 甕	E区V面2 -2河下層	口縁部破片	残存高5.1 口径17.0	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥にぶい 黄褐色	外面、口縁部磨んで、頸部丸調整。内面、磨んで。
P-418	土師器 甕	E区V面2 -2河下層	口縁部破片	残存高5.3 口径22.0	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥灰赤色	内外面丸調整、口縁部磨み。
P-419	土師器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部破片	残存高4.0 口径11.6	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥暗灰黄色	外面、口縁部磨んで、頸部丸調整。内面、口縁部磨んで、頸部磨んで。
P-420	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -2河下層	口縁部破片	残存高2.6 口径15.0	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥暗灰褐色	口縁部上段短く直立き。外面、口縁部磨んで、胴部刷毛目。内面、口縁部磨んで、胴部まで。
P-421	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -2河下層	口縁部破片	残存高3.3 口径13.6	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥暗灰褐色	口縁部上段直立き。外面、口縁部磨んで、胴部刷毛後縁方向の刷毛。内面、口縁部磨んで、頸部磨んで、蓋面。
P-422	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 河上層	口縁部破片	残存高3.3 口径16.0	③砂粒を多く含む。 ⑤良好 ⑥にぶい 黄褐色	口縁部外傾する。外面、口縁部磨んで、胴部刷毛目。内面、口縁部磨んで、胴部磨んで、指頭痕。
P-423	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -2河下層	口縁部破片	残存高4.0 口径11.0	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥灰褐色	口縁部上段短く直立き。外面、口縁部磨んで、胴部にながが蒸る。胴部刷毛後縁方向の刷毛。内面、口縁部磨んで、胴部まで。
P-424	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 河上層	口縁部破片	残存高3.9 口径17.0	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥にぶい 黄褐色	口縁部外傾する。外面、口縁部磨んで、胴部刷毛後縁方向の刷毛。内面、口縁部磨んで、胴部まで。
P-425	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河下層	口縁部破片	残存高3.6 口径15.0	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥灰褐色	口縁部外傾する。外面、口縁部磨んで、胴部刷毛後縁方向の刷毛。内面、口縁部磨んで、胴部まで。
P-426	土師器 受口壺	E区V面2 -2河下層	口縁部破片	残存高5.4 口径16.0	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥にぶい 黄褐色	口縁部受け口を呈す。外面、口縁部磨んで、胴部磨削り状多方向の刷毛。内面、口縁部磨んで、胴部磨んで。
P-427	土師器 高坏 (ハリス文)	E区V面2 -2河下層	破片	法量不明	③細砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥にぶい 褐色	外面、直線文、刺突文、山形文。内面、なで。
P-428	土師器 壺	E区V面2 -1河下層	口縁部1/2残存	残存高6.3 口径17.0	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥にぶい 赤褐色	口縁部外反する。外面、刷毛状の粗い調整後、太い磨き状のなで。内面、刷毛状の粗い調整後磨き。
P-429	土師器 壺	E区V面2 -1河下層	口縁部破片	残存高3.5 口径21.0	③細砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥赤色	口縁部縁をもち口唇部に貼付。口縁下部に円形の貼付。内外面ともに丁寧な磨き。内外面全面赤彩。
P-430	土師器 高坏	E区V面2 -1河下層	坏部破片	残存高5.8 口径23.0	③細砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥にぶい 褐色	口縁部弱い内湾みに開く。内外面磨き。
P-431	土師器 壺	E区V面2 -1河下層	破片	法量不明	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥灰黄色	口縁部下方へ延びる。
P-432	土師器 壺	E区V面2 -1河下層	破片	法量不明	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥灰黄一 暗灰黄色	432-437は同系統の壺(東海東部系?)で全体的に薄い。外面は刷毛状の粗い調整後、山形・沈線・刺突文が施される。
P-437	土師器 甕	E区V面2 -2河下層	1/4残存	残存高14.0 口径13.8 胴部最大径17.5	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥にぶい 褐色	口縁直線状に外傾する。内外面なで調整。
P-438	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河下層	口縁部2/3残存	残存高7.4 口径14.0 胴部最大径18.0	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥暗灰色	口縁部やや外傾し、外面、口縁部磨んで、胴部刷毛目、胴部磨んで。内面、胴部刷毛目、胴部まで。
P-440	土師器 高坏	E区V面2 -1河下層	脚部2/3残存	残存高10.0 底径15.8	③砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥灰褐色	坏底部に稜をもつ。内面底部に円形のくぼみ。外面、磨き。内面、磨んで、で、底部磨んで。
P-441	土師器 高坏	E区V面2 -1河下層	脚部1/3残存	残存高7.5	③細砂粒を含む。 ⑤良好 ⑥にぶい	坏底部に稜をもつ。内面底部に円形状のくぼみをもつと思われる。外面、磨き。内面、上部磨んで。

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-442	土師器 器台	E区V面2 -1河下層	完形	器高8.9 □ 径8.0 底径 11.8	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	以下施など、で。口縁部、脚部固く内湾する。4孔穿つ。外面、磨き、裾部麗なで後磨き。内面、坏部などで、脚部麗なで。
P-443	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河下層	底部残存	残存高7.0 底径9.6	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	底部折り返し。外面、部分的に刷毛目。内面、麗なで。
P-444	土師器 器台	E区V面2 -1河下層	器受部残存	残存高6.0 口径8.8	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色	器受部直線的に立ち上る。外面、口縁部などで、頸部磨き、脚部などで。内面、磨き、脚部は麗により、面取り状に削り、下部麗なで。
P-445	土師器 S字状口縁 台付壺	E区V面2 -1河下層	胴下部-脚 上部	残存高5.1	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎黒褐色	外面、刷毛目。内面、麗なで。
P-446	土師器 器台	E区V面2 -1河下層	1/2残存	残存高6.2 口径8.0	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎明黄褐色	外面、などで、脚部磨き。内面、麗なで。
P-447	土師器 壺	E区V面2 -1河下層	口縁部破片	残存高4.4 口径18.0	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	口縁部下方へ延びる。外面、端部麗なで、口縁部磨き。内面、先による割突文。
P-448	土師器 壺	E区V面2 -1河下層	口縁部破片	残存高4.4 口径12.9	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色	口縁部内湾きみ。外面、口縁部横なで、胴部麗なで。内面、などで、麗なで。
P-449	土師器 壺	E区V面2 -1河下層	口縁部破片	残存高5.0 口径16.4	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色	外面、粗い刷毛目後、横方向麗なで。内面、などで、胴部麗なで。
P-450	土師器 高坏	E区V面2 -1河下層	脚部残存	残存高3.9	◎細砂粒を含む。 ◎良好 ◎明黄褐色	3孔。外面、磨き後、脚上位に4条の沈線施る。内面麗調塗。
P-451	竜見町式土 器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴 部片	残存高19.0 口径9.7 胴 部最大径13.8	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色 10YR6/2	口縁は直線的に削き、胴部は下位が膨らむ。頸部に1条沈線放状文と2条平行直線文。外面磨き、胴内面刷毛目。
P-452	竜見町式土 器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴 部片	残存高6.8 口径8.4	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色 10YR6/2	口縁短く外反。胴部に2条沈線直線文で区画し、内部縄文(LR)を光興。
P-453	竜見町式土 器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高3.2 口径10.6	◎粗砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 赤褐色2.5YR5/3	口縁短く外反。外面赤彩。口唇に縄文(LR)。
P-454	竜見町式土 器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	流量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 赤褐色5YR5/4	口縁短く外反。口唇部に赤彩と縄文。口縁端内面に布色状具の押圧。
P-455	竜見町式土 器 壺	E区V面2 -2河下層	胴部片	残存高9.6 胴部径6.3	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 赤褐色5YR5/3	くびれの弱い胴部で、上位に3状の平行沈線、下位に縄文地に赤彩を施した重山形文。
P-456	竜見町式土 器 壺	E区V面2 -2河下層	胴部-胴部 片	残存高16.3 胴部径(8.8)	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎赤10 R4/6	胴部下位が膨らむ。胴部上位に磨治放状文、1条沈線を境界とし下位に太沈線による斜線文光興の副衝文。施文部分以下に赤彩。
P-457	竜見町式土 器 壺	E区V面2 -2河下層	胴部-底部 片	残存高9.8 底径8.5	◎粗砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎ 灰黄褐色10YR5/2	下らみみの胴部から安定した平底。胴下位に1条沈線の直線文で区画し重山形文を施す。
P-458	竜見町式土 器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴 部片	残存高14.6 口径(20.0)	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎黄灰色 2.5Y4/1	口縁短く外反。胴部は弓なりに屈曲し体部は中位が膨らむ。体部に粗い磨治具刷毛目。口唇に縄文(LR)。
P-459	竜見町式土 器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴 部片	残存高18.5 口径(23.0)	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色 10YR4/2	口縁短く外反。胴部は縮くしまり。体部は下膨れ。胴部に磨治直線文、体部に磨治斜線文。口唇に縄文。内面に刷毛目と全て。外面下平に塗。
P-460	竜見町式土 器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴 部片	器高17.3 □ 径16.5 底径 6.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰黄色 2.5Y7/2	口縁短く外反。胴部は縮くしまり。体部は上位が膨らむ。胴部に磨治放状文、体部に磨治斜線文。口唇に縄文。体部下平と内面は磨治。外面に塗。
P-461	(竜見町式 土器) (小型壺)	E区V面2 -2河下層	胴部-底部 片	残存高6.0 底径6.6	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰黄色 2.5Y7/2	胴部外面を整った横羽状磨治の刷毛目で整形。
P-462	(竜見町式	E区V面2	口縁部-胴	残存高8.5	◎砂粒を含む。	口縁短く外反。胴部のしまり強く、体部は球形。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
	土器 小型差 (付付)	-2河下層	破片	口径13.0	◎良好 ◎オリーブ黒色7.5Y3/1	頸部と体部中に1帯づつ磨接波状文。施文部以外は丁寧な磨き。
P-668	(竜見町式土器) 小型差	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴部 破片	残存高6.8 口径6.2	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎明赤褐色2.5YR5/6	口縁短く外反、頸部のしまりは弱い。外面と口縁内面は赤彩。
P-669	(樽式土器) 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴部 破片	残存高6.6 口径15.4	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい黄褐色10YR6/3	口縁直線的に外反、頸部は「く」字状に屈曲。内外面とも磨き。
P-670	(樽式土器) 広口壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴部 破片	残存高4.8 口径10.4	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎赤色10R4/6	口縁短く外反ぎみに立つ、頸部は「く」字状に屈曲する。口縁に2ヶ所対の孔を穿つ。表裏面とも赤彩。
P-671	樽式土器 広口壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴部 破片	残存高15.5 口径13.0 胴部最大径13.5	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい黄色2.5Y6/3	口縁は弓なりに外反し、胴部は球形に近い。頸部に間隔の狭い等間隔止塵状文、肩と胴下位に1帯づつ磨接波状文。胴外面と口縁内面に赤彩。口縁、胴下位、胴内面に斜刷毛目。
P-672	(樽式土器) 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部破片	残存高11.0 口径28.3	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい褐色7.5YR7/3	口縁は大きく開いて、頸部は屈曲して立つ。口縁端部外面に磨接波状文。口唇部に割み。
P-673	(樽式土器) 広口壺	E区V面2 -2河下層	胴部-底部 破片	残存高23.6 底径8.8	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎暗褐色10R3/6	やや肩の張る短頸で、外面全体に赤彩。
P-674	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	胴部破片	残存高5.5 胴部径9.1	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰褐色7.5YR5/2	弓なりに反る頸部で、等間隔止塵状文を施す。
P-675	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	胴部破片	残存高5.7 胴部径11.0	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰褐色5Y5/1	弓なりに反る頸部で、等間隔止塵状文の横、下位に1帯の磨接波状文を施す。内面に赤彩。
P-676	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	胴部破片	残存高7.5 胴部径10.7	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰白色10YR7/1	弓なりに反る頸部で、等間隔止塵状文とその上に1帯づつ磨接波状文を施す。
P-677	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	胴部-胴部 破片	残存高11.9 胴部径12.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰褐色2.5Y6/2	頸部は「く」字状に屈曲し、2道止塵状文、肩に間隔を空けた磨接波状文を5帯以上重ねる。口縁内面に赤彩。
P-678	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	胴部破片	残存高7.7 胴部径9.4	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎黒褐色10YR3/2	頸部は弱い「く」字状に屈曲し、等間隔止塵状文と下位に磨接波状文を施す。
P-679	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	胴部破片	残存高12.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10R4/6	下腹側の胴部で、肩に数帯の磨接波状文を重ね、下位に2道止塵状文を施す。胴部に赤彩。内面は横位の粗い刷毛目。
P-680	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴部 破片	残存高8.8 胴部径9.4	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰白色5Y7/1	口縁は大きく外反し、頸部は弓なりにくびれる。頸部に2帯の等間隔止塵状文を施す。口縁外面に刷毛目。内面に丁寧な磨き。
P-681	(樽式土器) 壺	E区V面2 -2河下層	胴部破片	残存高14.5 胴部最大径31.1	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色10YR6/2	「算盤玉」状の胴で、外面に「ささら」状具による横位刷毛目。
P-682	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	胴部破片	残存高15.6	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい黄褐色10YR7/2	なで肩の形状で、上位に磨接波状文。外面に2種の板状具による不定方向の刷毛目。
P-683	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴部 破片	残存高7.8 胴部径11.4	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎暗灰褐色2.5Y5/2	弓なりに反る頸部で、数帯の磨接波状文を重ねる。
P-684	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部破片	残存高9.7 口径21.0	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい黄色2.5Y6/3	早口縁で直線的に開く。頸部に磨接波状文。外面は縦、内面は横位の磨き。
P-685	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部破片	残存高5.5 口径16.0	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰褐色2.5Y6/2	断面漏斗状の折り返し口縁で、口縁外面に差状具による不規則な磨み。内面に赤彩。
P-686	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部破片	残存高10.3 口径22.9	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい黄褐色10YR7/2	折り返し口縁で、断面三角形。口縁外面に磨接波状文、頸部は横い差状文(?)。外面は斜、内面は横位の刷毛目。

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-687	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高7.3 口径27.0	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰色5 Y6/1	2段の折り返し口縁で、断面深溝状。外面に篋状具による彫みを施す。外面は縦刷毛目。
P-688	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高9.0 口径28.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR7/3	折り返し口縁で、断面三角形。口縁外面と内面に櫛歯状文、外面下端に彫みを施す。外面は縦、内面は横位の刷毛目。
P-689	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高8.7 口径(17.7)	◎粗砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎黄褐色2.5Y5/3	口縁下位で弱く反外、折り返し口縁の断面は深溝状。上端に篋状具による彫みを施す。外面に不定方向の刷毛目。
P-690	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高10.6 口径(23.8)	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色10YR5/3	折り返し口縁で、断面薄鉢状。口縁外面に刺突充填、頸部に等間隔直線状文。外面に斜刷毛目。
P-691	棒式土器 (壺)	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高6.9 口径13.6	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰オリーブ色5Y6/2	口縁やや内湾きみに開く。頸部は櫛状文か(?)。外面は斜、内面は横位の刷毛目。
P-692	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一頸部片	残存高15.8 頸部径13.5	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5Y6/3	頸部は弱い「く」字状に屈曲。頸部に2連止塵状文、その下位に4帯の波状文を重ねる。波状文の境に1条の細い連続線状文を区画し、ボタン状貼付文を頂点とする刺突文を描く。刺突文内部は刺突で光輝。胴部は赤影。口縁部外面は縦、内面は横位の丁寧な彫り。胴内部に横位の刷毛目を施す。
P-693	棒式土器 (壺)	E区V面2 -2河下層	口縁部一胴部片	残存高14.7 口径17.0	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎黒褐色2.5Y3/1	やや弓なりに開く口縁で、全て肩の胴部に続く。頸部に2帯の連止塵状文、上位に1帯、下位に3帯の波状文。口縁内面に横、肩一胴部内面に縦位の刷毛目。
P-694	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高13.8 口径29.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR6/4	弓なりに外反する折り返し口縁で、断面薄い方形状。口縁上端に篋状具による彫み、頸部に2連止塵状文を施す。外面は縦、内面は横位の刷毛目。
P-695	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一頸部片	残存高14.3 口径22.5	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR6/3	弓なりに外反する折り返し口縁で、断面は弱い溝状文。頸部は細くしなめる。頸部外面に2連止塵状文、内面に赤影。外面に斜刷毛目の後、縦の粗い彫り。
P-696	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	頸部一胴部片	残存高9.3	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色10YR6/3	「く」字状に屈曲する頸部からやや肩の張る球形胴部に続く。頸部に2帯の2連止塵状文、肩に4帯の櫛歯状文。
P-697	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一頸部片	残存高8.0 口径16.4	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎褐色7.5YR4/1	口縁は「朝顔」形に開き上部に2〜4対の孔を穿つ。頸部に幅広い2連止塵状文、肩に櫛歯状文、内面に赤影。
P-698	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高7.8 口径21.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色10YR6/2	弓なりに開く折り返し口縁で、断面薄鉢状。口縁外面に櫛歯状文を施し、黄褐色を帯びて歯状貼付文を付す。外面は縦、内面は横位の刷毛目。
P-699	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	頸部一胴部片	残存高16.5 頸部径8.6	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色5YR7/4	頸部は弓なりに屈曲し狭くしなめる。頸部に等間隔直線状文、櫛歯状文を施し、縦の細い連続線状文で区画し、収束する直線状で光輝した刺突文を描く。外面は縦、肩内面は横位の刷毛目。
P-700	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高5.5 口径26.9	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR7/3	直線的に開く折り返し口縁で、断面は三角形。下端に彫りによる彫みを施す。内面に赤影。頸部外面は縦刷毛目。
P-701	棒式土器 小型壺(台付)	E区V面2 -2河下層	頸部一胴部片	残存高4.8 頸部径9.2	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR6/4	頸部は弱い「く」字状に屈曲し、球形胴に続く。頸部に反時計回りの等間隔直線状文、下位に1帯の波状文。内面は横位の刷毛目。
P-702	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一胴部片	残存高10.3 口径14.2 胴部最大径16.4	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色10YR6/3	口唇部内屈し尖る。頸部は「く」字状に屈曲し、やや肩の張る体部に続く。口縁上端に櫛歯状文、頸部に2連止塵状文、肩に数帯の櫛歯状文を重ねる。口縁外面に縦、胴中位以下の外面に横位の刷毛目。
P-703	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一胴部片	残存高14.2 口径16.7	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色10YR5/2	口縁は長く直線状に開く。口縁上端に櫛歯状文、頸部に2連止塵状文、肩に黄褐色を帯びた3帯の櫛歯状文を重ねる。外面全体に縦刷毛目を施す。
P-704	棒式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一胴部片	残存高17.2 口径18.0 胴	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎暗灰黄	口唇部内屈し尖る。頸部は弱い「く」字状に屈曲し、やや肩の張る体部に続く。口縁上端に櫛歯状

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
				計測値 (cm) 部最大径19.5	胎土・焼成・色調 色2.5Y5/2	特徴・その他 状文、頸部に4連止簾状文、肩に間隔を空けた3帯の帯線状文、口縁外面に斜方向の刷毛目。胴外面と内面全体に磨き。
P-705	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一側 部片	残存高23.5 口径21.2 側 部最大径26.8	①砂粒を多く含む。 赤良好 ②暗灰黄色 2.5Y5/2	口縁は直線状に開き、口唇部はわずかに内傾する。頸部は「く」字状に屈曲し、球形の胴部に続く。口縁上端に帯線状文、頸部に2連止簾状文、肩に2帯の帯線状文、口唇部に縦状、肩に帯線状文先端利突を施したボタン状貼付文を間隔を空けて付す。内面に磨き。口縁一肩の外面に大量の磨付着。
P-706	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高8.0 口径16.8	①砂粒を多く含む。 赤不良 ②暗灰黄色 2.5Y5/2	口縁やや内傾きみに開く。口縁上端に帯線状文、外面に縦、内面に横位の刷毛目。
P-707	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	頸部一側部 片	残存高13.7 頸部径13.3	①砂粒を含む。 赤不良 ②灰黄褐色 10YR5/2	頸部は弱い「く」字状に屈曲、球形の胴部に続く。頸部に等間隔止簾状文、口縁と肩に帯線状文を施す。胴下半分と内面は強い磨き。
P-708	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	胴部片	残存高11.6	①砂粒を含む。 赤良好 ③黒褐色 2.5Y3/1	やや下膨れの球形胴か。肩に帯線状文を重ねる。
P-709	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高8.7 口径19.5	①砂粒を多く含む。 赤不良 ③黒褐色 2.5Y3/1	口唇部はやや内傾する。口縁上端に1帯、下位に3帯の帯線状文。
P-710	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高7.2 口径 (16.0)	①砂粒を多く含む。 赤不良 ③黒褐色 2.5Y3/1	口唇部はやや内傾して実る。口唇外面に縦状具による簾状文状の刺突を露らす。頸部に4連止簾状文、外面に縦刷毛目を残す。
P-711	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一側 部片	残存高8.4 口径17.2	①砂粒を含む。 赤良好 ②灰黄褐色 10YR4/2	口縁やや内傾きみで口唇部は実る。頸部に2連止簾状文、口縁外面全体に波形の乱れた帯線状文を重ねる。内面に丁寧な磨き。
P-712	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一側 部片	残存高16.4 口径14.7	①砂粒を含む。 赤良好 ③黒褐色 2.5Y3/1	口縁は直線状に開き、頸部のしまりは弱い。頸部に2連止簾状文、口縁上位に2帯、肩に3帯の帯線状文。胴外面に縦、口縁内面に横位の丁寧な磨き。胴内面はなで。
P-713	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一側 部片	残存高9.0 口径12.2	①砂粒を含む。 赤良好 ③暗灰色 10YR4/1	口唇部内湾し、頸部は弓なりに屈曲する。頸部に2帯の2連止簾状文、口縁上端と下位、肩に帯線状文、口縁内面に横位の刷毛目、磨は磨き。
P-714	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一側 部片	残存高14.5 口径15.0	①砂粒を多く含む。 赤良好 ③黒褐色 10YR3/1	口唇部やや内傾、頸部は「く」字状に屈曲、胴部は球形に近い。頸部に間隔の空いた2連止簾状文、口縁全体と肩に波形の乱れた帯線状文を重ねる。
P-715	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一側 部片	残存高13.4 口径 (15.6)	①砂粒を含む。 赤良好 ③黒褐色 10YR3/1	口縁やや内湾きみに立ち、頸部は弱い「く」字状に屈曲。頸部に2連止簾状文、口縁には間隔を空けた、肩には重ねて3帯の帯線状文を施す。内面に丁寧な磨付着。
P-716	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一側 部片	残存高10.8 口径 (17.1)	①砂粒を含む。 赤不良 ②灰黄褐色 10YR5/2	口縁やや内傾きみで口唇部は実る。口縁上端と肩一肩に波線の細かい帯線状文、口縁外面に縦の刷毛目。
P-717	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高6.0 口径19.1	①砂粒を含む。 赤良好 ③黒褐色 2.5Y3/1	直線的に開く口縁で、上位に2帯の帯線状文、下位に縦刷毛目。
P-718	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一側 部片	残存高6.8 口径 (11.8)	①砂粒を含む。 赤良好 ③黒色2.5Y2/1	口縁短く外反し、肩の稜角の突起部に続く。頸部と肩に間隔の短い等間隔止簾状文、体中位に帯線状文。内面は横位の磨き。頸部に帯線状文のボタン状貼付文を付す。
P-719	樽式土器 小型壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一側 部片	残存高6.6 口径10.5	①砂粒を多く含む。 赤良好 ③赤灰色 10YR5/1	口縁短く外反し、短い「無花梨」形の胴部に続く。口縁上端に帯線状文、頸部に2連止簾状文。胴外面に縦、内面に横位の磨き。
P-720	樽式土器 小型壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一側 部片	残存高5.0 口径8.0	①砂粒を含む。 赤良好 ②灰黄褐色 10YR6/2	口縁短く外反し、頸部のしまりは弱い。口縁に帯線状文、頸部には簾状文の上に帯線状文先端利突のボタン状貼付文を付す。
P-721	樽式土器 小型壺	E区V面2 -2河下層	口縁部一側 部片	残存高6.7 口径11.0	①砂粒を含む。 赤良好 ③暗灰色 5YR4/1	口縁短く外反し、短い「無花梨」形の胴部に続く。口縁上端と肩一肩に帯線状文、内面は横位の磨き。

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・名称	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-722	棒式土器 小型台付甕	E区V面2 -2河下層	口縁部一割 部片	残存高10.0 口径6.9	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰黄色 2.5Y5/2	口縁短く外反し、扁平な「算盤玉」形の胴部に続く。頸部に等間隔止塵状文、肩に1帯の櫛歯状文。
P-723	棒式土器 (台付甕)	E区V面2 -2河下層	口縁部一割 部片	残存高10.6 口径17.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎ナリ 黒色10Y3/2	口縁短く外反、頸部は「く」字状に屈曲、球形胴部に続く。頸部に2道止塵状文、口縁と肩部に櫛歯状文を重ねる。胴下半は横毛目後被磨き、内面全体に横磨き。
P-724	棒式土器 (台付甕)	E区V面2 -2河下層	口縁部一割 部片	残存高5.9 口径14.2 胴 部最大径15.2	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎暗青灰 色5PB4/1	口縁短く直立し、頸部の屈曲は弱い。
P-725	棒式土器 小型甕	E区V面2 -2河下層	口縁部一割 部片	残存高8.0 口径12.6	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰色7. 5Y4/1	口縁やや内湾し、頸部は弓なりに屈曲する。口縁一帯に櫛歯状文を重ねる。内面は横磨き。
P-726	棒式土器 小型甕	E区V面2 -2河下層	口縁部一割 部片	残存高11.5 口径13.8	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎黄灰色 2.5Y6/1	口縁は小さく外反、頸部は弓なりに屈曲する。口縁一帯に櫛歯状文を重ねる。胴部外面は縦、内面は全体に斜一横の磨き。
P-727	棒式土器 小型台付甕	E区V面2 -2河下層	口縁部一割 部片	残存高4.7 口径9.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色 10YR5/2	口縁短く内湾、体部は扁平で、肩が張る。頸部に2道止塵状文、体部下半と口縁内面に刷毛目を残す。
P-728	棒式土器 小型台付鉢	E区V面2 -2河下層	完形	器高10.4 口 径7.0 底径 5.3	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 藍色5YR6/3	口縁短く直立さみに開く。体部は球形で、肩はやや外反する円錐形。外面は縦一斜、内面は横の磨き。
P-729	棒式土器 小型台付甕	E区V面2 -2河下層	口縁部一割 部片	残存高5.8 口径12.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 藍色2.5YR6/3	口縁短く外反、頸部は弱い「く」字状に屈曲。頸部に間隔を空けた2道止塵状文、口縁に3帯、肩部に1帯の櫛歯状文を施す。
P-730	棒式土器 (小型広口 甕)	E区V面2 -2河下層	口縁部一割 部片	残存高10.2 口径11.2	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎黒褐色 2.5Y3/1	口縁短く外反し、頸部は弱い「く」字状に屈曲、肩の張る胴部に続く。頸部に等間隔止塵状文。外面は縦、内面は横の幅の広い磨き。
P-731	棒式土器 (小型広口 甕)	E区V面2 -2河下層	ほぼ完形	器高12.5 口 径11.8 底径 4.7	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎黒色7. 5YR2/1	口縁やや長く外反し、頸部は短い「く」字状に屈曲、肩の張る胴部に続く。外面は縦、内面は横一斜の磨き。
P-732	棒式土器 台付甕	E区V面2 -2河下層	口縁部一割 部片	残存高7.0 口径14.5	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色10YR6/4	口縁短く外反し、肩の張る扁平な体部に続く。頸部に等間隔止塵状文、口唇部と肩に1帯の櫛歯状文。口縁と体部最大径の位置に刺突を加えたボタン状貼付文を付す。体部下半外面と内面全体に横の磨き。
P-733	棒式土器 台付甕	E区V面2 -2河下層	口縁部一割 部片	残存高9.4 口径13.1	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色 10YR5/2	口縁短く外反し、口唇部は内屈する。頸部は「く」字状に屈曲し、肩の張る扁平な体部に続く。口縁上端と頸部に櫛歯状文を施す。口縁と体部最大径の位置に刺突を加えた小さなボタン状貼付文を交互に付す。内面全体に磨き。胴下半外面に被熱痕。
P-734	棒式土器 台付甕	E区V面2 -2河下層	口縁部一割 部片	残存高8.2 口径14.7	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎暗灰色 10YR6/1	口縁短く外反、頸部は弱い「く」字状に屈曲し、肩の張る扁平な体部に続く。口縁上端、頸部、肩部に1帯づつの櫛歯状文を施す。口縁と体部最大径の位置に英文の小さなボタン状貼付文を交互に付す。内面全体に横磨き。口縁に縦、胴下半に被熱痕。
P-735	棒式土器 台付甕	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高6.6 底径6.2	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色10YR7/4	やや背の高い円錐形の脚部で下端は小さく面取り。外面に縦刷毛目を残す。
P-736	棒式土器 台付甕	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高7.7 底径8.8	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰黄色 2.5Y6/2	中位は柱状、下半はやや内湾して深く低い円錐形の脚部で、下端は小さく面取り。外面に縦磨き。
P-737	棒式土器 台付甕	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高7.8	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色 10YR5/2	円錐形の脚部で、外面は縦の丁寧な磨き。
P-738	棒式土器 台付甕	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高7.9 底径8.8	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色10YR7/3	やや背の高い円錐形の脚部で下端は小さく面取り。外面に縦磨き、内面に刷毛目を残す。
P-739	棒式土器	E区V面2	脚部片	残存高7.3	◎砂粒を多く含む。	やや背の高い円錐形の脚部で下端は小さく面取り。

遺物観察表

遺物番号	種別・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	粘土・焼成・色調	特 徴・その他
	台付蓋	-2河下層		底径9.0	◎良好 ◎灰褐色 10YR6/1	外面に縦磨き。
P-740	樽式土器 台付蓋	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高8.2 底径10.2	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰褐色 10YR5/8	正円錐形に冴い脚部で、裾面外面に小さく面取り。上半外面は被熱により赤変。
P-741	樽式土器 台付蓋	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高8.6 底径11.1	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰褐色 7.5YR5/2	やや外反する円錐形の脚部で、端部は丸みを帯びる。外面上半は縦磨き、下半と内面全体に刷毛目を残す。
P-742	樽式土器 高坏か台付蓋	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高11.7 底径11.1	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰褐色 7.5YR6/1	背の高い円錐形の脚部で、下端に面取り。坏部との接合は「ほぞ」穴に粘土塊を充填する。外面は縦磨き。
P-743	樽式土器 (小型台付鉢)	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴部片	残存高5.2 口径12.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R4/8	口縁強く外反し、体部は扁平な球形。内外面に赤彩、外面と口縁内面に横磨き。
P-744	樽式土器 (小型広口壺)	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴部片	残存高3.5 口径(15.5)	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰白色 2.5Y7/1	口縁強く外方に折れる。胴部に2連止塵状文、施文部以外の部分に赤彩。
P-745	樽式土器 蓋	E区V面2 -2河下層	ほぼ完形	器高8.0 底 径15.3	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色 10YR5/2	直線的に開く低い円錐形で、縁は外反びみに突出し、中央のくぼみはやや深い。外面は放射状、内面同心円状の磨き。
P-746	樽式土器 蓋	E区V面2 -2河下層	ほぼ完形	残存高2.2 底径7.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎赤褐色 10R4/4	全体に外反し縁が開く。下面は平坦で縁は不明。外面は放射状の磨きで、下面を除いて赤彩。
P-747	樽式土器 蓋	E区V面2 -2河下層	1/3残存	残存高6.2	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄褐色10YR7/3	背の高い円錐形と思われる。縁は柱状でくぼみの有無は不明。
P-748	樽式土器 (有孔鉢)	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高1.9 底径5.7	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎浅黄褐色 2.5Y7/3	底中央に1孔を穿つ。
P-749	樽式土器 (有孔鉢)	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高3.8 底径4.6	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰白色 N7/0	底中央に1孔を穿つ。
P-750	樽式土器 (有孔鉢)	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高4.9 底径5.0	◎粗砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎ にぶい黄褐色10YR 6/4	やや突出びみの底中央に1孔を穿つ。
P-751	樽式土器 (有孔鉢)	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高2.8 底径4.7	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄褐色10YR7/2	底中央に1孔を穿つ。
P-752	樽式土器 (有孔鉢)	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高3.6 底径6.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎浅黄褐色 10YR8/4	底中央に1孔を穿つ。内外面に刷毛目。
P-753	樽式土器 (有孔鉢)	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高4.3 底径5.5	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰オリ ープ色5Y6/2	やや突出びみの底中央に1孔を穿つ。
P-754	樽式土器 (有孔鉢)	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高3.9 底径4.8	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰褐色 Y5/1	底中央に1孔を穿つ。
P-755	樽式土器 (有孔鉢)	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高4.3 底径6.3	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎黄灰色 2.5Y6/1	やや突出びみの底中央に1孔を穿つ。
P-756	樽式土器 (有孔鉢)	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高5.5 底径5.3	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色10YR6/3	底中央に1孔を穿つ。内面に刷毛目残す。
P-757	樽式土器 (有孔鉢)	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高3.2 底径7.9	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄褐色 10YR4/2	底中央に1孔を穿つ。
P-758	樽式土器 (有孔鉢)	E区V面2 -2河下層	胴部-底部片	残存高5.4 底径6.1	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 褐色7.5YR5/3	底中央に1孔を穿つ。内面中に刷毛目残す。
P-759	樽式土器	E区V面2	胴部-底部片	残存高6.2	◎砂粒を多く含む。	底中央に1孔を穿つ。

遺物番号	種類・母体 (有孔鉢)	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
		-2河下層	片	底径5.0	胎不良 ⑤褐色 10YR5/1	
P-760	(佛式土器) 高坏	E区V面2 -2河下層	口縁部欠損	残存高9.0 底径5.0	胎砂粒を含む。 胎良好 ⑤赤色10 R5/6	中位は柱状。下半はやや外反して開く低い円錐形 の脚部で、端部は丸い。内外面に赤彩。
P-761	佛式土器 高坏	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高8.6 底径10.0	胎砂粒を含む。 胎良好 ⑤明赤褐色 2.5YR5/6	外反ぎみに開く円錐形の脚部で、下端に面取り。 外面と坏部内面に赤彩。
P-762	(佛式土器) 高坏	E区V面2 -2河下層	1/2残存	器高8.0 口 径9.3 底径 5.5	胎砂粒を多く含む。 胎不良 ⑤にぶい 赤褐色2.5YR4/4	内湾ぎみに開く円錐形の坏部に柱状でわずかに開く 小さな脚をもつ。口縁には小さな突起を付す。 外面と坏部内面に赤彩。
P-763	佛式土器 高坏	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高8.1 底径9.9	胎砂粒を多く含む。 胎良好 ⑤赤色10 R5/6	柱状の坏部接合部分から外反ぎみに開く円錐形の 脚部で、下端に面取り。外面に赤彩。
P-764	佛式土器 高坏	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高9.1 底径10.2	胎砂粒を含む。 胎良好 ⑤赤色10 R5/6	やや背が高く外反ぎみに開く円錐形の脚で、下端 は小さく面取り。外面は縦磨きと赤彩。
P-765	佛式土器 高坏	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高7.6 底径8.8	胎砂粒を多く含む。 胎不良 ⑤赤色10 R5/8	やや背が高く外反ぎみに開く脚で接合部分は太く 柱状に近い。下端は面取り。外面は縦磨きと赤彩。
P-766	佛式土器 高坏	E区V面2 -2河下層	口縁部欠損	残存高9.1 底径7.3	胎砂粒を含む。 胎良好 ⑤赤色10 R5/8	大きく内湾して開く坏部に背の高い円錐形の脚を もつ。端部は小さな面取り。外面は縦磨きと赤彩。
P-767	佛式土器 高坏	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高10.4	胎砂粒を多く含む。 胎良好 ⑤赤色10 R5/8	柱状の接合部分で、坏部はやや深い球状と思われ る。内外面に赤彩。
P-768	佛式土器 高坏	E区V面2 -2河下層	坏部片	残存高10.7 口径21.0	胎砂粒を含む。 胎良好 ⑤赤色10 R4/8	口縁は小さく外折し、口唇部はやや突る。体部は 内湾して開く。内外面とも縦磨きと赤彩。
P-769	佛式土器 高坏	E区V面2 -2河下層	1/4残存	器高15.3 口 径(17.0) 底径 (11.4)	胎砂粒を多く含む。 胎良好 ⑤赤色10 R4/6	内湾ぎみに開く円錐形の坏部と脚を接合した形状 で、端部は小さな面取り。内外面に赤彩。
P-770	佛式土器 高坏	E区V面2 -2河下層	坏部片	残存高10.0 口径21.3	胎砂粒を多く含む。 胎良好 ⑤赤色10 R4/6	口縁は小さく外折し、端部に筋による刻みを施す。 坏部は内湾ぎみに開く。内外面に赤彩。
P-771	鉢	E区V面2 -2河下層	1/3残存	器高12.0 口 径(18.8) 底径 6.9	胎砂粒を多く含む。 胎良好 ⑤にぶい 赤褐色2.5YR4/4	やや内湾して開く截頭円錐形で、底部はやや突出 した平底。外面は縦、内面は横の磨き。
P-772	小型鉢	E区V面2 -2河下層	1/4残存	器高6.7 口 径(11.6) 底径 6.2	胎砂粒を多く含む。 胎不良 ⑤灰白色 2.5GY7/1	やや内湾して開く截頭円錐形で、底部は安定した 平底。内外面とも縦の磨き。
P-773	碗	E区V面2 -2河下層	完形	器高4.5 口 径5.7 脚部 最大径7.0	胎砂粒を多く含む。 胎不良 ⑤灰色7. 5Y5/1	口縁一体部が偏平な球形、底部も丸底に近い。外 面は磨り、内面は磨き。
P-774	ミニチュア 壺	E区V面2 -2河下層	胴部一底部 片	残存高4.0 底径5.3	胎砂粒を多く含む。 胎不良 ⑤にぶい 黄褐色10YR5/3	球形の胴部で大きめの平底。外面は縦、内面は横 の磨き。
P-775	片口鉢	E区V面2 -2河下層	1/4残存	器高6.5 口 径(14.2) 底径 (6.0)	胎砂粒を含む。 胎不良 ⑤暗赤褐色 2.5YR3/6	直線的に開く截頭円錐形で、口縁の1ヶ所に浅い 注ぎ口を作り出す。口唇部には塵による刻みを施 す。内外面とも赤彩。
P-776	小型鉢	E区V面2 -2河下層	1/4残存	器高5.8 口 径(10.3) 底径 5.5	胎砂粒を含む。 胎不良 ⑤黄灰色 2.5Y6/1	やや外反して開く截頭円錐形で、底部はやや突出 した平底。外面下半に刷毛目、外面上半と内面に 横刷毛目。
P-777	小型鉢	E区V面2 -2河下層	1/3残存	器高6.5 口 径(11.5) 底径 5.4	胎砂粒を多く含む。 胎不良 ⑤にぶい 赤褐色2.5YR4/4	やや外反して開く截頭円錐形で、底部は安定した 平底。内外面に赤彩。外面下半に縦磨き、口縁内 面に横刷毛目。
P-778	佛式土器 小型鉢	E区V面2 -2河下層	ほぼ完形	器高5.5 口 径11.4 底径 4.6	胎砂粒を含む。 胎良好 ⑤灰オリ ープ色5Y5/2	内湾して開き、やや突出した平底をもつ。内外面 に横の丁寧な磨き。
P-779	鉢	E区V面2 -2河下層	1/4残存	器高7.6 口 径15.3 底径	胎砂粒を含む。 胎良好 ⑤黄灰色	やや外反して開く截頭円錐形で、底部は安定した 平底。口縁端部はわずかに内湾する。外面は縦、

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特 徴・その他
P-780	樽式土器 小型鉢	E区V面2 -2河下層	1/4残存	7.0 器高5.0 口 径11.6 底径 4.9	2.5Y6/1 ◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 赤褐色2.5YR4/4	内面は横磨き。 直線的に開く鉄頭円錐形で、底部は安定した平底。 外面は縦、内面は横磨き。内外面は赤彩。
P-781	樽式土器 小型鉢	E区V面2 -2河下層	1/4残存	器高6.5 口 径12.0 底径 5.5	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰黄色 2.5Y5/1	直線的に開く鉄頭円錐形で、底部は安定した平底。 外面は斜、内面は横磨き。
P-782	樽式土器 片口鉢	E区V面2 -2河下層	1/3残存	器高10.7 口 径(12.7) 底径5.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色10YR7/2	内湾する口縁の1ヶ所に片口を設ける。内外面とも に赤彩。
P-783	樽式土器 片口鉢	E区V面2 -2河下層	完形	器高10.5 口 径6.8 底径 5.0 胴部最 大径13.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR5/3	口縁は大きく内湾し、肩の張る体部に続く。外面 下半に縦刷毛目を残し、内外面とも磨きを施す。
P-784	底部	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高2.2 底径9.1	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR5/3	縦圧痕3ヶ所。
P-785	底部	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高3.8 底径8.6	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎褐色 10YR4/1	縦圧痕5ヶ所。
P-786	底部	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高3.7 底径10.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR7/3	縦圧痕1ヶ所。
P-787	底部	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高2.8 底径10.3	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色10YR6/4	縦圧痕1ヶ所。
P-788	底部	E区V面2 -2河下層	底部片	残存高2.6 底径8.1	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎褐色 10YR5/1	縦圧痕3ヶ所。
P-1094	竜見町式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴 部片	残存高11.0 口径13.6	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎淡黄褐色 7.5YR8/3	口縁短く外反。胴部は細く筒状。
P-1095	(竜見町式土器) 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴 部片	残存高7.3 口径12.9	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎淡黄色 2.5Y8/3	口縁短く外反。胴部に開閉の短い2止垂線状文。 外面に斜刷毛目、内面に横磨き。
P-1096	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高10.5 口径22.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎淡赤褐色 2.5YR7/4	口縁短く外反して開く。口縁部は小さく折り返し、 外面に横磨き状文、口縁断面は薄い「産鉢」状。 胴部外面横磨き。
P-1097	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴 部片	残存高13.0 口径23.6	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色10YR7/3	口縁直線的に開き、胴部は折り返し、断面は薄い 波溝状。口縁外面に横磨き状文の後、龍押捺。外面 は縦磨き、内面は横刷毛目。
P-1098	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高4.6 口径24.3	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色 5YR6/6	外反して開く、断面方形の折り返し口縁。口縁外 面に横磨き状文の後2ヶ所対峙の粘土瘤貼付文を付 す。
P-1099	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部片	残存高7.6 口径(21.4)	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰黄色 2.5Y6/2	外反して開く、断面直線的に折り返し口縁。口縁 外面に板小口による彫みを施す。胴部外面は斜 刷毛目、内面は横磨き。
P-1100	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	胴部-底部 片	残存高15.8 底径7.1	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰黄褐色 10YR6/2	肩の張る体部下位がやや膨らむ。胴部に2止垂 線状文、肩に開を空けて2帯の横磨き状文。体部 外面は磨き。
P-1101	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴 部片	残存高12.9 口径15.6	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄色 2.5Y4/1	口縁は外反ぎみに開き、胴部は「く」字状に屈曲。 胴部に2止垂線状文、口縁と胴上半に縦磨きの大 きい横磨き状文を施す。
P-1102	樽式土器 (台付壺)	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴 部片	残存高8.0 口径12.3 胴 部最大径14.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色 10YR4/1	口縁は短く直立、胴部は弱く牽り、球形胴部に続 く。胴部に2止垂線状文、口縁と肩に1-2帯の 横磨き状文。
P-1103	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	口縁部-胴 部片	残存高6.0 口径18.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎緑褐色 10G2/1	口縁は外反ぎみに開き、胴部は弓なりに屈曲する。 口縁-胴部に縦磨きの大い横磨き状文を重ねる。 内面は横磨き。
P-1104	樽式土器 壺	E区V面2 -2河下層	胴部-胴部 片	残存高10.2 胴部径15.9	◎粘粉粒を多く含む。 ◎不良 ◎	胴部は短い「く」字状に屈曲し、体部はやや肩が 張る。胴部に開閉の短い2止垂線状文、肩に縦

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-1105	(樽式土器) 小型甕	E区V面2 -2河中庸	口縁部-胴 部片	残存高7.5 口径15.6	灰色5Y6/1	瓶の大きい帯楕圓状文を3重重ねる。 口縁は広く弓なりに反外し、体部の肩の張りは小さい。頸部に等間隔直線状文、その下位に4本単位のやや太い帯楕圓状文1帯を施す。口縁下位外面と頸部内面に刷毛目。
P-1106	(樽式土器) 甕	E区V面2 -2河中庸	口縁部-胴 部片	残存高8.9 口径(14.6)	赤砂粒を多く含む。 赤不良 赤灰黄褐色10YR5/2	口縁は広く弓なりに開き、頸部は弓なりに屈曲する。頸部に2連直線状文、口縁と体部に横線状文。内面は丁寧な横磨き。
P-1107	(樽式土器) 小型甕	E区V面2 -2河中庸	口縁部-胴 部片	残存高9.5 口径11.4 胴 部最大径11.9	赤砂粒を多く含む。 赤不良 赤褐色10YR5/1	口縁は内湾して小さく開く。頸部は弓なりに屈曲する。無文。
P-1108	樽式土器 台付甕	E区V面2 -2河中庸	口縁部-胴 部片	残存高11.4 口径17.3 胴 部最大径17.4	赤砂粒を多く含む。 赤不良 赤灰黄褐色10YR5/2	口縁部やや長く直線的に開く。頸部は「く」字状に屈曲する。偏平な球形胴。頸部に等間隔直線状文、口縁部端と胴上半分に帯楕圓状文。口縁部上端と胴最大径の位置に小さい無文ボタン状貼付文を付す。口縁下半外面に刷毛目、内面は横磨き。
P-1109	樽式土器 台付甕	E区V面2 -2河中庸	口縁部-胴 部片	残存高14.4 口径(15.0) 胴部最大径17.0	赤砂粒を含む。 赤良好 赤灰黄褐色10YR4/2	口縁-頸部は弓なりに屈曲する。胴部は「算盤玉」状に膨らむ。口縁部-胴上半分に帯楕圓状文を重ねる。胴最大径の位置に小さい無文ボタン状貼付文。
P-1110	有孔鉢	E区V面2 -2河中庸	底部片	残存高4.0 底径4.7	赤砂粒を多く含む。 赤良好 赤にぶい 褐色7.5YR6/3	突出ぎみの底中央に1孔を穿つ。
P-1111	有孔鉢	E区V面2 -2河中庸	底部片	残存高5.1 底径6.2	赤砂粒を含む。 赤不良 赤灰黄褐色10YR6/2	截頭円錐形で底中央に1孔を穿つ。
P-1112	樽式土器 鉢	E区V面2 -2河中庸	口縁部-底 部片	器高6.4 口 径(14.6) 底径(6.1)	赤砂粒を多く含む。 赤良好 赤にぶい 赤褐色2.5YR4/3	内湾して開く截頭円錐形。内外面磨き。
P-1113	樽式土器 鉢	E区V面2 -2河中庸	口縁部-底 部片	器高7.2 口 径(14.4) 底径(4.6)	赤砂粒を含む。 赤良好 赤灰黄褐色10YR5/2	直線的に開く截頭円錐形で、外面は縦、内面は横の丁寧な磨き。
P-1114	高坏	E区V面2 -2河中庸	脚部片	残存高6.5 底径7.2	赤砂粒を含む。 赤良好 赤赤色10 R5/6	やや内湾ぎみに開く円錐形の脚で、基部は丸い。外面に赤彩。
P-1115	(高坏)	E区V面2 -2河中庸	脚部片	残存高6.1 底径9.9	赤砂粒を多く含む。 赤良好 赤にぶい 赤色2.5Y6/3	円錐形の脚で、裾下端は面取り。外面は縦磨き。
P-1116	高坏	E区V面2 -2河中庸	脚部片	残存高6.1 底径9.9	赤砂粒を含む。 赤不良 赤赤色7. 5R4/8	やや背の高い円錐形で、基部は小さな面取り。外面に赤彩。
P-1117	高坏	E区V面2 -2河中庸	脚部片	残存高7.9 底径6.6	赤砂粒を含む。 赤不良 赤赤色10 R5/6	円錐形の脚で、裾下端は面取り。外面に赤彩。
P-1118	高坏	E区V面2 -2河中庸	脚部片	残存高8.3 底径6.7	赤砂粒を多く含む。 赤不良 赤赤色10 R5/8	柱状の脚で、裾は外反して開く。外面に赤彩、内面の一部に顔料がつく。
P-1119	(竜見町式 土器) 高坏	E区V面2 -2河中庸	脚部片	残存高7.1 底径9.6	赤砂粒を多く含む。 赤良好 赤赤色10 R5/8	坏との結合部は柱状で下平が円錐形に大きく開く。外面に赤彩。
P-1120	高坏	E区V面2 -2河中庸	脚部片	残存高9.0 底径8.9	赤砂粒を多く含む。 赤不良 赤赤色10 R4/6	やや背の高い円錐形で裾下端は面取り。外面に赤彩、内面一部に顔料がつく。
P-1121	高坏	E区V面2 -2河中庸	坏部-脚部 片	残存高15.4	赤砂粒を多く含む。 赤不良 赤暗赤色 10R3/4	坏部は内湾して開き、脚は円錐形。坏部内面と外面全体に赤彩。胴内面まで。
P-1122	高坏	E区V面2 -2河中庸	脚部片	残存高16.4 底径14.9	赤砂粒を多く含む。 赤良好 赤赤色10 R4/6	背の高い円錐形の脚で、内面に刷毛目。坏部内面と外面全体に赤彩。
P-1167	竜見町式 器 甕	E区V面2 -1河下層	頸部-胴部 片	残存高7.3 頸部径6.4	赤砂粒を多く含む。 赤良好 赤灰黄褐色	頸部は横く「く」字状に屈曲する。斜縄文(LR)を地文に3本のやや太い沈線による直線文を施

遺物観察表

遺物番号	種類・器様	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-1168	電見町式土器 壺	E区V面2 -1河下層	口縁部片	残存高6.1 口径16.2	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③浅黄色 2.5Y7/3	す。 口縁部は内湾して立ち上り、頸部は弓なりに屈曲する。口縁外面に斜線文(L.R)。
P-1169	樽式土器 壺	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴部片	残存高12.7 口径21.0	①砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色 7.5YR6/2	外反ぎみに開く湾り返し口縁で、口縁断面は浪濤状。頸部は「く」字状に屈曲する。頸部上下2帯の2連止帯文、肩に帯播波状文。
P-1170	樽式土器 壺	E区V面2 -1河下層	頸部-胴部片	残存高12.0 頸部径(12.2)	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③にぶい黄褐色10YR7/2	頸部は弓なりに屈曲。なで肩。肩に2条の沈線を垂下したT字文。下位に帯播波状文を重ねる。
P-1171	樽式土器 壺	E区V面2 -1河下層	頸部-胴部片	残存高18.0 頸部径(11.0)	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③褐色 10YR5/1	頸部は弓なりに屈曲。なで肩。頸部に等間隔止帯状文、肩に間隔を空けた6帯の帯播波状文。波状文下位に沈線を入れたボタン状貼付文。外面は磨き、内面は鉄錆目目。
P-1172	樽式土器 壺	E区V面2 -1河下層	頸部-胴部片	残存高9.7 頸部径11.8	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③灰黄色 2.5Y7/2	頸部は弓なりに屈曲し、上下2帯の3連止帯文、肩に3帯の帯播波状文。内面一部に刷毛目を残す。
P-1173	樽式土器 壺	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴部片	残存高13.6 頸部径13.6	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③灰黄褐色 10YR6/2	口縁は直線的に開き、頸部は弱く「く」字状に屈曲する。頸部に2連止帯文、肩に帯播波状文を重ねる。
P-1174	樽式土器 壺	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴部片	残存高11.6 頸部径13.0	①砂粒を多く含む。 ②不良 ③褐色 10YR6/1	口縁は直線的に開き、頸部は弱く「く」字状に屈曲する。頸部に2連止帯文、肩に帯播波状文を重ねる。
P-1175	樽式土器 壺	E区V面2 -1河下層	頸部-胴部片	残存高37.8 胴部最大径36.7	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③灰黄色 2.5Y4/1	「罎」形の胴部で、頸部は「く」字状に屈曲する。頸部に2連止帯文、肩に4帯の帯播波状文。外面磨き、内面刷毛目。
P-1176	樽式土器 壺	E区V面2 -1河下層	頸部-胴部片	残存高17.6	①砂粒を含む。 ②良好 ③にぶい褐色5YR7/3	5-6帯の帯播波状文を施し、下位に横沈線をいれたボタン状貼付文を付す。
P-1177	樽式土器 壺	E区V面2 -1河下層	頸部-胴部片	残存高11.7	①砂粒を含む。 ②良好 ③褐色 10YR5/1	頸部に2連止帯文、肩に振幅の小さい帯播波状文7帯をやや間隔を空けて施す。下位に帯播波文具の先端による刺突を加えたボタン状貼付文を付し、細い沈線で斜線光環の断面文を描く。
P-1178	樽式土器 壺	E区V面2 -1河下層	頸部-胴部片	残存高26.1	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③暗灰黄色 2.5Y3/2	頸部は弓なりに屈曲し、なで肩。頸部に2連止帯状文、肩に3帯の帯播波状文と下位に細い沈線で斜線光環の断面文を描く。
P-1179	樽式土器 壺	E区V面2 -1河下層	頸部片	残存高13.2 頸部径11.5	①小礫を含む。砂粒を多く含む。 ②良好 ③明褐色 5YR7/2	頸部は弓なりに屈曲する。頸部に2連止帯文、肩に1帯の帯播波状文、下位に細い沈線で斜線光環の断面文を描く。
P-1180	樽式土器 罎	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴部片	残存高9.4 口径15.0	①砂粒を含む。 ②良好 ③オリーブ黒色5Y3/1	口縁は外反ぎみに開き、上端は小さく内屈、頸部は「く」字状に屈曲。頸部に等間隔止帯状文、口縁上半と肩に帯播波状文。口縁上端に小さな無文ボタン状貼付文を付す。
P-1181	樽式土器 台付罎	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴部片	残存高6.0 口径14.4 胴部最大径15.1	①砂粒を含む。 ②良好 ③灰黄褐色 10YR6/2	口縁小さく外反、頸部は弱く「く」字状に屈曲、頸部は扁平で肩が張る。頸部に2連止帯状文、口縁と肩に帯播波状文。
P-1182	樽式土器 罎	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴部片	残存高13.8 口径17.2	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③黒褐色 7.5YR3/1	口縁は長く直線的に開き、頸部は弱く「く」字状に屈曲。口縁上端と頸部-胴部に帯播波状文。口縁上端に小さな無文ボタン状貼付文を付す。
P-1183	樽式土器 罎	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴部片	残存高17.2 口径17.1 胴部最大径21.4	①砂粒を含む。 ②良好 ③灰色 5Y4/1	口縁は長く外反ぎみに開き、頸部は弱く「く」字状に屈曲。球形胴に張る。頸部に等間隔止帯状文、口縁上端と下位、肩にやや振幅の大きい帯播波状文。
P-1184	樽式土器 罎	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴部片	残存高18.0 口径(15.2) 胴部最大径(20.3)	①砂粒を含む。 ②不良 ③オリーブ黒色7.5Y3/1	口縁やや短く頸部は小さく内屈。頸部に2連止帯状文、口縁と肩に間を空けた帯播波状文。
P-1185	樽式土器 小型罎	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴部片	残存高6.8 口径11.0	①砂粒を含む。 ②良好 ③灰黄褐色 10YR4/2	口縁短く直立ぎみに開く。頸部に3連止帯状文、口縁と肩に帯播波状文を重ねる。

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・種別	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-1186	棒式土器 甕	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴 部片	残存高10.7 口径19.3	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰褐色 7.5YR4/2	口縁は長く直線的に開き、上端は小さく内屈。胴部に2道止塵状文、口縁上端と中位以下に振幅の大きい櫛掻波状文を並ねる。
P-1187	棒式土器 甕	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴 部片	残存高8.2 口径17.8	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰色5 Y4/1	口縁は弓なりに外反。胴部に2道止塵状文、口縁に振幅の小さい櫛掻波状文を並ねる。
P-1188	棒式土器 甕	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴 部片	残存高14.4 口径18.9	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色 5YR4/1	口縁はやや短く外反。胴部は弓なりに屈曲。胴部に2道止塵状文、肩に2帯の櫛掻波状文。
P-1189	(棒式土器) 甕	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴 部片	残存高6.6 口径16.6	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎暗灰黄色 2.5Y5/2	口縁は長く直線的に開き、胴部は「く」字状に屈曲。肩の張り弱い。胴部に2帯の2道止塵状文、肩に櫛掻波状文。口縁外面に刷毛目を残し、上端は横なで。
P-1190	棒式土器 甕	E区V面2 -1河下層	口縁部-胴 部片	残存高16.6 口径(17.3) 胴部最大径(19.6)	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎黒褐色 2.5Y3/1	口縁は外反ぎみに開く。内外面刷毛目の後口縁上端を横なで。
P-1191	棒式土器	E区V面2 -1河下層	胴部片	残存高9.1 胴部径13.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎黒褐色 10YR3/1	胴部は弱く「く」字状に屈曲。胴部に2道止塵状文、口縁と肩に櫛掻波状文を並ねる。
P-1192	棒式土器 甕	E区V面2 -1河下層	胴部-胴部 片	残存高13.2	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎褐色 10YR5/1	球形胴で、肩に櫛掻波状文を並ねる。
P-1193	(家園系土器) 甕	E区V面2 -1河下層	底部片	残存高3.3 底径5.6	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎オリーブ 黒色5Y3/1	胴-底部に附加糸文(LR+2L)。底面に木葉文。
P-1194	棒式土器 甕	E区V面2 -1河下層	胴部-底部 片	残存高15.8 底径7.7	◎粗砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎ にぶい黄褐色10YR 7/2	やや肩の張る体部に底部は突出さ。胴上半に振幅の小さい櫛掻波状文。
P-1195	棒式土器 台付甕	E区V面2 -1河下層	胴部-胴部 片	残存高9.9 胴部径15.1	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色 7.5YR5/1	胴部は弓なりに屈曲。体部は扁平な球形。胴部に3道止塵状文、肩に2帯の櫛掻波状文。故状文帝中央に無文ボタン状貼付文を付す。内外面とも横書き。胴外面に長さ7ミリの稜筋。
P-1196	棒式土器 小型台付甕	E区V面2 -1河下層	脚部欠損	残存高12.8 口径12.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎褐色 7.5YR4/1	口縁部短く直線的に開く。胴部は「く」字状に屈曲。やや肩の張る体部に鋭く。口縁-肩に乱れた櫛掻波状文。体下半-胴外面に縦書き。
P-1197	棒式土器 小型台付甕	E区V面2 -1河下層	脚部欠損	残存高9.3 口径9.8	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色 7.5YR4/1	口縁短く直線的に開く。胴部は「く」字状に屈曲。球形の体部に鋭く。体上半は横、体下半-胴外面に縦書き。
P-1198	棒式土器 小型台付甕	E区V面2 -1河下層	脚部欠損	残存高8.1 口径(8.1)	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色 7.5YR4/1	口縁部短く直線的に開く。胴部は「く」字状に屈曲。やや肩の張る体部に鋭く。胴部に等間隔止塵状文、肩に櫛掻波状文。口縁に無文ボタン状貼付文を付す。
P-1199	有孔鉢	E区V面2 -1河下層	底部片	残存高3.8 底径5.2	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎褐色 7.5YR6/1	底部中央に1孔を穿つ。内面磨き。
P-1200	有孔鉢	E区V面2 -1河下層	底部片	残存高4.9 底径4.9	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄色 2.5Y6/2	底部中央に1孔を穿つ。外面は縦刷毛目。内面磨き。
P-1201	有孔鉢	E区V面2 -1河下層	底部片	残存高4.4 底径4.4	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰黄褐色 10YR6/2	やや突出する底部中央に1孔を穿つ。内外面磨き。
P-1202	有孔鉢	E区V面2 -1河下層	底部片	残存高3.5 底径5.0	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰黄色 2.5Y6/2	底部中央に1孔を穿つ。内外面磨き。
P-1203	棒式土器 小型鉢	E区V面2 -1河下層	口縁部-底 部片	器高0.3 口 径12.0 底径 5.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎ 赤褐色2.5YR5/4	数面円錐形で、内外面とも赤彩。
P-1204	棒式土器 鉢	E区V面2 -1河下層	2/3残存	器高7.0 口 径14.0 底径	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰黄褐色	数面円錐形で、底部はやや突出する。内外面は横書き。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	粘土・焼成・色調	特 徴・その他
				5.3	色10YR5/2	
P-1205	樽式土器 鉢	E区V面2 -1河下層	2/3残存	器高7.5 口 径14.1 底径 6.8	①砂粒を多く含む。 ②不良 ③赤色10 R4/6	鉄山円錐形で、大きめの安定した底部をもつ。口 縁上縁は小さく内湾。内外面に赤彩。
P-1206	樽式土器 鉢	E区V面2 -1河下層	ほぼ定形	器高7.4 口 径15.9 底径 5.2	①砂粒を多く含む。 ②不良 ③灰黄色 2.5Y6/2	内湾きみに開く鉄山円錐形で、やや突出する底部 をもつ。内外面に磨き。
P-1207	(亀見町式 土器) 高坏	E区V面2 -1河下層	1/3残存	器高9.4 口 径(13.2) 底径(8.4)	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③灰白色 5YR8/2	坏部は内湾して開き、小さく外反する脚をもつ。 脚との結合は「ほぞ穴」への粘土塊光景による。
P-1208	高坏	E区V面2 -1河下層	脚部片	残存高5.0 底径(7.0)	①砂粒を多く含む。 ②不良 ③赤褐色 2.5YR4/6	円錐形の脚で、裾端に小さな面取り。坏部内面と 外面全体に赤彩。
P-1209	高坏	E区V面2 -1河下層	脚部片	残存高6.7 底径8.9	①砂粒を含む。 ②良好 ③赤色10 R4/6	やや外反する円錐形の脚で、裾端は丸い。外面に 赤彩。
P-1210	(台付壺)	E区V面2 -1河下層	脚部片	残存高6.1 底径8.8	①砂粒を含む。 ②不良 ③灰黄色 2.5Y6/2	管の低い円錐形で裾端は丸い。外面は磨き。
P-1211	高坏	E区V面2 -1河下層	脚部片	残存高6.6 底径9.5	①砂粒を多く含む。 ②不良 ③暗赤色 10R3/6	円錐形の脚で、裾端に小さな面取り。外面下半に 赤彩、他は磨き。
P-1212	高坏	E区V面2 -1河下層	脚部片	残存高7.9 底径11.0	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③赤色10 R4/6	やや外反する円錐形の脚で、裾端は丸い。外面に 赤彩。
P-1213	高坏	E区V面2 -1河下層	脚部片	残存高8.1 底径9.6	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③赤色10 R4/6	やや外反する円錐形の脚で、裾端は面取り。外面 に赤彩。内面に磨毛目を残す。
P-1214	台付壺	E区V面2 -1河下層	脚部片	残存高8.0 底径9.7	①砂粒を含む。 ②不良 ③にぶい 黄色2.5Y6/3	円錐形の脚で、裾端に小さな面取り。外面は磨の 磨き。
P-1215	高坏	E区V面2 -1河下層	脚部片	残存高13.0 底径16.6	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③赤色10 R4/6	やや外反する円錐形の脚で、裾端は丸い。外面に 赤彩。内面下半に磨毛がつく。
P-1216	蓋	E区V面2 -1河下層	1/3残存	器高3.0 底 径11.6	①砂粒を含む。 ②良好 ③赤色10 R4/6	扁平な鉄山円錐形で縁はない。裾部に小さな繫縛 孔1ヶを穿つ。
P-1217	(土師器) 甕支脚か	E区V面2 -1河下層	ほぼ定形	器高9.1 底 径6.1	①砂粒を多く含む。 ②不良 ③褐灰色 10YR5/1	中空の柱状で下縁はやや外反する。外面はなで。
P-1485	樽式土器 壺	E区V面2 -1河中等	口縁部-胴 部片	残存高33.8 口径23.6	①砂粒を多く含む。 ②良好 ③灰黄褐色 10YR5/2	口縁は直線的に開き、裾部は薄い「薄折」形断面 の折り返し。外面には開きを空けて堦による肩を 高らす。頸部は弱い「く」字状で、全ての体部 に続く。頸部に3帯の間隔の短い等間止兼状文、 肩に幅幅の大きい帯流波状文を重ねる。
P-1486	樽式土器 壺	E区V面2 -1河中等	口縁部-胴 部片	残存高7.8 口径18.1	①砂粒を含む。 ②良好 ③オリーブ 黒色5Y3/1	口縁はやや短く外反、裾部は小さく内湾。頸部は 弓なりに屈曲。頸部に2帯の2通止兼状文、口縁 上縁に帯流波状文、口縁外面に縦刷毛目。
P-1487	樽式土器 壺	E区V面2 -1河中等	口縁部-胴 部片	残存高7.2 口径18.1	①砂粒を多く含む。 ②不良 ③ オリーブ黄色5Y 6/3	口縁は外反きみに開き、裾部は薄い「薄折」形断 面の折り返し。口縁全体に帯流波状文を重ねる。
P-1488	樽式土器 壺	E区V面2 -1河中等	口縁部-胴 部片	残存高8.9 口径(21.3)	①砂粒を多く含む。 ②不良 ③褐灰色 7.5YR4/1	口縁は外反きみに開き、裾部は薄い折り返し。口 縁全体に帯流波状文を重ねる。頸部に兼状文小。
P-1489	樽式土器 壺	E区V面2 -1河中等	口縁部-胴 部片	残存高5.8 口径14.1	①砂粒を含む。 ②不良 ③褐灰色 7.5YR4/1	口縁はやや短く外反、裾部は内湾きみに立つ。頸 部は弓なりに屈曲。頸部に等間止兼状文、口縁 上縁に帯流波状文、口縁外面に縦刷毛目。
P-1490	樽式土器 壺	E区V面2 -1河中等	頸部-胴部 片	残存高8.5 頸部径(13.0)	①砂粒を多く含む。 ②不良 ③灰黄褐色 10YR5/2	頸部は弓なりに屈曲、球形胴に続く。頸部に2通 止兼状文、肩に帯流波状文を重ねる。

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	粘土・焼成・色調	特徴・その他
P-1491	棒式土器 壺	E区V面2 -1河中等	頸部-胴部 片	残存高12.1	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰オリ -7色7.5Y4/2	球形の例で、頸部に2連止兼状文、肩に櫛輪波状文、波状文帯7位に刺突を加えたボタン状貼付文を付す。
P-1492	東国東系土器 壺	E区V面2 -1河中等	底部片	残存高2.2 底径6.5	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰色5 Y4/1	外側に附加糸縄文(1根LR+2L)、底面に木炭痕を残す。
P-1493	小型鉢	E区V面2 -1河中等	完形	器高5.1 口 径10.7 底径 6.4	◎粗砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎良 ◎ 浅褐色2.5Y7/3	内湾きみに開く截頭円錐形で、大きめの安定した平底。内外面はなで。
P-1494	棒式土器 (小型台付壺)	E区V面2 -1河中等	口縁部-胴部 片	残存高5.1 口径(13.0)	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎赤色10 R5/8	口縁短く頸部で強く屈曲し、肩の張る体部へ続く。口唇部に削み。内外面は縦磨きで赤彩。
P-1495	棒式土器 台付壺	E区V面2 -1河中等	頸部-胴部 片	残存高9.7	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎赤色10 R5/6	体部は肩が張り、急にすばまって脚に続く。内外面に横磨き。体部下半は縦磨き。胴面に赤彩。
P-1496	棒式土器 台付壺	E区V面2 -1河中等	胴部-脚部 片	残存高10.8	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R5/6	体部は肩が張り、急にすばまって脚に続く。内外面は横刷毛目、体部下半は縦磨き。内外面に赤彩。
P-1497	(棒式土器) 高坏	E区V面2 -1河中等	脚部欠損	残存高9.9 口径19.0	◎粗砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色5YR6/4	口縁部は弱く屈曲して外反、体部は中位で膨らむ。頸部外面に縦刷毛目を残し、他は内外面とも縦磨き。
P-1498	高坏	E区V面2 -1河中等	脚部片	残存高7.3 底径7.4	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎赤色10 R5/6	背の高い円錐形で、頸部は下面に取り、外面は縦磨き、内面は横刷毛目、坏部外面と外面に赤彩。
P-1499	高坏	E区V面2 -1河中等	脚部片	残存高6.1 底径8.4	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎赤色10 R5/6	背が低く開いた円錐形で頸部は丸い。外面は縦磨き、内外面赤彩。
P-1500	高坏	E区V面2 -1河中等	脚部片	残存高6.1 底径9.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤褐色 10R5/8	外反する円錐形、外面は磨き、内面は横刷毛目。内外面赤彩。
P-1501	台付壺	E区V面2 -1河中等	脚部片	残存高8.3 底径9.5	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄褐色10YR7/2	直線的に開く円錐形で頸部は丸い。外面は縦磨き。
P-1507	棒式土器 壺	E区V面2 河上層	口縁部-頸部 片	残存高18.2 口径7.7	◎粗砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎ にぶい褐色7.5YR 6/4	口縁-頸部は巧みに外反し、口縁端部は断面が薄く方形状の折り返し。折り返し部外面に指頭圧痕を残す。頸部に簾状文が。
P-1508	棒式土器 壺	E区V面2 河上層	口縁部片	残存高9.0 口径24.2	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰白色 10YR8/2	口縁は直線状に開き、口縁端部は断面直流状の折り返し。折り返し下端は指頭押圧による削み。外面刷毛目磨き。内面に赤彩。
P-1509	棒式土器 壺	E区V面2 河上層	口縁部-胴部 片	残存高15.3 口径20.7	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 褐色5YR6/3	口縁は頸部から直立して中位で緩く外反、端部は薄く折り返し。頸部に4連止兼状文、口縁全体と肩に縦刷毛と波長の大きい櫛輪波状文。
P-1560	吉ヶ谷・赤井戸系土器 小型台付壺	E区V面2 河上層	口縁部-胴部 片	残存高7.5 口径(11.8)	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎黒灰色 7.5YR4/1	口縁小さく外反、頸部は「く」字状に屈曲、やや肩の張る胴に続く。口縁-胴上半に3本の横位刺突縄文(見し)を施す。
P-1561	棒式土器 (小型壺)	E区V面2 河上層	胴部-底部 片	残存高8.5 底径6.2	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰白色 10YR7/1	長脚で安定した大きめの平底をもつ。胴部に2連止兼状文。
P-1562	棒式土器 小型台付壺	E区V面2 河上層	ほぼ完形	器高13.2 口径10.1	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎黒灰色 10YR4/1	口縁短く外反、端部はやや内傾、扁平で肩の張る胴部に続く。脚は外反きみの円錐形。口縁と肩に櫛輪波状文。
P-1563	棒式土器 小型台付壺	E区V面2 河上層	脚部欠損	残存高10.3 口径10.0 胴 部最大径11.9	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰褐色 7.5YR5/2	口縁短く直立し口縁端部はやや内傾、頸部で弱く屈曲し偏平な球形胴に続く。口縁上端と肩に櫛輪波状文。胴外面下半に被熱痕。
P-1564	高坏	E区V面2 河上層	脚部片	残存高11.1 底径12.0	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰黄褐色 10YR8/2	背の高い外反きみの円錐形で、外面は縦の磨き。坏部を逆転して磨み上げ成型したと思われる。
P-1565	高坏	E区V面2 河上層	脚部片	残存高6.5 底径14.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎赤色10 R4/6	直線的に開く円錐形か。頸部は丸い。外面赤彩。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-1566	樽式土器鉢	E区V面2 河上層	ほぼ定形	器高7.0 口径13.0 底径5.4	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎赤褐色 2.5YR4/6	やや器高が高く、直線的に開く截頭円錐形。内外面赤彩。
P-1567	(蓋)	E区V面2 -2河下層	口縁部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R5/6	口縁は、外面に強い稜をつくって立ち上がる。外面に上下2列に並ぶ隅内彫文を漆で描く。内外面赤彩。
P-1568	不明	E区V面2 -2河下層	胴部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R4/8	外面に縦列点文を漆で描く。内外面赤彩。
P-1569	高坏小鉢	E区V面2 -1河下層	口縁部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R5/8	内外面に口縁沿いに縦列点文を漆で描く。内外面赤彩。
P-1570	高坏小鉢	E区V面2 -2河下層	口縁部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤褐色 2.5YR5/6	口縁内外面に小さな刷文文を漆で描く。内外面赤彩。
P-1571	高坏小鉢	E区V面2 -2河下層	口縁部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R4/8	口縁は内湾し、口縁内外面に小さな刷文文を漆で描く。内外面赤彩。
P-1572	高坏	E区V面2 -2河下層	口縁部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎赤色10 R4/6	口縁端は小さく外折し口唇に開く。内面に乱れた刷文文を漆で描く。内外面赤彩。
P-1573	高坏	E区V面2 -1河下層	口縁部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎赤色7.5 R4/8	口縁端は外折して肥厚する。口縁上の平坦面に円文、内面に刷文文を漆で描く。内外面赤彩。
P-1574	高坏	E区V面2 -2河下層	口縁部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R4/6	口縁は「U」字状に屈曲して外反し、口縁上面に刷文文、肩部に4列の横列点文を漆で描く。外面全体と口縁内面に赤彩。
P-1575	高坏	E区V面2 -1河下層	口縁部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色7.5 R4/6	口縁端は外折して肥厚する。口縁上の平坦面に円文、内面に刷文文を漆で描く。内外面赤彩。P-1573と同一。
P-1576	高坏	E区V面2 -1河下層	坏部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎赤色10 R5/6	取り出した体部外面に列点文を漆で描く。P-1574と同一器体の可能性あり。
P-1577	高坏小鉢	E区V面2 -2河下層	口縁部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎赤色10 R5/6	口縁内外面に刷文文を漆で描く。内外面赤彩。
P-1578	高坏	E区V面2 -2河下層	胴部片	法量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎赤色10 R5/8	胴を大きく開き、肩部外面に刷文文を漆で描く。外面に赤彩。
P-1579	鉢	E区V面2 -2河下層	胴部-底部片	残存高3.7 底径4.9	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎赤褐色 10R4/4	内湾さみに開く截頭円錐形。内面下位に横列点文、上位に7分割した3列組の縦列点文を漆で描く。内外面赤彩。P-1580と同一の可能性あり。
P-1580	高坏	E区V面2 -2河下層	坏部片	残存高6.3 口径(16.1)	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎暗赤色 10R3/4	坏部は内湾して大きく開き浅い。口縁外面に刷文文、下位に横列点文、中位に円文と列点文を漆で描く。内外面赤彩。
P-1581	高坏	E区V面2 -2河下層	胴部片	残存高8.4 胴径10.8	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎暗赤色 10R3/6	上半柱状、下半は円錐形の脚で、外面に3列組の縦列点文と肩に刷文文を漆で描く。外面に赤彩。
P-1582	高坏	E区V面2 -2河下層	胴部片	残存高11.3 脚径様(12.0)	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎赤褐色 10R5/4	背の高い円錐形の脚で、脛端は丸い。縦面に並ぶ列点文を漆で描く。外面赤彩。
P-1583	蓋	E区V面2 -2河下層	胴部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色灰 7.5YR6/1	外面に低い三角凸帯を横列に並らし、蓋で弱状の刻みを施す。
P-1584	(蓋)	E区V面2 -1河下層	胴部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR7/3	蓋による山形文とその下位に幾先による刺突列を並らす。
P-1585	(高坏)	E区V面2 -2河下層	口縁部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰白色 2.5Y7/1	口縁短く外折し、口唇部に押圧し、口縁下位に2ヶ所封の孔を穿つ。内外面赤彩。
P-1586		E区V面2	口縁部片	法量不明	◎砂粒を含む。	口縁短く外反し、胴部の屈曲は弱い。外面に隅内彫

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	粘土・焼成・色調	特徴・その他
	甕	- 2 河下層			◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR7/4	の粘土帯を貼付し、横位に一条の沈線を描いて「目」を造形する。
P-1587	(甕)	E区V面2 - 2 河下層	胴部片	計量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎褐色 10YR6/1	外面に刷毛目。
P-1588	不明	E区V面2 - 2 河下層	胴部片	計量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不貞 ◎黒色2. 5Y2/1	外面に細い沈線で幾何文を描く。
P-1589	樽式土器 甕	E区V面2 - 1 河下層	胴部片	計量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎浅黄色 2.5Y7/3	胴上位に沈線で「水鳥の足」状文を描く。胴部には刺突を加えたボタン状貼付文を付す。
P-1590	樽式土器 (甕)	E区V面2 - 2 河下層	口縁部片	計量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎明褐色 色7.5YR7/2	口縁下位に筒状凸帯を巡らし、上面と口縁内面に 縞縞状文を施す。
P-1591	樽式土器 小型甕	E区V面2 - 2 河下層	口縁部欠損	残存高12.1 胴部最大径9. 3 底径5.3	◎砂粒を多く含む。 ◎不貞 ◎灰黄色 2.5Y6/2	胴部のしまり弱く、細長い「葉」形の胴部をもつ。 胴部に3連止縞状文、肩に細帯の小さい波状文を 施す。胴中に横帯状、及び口縁内面に赤彩。
P-1592	樽式土器 小型甕	E区V面2 - 2 河下層	胴部一底部 片	残存高3.8 底径4.5	◎砂粒を多く含む。 ◎不貞 ◎灰黄色 2.5Y4/1	胴部はわずかにしまり、張り少ない体部から安 定した大きめの平底に続く。胴部に2帯の2連止 縞状文。底内面に赤彩顔料が付着。
P-1593	(樽式土器) (甕)	E区V面2 - 2 河下層	胴部片	計量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎にぶい 黄褐色10YR7/3	外面に縞縞状文。
P-1594	不明	E区V面2 - 1 河中層	胴部片	計量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎灰黄色 2.5Y6/1	外面に斜交する帯状の赤彩部分を残す。彩文か。
P-1595	高坏小鉢台	E区V面2 - 1 河中層	坏部片	計量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R5/6	外面下位に細い凸帯を巡らし、内湾ぎみに開く部 分に方形あるいは三角形と円形と思われる透かし を入れる。内外面赤彩。
P-1596	(高坏)	E区V面2 - 2 河下層	胴部片か	計量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R5/6	円孔を穿つ。外面に縦位の赤彩部分が見られる。 垂下する一条の粘土紐を貼付した部分が割離する。 内面は刷毛目。
P-1597	小型甕	E区V面2 - 2 河下層	胴部一胴部 片	残存高4.6	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R5/6	胴部は深く「く」字状に屈曲、「葉」形の胴部に 続く。外面全体と口縁内面に赤彩。
P-1598	(小型鉢)	E区V面2 - 2 河下層	ほぼ完成形	器高4.3 口 径7.2 底径 3.9	◎砂粒を含む。 ◎不貞 ◎赤色7. 5R4/6	やや内湾して深く縦円錐形で下部が突出する。 内外面は赤彩。
P-1599	高坏	E区V面2 - 1 河中層	胴部片	残存高4.1	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R4/6	深い坏部と背の高い円錐形の胴をもつ。内外面とも 赤彩。
P-1600	高坏小鉢	E区V面2 - 1 河中層	口縁部片	計量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R5/6	内湾して深く口縁で、2ヶ一對の孔を穿つ。内外 面赤彩。
P-1601	高坏小鉢	E区V面2 - 1 河中層	坏部片か	計量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R4/6	外面に弱い段をもつ口縁付の破片。外面に横に よる列点文を施す。内外面赤彩。
P-1602	無縁盤小鉢	E区V面2 - 1 河下層	口縁部片	計量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎明赤褐色 2.5YR5/8	内湾ぎみに深く口縁で、2ヶ一對の孔を穿つ。内 外面赤彩。
P-1603	(特殊器台)	E区V面2 - 2 河中層	坏部片	計量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色10 R5/6	外方に大きく開き、中位で段状に屈曲する。下位 に円孔を複数穿つ。外面全体と内面上位に赤彩。
P-1604	高坏	E区V面2 - 2 河中層	胴部片	残存高6.0	◎砂粒を多く含む。 ◎良好 ◎赤色10 R4/8	断面が方形でぐいしの少ない結合部で、坏部内外 面と胴外面に赤彩。
P-1605	外束系 小型甕	E区V面2 - 1 河中層	胴部片	残存高8.0 胴部最大径11 .7	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤褐色 10R5/4	下膨れの胴部で胴部は小さくする。胴外面に細 い粘土紐を複数垂下する。外面赤彩。
P-1606	(甕)	E区V面2 - 1 河下層	胴部片	計量不明	◎砂粒を多く含む。 ◎不貞 ◎褐色	胴部破片に焼成後、外面から穿孔。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-1607	樽式土器 (甕)	E区V面2 -2河下層	肩部片	法量不明	10YR5/1 ◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎褐灰色 10YR5/1	肩部外面に縦溝波状文を施き、胴部に赤彩を施す。
P-1608	外來系 甕	E区V面2 -2河下層	胴部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰黄色 2.5Y7/2	肩部と思われる外面に縦溝文を赤彩で書く。
P-1609	外來系 甕	E区V面2 -2河下層	胴部片	法量不明	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰白色 5YR8/1	肩の膨らむ無で肩で、外面に帯状の連続山形文を赤彩で書く。
P-1610	ミニチュア	E区V面2 -2河下層	完形	器高2.2 口 径4.5 底径 2.7	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰より 一ツ色5Y6/3	鉢形。体部は浅く内湾して開く。
P-1611	ミニチュア	E区V面2 -2河下層	ほぼ完形	器高2.8 口 径6.9 底径 4.8	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎灰より 一ツ色5Y5/2	鉢形。体部は浅く外反ぎみに開く。底部は大きい。
P-1612	ミニチュア	E区V面2 -2河下層	胴部-底部 片	残存高3.4 底径4.1	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎黄灰色 2.5Y4/1	底部は突出ぎみの平底、体部形状は不明。
P-1613	ミニチュア	E区V面2 -2河下層	胴部-底部 片	残存高4.7 底径5.1	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎黒色2. 5Y2/1	壺形。筒状の体部で下位がやや膨らむ。
P-1614	ミニチュア	E区V面2 -2河下層	胴部-底部 片	残存高4.4 底径4.0	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎黒色10 YR2/1	壺形。筒状の体部で上位が内湾する。外面は縦な で。
P-1615	ミニチュア	E区V面2 -2河下層	ほぼ完形	器高4.7 口 径5.9 底径 3.5	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎淡黄色 2.5Y8/4	筒状の体部で底部は丸みを帯び不安定。外面上位 に刷毛文を残す。
P-1616	蓋	E区V面2 -2河下層	天井片	残存高3.3	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎褐灰色 2.5Y5/2	小さな円頭状の蓋で、天井部は内湾ぎみ。
P-1617	蓋	E区V面2 -2河下層	天井片	残存高3.7	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄色2.5Y6/3	蓋は小さく中央がくぼむ。
P-1618	ミニチュア	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高3.3	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰赤色 10R6/2	高環形。背の高い円錐形の脚で、外面は削り。
P-1619	ミニチュア	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高3.4 脚部径4.7	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰色5 Y4/1	高環か台付壺形。小さく開く円錐形の脚で、裾端 は皿取り。外面は縦磨き。
P-1620	ミニチュア	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高4.1 脚部径3.9	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎暗灰色 2.5Y5/2	高環形。背の高い円錐形の脚。裾端は丸い。
P-1621	ミニチュア	E区V面2 -2河下層	脚部片	残存高3.7 脚部径3.6	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰黄褐色 10YR5/2	高環形。体部との結合部は柱状で下位が浅く開く。 裾端は丸い。
P-1622	ミニチュア	E区V面2 -2河下層	完形	器高5.9 坏 部径4.9 脚 部径4.3	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎褐灰色 10YR4/1	高環形。口縁-体部は半球形状に開き、脚は円錐 形。
P-1623	ミニチュア	E区V面2 -2河下層	口縁部欠損	残存高4.6 胴部最大径4. 1 底径3.3	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎淡黄色 2.5Y7/3	壺形。頸部は細く長い、胴は下膨れで大きめの平 底。
P-1624	ミニチュア	E区V面2 -1河下層	完形	器高3.3 口 径5.4 底径 4.0	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰黄色 2.5Y6/2	鉢形。体部直立する台形。不安定な平底。
P-1625 (土師器) ミニチュア	E区V面2 -1河下層	ほぼ完形	器高3.7 口 径(6.1) 底 径4.6	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰白色 2.5Y7/1	体部は内湾ぎみに直立する。外面に縦を残す。	
P-1626 (樽式土器) ミニチュア	E区V面2 -1河下層	胴部-底部 片	残存高5.2 胴部最大径7. 0 底径3.6	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰色5 Y6/1	壺形。胴部は「算盤玉」状に張り、底部は突出す る。肩に横溝波状文。	

土器・土製品観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-1627	ミニチュア	E区V面2 -1河下層	脚部片	残存高2.7 底径(3.2)	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄色2.5Y6/4	高杯小台付変形。円錐形に開く脚。
P-1628	ミニチュア	E区V面2 -1河下層	脚部片	残存高3.7 底径5.3	◎砂粒を含む。 ◎不良 ◎にぶい 黄色2.5Y6/3	高杯小台付変形。円錐形に開く脚で、裾端は丸い。外面は縦のなで。
P-1629	ミニチュア	E区V面2 -1河下層	脚部片	残存高3.2 底径4.8	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰褐色 7.5YR6/2	高杯小台付変形。円錐形に開く脚で、裾下層は小さな面取り。外面は縦のなで。
P-1630	土製品 玉	E区V面2 -2河下層	完形	径1.4×1.7 重さ4g	◎密 ◎良好 ◎ 灰白色5Y7/2	わずかに楕円形をなし、やや縁寄りに径0.3の孔を持つ。
P-1631	土製品 勾玉	E区V面2 -2河下層	頭部片	残存長2.8 径0.7×1.3 重さ3g+	◎粗 ◎不良 ◎ 黒褐色2.5Y3/1	断面は楕円形で、頭部に径0.3の孔を持つ。指押え、などで仕上げで粗雑な作りである。
P-1632	土製品 勾玉	E区V面2 -2河下層	完形	長さ3.4 径1.0 重さ5g	◎密 ◎不良 ◎ 褐色10YR6/1	断面は円形で、頸部に径0.2×0.4の孔を持つ。指押え、などで仕上げで表面滑か。
P-1633	土製品 勾玉	E区V面2 -2河下層	完形	長さ3.4 径1.5 重さ14g	◎密 ◎不良 ◎ 黒色5Y2/1	断面円形で、頸部に径0.4×0.5の孔を持つ。指押え、などで仕上げで表面やや滑か。
P-1634	土製品 勾玉	E区V面2 -2河上層	完形	長さ4.6 径1.8 重さ17g	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎灰白色 2.5Y7/1	断面は不整形円で、頸部に径0.2の孔を持つ。指押え、などで仕上げで表面が荒れている。
P-1635	土製品 勾玉	E区V面2 -2河下層	完形	長さ5.0 径1.2×1.4 重さ14g	◎やや粗 ◎不良 ◎ ◎暗灰黄色2.5Y 5/2	断面は楕円形で、頸部がやや大きく径0.5の孔を持つ。指押え、などで仕上げで表面は滑かであるが、粗雑な作り。
P-1636	土製品 勾玉	E区V面2 -1河下層	完形	長さ2.7 径0.7×0.9 重さ3g	◎粗 ◎不良 ◎ 灰白色2.5Y7/1	断面はやや楕円形で、頭部に径0.3の孔を持つ。指押え、などで仕上げで表面やや滑か。
P-1637	土製品 勾玉	E区V面2 -1河下層	完形	長さ3.2 径1.0 重さ6g	◎密 ◎不良 ◎ 灰色5Y5/1	断面は円形で、頸部に径0.3の孔を持つ。指押え、などで仕上げで表面やや滑か。
P-1638	土製品 勾玉	E区V面2 -1河下層	完形	長さ4.4 径1.3×1.5 重さ13g	◎粗 ◎不良 ◎ 褐色10YR5/1	断面は楕円形で、頸部に径0.3の孔を持つ。指押え、などで仕上げで表面が荒れている。
P-1639	土製品 勾玉	E区V面2 -1河下層	頭部	残存長4.8 径1.8 重さ16g+	◎やや粗 ◎不良 ◎ ◎褐色10YR5/1	断面は円形で、頭部に径0.4の孔を持つ。指押え、などで仕上げで表面が荒れている。
P-1640	土製品 紡錘車	E区V面2 -2河下層	1/4残存	径(5.6) 厚さ1.5 重さ11g+	◎やや密 ◎不良 ◎ ◎赤色7.5R4/8	断面は円錐形で、中央部に径(0.6)の孔を持つ。表裏面とも赤色塗彩。
P-1641	土製品 紡錘車	E区V面2 -2河下層	1/2残存	径4.2 厚さ1.1 重さ9g+	◎密 ◎不良 ◎ 褐色10YR4/1	表面はわずかに外湾し、表面・側面は平坦。中央部に径(0.9)の孔を持つ。各面まで調整。
P-1642	土製品 紡錘車	E区V面2 -2河下層	1/2残存	径4.8 厚さ0.8 重さ8g+	◎砂粒を含む。 ◎良好 ◎黒褐色 10YR3/1	殊生土器からの転用で、断面はやや湾曲し、側面は平らな平坦。中央部に径(0.7)の孔が表裏両面から穿孔されている。
P-1643	土製品 紡錘車	E区V面2 -2河下層	1/2残存	径(5.0) 厚さ1.1 重さ10g+	◎やや粗 ◎不良 ◎ ◎灰黄褐色10YR 6/2	表面はやや外湾し、裏面は平坦。側面はやや丸い。中央部に径(0.8)の孔を持つ。表裏面ともなで調整。
P-1644	土製品 紡錘車	E区V面2 -2河下層	1/3残存	径(6.5) 厚さ1.2 重さ15g+	◎砂粒を多く含む。 ◎不良 ◎褐色7.5YR4/6	表裏面ともわずかに外湾し、側面は丸い。中央部に径(1.0)の孔を持つ。表裏面ともなで調整。
P-1645	土製品 紡錘車	E区V面2 -2河下層	1/2残存	径5.6 厚さ1.0 重さ15g	◎密 ◎不良 ◎ 黄灰色2.5Y6/1	表面はやや外湾し裏面はやや内湾し、側面は丸い。中央部に径(0.9)の孔を持つ。表裏面ともなで調整。
P-1646	土製品 紡錘車	E区V面2 -1河下層	1/2残存	径5.5 厚さ1.1 重さ14g+	◎やや密 ◎不良 ◎ ◎灰色7.5Y6/1	表面はやや外湾し裏面は平坦。側面は丸い。中央部に径(0.8)の孔を持つ。表裏面ともなで調整。
P-1647	土製品 紡錘車	E区V面2 -2河下層	2/3残存	径4.8 厚さ1.4 重さ23g+	◎粗砂粒を含む。 ◎不良 ◎灰黄褐色 10YR5/2	平面形は重みを持つ円形で、表面はやや外湾し裏面はやや平坦。側面は丸い。中央部よりややずれて径(0.8)の孔を持つ。表裏面とも指押えで粗雑な作り。
P-1648	土製品 紡錘車	E区V面2 -2河下層	2/3残存	径8.6 厚さ1.5 重さ86g	◎密 ◎良好 ◎ ◎灰黄褐色10YR6/2	表面はやや外湾し裏面は平坦。側面は丸い。中央部に径(1.0)の孔を持つ。周縁部指押え痕明確。

遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	特徴・その他
P-1649	土製品 紡輪草	E区V面2 -1河下層	1/2残存	径4.2 厚さ1 .3 重さ14g	砂やヤ植 砂不良 ◎灰白7.5Y4/1	表裏面とも調整。大型の製品である。 断面はやや台形をなし、表裏面とも平坦で、側面はやや内傾する平面。中央部に径(0.8)の孔を持つ。表裏面とも調整。
P-1650	土製品 紡輪草	E区V面2 -1河下層	1/2残存	径4.8 厚さ1 .1 重さ15g	砂砂粒を含む。 砂不良 ◎灰黄色 2.5Y6/2	表面はやや外湾し裏面は平坦。側面は平坦で削み目がある。表裏面とも調整。
P-1651	土製品	E区V面2 -2河下層	完形	径3.3 厚さ0 .6 重さ6g	砂やヤ植 砂不良 ◎灰白5Y7/1	粘土土器を丸く扁平に押し潰した形状で、表裏面に縦線痕と思われる種子痕と横物と思われる圧痕がある。用途不明。
P-1652	土製円盤	E区V面2 -2河下層	完形	径3.8 厚さ1 .2 重さ17g	砂砂粒を含む。 ◎良好 ◎赤色7. 5R4/8	赤生土器からの転用で、不整形円形を打ち欠き磨けている。表面赤色塗彩が残る。
P-1653	土製円盤	E区V面2 -1河下層	完形	径4.0 厚さ0 .8 重さ15g	砂砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色7.5YR5/4	赤生土器からの転用で、周縁部を打ち欠き不整形円形をなす。表面に磨き後、縄文1の指文が残る。
P-1654	土製円盤	E区V面2 河上層	完形	径3.1×3.5 厚さ0.7 重 さ12g	砂砂粒を含む。 ◎良好 ◎にぶい 褐色10YR7/4	赤生土器からの転用で、周縁部を打ち欠き不整形円形をなす。表面に磨き波状文が残る。

石器・石製品観察表

遺物番号	種類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	石質	特徴・その他
S-1	磨石	E区Ⅱ面18 1位中央部 底面	完存	長さ9.2 幅5.0 厚さ3.9 重さ287 g	粗粒安山岩	小型で楕円形の河原石を使用。側縁部の一部に敲打痕があり、全面が磨れている。
S-2	磨石	E区Ⅱ面18 5位南壁寄 り床面	完存	長さ13.4 幅5.3 厚さ4.5 重さ619 g	粗粒安山岩	長楕円形の河原石を使用。両端部と側縁部に敲打痕がある。
S-3	磨石	E区Ⅱ面18 6位西壁寄 り床面	完存	長さ16.4 幅6.8 厚さ4.2 重さ788 g	粗粒安山岩	長楕円形の河原石を使用。両端部と側縁部に多くの敲打痕がある。表裏面が良く磨れている。一方の端部にある割離面は自然のものと思われる。
S-4	磨石	E区Ⅱ面20 2位南東隅 隅り方	完存	径8.5×9.4 厚さ 4.5 重さ523g	アブライト	ほぼ円形の河原石を使用。断面は長楕円形をなす。主に側縁部に敲打痕があり、表裏面は磨れている。縄文時代遺物の混入と思われる。
S-5	砥石	E区Ⅱ面19 2位南壁寄 り覆土	一方の端部 欠損	残存径7.7 幅4.0 厚さ1.1-1.9 重 さ98g+	砥沢石	平面形はほぼ長方形で、断面も長方形をなす。4面とも研ぎ面として使用。各面に線状痕あり。
S-6	磨石	E区Ⅱ面19 7位カマド 隅り方	完存	長さ18.5 幅8.5 厚さ4.1 重さ105 8g	ひん岩	長楕円形の河原石を使用。表裏面が良く磨れており、両端部にわずかに敲打痕がある。
S-7	磨石	E区Ⅱ面20 1位カマド 前床面	表面の1/2 が磨れている	長さ13.3 幅7.1 厚さ5.0 重さ590 g+	滑結凝灰岩	長楕円形の河原石を使用。特に表面が良く磨れている。両端部にわずかに敲打痕がある。
S-8	磨石	E区Ⅰ面3 河中間	完存	径11.2×11.9 厚 さ4.8 重さ906g	粗粒安山岩	ほぼ円形の河原石を使用。断面は長楕円形をなす。周縁部と表裏面中央部に敲打痕が多数ある。表裏面とも磨れており、一部に窪みがある。
S-9	磨石	E区V面20 5位覆土	一方の端部 欠損	残存径9.0 幅6.7 厚さ4.1 重さ429 g+	粗粒安山岩	長楕円形の河原石を使用。全面が磨れているが特に表面が良く磨れ平坦になっている。
S-10	磨石?	E区V面16 3位覆土	完存	長さ8.5 幅4.1 厚さ0.9 重さ47g	富母石夾片岩	扁平で楕円形をなす小型の河原石を使用。表面がやや磨れている。
S-11	磨石	F区Ⅱ面21 3位隅り方	完存	径7.0×7.4 厚さ 4.5 重さ339g	粗粒安山岩	円形で小型の河原石を使用。表裏面が良く磨れ、塗が付着している。
S-12	磨石	F区Ⅱ面21 3位貯蔵穴 内	一方の周縁 部が割れて いる	長さ14.2 幅4.5 厚さ4.3 重さ523 g+	ひん岩	長楕円形の河原石を使用。各面とも良く磨れており、表面中央に線状痕がある。両端部は敲打痕が集中している。
S-13	磨石	F区Ⅱ面21 6位カマド 内	完存	長さ8.3 幅4.3 厚さ4.1 重さ221 g	粗粒安山岩	長楕円形の小型の河原石を使用。全面が良く磨れている。
S-14	砥石	F区Ⅱ面21 6位隅り方	完存	長さ9.1 幅2.6 厚さ1.5 重さ71g	緑色片岩	棒状の小型の河原石を使用。表裏面とも良く磨れており、側縁部には敲打痕がある。両端部は敲

土器・土製品・石器・石製品観察表

遺物番号	種 類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	石 質	特 徴・そ の 他
S- 15	砥石	F区Ⅱ面22 9住覆土	一方の端部 を欠損する	残存長8.1 幅5.6 ～6.5 厚さ2.2 重さ151g+	砥石	打により割断している。 表裏面はほぼ平坦で、両側面は内湾する。4面とも 磨き面として使用、裏面に線状痕がある。
S- 16	紡錘車	F区Ⅱ面23 1住覆土	表面の刻離 が著しい	径4.6 厚さ2.1 重さ35g	デイサイト質 凝灰岩	断面が台形をなし、中央部に径1.0の孔を持つ。
S- 17	転用磨石	F区V面24 3住覆土	一方の端部 を欠損	残存長7.9 幅6.8 厚さ5.3 重さ477 g+	安輝緑岩	太型給刀磨製石斧を転用。端部は平坦で非常に良く 磨れている。
S- 18	砥石	F区V面23 4・24住覆 土	完存	長さ7.4 幅3.8 厚さ0.8 重さ34g	砂岩	偏平で長楕円形をなす小型の河原石を使用。表裏 面と両側面を磨き面として使用。表裏面に線状痕 がある。
S- 19	磨石	F区V面23 4・24住覆 土	完存	長さ10.9 幅9.2 厚さ8.1 重さ107 1g	石英閃緑岩	断面が鋭頭の三角錐状をなす河原石で、底面は平 坦で非常に良く磨れている。
S- 20	勾玉	F区V面24 6住中央部 床面	ほぼ完存	長さ3.6 幅1.1 厚さ0.7 重さ5g	滑石	断面が長方形をなす偏平な勾玉で、両端部がやや 平丸となる。全面を磨削している。頭部に両面穿 孔の径0.3の孔を持つ。
S- 21	砥石	F区V面24 6住覆土	一方の端部 を欠損する	残存長5.0 幅3.9 厚さ2.3 重さ87 g+	粗粒安山岩	平面が長方形、断面が平行四辺形をなす。表裏面 を磨き面とし線状痕がある。
S- 22	磨石	F区V面25 1住覆土	完存	長さ11.1 幅6.0 厚さ2.7 重さ351 g	粗粒安山岩	偏平で楕円形をなす河原石を使用。表裏面とも良く 磨れており、両端部に敲打痕がある。
S- 23	磨石	F区V面25 1住柱穴内	完存	長さ23.7 幅17.5 厚さ5.4 重さ401 5g	石英閃緑岩	偏平で楕円形をなす大型の河原石を使用。石皿状 に表裏面の中央部が非常に良く磨れている。
S- 24	磨石	F区V面25 2住覆土	完存	長さ11.3 幅6.0 厚さ2.9 重さ280 g	砂岩	長楕円形の河原石を使用。表裏面とも良く磨れて おり、両端部に敲打痕がある。
S- 25	砥石	F区V面25 4住覆土	完存	長さ11.5 幅4.2 厚さ3.4 重さ283 g	部結凝灰岩	長楕円形の河原石を使用。表裏面に大きな敲打痕 があり、一方の端部に数多くの敲打痕がある。
S- 26	勾玉	F区V面25 6住中央部 床面	ほぼ完存	長さ3.3 幅1.3 厚さ1.1 重さ9g	滑石	断面が隅丸方形で、頭部先端は平坦、尾部先端は 丸い。全面を磨削している。頭部に径0.4×0.7の 楕円形の片面穿孔の孔を持つ。側面の一部破損。
S- 27	削片石器	F区V面25 6住覆土	完存	長さ4.6 幅5.8 厚さ1.8 重さ68g	黒色頁岩	表面に自然面を残す狭長削片で、やや長方形をな し、3個縁に片面より粗い刻離を加え刃部として いる。
S- 28	磨石	F区V面25 6住覆土	ほぼ完存	長さ8.9 幅5.5 厚さ2.2 重さ190 g	石英閃緑岩	偏平で楕円形の河原石を使用。表裏面が非常に良く 磨れている。火を受けて変色しヒビ割れが生じて いる。
S- 29	砥石	F区V面25 6住覆土	完存	長さ12.8 幅4.3 厚さ1.8 重さ169 g	砂岩	長方形をなし4側面を磨き面として使用。表面と 片側縁中央はやや湾状に凹んでいる。
S- 30	削片石器	F区V面25 7住覆土	完存	長さ4.2 幅4.9 厚さ0.5 重さ18g	黒色安山岩	1個縁に自然面を残す狭長削片で、不整形をなす。 1個縁に片面より粗い刻離を加え刃部として いる。刃部や外湾。
S- 31	砥石	F区V面25 7住中央部 床面	完存	長さ15.8 幅6.5 厚さ5.5 重さ927 g	黒色頁岩	長楕円形のやや大型の河原石を使用。両端部を敲 打面としている。
S- 32	磨石	F区V面25 7住9円内	完存	長さ12.9 幅10.4 厚さ7.9 重さ143 8g	粗粒安山岩	不整形円形の身の厚い河原石を使用。表裏面とも やや磨れており、浅い敲打痕がある。
S- 33	磨製石鏃 (未製品)	F区V面25 8住	完存	長さ2.6 幅1.8 厚さ0.2 重さ1g	瑠璃岩片割	ハート形をなし、表裏面にわずかに推痕が認めら れるが、孔がなく個縁部の磨き出しがないため、 未製品と考えられる。
S- 34	磨石	F区V面25 8住覆土	完存	長さ9.2 幅6.4 厚さ2.9 重さ248 g	デイサイト	楕円形で偏平の河原石を使用。表裏面と6非常に 良く磨れている。
S- 35	磨石	F区V面26	完存	長さ14.1 幅12.5	粗粒安山岩	楕円形で偏平の河原石を使用。表裏面が磨れてお

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	石質	特徴・その他
		2位覆土		長さ3.6 重さ103.5g		り、両端部に大きな敲打痕がある。
S-36	磨製石鏃	E区V面2 -2河下層	完存	長さ2.1 幅1.8 厚さ0.2 重さ1g	地質準片岩	五角形をなし各辺はわずかに内湾。側縁部に沿って稜を持つ。中央部に径0.2の両面穿孔の孔を持つ。表面面とも斜行する擦痕あり。
S-37	磨製石鏃	E区V面2 -2河下層	完存	長さ3.0 幅2.3 厚さ0.3 重さ1g	地質準片岩	幅広い五角形をなし、両側縁部の湾曲に沿った稜を持つ。先端部に径0.2の両面穿孔の孔を持つ。表面面とも斜行する擦痕あり。
S-38	磨製石鏃	E区V面2 -2河下層	ほぼ完存	長さ3.4 幅2.1 厚さ0.2 重さ2g	地質準片岩	五角形をなし、基部は内湾し他の4辺は直線的。側縁部に沿ってやや稜を持つ。基部寄りに径0.2の両面穿孔の孔を持つ。側縁部に斜行する擦痕が目立つ。
S-39	磨製石鏃 (未製品)	E区V面2 -2河下層	完存	長さ2.9 幅2.2 厚さ0.2 重さ1g	地質準片岩	幅広い五角形をなし、表面のみ稜を持つ。縦位・斜位の擦痕が見られるが、無孔で裏面の加工痕があまり見られない所から未製品と考えられる。
S-40	磨製石鏃	E区V面2 -2河下層	一方の脚部を欠損	長さ2.0 幅1.3 厚さ0.2 重さ1g +	地質準片岩	打製の無茎石鏃を思わせる形状で、無孔で基部は深く内湾し、基部形状に沿った稜を持つ。表面面とも斜行する擦痕あり。
S-41	磨製石鏃 (未製品)	E区V面2 -2河下層	一方の脚部を欠損	長さ2.7 幅1.3 厚さ0.1 重さ1g +	地質準片岩	長身の五角形をなし、表面のみ弱い稜を持つ。無孔で裏面の加工がほとんどなく、未製品と考えられる。
S-42	磨製石鏃	E区V面2 -2河下層	ほぼ完存	長さ3.2 幅1.2 厚さ0.2 重さ1g	地質準片岩	細身の五角形をなし、先端部をわずかに欠損する。側縁部に沿って稜を持ち、やや基部寄りに径0.2の両面穿孔の孔を持つ。表面面とも斜行する擦痕あり。
S-43	磨製石鏃	E区V面2 -2河下層	先端部と両脚先端部を欠損する	長さ2.8 幅1.8 厚さ0.2 重さ1g +	地質準片岩	やや幅広い五角形をなし、側縁部に沿って湾曲する稜を持つ。やや基部寄りに径0.2の両面穿孔の孔を持つ。表面面とも斜行する擦痕あり。
S-44	磨製石鏃	E区V面2 -2河下層	一方の脚部を欠損する	長さ4.1 幅1.5 厚さ0.2 重さ2g +	地質準片岩	細身の五角形をなし、側縁部に沿って稜を持つ。基部寄りに径0.2の両面穿孔の孔を持つ。表面面とも斜行する擦痕あり。
S-45	磨製石鏃 (未製品)	E区V面2 -2河下層	先端部を欠損する	残存長2.6 幅1.9 厚さ0.2 重さ1g +	地質準片岩	細身の五角形をなす形状と思われる。無孔で片側縁部のみ稜を持ち粗い変形である所から、未製品と考えられる。
S-46	磨製石鏃 (未製品)	E区V面2 -2河下層	基部を欠損する	残存長2.0 幅1.9 厚さ0.2 重さ1g +	頁岩	やや幅広い五角形をなす形状と思われる。側縁部に沿って細い稜を持つが粗い変形である所から、未製品と考えられる。
S-47	磨製石鏃 (未製品)	E区V面2 -2河下層	完存?	長さ3.1 幅2.8 厚さ0.3 重さ4g	地質準片岩	角の丸い三角形をなし、粗い変形だけで無孔であり、未製品と考えられる。
S-48	有茎石鏃	E区V面2 -2河下層	茎部を欠損する	残存長2.7 幅1.2 厚さ0.2 重さ1g +	頁岩	細身の石鏃で、両側縁部より細い刺離が加えられている。
S-49	有茎石鏃	E区V面2 -2河下層	完存	長さ3.4 幅2.1 厚さ0.6 重さ2g	黒曜石	やや五角形をなし、断面は表面が山形で裏面は平坦。粗い刺離が加えられている。
S-50	磨製石鏃の 工程材	E区V面2 -2河下層	破片	長さ3.6 幅3.5 厚さ0.5 重さ11g	地質準片岩	断面三角形に割られた素材で、1側縁部が割られている。
S-51	磨製石鏃の 工程材	E区V面2 -2河下層	破片	長さ4.2 幅3.3 厚さ0.3 重さ10g	地質準片岩	薄板状の素材で、1側縁部に折り切り痕がある。
S-52	磨製石鏃の 工程材	E区V面2 -2河下層	破片	長さ4.2 幅1.7 厚さ0.3 重さ4g	地質準片岩	薄板状の素材で、2側縁部に折り切り痕がある。
S-53	磨製石鏃の 工程材	E区V面2 -2河下層	破片	長さ2.3 幅1.3 厚さ0.4 重さ4g	地質準片岩	小さな破片で、表面面と1側縁部に研磨痕があり、折り切り痕も3ヶ所ある。
S-54	紡錘車	E区V面2 -2河下層	破片	長さ3.5 幅2.8 厚さ1.0 重さ9g	硬質頁岩	全体の1/4ほどの破片で、表面は外湾し裏面は平坦。周縁部に擦痕があり、表面は無加工。
S-55	転用磨石 製石斧	E区V面2 -2河下層	完存	長さ10.3 幅7.3 厚さ4.5 重さ694g	かんらん岩	基部を欠損する大型給刃磨製石斧を転用。刃部には敲打痕があり、欠損部にも敲打痕があり中央部が非常に良く磨かれている。表面面中央部にも細い敲打痕がある。なお、刃部には斜めの使用痕が残る。
S-56	大型給刃磨 製石斧	E区V面2 -2河下層	刃部欠損	残存長11.0 幅6.7 厚さ5.1 重さ	雲閃緑岩	断面は楕円形をなし、基部は平坦。全面が敲打されており、刃部寄りがわずかに研磨されている。

石器・石製品観察表

遺物番号	種 類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	石 質	特 徴・その他
S- 57	大型地刃磨製石斧	E区V面2 -2河下層	刃部片	636g + 残存長5.6 幅4.2 厚さ3.0 重さ62g +	変はんれい岩	刃部には割れに走る使用痕が表裏面とも見られ、刃こぼれが生じている。
S- 58	大型地刃磨製石斧	E区V面2 -2河下層	刃部片	残存長5.1 幅3.9 厚さ1.1 重さ31g +	変はんれい岩	裏面に磨削痕があり、刃こぼれている。
S- 59	乳房状磨製石斧	E区V面2 -2河下層	完存	長さ17.1 幅4.2 厚さ2.8 重さ384g +	緑色片岩	細身の石斧で、全面を敲打した長研磨されている。刃部は使用による割れが生じているが摩滅している。
S- 60	石槌	E区V面2 -2河下層	完存	長さ6.6 幅11.1 厚さ4.9 重さ478g +	珪質頁岩	自然面を大きく残し、上下2方向より細い打撃が加えられている。
S- 61	石槌	E区V面2 -2河下層	完存	長さ8.0 幅5.6 厚さ8.0 重さ488g +	珪質頁岩	一部に自然面を残し、多方向より打撃が加えられている。
S- 62	打製石斧 (石剣)	E区V面2 -2河下層	刃部欠損	残存長13.8 幅8.3 厚さ3.2 重さ402g +	黒色安山岩	磨形をなし、表面に自然面を残す。粗い刻離で作出され、刃部は使用による割れが生じている。
S- 63	打製石斧	E区V面2 -2河下層	基部欠損	残存長7.4 幅6.6 厚さ2.7 重さ160g +	珪質頁岩	短磨形をなすと考えられ、表面に大きく自然面を残す。粗い刻離で作出され、刃部は丸い。
S- 64	打製石斧	E区V面2 -2河下層	基部欠損	残存長8.3 幅6.3 厚さ2.0 重さ113g +	変質玄武岩	短磨形をなすと考えられ、表面に自然面を残す。細い刻離で作出され、刃部は丸い。
S- 65	打製石斧	E区V面2 -2河下層	刃部欠損	残存長8.6 幅4.7 厚さ1.8 重さ85g +	細粒安山岩	小型の短磨形で、刃部寄りに自然面を残す。
S- 66	打製石斧	E区V面2 -2河下層	基部欠損	残存長6.7 幅4.9 厚さ1.2 重さ42g +	細粒安山岩	小型の短磨形で、表面に自然面を残す。細い刻離で作出され、刃部は丸い。
S- 67	打製石斧 (石剣)	E区V面2 -2河下層	ほぼ完存	長さ14.6 幅8.0 厚さ2.3 重さ347g +	細粒安山岩	表面は大きく自然面を残し、粗い刻離で作出され、両側中央部に挟り込みがある。刃部両端が使用により割れている。
S- 68	打製石斧 (石剣?)	E区V面2 -2河下層	一方の刃部が割れている	残存長10.8 幅7.7 厚さ1.4 重さ129g +	細粒安山岩	一方の刃部に大きく自然面を残し、細い刻離で作出され、両側中央部に挟り込みがある。
S- 69	打製石斧 (石剣)	E区V面2 -2河下層	一方の刃部が割れている	残存長10.8 幅6.4 厚さ2.3 重さ155g +	頁岩	裏面は大きく刻離され、表面は細い刻離が加えられている。両側縁部には挟り込みがあり、一方の刃部はやや三角形で、他方の刃部は使用により割れている。
S- 70	打製石斧	E区V面2 -2河下層	基部の一部を欠損する	長さ9.9 幅5.8 厚さ1.5 重さ64g +	頁岩	磨形をなし、基部は長方形に延び刃部は丸く幅広となる。表裏面とも細い刻離が加えられている。
S- 71	打製石斧	E区V面2 -2河下層	刃部を欠損する	残存長7.6 幅4.4 厚さ1.5 重さ63g +	黒色片岩	側縁部だけに刻離が加えられ、基部両側縁部はやや挟り込まれている。
S- 72	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ3.4 幅4.9 厚さ1.5 重さ27g +	頁岩	不定形の剥片で、表面に自然面を残す。直線的な1側縁部だけに両面より細い刻離を加え、刃部としている。
S- 73	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ5.1 幅5.2 厚さ1.7 重さ49g +	頁岩	台形をなす剥片で、表面に自然面を残す。1側縁部だけに両面より細い刻離を加え、刃部としている。
S- 74	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ7.2 幅8.5 厚さ1.3 重さ72g +	頁岩	不整三角形をなす剥片で、一部に自然面を残す。弧状をなす1側縁部だけに両面より刻離を加え、刃部としている。
S- 75	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ4.5 幅5.8 厚さ2.2 重さ45g +	頁岩	不整三角形をなす剥片で、やや弧状をなす1側縁部だけに片面から粗い刻離を加え、刃部としている。
S- 76	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ3.7 幅5.5 厚さ1.1 重さ23g +	珪質頁岩	不定形の剥片で、一部に自然面を残す。L字形をなす2側縁部に片面から粗い刻離を加え、刃部としている。

遺物観察表

遺物番号	種 類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	石 質	特 徴・その他
S-77	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ4.5 幅6.0 厚さ0.8 重さ22g	頁岩	不定形の剥片で、一部に自然面を残す。2個縁部に片面から細い刻痕を加え、刃部としている。
S-78	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ5.7 幅6.3 厚さ1.4 重さ39g	頁岩	不整三角形をなす剥片で、一部に自然面を残す。2個縁部に細い刻痕を主に片面より加え、刃部としている。
S-79	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ4.9 幅5.0 厚さ1.8 重さ36g	珪質頁岩	不定形の剥片で、逆L字形をなす2個縁部に片面から細い刻痕を加え、刃部としている。
S-80	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ5.0 幅4.9 厚さ2.0 重さ44g	珪質頁岩	不定形の剥片で、一部に自然面を残す。逆L字形をなす弧状をなす2個縁部に、主に片面から細い刻痕を加え、刃部としている。
S-81	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ9.2 幅5.7 厚さ3.0 重さ101g	頁岩	不定形の縦長の剥片で、一部に自然面を残す。平行する2個縁部に主に片面から細い刻痕を加え、刃部としている。
S-82	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ5.8 幅4.8 厚さ1.9 重さ34g	珪質頁岩	不定形の剥片で、相対する2個縁部に主に片面からやや粗い刻痕を加え、刃部としている。
S-83	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ5.2 幅1.8 厚さ1.5 重さ13g	頁岩	三角形をなす細長い剥片で、V字形をなす2個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-84	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ8.8 幅6.0 厚さ1.9 重さ92g	珪質頁岩	やや台形をなす縦長の剥片で、U字状をなす3個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-85	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ7.9 幅6.6 厚さ1.5 重さ76g	珪質頁岩	やや台形をなす縦長の剥片で、一部に自然面を残す。U字状をなす3個縁部に主に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-86	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ6.4 幅5.7 厚さ1.8 重さ73g	頁岩	やや長方形をなす剥片で、直線的な3個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-87	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ5.7 幅4.5 厚さ1.8 重さ54g	頁岩	やや長方形をなす剥片で、直線的な3個縁部に主に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-88	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ4.9 幅7.7 厚さ2.1 重さ56g	珪質頁岩	不整台形をなす剥片で、表面に自然面を残す。直線や弧状をなす3個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-89	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ4.1 幅6.1 厚さ10.2 重さ21g	珪質頁岩	不整台形をなす剥片で、直線や弧状をなす3個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-90	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ4.2 幅4.2 厚さ1.1 重さ26g	頁岩	ほぼ円形をなす形状で、周縁部のほぼ全面に両面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-91	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ6.6 幅5.9 厚さ2.7 重さ126g	黑色頁岩	ほぼ円形をなす形状で、周縁部のほぼ全面に両面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-92	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ5.5 幅3.5 厚さ1.3 重さ21g	頁岩	縦長の剥片で、周縁部全面に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-93	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ5.0 幅4.1 厚さ1.5 重さ33g	頁岩	横九長方形をなす形状で、周縁部全面に両面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-94	偏平石器	E区V面2 -2河下層	一方の端部 欠損	長さ(7.1) 幅4.4 厚さ1.0 重さ42g+	緑色片岩	長楕円形をなす偏平な河原石を使用。下端周縁部は片面より細い刻痕が加えられ、上端周縁部は研磨されている。
S-95	凹石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ9.0 幅7.7 厚さ4.8 重さ472g	粗粒安山岩	楕円形をなし、表面に大きな凹みと裏面に小さな凹みが中央部に各1個あり、表面ととも磨れている。
S-96	凹石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ9.8 幅8.2 厚さ4.4 重さ524g	粗粒安山岩	楕円形をなし、表面中央部に小さな凹みが複数あり、両面とも磨れている。周縁部には多くの敲打痕がある。
S-97	凹石	E区V面2 -2河下層	一方の端部 欠損	残存長10.7 幅6.1 厚さ4.5 重さ492g+	粗粒安山岩	長楕円形をなす河原石を使用。端部寄りの表面に大きな凹みと裏面に浅い凹みがあり、両個縁部と端部にも敲打痕がある。全面が良く磨れている。
S-98	磨石	E区V面2 -2河下層	一方の端部 欠損	残存長8.9 幅6.2 厚さ4.5 重さ312g+	粗粒安山岩	長楕円形をなす河原石を使用。全面が良く磨れており、細い敲打痕がある。
S-99	磨石	E区V面2 -2河下層	一方の端部 欠損	残存長11.1 幅10.5 厚さ6.1 重さ935g+	粗粒安山岩	楕円形のやや大型の河原石を使用。全面が良く磨れており、端部に敲打痕がある。
S-100	磨石	E区V面2 -2河下層	両端部欠損	残存長12.3 幅8.0 厚さ5.2 重さ	粗粒安山岩	長楕円形のやや大型の河原石を使用。全面が良く磨れている。

石器・石製品観察表

遺物番号	種 類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	石 質	特 徴・その他
				791g		
S-101	磨石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ14.3 幅6.2 厚さ4.7 重さ502g	石英閃緑岩	長楕円形の河原石を使用。全面が良く磨れており、両端部と片側縁部に敲打痕がある。
S-102	磨石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ13.1 幅6.8 厚さ3.5 重さ505g	粗粒安山岩	長楕円形の河原石を使用。全面が良く磨れ、表裏面の一部と両端部・両側縁部に敲打痕がある。
S-103	磨石	E区V面2 -2河下層	一方の端部 欠損	残存長10.3 幅6.3 厚さ3.4 重さ444g+	変質安山岩	長楕円形の河原石を使用。全面が良く磨れ、端部と両側縁部に敲打痕がある。
S-104	磨石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ8.7 幅5.1 厚さ2.6 重さ183g	ひん岩	楕円形の小型の河原石を使用。全面が磨れており、両端部に敲打痕がある。
S-106	磨石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ8.5 幅4.0 厚さ2.1 重さ133g	変質玄武岩	長楕円形の小型の河原石を使用。全面が良く磨れ、両端部にわずかに敲打痕がある。
S-106	磨石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ9.1 幅3.4 厚さ1.9 重さ83g	砂岩	長楕円形の小型の河原石を使用。全面が良く磨れている。
S-107	磨石	E区V面2 -2河下層	一方の端部 欠損	残存長13.0 幅3.6 厚さ1.2 重さ82g	黒色片岩	偏平で棒状の河原石を使用。片側縁部が細く割られている。
S-108	磨石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ10.6 幅5.0 厚さ1.6 重さ164g	黒色片岩	偏平で長楕円形の河原石を使用。表裏面がやや磨れ、両端部に敲打痕がある。
S-108	磨石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ9.8 幅4.5 厚さ1.5 重さ92g	黒色片岩	偏平で長楕円形の河原石を使用。両端部と両側縁部が細く割られている。
S-110	磨石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ8.7 幅3.6 厚さ1.2 重さ68g	黒色片岩	偏平で長楕円形の河原石を使用。片側縁部の一部が細く割られている。
S-111	磨石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ8.0 幅3.8 厚さ1.2 重さ53g	黒色片岩	偏平で長楕円形の河原石を使用。両端部が細く割られている。
S-112	敲石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ11.0 幅4.8 厚さ4.0 重さ298g	頁岩	棒状の河原石で両端部を敲打部として使用。両端部には敲打痕があり割れている。
S-113	敲石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ11.9 幅4.7 厚さ3.6 重さ290g	ひん岩	長楕円形の河原石を使用。全面がやや磨れており、両端部と両側縁部に集中した敲打痕がある。
S-114	敲石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ13.5 幅5.1 厚さ4.3 重さ419g	輝緑岩	長楕円形の河原石を使用。3側面が良く磨れており、一方の端部に集中した敲打痕がある。1側面が大きく割れている。
S-115	敲石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ12.3 幅7.6 厚さ4.6 重さ701g	砂岩	楕円形の河原石を使用。表裏面が良く磨れており、各面に集中した敲打痕があり、一方の端部は割れている。
S-116	台石	E区V面2 -2河下層	完存	径15.4×15.8 厚さ6.0 重さ2000g	粗粒安山岩	偏平でほぼ円形の河原石を使用。表裏面に数多くの敲打痕が広がり一部に線状痕があり、磨れている。周縁部の一部にも敲打痕があり磨れている。
S-117	砥石 (台石)	E区V面2 -2河下層	両端部欠損	残存長20.3 幅21.8 厚さ6.3 重さ3190g+	粗粒安山岩	偏平で大型の河原石を使用。表面は中央部が浅く溝状に窪み、非常に良く磨れている。裏面はやや磨れており、一部に敲打痕がある。やや木目の荒い砥石である。
S-118	砥石 (台石)	E区V面2 -2河下層	両端部欠損	残存長20.8 幅23.6 厚さ7.6 重さ4650g+	粗粒安山岩	偏平で大型の河原石を使用。表裏面とも平坦で非常に良く磨れている。一部に敲打痕あり。木目の荒い砥石である。
S-119	砥石 (台石)	E区V面2 -2河下層	完存	長さ16.5 幅15.1 厚さ4.0 重さ1500g	粗粒安山岩	偏平な河原石を使用。表裏面とも良く磨れており、敲打痕が広がっている。1側縁部は内湾して磨れており、他の側縁部には敲打痕がある。木目の荒い砥石である。
S-120	砥石 (台石)	E区V面2 -2河下層	一方の端部 欠損	残存長15.3 幅11.6 厚さ5.4 重さ1190g+	粗粒安山岩	やや長方形をなす河原石を使用。表面は内湾して磨れており、敲打痕と線状痕がある。裏面は窪みが3ヶ所ある。側縁部の一部が内湾して磨れている。木目の荒い砥石である。
S-121	砥石	E区V面2	破片	残存長13.0 幅10	粗粒安山岩	板状の河原石を使用。表面の中央部は浅く溝状に

遺物観察表

遺物番号	種 類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	石 質	特 徴・その他
		-2河下層		.8 厚さ2.1 重さ386g+		窪み、非常に良く磨れている。表面は平坦で中央部が良く磨れている。側縁部は総括され整形されている。木目の細い砥石である。
S-122	砥石	E区V面2 -2河下層	破片	残存長7.2 幅11.1 厚さ2.3 重さ220g+	ダイサイト質 凝灰岩	板状の河原石を使用。表面は平坦に磨られ、両側縁部はやや内湾して磨られている。やや木目の広い砥石である。
S-123	砥石	E区V面2 -2河下層	破片	残存長7.8 幅8.5 厚さ1.8 重さ162g+	砂岩	板状の河原石を使用。表面とも平坦に磨れている。やや木目の細い砥石である。
S-124	砥石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ9.0 幅5.6 厚さ1.0 重さ66g	砂岩	偏平で楕円形の小型の河原石を使用。表面とも平坦に磨れている。木目の広い砥石である。
S-125	砥石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ7.5 幅6.1 厚さ1.1 重さ76g	砂岩	偏平で不定形の小型の河原石を使用。表面とも平坦でやや磨れている。木目のやや広い砥石である。
S-126	砥石	E区V面2 -2河下層	完存	長さ6.4 幅5.5 厚さ0.8 重さ39g	砂岩	偏平で不定形の小型の河原石を使用。表面とも平坦でやや磨れている。木目のやや広い砥石である。
S-127	砥石	E区V面2 -2河下層	一方の端部欠損	残存長6.3 幅5.0 厚さ1.7 重さ48g+	流紋岩質凝灰岩	偏平で楕円形の小型の河原石を使用。表面とも平坦でやや磨れており、片側縁部の片が斜めに磨れている。木目の細い砥石である。
S-128	砥石	E区V面2 -2河下層	一方の端部欠損	残存長7.1 幅5.3 厚さ1.5 重さ71g+	砂岩	偏平で小型の河原石を使用。表面だけを使用し、中央部が残った溝状に窪み、全面が良く磨れている。やや木目の広い砥石である。
S-129	砥石	E区V面2 -2河下層	一方の端部欠損	残存長7.1 幅5.4 厚さ1.6 重さ58g+	砂岩	偏平で小型の河原石を使用。表面面とも使用し良く磨れ、両側縁部磨りが片減りしている。木目の細い砥石である。
S-130	砥石	E区V面2 -2河下層	一方の端部欠損	残存長4.8 幅4.9 厚さ1.1 重さ39g+	凝灰質砂岩	偏平で小型の河原石を使用、長方形に整形されている。表面面とも平坦で、表面には中央部に幅0.2の溝状の研ぎ跡があり全面が良く磨れている。表面はやや磨れている。やや木目の広い砥石である。
S-131	砥石	E区V面2 -2河下層	一方の端部欠損	残存長7.6 幅4.7 厚さ1.3 重さ35g+	凝灰質砂岩	偏平で楕円形の小型の河原石を使用。表面だけを使用、山形に磨られており、片側に幅0.4の溝状の研ぎ跡がある。やや木目の広い砥石である。
S-132	石核	E区V面2 -2河下層	完存	長さ7.5 幅10.2 厚さ6.5 重さ750g	砂岩質頁岩	自然面を大きく残し、主に2方向より打撃が加えられている。
S-133	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ8.6 幅6.6 厚さ3.6 重さ146g	頁岩	台形をなす剥片で、一部に自然面を残す。直線的な1側縁部に片面から剝離を加え、刃部としている。
S-134	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ4.1 幅5.8 厚さ2.0 重さ244g	黒色安山岩	不整形をなす剥片で、一部に自然面を残す。山形をなす1側縁部に片面より細い剝離を加え、刃部としている。
S-135	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ7.8 幅12.9 厚さ2.7 重さ233g	頁岩	楕円形をなす狭長剥片で、表面は自然面。外湾する1側縁部に片面より細い剝離を加え、刃部としている。
S-136	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ4.5 幅5.7 厚さ1.2 重さ97g	頁岩	不定形の剥片で、一部に自然面を残す。L字形をなす2側縁部に両面より細い剝離を加え、刃部としている。
S-137	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ4.7 幅4.6 厚さ0.8 重さ16g	珉質頁岩	三角形をなす剥片で、一部に自然面を残す。2側縁部に片面より細い剝離を加え、刃部としている。
S-138	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ7.3 幅6.2 厚さ1.5 重さ73g	頁岩	やや三角形をなす剥片で、表面に大きく自然面を残す。V字形をなす2側縁部に片面から細い剝離を加え、刃部としている。
S-139	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ6.6 幅6.9 厚さ2.1 重さ78g	珉質頁岩	不整形をなす剥片で、基部以外の弧状をなす側縁部に片面から細い剝離を部分的に加え、刃部としている。
S-140	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ6.8 幅4.6 厚さ1.2 重さ33g	頁岩	不定形の狭長剥片で、一部に自然面を残す。3側縁部に片面より細い剝離を加え、刃部としている。
S-141	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ3.5 幅5.0 厚さ1.1 重さ14g	頁岩	不定形の剥片で、全ての側縁部に部分的に細い剝離を片面から加え、刃部としている。

石器・石製品観察表

遺物番号	種類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	石質	特徴・その他
S-142	剥片石器	E区V面2 -2河中華	完存	長さ6.0 幅5.4 厚さ1.0 重さ35g	頁岩	不整三角形をなす剥片で、全ての側縁部に主に片 より細かい刻痕を加え刃部としている。
S-143	剥片石器	E区V面2 -2河中華	完存	長さ3.2 幅5.8 厚さ1.2 重さ20g	頁岩	不定形の細長剥片で、一部に自然面を残す。全て の側縁部に両面より細かい刻痕を加え、刃部として いる。
S-144	磨石	E区V面2 -2河中華	一方の端部 欠損	残存長12.9 幅13 .0 厚さ4.4 重 さ1220g+	粗粒安山岩	偏平で楕円形の河原石を使用。表裏面とも良く磨 れており、表面中央部に大きな敲打痕があり、端 部にもわずかに敲打痕がある。
S-145	磨石	E区V面2 -2河中華	完存	長さ12.3 幅7.7 厚さ5.0 重さ627g	石英閃緑岩	不整楕円形の河原石を使用。全面が良く磨れてお り、両端部に集中した敲打痕がある。
S-146	磨石	E区V面2 -2河中華	一方の端部 欠損	残存長12.0 幅6 .4 厚さ3.3 重さ 328g+	粗粒安山岩	偏平で楕円形と思われる河原石を使用。表裏面と も良く磨れており、表裏面中央部と両縁部に敲打 痕がある。
S-147	磨石	E区V面2 -2河中華	完存	長さ10.3 幅9.1 厚さ3.0 重さ412g	粗粒安山岩	偏平で不整楕円形の河原石を使用。表裏面とも良 く磨れている。
S-148	磨石	E区V面2 -2河中華	完存	長さ6.0 幅5.0 厚さ1.3 重さ69g	閃緑岩	偏平で楕円形の小型の河原石を使用。表裏面とも 良く磨れている。
S-149	磨石	E区V面2 -2河中華	完存	長さ6.8 幅5.9 厚さ2.4 重さ289g	石英閃緑岩	やや球形の小型の河原石を使用。全面がやや磨れ ており、表裏面中央部に敲打痕がある。
S-150	磨石	E区V面2 -2河中華	完存	長さ5.7 幅4.6 厚さ3.8 重さ123g	石英閃緑岩	やや卵形をなす小型の河原石を使用。全面が良く 磨れている。
S-151	凹石	E区V面2 -2河中華	両端部欠損	残存長17.9 幅5 .3 厚さ2.6 重さ 397g+	黒色片岩	棒状の河原石を使用。表裏面がやや磨れており、 一方の端部寄りの表面に凹みが3ヶ所ある。端部 と両側縁部の一部に敲打痕がある。
S-152	敲石	E区V面2 -2河中華	完存	長さ13.7 幅3.4 厚さ2.4 重さ214g	砂岩	棒状の河原石を使用。一方の端部は割れ、表面が 大きく剥離し、剥離面に小さい敲打痕がある。
S-153	砥石	E区V面2 -2河中華	破片	残存長13.3 幅8 .4 厚さ3.0 重さ 445g+	粗粒安山岩	偏平な河原石を使用。平坦な表面だけを研ぎ面と して使用。表面中央部と側縁部に敲打痕がある。 やや木目の細かい砥石である。
S-154	磨石?	E区V面2 -2河中華	破片	残存長6.2 幅4.1 厚さ1.5 重さ63g +	緑色片岩	偏平で棒状の河原石を使用。表裏面とも非常に良 く磨れており、端部と両側縁部に敲打痕がある。
S-155	砥石	E区V面2 -2河下層	破片	残存長7.2 幅5.5 厚さ2.5 重さ130g +	砂岩	やや長方形に整形した河原石を使用。表裏面と片 側縁部を研ぎ面として使用。やや木目の細かい砥石 である。
S-156	砥石	E区V面2 -2河下層	一方の端部 欠損	残存長6.0 幅6.1 厚さ1.2 重さ67g +	緑色片岩	偏平な河原石を使用。表面だけがやや磨れ残状痕 がある。端部と両側縁部には敲打痕がある。木目 の広い砥石である。
S-157	砥石	E区V面2 -2河中華	一方の端部 欠損	残存長5.7 幅5.7 厚さ1.0 重さ36g +	砂岩	偏平な河原石を使用。平坦な表裏面を研ぎ面とし て使用。表面には幅0.9の浅い溝状の研ぎ面があ る。
S-158	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ3.0 幅4.5 厚さ0.7 重さ8g	チャート	不定形の剥片で、直線的な1側縁部に両面より細 い刻痕を加え、刃部としている。
S-159	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ3.2 幅5.1 厚さ1.4 重さ24g	珉質頁岩	台形をした剥片で、一部に自然面を残す。1側縁 部の一部に片より細かい刻痕を加え、刃部として いる。
S-160	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.0 幅5.4 厚さ1.9 重さ27g	頁岩	不定形の剥片で、1側縁部に片より細かい刻痕を 加え、刃部としている。
S-161	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.0 幅6.2 厚さ1.8 重さ32g	珉質頁岩	不定形の剥片で、1側縁部に片より細かい刻痕を 加え、刃部としている。
S-162	剥片石器	E区V面2 -2河下層	完存	長さ5.1 幅7.3 厚さ1.7 重さ46g	頁岩	不定形の剥片で、外湾する1側縁部に僅かに細い 刻痕があり、刃部としている。
S-163	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.0 幅2.2 厚さ1.3 重さ16g	黒色安山岩	長方形をなす剥片で、短辺の1側縁部に片面から 細かい刻痕を加え、刃部としている。
S-164	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ6.1 幅4.5 厚さ1.3 重さ30g	頁岩	不定形の剥片で、1側縁部に片面から細かい刻痕を 加え、刃部としている。

遺物観察表

遺物番号	種 類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	石 質	特 徴・その他
S-165	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.8 厚さ0.9 重さ24g	頁岩	やや台形をなす剥片で、一部に自然面を残す。1個縁部に両面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-166	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ2.8 厚さ1.0 重さ7g	頁岩	三角形をなす剥片で、1個縁部に両面から細い刻痕を加え、刃部としている。
S-167	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ6.2 厚さ2.3 重さ86g	頁岩	やや三角形をなす狭長剥片で、L字形をなす2個縁部に両面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-168	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.5 厚さ1.9 重さ61g	頁岩	やや三角形をなす剥片で、一部に自然面を残す。L字形をなす2個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-169	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存?	長さ4.0 厚さ1.2 重さ33g	珉質頁岩	やや三角形をなす剥片で、L字形をなす2個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-170	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ6.0 厚さ1.5 重さ45g	頁岩	不定形の剥片で、逆L字形をなす2個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-171	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.2 厚さ1.2 重さ53g	頁岩	やや台形をなす剥片で、逆L字形をなす2個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-172	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.3 厚さ1.7 重さ58g	頁岩	不定形の剥片で、逆L字形をなす2個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-173	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ8.2 厚さ3.7 重さ213g	黒色安山岩	不定形の剥片で、一部に自然面を残す。L字形をなす2個縁部に両面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-174	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ9.6 厚さ2.3 重さ135g	黒色安山岩	不定形の剥片で、V字形をなす2個縁部に主に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-175	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ7.0 厚さ1.6 重さ38g	頁岩	不定形の剥片で、V字形をなす2個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-176	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ7.7 厚さ1.4 重さ16g	頁岩	断面三角形の狭長剥片で、平行する2個縁部から尖頂部にかけて片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-177	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.9 厚さ1.0 重さ13g	珉質頁岩	やや菱形をなす剥片で、V字形をなす2個縁部に両面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-178	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ6.6 厚さ2.1 重さ39g	頁岩	不定形の剥片で、平行する2個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-179	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ3.6 厚さ0.8 重さ7g	珉質頁岩	長方形の小型の剥片で、平行する2個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-180	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.2 厚さ0.8 重さ9g	頁岩	不定形の小型の剥片で、平行する2個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-181	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ9.3 厚さ2.3 重さ114g	黒色安山岩	不能長方形をなす剥片で、裏面に自然面を大きく残す。3個縁部に片面から細い刻痕を加え、刃部としている。
S-182	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ9.7 厚さ2.3 重さ114g	頁岩	不定形の剥片で、裏面に自然面を大きく残す。3個縁部に片面から細い刻痕を加え、刃部としている。
S-183	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ6.4 厚さ1.5 重さ29g	頁岩	ほぼ長方形をなす短長剥片で、一部に自然面を残す。3個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-184	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.7 厚さ1.7 重さ38g	頁岩	ほぼ長方形をなす短長剥片で、3個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-185	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ7.0 厚さ2.8 重さ117g	珉質頁岩	やや台形をなす剥片で、一部に自然面を残す。3個縁部に片面から細い刻痕を加え、刃部としている。
S-186	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.8 厚さ2.3 重さ84g	黒色安山岩	やや五角形をなす剥片で、一部に自然面を残す。弧状をなす3個縁部に両面よりやや粗い刻痕を加え、刃部としている。
S-187	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ2.1 厚さ2.9 重さ119g	頁岩	やや五角形をなす剥片で、一部に自然面を残す。3個縁部に片面よりやや粗い刻痕を加え、刃部としている。
S-188	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.0 厚さ1.8 重さ46g	頁岩	不定形の剥片で、3個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-189	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.6 厚さ1.0 重さ24g	頁岩	不定形の剥片で、一部に自然面を残す。3個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。

石器・石製品観察表

遺物番号	種類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	石質	特徴・その他
S-190	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.1 幅5.1 厚さ1.1 重さ23g	頁岩	やや台形をなす剥片で、3個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-191	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.6 幅6.0 厚さ1.1 重さ31g	頁岩	不整形をなす剥片で、3個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-192	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.0 幅4.4 厚さ1.2 重さ15g	黒色安山岩	不整形をなす剥片で、弧状をなす3個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-193	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ3.3 幅5.6 厚さ1.3 重さ24g	頁岩	不整形の剥片で、弧状をなす3個縁部に両面と片面から細い刻痕を加え、刃部としている。
S-194	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ2.2 幅4.1 厚さ1.8 重さ18g	頁岩	やや台形をなす小型の剥片で、一部に自然面を残す。3個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-195	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ2.6 幅4.0 厚さ1.3 重さ10g	珪質頁岩	やや長方形をなす小型の剥片で、3個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-196	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.7 厚さ1.1 重さ37g	珪質頁岩	ほぼ円形の剥片で、表面は自然面。周縁部の大半に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-197	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.3 幅6.2 厚さ1.1 重さ39g	頁岩	不定形の剥片で、表面は自然面。個縁部の大半に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-198	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.0 幅4.0 厚さ1.0 重さ17g	頁岩	やや台形をなす剥片で、表面は自然面。全ての個縁部に片面より細い刻痕を加え、刃部としている。
S-199	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.2 幅4.0 厚さ0.8 重さ13g	頁岩	やや台形をなす剥片で、全ての個縁部に両面と片面から細い刻痕を加え、刃部としている。
S-200	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.4 幅3.2 厚さ1.0 重さ15g	頁岩	不整形丸長方形をなす剥片で、全ての個縁部に両面から刻痕を加え、刃部としている。
S-201	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.5 幅2.9 厚さ0.5 幅1.9	頁岩	不整形丸長方形をなす剥片で、全ての個縁部に両面から刻痕を加え、刃部としている。
S-202	磨製石軸 (未製品)	E区V面2 -1河下層	完存	長さ2.9 幅1.9 厚さ0.2 重さ2g	頁岩	表面は側面のままで表面は彫痕があり、二等辺三角形に整形されている。
S-203	紡錘車 (未製品)	E区V面2 -1河下層	破片	残存長さ4.8 幅2.6 厚さ1.5 重さ25g +	流紋岩質凝灰岩	楕円形をなす河原石を使用したものと考えられ、表面は無加工で、裏面は平坦に研磨されている。
S-204	大型地刀磨 製石斧	E区V面2 -1河下層	刃部片	残存長さ8.0 幅3.7 厚さ3.0 重さ70g +	変輝緑岩	個縁部寄りの破片で、刃部両面は非常に良く研磨され、先端部にもかかわらず使用による割れが生じている。
S-205	扁平片刀石 斧	E区V面2 -1河下層	刃部片	残存長さ10.6 幅4.1 厚さ2.0 重さ102g +	珪質頁岩	個縁部寄りの破片と考えられ、充割りをした後、各面に研磨を始めている。
S-206	打製石斧	E区V面2 -1河下層	一方の刃部 欠損	残存長さ16.2 幅6.1 厚さ2.3 重さ255g +	細粒安山岩	細長い分形磨で、中央部両個縁部が緩やかに折れている。一方の刃部は丸く、使用により摩滅している。
S-207	磨石	E区V面2 -1河下層	完存	長さ25.6 幅7.6 厚さ5.0 重さ1300g	粗粒安山岩	長楕円形をなす異形の磨石で、全面がやや磨れており、両端部に敲打痕がある。
S-208	磨石	E区V面2 -1河下層	完存	長さ14.7 幅6.5 厚さ5.1 重さ747g	石英閃緑岩	前三角形で長楕円形をなす河原石を使用。3個縁面は良く磨れており、両端部には敲打痕がある。
S-209	磨石	E区V面2 -1河下層	完存	長さ12.8 幅5.0 厚さ2.7 重さ312g	輝緑岩	長楕円形をなす河原石を使用。全面が良く磨れており、両端部と両個縁部に多くの敲打痕があり、表面にもわずかに敲打痕がある。
S-210	磨石	E区V面2 -1河下層	完存	長さ8.7 幅3.4 厚さ1.7 重さ91g	頁岩	長楕円形をなす河原石を使用。全面が非常に良く磨れており、両端部に敲打痕がある。
S-211	磨石	E区V面2 -1河下層	完存	長さ6.1 幅3.6 厚さ0.9 重さ35g	頁岩	扁平で楕円形をなす小型の河原石を使用。全面が良く磨れ、一方の端部に敲打痕がある。
S-212	磨石	E区V面2 -1河下層	完存	長さ12.6 幅7.8 厚さ4.7 重さ688g	石英閃緑岩	楕円形の河原石を使用。表面面が良く磨れ、両端部、両個縁部、表面中央部に敲打痕がある。
S-213	磨石	E区V面2 -1河下層	完存	長さ8.8 幅7.2 厚さ2.5 重さ240g	石英閃緑岩	扁平で楕円形をなす河原石を使用。表面面が良く磨れ、両端部と両個縁部に敲打痕がある。
S-214	磨石	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.7 幅4.8 厚さ1.6 重さ74g	石英閃緑岩	扁平で楕円形をなす小型の河原石を使用。表面面が良く磨れている。
S-215	磨石	E区V面2	ほぼ完存	長さ9.1 幅2.5	雲母石英片岩	長楕円形の河原石を使用。一方の端部が割れている。

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	石質	特徴・その他
		-1河下層		長さ2.5 重さ122g		る。
S-216	磨礫石	E区V面2 -1河下層	完存	長さ9.4 幅3.6 厚さ1.3 重さ75g	黒色片岩	扁平で長楕円形の河原石を使用。
S-217	磨礫石	E区V面2 -1河下層	完存	長さ9.8 幅4.9 厚さ0.9 重さ66g	黒色片岩	扁平で長楕円形の河原石を使用。表面がやや磨れ、両端部に敲打痕がある。
S-218	扁平石器	E区V面2 -1河下層	一方の端部 欠損	残存長7.1 幅4.4 厚さ1.0 重さ42g +	緑色片岩	扁平で長楕円形をなす河原石を使用したものと考えられる。片側縁に片面から細い連続刻線が加えられている。
S-219	砥石 (台石)	E区V面2 -1河下層	完存	長さ27.0 幅15.5 厚さ5.7 重さ345.0g	粗粒安山岩	扁平で長楕円形の大型の河原石を使用。表面ともよく磨れており、部分的に凹石状の敲打痕がある。木目が荒い。
S-220	砥石	E区V面2 -1河下層	破片	残存長15.6 幅7.5 厚さ5.9 重さ958g+	粗粒安山岩	扁平で大型の河原石を使用したものと考えられる。表面はわずかに内湾して非常に良く磨れている。表面は一部に研ぎ面が残る。木目が非常に細い。
S-221	砥石	E区V面2 -1河下層	破片	残存長8.0 幅6.5 厚さ2.0 重さ227g+	粗粒安山岩	板石を使用したものと考えられ、表面とも平坦で良く磨れている。木目が細い。
S-222	砥石	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.2 幅3.4 厚さ1.1 重さ27g	砂岩	扁平で小型の長方形に整形され、表面ともわずかに外湾し、やや磨れている。木目が荒い。
S-223	砥石	E区V面2 -1河下層	一方の端部 欠損	残存長3.9 幅5.8 厚さ1.3 重さ51g+	凝灰質砂岩	扁平で矩形に整形されていたものと考えられる。表面とも平坦で、良く磨れている。木目が荒い。
S-224	砥石	E区V面2 -1河下層	端部欠損	残存長7.4 幅5.2 厚さ1.7 重さ82g+	砂岩	扁平で他円形の河原石を使用。表面ともやや磨れており、表面には幅0.5の浅い溝状の研磨痕がある。やや木目が細い。
S-225	砥石	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.2×4.8 厚さ1.1 重さ35g	粗粒安山岩	扁平ではほぼ円形の河原石を使用。表面ともやや磨れ、表面には擦痕が残る。木目が荒い。
S-226	磨製石鏝の 工程材	E区V面2 -1河下層	破片	残存長4.3 幅3.8 厚さ0.6 重さ15g	珪質礫片岩	不定形の破片で、表面とも剥離されたままで、側縁部は削られている。表面に縦状の磨り切り痕がある。
S-227	打製石斧	E区V面2 -1河下層	完存	長さ12.1 幅4.6 厚さ1.8 重さ90g	黒色頁岩	短梨形で、基部は丸く刃部は斜めとなる。
S-228	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.9 幅7.0 厚さ2.1 重さ68g	頁岩	やや三角形をなす剥片で、一部に自然面を残す。やや弧状をなす1個縁部に片面より細い刻線を加え、刃部としている。
S-229	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.6 幅5.8 厚さ1.8 重さ54g	頁岩	不定形の剥片で、一部に自然面を残す。1個縁部に片面より細い刻線を加え、刃部としている。
S-230	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ3.1 幅3.0 厚さ0.8 重さ8g	頁岩	不整形の剥片をなす剥片で、一部に自然面を残す。平行する2個縁部に片面より細い刻線を加え、刃部としている。
S-231	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ4.0 幅6.8 厚さ2.1 重さ44g	頁岩	不定形の剥片で、一部に自然面を残す。V字形をなす2個縁部に片面より細い刻線を加え、刃部としている。
S-232	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ7.1 幅4.8 厚さ1.8 重さ51g	頁岩	不定形の剥片で、ややV字形をなす2個縁部に片面より細い刻線を加え、刃部としている。
S-233	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ6.9 幅7.3 厚さ1.8 重さ86g	頁岩	やや菱形をなす剥片で、表面に自然面を残す。3個縁部に片面より細い刻線を加え、刃部としている。
S-234	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.1 幅5.1 厚さ1.0 重さ27g	頁岩	不定形の剥片で、1個縁部を除く他の個縁部に片面よりやや粗い刻線を加え、刃部としている。
S-235	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ7.2 幅6.6 厚さ1.6 重さ102g	珪質頁岩	やや楕円形をなす剥片で、表面に大きく自然面を残す。両縁部全てに両面よりやや粗い刻線を加え、刃部としている。
S-236	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ5.4 幅4.8 厚さ1.5 重さ44g	頁岩	楕圓長方形をなす剥片で、両縁部全てに片面よりやや粗い刻線を加え、刃部としている。
S-237	剥片石器	E区V面2 -1河下層	完存	長さ3.7 幅4.8 厚さ0.5 重さ10g	珪質頁岩	三角形をなす剥片で、3個縁部に片面より細い刻線を加え、刃部としている。
S-238	磨石	E区V面2 -1河下層	完存	長さ14.3 幅12.5 厚さ9.7 重さ260.0g	粗粒安山岩	やや大型の河原石を使用。底面は平坦で良く磨れている。

石器・石製品観察表

遺物番号	種 類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	石 質	特 徴・その他
S-239	磨石	E区V面2 -1河中間	完存	長さ7.6 幅6.9 厚さ5.4 重さ387g	粗粒安山岩	やや球形をなす河原石を使用。表裏面ともやや磨れており、側縁部の一部が良く磨れている。表裏面中央部と側縁部に敲打痕がある。
S-240	砥石	E区V面2 -1河中間	一方の端部欠損	残存長さ5.8 幅6.3 厚さ1.5 重さ65g+	砂岩	扁平な河原石を使用。表裏面とも平坦で良く磨れている。端部に敲打痕あり。木目が細い。
S-241	磨石	E区V面2 -1河中間	完存	長さ11.2 幅7.2 厚さ2.8 重さ384g	石英閃緑岩	扁平で楕円形をなす河原石を使用。表裏面とも良く磨れており、表裏面中央部、両端部、両側縁部に敲打痕がある。
S-242	磨石	E区V面2 -1河中間	完存	長さ21.3 幅7.4 厚さ3.8 重さ1100g	粗粒安山岩	長楕円形をなすやや大型の河原石を使用。全面が良く磨れている。
S-243	磨石?	E区V面2 -1河中間	完存	長さ14.0 幅2.4 厚さ2.2 重さ135g	玄武武岩	断面が円形の楕円の河原石を使用。全面が磨れており、擦痕と敲打痕がある。両端部は特に良く磨れている。
S-244	磨石	E区V面2 -1河中間	完存	長さ14.3 幅6.0 厚さ2.9 重さ359g	石英閃緑岩	扁平で長楕円形をなす河原石を使用。表裏面とも良く磨れており、両端部に敲打痕がある。
S-245	磨石	E区V面2 -1河中間	完存	長さ13.2 幅6.0 厚さ2.3 重さ305g	粗粒安山岩	扁平で長楕円形をなす河原石を使用。表裏面とも良く磨れており、両端部に敲打痕がある。
S-246	磨石	E区V面2 -1河中間	完存	長さ10.6 幅6.3 厚さ4.0 重さ377g	粗粒安山岩	楕円形の河原石を使用。表裏面とも良く磨れており、両端部に敲打痕がある。
S-247	磨石	E区V面2 -1河中間	完存	長さ10.0 幅5.0 厚さ3.8 重さ307g	粗粒安山岩	楕円形の河原石を使用。表裏面とも良く磨れており、表裏面中央部と両端部に敲打痕がある。
S-248	磨石	E区V面2 -1河中間	完存	長さ12.7 幅4.6 厚さ1.6 重さ167g	黒色片岩	扁平で長楕円形の河原石を使用。
S-249	磨石	E区V面2 -1河中間	ほぼ完存	長さ10.4 幅3.9 厚さ1.2 重さ82g	雲母石英片岩	扁平で長楕円形の河原石を使用。表裏面がやや磨れており、両端部に敲打痕がある。
S-250	磨石	E区V面2 -1河中間	完存	長さ7.5 幅1.4 厚さ1.6 重さ83g	雲母石英片岩	扁平で楕円形の河原石を使用。
S-251	磨石	E区V面2 -1河中間	完存	長さ7.5 幅4.8 厚さ0.9 重さ57g	黒色片岩	扁平で楕円形の河原石を使用。両端部と両側縁部に敲打痕がある。
S-252	砥石	E区V面2 -1河上層	完存?	長さ24.5 幅12.3 厚さ13.0 重さ7560g	粗粒安山岩	大型の河原石を使用。3側面を打ち欠き長方形に整形している。表裏面とも平坦で非常に良く磨れており、表面は自然面を研ぎ面とし、裏面は剝離調整した後研ぎ面としている。木目が細い。
S-253	砥石	E区V面2 -1河上層	破片	残存長さ23.8 幅28.0 厚さ6.6 重さ5620g+	粗粒安山岩	扁平で大型の河原石を使用。表面だけを研ぎ面とし中央部がわずかに内湾し、非常に良く磨れている。木目が細い。
S-254	砥石 (台石)	E区V面2 -1河上層	破片	残存長さ14.8 幅7.2 厚さ6.2 重さ1450g+	粗粒安山岩	大型の河原石を円形に整形したものと考えられ、周縁部が円形に削られている。表裏面を研ぎ面として使用、両面とも良く磨れている。表面は中央部が外湾し敲打痕があり、裏面は平坦。木目が細い。
S-255	砥石	E区V面2 -1河上層	破片	残存長さ17.7 幅11.9 厚さ7.3 重さ2430g+	粗粒安山岩	扁平で大型の河原石を使用。表面は平坦で良く磨れており、裏面は内湾しやや磨れている。木目が細い。
S-256	台石	E区V面2 -1河上層	一方の端部欠損	残存長さ18.4 幅15.2 厚さ8.0 重さ2460g+	粗粒安山岩	楕円形の大型の河原石を使用。表面は平坦でやや磨れており、裏面は外湾しやや磨れ凹石状の敲打痕が多くある。
S-257	砥石	E区V面2 -1河上層	一方の端部欠損	残存長さ10.0 幅5.3 厚さ1.7 重さ135g+	緑色片岩	扁平で長楕円形の河原石を使用。表裏面とも平坦で良く磨れている。表面の一部に線状痕がある。木目が細い。
S-258	砥石	E区V面2 -1河上層	一方の端部欠損	残存長さ5.8 幅8.6 厚さ0.9 重さ81g+	砂岩	矩形をなす板状の河原石を使用。表裏面とも平坦で良く磨れており、ともに片側縁部寄りに小穴がある。木目が細い。
S-259	砥石	E区V面2	破片	残存長さ6.5 幅7.5	デイサイト質	板状の河原石を使用。表面と側面を研ぎ面とし良

遺物観察表

遺物番号	種 類	出土位置	残存状態	計量値(cm・g)	石 質	特 徴・その他
		-1河上層		長さ2.2 重さ112g+	凝灰岩	く磨れており、表面には縦状痕がある。木目はやや細い。
S-260	石核	E区V面2 -1河上層	完存	長さ7.0 幅9.2 厚さ5.2 重さ381g	珪質頁岩	一部に自然面を残し、多方向より打撃を加えている。
S-261	剥片石器	E区V面2 -1河上層	完存	長さ6.8 幅6.4 厚さ2.6 重さ98g	頁岩	不整形をなす剥片で、表面に大きく自然面を残す。1個縁部に片面より細い割離を加え、刃部としている。
S-262	剥片石器	E区V面2 -1河上層	完存	長さ3.4 幅5.6 厚さ1.5 重さ26g	頁岩	長方形をなす剥片で、一部に自然面を残す。3個縁部に片面より細い割離を加え、刃部としている。
S-263	敲石	E区V面2 -1河上層	完存	長さ15.8 幅5.8 厚さ3.2 重さ450g	粗粒安山岩	長楕円形の河原石を使用。全面が良く磨れており、一部に雑痕がある。表面、両側縁部、両端部に敲打痕があり、一方の端部は打撃により割離している。
S-264	磨石	E区V面2 -1河上層	完存	長さ12.9 幅6.5 厚さ3.8 重さ533g	粗粒安山岩	長楕円形の河原石を使用。表裏面がやや磨れており、表裏面中央部、両端部、両側縁部に敲打痕がある。
S-265	磨石	E区V面2 -1河上層	完存	長さ13.0 幅6.0 厚さ3.3 重さ412g	粗粒安山岩	偏平で長楕円形の河原石を使用。全面が良く磨れており、両端部に敲打痕がある。
S-266	磨石	E区V面2 -1河上層	完存	長さ11.2 幅2.2 厚さ1.4 重さ54g	緑色片岩	楕円の河原石を使用。表面がやや磨れており、半面に横方向の粗い磨痕がある。
S-267	磨石	E区V面2 -1河上層	完存	長さ8.1 幅5.9 厚さ1.7 重さ118g	凝灰岩質砂岩	偏平で楕円形をなす河原石を使用。表裏面がやや磨れている。
S-268	凹石	E区V面2 -1河上層	一方の端部欠損	残存長6.7 幅6.1 厚さ2.6 重さ233g+	雲母石英片岩	偏平で長楕円形の河原石を使用。表裏面がやや磨れており、端部寄りに表裏面とも敲打による窪みがある。
S-269	磨石	E区V面2 -1河上層	完存	長さ8.0 幅4.7 厚さ0.9 重さ65g	黒色片岩	偏平で不整形楕円形をなす河原石を使用。
S-270	鑄型	E区V面2 河上層	破片	残存長12.2 幅9.3 厚さ8.9 重さ226g+	珪土	表面には直径10.5cm、深さ2.5cmの円形の型があり、周壁、表面とも垂直、水平である。また、表面には中央部の型から外縁を貫く、深さ2.0cm、長さ5.2cmの垂直の壁を持つ型がある。裏面には直径10.5cm、深さ2.0cmの円形の型があり、周壁は2段に落ち込み底面は水平である。これらの型の底面や周壁は熱を受け赤化している。何の鑄型であるかは不明。
S-271	磨製石鏃の工程材	E区V面2 -2河上層	破片	残存長3.3 幅4.4 厚さ0.6 重さ10g	珪質礫片岩	表裏面とも割離したままで、1個縁部は掘り切っており、他の個縁部は割れている。
S-272	剥片石器	E区V面2 -2河上層	完存	長さ4.0 幅4.6 厚さ2.0 重さ30g	頁岩	不整形三角形をなす剥片で、一部に自然面を残す。1個縁部に片面よりやや粗い割離を加え、刃部としている。
S-273	剥片石器	E区V面2 -2河上層	完存	長さ4.6 幅6.3 厚さ1.6 重さ60g	珪質頁岩	不整形三角形をなす剥片で、一部に自然面を残す。逆し字形をなす2個縁部に片面より粗い割離を加え、刃部としている。
S-274	剥片石器	E区V面2 -2河上層	完存	長さ6.4 幅5.9 厚さ1.6 重さ42g	頁岩	不定形の剥片で、3個縁部に片面より粗い割離を加え、刃部としている。
S-275	磨石	E区V面2 -2河上層	完存	長さ15.2 幅5.0 厚さ3.5 重さ389g	輝緑岩	長楕円形の河原石を使用。全面が良く磨れており、両端部、両側縁部に敲打痕がある。
S-276	磨石	E区V面2 -2河上層	完存	長さ11.1 幅6.5 厚さ4.8 重さ562g	粗粒安山岩	楕円形の河原石を使用。表裏面が良く磨れており、両端部、両側縁部に敲打痕がある。
S-277	磨石	E区V面2 -2河上層	完存	長さ10.0 幅6.0 厚さ4.4 重さ384g	砂岩	楕円形の河原石を使用。全面が良く磨れており、両端部に敲打痕がある。
S-278	磨石	E区V面2 -2河上層	完存	長さ15.2 幅11.1 厚さ6.5 重さ1750g	ひん岩	やや大型の河原石を使用。表面は平坦で良く磨れている。個縁部の一部が割れている。
S-279	凹石	E区V面2	完存	長さ9.4 幅7.6	粗粒安山岩	楕円形の河原石を使用。表裏面がやや磨れており、

遺物番号	種 類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	石 質	特 徴・その他
		-2河上層		厚さ6.1 重さ605g		中央部に敲打による窪みが複数ある。周縁部にも多くの敲打痕あり。
S-280	磨石	E区V面2 -2河上層	完存	長さ9.4 幅7.7 厚さ2.1 重さ260g	変質玄武岩	偏平で不整形円形の河原石を使用。表面裏面が良く磨れている。
S-281	磨石	E区V面2 -2河上層	完存	長さ8.2 幅5.8 厚さ2.6 重さ214g	粗粒安山岩	偏平で楕円形の河原石を使用。表面裏面が良く磨れており、両端部、両側縁部に敲打痕がある。
S-282	白石	E区V面2 -2河上層	破片	残存長10.9 幅16.2 厚さ8.3 重さ2470g+	粗粒安山岩	断面が楕円形の大型の河原石を使用。表面中央部には敲打痕が多くあり、裏面はやや平坦で磨れており細い敲打痕がある。
S-283	砥石	E区V面2 -2河上層	破片	残存長14.7 幅20.0 厚さ5.8 重さ2960g+	粗粒安山岩	板状の大型の河原石を使用。表面裏面とも平坦で良く磨れている。木目がやや細い。
S-284	銚垂具	E区V面2 -2河下層	ほぼ完存	径2.8 厚さ0.8 重さ7g	板状質砂岩	円形で小型の製品で、周縁部の一部が割れている。中央部に径0.8の孔が四面穿孔されている。表面、周縁部とも研磨整形されている。
S-285	石鏃	E区V面2 -1河下層	ほぼ完存	長さ2.9 幅2.3 厚さ0.5 重さ1g	黒曜石	無茎の石鏃で、側縁部の一部が割れている。丁寧な作りで、二等辺三角形をなし基部は緩やかに湾入している。

金属器観察表

遺物番号	種 類	出土位置	残存状態	計測値(cm・g)	材 質	特 徴・その他
M-1	環状金属器	E区V面2 -2河下層	完存	径3.1×3.7 幅0.9 厚さ0.1	銅?	やや楕円形をなし、端部は重ね合せている。色調はぶい赤褐色(2.5YR5/4)で、遺存状態は良好である。用途不明。

木製品観察表

遺物番号	種 類	出土位置	木取り・修整	加工・形状等の特徴
W-1	杵	E区V面2河上層	割り材 クスギ節	残存長61.0cm、胴部径8.3cm、胴部径3.0cm、握り部から半分欠損。穂部先端は半球形をなし、握り部への移行部は緩くはなれ握り部には突出を持たない。
W-2	分割材	E区V面2河上層	割り材 クスギ節	残存長72.5cm、幅7.7cm、厚さ2.5cm。ミカン割りに分割したままの材で、両端部を欠損する。
W-3	又 箆	E区V面2河上層	板目 クスギ節	残存長15.0cm、幅14.0cm、厚さ2.1cm。肩部は水平に3.0cm広がる。身上部と柄基部のみ遺存。柄の断面が平坦であることと形状により磨耗又蝕と考えられる。
W-4	鑿 臼	E区V面2-1河 中層No.1	丸木 クスギ節	高さ46.5cm、径61.2cm、掘穴径51.2cm、深さ35.4cm。ほぼ1/2に割れた円形の鑿臼である。底部は平坦で長さ約3.0cmの工具痕が明瞭に残る。側面は丸木の丸みをそのまま残し、口径と底径はほとんど差はない。掘穴縁は厚さが約5.0cmで平坦である。掘穴は鑿錐状をなし中央部はさらに一段丸く落ち込んでいる。
W-5	加工材	E区V面2-1河 中層No.2	丸木 エノキ属	残存長146.0cm、径20.6-24.6cm。粗く枝払いされた樹皮付の樹曲のある丸い丸木で、胴幹も粗く切断されている。一方の端部を欠損する。
W-6	板 材	E区V面2-1河 中層No.3	板目 クスギ節	長さ32.3cm、幅10.3cm、厚さ2.2cm。比較的均一な厚さを有する板材で、本来長い板であったものを難に切断したものと考えられる。
W-7	角 材	E区V面2-1河 中層No.5	板目 クスギ節	残存長41.2cm、幅3.0cm、厚さ2.0-1.0cm。断面が長方形の材で両端部を欠損するが、一方の端部は厚く他方の端部は薄くなる。
W-8	加工材	E区V面2-1河 中層No.7	割り材 アカガシ属属	長さ12.5cm、幅13.4cm、厚さ4.3cm。平面形は方形に近く断面はやや三角形をなし、両端部は斜めに切断され、木端のような材と考えられる。
W-9	杵状木製品	E区V面2-1河 中層No.9	板目 アカガシ属属	残存長18.0cm、幅2.9cm、厚さ1.1cm。柄と身の端部を欠損する。握り部は細く身への移行は両側縁より緩やかに広がり、身の両側縁は平行する。
W-10	加工材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.11	丸木 クスギ節	残存長59.5cm、径10.0cm。粗く枝払いされた樹皮付の丸木で、二又部を鈍角に切断している。また、一方の端部は炭化している。
W-11	板 材	E区V面2-1河 中層No.12	板目 クスギ節	長さ22.5cm、幅13.5cm、厚さ5.0cm。断面はやや三角形をなし分割時の形状を残す。両端部は山形に切断されている。
W-12	加工材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.13	丸木 クスギ節	残存長24.8cm、径15.8-13.5cm。枝払いし樹皮を除去した丸木で、一方の端部は3方向より切断、他方は炭化している。

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
W-13	容器	E区V面2-1河 中層No.14	割り材 エノキ属	残存長25.5cm、幅0.3cm、厚さ1.3cm、深さ2.6cm。割り材の木衣側を削り抜いて皿状にする。口縁部は一部残存するが全体形状不明。
W-14	分割材	E区V面2-1河 中層No.15	割り材 クスギ節	残存長25.4cm、幅3.3cm、厚さ1.2cm。角輪状に分割したままの材で、両端部を欠損する。
W-15	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.16	割り材 クスギ節	残存長75.5cm、幅10.2cm、厚さ4.9cm。断面が三角形を呈する分割したままの直線的な材で、一方の端部は炭化している。
W-16	板材	E区V面2-1河 中層No.17	板目 アカガシ亜属	残存長67.7cm、幅8.5cm、厚さ1.3cm。表面側ともやや摩滅した薄板材で、両端部を欠損する。
W-17	角材	E区V面2-1河 中層No.18	割り材 クスギ節	残存長65.6cm、幅7.3cm、厚さ4.0cm。断面がやや台形をなす直線的な材で、分割面は調整されている。一方の端部欠損。
W-18	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.21	割り材 ヤマダウ	残存長38.5cm、幅16.2cm、厚さ12.5cm。粗く分割したままの材で、一方の端部は斜めに切断され他方は炭化している。割り材の断片である。
W-19	分割材	E区V面2-1河 中層No.22	割り材 カバノキ属	長さ65.0cm、幅17.0cm、厚さ6.5cm。ミカン割りに分割したままの材で、分割面の調整はしていない。両端部は平直に削られている。
W-20	加工材	E区V面2-1河 中層No.23	丸木 クリ	残存長44.5cm、径5.5cm。枝払いし樹皮を除去した丸棒状の材で、一方の端部は鈍角に削られ他方は欠損する。
W-21	加工材	E区V面2-1河 中層No.24	割り材 クスギ節	残存長14.9cm、幅0.9cm、厚さ5.5cm。断面が台形をなす角材の断片である。
W-22	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.25	割り材 クスギ節	残存長24.6cm、幅3.2cm、厚さ2.2cm。断面が三角形をなす分割したままの細長い材で、一方の端部は炭化している。
W-23	加工材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.27	丸木 ウコギ属	残存長23.5cm、幅4.8cm、厚さ3.0cm。丸木の断面を縦に平坦に削り出しており、断面はやや錐形をなす。また、側面に浅い切り込みがある。一方の端部は斜めに削り込まれ他方は炭化している。
W-24	板材	E区V面2-1河 中層No.33	板目 クスギ節	残存長46.7cm、幅12.4cm、厚さ5.2cm。割り材の樹皮側を除去し厚めの板目板とするが、製作工程材であろう。摩滅が著しく遺存状態不良。
W-25	板材	E区V面2-1河 中層No.37	板目 クスギ節	残存長133.3cm、幅15.2cm、厚さ3.2cm。幅広の板材で、表面は摩滅し裏面は削り調整のままである。両端部欠損。
W-26	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.39	割り材 クスギ節	残存長28.0cm、幅9.7cm、厚さ3.8cm。断面が三角形をなす分割したままの材で一部炭化している。両端部欠損。
W-27	分割材	E区V面2-1河 中層No.42	割り材 クスギ節	残存長30.0cm、幅19.0cm、厚さ5.8cm。割り材が台形をなす分割したままの材で、一方の端部は斜めに切断され他方は欠損する。
W-28	棒子	E区V面2-1河 中層No.43	半割り材 クスギ節	残存長113.0cm、幅15.0cm、厚さ1.3-4.2cm。両端部欠損。半割り材から段を削り出したもので、裏面は分割面を残す。足かけ部側は摩滅が著しく、段は完全ではないがピッチはほぼ33.0cmである。
W-29	加工材	E区V面2-1河 中層No.44	丸木 コナラ節	残存長39.2cm、径9.8-5.8cm。枝払いし樹皮を除去した遺存状態の悪い材で、一方の端部は杖状に削り込まれ他方は欠損する。
W-30	角材	E区V面2-1河 中層No.45	割り材 クスギ節	残存長193.5cm、幅9.3cm、厚さ6.0cm。約1/3に分割された材で、一方の端部は粗く段を持って削られ他方の端部は欠損する。柱等の建築材の可能性が高い。
W-31	整白	E区V面2-1河 中層No.46	丸木 トナノキ	残存高41.8cm、残存幅35.5cm。断片のため全体の形状・規模は明確ではないが、丸木を使用し外形は遺存状態から方形をなすと考えられる。胴部は削り込まれ2本の柱が残存するが、方形の隅ごとに4本の柱が付いていたものと考えられる。内面は楕円の一部分が残存する。
W-32	角材	E区V面2-1河 上層No.47	割り材 クスギ節	残存長53.0cm、幅5.7cm、厚さ3.7cm。断面が台形の材で、各側面は平直に仕上げられている。一方の端部は平坦に削られ他方は欠損する。
W-33	角材	E区V面2-1河 中層No.48	割り材 クスギ節	残存長48.3cm、幅8.0cm、厚さ5.0cm。断面がやや長方形をなすわずかに湾曲した材で、各側面は平直となっている。一方の端部は両側から縦に切断され、他方の端部は欠損する。
W-34	加工材	E区V面2-1河 中層No.51	割り材 クスギ節	長さ24.7cm、幅4.0cm、厚さ3.3cm。断面が台形の材で、各側面は粗く削られている。一方の端部は平坦に削られているが、他方の端部は表裏面より削りが加えられ鋭角となり厚く削られている。
W-35	角材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.52	割り材 コナラ節	残存長29.5cm、幅2.8cm、厚さ2.9cm。断面が方形に近い細い角輪状の材で、一方の端部は炭化し他方は欠損する。
W-36	容器底板	E区V面2-1河 中層No.53	板板目 アスナロ	残存長47.4cm、幅18.8cm、厚さ1.8-1.0cm。全体形状は不明であるが、楕円形をなすものと推定され、遺存部分では一本通りである。底部外面は平坦であるが、内面は中央がやや窪む。周縁に沿って幅0.7-1.2cm、深さ1.0cm程の剛板受けの溝が通る。剛板受け部分に

木製品観察表

遺物番号	種 類	出土位置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
				は板皮等の側留めは認められない。
W-37	加工材	E区V面2-1河 中層No.54	割り材 ウコギ節	残存長32.4cm、幅3.5cm、厚さ1.0cm。1/2に分割された材で木芯が抜けている。一方の端部は割りが増えられ鋭角をなす。
W-38	加工材	E区V面2-1河 中層No.55	割り材 キハダ	長さ11.8cm、幅1.0cm、厚さ3.0cm。小口面をやや斜めに切った木端状の小材である。
W-39	土 掘 具	E区V面2-1河 中層No.56	割り材 アカガシ堅属	残存長66.9cm、柄部径2.9cm、刃部幅5.7cm、厚さ2.3cm。柄部の断面は隅丸方形をなし、基部方向は炭化し壊れている。刃部への移行部は斜めの肩を持ち、刃部は舌状の平面形で先端部を欠損する。
W-40	加工材	E区V面2-1河 中層No.57	丸木 クスギ節	残存長53.7cm、径8.3-6.8cm。両端部を欠損するが、一方の端部は割りが増えられ鋭角をなす。枕の断片と思われる。
W-41	板 材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.61	板目 クスギ節	残存長122.2cm、幅9.0cm、厚さ5.5cm。一方の端部寄りややや歪曲した細板材で、全面が炭化している。一方の端部は杖状に尖り他方の端部は欠損する。
W-42	板 材	E区V面2-1河 中層No.62	板目 クスギ節	長さ29.0cm、幅12.6cm、厚さ3.5cm。断面が薄い半円形をなす軟材の断片で、両端部は一方より斜めに切断されている。
W-43	板 材	E区V面2-1河 中層No.63	板目 クスギ節	長さ18.3cm、幅15.0cm、厚さ2.5cm。表面とも平滑に仕上げられ、両端部とも斜めに切断されている。
W-44	分割材	E区V面2-1河 中層No.64	割り材 クスギ節	残存長34.3cm、幅11.3cm、厚さ9.0cm。1/4に分割したままの材で、両端部が斜めに切断されている。
W-45	加工材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.67	割り材 クスギ節	残存長63.5cm、幅6.5cm、厚さ3.7cm。約1/3に分割された直線の樹皮付の材で、一方の端部は杖状にやや鋭角に削られ他方は炭化している。
W-46	角 材	E区V面2-1河 中層No.68	割り材 クスギ節	残存長34.5cm、幅3.8cm、厚さ3.0cm。断面がやや変形をなす鋭い角材で、両端部を欠損する。
W-47	加工材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.69	丸木 クスギ節	残存長35.4cm、径16.0cm。杖払いされ樹皮を除去した材で、一方の端部はやや平直に切断され他方の端部は炭化している。柱等の建築材の断片と思われる。
W-48	分割材	E区V面2-1河 中層No.70	割り材 クスギ節	残存長96.7cm、幅9.0cm、厚さ5.0cm。樹皮を除去し丸木を2/3に分割したやや反りのある材で、両端部は欠損する。
W-49	加工材	E区V面2-1河 中層No.72	丸木 クスギ節	長さ24.2cm、径9.7-8.0cm。樹皮付の丸木の断片で、両端部は山形に鋭く切断されている。
W-50	分割材	E区V面2-1河 中層No.74	割り材 クスギ節	残存長30.0cm、幅12.0cm、厚さ5.6cm。断面が台形をなす材で、一方の端部が斜めに切断されている。裏面に工具痕が見える。
W-51	加工材	E区V面2-1河 中層No.77	丸木 クリ	残存長49.0cm、径2.0-3.2cm。杖払いを行い樹皮を除去したままの材で、両端部を欠損する。
W-52	加工材	E区V面2-1河 中層No.79	丸木 クリ	残存長52.0cm、径5.0-6.5cm。杖払いを行い樹皮を除去したままの材で、一方の端部は鈍角に切断され他端は欠損する。
W-53	二 叉 鉄	E区V面2-1河 中層No.85	板目 コナラ節	残存長46.5cm、幅10.2cm、厚さ1.6-0.8cm。着柄部を欠損する。着柄部から鉄身への移行部には段があり斜めに延びる肩部を持つ。鉄身は幅狭で直線的に延び、先端部は丸みを持つ。又部は直線的で幅狭となっている。
W-54	分割材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.86	割り材 クスギ節	残存長88.0cm、幅4.7-9.8cm、厚さ3.6cm。断面がやや変形をなす分割したままの材で、一方の端部は斜めに切断され、他方は炭化し欠損している。
W-55	加工材	E区V面2-1河 中層No.87	割り材 スズキ属	残存長61.1cm、幅2.1cm、厚さ1.4cm。約1/4に分割した断面が三角形の材で一部に割りが増えられている。
W-56	加工材	E区V面2-1河 中層No.88	割り材 クリ	長さ57.3cm、幅18.0cm、厚さ8.6cm。樹皮を除去し丸木を1/2に分割したままの材で、分割面は平滑となっている。両端部はやや平直に切断されている。製作工程材か。
W-57	板 材	E区V面2-1河 中層No.89	板目 モミ属	残存長41.3cm、幅9.7cm、厚さ1.7cm。周縁をすべて欠損した目やせの巻しい断片である。
W-58	加工材	E区V面2-1河 中層No.90	丸木 ヤマグワ	残存長49.4cm、径3.8-4.0cm。杖払いを行い樹皮を除去した二又材で、表面調整は行っていない。端部はすべて欠損している。
W-59	分割材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.110	割り材 クスギ節	残存長66.3cm、幅5.0cm、厚さ2.5cm。杖払いし樹皮を除去した断面が半円形をなす直線的な材で、一方の端部が炭化している。
W-60	加工材	E区V面2-1河 中層No.115	丸木 ムクノキ	残存長77.0cm、径4.0-8.5cm。曲木部分の断片で杖払いし一部に樹皮を残す。杖払い以外に明確な加工はない。両端部を欠損する。
W-61	加工材 (丸 木 杖)	E区V面2-1河 中層No.118	丸木 クスギ節	残存長44.0cm、径7.2cm。樹皮付の丸木の一端を周囲から削りを加え、尖らせている。他端は欠損する。
W-62	分割材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.119	割り材 クスギ節	残存長21.2cm、幅11.1cm、厚さ7.2cm。約1/4に分割された樹皮付の材で、一方の端部は炭化し他端は欠損する。

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
W-63	板材	E区V面2-1河 中層No.121	柾目 クスギ節	残存長286.8cm、幅14.8cm、厚さ6.8cm。断面はやや半円形をなし、両端部を欠損する。表面面の凹凸が著しいが直線的な材である。
W-64	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.49	割り材 クスギ節	残存長201.8cm、幅18.7cm、厚さ13.0cm。断面が台形をなす樹皮付の太い分割材で、分割面の調整はなく樹芯部が抜けている。両端部を欠損し、一部炭化している。
W-65	角材	E区V面2-1河 中層No.128	割り材 クスギ節	長さ43.8cm、幅5.8cm、厚さ4.3cm。断面が五角形をなす材で表面は平滑となっている。割り材の樹芯部を取り除いて材材としている。
W-66	横線未製品?	E区V面2-1河 中層No.132	柾目 アカガシ亜属	残存長51.0cm、幅10.5cm、厚さ2.1cm。樹孔部で半分が割れている。樹孔部はわずかに隆起し、表面の加工は粗く圓錐部もいまままで切断痕を残す。製作工程材と考えられる。
W-67	加工材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.133	丸木 クスギ節	長さ16.8cm、径5.1-6.5cm。断面が楕円形をなす樹皮付の小材で、両端部は側面から削りが加えられ切断されている。一方の端部は炭化。
W-68	分割材	E区V面2-2河 中層No.146	割り材 クリ	長さ13.0cm、幅12.6cm、厚さ8.0cm。樹皮を除去し1/4に分割された小材で、分割面の調整はない。両端部は一方が山形に他方が平直に切断されている。
W-69	分割材	E区V面2-2河 中層	割り材 クリ	長さ23.3cm、幅12.0cm、厚さ8.3cm。角柱状をなす小材で分割面の調整はなく、両端部は粗く切断されている。
W-70	容器 (未製品)	E区V面2-2河 中層No.150	割り材 ケヤキ	径34.0×29.7cm、厚さ17.0cm。平面形はやや楕円形をなし断面は半円形で、内面の削り込みは行っていない。上は平滑に仕上げられているが、側面から底面は粗い削りが加えられているだけである。
W-71	加工材	E区V面2-2河 中層No.162	割り材 スギ	残存長28.1cm、幅2.4cm、厚さ1.0cm。断面が薄針形をなす細棒状の材で、表面は平滑に仕上げられている。一方の端部は刺突形状に尖らせている。他端は欠損する。
W-72	加工材	E区V面2-2河 中層No.165	割り材 クスギ節	残存長24.1cm、幅3.8cm、厚さ2.0cm。断面が不整形台形をなす角棒状の材で、一端が斜めに大きく削られている。他端は欠損する。
W-73	加工材	E区V面2-2河 中層No.172	割り材 モミ属	残存長28.1cm、幅1.5cm、厚さ1.5cm。断面が方形をなす細棒状の材で、両端部を欠損する。
W-74	分割材	E区V面2-2河 中層No.177	割り材 クスギ節	長さ19.1cm、幅11.0cm、厚さ6.3cm。樹皮付の丸木半材材で、一方の端部は杖状に尖るが他端は平直に切断されている。分割面の調整はない。
W-75	板材	E区V面2-2河 中層No.188	柾目 クスギ節	残存長37.0cm、幅17.5cm、厚さ4.7cm。木表側端部に段差を有する厚板材で、製作工程材と考えられる。
W-77	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 中層No.174	割り材 クスギ節	長さ125.5cm、幅6.9cm、厚さ5.3cm。1/4に分割したままの粗長い材で、一端は斜めに切断され他端は欠損する。一部炭化。
W-78	加工材	E区V面2-2河 中層No.176	割り材 クスギ節	残存長58.6cm、幅3.1cm、厚さ2.2cm。一端を杖状に尖らす刺突形状の材で、断面は部分により長方形や三角形を呈する。
W-79	加工材 (木端)	E区V面2-2河 中層No.187	柾目 クスギ節	長さ16.1cm、幅4.4cm、厚さ2.7cm。不整形の小片で粗い工具痕が見える。木端と考えられる。
W-80	角材 (炭化材)	E区V面2-2河 中層No.180	割り材 コナラ節	残存長14.3cm、幅7.0cm、厚さ3.6cm。断面が台形をなす材で、表面面のワレが著しい。一方の端部炭化。
W-81	角材	E区V面2-2河 中層No.183	柾目 クスギ節	残存長34.3cm、幅3.5cm、厚さ2.5cm。各側面とも平滑に仕上げられ、一方の端部が斜めに削られている。
W-82	角材	E区V面2-2河 中層No.183	柾目 クリ	残存長30.9cm、幅2.6cm、厚さ1.0cm。断面が長方形の角板状の細材で、各側面は平滑に仕上げられている。両端部欠損。
W-83	農具柄?	E区V面2-2河 中層No.203	丸木 ムクノキ	残存長19.5cm、径2.8-2.2cm。丁寧に拭払いし樹皮を除去した丸木の断片で、断面は土圧により楕円形をなす。
W-84	分割材	E区V面2-2河 中層No.205	割り材 クリ	残存長21.2cm、幅2.2cm、厚さ1.7cm。丸木を約1/4に分割した小材で、分割面は平直となっている。両端部欠損。
W-85	分割材	E区V面2-1河 中層No.210	割り材 クスギ節	残存長25.1cm、幅3.5cm、厚さ4.7cm。ミカン割りに分割された材で、一方の端部が斜めに削られている。
W-86	棒木材?	E区V面2-2河 中層No.182	丸木 クスギ節	残存長137.0cm、径3.0-3.3cm。拭払いされた樹皮付の細長い丸木で、一端は杖状に尖り他端は欠損する。
W-87	加工材 (作業台)	E区V面2-1河 中層No.125	割り材 クスギ節	残存長38.2cm、幅5.4cm、厚さ2.4cm。丸木を1/2に分割した材で、両端部を欠損する。木表面に工具痕があり、一時的に作業台として使用したと考えられる。
W-88	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 中層No.199	割り材 クスギ節	残存長51.8cm、幅4.3cm、厚さ2.3cm。ミカン割りに分割したままの材で、一方の端部が炭化している。
W-89	加工材	E区V面2-1河 中層No.218	割り材 クスギ節	長さ16.7cm、幅7.0cm、厚さ4.5cm。平面面とも台形をなし、各側面に削りが加えられている木端状の材である。
W-90	分割材	E区V面2-1河	割り材	残存長70.0cm、幅4.0cm、厚さ1.8cm。断面が三角形をなし、分割の

木製品観察表

遺物番号	種 類	出土位置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
W-91	(炭化材) 分割材	中層No.213 E区V面2-2河 中層No.221	モミ属 割り材 クスギ節	彫に製たような端材である。一方の端部炭化。 残存長35.0cm、幅3.8cm、厚さ4.0cm。直径9.0-10.0cmの丸木を約1/8に分割したままの材で、両端部を欠損する。
W-92	加工材	E区V面2-2河 中層No.208	丸木 クスギ節	残存長117.0cm、径10.5-8.3cm、枝払いし樹皮を除去しただけの材である。枝払いされた面には工具痕が見え、一部炭化している。
W-93	分割材	E区V面2-1河 中層No.220	割り材 クスギ節	残存長29.8cm、幅6.2cm、厚さ3.2cm。断面が三角形をなし、各側面にわずかに削りが加えられている。両端部欠損。
W-94	用途不明木製品	E区V面2-1河 中層No.212	板目 モミ属	残存長33.6cm、幅2.8cm、厚さ1.2cm。断面が薄針形をなす納のような材で、一端は丸く削られ隆起部を有し他端は欠損する。丸みを持つ面は約1/3が赤色塗彩されている。平直をなす面はほぼ中央に小段があり欠損部方向が一段低くなる。低くなった面は黒色を帯び、表面が平滑となっている。
W-95	分割材	E区V面2-1河 中層No.211	割り材 クスギ節	残存長67.3cm、幅7.1cm、厚さ2.8cm。断面が三角形をなす材で、分割面の調整はない。両端部欠損。
W-96	着納跡・鉄 未製品	E区V面2-1河 中層No.215	板目 アガシ亜属	残存長61.9cm、幅11.5cm、厚さ2.9cm。身先端部と一方の側縁部を欠損。着納部から肩部にかけて痕く形成されている。
W-97	角材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.214	割り材 クスギ節	残存長34.9cm、幅6.9cm、厚さ3.2cm。断面が台形をなし、表面は平滑に仕上げられている。一方の端部炭化。
W-98	丸柱材	E区V面2-1河 中層No.217	丸木 クスギ節	残存長182.3cm、径8.3-8.8cm、枝払いし樹皮を除去した丸木を使用。一方の端部は欠損するが他方の端部には丸みを持つ段が付けられている。
W-99	板材	E区V面2-2河 中層No.230	板目 モミ属	残存長18.8cm、幅3.8cm、厚さ0.9cm。両面とも丁寧に仕上げられた薄板材の断片である。
W-100	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 中層No.232	割り材 クリ	残存長55.0cm、幅8.8cm、厚さ5.6cm。半円形に分割したままの節持ちの材で、一方の端部は斜めに切られ他方の端部は炭化している。
W-102	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 中層No.235	割り材 クスギ節	残存長63.0cm、幅5.3cm、厚さ2.8cm。樹皮付の丸木を1/2に分割した材で、一端は炭化し他端は欠損する。
W-103	農具鑿削未製品	E区V面2-2河 中層No.238	板木 カエデア	柄部残存長85.6cm、径3.1-2.6cm、固定部長31.5cm、幅4.5cm、厚さ3.0cm。固定部は直径5.0cm以上の丸木芯材材加工する。固定部上面はやや平坦に削られているが、柄部は削りが痕く断面が多角形をなす。
W-104	分割材	E区V面2-2河 中層No.250	割り材 クリ	長さ27.0cm、幅13.5cm、厚さ5.9cm。断面が半円形をなす分割したままの材で、両端部が斜めに痕く切断されている。
W-105	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 中層No.253	割り材 クスギ節	残存長53.5cm、幅3.8cm、厚さ2.1cm。ミカン削りに分割したままの細長い材で、分割面の調整はない。
W-106	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 中層No.258	割り材 クスギ節	残存長28.0cm、幅6.0cm、厚さ3.3cm。樹皮付の材で分割面の調整はない。一方の端部は斜めに切断され、他方の端部は炭化している。
W-107	又 鋏	E区V面2-2河 中層No.259	板目 クスギ節	残存長22.0cm、幅5.2cm、厚さ0.7cm。又鋏身先端部の断片で、周縁部や又部は直線的な仕上げとなっており、先端部外縁は丸みを帯びる。
W-108	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 中層No.266	割り材 クスギ節	残存長44.4cm、幅8.7cm、厚さ5.1cm。断面が三角形の材で2個面は削りが加えられている。表面の大部分が炭化している。
W-109	斧柄?	E区V面2-1河 中層No.272	割り材 クリ	残存長10.5cm、柄部径2.4-2.9cm、基部径6.8-7.8cm。柄基部の断片で、柄部・基部とも断面がやや楕円形に削られている。斧柄か?
W-110	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 中層No.264	割り材 クスギ節	残存長71.5cm、幅4.5cm、厚さ4.0cm、枝払いし樹皮を除去してあるが分割したままの材で、一端は斜めに切断され他端は炭化している。
W-111	角材	E区V面2-1河 中層No.274	割り材 クリ	残存長85.1cm、幅6.7cm、厚さ3.7-2.3cm。断面が台形をなし、各側面はやや平滑に仕上げられている。両端部欠損。
W-112	角材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.276	割り材 クスギ節	残存長53.3cm、幅7.0cm、厚さ4.4cm。断面が長方形の直線的な材で、各側面とも平滑に仕上げられている。一部炭化。
W-113	分割材	E区V面2-1河 中層No.283	割り材 アガシ亜属	長さ32.4cm、幅22.5cm、厚さ7.0cm。断面が三角形をなす分割したままの材で、分割面の調整はなく両端部は痕く平坦に切断されている。製作工程材と考えられる。
W-114	農具柄	E区V面2-1河 中層No.287	丸木 モミ属	残存長63.0cm、径2.7cm。直線的な丸木を樹皮を除去してそのまま柄としている。両端部欠損。
W-115	加工材	E区V面2-1河 中層No.288	割り材 クリ	残存長41.7cm、幅4.2cm、厚さ2.8cm。断面が三角形の材で、一方の端部が杖の先端部のように鋭角に削られている。
W-116	加工材	E区V面2-1河 中層No.304	丸木 ウツギ節	残存長34.9cm、径2.9-3.3cm。樹皮を除去した丸木材で、一方の端部は1方向から斜めに削りが加えられている。他端は欠損する。
W-117	加工材	E区V面2-1河	割り材	長さ14.6cm、幅3.7cm。割り材を丸くなるように削り込んでいるが

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	本取り・樹種	加工・形状等の特徴
		中層No.307	ムクロジ	断面は多角形をなす。農具柄の断片のような材で、両端部はやや山形に切断されている。
W-118	板材	E区V面2-1河 中層No.309	榎目 アカガシ亜属	長さ20.0cm、幅16.4cm、厚さ3.1cm。榎目方向に薄い薄板材で、分割面の調整はない。両端部は表裏2方向より切断されている。
W-119	分割材	E区V面2-1河 中層No.311	割り材 クスギ節	残存長72.0cm、幅3.3cm、厚さ4.0cm。端に枝払いした分割したままの細長い材で、両端部を欠損する。
W-120	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.316	割り材 クリ	残存長26.5cm、幅7.2cm、厚さ4.5cm。約1/3に分割したままの材で、一部炭化している。
W-121	加工材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.319	丸木 オニグルミ	残存長61.3cm、径27.5cm。枝払いされた樹皮付の材で、一方の端部や枝の切断面に工具痕が残る。
W-122	加工材	E区V面2-1河 中層No.320	丸木 ヤマダブ	長さ26.5cm、径6.1cm。樹皮を除去した材で、両端部が2方向より粗く切断されている。
W-124	加工材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.323	割り材 クヌギ	残存長79.8cm、幅8.8cm、厚さ3.0cm。断面が長方形をなす角材状の材で、一端は両側縁から削りが増えられ杖状になり、他端は欠損する。欠損部寄りの縁線部が炭化している。
W-125	角材	E区V面2-1河 中層No.328	割り材 クスギ節	長さ24.9cm、幅6.1cm、厚さ4.0cm。断面が長方形をなす小片で、各面の調整不明。
W-126	分割材	E区V面2-1河 中層No.329	割り材 クスギ節	残存長75.7cm、幅6.6cm、厚さ9.0cm。樹皮を除去し約1/2に分割したままの材で、一方の端部は斜めに削られている。
W-127	加工材	E区V面2-1河 中層No.31	割り材 ニギキ	残存長35.3cm、幅8.9cm、厚さ7.4cm。割り材の樹皮側が半輪郭に沿って削られている。一端は両端から削りが増えられ杖状になる。
W-128	分割材	E区V面2-1河 中層No.31	割り材 クスギ節	長さ24.7cm、幅14.8cm、厚さ11.5cm。丸木を約1/4に分割した材で、摩滅が著しい。
W-129	板材	E区V面2-1河 中層No.32	榎目 クスギ節	残存長29.2cm、幅7.6cm、厚さ3.4cm。表面が摩滅しているが、割り材の厚さを整えて板材材としての用。両端部欠損。
W-130	角材 (炭化材)	E区V面2-1河 下層No.342	割り材 クスギ節	残存長107.6cm、幅8.4-5.6cm、厚さ4.0cm。断面が三角形の材で、一方の端部が丸く仕上げられている。表面がほぼ全面炭化。
W-131	角材	E区V面2-1河 下層No.342	割り材 クスギ節	長さ35.7cm、幅8.8cm、厚さ5.2cm。板目状の角材で表面は平滑に仕上げられている。両端部は斜めに切断されている。
W-132	又 線	E区V面2-1河 下層No.344	榎目 クスギ節	残存長42.2cm、幅7.0cm、厚さ2.2cm。身部片面と先端部、着柄部端を欠損する。着柄部から榎身への移行部には水平な段を有し、肩部は斜めで榎身縁線部や根部は直線部に延びる。
W-133	斧柄 (炭化材)	E区V面2-1河 下層No.345	割り材 クスギ節	残存長71.3cm、柄部径3.3cm、身部幅幅6.0cm、厚さ4.0cm。柄部欠損。斧台と柄を別木で作る屋柄と呼ばれる磨削である。組み穴は長方形で榎身部分の一部残る。斧眼部一部炭化。
W-135	角材 (炭化材)	E区V面2-1河 下層No.349	割り材 クスギ節	残存長32.0cm、幅6.4cm、厚さ5.8cm。割り材の樹皮部を除去した断面が長方形の角材で、約1/2が炭化している。
W-136	着柄部・線	E区V面2-1河 下層No.353	榎目 クスギ節	残存長14.2cm、幅10.0cm、厚さ1.0cm。身部から固定部基部の断片で、固定部基部は断面が鐘形をなす。
W-137	加工材	E区V面2-1河 下層No.355	割り材 クリ	長さ102.0cm、幅6.5cm、厚さ4.0cm。枝払いした樹皮を除去した材で、又部より1/2に分割されている。両端部とも削りが増えられている。
W-138	角材	E区V面2-1河 下層No.360	榎目 クスギ節	残存長35.3cm、幅8.0cm、厚さ4.0cm。断面は長方形をなし各面の調整不明。一端は斜めに切断され、他端は欠損する。
W-139	横 線?	E区V面2-1河 下層No.364	榎目 アカガシ亜属	残存長20.2cm、幅0.6cm、厚さ1.2cm。横線の断片と思われるが側面が丸みを帯び明確でない。表裏面は平滑に仕上げられ、縁線部は一方がやや厚い。
W-140	角材	E区V面2-1河 下層No.366	割り材 クスギ節	残存長30.0cm、幅2.7cm、厚さ1.5cm。断面が長方形をなす細長い角材状の材で、両端部を欠損する。
W-141	分割材	E区V面2-2河 下層No.368	榎目 クリ	残存長31.8cm、幅5.0-3.3cm、厚さ1.4cm。断面が長方形の分割したままの材であるが、側面にわずかに削りが増えられている。両端部欠損。
W-142	板材	E区V面2-2河 下層No.369	榎目 クスギ節	残存長72.0cm、幅19.0cm、厚さ1.5cm。幅広の薄板材であるが、欠損部も多く遺存状態不良。
W-143	板材	E区V面2-2河 下層No.370	榎目 クリ	長さ32.5cm、幅16.0cm、厚さ3.8cm。木表面は丸みをそのままだし、木裏側は平坦に削られている。両端部は斜めに切断されている。
W-144	加工材	E区V面2-2河 下層No.371	丸木 エノキ属	残存長96.8cm、径6.0cm。二又木で一部に樹皮を残す。幹下端は両面より斜めに切断され、二又部先端は欠損する。
W-145	直 柄 軸?	E区V面2-2河 下層No.372	榎目	残存長43.8cm、幅15.5cm、厚さ1.3cm。榎身下半の断片で、先端部は丸みを帯びて出る。新保遺跡の長柄軸A類と考えられている。
W-146	横 線	E区V面2-2河 下層No.373	榎目 アカガシ亜属	残存長36.0cm、幅8.8cm、厚さ2.2cm。柄部部分で約1/2に欠損。着柄部の縁線は縦なかで、柄孔は斜めに削られている。

遺物番号	種類	出土位置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
W-147	着柄漆・紙未製品	E区V面2-2河 中層No.189	榎目 クスギ節	残存長62.0cm、肩部幅18.8cm、厚さ3.7cm、着柄部幅5.2cm、厚さ3.7cm。着柄部端部を欠損。身側部はすでに平坦に調整されている。身側部は厚く磨き調整している程度である。移行部には段が付けられ、着柄部が粗く削り出されている。
W-148	分割材	E区V面2-2河 中層No.190	割り材 クスギ節	残存長83.0cm、幅13.0-6.7cm、厚さ6.0cm。樹芯部を除去した分割材で、掌線が著しい。
W-149	分割材	E区V面2-2河 下層No.378	割り材 クスギ節	長さ120.0cm、幅3.0-4.5cm、厚さ2.7-4.8cm。丸木を約1/8に分割したままの細長い材で、両端部は斜めに切断されている。
W-150	加工材	E区V面2-2河 下層No.384	榎目 アカガシ変質	残存長21.6cm、幅3.5cm、厚さ0.8cm。薄い板状の材で、表面とも平滑に仕上げられている。
W-151	加工材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.385	割り材 クリ	残存長30.0cm、幅7.8cm、厚さ7.3cm。側面は分割したままであるが、一方の先端部は杖状に削りが加えられ、他方の端部は炭化している。
W-152	板材	E区V面2-2河 下層No.390	榎目 クリ	残存長71.6cm、幅6.0cm、厚さ2.0cm。断面が長方形の直線的な材で、各側面と平滑に仕上げられている。両端部欠損。
W-153	農具柄	E区V面2-2河 下層No.398	丸木 アカガシ変質	残存長63.5cm、径3.8-2.4cm。丸棒状の直線的な材で、一方の端部は丸く仕上げられ他方の端部は欠損する。
W-154	横 鋸	E区V面2-2河 下層No.401	榎目 クスギ節	残存長37.7cm、幅10.0cm、厚さ1.5cm。両端部を欠損。断面は薄舟形をなす。着柄部の隆起は低く不明瞭。着柄孔は径4.2cmで斜めに穿孔されている。
W-155	分割材	E区V面2-2河 下層No.402	榎目 クスギ節	残存長48.7cm、幅12.3cm、厚さ3.0cm。分割したままの板状の材で、一方の端部は平坦に削られている。
W-156	長柄鋸	E区V面2-2河 下層No.403	榎目 アカガシ変質	柄部長56.0cm、径2.8cm、鋤身残存長12.6cm、厚さ1.9cm。柄部には両側に突起を持つ握り部が付く。鋤身は基部が遺存するだけで全体形状は不明であるが、斜めに延びる前部を持ち身は丸みがあり身は平坦となっている。
W-157	板材	E区V面2-2河 下層No.404	板目 クスギ節	残存長40.1cm、幅5.9cm、厚さ3.1cm。割り材の樹芯部を除去した細板材で、表面が炭化している。一端を欠損する。
W-158	着柄漆未製品	E区V面2-2河 下層No.406	割り材 クスギ節	長さ76.8cm、斧頭部幅8.0cm、厚さ11.0cm、柄部幅7.0cm、厚さ4.8cm、1/4分割材を使用し、部で太くなった部分を頭部とする。頭部・柄部ともに粗く削られている。
W-159	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.407	割り材 クスギ節	残存長38.3cm、幅5.3cm、厚さ2.5cm。断面が三角形をなす分割したままの材で、一方の端部が炭化している。
W-160	分割材	E区V面2-2河 下層No.408	割り材 カバノキ属	長さ63.7cm、幅13.2cm、厚さ7.0cm。断面が三角形をなす幅広の分割材で、分割面の調整はない。両端部はやや斜めに切断されている。
W-161	着柄漆・紙未製品	E区V面2-2河 下層No.411	榎目 アカガシ変質	長さ47.5cm、幅21.7cm、厚さ5.3cm。両端部を切断したミカン割り材の一端を両側から削って着柄部の原形を作る。両面の調整は粗く、厚さも分割時のままで整えていない。
W-162	分割材	E区V面2-2河 下層No.412	割り材 クスギ節	長さ85.0cm、幅7.2cm、厚さ7.0cm。丸木をほぼ1/4に分割した厚みのある材で、分割面の調整はない。両端部はやや斜めに切断されている。
W-163	分割材	E区V面2-2河 下層No.413	割り材 クスギ節	残存長40.8cm、幅5.5cm、厚さ3.4cm。断面が三角形の分割したままの材で、両端部を欠損する。
W-164	着柄漆・紙未製品	E区V面2-2河 下層No.419	榎目 アカガシ変質	残存長49.5cm、幅18.2cm、厚さ4.0cm。断面が三角形をなす分割時の厚みが残っている。着柄部から肩部は両側より削り込まれ、原形を作り出している。先端部は欠損する。
W-165	板材	E区V面2-1河 下層No.421	榎目 モミ属	残存長28.5cm、幅3.1cm、厚さ1.0cm。両端部を欠損するが、表面とも平滑に仕上げられている。
W-166	分割材	E区V面2-1河 下層No.422	割り材 クスギ節	長さ79.0cm、幅3.0cm、厚さ1.8cm。ミカン割りに分割されたままの材で、両端部が斜めに切断されている。
W-167	斧柄 (炭化材)	E区V面2-1河 下層No.424	割り材 クスギ節	残存長75.0cm、柄部径3.3cm。組み穴部分から頭部上端を欠損する。履削と呼ばれる部材で、組み穴は長方形と思われる。部分的に表面炭化。
W-168	加工材	E区V面2-1河 下層No.426	榎目 クスギ節	残存長30.5cm、幅4.3cm、厚さ1.7cm。薄い板状の材で表面とも平滑で、表面に小さな段がある。両端部欠損。
W-169	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 下層No.429	割り材 クスギ節	残存長66.9cm、幅6.1cm、厚さ3.5cm。ミカン割りに分割されたままの材で、両端部が炭化している。
W-170	角材	E区V面2-1河 下層No.430	割り材 ケンゴナシ属	残存長27.7cm、幅3.3cm、厚さ1.3cm。断面が長方形をなす細い角材で、表面は粗く調整されている。両端部欠損。
W-171	加工材	E区V面2-1河 下層No.431	割り材 クスギ節	残存長43.8cm、幅6.8cm、厚さ4.0cm。角材の一端を縦やかに突かせた杖状の材である。他端は欠損する。
W-172	横 鋸	E区V面2-1河	榎目	残存長29.6cm、幅10.4cm、厚さ3.4cm。着柄部を中心とした13/16寸

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	水取り・樹種	加工・形状等の特徴
		下層No.433	クスギ節	の断片で、着柄部の突起を明確に作り出している。着柄孔は左に傾く。胴身の厚さは0.8cmで平坦に作られている。
W-173	分割材	E区V面2-1河下層No.434	割り材 クスギ節	残存長71.6cm、幅3.2cm、厚さ2.2cm。断面が不整形をなす細長い分割材の断片で、両端部は欠損する。
W-174	丸木弓	E区V面2-1河下層No.435	丸木 イヌガヤ	残存長60.3cm、径2.2cm。弓幹部の断片と考えられ、粗く枝払いされた直線的な材で、未製品の可能性もある。
W-175	農具柄	E区V面2-1河下層No.440	割り材 アカガシ亜属	残存長54.2cm、径2.0-3.0cm。断面が楕円形をなす柄の断片で、割り材を縦目状に取り丁寧に仕上げている。
W-176	広楕木製品	E区V面2-1河下層No.441	柘目 クスギ節	長さ38.0cm、幅20.5cm、厚さ1.0-4.0cm。分割面の調整はなく分割時の形状を残す材で、上端は山形に削られ下端はやや丸く削られている。径3.3cmの着柄孔が斜めに穿孔されている。
W-177	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河下層No.444	割り材 クスギ節	残存長31.6cm、幅4.9cm、厚さ2.8cm。断面が長方形をなす楔形部を除去した分割材で、分割面の調整はない。一端は粗く切断され他端は炭化している。
W-178	板材	E区V面2-1河下層No.449	柘目 アカガシ亜属	残存長28.0cm、幅6.2cm、厚さ0.6cm。表面を非常に丁寧に調整した薄板材の断片で、一端は斜めに切断され他端は欠損する。
W-179	加工材	E区V面2-1河下層No.451	割り材 クスギ節	残存長58.5cm、幅8.4cm、厚さ3.2cm。柘目板状の分割材の側縁に1方向から粗い割り材が加えられている。分割面の調整はなく両端部欠損。
W-180	加工材	E区V面2-1河下層No.452	丸木 エノキ属	残存長61.8cm、径7.0cm。樹皮を除去した屈曲のある丸木で、枝を粗く切断している。両端部欠損。
W-181	加工材	E区V面2-1河下層No.452	丸木 ニワトコ	残存長55.5cm、径7.0cm。枝払いし樹皮を除去した丸木で、一端が粗く切断され他端は欠損する。約1/3の側面も欠損する。
W-182	丸木弓	E区V面2-1河下層No.453	丸木 イヌガヤ	残存長64.7cm、径1.7-2.2cm。弓幹部の断片で加工は枝払いだけである。
W-183	加工材	E区V面2-2河下層No.455	割り材 カバノキ属	残存長46.6cm、幅7.9cm、厚さ5.0cm。一端を柄状に粗く割り出している。身体と思われる部分は断面が長方形で調整は粗い。両端部欠損。製作工程材と思われる。
W-184	分割材	E区V面2-2河下層No.457	割り材 クスギ節	残存長36.9cm、幅5.0cm、厚さ2.5cm。断面が三角形をなす分割したままの材で、一端は斜めに切断され他端は欠損する。
W-185	農具柄	E区V面2-2河下層No.458	割り材 アカガシ亜属	残存長34.0cm、径2.6-3.5cm。断面が楕円形をなす柄の断片で、両端部は欠損する。一方がやや太く一方がやや細くなる。
W-186	用途不明木製品	E区V面2-2河下層No.461	柘目 モミ属	残存長18.1cm、幅6.6cm、厚さ1.2cm。柘目板の断面で、片面が赤色に染められている。色調はW-94と同様である。
W-187	板材	E区V面2-2河下層No.464	柘目 クスギ節	長さ12.0cm、幅15.4cm、厚さ3.9cm。平断面形とも長方形をなす材で、長い板材を切断した際の残片と思われる。両端部は両面より切断される。
W-188	角杭	E区V面2-2河下層No.467	割り材 クスギ節	残存長49.8cm、幅6.0cm、厚さ4.5cm。丸木を1/4に分割した割り材を使用。一端を鋭角に尖らす。他端は欠損。
W-189	角杭	E区V面2-1河下層No.472	割り材 クスギ節	残存長37.0cm、幅3.5cm、厚さ2.8cm。断面が三角形をなす分割したままの材で、一端を1方向より斜めに尖らす。他端は欠損する。
W-190	板材	E区V面2-1河下層No.473	柘目 クスギ節	長さ21.4cm、幅12.6cm、厚さ2.4cm。分割時の形状を残す板材の小片で、長板を切断した際の残片と思われる。
W-191	板材	E区V面2-1河下層No.475	柘目 クスギ節	長さ16.0cm、幅26.8cm、厚さ3.4cm。柘目方向に短い幅広の板材の小片で、長板を切断した際の残片と思われる。表面面とも粗く調整され、両端部は1方向より切断されている。
W-192	斧柄	E区V面2-2河下層No.468	割り材 クスギ節	長さ77.0cm、柄形幅7.7cm、厚さ4.4cm。頭部幅7.5cm、厚さ7.6cm。柄部の断面は隅丸方形で柄尻はやや尖っている。頭部の断面は三角形をなし後方が張り出している。着柄孔は6.8×4.1cmで楕円形をなし貫通していない。
W-193	加工材	E区V面2-1河下層No.479	丸木 クリ	残存長35.0cm、径14.0cm。枝払いされ樹皮を除去した材で、一方の端部は丸く削られ他方の端部は欠損する。柱等の建築材の断片と思われる。
W-194	農具柄	E区V面2-1河下層	割り材 アカガシ亜属	残存長17.2cm、径3.0-2.1cm。握り部の断片で、握り部はT字状に割り出されている。
W-195	丸木弓	E区V面2-1河下層	丸木 イヌガヤ	残存長18.0cm、径1.3-1.0cm。側近の断片で直線的で細い。弓幹部の断面はやや半円形をなし、平面が削り込まれている。柄は両側より凸状に削られている。
W-196	加工材	E区V面2-1河下層	割り材 アカガシ亜属	長さ6.1cm、幅5.9cm、厚さ4.9cm。菱形の多面体をなす材で、各側面はやや丁寧に削られ、一部に工具痕が残る。
W-197	丸木弓	E区V面2-1河下層	丸木	残存長24.1cm、径1.2cm。側近の断片で直線的で細い。弓幹部は

木製品観察表

遺物番号	種類	出土位置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
		下層	イヌガヤ	枝払いをしたままで、断面は丸い。胴部が炭化している。
W-198	加工材	E区V面2-1河 下層	割り材 イヌガヤ	残存長22.2cm、幅1.8cm、厚さ0.8cm。丸棒状の材が半分に割けたような材で、両端面は削り残されている。
W-199	加工材	E区V面2-1河 下層	丸木 イヌガヤ	残存長41.0cm、幅2.6cm、厚さ1.8cm。枝払いされた材で一方の端面は割れている。他方の端面は鋭角に削られ、使用により摩滅している。側面も摩滅しており、衝突具として使用された可能性がある。
W-200	板材 (炭化材)	E区V面2-1河 下層	板目 カヤ	残存長33.2cm、幅5.8cm、厚さ1.6cm。両端部欠損。表面平滑、裏面は粗い削り痕が残る。一方の端部炭化。
W-201	角材	E区V面2-1河 下層	板目 カヤ	残存長34.8cm、幅4.0cm、厚さ1.9cm。両端部欠損。断面形は長方形で各面とも平滑な仕上げ。
W-202	丸木杓	E区V面2-2河 中層	丸木 イヌガヤ	残存長22.7cm、径1.2-0.5cm。引近くの断片。弓幹部の断面は楕円形で枝払いだけで他に加工はなく、直線的で細い。柄は両側より凸状に削り込んでいる。
W-203	農具柄	E区V面2-2河 中層	割り材 アカガシ葉属	残存長10.0cm、厚さ1.4cm。Y字に開く握り部の基部の断片。
W-204	板材	E区V面2-2河 中層	板目 カヤ	残存長20.2cm、幅5.9cm、厚さ1.3cm。両端部欠損。表面平滑、裏面は粗い削り痕が残る。
W-205	加工材	E区V面2-2河 中層	丸木 モモ	残存長19.9cm、径4.0-3.7cm。樹皮を残し、先端部は5面に細長く削られている。丸木杖と思われる。
W-206	丸木杓	E区V面2-2河 下層	丸木 イヌガヤ	残存長35.1cm、径2.1-1.7cm。引近くの断片。弓幹部の断面はやや半円形をなし、平面が削り出されている。枝払いだけで他の加工はなく、直線的で細い。柄は両側より凸状に削り込んでいる。
W-207	横箆	E区V面2-2河 下層	板目 クスギ節	残存長18.3cm、厚さ3.3-1.5cm。着柄部の断片で着柄部は緩やかな隆起を持つ。
W-208	広縁未製品	E区V面2-2河 下層	板目 アカガシ葉属	残存長25.0cm、幅17.2cm、厚さ4.3cm。山形の頭部をなし胴部を欠損。表面は粗い削り材のままで、表面は平坦に仕上げられている。
W-209	丸木杓	E区V面2-1河 中層	丸木 イヌガヤ	残存長8.5cm、径1.7-1.2cm。引近くの断片。弓幹部の断面は半円形をなし、平面が削り出されている。他に加工はなく、直線的で細い。柄は両側より凸状に削り込んでいる。
W-210	杵	E区V面2-1河 中層No.480	割り材 アカガシ葉属	残存長67.1cm、換部径4.5-5.9cm、握部径2.7-2.1cm。一方の換部を欠損する。換部端は丸く削られ握部には尖り部はなく、換部から握部へなだらかに細くなる。断面はともに楕円形である。
W-211	板材	E区V面2-1河 中層No.484	板目 クリ	残存長33.4cm、幅10.0cm、厚さ2.4cm。両端部欠損。
W-212	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.485	割り材 クスギ節	残存長120.4cm、幅4.2-10.0cm、厚さ2.5-4.0cm。断面が三角形をなす薄いつ分割材で、分割面の調整はない。一端が炭化している。
W-213	分割材	E区V面2-1河 中層No.486	割り材 クスギ節	残存長47.9cm、幅5.5cm、厚さ2.9cm。磨り付の丸木を1/2に分割。分割面の削りはない。一方の端部は斜めに切断され、他方の端部は炭化。
W-214	加工材	E区V面2-1河 中層No.490	丸木 ヤマダウ	残存長52.2cm、径4.0-3.2cm。両端部欠損。屈曲した材で樹皮はなく、側面1/4を平坦に削り出している。
W-215	加工材	E区V面2-1河 中層No.491	丸木 クスギ節	残存長56.5cm、径3.5cm。枝払いし樹皮を除去した細い丸木で、一端を杖状に尖らす。他端は欠損する。
W-216	板材	E区V面2-1河 中層No.491	板目 クスギ節	残存長25.3cm、幅7.6cm、厚さ0.7cm。薄い板状の材で、両端部を欠損する。
W-217	角材	E区V面2-1河 中層No.494	割り材 クスギ節	残存長6.5cm、幅3.5cm、厚さ2.8cm。両端部欠損。断面は方形に近く細い角棒状をなす。
W-218	加工材	E区V面2-1河 中層No.495	丸木 ヒイラギ	残存長20.0cm、径6.0cm。丸木杖の先端部の断片と思われ、先端部は多面に削り出され円錐状をなす。
W-219	建築材?	E区V面2-1河 中層No.497	丸木 クリ	残存長111.5cm、径12.0-7.5cm。一方の端部は欠損し、他方の端部は炭化している。枝払いし、樹皮を取っている。丸柱材と思われる。
W-220	長柄二又鋤	E区V面2-1河 中層No.498	板目 クスギ節	残存長77.0cm、刃部長34.2cm、刃幅17.4cm、刃部厚2.0-0.7cm、柄部径2.5-2.2cm。刃部の柄は水平に延び、身の両側は直線的で先端部は丸くなる。刃部は直線的に削り込まれている。
W-221	板材	E区V面2-1河 中層No.499	板目 クスギ節	残存長22.1cm、幅8.5cm、厚さ1.0cm。薄板の断片で表面は平滑で、裏面には粗い削り痕を残す。
W-222	加工材	E区V面2-1河 中層No.500	割り材 クスギ節	残存長26.8cm、幅8.8cm、厚さ1.8cm。断面が三角形に分割された材を使用。一端は杖状に尖り他端は磨かれている。杖と考えられる。
W-223	分割材	E区V面2-1河 中層No.501	割り材 クスギ節	残存長66.7cm、幅2.3cm、厚さ1.8cm。両端部欠損。3カ所削りしたままの材で角棒状をなす。
W-224	木端	E区V面2-1河	割り材	長さ7.5cm、幅8.0cm、厚さ1.6cm。上端は表裏面から切断され、下

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
W-225	加工材	中層No.503 E区V面2-1河 中層No.507	アカガシ重属 丸木 クスギ節	端に大きな工具痕がある。 長さ30.8cm、径12.6-11.4cm。切断材。一方の端部は水平に切断され、他方の端部は大きく2方向より斜めに切断されている。切断面には工具痕が明瞭に残り、残存する刃部幅は約3.0cmで端部はやや丸みを持つ。
W-226	加工材	E区V面2-1河 中層No.510	榎目 モミ属	残存長23.0cm、幅5.1cm、厚さ2.5cm。両端部欠損。断面が三角形をなし、一部に大きな削痕を残す。
W-227	角材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.516	榎目 クスギ節	残存長35.2cm、幅13.4cm、厚さ6.8cm。両端部欠損。断面が長方形をなし、全面が炭化している。
W-228	加工材	E区V面2-1河 中層No.517	丸木 エノキ属	残存長33.2cm、径2.0cm。一方の端部は欠損するが、他方は斜めに切断されている。削皮なし。
W-229	板材	E区V面2-1河 中層No.520	榎目 アカガシ重属	長さ25.0cm、幅18.5cm、厚さ3.8cm。ミカン割りされた板材の切断材で、両端部は両面より切断されている。表裏面には粗い削痕が残る。
W-230	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.521	割り材 クスギ節	長さ29.0cm、幅4.7cm、厚さ3.3cm。1/4に分割したままの材で、両端部は斜めに切断されている。一部炭化。
W-231	分割材	E区V面2-1河 中層No.522	割り材 クスギ節	長さ30.1cm、幅4.3cm、厚さ3.3cm。1/8に分割したままの材で、両端部は斜めに切断されている。
W-232	分割材	E区V面2-1河 中層No.523	割り材 クスギ節	長さ61.8cm、幅4.4cm、厚さ2.6cm。削皮付の丸木を1/2に分割したもので、両端部は台形に削られている。
W-233	分割材	E区V面2-1河 中層No.489	割り材 クスギ節	長さ159.3cm、幅7.0cm、厚さ4.6cm。断面が三角形の直線的な分割材で、表裏は丸みを残し分割面の調整はない。両端部は平坦に切断されている。
W-234	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.526	割り材 クスギ節	残存長45.7cm、幅4.5cm、厚さ3.1cm。1/4に分割したままの材で、一部炭化。
W-235	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.528	割り材 クスギ節	長さ113.2cm、幅5.4cm、厚さ3.7cm。1/8に分割したままの材で、両端部は斜めに切断されている。一部炭化。
W-236	分割材	E区V面2-1河 中層No.529	割り材 クスギ節	残存長149.0cm、幅4.8cm、厚さ2.4cm。分割したままの無調整の細長い材で、断面が部分により三角形や台形をなす。両端部欠損。
W-237	加工材	E区V面2-1河 中層No.531	榎目 クスギ節	残存長24.3cm、幅6.0cm、厚さ4.0cm。1/8に分割された材で一部削りが増えられている。両端部欠損。
W-238	加工材	E区V面2-1河 中層No.532	割り材 クスギ節	残存長37.4cm、幅6.8cm、厚さ4.4cm。上端欠損。先端部は5面に鋭角に削られている。先の先端部の削片の可能性あり。
W-239	角材	E区V面2-1河 中層No.533	榎目 クスギ節	残存長48.3cm、幅5.5cm、厚さ3.8cm。両端部欠損。断面は台形をなし、4面とも平滑に仕上げられている。
W-240	角杭	E区V面2-1河 中層No.535	割り材 クスギ節	長さ82.4cm、幅6.6cm、厚さ3.4cm。分割後4個面とも一部削りが加えられている。先端部には粗い削りが増えられ、端部は打ち込み時の歪みが生じている。
W-241	角杭	E区V面2-1河 中層No.536	割り材 クスギ節	長さ49.7cm、幅6.2cm、厚さ4.4cm。分割したままの材で、上端は平坦に削られ、先端部は3面の大きな削りが増えられ鋭角となっている。側面には土圧による収縮痕がある。
W-242	加工材	E区V面2-1河 中層No.537	割り材 クスギ節	残存長20.8cm、幅7.3cm、厚さ4.5cm。上端部欠損。分割したままの材で、一端は削りが増えられ鋭角となっている。
W-243	農具柄	E区V面2-1河 中層No.539	割り材 アカガシ重属	残存長27.7cm、径2.4-2.1cm。両端部欠損。丸棒状をなし、側面は細かく削られ丁寧な仕上げとなっている。
W-244	角杭	E区V面2-1河 中層No.540	割り材 クスギ節	長さ41.4cm、幅6.5cm、厚さ6.0cm。角錐状をなす材で上端は平坦に削られ、先端部は粗い削りが増えられ鋭角となっている。端部には打ち込み時の歪みが生じている。
W-245	角杭	E区V面2-1河 中層No.541	割り材 クスギ節	残存長35.5cm、幅3.2cm、厚さ2.7cm。上端部は平坦に削られ、先端部は2面の削りが増えられている。側面に土圧による収縮痕がある。
W-246	角材	E区V面2-1河 中層No.542	割り材 クスギ節	残存長55.0cm、幅6.3cm、厚さ4.3cm。断面は四角形で、一方の端部は2方向より粗く削られ鈍角をなす。
W-247	角材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.543	割り材 モミ属	残存長26.0cm、幅2.8cm、厚さ1.5cm。両端部欠損。断面は長方形をなし、各側面とも平滑に仕上げられている。一部炭化。
W-248	角材	E区V面2-1河 中層No.544	割り材 クスギ節	残存長30.0cm、幅2.8cm、厚さ2.1cm。一方の端部欠損。他方の端部は丸く仕上げられている。各側面は平滑となっている。
W-249	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.545	割り材 クスギ節	残存長49.8cm、幅7.0cm、厚さ5.0cm。両端部欠損。ミカン割りに分割された材で、全面が炭化している。
W-250	板材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.546	榎目 クスギ節	残存長25.9cm、幅7.0cm、厚さ2.0cm。両端部欠損。表面は平滑に仕上げられ、裏面は全面が炭化している。
W-251	加工材	E区V面2-1河	丸木	長さ37.9cm、径12.7-11.5cm。削皮を残す二又部分の樹幹の切断材

遺物番号	種 類	出土位置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
W-252	二又 板 (炭 化 材)	中層No.547 E区V面2-1河 中層No.548	モモ 柾目 タヌギ節	で、切断部は2方向より鈍角に切断されている。 残存長38.1cm、残存幅16.3cm、厚さ2.6cm。着柄部と敷身の一部を欠損し、一部炭化している。着柄部から敷身への移行部に段があり、敷身の傾斜は聞き気味に作られ先端部は丸い、又部の切り込みは幅広となっている。傾斜は平直で敷表は丸みを持った作りとなっている。
W-253	板 材	E区V面2-1河 中層No.551	柾目 タヌギ節	長さ94.4cm、幅10.1cm、厚さ2.9cm。表面は平直で裏面は粗い削りが残る。一方の端部が丸く仕上げられている。
W-254	分割 材	E区V面2-1河 中層No.552	割り材 タヌギ節	残存長62.3cm、幅4.5cm、厚さ2.2cm。両端部欠損。1/8に分割したままの材で一部炭化している。
W-255	分割 材	E区V面2-1河 中層No.553	割り材 タヌギ節	残存長46.6cm、幅5.4cm、厚さ3.9cm。断面三角形に分割したままの材で、一方の端部は斜めに切断されている。
W-256	分割 材	E区V面2-1河 中層No.555	割り材 クリ	長さ50.2cm、幅8.0cm、厚さ4.6cm。平四角に分割された材で、両端部とも斜めに切断されている。
W-257	角 材	E区V面2-1河 中層No.556	割り材 タヌギ節	残存長107.5cm、幅5.6cm、厚さ3.5cm。一方の端部を欠損する。各側面とも平直に仕上げられ、一方の端部寄りに欠り込みがある。
W-258	農具柄未製品	E区V面2-1河 中層No.558	又木 トチノキ	残存長21.1cm、幅7.5-3.3cm、厚さ4.4cm。断面は四角形で1側面は傾斜を残し、他の3側面は直ぐ削られている。
W-259	分割 材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.559	割り材 タヌギ節	残存長149.0cm、幅9.4cm、厚さ4.9cm。断面が三角形をなしミカン割りに分割したままで、分割目の調整はない。一部炭化している。
W-260	分割 材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.560	割り材 タヌギ節	長さ68.5cm、幅8.9cm、厚さ7.1cm。1側面は傾斜を残し、一部炭化している。両端部は斜めに切断されている。
W-261	角 材	E区V面2-1河 中層No.561	柾目 コナラ節	長さ48.2cm、幅9.4cm、厚さ4.0cm。各側面とも平直に仕上げられ、一方の端部は半円状に外溝して仕上げられ、他方の端部は半円状に内溝して仕上げられている。
W-262	加工 材	E区V面2-1河 中層No.563	柾目 タヌギ節	残存長54.5cm、径2.0-1.7cm。両端部欠損。丸棒状に仕上げられている。
W-263	角 材	E区V面2-1河 中層No.564	柾目 コナラ節	長さ101.7cm、幅5.5cm、厚さ3.6cm。断面は長方形をなし、各側面は平直に仕上げられている。両端部は斜めに切断されている。
W-264	加工 材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.566	柾目 コナラ節	長さ34.5cm、幅5.3-2.6cm、厚さ4.3-2.4cm。一部炭化。角材の一方の端部寄りが両側より半円形に抉り込まれている。
W-265	分割 材	E区V面2-1河 中層No.567	割り材 タヌギ節	長さ87.0cm、幅6.3cm、厚さ2.7cm。ミカン割りに分割したままの節のある材である。
W-266	加工 材	E区V面2-1河 中層No.574	割り材 タヌギ節	残存長25.8cm、幅9.0cm、厚さ5.9cm。衝付式の半割材で端部が斜めに大きく削られている。
W-267	板 材	E区V面2-1河 中層No.570	柾目 ヤマダワ	残存長45.2cm、幅3.8-1.7cm、厚さ0.9cm。両端部欠損。各側面とも平直に仕上げられている。
W-268	加工 材	E区V面2-1河 中層No.571	割り材 タヌギ節	残存長114.8cm、幅7.0cm、厚さ5.8cm。1/4に分割された材で一方の端部は鋭角に削り込まれており、欠の可能性がある。
W-269	角 材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.572	割り材 コナラ節	残存長41.0cm、幅4.3cm、厚さ2.5cm。端部は直角に削られ、各側面はやや平直に仕上げられている。一部炭化。
W-270	分割 材	E区V面2-1河 中層No.575	割り材 コナラ節	長さ50.0cm、幅5.0cm、厚さ4.2cm。1/4に分割したままの材で、両端部は斜めに削られている。
W-271	分割 材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.577	割り材 コナラ節	残存長72.5cm、幅7.3cm、厚さ3.0cm。両端部欠損。ミカン割りに分割したままの材で、一部炭化している。
W-272	角 材	E区V面2-1河 中層No.579	割り材 コナラ節	残存長28.5cm、幅4.7cm、厚さ3.7cm。断面は台形をなし、各側面はやや平直。
W-273	分割 材	E区V面2-1河 中層No.583	割り材 コナラ節	残存長54.2cm、幅7.8cm、厚さ8.4cm。一方の端部欠損。1/4に分割したままの材である。
W-274	板 材	E区V面2-1河 中層No.587	柾目 コナラ節	残存長23.5cm、幅4.5cm、厚さ1.5cm。両端部欠損。表裏面とも平直に仕上げられている。
W-275	横 梁	E区V面2-1河 中層No.594	柾目 アカガシ塗炭	残存長25.8cm、残存幅0.0cm、厚さ2.5-1.3cm。着柄部の断片でほとんど炭化している。着柄のための隆起はしっかりとした様を持つ。
W-276	角 材	E区V面2-1河 中層No.595	割り材 タヌギ節	残存長56.5cm、幅8.0cm、厚さ4.0cm。一方の端部欠損。表面は丸みを帯び、裏面は平直に仕上げられている。端部は丸く削られている。
W-277	分割 材 (炭 化 材)	E区V面2-1河 中層No.599	割り材 タヌギ節	残存長46.3cm、幅6.3cm、厚さ4.8cm。1/4に分割されている。
W-278	建築 材?	E区V面2-1河 中層No.600	割り材 クリ	残存長186.4cm、幅24.3cm、厚さ9.0cm。丸木の木表面を半円形に分割した幅広で厚い板状の材で、分割面は直ぐ調整されている。片側縁には約85.0cm間隔でコの字状に削り込まれた段が付いている。一方の端部は平直に削られ、他端は欠損する。用途は不明であるが

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	本取り・樹種	加工・形状等の特徴
W-279	加工材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.602	丸木 クスギ節	建築材の可能性と考えられる。 残存長118.3cm、径5.6-4.1cm。枝払いした直線的な丸木で、一部炭化している。種木材の断片と思われる。
W-280	加工材	E区V面2-1河 中層No.604	丸木 クリ	長さ57.7cm、径5.5-4.1cm。枝払いした丸木で先端部は6方向より細く鋭角に削られ、上端は平坦に削られている。杖と思われる。
W-281	丸柱材	E区V面2-1河 中層No.608	丸木 クスギ節	長さ133.4cm、径10.0cm。枝払いし樹皮を除去したままの材で、一端は山形に輪端は斜めに切断されている。
W-282	加工材	E区V面2-1河 中層No.609	丸木 クスギ節	長さ71.8cm、径16.6cm。枝払いし樹皮を除去した材で、両端部は斜めに細く切断されている。
W-283	分割材	E区V面2-1河 中層No.610	割り材 クスギ節	残存長93.3cm、幅4.0cm、厚さ3.3cm。1/4に分割された材で、一方の端部は鋭角に削られている。
W-284	農具柄	E区V面2-1河 中層No.611	又木 ヤブツバキ	残存長13.5cm、幅3.7cm。又部の断片で繫縛部が平坦に削られている。
W-285	加工材	E区V面2-1河 中層No.614	割り材 クリ	残存長58.1cm、幅15.2cm、厚さ8.4cm。丸木を1/2に分割したままの材である。
W-286	分割材	E区V面2-1河 中層No.618	割り材 クスギ節	残存長93.8cm、幅8.8cm、厚さ3.5cm。断面が三角形をなす分割したままの細長い材である。
W-287	角材	E区V面2-1河 中層No.619	板目 クリ	長さ48.0cm、幅10.2cm、厚さ4.5cm。粗い削りが加えられ、端部は平坦に切断されている。
W-288	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.629	割り材 クスギ節	残存長41.1cm、幅7.7cm、厚さ3.6cm。ミカン割りに分割されたままの材で一方の端部は斜めに切断され、他方は炭化している。
W-289	角材	E区V面2-1河 中層No.630	板目 クスギ節	残存長12.0cm、幅3.6cm、厚さ1.6cm。一方の端部を欠損する。各側面は丁寧に削られ、端部は平坦に削られている。
W-290	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.631	割り材 クスギ節	残存長44.9cm、幅3.0cm、厚さ2.4cm。ミカン割りに分割したままの炭化付の材で、一方の端部が炭化している。
W-291	加工材	E区V面2-1河 中層No.633	丸木 クスギ節	長さ44.1cm、径6.8-6.2cm。樹皮付の丸木で、両端部が鋭角に切断されている。
W-292	加工材	E区V面2-1河 中層No.642	丸木 ヤマダブ	長さ8.7cm、径6.0-5.3cm。丸木の両端部を2方向より切断している。
W-293	分割材	E区V面2-1河 中層No.645	割り材 クスギ節	残存長31.1cm、幅6.5cm、厚さ3.2cm。丸木を1/2に分割したままの材で、一方の端部を欠損する。
W-294	分割材	E区V面2-1河 中層No.646	割り材 カヤ	残存長28.8cm、幅5.0cm、厚さ2.2cm。断面が三角形の材で、一方の端部が鋭角に削られている。
W-295	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.652	割り材 クスギ節	残存長32.7cm、幅4.8cm、厚さ2.8cm。約1/2に分割された材で、ほぼ全面が炭化している。
W-296	加工材	E区V面2-1河 中層No.657	割り材 クスギ節	残存長98.0cm、幅3.8cm、厚さ3.2cm。1/4に分割された材で一方の端部が多方向より削られている。杖の可能性あり。
W-297	炭化材	E区V面2-1河 中層No.658	丸木 クスギ節	残存長40.3cm、径14.7-12.7cm。樹皮付の丸木で、両端部が炭化している。
W-298	木端	E区V面2-1河 中層No.660	板目 オニグルミ	長さ11.3cm、幅7.5cm、厚さ1.9cm。断面がレンズ形をなす小材で、木端と考えられる。
W-299	三又鎌	E区V面2-1河 中層No.663	板目 クスギ節	残存長55.8cm、残存幅7.3cm、厚さ2.0cm。両側の刃部を欠損する。着納部の断面は歯形をなし、鎌葉側には段が刻まれている。鎌身への移行部には小さな形がある。
W-300	作業台	E区V面2-1河 中層No.665	割り材 クスギ節	長さ44.0cm、幅8.2cm、厚さ5.0cm。丸木を1/2に分割した材を使用。表裏面とも斜め方向に、多数の極めて粗い工具痕がある。
W-301	分割材	E区V面2-1河 中層No.669	割り材 クスギ節	残存長58.2cm、幅4.8cm、厚さ2.1cm。ミカン割りに分割された材で、一方の端部は鋭角に削られている。
W-302	加工材	E区V面2-1河 中層No.671	丸木 サワツタギ	長さ28.0cm、径5.3-4.6cm。丸木の両端を鈍角に切断。切断面には工具痕が明確に残る。
W-303	角材	E区V面2-1河 中層No.673	割り材 クスギ節	残存長45.8cm、幅3.3cm、厚さ1.8cm。断面は長方形で各側面とも平滑に仕上げられ、端部は平坦に削られている。
W-304	角材	E区V面2-1河 中層No.675	割り材 クスギ節	残存長36.3cm、幅3.0cm、厚さ2.0cm。断面は方形で各側面とも平滑に仕上げられている。
W-305	分割材	E区V面2-1河 中層No.676	割り材 クスギ節	長さ34.1cm、幅17.5cm、厚さ9.2cm。1/2に分割された材の断片で、端部が斜めに切断されている。
W-306	分割材	E区V面2-1河 中層No.677	割り材 クスギ節	残存長31.9cm、幅3.9cm、厚さ3.9cm。1/4に分割された材で、端部が斜めに削られている。
W-307	角材	E区V面2-1河 中層No.681	板目 クリ	残存長110.0cm、幅4.7cm、厚さ2.7cm。断面が長方形の角輪状の材で、各側面とも平滑に仕上げられている。両端部欠損。
W-308	分割材	E区V面2-1河	割り材	残存長97.0cm、幅9.0cm、厚さ3.5cm。ミカン割りに分割したままの

木製品観察表

遺物番号	種類	出土位置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
		中層No.685	クスギ節	材である。
W-309	角材	E区V面2-1河 中層No.695	楕目 クスギ節	残存長76.8cm、幅6.7cm、厚さ5.7cm。断面が台形をなし、各側面には楕い削りが加えられている。端部は平坦に削られている。
W-310	分割材	E区V面2-1河 中層No.697	割り材 クスギ節	残存長77.8cm、幅6.5cm、厚さ5.3cm。1/4に分割された材で、端部は斜めに削られている。
W-311	加工材	E区V面2-1河 中層No.699	割り材 エノキ属	残存長30.5cm、幅3.3cm、厚さ4.0cm。ミカン削りに分割された材で、端部は半面だけに削りが加えられている。枕の可能性がある。
W-312	横箆	E区V面2-1河 中層No.712	楕目 クスギ節	残存長37.1cm、幅3.2cm、厚さ1.5cm。横箆の下端部の断片で、着目部の隆起は明確な線を持つ。
W-313	木匙	E区V面2-1河 中層No.704	楕目 クスギ節	長さ24.3cm、幅3.3cm、厚さ1.5cm。一方の側面は直線的でやや厚く、他方の側面はやや幅広となり薄くなる。また、握り部がやや厚く先端部はやや薄くなる。
W-314	角材	E区V面2-1河 中層No.705	割り材 クスギ節	残存長84.2cm、幅4.8cm、厚さ2.1cm。断面が長方形をした材で、一方の端部が斜めに削られている。
W-315	桶木材? (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.708	割り材 クスギ節	残存長224.6cm、幅7.8cm、厚さ6.9cm。断面が台形をなす細長い角材で分割面の調整はない。表面の多くの部分が炭化し、両端部を欠損する。
W-316	分割材	E区V面2-1河 中層No.711	割り材 クスギ節	残存長87.0cm、幅5.5cm、厚さ6.3cm。1/4に分割された材で、端部は鈍角に削られている。
W-317	木鏝	E区V面2-1河 中層No.715	楕目 クスギ節	長さ15.9cm、幅3.4cm、厚さ3.7cm。平面が三角形をした断片で、一部が炭化している。
W-318	加工材	E区V面2-1河 中層No.716	割り材 クスギ節	長さ38.8cm、幅3.1cm、厚さ1.9cm。断面が楕円形をした丸棒状の材で、農工具の柄の可能性もある。
W-319	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.720	割り材 クスギ節	残存長49.5cm、幅3.3cm、厚さ4.5cm。1/4に分割された材で、全面が炭化している。
W-320	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.722	割り材 クスギ節	残存長144.4cm、幅10.8cm、厚さ5.0cm。断面が三角形をなす厚みのある分割材で、全面が炭化している。
W-321	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.724	割り材 クスギ節	残存長84.3cm、幅7.5cm、厚さ3.4cm。ミカン削りに分割された材で、一方の端部は丸く削られている。一部炭化。
W-322	加工材	E区V面2-1河 中層No.729	割り材 クスギ節	残存長29.0cm、幅3.0cm、厚さ4.0cm。断面が隅丸方形をなす角杖状の材の断片で、一端が杖状に細くなっている。他端は欠損する。
W-323	横箆	E区V面2-1河 中層No.731	割り材 クスギ節	長さ29.5cm、幅5.5cm、厚さ4.1cm。割り材を利用し、断面は歯状形をなす。歯身と歯間はなだらかに横滑り、やや反りを持つ。
W-324	容器	E区V面2-1河 中層No.732	楕目 クスギ節	残存長17.6cm、幅14.0cm、厚さ1.0cm。円形か楕円形をなす皿状の容器の断片と思われ、底部は平底である。
W-325	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.733	割り材 クスギ節	残存長50.8cm、幅6.0cm、厚さ3.8cm。ミカン削りに分割された材で、全面が炭化している。
W-326	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.735	割り材 クスギ節	残存長111.0cm、幅5.2-2.7cm、厚さ3.3cm。ミカン削りに分割された材で、全面が炭化している。
W-327	分割材	E区V面2-1河 中層No.736	割り材 クスギ節	長さ37.1cm、幅6.7cm、厚さ4.6cm。断面が長方形の材で、両端部は斜めに切断されている。中央に筋を持つ断片である。
W-328	加工材	E区V面2-1河 中層No.737	割り材 ヤマギク	長さ9.1cm、幅5.6cm、厚さ4.7cm。断面が台形をなす切断材で、各側面は平坦に削られている。一方の端部は平坦に切断され、他方の端部は斜めに切断されている。
W-329	加工材	E区V面2-1河 中層No.740	丸木 クスギ節	残存長28.5cm、径5.2-3.3cm。樹皮付の材で、一方の端部は2方向より斜めに切断されている。
W-330	加工材	E区V面2-1河 中層No.742	丸木 クスギ節	長さ31.8cm、径8.1-6.6cm。枝払いされた樹皮付の材で、両端部とも平坦に切断されている。
W-331	角材	E区V面2-1河 中層No.743	割り材 クスギ節	残存長37.5cm、幅4.5cm、厚さ3.6cm。断面が方形の材で、一方の端部は平坦に削られている。
W-332	加工材	E区V面2-1河 中層No.744	丸木 クスギ節	長さ31.1cm、径8.8-7.6cm。樹皮付の材で、一方の端部は斜めに他方の端部は平坦に切断されている。
W-333	分割材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層No.746	割り材 クスギ節	残存長42.0cm、幅6.5cm、厚さ5.9cm。樹皮付の材で、大部分が炭化している。
W-334	角材	E区V面2-1河 中層No.747	割り材 クスギ節	残存長44.7cm、幅3.2cm、厚さ1.0cm。断面が長方形の材で、表面は磨れているが裏面は磨けていない。
W-335	加工材	E区V面2-1河 中層No.748	丸木 ニワトコ	残存長56.8cm、径3.7cm。枝払いされた材で、一方の端部が鋭角に斜めに削られている。
W-336	角杖	E区V面2-1河 中層No.749	楕目 クスギ節	残存長33.7cm、幅4.2cm、厚さ2.3cm。断面が長方形の材で、2-1号河川内に打ち込まれていた。
W-337	二又箆	E区V面2-1河	楕目	残存長49.4cm、幅12.7cm、厚さ2.7cm。箆端は平坦で断面は歯状

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
		中層No.750	クスギ節	をなす。銀表面の固定部には組みがあり、銀身への移行部には段がある。銀身は両側縁が直線的でやや開き気味となる。又部の切り込みもやや幅広となっている。刃先は欠損している。
W-339	二又 鍬	E区V面2-1河 中層No.753	榎目 クスギ節	残存長44.1cm、幅6.2cm、厚さ1.9cm。榎に1/2を欠損し着柄部上端を欠損する。着柄部から銀身への移行部には段があり、銀身側縁はやや丸みを持つ。又部の切り込みはやや幅広と思われる。
W-340	加工材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層	割り材 クスギ節	長さ19.7cm、幅3.6cm、厚さ6.0cm。分割材を使用した材で、横縁の未製品の可能性がある。握り部と銜身との境は片面だけ段を付けている。銜身先端部は粗い削り加工が施され、側面の各所に工具痕が見られる。一部炭化。
W-341	加工材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層	割り材 クスギ節	長さ30.1cm、幅9.2cm、厚さ6.4cm。大きな段が削り込まれ、両端部は切断されている。大部分が炭化している。
W-342	斧 柄	E区V面2-1河 中層	榎目 クスギ節	残存長23.5cm、幅4.0cm、厚さ2.4cm。斧台着装部の断片である。組み込みは1.0×4.3cmの長方形で、やや斜めに埋められている。
W-343	加工材	E区V面2-1河 中層	榎目 クスギ節	残存長52.5cm、幅8.8cm、厚さ3.5cm。表裏面はやや丁寧に削られており、端部は丸く削られている。
W-344	加工材	E区V面2-1河 中層	榎目 クスギ節	残存長48.4cm、幅6.3cm、厚さ2.9cm。ミカン削りにされた材で、側面の一部が欠く削り込まれている。
W-345	分割材	E区V面2-1河 中層	割り材 クスギ節	残存長36.8cm、幅5.9cm、厚さ3.5cm。ミカン削りにされたままの細長い材である。
W-346	加工材 (炭化材?)	E区V面2-1河 中層	丸木 クスギ節	残存長32.9cm、幅6.3cm、厚さ3.3cm。握り部が短いと推定と思われる。握り部と銜身との境には段がある。片面が炭化している。
W-347	農具柄?	E区V面2-1河 中層	榎目 クスギ節	残存長11.4cm、幅3.5cm、厚さ2.5cm。断面が略円形をなし、側面は丁寧に削られている。農具の柄と思われる断片である。
W-348	加工材 (炭化材)	E区V面2-1河 中層	丸木 クスギ節	残存長23.8cm、径10.0cm。枝払いされた材で、端部が斜めに切断されている。一部炭化。
W-349	加工材	E区V面2-1河 中層	丸木 クスギ節	長さ16.1cm、径4.8cm。樹皮付の材で、一方の端部は斜めに切断され他方の端部は平坦に切断されている。
W-350	加工材	E区V面2-1河 中層	割り材 クスギ節	長さ9.0cm、幅6.7cm、厚さ4.0cm。断面が略円形をなし、表面は平坦で表面は両端より斜めに削りが加えられている。
W-351	角 枕	E区V面2-1河 中層	割り材 クスギ節	長さ44.1cm、幅4.0cm、厚さ3.1cm。断面は台形をなし、先端部は鋭角に仕上げられている。
W-352	加工材	E区V面2-1河 中層	割り材 ヤマダツ	残存長68.9cm、幅7.6cm、厚さ4.1cm。一方の端部は厚みを持ち、他方の端部は次第に細くなる。片面はやや粗く削りが加えられている。
W-353	加工材	E区V面2-1河 中層	丸木 クスギ節	残存長68.6cm、径4.5-3.7cm。側面は一部に削りが加えられている。一方の端部はやや丸く仕上げられ、他方の端部は欠損する。農具の柄の未製品の可能性あり。
W-354	加工材	E区V面2-1河 中層	丸木 クスギ節	残存長64.3cm、径4.4cm。樹皮付の芯持材で、一方の端部が鋭角に削られ他方の端部は二又となっている。
W-355	加工材 (炭化材)	E区V面2-1河 下層No.754	割り材 クリ	残存長30.6cm、幅7.7cm、厚さ3.6cm。ミカン削りされた材で1/2が炭化している。
W-356	板 材	E区V面2-1河 下層No.755	榎目 クスギ節	残存長65.3cm、幅9.2cm、厚さ1.8cm。両端部を欠損する。表面は平滑で裏面は磨いていない。
W-357	角 材	E区V面2-1河 下層No.756	割り材 クスギ節	残存長73.0cm、幅6.0cm、厚さ2.3cm。断面は長方形をなし、一方の端部はやや斜めに切断されている。
W-358	加工材	E区V面2-1河 下層No.760	割り材 クスギ節	残存長67.0cm、幅6.8cm、厚さ6.2cm。1/4に分割したままの材で、一方の端部が鋭角に削られている。
W-359	加工材	E区V面2-1河 下層No.762	割り材 カヤ	長さ69.3cm、幅3.5cm、厚さ1.8cm。縦に割けた木端材であるが、一方の端部に削りが加えられ、鋸突具状に鋭角となっている。
W-360	農具柄? (炭化材)	E区V面2-1河 下層No.764	丸木 カラマツ属	残存長34.7cm、径4.7-3.7cm。丸棒状の材で、柄基部の破片である。一部炭化。
W-361	農具柄?	E区V面2-1河 下層No.766	丸木 サカキ	残存長47.3cm、径2.6-2.2cm。丸棒状の材で、農具の柄の可能性はある。両端部欠損。
W-362	農具柄?	E区V面2-1河 下層No.767	丸木 クスギ節	残存長22.9cm、径3.1-2.8cm。枝払いされた丸棒状の材で、一方の端部は平坦に削られている。農具の柄の可能性もある。
W-363	丸 柱 材	E区V面2-1河 下層No.769	丸木 ヤマダツ	長さ161.0cm、径7.7-9.7cm。枝払いし樹皮を除去したやや反りのある丸木材である。榎幹下端は両側より削り込まれた断面が三角形をなす。上端は又部を利用して丸く削り込み組み手を作り出している。
W-364	加工材	E区V面2-1河 下層No.770	丸木 クリ	長さ24.3cm、径6.6cm。枝払いされ、両端部が斜めに切断された材である。
W-365	分割材	E区V面2-1河	割り材	残存長167.0cm、幅6.0-12.0cm、厚さ4.3-9.3cm。断面が三角形の

木製品観察表

調査番号	種類	出土位置	木取り・特徴	加工・形状等の特徴
	(炭化材)	下層No.772	タリ	両端部で太さが大きく異なる分割材で、分割面の調整はない、両端部近りの木表面が炭化している。
W-366	加工材	E区V面2-1河 下層No.775	榎目 アスナロ	長さ30.3cm、幅3.8cm、厚さ1.4cm。断面が長方形の材で、両端部が丸く仕上げられている。
W-367	農具柄	E区V面2-1河 下層No.779	丸木 クヌギ節	長さ61.2cm、径3.0-2.6cm。葉柄で繫縛部の先端を欠損する。繫縛部は小さく断面が長方形に仕上げられ、基部はやや縮んでいる。
W-368	容器 (未製品)	E区V面2-1河 下層No.781	割り材 ケヤキ	径34.0×27.8cm、厚さ13.0。平面形はやや楕円形をなし断面は半円形で、内部の割り込みは行っていない。上面は平滑に仕上げられているが、側面から底面は粗い削りが加えられているだけである。
W-369	広 葉	E区V面2-1河 下層No.783	榎目 クヌギ節	長さ25.5cm、幅18.4cm、厚さ0.5cm。上端は山形をなし両側縁は直線的に仕上げられ刃部も平坦に仕上げられている。鍔部は板状をなし上半に径3.3cmの着柄孔があり、下半に山形の段を持つ。
W-370	分割材	E区V面2-2河 下層No.790	割り材 タリ	残存長39.4cm、幅6.0cm、厚さ2.2cm。ミカン割りに分割されたままの材である。
W-371	分割材	E区V面2-2河 下層No.791	割り材 クヌギ節	残存長41.1cm、幅8.2cm、厚さ2.4cm。ミカン割りに分割されたままの材で節目を持つ。
W-372	加工材	E区V面2-2河 下層No.796	丸木 クヌギ節	長さ120.6cm、径3.5cm、枝払いされた樹皮付の材で、一方の端部は斜めに削られ、他方の端部は炭化している。種木材の可能性が高い。
W-373	分割材	E区V面2-2河 下層No.800	割り材 タリ	長さ19.0cm、幅15.5cm、厚さ6.0cm。樹皮付の分割したままの材で、又部の切断材である。
W-374	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.807	割り材 クヌギ節	残存長44.4cm、幅8.8cm、厚さ4.8cm。ミカン割りに分割したままの材で、端部が炭化している。
W-375	分割材	E区V面2-2河 下層No.808	割り材 クヌギ節	残存長52.4cm、幅6.2cm、厚さ4.0cm。ミカン割りに分割したままの材で、一方の端部は斜めに削られ、他方の端部は炭化している。
W-376	分割材	E区V面2-2河 下層No.809	割り材 クヌギ節	残存長60.5cm、幅4.0cm、厚さ2.0cm。1/2に分割された樹皮付の材で、一方の端部が炭化している。
W-377	板 材	E区V面2-2河 下層No.810	榎目 アカガシ葉脈	長さ95.5cm、幅18.5cm、厚さ2.4cm。両側縁の厚みに差を持ち、両端部はやや丸く削られている。表裏面にはや爪掻を強く長さ約3.0cmの工具痕が多くある。
W-378	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.811	割り材 クヌギ節	残存長48.8cm、幅8.8cm、厚さ3.5cm。節付の材で平面は全面が炭化している。
W-379	斧柄	E区V面2-2河 下層No.820	榎目 クヌギ節	残存長18.7cm、幅5.5cm、厚さ5.0cm。直柄の着装孔部分の断片である。着装孔部分は太みを増し、孔は楕円形をなす。
W-380	一本 鉈?	E区V面2-2河 下層No.822	榎目 クヌギ節	残存長19.2cm、幅5.2cm、厚さ2.3cm。着柄部の断片で断面は鐘形節をなす。鐘縁部は直線的で上端は反りを持つ。着柄孔の径は3.0cmで、着柄部は破断に陥起している。
W-381	加工材	E区V面2-2河 下層No.834	割り材 サユダ属	残存長46.2cm、幅4.2cm、厚さ1.8cm。側面は歪みを持つが平滑に仕上げられている。
W-382	分割材	E区V面2-2河 下層No.836	割り材 クヌギ節	残存長109.5cm、幅10.0cm、厚さ3.0cm。断面が三角形をなす分割したままの厚い材で、一端は平坦に切断され他端は欠損する。
W-383	分割材	E区V面2-2河 下層No.838	割り材 クヌギ節	長さ91.0cm、幅7.8cm、厚さ4.0cm。ミカン割りに分割したままの材で、両端部は斜めに切断されている。
W-384	農具柄	E区V面2-2河 下層No.840	丸木 イヌガヤ	残存長66.2cm、径2.5cm。枝払いし樹皮を除去した直線的な丸木を利用。両端部は裂けるように折れている。
W-385	板 材	E区V面2-2河 下層No.845	榎目 クヌギ節	残存長27.0cm、幅9.0cm、厚さ3.4cm。表面と両側面は平滑に仕上げられている。両端部欠損。
W-386	板 材	E区V面2-2河 下層No.849	榎目 クヌギ節	残存長39.2cm、幅6.4cm、厚さ1.9cm。表裏面と粗い削りが加えられている。
W-387	加工材	E区V面2-2河 下層No.852	割り材 クヌギ節	残存長40.5cm、径3.0-2.5cm。断面は円形をなし、一方の端部は斜めに削られ、他方の端部は又部を利用して先端部は欠損している。農具の柄の可能性が高い。
W-388	斧柄未製品	E区V面2-2河 下層No.861	割り材 クヌギ節	残存長28.5cm、幅7.0cm、厚さ8.6cm。着装部から頭部の断片で、断面は三角形をなす。頭部の削りは無く、着装孔は楕円形をなし貫通していない。着装部の下端で柄部が切断されている。
W-389	板 材	E区V面2-2河 下層No.867	榎目 タクロジ	残存長31.7cm、幅11.8cm、厚さ4.6cm。各側面はやや平滑に仕上げられ、一方の端部は丸く仕上げられている。他方の端部は欠損する。
W-390	丸 柱 材	E区V面2-2河 下層No.853	丸木 スルメ	残存長153.0cm、径8.8-5.5cm。樹皮を除去し枕分れの又部を利用した丸柱材で、又部先端は欠損する。丸木の表面約1/3が平坦に削られ、下端は裂けるように折れている。
W-391	分割材	E区V面2-2河 下層No.860	割り材 クヌギ節	残存長147.5cm、幅6.5cm、厚さ2.3cm。断面が三角形をなす分割したままの細長い材で、両端部を欠損する。

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
W-392	板材	E区V面2-2河 下層No.873	楕目 クスギ節	残存長70.0cm、幅12.0cm、厚さ4.0cm。両端部を欠損する。一方の端部は段を付けているかのように見えるが、破損と区別がつかない。
W-393	斧柄木製品	E区V面2-2河 下層No.874	割り材 クスギ節	長さ68.8cm、柄部長44.0cm、幅5.2cm、厚さ5.0cm、着装部長28.8cm、幅5.0cm、厚さ8.0cm。柄部は断面が三角形をなし分割面の調整はなく、厚みだけを削っている。着装部への移行部は表裏両方向から斜めに削られている。着装部両側面は分割のままで、表裏両面だけが調整されている。着装部上端は丸く削られ、斧孔は木穿穴である。小型の磨製石斧の全製品と考えられる。
W-394	分割材	E区V面2-2河 下層No.876	割り材 クリ	残存長50.3cm、幅17.8cm、厚さ6.4cm。直径約20.0cmほどの丸木を木表面を残し約1/3ほどに縦に分割した材で、一端は平直に切断され他端は欠損する。柱材の断片の可能性もある。
W-395	加工材	E区V面2-2河 下層No.880	丸木 モミ属	長さ43.9cm、径9.5cm。枝払いし樹皮を除去した丸木の断片で、両端部が斜めに粗く切断されている。切断工具は磨製石斧と考えられる。
W-396	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.881	割り材 クスギ節	残存長39.6cm、幅6.0cm、厚さ3.7cm。木表を残し分割したままの材で、一方の端部は斜めに切断され、他方の端部は炭化している。
W-397	加工材	E区V面2-2河 下層No.884	丸木 クスギ節	長さ22.7cm、幅10.7cm、厚さ7.3cm。両端を斜めに切断した材で、半面だけに割りを入れている。
W-398	分割材	E区V面2-2河 下層No.889	割り材 クスギ節	残存長90.9cm、幅6.7cm、厚さ3.3cm。断面が三角形をなす棒状の分割材で分割面の調整はなく、表面が炭化している。両端部欠損。
W-399	角材	E区V面2-2河 下層No.893	割り材 クスギ節	残存長57.2cm、幅8.9cm、厚さ6.6cm。断面がほぼ正方形をなす材で、各側面は粗く調整されている。一端はやや丸く削られ他端は欠損する。
W-400	加工材	E区V面2-2河 下層No.894	割り材 クスギ節	長さ14.0cm、幅13.3cm、厚さ4.6cm。断面は台形をなし両端部は斜めに切断されている。木表を残し木裏側は平直に削られている。
W-401	分割材	E区V面2-2河 下層No.901	割り材 クスギ節	残存長34.9cm、幅7.8cm、厚さ3.1cm。断面三角形に分割したままの材で、両端部を欠損する。
W-402	加工材	E区V面2-2河 下層No.910	板目 ケヤキ	長さ7.8cm、幅10.0cm、厚さ3.3cm。長方形をなす材で中央に径2.0cmの孔がある。両側面は平直に削られ、上下端部は斜めに削られている。
W-403	丸木弓	E区V面2-2河 下層No.911	丸木 イヌゴヤ	残存長36.6cm、径1.1cm。粗く枝払いされた直線の丸木弓の断片で、弓幹部から弓部まで表面が削られており断面は半円形をなす。側部は両側より凸状に削り込まれている。
W-404	分割材	E区V面2-2河 下層No.912	割り材 クリ	残存長74.0cm、幅5.1cm、厚さ3.9cm。断面が変形をなす柱状の分割材で分割面の調整はない。一方の端部を欠損。
W-405	板材	E区V面2-2河 下層No.926	楕目 カラスザンショウ	残存長34.0cm、幅3.5cm、厚さ0.5cm。断面が長方形をなす薄板材で、各側面ともやや丁寧に調整されている。両端部欠損。
W-406	斧柄	E区V面2-2河 下層No.933	割り材 クスギ節	残存長29.5cm、幅7.6cm、厚さ4.2cm。斧頭部の断片で側面も削られている。頭部近くは太く断面は楕円形をなし、後方へ出っ張る形状となる。着装孔は出入部とも楕円形をなし。
W-407	加工材	E区V面2-2河 下層No.937	丸木 コナラ節	長さ28.6cm、径12.7~11.2cm。枝払いし樹皮を除去したままの材で、端部は粗く切断されている。
W-408	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.939	割り材 クスギ節	残存長48.8cm、幅6.2cm、厚さ3.0cm。断面が三角形をなす分割材で分割面の調整はない。一端は斜めに切断され他方は炭化している。
W-409	分割材	E区V面2-2河 下層No.941	割り材 クスギ節	残存長48.7cm、幅4.7cm、厚さ1.8cm。断面が三角形をなす棒状の分割材で、分割面の調整はない。両端部欠損。
W-410	斧柄	E区V面2-2河 下層No.944	割り材 クスギ節	長さ69.1cm、柄部径3.2cm、斧頭部幅7.3cm、厚さ6.6cm。やや短い直線の斧柄で、柄基部はやや太くなる。斧頭部は大きく作られ石斧頭部が出る方向に出っ張っている。着装孔は楕円形をなし、石斧刃部方向の孔径は4.7×7.4cmと大きい。太型蛤刃石斧の柄と考えられる。
W-411	板材	E区V面2-2河 下層No.945	楕目 クスギ節	残存長30.8cm、幅8.5cm、厚さ2.5cm。一方の端部を欠損する。各側面とも平直に仕上げられている。
W-412	分割材	E区V面2-2河 下層No.947	割り材 クスギ節	長さ30.0cm、幅8.7cm、厚さ5.4cm。木表を残し分割したままの材で、両端部は斜めに切断されている。
W-413	分割材	E区V面2-2河 下層No.954	割り材 クスギ節	残存長33.7cm、幅4.8cm、厚さ1.4cm。ミカン割りに分割したままの材で製したような端材である。
W-414	分割材	E区V面2-2河 下層No.960	割り材 クスギ節	残存長62.8cm、幅4.7cm、厚さ1.9cm。断面が三角形をなす棒状の分割材で、分割面の調整はない。両端部欠損。
W-415	分割材	E区V面2-2河 下層No.962	割り材 クスギ節	残存長51.0cm、幅12.8cm、厚さ6.9cm。枝払いし樹皮を除去した丸木を約1/2に分割した材で、分割面の調整はない。両端部欠損。

木製品観察表

遺物番号	種 類	出土位置	木取り・製種	加工・形状等の特徴
W-416	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.963	割り材 クスギ節	残存長38.7cm、幅5.4cm、厚さ3.3cm。断面が三角形をなす分割したままの材で、表面の大半が炭化している。
W-417	板 材	E区V面2-2河 下層No.961	板目 クスギ節	残存長38.0cm、幅11.5cm、厚さ2.4cm。歪みの著しい薄板材で、表裏面とも歪み調整である。一端は丸く削り込まれ他端は欠損する。
W-418	板 材	E区V面2-2河 下層No.985	板目 クスギ節	残存長84.7cm、幅11.3cm、厚さ3.1cm。断面が長方形をなす薄板材で、表面は摩滅し裏面は分割面の調整不明瞭。両端部欠損。
W-419	角柱材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.987	割り材 オニグルミ	残存長40.1cm、幅14.5cm、厚さ11.8cm。直径が25.0cmほどの丸木を約1/3に分割した断片で、全面が炭化している。一方の端部には榫み込みのためと考えられる段があり、他端は欠損する。また、側面の3ヶ所に斧によると思われる三日月形の切り込みがある。
W-420	広 板	E区V面2-2河 下層No.990	板目 アカガシ亜属	残存長30.8cm、幅13.2cm、厚さ2.0cm。刃部と一方の側面を欠損する。新保遺跡のE区広板の断片と考えられる。頭部は山形をなし側縁は直線的となっている。着柄孔の径は3.6cmで着柄起りは明瞭な線を待つ。
W-421	分割材	E区V面2-2河 下層No.991	割り材 クスギ節	長さ32.1cm、幅5.0cm、厚さ2.5cm。分割したままの製付の材で、両端部が斜めに切断されている。
W-422	加工材	E区V面2-2河 下層No.994	板目 ヤマザクラ	残存長48.4cm、幅5.1cm、厚さ1.7cm。断面が長方形をなす板状の材で、各側面に平滑に仕上げられている。一方の端部寄りの片側縁には7.6cmの長さの斜めの切り込みがあり、端部も同一の方向に斜めに削られている。他方の端部は欠損する。
W-423	農具柄	E区V面2-2河 下層No.996	丸木 ムラサキシキブ属	残存長43.3cm、径1.9-2.5cm。断面が土庄により楕円形をなす細い丸棒材で断面は除去されている。両端部欠損。
W-424	杭	E区V面2-2河 下層No.1000	板目 モミ属	長さ26.3cm、幅3.7cm、厚さ0.9cm。薄板状の材で、両端部とも打ち込み時の造打より潰れている。
W-425	加工材	E区V面2-2河 下層No.1001	割り材 ムクロジ	長さ127.7cm、幅4.1cm、厚さ5.1cm。断面が多角形をなす角棒状の材で、表面が粗く調整され一部に工具痕を残す。両端部は斜めに切断されている。
W-426	加工材	E区V面2-2河 下層No.1002	割り材 ムクロジ	長さ124.6cm、径3.0-5.2cm。両端部で太さがやや異なる丸棒状の材で、表面は丁寧に削られ断面は多角形をなす。両端部は丸く削り出されている。
W-427	分割材	E区V面2-2河 下層No.1006	割り材 クリ	残存長43.0cm、幅9.5cm、厚さ4.0cm。断面が三角形をなす節のある分割材で、分割面の調整はない。一端は欠損する。
W-428	板 材	E区V面2-2河 下層No.1008	板目 クスギ節	残存長33.2cm、幅7.8cm、厚さ1.1cm。表裏面とも平滑に仕上げられた薄板で、両端部を欠損し一部炭化している。
W-429	分割材	E区V面2-2河 下層No.1009	割り材 オニグルミ	残存長49.5cm、幅8.0cm、厚さ4.0cm。断面が三角形で丸木を約1/4に分割した材で、分割面の調整はない。一端は山形に削られ他端は欠損する。
W-430	角 材	E区V面2-2河 下層No.1015	割り材 クスギ節	残存長94.3cm、幅6.0cm、厚さ2.0cm。断面が丸みのある長方形をなす細い角棒状の材で、両端方向で幅に差がある。各側面を平滑に仕上げられ、角も落とされている。一端は斜めに削られ他端は欠損する。
W-431	農具柄?	E区V面2-2河 下層No.1018	割り材 モミ属	残存長36.4cm、径2.9-2.0cm。断面が楕円形の材で両端部を欠損する。他の材との着装のための段が長さ6.0cmにわたり、削り込まれている。
W-432	板 材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.968	板目 クスギ節	残存長16.5cm、幅8.0cm、厚さ2.0cm。表面は平滑に仕上げられ、一方の端部は斜めに削られている。他方の端部は炭化している。
W-433	加工材	E区V面2-2河 下層No.916	丸木 グミ属	残存長70.5cm、径2.6cm。枝払いされた樹皮付の細い丸棒状の材で、一端は1方向より斜めに削られ尖っている。他端は欠損する。
W-434	分割材	E区V面2-2河 下層No.1024	割り材 クスギ節	残存長82.0cm、幅6.5cm、厚さ2.9cm。断面が台形をなす薄板状の分割材で分割面の調整はない。一端は斜めに削られ杖状をなし他端は欠損。
W-435	板 材	E区V面2-2河 下層No.1027	板目 クスギ節	残存長57.2cm、幅7.4cm、厚さ2.2cm。断面が長方形をなす薄板状の材で表面の摩滅が著しい。表裏面とも粗く調整され、一方の端部は山形をなし他方は欠損する。
W-436	丸 木 弓	E区V面2-2河 下層No.1035	丸木 イヌガヤ	残存長41.1cm、径1.1cm。両寄り側の断片で枝払いされ、弓幹部は縦やかに湾曲する。弓幹中央部寄りには断面が円形で、両寄りには断面が半円形をなし半面に削りが加えられている。羽は凸状に両側より削り出されている。
W-437	加工材	E区V面2-2河 下層No.1036	割り材 クスギ節	残存長69.9cm、幅7.7cm、厚さ2.8cm。断面が三角形をなす分割材で分割面の調整はない。一端は杖状に尖っており他端は欠損する。
W-438	丸 木 弓	E区V面2-2河	丸木	残存長40.4cm、径1.0cm。両寄りの断片で粗く枝払いされている。

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	本取り・特徴	加工・形状等の特徴
		下層No.1039	イヌゴヤ	弓幹部は緩やかに湾曲し、中央部寄りには断面が円形で凸状に平面上に削りが増えられ断面が半円形をなす。胴は両側より凸状に削り出されている。
W-439	斧柄未製品	E区V面2-2河 下層No.1050	割り材 クスギ節	長さ88.7cm、斧頭部幅10.0cm、厚さ8.0cm、柄部幅6.5cm、厚さ5.4cm。ミカン割りに分割された直線の材で、粗い削りを加工柄部を作出途上の材である。斧頭部は分割されたままで表の丸みを残す。
W-440	農具柄?	E区V面2-2河 下層No.1067	割り材 クスギ節	残存長25.2cm、幅4.2cm、厚さ3.5cm。ミカン割りされた材に細く削りが増えられた材で、端部も細く削られている。農具の柄の基部と思われる。
W-441	板材	E区V面2-2河 下層No.1069	楳目 クスギ節	残存長96.5cm、幅14.0cm、厚さ1.5cm。幅広い薄板材で、表裏面とも平滑に丁寧に仕上げられている。両端部欠損。
W-442	加工材	E区V面2-2河 下層No.1071	丸木	残存長40.7cm、径6.7-4.7cm。樹皮を除去した二又木で樹幹下端と枝端部は斜めに切断されている。樹幹上端は欠損。
W-443	板材	E区V面2-2河 下層No.1072	楳目 クスギ節	残存長44.5cm、幅7.8cm、厚さ1.5cm。断面がやや湾曲形をなす薄板材で、表面は平滑に仕上げられ裏面はやや粗く調整されている。一端は平坦に切断され他端は欠損する。
W-444	角柱材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1074	割り材 タリ	残存長64.0cm、幅8.0cm、厚さ8.0cm。断面が半円形をなす分割材を削り出した材で、一方の端部は段が付けられているが炭化している。他端は欠損する。
W-445	加工材	E区V面2-2河 下層No.1075	丸木 クスギ節	残存長61.9cm、径4.0cm、樹皮付の丸木の一部を杖状に斜めに尖らせている。他端は欠損する。
W-446	板材	E区V面2-2河 下層No.1053	楳目 アカガシ亜属	長さ90.0cm、幅17.5cm、厚さ5.2cm。断面が三角形から長方形をなす幅広い板材で、1/4ほどは分節時の厚みが調整されている。表裏面とも粗く削られ一部に直線の工具痕が見える。両端部は山形や斜めに切断されている。製作工程材と考えられる。
W-447	斧柄	E区V面2-2河 下層No.1087	割り材 クスギ節	長さ79.7cm、斧頭部幅5.1cm、厚さ3.0cm、柄部径3.2-2.7cm。斧台と柄を別木で作る屋柄と呼ばれる懸柄で、組み穴部の一部欠損する。組み穴は長方形で斜めに穿孔され、柄部の断面は楕円形をなす。
W-448	丸木弓	E区V面2-2河 下層No.1093	丸木 イヌゴヤ	残存長56.1cm、幅1.6cm、厚さ1.4cm。弓幹部中央寄りで作っており、両端先端を欠損する。弓幹部は粗く枝払いを削り込み断面は半円形をなす。わずかに湾曲している所から上半部の破片と思われる。胴部は両側より凸状に削り込められている。
W-449	分割材	E区V面2-2河 下層No.1096	割り材 クスギ節	残存長62.8cm、幅8.0cm、厚さ3.2cm。断面が三角形をなす分割したままの材で、分割面の調整はない。
W-450	分割材	E区V面2-2河 下層No.1101	割り材 クスギ節	残存長91.5cm、幅6.0cm、厚さ2.0cm。断面がやや三角形をなす薄い分割材で、表面の薄減が著しく調整不可。
W-451	丸木弓	E区V面2-2河 下層No.1119	丸木 イヌゴヤ	残存長50.5cm、幅2.4cm、厚さ1.8cm。弓幹部中央寄りから採った断片で、弓幹部裏側は大きく削られ断面はやや楕円形をなす。胴部は両側より凸状に削り込められている。
W-452	加工材	E区V面2-2河 下層No.1134	割り材 エノキ属	残存長39.8cm、幅6.7cm、厚さ5.0cm。樹皮付の丸木を1/4に分割したままの材で、一端は木裏側より削りが増えられ杖状に尖らせている。
W-453	分割材	E区V面2-2河 下層No.1137	割り材 クスギ節	残存長19.0cm、幅5.7cm、厚さ3.2cm。ミカン割りに分割したままの材で、一方の端部は丸く削られ他方は欠損する。
W-454	分割材	E区V面2-2河 下層No.1138	割り材 アカガシ亜属	長さ42.7cm、幅22.0cm、厚さ4.6cm。断面が三角形をなす幅広い分割材で、分割面の調整はない。両端部は粗く切断されている。製作工程材の可能性が高い。
W-455	板材	E区V面2-2河 下層No.1139	楳目 アカガシ亜属	長さ70.6cm、幅20.0cm、厚さ6.7cm。ミカン割りに分割した板、表裏面とも平滑に削り込んでおり一部に工具痕が見える。しかし、分割時の形状は残っており断面は三角形をなす。両端部は平坦に切断されている。製作工程材と考えられる。
W-456	板材	E区V面2-2河 下層No.1140	楳目 アカガシ亜属	残存長26.0cm、幅10.9cm、厚さ4.6cm。表面は平滑に削られ工具痕が多数残る。裏面は粗く削られ側面や端部にも削り痕が見える。
W-457	農具柄	E区V面2-2河 下層No.1143	割り材 ヤマブツ	残存長53.3cm、径1.8-2.5cm。一端を欠損する。断面が楕円形をなす細棒状の材で、表面は丁寧に仕上げられている。
W-458	分割材	E区V面2-2河 下層No.1141	割り材 モミ属	残存長34.0cm、幅6.8cm、厚さ3.0cm。断面が三角形をなす分割したままの材である。
W-459	農具柄	E区V面2-2河 下層No.1145	割り材 クスギ節	残存長85.0cm、径2.4-3.0cm。断面がやや楕円形をなす直線の柄で、表面は丁寧に仕上げられ基部は丸く削られている。上端を欠損する。
W-460	分割材	E区V面2-2河	割り材	残存長204.0cm、幅8.0-16.0cm、厚さ2.5-6.2cm。断面がやや長方

木製品観察表

通物番号	種 類	出 上 位 置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
		下層No.090	クスギ節	形をなす幅広の板状の分割材で、分割面の調整はない。一端は斜めに切断され他端は欠損する。
W-461	加工材	E区V面2-2河 下層No.920	丸木 カエデ属	長さ21.3cm、径6.7cm。枝払いし樹皮を除去した材で、両端部は平坦に切断されている。
W-462	分割材	E区V面2-2河 下層No.1110	割り材 クスギ節	残存長58.0cm、幅3.5cm、厚さ2.7cm。断面が三角形をなす扇面した分割材で、分割面の調整はない。両端部欠損。
W-463	板 材	E区V面2-2河 下層No.1147	板目 アカガシ亜属	残存長140.5cm、幅12.5cm、厚さ4.0cm。断面はほぼ長方形をなすが両側縁で厚さが異なる分割時の形状を残す厚板材である。表裏面は粗く削られ、一部に長さ約5.3cmの工具痕が残る。一端は平坦に削られ他端は欠損する。
W-464	分割材	E区V面2-2河 下層No.1149	割り材 ヤマダウ	残存長52.2cm、幅3.5cm、厚さ2.8cm。断面が三角形をなす分割したままの断片で、両端部を欠損している。
W-465	分割材	E区V面2-2河 下層No.1151	割り材 クスギ節	長さ42.5cm、幅5.2cm、厚さ2.8cm。分割したままの材で両端部が斜めに切断されている。
W-466	加工材	E区V面2-2河 下層No.1154	割り材 カヤ	長さ64.5cm、幅5.3cm、厚さ1.5cm。断面が三角形をなす薄板材の分割材で分割面の調整はないが、一端は鋭利な工具により杖状に尖らせている。
W-467	分割材	E区V面2-2河 下層No.1155	割り材 クスギ節	長さ39.4cm、幅14.3cm、厚さ7.2cm。断面が三角形をなす分割材の断片で分割面の調整はないが、両端部は斜めに切断されている。
W-468	横 梁	E区V面2-2河 下層No.1156	板目 クスギ節	残存長34.1cm、幅9.0cm、厚さ1.0cm。側縁部を欠損する断片で、着柄部分がわずかに隆起している。裏面は平坦で、径4.5-3.5cmの着柄孔は斜めに穿孔されている。
W-469	板 材	E区V面2-2河 下層No.1157	板目 アカガシ亜属	残存長30.3cm、幅12.2cm、厚さ0.7cm。1個面を残す薄板の断片で、表裏面とも平滑となっている。
W-470	丸木弓 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1158	丸木 イヌギヤ	残存長69.0cm、幅1.7cm、厚さ1.3cm。両端側部を欠損する丸木弓で、粗く枝払いされている。弓幹表面は大きく削られ断面が半円形をなし、凹寄り表面も削られている。凹寄りが炭化している。
W-471	加工材	E区V面2-2河 下層No.1118	割り材 カヤ	長さ12.0cm、幅6.7cm、厚さ3.0cm。木表に枝の突出を持つ木端状の材で、裏面は分割したままで両端部は斜めに削られている。
W-472	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1160	割り材 クスギ節	残存長57.1cm、幅8.4cm、厚さ4.6cm。断面が三角形をなす分割材の断片で分割面の調整はなく、一端は平坦に切断され他端は炭化している。
W-473	容 器	E区V面2-2河 下層No.1116	板目 ケヤキ	残存長14.8cm、幅8.2cm、厚さ1.0cm。大半を欠損するが樽形面を呈する小型の皿状をなすと考えられる。木表側より削り込まれている。
W-474	加工材	E区V面2-2河 下層No.1159	丸木 ヤマダウ	長さ29.0cm、径7.5cm。一部に樹皮を残し、両端部は斜めに粗く切断されている。また、裏面の一部が削られている。
W-475	分割材	E区V面2-2河 下層No.1164	割り材 タリ	残存長73.2cm、幅9.7cm、厚さ4.6cm。断面が三角形をなす目やせの著しい分割材で、分割面の調整はない。一端は筋の部分で折れ他端は欠損。
W-476	角 材	E区V面2-2河 下層No.1167	割り材 カヤ	残存長42.5cm、幅5.5cm、厚さ2.1cm。断面が長方形をなすと思われる角材の断片で、側面が大きく裂けている。一端は丸く削られ他端は欠損。
W-477	加工材	E区V面2-2河 下層No.1169	丸木 タリ	長さ77.1cm、径3.4-6.1cm。二本本を利用した材で、上半から又は樹皮を残し、下半は樹皮が除去され表面が使用により摩滅している。下端は枝分れの厚みを残し太くなっており、端部は山形に削られている。
W-478	農具柄 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1170	丸木 クスギ節	残存長30.0cm、径3.5-2.6cm。側面は平滑に仕上げられ、両端で太さが異なる。一方の端部は炭化している。
W-479	板 材	E区V面2-2河 下層No.1173	板目 クスギ節	残存長113.5cm、幅17.3cm、厚さ2.3cm。幅広の薄板材で、表面は丁寧に平滑に削られているが裏面は粗い調整のままである。両端部欠損。
W-480	農具柄 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1176	丸木 アカガシ亜属	残存長26.7cm、径3.7-2.9cm。全面が炭化し、一方の端部を欠損する。基部近くは太くなり、基部は丸く削り出されている。
W-481	農具柄	E区V面2-2河 下層No.1178	丸木 オニグルミ	柄部長97.0cm、径3.1-3.8cm。固定部長24.2cm、幅3.3cm、厚さ1.5-3.2cm。柄部は枝を使用しやや反りを持つ。固定部は樹幹を使用し外面は平坦で、基部は繫帯のための突起を付け先端部はやや尖っている。
W-482	広 葉	E区V面2-2河 下層No.1180	板目 アカガシ亜属	残存長26.2cm、幅10.5cm、厚さ2.0cm。着柄部から断面先端の断片で、裏面は平坦で表は丸みを持つ。着柄部が長く両側面に繫帯のための段を持つ。着柄孔の径は3.3cmで斜めに開けられており、周辺の隆起はない。断面先端は山形をなす。

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	本取り・書様	加工・形状等の特徴
W-483	分割材	E区V面2-2河 下層No.1100	割り材 クスギ節	残存長26.6cm、幅4.5cm、厚さ1.2cm。断面が三角形をなす薄板状の分割材で分割面の調整はない。両端部欠損。
W-484	丸木弓	E区V面2-2河 下層No.1183	丸木 イヌギヤ	残存長36.8cm、径1.3cm。枝払いされた閉寄りの断面で、閉寄りの弓幹部は半円形に削られている。弦は両側より凸状に削り出されている。
W-485	広 鉄?	E区V面2-2河 下層No.1186	砥目 アカガシ亜属	残存長29.4cm、幅15.5cm、厚さ1.5cm。着柄部と刃部を欠損する。断面は山形をなし、側縁部は直線となっている。表裏面とも平組で上端から刃部に向かって薄くなっている。表面には多数の磨痕が残る。
W-486	角材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1190	砥目 クスギ節	残存長28.0cm、幅7.0cm、厚さ3.5cm。各側面は平滑で角が丸みを帯びる。一方の端部は斜めに削られ、他方は炭化している。
W-487	分割材	E区V面2-2河 下層No.1194	割り材 クスギ節	長さ86.0cm、幅5.3cm、厚さ2.8cm。断面が長方形をなす分割材で、分割面の調整はない。
W-488	角材	E区V面2-2河 下層No.1196	割り材 クスギ節	残存長53.6cm、幅7.2cm、厚さ4.6cm。断面が長方形をなす角材で側面が張っている。遺存した側面は平滑に仕上げられている。
W-489	分割材	E区V面2-2河 下層No.1197	割り材 クスギ節	残存長142.3cm、幅5.3cm、厚さ3.4cm。断面が三角形をなす細長い分割材で、分割面の調整はない。一端は側面に削りが加えられている。
W-490	二又鉄	E区V面2-2河 下層No.1200	砥目 クスギ節	残存長31.5cm、幅15.6cm、厚さ2.3cm。刃部を欠損する。表面は丸みを帯びた面は平滑で、着柄部から刃部に向かって薄くなる。着柄部には段が設けられ、鉄身への移行部も段があり鉄身上端は山形をなす。鉄身の側縁は聞き気味になると思われる。
W-491	斧 柄	E区V面2-2河 下層No.1201	砥目 クスギ節	残存長13.2cm、幅7.2cm、厚さ5.3cm。頭部の断面で着鉄孔部分が折れている。着鉄孔は楕円形を呈すると考えられる。
W-492	角材	E区V面2-2河 下層No.1204	割り材 コナラ節	残存長94.3cm、幅5.2cm、厚さ4.0cm。断面が長方形から多角形をなす細い材で、側面は粗く調整されている。両端部欠損。
W-493	分割材	E区V面2-2河 下層No.1208	割り材 クスギ節	残存長74.4cm、幅5.9cm、厚さ4.0cm。断面が三角形をなすは1/4に分割された樹皮付の材で、分割面の調整はない。一端は2方向より山形に切断され、他端は欠損する。
W-494	加工材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1219	丸木 コナラ節	残存長53.5cm、幅9.5cm、厚さ5.2cm。丸木の約1/3を分割して樹皮を除去した材で、一端は炭化し他端は欠損する。
W-495	斧 柄	E区V面2-2河 下層No.1230	砥目 クスギ節	残存長21.0cm、幅4.0cm、厚さ3.7cm。着鉄孔部分の断面である。頭部は後方に出っ張る形状で、石奔頭部の出る面が平坦となっている。着鉄孔は楕円形をなす。
W-496	分割材	E区V面2-2河 下層No.1231	割り材 クスギ節	長さ59.3cm、幅5.0cm、厚さ1.4cm。断面が三角形をなす薄板状の分割材で、分割面の調整はない。両端部は斜めに切断されている。
W-497	分割材	E区V面2-2河 下層No.1234	砥目 クスギ節	長さ15.5cm、幅11.0cm、厚さ3.8cm。板状に分割したままの材で、両端部が斜めに切断されている。
W-498	加工材	E区V面2-2河 下層No.1238	割り材 コナラ節	長さ26.5cm、幅7.8cm、厚さ3.6cm。断面が半円形をなす材で、表面は粗い削りが加えられ裏面は平滑となっている。両端部に平坦に削られている。
W-499	又 鉄?	E区V面2-2河 下層No.1248	砥目 コナラ節	残存長15.5cm、幅4.4cm、厚さ1.0cm。又部の断面と思われる。
W-500	板材	E区V面2-2河 下層No.1253	砥目 アスナロ	残存長18.4cm、幅8.7cm、厚さ2.2cm。薄板材の断面で、表裏面とも磨滅している。
W-501	分割材	E区V面2-2河 下層No.1255	割り材 クスギ節	残存長102.0cm、幅6.2cm、厚さ3.5cm。断面が台形をなす細長い分割材で、樹皮側を除去してあるが分割面の調整はない。両端部欠損。
W-502	板材	E区V面2-2河 下層No.1257	砥目 クスギ節	残存長22.0cm、幅10.2cm、厚さ3.0cm。薄板状の断面で、表裏面とも磨滅している。
W-503	糸 巻	E区V面2-2河 下層No.1277	割り材 ヤブキ	長さ10.0cm、最大径9.4cm、最小径6.0cm。断面が狭形をなし、木口面がやや盛んでいる。器内には粗い削り痕が残る。
W-504	加工材	E区V面2-2河 下層No.1278	割り材 アカガシ亜属	長さ11.1cm、幅7.5cm、厚さ6.5cm。断面は多角形をなし、各面に切断痕が残る。
W-505	加工材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1279	丸木 イヌギヤ	残存長45.5cm、幅3.2cm、厚さ2.0cm。枝払いし樹皮を除去した直線的な丸棒状の材で、板に張られている。農具の柄と思われる。
W-506	加工材	E区V面2-2河 下層No.1280	割り材 クスギ節	長さ47.5cm、幅5.5cm、厚さ3.2cm。断面が三角形をなす分割したままの材であるが、一方の端部は平坦に削られ他方は斜角に削り上げられ、杖状に加工されている。
W-507	角材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1283	割り材 コナラ節	残存長89.4cm、幅10.1cm、厚さ7.1cm。断面が五角形をなす角柱状の材で、各側面は粗く削られている。約1/2が炭化し他端部は欠損する。

木製品観察表

遺物番号	種類	出土位置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
W-508	長柄鋤 (未製品)	E区V面2-2河 下層No.1284	削り材 アカガシ亜属	長さ82.6cm、幅16.7cm、厚さ5.2cm。表裏面とも粗い削りが加えられているが厚みを残す未製品である。鋤身上端は山形に削られている。
W-509	分割材	E区V面2-2河 下層No.1285	削り材 エノキ属	残存長33.0cm、幅6.5cm、厚さ6.4cm。ミカン削りに分割したままの材で、両端部を欠損する。
W-510	加工材	E区V面2-2河 下層No.1287	削り材 アカガシ亜属	長さ84.2cm、幅15.9cm、厚さ5.8cm。断面が三角形をなす幅広で厚板状の分割材で、各側面とも粗い削りが加えられ両端部もやや斜めに削られている。一方の端部寄りは両側面より削りが加えられ幅が狭くなっている。粗い段階の鋸歯の素材と思われる。
W-511	角材	E区V面2-2河 下層No.1288	削り材 クリ	残存長56.2cm、幅10.0cm、厚さ4.8cm。断面が長方形をなすやや湾曲した材で、3側面は平滑であるが1側面は遺存状態が悪い。一方の端部は平直に削られ他方は欠損する。
W-512	加工材	E区V面2-2河 下層No.1289	丸木 ヤマダツ	長さ30.5cm、径8.9cm。枝分れのある湾曲した材で、幹や枝を斜めに切断している。
W-513	加工材	E区V面2-2河 下層No.1295	削り材 クスギ節	長さ48.2cm、幅4.3cm、厚さ3.2cm。断面が三角形をなす分割したままの材であるが、一方の端部方向は杖状に細くなっている。幅広となっている。幅広の端部には径0.5cmの円孔が貫通しているが人工的なものかは不明である。
W-514	分割材	E区V面2-2河 下層No.1298	削り材 クスギ節	残存長99.5cm、幅8.0cm、厚さ5.0cm。枝払いされているが割付けの分割したままの材である。断面は半円形をなし、一方の端部は斜めに削られ他方は欠損する。
W-515	分割材	E区V面2-2河 下層No.1300	削り材 クスギ節	残存長54.1cm、幅8.0cm、厚さ1.6cm。薄板状に分割したままの材で加工痕はなく、両端部を欠損する。
W-516	加工材	E区V面2-2河 下層No.1301	丸木 クリ	長さ32.5cm、径10.2cm。枝払いされ樹皮を除去した又部の断片で、樹幹や枝が粗く切断されている。
W-517	加工材	E区V面2-2河 下層No.1303	柱目 クスギ節	長さ22.5cm、幅8.6cm、厚さ3.4cm。表面は削りが加えられ裏面は分割したままである。両端部は斜めに粗く切断されている。
W-518	角材	E区V面2-2河 下層No.1309	柱目 クスギ節	残存長60.0cm、幅4.7cm、厚さ2.2cm。断面が長方形をなす鋭い角棒状の材で、各面は粗く調整されている。一端は平直に削られ他端は欠損。
W-519	板材	E区V面2-2河 下層No.1314	柱目 クスギ節	長さ38.5cm、幅23.7cm、厚さ3.2cm。表裏面とも粗く削られた長方形の厚板材で、上半中央に厚みを残し下半はやや磨かれている。
W-520	長柄鋤?	E区V面2-2河 下層No.1316	柱目 アカガシ亜属	残存長50.5cm、幅17.3cm、厚さ0.8cm。鋤身の断片で鋤身の片側縁部と刃部を欠損し、柄部も欠損する。鋤身上端は山形をなし鋤身は幅広である。
W-521	加工材	E区V面2-2河 下層No.1318	柱目 クスギ節	残存長42.5cm、幅4.8cm、厚さ1.3cm。薄板状をなし、一方の端部は両側面に段が付けられ他方の端部は欠損する。各側面とも平直に仕上げられ、欠損する端部の方が薄くなっている。
W-522	板材	E区V面2-2河 下層No.1324	柱目 アカガシ亜属	長さ49.0cm、幅23.5cm、厚さ4.4cm。両側面で厚さが大きく異なるが表裏面とも平滑に削られた幅広の厚板材で、両端部は平直に削られている。
W-523	分割材	E区V面2-2河 下層No.1330	削り材 クスギ節	長さ39.2cm、幅9.5cm、厚さ3.5cm。板状に分割したままの材で、一方の端部は平直に削られ他方は斜めに削られている。
W-524	角材	E区V面2-2河 下層No.1331	削り材 モミ属	残存長55.6cm、幅4.8cm、厚さ2.0cm。片面は平滑で片面が削られている直線的な材である。両端部を欠損するが、一方の端部には段が付けられている。
W-525	着柄鋤・鉞 (未製品)	E区V面2-2河 下層No.1338	柱目 アカガシ亜属	長さ61.0cm、幅19.0cm、厚さ2.0cm。表裏側面とも粗い削りが残る未製品である。着柄部から身への移行部は斜めに削られ山形をなし、両側縁部は直線的に平行し、刃部は両側縁部より斜めに削られたままである。
W-526	着柄鋤 (未製品)	E区V面2-2河 下層No.1342	柱目 アカガシ亜属	長さ52.6cm、幅20.4cm、厚さ2.2cm。大型の着柄鋤の未製品で、表裏側面とも粗い削り痕が残る。鋤身上端は山形をなし両側縁部は直線的に平行し刃部は丸い。
W-527	分割材	E区V面2-2河 下層No.1344	削り材 クスギ節	残存長78.9cm、幅6.9cm、厚さ2.9cm。断面が三角形をなす分割したままの細長い材で、節を持つ。
W-528	横鉞	E区V面2-2河 下層No.1346	柱目 クスギ節	残存長36.8cm、幅8.5cm、厚さ1.5cm。着柄孔から下半の刃部の断片である。横長の度合いが高く、着柄孔周辺はわずかに隆起している。
W-529	分割材	E区V面2-2河 下層No.1349	削り材 コナラ節	長さ88.5cm、幅13.4cm、厚さ7.2cm。樹皮を除去し半円形に分割したままの材で、両端部は未表より斜めに切断されている。
W-530	板材	E区V面2-2河 下層No.1357	柱目 ケンボシナ属	残存長50.5cm、幅14.0cm、厚さ2.3cm。両端部を欠損する幅広の板材で、表面は平滑に仕上げられ裏面は粗い削りのままである。

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	本取り・特徴	加工・形状等の特徴
W-531	丸木弓	E区V面2-2河 下層No.1361	丸木 イヌガヤ	残存長27.0cm、径1.2cm。枝払いされた直線的な材で、湾寄りには木より削りが加えられ断面が楕円形をなす。河は両側より凸状に削られ、表裏面から削りが加えられている。
W-532	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1365	割り材 クヌギ節	残存長52.9cm、幅2.2cm、厚さ3.8cm。断面が三角形で分割したままの材である。一方の端面は斜めに切断され他方は炭化している。
W-533	漆柄	E区V面2-2河 下層No.1367	割り材 クヌギ節	残存長10.5cm、幅0.0cm、厚さ5.8cm。斧頭部の断面が楕円形は段で、頭部が後方に出っ張る形状である。着漆孔は楕円形で後側は段が付けられている。
W-534	農具柄	E区V面2-2河 下層No.1373	割り材 ケヤキ	残存長43.7cm、径2.8-2.0cm。断面が楕円形をなす細い丸棒状の材で、両端部を欠損する。側面は平滑である。
W-535	柱材?	E区V面2-2河 下層No.1375	丸木 クリ	残存長86.5cm、径9.0cm。枝払いし樹皮を除去した丸柱状の材で、一方の端部は斜めに削られ他方は欠損する。
W-536	農具柄	E区V面2-2河 下層No.1376	割り材 キハダ	残存長24.0cm、径2.7-2.3cm。丸棒状の材で両端部を欠損する。
W-537	分割材	E区V面2-2河 下層No.1383	割り材 クヌギ節	長さ50.0cm、幅8.0cm、厚さ4.5cm。ミカン削りに分割したままの材で、両端部は斜めに粗く切断され、側面の一部に細い削りが加えられている。
W-538	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1389	割り材 クヌギ節	残存長51.4cm、幅8.4cm、厚さ3.9cm。半円形に分割したままの節のある材で、一方の端部が炭化している。
W-539	加工材	E区V面2-2河 下層No.1396	割り材 クヌギ節	長さ17.7cm、幅8.8cm、厚さ8.5cm。異形の材で、一方の端部は周囲から削りが加えられ大きな段を持ち、他方の端部は斜めに粗く切断されている。側面も粗い削りが加えられている。
W-540	板材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1397	板目 クヌギ節	残存長44.8cm、幅6.5cm、厚さ1.4cm。表裏面とも粗く削りが加えられた薄板材で、一方の端部は炭化し他方は欠損する。
W-541	分割材	E区V面2-2河 下層No.1399	割り材 クヌギ節	残存長35.4cm、幅8.7cm、厚さ3.8cm。断面が三角形の分割したままの材である。
W-542	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1403	割り材 クヌギ節	残存長35.7cm、幅9.4cm、厚さ6.9cm。ミカン削りに分割したままの材で、一方の端部が炭化している。
W-543	加工材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1404	割り材 クヌギ節	残存長51.1cm、幅7.7cm、厚さ2.7cm。断面が方形をなす角棒状の直線的な材で、一方の端部は太く(炭化している)。他方の端部は徐々に薄く削られている。
W-544	農具柄	E区V面2-2河 下層No.1405	割り材 オオキ	残存長46.2cm、径2.3cm。断面が円形をなす細い丸棒状の直線的な材で両端部を欠損する。側面は平滑をなしている。
W-545	角材	E区V面2-2河 下層No.1407	割り材 クヌギ節	残存長83.0cm、幅6.0cm、厚さ4.1cm。断面が台形をなす直線的な角材で、各側面はやや平滑に仕上げられている。一方の端部はやや平坦に削られ他方は欠損する。
W-546	又鉞	E区V面2-2河 下層No.1409	板目 アオダマシ重属	残存長16.9cm、幅3.7cm、厚さ1.0cm。又部の断片で、やや小型の鉞である。
W-547	容器	E区V面2-2河 下層No.1412	割り材(板目) キハダ	高さ5.0cm、径25.5cm、厚さ1.0-1.8cm。平面形は円形で小型の浅鉢状の容器である。底部はやや平底状をなす。
W-548	分割材	E区V面2-2河 下層No.1415	割り材 クヌギ節	長さ58.4cm、幅21.8cm、厚さ7.8cm。ミカン削りに分割したままの材で、表裏面には分割時に残った凹凸がそのまま残る。両端部は山形に切断されている。
W-549	広鉞 (未製品)	E区V面2-2河 下層No.1417	板目 クヌギ節	長さ35.7cm、幅24.2cm、厚さ2.0cm。着柄孔は未穿孔で表裏面とも粗い削り痕が残る。側面上端は山形をなし両側縁は直線的で刃部は平刃である。縁が明瞭で非常に長い角形突起を持つ。
W-550	分割材	E区V面2-2河 下層No.1420	割り材 クヌギ節	長さ84.7cm、幅16.2cm、厚さ6.2cm。断面が三角形をなす楕円形の分割材で、表面は平滑に仕上げられ裏面は調整していない。また、一方の端部は斜めに他方は平坦に削られている。製作工程材と考えられる。
W-551	分割材	E区V面2-2河 下層No.1421	割り材 クヌギ節	残存長127.0cm、幅5.0cm、厚さ4.2cm。枝払いし樹皮を除去した細長い分割材で、分割面の調整はない。両端部欠損。
W-552	分割材	E区V面2-2河 下層No.1422	割り材 クヌギ節	長さ51.1cm、幅18.5cm、厚さ5.7cm。ミカン削りに分割されたままの幅広の材で、両端部は山形に切断されている。
W-553	糸巻	E区V面2-2河 下層No.1414	割り材 ケヤキ	長さ13.8cm、最大径7.3cm、最小径4.8cm。断面が段形をなし、木口面がやや窪んでいる。器面には粗い削り痕が残る。
W-554	分割材	E区V面2-2河 下層No.1423	割り材 クヌギ節	長さ44.5cm、幅15.0cm、厚さ4.8cm。ミカン削りに分割されたままの幅広の材で、両端部は斜めに切断されている。
W-555	農具柄	E区V面2-2河 下層No.1428	板目 クヌギ節	長さ24.5cm、幅5.5cm、厚さ3.2cm。直削り鉞とを接続する中間材である。上端寄りに径3.8cmの着柄孔が斜めに開けられ、中央部側面には繋ぎのための段が付付けられている。また、表面先端部は鉞との

木製品観察表

遺物番号	種類	出土位置	木取り・製種	加工・形状等の特徴
				接合のための段があり、裏面先端部も染織のための段が付けられている。
W-556	分割材	E区V面2-2河 下層No.1429	割り材 クスギ節	長さ59.0cm、幅7.0cm、厚さ3.0cm。断面が三角形をなす分割材で、断面の調整はない。両端部は斜めに切断されている。
W-557	加工材	E区V面2-2河 下層No.1430	割り材 クスギ節	長さ15.6cm、幅7.4cm、厚さ4.7cm。断面が五角形のもので、3側面は平滑に削られているが他の2面は分割されたままである。両端部は斜めに切断されている。
W-558	加工材	E区V面2-2河 下層No.1432	割り材 コナラ節	長さ29.4cm、幅9.9cm、厚さ5.2cm。断面は長方形で各側面は平滑に削られている。両端部は斜めに切断されている。
W-559	分割材	E区V面2-2河 下層No.1432	割り材 クスギ節	長さ33.2cm、幅15.8cm、厚さ7.8cm。やや平円形に分割されたままの材で、両端部は丸みを持って切断されている。
W-560	分割材	E区V面2-2河 下層No.1442	割り材 クスギ節	残存長57.7cm、幅9.8cm、厚さ2.3cm。ミカン割りに分割されたままの扁平な材で、両端部は欠損する。
W-561	板材	E区V面2-2河 下層No.1443	板目 クスギ節	長さ40.3cm、幅10.3cm、厚さ1.0cm。表裏面とも平滑に仕上げられた薄板材で、両端部は丸く削られている。
W-562	角材	E区V面2-2河 下層No.1452	板目 クスギ節	残存長30.5cm、幅2.7cm、厚さ1.7cm。断面は長方形で各側面とも平滑となっている。一方の端部は細く削られ丸く仕上げられている。
W-563	分割材	E区V面2-2河 下層No.1467	割り材 コナラ節	長さ29.7cm、幅11.0cm、厚さ6.0cm。ミカン割りに分割したままの材で、両端部は斜めに切断されている。
W-564	加工材	E区V面2-2河 下層No.1471	板目 クスギ節	残存長35.2cm、幅8.6cm、厚さ2.5cm。板状の材で、一方の端部が表裏面や側面より削りが加えられ鋭角となっている。
W-565	分割材	E区V面2-2河 下層No.1473	割り材 クスギ節	残存長26.0cm、幅8.7cm、厚さ3.4cm。平円形に分割されたままの材で、一方の端部は斜めに切断されている。
W-566	分割材	E区V面2-2河 下層No.1500	割り材 クスギ節	残存長66.7cm、幅7.4cm、厚さ3.9cm。ミカン割りに分割されたままの細長い材で、一方の端部は斜めに削られ他方は欠損する。
W-567	加工材	E区V面2-2河 下層No.1501	割り材 クスギ節	長さ166.7cm、幅4.0cm、厚さ3.0cm。分割材を利用した細長い材で、側面には削りが加えられ断面が多角形をなす。下端部方向が大きく、上端部方向へ次第に細くなり、先端部は剣先状に尖らせている。
W-568	有柄J字形 木製品	E区V面2-2河 下層No.1507	丸木 クスギ節	柄部長85.5cm、径5.1cm。作用部33.0cm、幅11.8cm、厚さ3.4cm。柄部を杖で作用部を楔状に利用。柄部は樹皮を残し基部は山形に削り出されている。柄部と作用部との開きは115度で、作用部の平面形は長方形をなし表裏面とも粗く削られている。作用部の裏面には長さ約3.0cmの工具痕が残る。
W-569	丸柱材	E区V面2-2河 下層No.1508	丸木 クスギ節	長さ160.0cm、径6.2-7.2cm。枝払いし樹皮を除去した直線的な丸柱材で、表面の調整はなく両端部は山形に削られている。
W-570	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1510	割り材 クスギ節	残存長35.7cm、幅8.6cm、厚さ3.7cm。枝払いされているが樹皮付の分割したままの材で、一方の端部は斜めに切断され他方は欠損している。
W-571	分割材	E区V面2-2河 下層No.1516	割り材 クスギ節	残存長69.9cm、幅5.7cm、厚さ3.0cm。平円形に分割されたままの樹皮付の細長い材で、一方の端部は斜めに切断され他方は欠損する。
W-572	分割材	E区V面2-2河 下層No.1519	割り材 クスギ節	残存長66.1cm、幅5.0cm、厚さ3.7cm。樹皮を除去しミカン割りに分割されたままの細長い材で、一方の端部は鋭角に切断され他方は欠損する。
W-573	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1523	割り材 タリ	長さ70.4cm、幅6.5cm、厚さ4.0cm。ミカン割りに分割されたままの細長い材で、両端部と側面の一部が炭化している。
W-574	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1536	割り材 タリ	残存長29.4cm、幅5.7cm、厚さ3.2cm。断面が台形をなす材で、一方の端部は鋭角に削られ他方の端部は炭化している。
W-575	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1531	割り材 クスギ節	残存長154.7cm、幅1.8-7.1cm、厚さ3.2-6.5cm。断面が三角形をなす分割したままの材で、両端で太さが大きく異なる。一方の端部寄りには表面が炭化している。
W-576	加工材	E区V面2-2河 下層No.1539	割り材 クスギ節	長さ27.8cm、幅8.0cm、厚さ4.9cm。断面が平円形をなす材で、表面は平滑に削られ裏面は丸く仕上げられている。両端部はやや平圓に削られている。
W-577	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1545	割り材 クスギ節	残存長89.0cm、幅7.1cm、厚さ6.0cm。断面が三角形をなす分割したままの材で、一端が炭化している。
W-578	板材	E区V面2-2河 下層No.1546	板目 キハダ	残存長17.7cm、幅11.2cm、厚さ3.5cm。表裏面とも平滑となっており、端部は平滑に削られている。
W-579	加工材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1552	丸木 クスギ節	長さ20.5cm、幅9.5cm、厚さ5.5cm。枝払いし樹皮を除去した材で、両端部が斜めに切断されている。側面の1/3が炭化している。
W-580	加工材	E区V面2-2河 下層No.1553	丸木 コウゾノ属	長さ110.0cm、径4.5cm。枝払いし樹皮を除去した直線的な丸木で、一端は杖状に削りが加えられ尖り、他端は丸く削り上げられている。

遺物観察表

遺物番号	種類	出土位置	本取り・樹種	加工・形状等の特徴
W-581	加工材	E区V面2-2河 下層No.1554	楕目 オニグルミ	長さ12.5cm、幅12.6cm、厚さ2.8cm。断面が長方形をなす板状の材で、表裏面とも平滑となっている。両端部は平直に削られている。
W-582	加工材	E区V面2-2河 下層No.1563	丸木 ムクログ	長さ92.9cm、径4.7-6.1cm。粗く枝払いし樹皮を除去したやや反りのある丸木で、樹幹下部は斜めに切断され、上端は又部となっておりともに斜めに切断されている。
W-583	分割材	E区V面2-2河 下層No.1566	割り材 クスギ節	残存長70.4cm、幅6.0cm、厚さ3.2cm。断面が三角形をなす薄いつ分割材で、分割面の調整はない。一端は斜めに切断され他端は欠損する。
W-584	加工材	E区V面2-2河 下層No.1567	割り材 クスギ節	残存長27.0cm、幅4.0cm、厚さ3.0cm。断面が三角形をなす分割材で、一方の端部が鋭角に削られている。他方の端部は欠損する。
W-585	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1568	割り材 クスギ節	残存長64.5cm、幅9.0cm、厚さ3.3cm。断面が三角形をなす分割材で、分割面の調整はない。一端は炭化焼失し他端は欠損する。
W-586	加工材	E区V面2-2河 下層No.1569	割り材 クスギ節	長さ55.2cm、幅6.5cm、厚さ4.7cm。断面が台形をなす分割面の調整はない。一端は枕状に尖らせており、他端は平坦となっている。
W-587	分割材	E区V面2-2河 下層No.1570	割り材 クスギ節	長さ138.3cm、幅9.8cm、厚さ7.0cm。断面が不整形をなす分割したままの節の多い材で、分割面の調整はない。
W-588	分割材	E区V面2-2河 下層No.1572	割り材 ネズコ	残存長36.0cm、幅4.8cm、厚さ1.6cm。断面が三角形をなす分割したままの材で、両端部を欠損する。
W-589	加工材	E区V面2-2河 下層No.1576	割り材 クスギ節	長さ19.2cm、幅3.6cm、厚さ3.2cm。断面が三角形をなす材で、各側面とも粗く削りが増えられている。端部は一方が平直に他方が斜めに切断されている。
W-590	横 鉄	E区V面2-2河 下層No.1577	楕目 クスギ節	残存長36.2cm、幅10.5cm、厚さ1.8cm。両端縁と刃部を欠損する。横長の皮合いが高く、裏面は平坦で表面はやや丸みを帯び、着孔は径3.6cmでやや斜めに開孔され、刃辺が緩やかに盛り上げられている。
W-591	板 材	E区V面2-2河 下層No.1581	楕目 クスギ節	残存長52.8cm、幅8.2cm、厚さ1.8cm。断面がやや三角形をなす分割時の形状を残す薄板材である。表面は平滑で裏面の調整不明。両端部欠損。
W-592	角 材	E区V面2-2河 下層No.1601	割り材 クスギ節	残存長27.6cm、幅3.7cm、厚さ3.1cm。断面が方形の材で、各側面とも平滑となっている。一方の端部は平坦に削られ他方は欠損する。
W-593	加工材	E区V面2-2河 下層No.1602	丸木 ヤマダブ	残存長20.2cm、径3.8cm。断面が円形で、側面は平滑となっている。一方の端部は2方より斜めに削られ鋭角となっており、他方は欠損する。
W-594	分割材	E区V面2-2河 下層No.1604	割り材 クスギ節	残存長42.3cm、幅9.9cm、厚さ4.2cm。断面が三角形をなす分割材の断片で、分割面の調整はなく両端部を欠損する。
W-595	分割材	E区V面2-2河 下層No.1605	割り材 クスギ節	残存長80.3cm、幅5.5cm、厚さ3.3cm。断面が三角形をなす細長い分割材で、分割面の調整はない。一端を欠損する。
W-596	板 材	E区V面2-2河 下層No.1619	楕目 サワラ	残存長59.6cm、幅3.8cm、厚さ1.0cm。目やせが著しいが断面が長方形をなす細板材で、両端部を欠損する。
W-597	分割材	E区V面2-2河 下層No.1621	割り材 タリ	残存長86.5cm、幅9.3cm、厚さ2.0cm。断面がやや三角形をなす薄板状の分割材で、分割面の調整は明確でないが板材の可能性もある。両端部を欠損する。
W-598	加工材	E区V面2-2河 下層No.1628	割り材 クスギ節	長さ67.2cm、幅5.7cm、厚さ2.0cm。断面が長方形をなす細板状の分割材で、分割面の調整はない。一端は枕状に尖らせており、他端は斜めに切断されている。
W-599	分割材	E区V面2-2河 下層No.1632	割り材 クスギ節	長さ42.7cm、幅6.0cm、厚さ4.0cm。断面が三角形をなす分割材の断片で、分割面の調整はない。一端は平坦に他端は大きく斜めに切断されている。
W-600	板 材	E区V面2-2河 下層No.1633	楕目 クスギ節	残存長45.7cm、幅9.3cm、厚さ0.8cm。断面がやや三角形をなす分割時の形状を残す薄板材で、表面は平滑となっており裏面は粗い削りのままである。一端は山形に削られ他端は欠損する。
W-601	板 材	E区V面2-2河 下層No.1635	楕目 クスギ節	残存長36.7cm、幅4.1cm、厚さ0.8cm。断面が三角形をなす薄板状の材で、表裏面とも平滑となっている。両端部を欠損する。
W-602	分割材	E区V面2-2河 下層No.1643	割り材 クスギ節	残存長53.5cm、幅9.6cm、厚さ4.5cm。ミカン削りに分割したままの材で加工痕はない。両端部欠損。
W-603	板 材	E区V面2-2河 下層No.1644	楕目 クスギ節	残存長50.5cm、幅5.0cm、厚さ1.4cm。断面が長方形をなす薄く細長い板材で、表裏面とも平滑となっている。一方の端部は斜めに削られ他方の端部は欠損する。
W-604	加工材	E区V面2-2河 下層No.1648	丸木 ヤマダブ	残存長53.1cm、径4.4cm。粗く枝払いし樹皮を除去した丸棒状の材で、一方の端部は斜めに鋭角に切断され他方は欠損する。
W-605	分割材	E区V面2-2河 下層No.1650	割り材 クスギ節	残存長38.8cm、幅9.1cm、厚さ4.6cm。ミカン削りに分割したままの材で、両端部を欠損する。
W-606	加工材	E区V面2-2河	楕目	残存長25.6cm、幅7.2cm、厚さ1.9cm。形状が三角形をなす板状の材

遺物番号	種類	出土位置	木取り・樹種	加工・形状等の特徴
W-607	農具柄	F層No.1655 E区V面2-2河 下層No.1657	トチノキ 丸木 クスギ節	で、各側面とも平滑に削られている。一方の端部を欠損する。 固定部長34.5cm、幅4.6cm、厚さ3.6cm、柄部長81.6cm、径3.3cm。 又木を判別した柄で、固定部は榫幹を使用し断面は長方形で、先端部は平坦に基部は山形に削られている。柄部は直線的な杖を使用し、基部は丸く削り出されている。
W-608	加工材	E区V面2-2河 下層No.1683	榎目 ケンボナシ属	長さ35.7cm、幅11.0cm、厚さ3.1cm。断面が長方形をなす板状の材で、各側面とも平滑に削られ、両端部は段を持って切断されている。
W-609	角材	E区V面2-2河 下層No.1664	割り材 クスギ節	残存長51.5cm、幅4.5cm、厚さ1.8cm。断面が台形をなす細長い材で、各側面は平滑に仕上げられている。両端部欠損。
W-610	鉄鋼未製品	E区V面2-2河 下層No.1670	榎目 クスギ節	長さ40.9cm、幅13.7cm、厚さ0.7~3.0cm。鍍金層はやや山形をなし下端はやや丸みを持つ。両側縁はほぼ平行する。着柄孔が未穿孔で周辺は緩やかに隆起している。表面とも粗く調整されている。
W-611	加工材	E区V面2-2河 下層No.1680	榎目 クスギ節	残存長26.5cm、幅6.5cm、厚さ2.7cm。断面が長方形をなす板状の材で、各側面とも平滑で角が丸みを帯びる。一方の端部は両側面より削りが増えられ細くなっている。
W-612	加工材	E区V面2-2河 下層No.1682	割り材 クスギ節	長さ26.5cm、幅10.7cm、厚さ5.9cm。半円形に分割された材で、両端部は鈍角に粗く切断され、表面には多くの工具痕が残る。
W-613	板材	E区V面2-2河 下層No.1692	榎目 クスギ節	残存長79.0cm、幅14.0cm、厚さ3.0cm。断面が三角形をなす幅広い板材で、表面とも粗く調整されている。一端は1方向より斜めに削られ、他端は欠損する。
W-614	板材	E区V面2-2河 下層No.1695	榎目 コナク節	残存長36.2cm、幅8.7cm、厚さ1.0cm。一方の端部と片面を欠損する薄板材で、他方の端部はし字状に切り込んだ組み穴がある。表面とも平滑に仕上げられている。
W-615	加工材	E区V面2-2河 下層No.1697	榎目 クスギ節	残存長8.8cm、幅3.2cm、厚さ2.3cm。断面が長方形の角材で各側面とも平滑に仕上げられている。両端部を欠損するが、一方の端部には組み穴が開けられている。
W-616	分割材	E区V面2-2河 下層No.1698	割り材 クスギ節	残存長39.5cm、幅7.8cm、厚さ1.8cm。薄板状に分割したままの材で、両端部を欠損する。
W-617	板材	E区V面2-2河 下層No.1710	榎目 クスギ節	残存長41.0cm、幅5.0cm、厚さ1.2cm。断面がやや三角形をなす分割時の形状を残すが、表面とも平滑に仕上げられた細板材である。
W-618	分割材	E区V面2-2河 下層No.1711	割り材 クスギ節	長さ41.9cm、幅7.0cm、厚さ6.8cm。断面が三角形をなす厚板の断片で、分割面の調整はない。両端部は斜めに粗く切断されている。
W-619	横線	E区V面2-2河 下層No.1713	榎目 クスギ節	残存長39.3cm、幅10.9cm、厚さ1.8cm。着柄孔部で約1/2に欠損した断片で、孔下半から刀部にかけて遺存する。鍍金は横長の歯合いが強いと考えられ、刀部は薄い。着柄孔周辺は緩やかに隆起している。
W-620	分割材	E区V面2-2河 下層No.1714	割り材 クスギ節	長さ82.2cm、幅15.9cm、厚さ5.5cm。断面が三角形をなす幅広い分割材で、分割面の調整はない。両端部は斜めに粗く切断されている。
W-621	分割材	E区V面2-2河 下層No.1715	割り材 クスギ節	長さ87.9cm、幅8.7cm、厚さ5.8cm。断面が三角形をなす厚みのある分割材で、分割面の調整はない。両端部は斜めに粗く切断されている。
W-622	分割材	E区V面2-2河 下層No.1718	割り材 クスギ節	長さ43.6cm、幅13.0cm、厚さ6.2cm。断面が三角形をなす厚みの分割材の断片で、表面が磨滅している。
W-623	農具柄 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1719	割り材 クスギ節	残存長35.2cm、径3.6~2.2cm。断面が楕円形をなす丸棒状の材で、表面が炭化している。両端部欠損。
W-624	加工材	E区V面2-2河 下層No.1723	榎目 クスギ節	長さ19.4cm、幅14.1cm、厚さ2.0cm。一部を欠損する板状の材で、表面とも平滑で両端部は斜めに切断されている。
W-625	作業台	E区V面2-2河 下層No.1727	榎目 クスギ節	長さ15.8cm、幅14.2cm、厚さ3.8cm。表面が平滑に仕上げられた厚板の切断材を転用。多くの工具痕が表面に刻まれている。
W-626	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1730	割り材 アカガシ属	残存長39.0cm、幅10.4cm、厚さ6.3cm。断面が三角形をなす太めの分割材の断片で、表面が炭化焼失している。
W-627	分割材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1733	割り材 クスギ節	残存長42.0cm、幅5.5cm、厚さ2.9cm。ミカン割りに分割されたままの材であるが、一方の端部は丸く削り上げられ炭化している。
W-628	角材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層No.1736	割り材 オニグルミ	残存長69.5cm、幅7.0cm、厚さ5.0cm。断面が三角形をなす細長い材で、分割面は平滑となっている。一端は炭化し他端は欠損する。
W-629	角材	E区V面2-2河 下層No.1738	割り材 クリ	残存長50.7cm、幅4.3cm、厚さ2.4cm。断面が台形をなす細長く薄い材で、各側面は平坦であるが磨滅が著しい。両端部欠損。
W-630	分割材	E区V面2-2河 下層No.1747	割り材 クスギ節	長さ54.3cm、幅9.9cm、厚さ7.0cm。断面が三角形をなす厚みのある節持ちの分割材で、分割面の調整はない。一端を欠損する。
W-631	着柄部・鉄 未製品	E区V面2-2河 下層No.1749	割り材 クスギ節	長さ69.6cm、幅18.2cm、厚さ4.3cm。断面が三角形をなす分割材で分割面の調整は行っており、外形などは調整している。両側は斜め

遺物観察表

遺物番号	種 類	出土位置	水取り・樹種	加工・形状等の特徴
				に削られ固定部も粗く削り出されている。刃部は山形に両側縁より削られている。
W-632	板 材	E区V面2-2河下層No.1755	板目 アカガシ亜属	残存長33.0cm、幅7.0cm、厚さ1.2cm。表裏面が平滑に丁寧に仕上げられた薄板状で、一方の端部は斜めに削られ他方は欠損する。
W-633	加工材	E区V面2-1河 中層	割り材 クスギ節	残存長35.0cm、幅4.3cm、厚さ3.5cm。断面が台形をなす角材で、両端部を欠損する。裏面に入出で径が異なる(3.5×1.0cmと1.7×0.8cm)長楕円形の穴が貫通している。
W-634	土掘具?	E区V面2-1河 中層	板目 アカガシ亜属	長さ18.5cm、幅5.5cm、厚さ2.0cm。着柄部に楕円形の小さな刃部が付いた形状で、表面は丸みを帯び裏面は平坦となっている。着柄部の表面上部には緊縛のための段が付けれ、刃部との移行部は両側縁より段が付けられている。刃部は表裏両面より削りが加えられ、先端部が鋭角となっている。異形の鏃と考えられる。
W-635	加工材	E区V面2-1河 下層	板目 アスナロ	長さ10.1cm、幅2.1cm、厚さ0.8cm。断面が楕円形をなす角を丸く削った薄板状の材で、一方の端部は両側面よりV字状に切り込みが入っており他方の端部は平坦に削られている。用途不明。
W-636	農具柄?	E区V面2-1河 下層	板目 アカガシ亜属	長さ13.2cm、幅5.2cm、厚さ2.4cm。断面は長方形をなす中央部に緊縛か組み穴のための段がある。一方の端部は平坦であるが他方の端部は斜めに削られている。
W-637	加工材	E区V面2-1河 下層	割り材 クスギ節	長さ17.7cm、幅8.1cm、厚さ5.8cm。断面は長方形をなし各側面とも平滑となっている。両端部は斜めにやや丸く削られている。
W-638	板 材	E区V面2-2河 中層	板目 モミ属	残存長43.3cm、幅4.2cm、厚さ0.8cm。断面が長方形をなし、表裏面とも平滑に仕上げられている。両端部欠損。
W-639	農具柄	E区V面2-2河 中層	丸木 モミ属	残存長22.8cm、径3.2cm。断面が円形をなす丸棒状の材で、側面は平滑で一方の端部は丸く削られており他方は欠損する。
W-640	加工材	E区V面2-2河 中層	割り材 クスギ節	着柄部長40.3cm、幅9.5cm、厚さ5.0cm、枝部残存長3.3cm、径2.7cm。平面が長方形に分割され粗い削りが加えられた着柄部から、細い枝が分岐している。ともに樹皮が除去されているが用途不明。
W-641	分割材	E区V面2-2河 下層	割り材 カバノキ属	長さ63.4cm、幅10.3cm、厚さ4.5cm。断面が扇形した三角形をなす分割材で、分割面の調整はない。両端部は粗く切断されている。
W-642	角 材	E区V面2-2河 下層	割り材	残存長50.1cm、幅5.2cm、厚さ2.2cm。断面が長方形をなすわずかに屈曲した細長い材で、各側面は調整され平滑となっている。一端を欠損。
W-643	丸木弓	E区V面2-2河 下層	丸木 イヌギヤ	残存長70.3cm、径2.1cm。直線的な弓幹をしており上半部の断片と考えられる。弓幹部は粗く枝払いされたままで断面は円形をなす。羽部寄り裏面が削られ断面は半円形をなす。羽部の両側は凸状に削られている。
W-644	板 材	E区V面2-2河 下層	板目 カキ	残存長21.5cm、幅5.0cm、厚さ0.7cm。断面が湾曲し歪みを持つ薄板状の材で、表裏面とも平滑で両側面も丸くなっている。両端部欠損。
W-645	角 材	E区V面2-2河 下層	割り材 モミ属	残存長86.5cm、幅1.8cm、厚さ1.7cm。縦に設けた角材の断片と考えられ、断面が四角形をなす細棒状をなす。両端部欠損。
W-646	丸木弓	E区V面2-2河 下層	丸木 イヌギヤ	残存長36.5cm、幅1.3cm、厚さ1.2cm。粗く枝払いされた近頃の断片で、弓幹に反りを持つ。近頃の弓幹は平面が削られ断面が半円形をなす。羽は両側面より凸状に削られている。
W-647	農具柄	E区V面2-2河 下層	板目 アカガシ亜属	残存長8.9cm、幅2.8cm、厚さ1.6cm。着柄のための固定部の上端の断片で、裏面は平坦で表面に着柄のための段が削り込まれている。
W-648	農具柄?	E区V面2-2河 下層	割り材 ケヤキ	残存長26.8cm、径2-1.8cm。断面がやや楕円形をなす丸棒状の材で、何らかの柄と思われる。側面は平滑に仕上げられ、両端部を欠損するが径が異なる。
W-649	加工材 (炭化材)	E区V面2-2河 下層	割り材 アカガシ亜属	残存長35.6cm、基部幅8.2cm、基部厚1.8cm、柄部幅4.0cm、柄部厚3.0cm。柄部は断面がやや長方形で粗く削られ、柄部からし字状に曲がる基部は方形の板状の形状をなす。用途は明確ではない。基部の表面が一部炭化している。

新保田中村前遺跡Ⅳ

《本文・遺物観察表編》

一級河川染谷川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第4分冊

平成6年3月15日 印刷

平成6年3月25日 発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／株式会社 前橋印刷所